
IS ~インフィニット・ストラトス~ 一角獣の輝き

D-5

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 〜インフィニット・ストラトス〜 一角獣の輝き

【Nコード】

N0551R

【作者名】

D - 5

【あらすじ】

篠ノ乃姉妹には義理の弟がいた！彼はひょんなことからISを起動させてしまう。

ISを動かせる二人目の男として彼はIS学園に入学する。そして、彼は様々な出会いを果たす。

作者は小説を書くのが初めてです。感想、誤字脱字、意見などお願いします。

ブローグ

カタカタカタ・・・・・・・・・・

薄暗い部屋の中にキーボードのタイピングの音だけが響く、ライトは点けておらず光源はPCのディスプレイのみ。

カタカタカタ・・・・・・・・カタツ・・・・・・・・

部屋に響いていたタイピングの音が止み、静かになった部屋に一人の少年の声が響く

「んー、やっぱりこっちの方が良いかな？」

あごに手を当ててディスプレイを見つめる少年、彼がこの部屋の主である。

彼の名前は、篠ノ乃 優希 IS-1（インフィニット・ストラストス）を開発したかの天才、篠ノ乃 東の義理の弟である。そんな彼はディスプレイに映る数字の羅列を見て一人唸っていた。

「こっちの方がエネルギー効率良いんだけどな、でも、こうすると出力があまり上がらないのが問題なんだよな、出力を上げようとする効率が悪くなる・・・・・・・・どうしようか」

ディスプレイを30秒程見つめた後、彼は纏め上げたデータをメモリーに保存する。

「んー、やっぱり一度東姉に相談してみようかな」

保存が終了したメモリーを持ち、姉である束の部屋へと向かう。

明かりが余り灯っていない廊下歩く、一歩踏み出すだけでピシッと床が罅割れる、彼がいるこの研究所ははつきり言ってボロイ、かなりボロイ、だが文句は言えない彼の姉である篠ノ乃 束は今、世界中が血眼になって探している人物であるからだ。

理由は簡単ISの開発者である天才、篠ノ乃 束を自国のIS開発に参加させることができれば国への利益は計り知れないことになるからである。

だが彼の姉である束はそんなことには興味がないのでこういったどこにあるのかも分からないような場所で研究所を構えてISの研究をしているのである。

ボロイ床を歩いて行き、姉の部屋の前に着くと優希はノックをするが返事はない、よくあることである大方研究に没頭しているのだろうと思いつつ姉の部屋の扉を開ける。

「束姉、入るよー」

「ん、あれ？ ゆーくんどうかした？」

「うん、ちょっと相談したいことが・・・って束姉何見てるの？」

「あつ、ゆーくんほら見て、いつくんだよ、いつくん」

「いつくん？ って束姉、一夏がテレビに映るわけないじゃ・・・っえ！？」

ディスプレイには優希の幼馴染である織村一夏が映っていた、幼馴染がニュースに出ているのである普通は驚くのだが、優希が驚いたのはそこではなかった、内容の方であった。

《世界初ISを動かせる男、発見!!》

と、書かれていた、ISは《女性にしか反応しない》はずなのだ、それは束の傍でISを学んだ優希がよく知っていることだった。

「た、束姉……これ、どういうこと……」

「すごいねー、いつくん男の子なのにIS起動できるなんて」

「いや、束姉そうじゃなくて……ああ、もう」

あまりの出来事に力が抜けてしまった優希は体を支えるために手近な物に手をついた、そう

《未完成のIS》に

「えっ!？」

ISに触れた瞬間優希の頭の中に情報が流れ込んでくる、それと同時に回りにウィンドウが浮かぶ。

「う、うそだろ……た、束ね……え？」

いきなりの事に戸惑い、姉の方に振り向くとそこには携帯片手に電話をしていた。

「あーもしもしちーちゃん、久しぶりー」

どうやら電話の相手は織村　一夏の姉であり束の幼馴染の織斑千冬のような

「ねえ、ちーちゃん、ちーちゃん聞いて聞いて、うちのゆうくんがすごいんだよ、なんとね」

一拍置いて、束は口にした

「IS起動させちゃたんだよ！！すごいでしょ」

優希の求めていた返答を

「えっ何、ゆうくんに変われ？うん分かった．．はい、ゆうくん、ちーちゃんだよ」

束から携帯を受け取り優希は恐る恐る電話に出る

「えっと．．．．お電話変わりました、優希です。」

『．．．．優希か』

「は、はい、お久しぶりです。千冬さん」

『優希、さっきの束の話は本当か．．．．』

「ええと、その……はい本当です……」

『……………』

電話越しからため息が聴こえ電話の向こうが静かになる時間にして一分ほどなのだが優希には長く感じた、そして沈黙を破り千冬は口を開いた。

『優希』

「は、はい」

『お前、IS学園に入れ』

「え？ええええええええええ！？」

その一言が篠ノ乃 優希の運命を変える一言だった。

プロローグ（後書き）

読みにくい文章ですみません。

D - 5です。

自分、小説を書くのは初めてでして上手く書けませんでした。

ですがISのアニメを見ているうちにどうしても書きたくなって書いてしまった所存で

あります。

つたない文ではありますが生温かい目で見てください。

設定（前書き）

本編の前にオリ主の設定をあげます。

5 / 17 設定追加しました。

設定

○主人公

篠ノ之 優希
しのの ゆうき

○身長

152cm（本人は155cmと言い張る）

○性別

男（女の子じゃありませんよ）

○容姿

とても整っている、髪は黒色のさらさらのロングヘア（女の子が羨むくらいに）、瞳もパツチリとしていて、町を歩けば十人中十人が振り向く美少女。

優希「僕は、男です！！（涙目）」

○備考

三歳の時に交通事故に合い両親を亡くすが優希は奇跡的に助かるが天涯孤独になってしまいが、両親の交友があつた篠ノ之家に引き取られ育てられる。親の顔は覚えてはいないが自分が篠ノ乃家の子ではないことは理解している。

事故にあつてからカンが鋭くなり、束が失踪するときも気づいたのは優希だけであつた、彼は姉から溺愛されており束は優希を連れて失踪した。

失踪してから三年間、束の元でIS工学を学んだ、彼の開発した技術は姉が開発するISにも使われこともある。

未完成のIS『白式』に手を触れた瞬間、反応したため世界で二

番目にISを起動させた男性となった。その後、千冬が進め？でIS学園に入学する。

最近の悩みは、姉が女物の洋服を着せようとする事である。

○専用IS、ユニコーン

制作者、篠ノ之 束・篠ノ之 優希（技術提供）

世代、第四世代 ？世代型

待機状態、ユニコーンの模様が彫つてあるペンダント

束が優希の為に開発したIS、機体名はまだ名前のついていない所を優希が名付けた。名前の由来はヘッドギアについてるアンテナと純白の装甲が神獣のユニコーンを彷彿した為である。

機体の所々に優希の開発した技術が盛り込まれている。装甲は二重であり一層目には展開装甲、二層目には優希の最高傑作である特殊な装甲材サイコフレームが使用されている。サイコフレームとは、使用者の感脳波を伝達する事ができる素材であり、これにより操縦者の精神波に反応する構造材を装甲にすることによって、思考のみでISを自分の身体以上の超反応で操縦できることを成功させた。

後に、束の発言により、第四世代型ではなく、ファースト・シフト世代が判別不能の機体だということがわかった。これは一次形態移行時に未知の性能を秘めている素材、サイコフレームが影響しているらしいと束は推測しているが実際は謎である。

○単一仕様能力 《IS・D》system

《IS・D》systemとはユニコーンに取り付けられたリミッターを解除するシステム、リミッターを解除することによって展

開装甲が展開し内部のサイコフレームが露出しヘッドギアのアンテナが展開する、この姿がユニコーンの真の姿だといえる。

《IS-D》を発動させるとユニコーンの性能は飛躍的に向上する、特に機動性に関してはISに搭載されているハイパーセンサーでは追いきれないほどの運動性、機動性を発揮させる。

だが、余りの機動性に操縦者がダメージを負ってしまうというデメリットがあるため乱用はできない。

○武装

・ビームマグナムライフル

専用のビームライフル、ISから直接エネルギーを使用せずライフルに接続されたEパック使用する。

一発にEパック一個を使用するが一撃の威力は凄まじく掠るだけで相手のシールドエネルギーを削る事ができるが、Eパックは予備を含めて十五個しかなく、連射はできない欠点がある。

・ビームサーベル

バックパックに2基と左右の前腕部に1基ずつ、計4基を装備。いずれも通常時は基部で折りたたまれ収納されているが、必要に応じてグリップが180度展開する。

両腕のサーベルは保持せずとも、そのまま展開してビームトンファースとして使用することも可能。

・ハイパーバズーカ

非使用時は砲身を短縮した状態でバックパックに固定される。発射後に時間差で炸裂し、周囲にベアリング弾を撒き散らす特殊弾も使用可能。

・シールド

4枚の花弁状のサイコフレームパーツがX字型に展開し、エネルギーフィールド張る事が可能である。《IS-D》発動時にはフィールド自体が浮遊し遠隔操作が可能となる、シールドの裏面にはタッチメントがありそこに火器をつけることで、攻防両方が可能な遠隔操作武器となる。

・レーザーバルカン

ヘッドギアの両サイドに優希が追加した武装。

ユニコーンの基本装備の射撃武装は弾数が少なく連射性が無い為、優希が作り上げた武装で連射性がとても高い、威力は低い、手を使わずに素早く相手を攻撃できる、それに牽制・ミサイルの撃ち落としなどの用途があり、使い勝手のいい武装である。

・ビームガトリングガン

実弾ではなくビームを撃ちだす武装。

レーザーバルカンと同じ理由で作った武装、だがレーザーバルカンは違い威力は高い。

毎秒3000発のビームを撃つことができる武装、同型のガトリングガンが四基あり、それをユニコーンの腕部タッチメントに装着することが可能で圧倒的な弾幕を張ることができる、だがその場合、ガトリングの振動により照準がぶれてしまい、命中率が格段に下がってしまう。

シールドとの同時装備も可能である。

○第二形態 レイディアント・ホワイト（光り輝く白）

ユニコーンが二次形態移行した姿。
セカンド・シフト

使用されたサイコフレームの総量が増加し性能が向上。操縦性もタイムラグがほとんど無くなり思った以上に動かせ、体の一部のよくな錯覚するほどである。

・ フェアリー・ワルツ（妖精の円舞曲）&スピリッツ・ランパート（精霊の城壁）

ユニコーンに新たに搭載された武装、両方とも遠隔操作兵器でありユニコーンの腕を塞ぐことなく攻撃および防御が可能となった。フェアリー・ワルツはセシリアのブルー・ティアーズと同じビツト兵器であり、オールレンジ全方位攻撃が可能である。しかも、サイコフレームの特性である感脳波の伝達により驚くべき性能を発揮する。

フェアリー・ワルツは展開してない状態では背部のラックに収納されており、翼のように見える。

一方、スピリッツ・ランパートは自立式の防御兵器である。長い板状の形で中心には結晶のような物がついている。防御力は高く、ビームマグナムの直撃を受けても破損しない。

アンロック・ユニット非展開時は非固定浮遊部位に装着されており、装着時の姿はマントようにも見える。

第一話（前書き）

どうもD・5です。

今回は原作前の話なので原作入りは次回の更新になります。
それでは駄文であります。どうぞ

第一話

「うえええーん、千冬さん、こ、こわかった、怖かったですうー」

優希はなぜか千冬に抱き着いて泣いていた。アリーナ端の方にはIS『打鉄』に身を包まれ鼻血を流しながら仰向けに倒れている女性、そしてアリーナ内に続々と入ってくる教師達、アリーナは混沌と化していた。

千冬は溜め息を吐きながら

(どうしてこうなったんだ・・・)

と千冬は心の中で呟いた。

ことの始まりは一時間前に遡る。

・・・一時間前・・・

「ここがIS学園かー、大きいとこだなー」

優希はIS学園の校門の前にいた。あの電話の後、姉の束に気絶させられて起きた瞬間には日本行きの飛行機に乗っていた。ポケットの中を探ると手紙とIS学園までの地図が入っていた、手紙には『日本着いたらIS学園に行つてねー、ちーちゃんが校門前で待ってるから』と待ち合わせ時間が書いてあった。

日本に着いた優希は地図にしたがいIS学園に来たのである。

「それにしても千冬さん、遅いな待ち合わせの時間もう過ぎてるのに」

校門の前に着いたのだが指定された時間になっても千冬はまだ来ておらず優希はキャリアバックの上に座って待っていた。

「なにかあったのかな・・・っあ、あれかな」

校舎の方をぼんやりと眺めていると黒いスーツを着た長身の女性、千冬が見えてきた。

織斑 千冬―― 優希の幼馴染である織村 一夏の姉であり、優希の姉である束の幼馴染、そして、第1回IS世界大会で総合優勝および格闘部門優勝を果たした世界最強の女性である。
モンド・グロッシン

千冬はゆづきの前に到着し口を開いた。

「久しぶりだな優希、大きくなったな？」

「お久しぶりです千冬さん、でも何で最後あたりが疑問系なんですか？」

「いや、最後にあった時からあまり大きくなっていないなと思ってな」

「成長しましたよ！！たとえば小さいとしても僕はまだ成長期だから大きくなります！！」

頬を膨らませて両腕をブンブンと振る優希、その姿を見て千冬は

（相変わらず小動物みたいなやつだな・・・）

と思っていただった。

「それはすまなかったな、では行くぞ、時間が押しているんだ」

千冬は優希の手を掴み歩き出す。

「行くつて、どこにですか？」

「ん？そついえば言ってなかったか、優希、お前の入学試験だ」

「優希『打鉄』に何か問題はあるか？」

「いいえ、大丈夫です問題ありません」

その後、千冬に連れられて優希が向かった場所はIS学園のアリーナだった。着くなりアリーナ内にある更衣室に案内されてISSスーツを渡されて着替えるように言われたのだが、渡されたISSスーツは女性用の物（スクミズとニーソックスを足したような物）であって本気で泣きそうになった。

その後、どうやら教員のミスであつたらしく特注の男性用のIS

スーツに交換された。その時、千冬がメガネを掛けた小柄な女性の頭を出席簿のような物で叩いている姿を優希は目撃した。

ISスーツに着替え終わった優希はピットに連れてこられて部屋を中心に鎮座していたIS『打鉄』に装着するように言われて、装着し機体のチェックもし終わったところであるのだった。

「いいか優希、これからお前の実技試験を始める」

「……千冬さん、無茶言わないでください、僕IS動かすのは今日が初めてなんですよ」

「フツ、大丈夫だ別に負けても不合格ではない、お前の入学は決定している、慣らし程度だと思え」

「出来レースですか……分かりましたががんばってみます。」

優希はカタパルトまで歩きISの脚部を固定する

「それでいい、では……行って来い！」

カタパルトによって優希は勢いよく外へと押し出される、PICを起動させてなんとかバランスをとりながらも空中で静止する。

「おっとと、上手くバランスが取れないな、でもなんとかかなりそうだね」

辺りを見渡すと同じ『打鉄』を装着した女性を発見した、どうやら彼女が担当官のようだ、地面に足が着いてるようなので優希もゆっくりと高度を落として行き地面に着地する。

「未近先生、止まって下さい！試験中止です、未近先生！！」

千冬は女性に止めるように言うが止まる気配はなく逆に興奮しているようである、

『ウフフフフフ、ハアハア、涙目の男の娘もそられるわ、このまま、このまま……』

女性は姿勢を低くし始める、どうやらまた瞬時加速をするようだ

「いかん！優希、逃げろ！！」

と、千冬が言うが時既に遅く女性は瞬時加速に入つた瞬間であつた

[illegible]

ドンツと地面が爆発し、また弾丸の様な速度で優希に向かってくる、あまりの恐怖で固まっていた優希もついに我慢の限界を迎えたように

「イ、イヤダアアアア――」

と叫びながら右腕を振り抜いた、この時奇跡が起きた、優希の振り抜いた腕が突っ込んできた女性の首の部分に当たったのである、そう、俗に言うラリアットが決まったのである、女性は自ら掛けた加速の勢いのせいで通常のラリアット以上のダメージを受けた、空中を回転をしながら飛んで行き最後はアリーナのシールドにぶつかって地面に落ちたのであった。その時の衝撃で女性のISのシールドエネルギーは尽きたようのでISは機能停止し、優希の勝利が決定

したのだが当の本人は

「ひっ、ひっく、」

泣きそうになっていた

「優希、無事か!」

いち早く駆けつけたのは千冬だった、後ろ方にはISを装着した教員も見える。千冬は優希が装着していたISを手際よく外した、すると優希は我慢の限界を迎えたようで千冬に抱きつき泣き始めてしまった。

「うええええーん、ち、千冬さん、こわ、こわかった、怖かったですうー」

「ゆ、優希……ああ、よくがんばったな」

千冬は優希の頭を撫でながらと辺りを見渡した、アリーナ端の方にはIS『打鉄』に身を包まれ鼻血を流しながら仰向けに倒れている女性、そしてアリーナ内に続々と入ってくる教師達、アリーナは混沌と化していた。

そして千冬は溜め息を吐きながら

（どうしてこうなったんだ……）

と千冬は心の中で呟いた。

様々なトラブルがあったが篠ノ之 優希のIS学園の実技試験は終了したのだった。

実技試験の数日後、世間のニュースに優希ことが発表されたのだが、見出しは

《ISを起動できる二人目の男性を発見！！だが、本当に男なのか！？》

と書かれており、某高級ホテルの一室から

「僕は、男だーーーーーーー」

との叫び声が聴こえたらしい。

第一話（後書き）

・・・・・・・・・・やっちまいいました。

執筆中パソコンがフリーズするというトラブルに合いまして更新がかなり遅くなりました。が何とか出来上がったので更新します。

読みにくい駄文ではありましたがここまで読んでくださりありがとうございます。

次回は書きあがり次第UPしていききたいと思っておりますのでよければ見てください。

第二話（前編）（前書き）

今回から本編に突入します。

第二話（前編）

IS学園それはアラスカ条約に基づいて日本に設置された、IS操縦者育成用の特殊国立高等学校。ISに関連する人材はほぼこの学園で育成される。また、学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、干渉されない。そのため、他国のISとの比較や、新技術の試験にも適しており、そういう面では重宝されている。

「全員揃ってますねー。それじゃあショートホームルームはじめますよー」

IS学園の一年一組の生徒達は全員無言だった。理由は簡単だったそれは、教卓の前の二席に座っているのが男だからである。

織斑 一夏、世界で初めてISを起動させることに成功した男、そして、篠ノ乃 優希、約一ヶ月前に発表されたISを起動させた二人目の男。

「え、ええと、私はこのクラスの副担任になりました。山田 真耶です、皆さん一年間よろしくお願いします」

また全員が無言で反応はなく、真耶は涙目になっていたので優希は慌てて「お願いします」と言って真耶は泣かずにそのまま続ける。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと……出席番号順で、織斑 一夏くん」

また無言、女子の視線は一夏と優希にあつまるばかりであって反応はない、というよりも一夏が反応せず自己紹介が始まらない。

「織斑くん？あのー、織斑 一夏くん？・・・織斑 一夏くんっ
！」

「は、はいっ！？」

声を裏返しながら返事をする一夏、ちらほらとクスクスと笑う声も聞こえる。優希も笑いそうになったが何とか堪えた

「え、えつとそれじゃあ織斑くん、自己紹介を・・・」

「あ、はい」

席から立ち上がり教卓の前に立つ一夏はクラス全員の視線を浴び、固まった三十秒位した後ようやく口を開いた

「えー・・・えつと、織斑 一夏です。よろしくお願いします。」

と言いい口を閉じる一夏、だが、思春期の女子は男子に興味津々、その視線には『もつと喋ってよ』や『それだけじゃないよね』的な意味が含まれていた、そして三十秒ほど沈黙が続く、一夏は口を開き

「以上です」

ガタタツ！、一夏の発言に期待していた女子がズッコケた、趣味とか好きなものを喋ればいいものを何も言わず終わらせてしまった、あまりのことに真耶も涙目になっている。

すると、パンツ！と乾いた音が響いた、一夏は痛む頭を押さえながら恐る恐る、後ろを振り向くすると

「げえつ、関羽！？」

ガスッ！！今度は角で叩いた、

「誰が三国志の美髯公だ、馬鹿者」

そこには一夏の姉である織村 千冬の姿があった、手には青龍偃月刀・・・ではなく出席簿を持っていた。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたのですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

頭を押さえうずくまる一夏を後目に真耶と一言交わした後、千冬は教卓の前に立ち喋り始めた。

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を1年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15歳を16歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

と言うと、教室は静まり返る、そしてしばらくすると

「~~~~~キャ~~~~~！~~~~~千冬様、本物の千冬様よ！~~~~~」

教室中に黄色い声援が響く、あまりの音量に窓ガラスの振るえ割れそうになる。最近の女子高生は集団スキルに音波攻撃でもあるのだろうか？

「ずっとファンでした！」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉さまのためなら死ねます！」

「はぁ……まったく毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスだけに馬鹿者を集中させているのか？」

と、黄色い声が聞こえるなか千冬は溜め息をついたのだった。

「で？ 挨拶も満足にできんのか、お前は。そしてお前はまだ自己紹介すらやってないのか？……って聞いているのか、お前は」

「ぬうおおお………み、耳があー……」

頭の次に耳をやられたらしく一夏はまたうずくまっていた。

「何をやっておるだ、馬鹿者が」

「ち、千冬姉、俺は」

スパンツ！本日三度目の出席簿、今度は普通に表紙だった。

「織斑先生と呼べ」

「………はい、織斑先生」

やり取りが終わった時には一夏が千冬の身内だということを知れるのには十分であった。

「え……？ 織斑くんって、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、男子で『IS』を使えるっていうのも、それが関係して……」

「ああっ、いいなあっ。代わってほしいなあっ」

女子達が騒ぐが千冬はスルーし

「まあいい、篠ノ之弟、次はお前だ」

「えっ、僕ですか？」

「そっだ、さっさとしろ」

千冬に急かされ席から立ち上がり教卓の前に立つ、すると全員の視線は優希に集まる。三年間姉と一緒に行方をくらましていた優希にとって大人数の視線を受けるのは久々のことで緊張していた。

「え・・えっと、し、篠ノ之 優希です。ISを扱うことに関してはまだ素人なので皆さんの足を引っ張らないよう努力しますので、よ、よろしくお願いしましゅっ！」

途中まではよかったのだが、最後の最後で噛んでしまつて優希の顔は真っ赤になってしまった、優希はクラスの全員から笑われるのだと思っていたのだが、一部のクラスメイト以外の全員は優希のその姿を見て和んでいた。（一部の女子は鼻をおさえていた）

「篠ノ之弟、もういいぞ席に戻れ」

「はい……」

優希は席に戻ると自己紹介は再開されたのだが優希の耳には入ってこなかったのだった。

S H Rが終わったら隣の席の一夏が話しかけてきた

「久しぶりだな優希、六年ぶりだな」

「うん、久しぶり一夏」

六年ぶりの再会に会話を弾ませる二人

「それよりも驚いたぞ、朝テレビ見てたらお前の名前が出てきて、しかも俺と同じでI S動かせるてっ」

「それは僕もだよ、一夏の名前が出た時犯罪でも犯したのかと思ったよ」

「おい、それどういうことだよ」

「さあ？」

話しているうちにチャイムが鳴る、すると立って話しをしていた女子も座り始め授業の準備を始める。

「チャイムか、優希また後ではな」

「うん」

授業の準備しながら優希は窓の方を向いた、そこには長い黒髪を一本に束ねてポニーテールにしている少女がいた。篠ノ乃 篤、優希のもう一人の姉であるのだが、束と共に三年間失踪していたので三年ぶりの再会なのだが、篤は優希がこの教室入ってから目もあわせてくれないので優希は嫌われたのかと思っていた。

授業が始まったので優希は思考を変えて授業に集中し始めたのであった。

「——であるからして、ISの基本的な運用は国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ——」

授業は順調に進んでいたのだが優希は一夏の様子がおかしい事に気づいた、顔をしかめて教科書を穴が開くほど見ていたので優希は声を潜めて話しかけた。

「一夏、どうかしたの」

「ゆ、優希、お前これ分かるのか」

「分かるけど、一夏もしかして」

「まったく分からん」

「織村くん、どこか分からない所がありますか？」

一夏と優希のやり取りが聞こえたのか真耶が聞いてきた。

「えっと、いいですか」

「はい、分からない時のために先生はいるのですよ」

「全部分かりません」

「え………」

一夏の一言によつて麻耶は固まってしまった

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

固まった真耶に代わり千冬が聞いた、すると

「古い電話帳と間違えて捨てました」

スパンッ！

本日四回目の出席簿

「必読と書いてあつただろうが馬鹿者」

「……すみません」

「あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと……」

「やれと言っている」

「……はい、やります」

自業自得である。

「ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遥かに凌ぐ。そういった『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解が出来なくても覚える。そして守れ。規則とはそういうものだ」

千冬はそう言いまた教室の端へ戻っていった、固まっていた真耶も復活し授業は再開したのであった。

第二話（前編）（後書き）

書いている内になんか長くなってしまったので、前後編に分けました。

宜しければ後編見てやってください。

第二話（後編）（前書き）

後編です。

駄文ですが、どうぞ。

第二話（後編）

二時間目の休み時間、一夏は机に突っ伏していた

「ア、アハハ、一夏、大丈夫？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あんまり」

結局授業についてゆけず頭から煙が出ている一夏を優希は心配する

「まあ、僕も分かるところなら教えてあげるからがんばろ」

「うう、ありがとう優希」

と他愛もないやり取りなのだがその場面を必死にメモしたりスケッチをしている女子が何人かいたが優希は気にしない、先程の授業で分からなかったところを優希が一夏に教えていると

「ちょっとよろしくて？」

「ん？」

「はい？」

一人の女子生徒が立っていた、長い金髪にブルーの瞳をしたきれいな白人の少女だった、でも優希は何故か彼女の纏っている雰囲気が好きになれそうにはなかった。

「聞いてます？ お返事は？」

「ああ、聞いてるけど……どういう用件だ？」

「まあ！ なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「……………」

少女の上からな物言いに優希は不快感を覚えた

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

「あ、質問いいか？」

一夏が手をあげてセシリアに質問する

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

ガタンッ！！一夏のこの質問にはさすがの優希もあきれ椅子から落ちそうになった

「あ、あ、あ……」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの!？」

セシリアは無知すぎる一夏に腹を立てたのか怒り出した

「一夏、代表候補生というのはね国家代表のIS操縦者の、その候補として選出される人達の事、簡単に言うとエリート」

「なるほどな」

「そう！ エリートなのですわ！」

髪をかきあげ優希達に指を指すセシリア

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とはクラスを同じくすることだけでも奇跡・・・幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか、それはラッキーだ」

「・・・馬鹿にしていますの？」

「特に、大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが。ここに入る以前は普通の男子中学生だったんだからな。なあ、優希？」

「う、うん」

残念ながら優希は、普通ではなかった。

「ふん。まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

「結構です」優希は言いたかったが面倒ごとになるのがいやなのであえて言わなかった。

「ISのことわからないことがあれば、まあ泣いて頼まれたら教えて差し上げててもよくつてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「ISを動かして戦うやつなら、俺も倒したぞ・・・優希はどうなんだ？」

一夏に聞かれた瞬間、優希の脳裏にはトラウマとなったHENT AIの姿が浮かんだが、慌てて削除して答えた

「・・・・・・・・僕も倒したよ」

「は・・・・？ わ、わたくしだけと聞きましたか？」

啞然とするセシリアに一夏は追い討ちを掛ける

「女子ではってオチじゃないのか？」

この一言で完全に地雷を踏んだらしくセシリアの顔は赤くなった

「あ、あ、あ、あなた、わたくしをぶ……」

セシリアの言葉を遮りチャイムが鳴った

「くっ……、話はまた後で。逃げないことね！　よくって！
？」

そう言いながら自分の席にセシリアは戻っていった。

「まだ立っている奴、とつとと席につけ」

どうやら三時間目は千冬が授業をするらしく、真耶はノートを手
にしている。

「ああ、授業の前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決
めないとな」

意味が分からないらしく一夏は首を傾げていたところを千冬が全員
に聞こえるように言う

「クラス代表者とはそのままの意味だ。ちなみにクラス対抗戦は、
入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいし
た差はないが、競争は向上心を産む。一度決まると一年間変更はな
いからそのつもりでいろ、まあ、俗に言えば学級委員みたいなもの
だ」

教室内が少し騒がしくなった、すると一人の生徒が手をあげて

「はいっ、それなら私は織斑君を推薦しますっ！」

「あたしもそれが良いと思いまーす」

「じゃあ、私は篠ノ之君に」

「私も」

と言った、それに便乗し数人が一夏に票を入れる、さらに優希にも票が入られる。

「候補者は織斑 一夏に篠ノ之 優希・・・他にはいないか？
自薦他薦は問わないぞ」

どうやら辞退は無理らしく優希は諦めた

「お、俺っ!？」

一夏は反応するが無意味な行動である

「織斑、席に着け、邪魔だ。他にはいないか？ いないのなら二人で決めるが」

「俺はやるって言うてな——」

「座れ、馬鹿者。先程自薦他薦は問わないと言っただろうが」

と言われ一夏は、納得してなさそうな顔しながら席に着いた。

「他にはいないのか？ いないならこの二人でISの戦闘によって
決定したいと思う」

と千冬が閉めようとした時にセシリアが立ち上がり

「待ってください！ 納得がいきませんわ！」

バンツと机を叩いてさも不服そうに言葉を紡いだ。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコツトにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

と言い反対すると同時に優希達二人を侮辱し始める

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術を修練しに来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

侮辱もエスカレートしていき

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

普段、温厚な優希も堪忍袋の緒が

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては——」

プツンッ！ 切れた

「イギリスだつて大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「古いことだけが、自慢の国の癖に何をほざいてんだか」

一夏も切れていた様で優希と一緒にのタイミングで言う。

「あ、貴方がた、わたくしの祖国を侮辱するのですか!?!」

「侮辱?何を言ってるのですか、僕は事実を述べただけですよ」

「ああ、そうだな」

「決闘ですわ!」

二人を指差し、セシリアが宣言する

「ああ、いいぜ、やってやるよ」

「受けて立ちます」

優希と一夏もやる気十分であつた。

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い——いいえ、奴隷にしますわよ」

（注・現代には奴隷という身分は存在しません）

「ああ、いいぜ。小間使いでも奴隷でも何にでもなつてやるよ!」

「いいですよ、でも、僕は負けませんけど」

と言った後、三人は睨み合った。

「さて、話はまとまったようだな。それでは勝負は次の月曜日。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコット、篠ノ乃はそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

千冬は手を二回叩き授業を開始した。

（ああゆう女、嫌い、絶対に勝つ）

優希は気に入らない女、セシリアに勝利するための算段を立て始めるのだった。

（知識はある、まずISに慣れる、それからだ）

打倒セシリア、優希の特訓が始まるのであった。

第二話（後編）（後書き）

はいっ、第二話終わりました。

偶然にもアニメの第一話と同じ場面で終わりましたね。

自分でもびっくりしています。

次は特訓の話です、一夏は幕によって剣道をしていましたが、優希は別で特訓します。

す。

感想、意見ありましたらお願いします。

第三話（前書き）

小説を書くのがここまで大変だと思いませんでした・・・。

だが、諦めません！がんばれ俺、負けるな俺！

では、三話目、どうぞ。

第三話

セシリアの決闘宣言から時は経ち、放課後になった優希はあれから授業そっちのけで、さらに昼食の時でも対セシリア戦の計画を立てていた。（あまりの集中で一夏も声を掛けられなかった）

「ああ、織斑君に篠ノ之君。まだ教室にいたんですね。よかったです。」

「「はい？」」

呼ばれて顔を上げると、麻耶が書類を片手に立っていた。

「えつとですね、二人の寮の部屋が決まりました。篠ノ之君の部屋は一人部屋で、織斑君の部屋は申し訳ないですけど相部屋となります。」

麻耶の手には、部屋番号の書かれた紙とキーが握られていた。それを、一夏と優希に渡す。

IS学園は全寮制であり、生徒は全員寮で生活することが義務づけられている。これは将来有望な生徒達を勧誘する様々な国から守る為の措置である。

「俺の部屋、決まっていなかったですか？前に聞いた時に、一週間は自宅から通学してもらって話でしたけど」

「僕も、そう聞いてましたけど」

「それなんですけど、事情が事情なので一時的な措置として部屋割

りを無理矢理変更したらしいです。……二人とも、そのあたりのことって政府から聞いてますか？」

「どうやら政府、日本政府の指示らしい。妥当な案だろう、なんせ前例のない『男』のIS操縦者なのだ、国としても監視と保護の両方を兼ねているのだろう。」

さらに優希に関しては世界中が探している天才、篠ノ乃 束の弟であり彼女から学んだISの知識があるからである。

「そう言うわけで政府特権もあつて、とにかく寮に入れるのを最優先したみたいです。一ヶ月もすれば二人の方も用意できますから、しばらくは我慢してくださいね」

「そうですね、部屋の件はわかりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できないですし、今日はもう帰っていいですか？」

「僕もホテルに戻っていいですか？」

「あ、いえ、二人の荷物なら……」

「私が手配しておいたやつた。ありがたく思え」

と、千冬の声が聞こえたときダンスベーターの曲が脳内に流れたのは優希だけではないはずだ。

「「あ、ありがとうございます」」

「まあ、生活必需品だけだがな、篠ノ乃弟のほうはホテルにあった物をキャリアバックに纏めていれておいたぞ」

ありがたことなのだが、プライベートな物もあつたので少し複雑な気持ちな優希であつた。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど・・・えっと、その、織斑君と篠ノ之君は今のところ使えません」

「え、なんですか？」

意味がわかってないらしく一夏は、真耶に聞いたのだが

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

と千冬に言われジト目で見られるのだった。

「おつ、織斑君っ、女子とお風呂に入りたいんですか！？ダ、ダメですよ！」

「い、いや、入りたくないです」

一夏は慌てて否定したが

「ええっ？女の子に興味がないんですか！？そ、それはそれで問題のような・・・」

麻耶の方は暴走していた

「織斑君、男にしか興味ないのかな・・・？」

「それはそれで……アリね」

「相手は篠ノ之君……これだわ!!」

黙っていた優希も巻き込まれて一部女子は騒ぎ出す、その光景に優希は溜め息を吐くのであった。

「えっと、それじゃあ私達は会議があるので、これで。」

「あつ、織斑先生。少し宜しいですか?」

「どうしたんだ優希?」

教室から出て行く千冬たちを優希は呼び止めるのだが、鞆を持ち帰ろうとしていたのだが、優希の行動に気づき、話に入ってきた。

「あ、一夏。僕、ちょっと織斑先生に話があるから先に帰っていいよ」

「え、なら俺待つけど」

「うっん、ちょっと長くなりそうだから、いいよ」

一夏待つと言うが優希はやりわりと断った

「そうか、じゃあまた後でな」

教室から出て行く一夏に優希は見送った

「もついいのか、篠ノ乃弟?」

「はい、織斑先生、練習用のISを貸してほしいんです。それと放課後のアリーナの使用許可も」

「ISとアリーナをか……分かった、後で職員室に來い。今から私達は会議だからな……二時間後に來い」

優希の申し出に千冬は悩むしぐさをしてから、職員室に來るように言った。

「わかりました」

「では、私は行くぞ」

「はい、お時間取らせてすみません」

「別に構わん」

と言い千冬は教室から出ていった、優希は腕時計を見た。

「んゝ、二時間か、どうしようかな？」

空いた時間をどう過ごすのか悩む優希

「あつ、そつだ」

何か思い出したのかポケットに手を入れて、部屋番号の書いてある紙を取り出す

「とりあえず部屋に行こう、まずはそれからだね」

と言いきりの自分の部屋に向かう優希であった。

その後、優希は部屋で適当に時間をつぶし、今職員室の前に来ていた。

コンッ、コンッ

「失礼します。織斑先生はいらっしゃいますか」

「ん？来たか篠ノ之。こつちだ」

扉をノックしてから職員室に入り、千冬のことを尋ねる。すると千冬はこちらに気づいたようで優希を呼び寄せた。

「ISの貸し出しと、アリーナの使用許可だったな」

「はい」

「機種はどうする、『打鉄』か『ラファール・リヴァイブ』どちらにする？」

千冬は二つの案を出してきた。一つは『打鉄』、日本産のISで扱いやすく、性能も安定していて防御能力も高く信頼性の高いIS、優希が試験の時に使ったのと同じ機種である。

そしてもう一つは『ラファール・リヴァイブ』、フランスのデュノア社製のIS、操縦しやすく汎用性が高い。第二世代後期に作られたISなので性能は高い。

優希はどちらが勝率が上がるか考えた結果

「『ラファール・リヴァイブ』をお願いします。」

「『ラファール』か・・・『打鉄』じゃなくていいのか」

「はい、相手は専用機持ちですからね。少しでも性能の良い方を選ばないと勝てませんから」

「そうか・・・では、これがIS貸し出し用の書類とアリーナ使用の申請書だ。」

千冬は十枚ほどの紙を優希に渡す

「明日から使いたければ六時までに提出しろ、書くなら私の隣を使え、急げば間に合うだろう」

現在の時刻は五時三十分。一枚、三分の計算である。

「うわ、時間無いじゃないですか。」

千冬の隣の席に座り大急ぎで申請書を書き出す優希であった。

「五時五十九分五十秒、ギリギリだな」

千冬は最後の書類を確認し判子を押した。

「ま、間に合った」

「ああ、これで明日から使えるぞ」

何とか時間内書き終えた優希は机の上にな突っ伏していた

「しかし、お前は行動が早いな、あのバカに見習わせたいくらいだ」

弟のことを思い出し、溜め息をつく千冬

「……篠ノ之、お前は本気でオルコットに勝つつもりか？」

「当たり前ですよ。勝つつもりじゃなかったらあんなは啖呵切りませんよ」

千冬の問いに、筆記用具を片付けながら答える優希

「オルコットは油断しているとはいえ、仮にも代表候補生だ。勝ち目は薄いぞ」

「わかってます。そのために練習するんです」

「そうか……なら、せいぜいがんばれよ」

「はい」

優希は礼をして、職員室を出る。すると彼のお腹から可愛い音が聞こえた

（お腹すいたな、早く食堂に行って何か食べよう）

と、思いながら優希は寮の食堂へ向かうのだった。

第三話（後書き）

あ、あれ優希が特訓する話のはずだったはずなのだが………
何故こうなってしまったんだ。

申し訳ございません。（土下座）

書いているうちにまた長くなってしまつて。当初の予定通りには出来ませんでした。

しかも、もしかしたら特訓話を飛ばしてセシリア戦にいくかもしれ
ません。

気分や作者で本当に申し訳ありません。（土下座）

第四話（前書き）

前回の後書きの通り、優希の特訓は省きました。

第四話

あれから、一週間、優希は独学でISの基礎動作の全てを叩き込んだ、授業が終わったらすぐにアリーナへ向かい終了時間まで訓練をするその繰り返しだった。そのかいもあって優希は大分ISの扱いに慣れたのだった。そして月曜日の放課後、決戦の時を迎えた。

「……………なあ、箒、優希」

「なんだ、一夏」

「何、一夏？」

優希達は第三アリーナ・Aピットにいた

「気のせいかもしれないんだが」

「そうか。気のせいだろう」

「何が？」

優希は一夏の言おうとしていることの意味が分かっておらず、首を傾げる

「箒、ISのことを教えてくれるはなしはどうなったんだ？」

「……………」

「目をそらすな」

「あ、あはは……」

「どうやら一夏はこの六日間、ISの訓練は一切してなかったようだ。」

「し、仕方ないがないだろう。お前のISもなかったのだから」

「まあ、そうだけど……じゃない！知識とか基本的なこととかあっただろ！現に優希は、自分でIS借りて六日間ずっと練習してたぞ」

「……………」

「目をそらすなっ」

優希は学園の訓練用ISを使うが、一夏には政府から専用機が用意されるのだが、そのISはまだ届いていなかった。今もまだ。

「……………」

三人は、沈黙すると、麻耶が慌しくピットに入ってきた

「お、織斑君織斑君織斑君っ」

あわてふためいてる真耶を一夏は落ち着ける

「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

「は、はいっ。す……………は……………、す……………は……………」

「~~~~」

「はい、そこで止めて」

「うっ」

息を吸った時に一夏が冗談で止めるよう言ったら本当に止める真耶であった

「……………」

「…………ぶはあっ！ま、まだですかあ？」

一夏は止めるタイミングを見失った

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

と一夏は千冬にいつもより強めに叩かれた。痛そうである。

「千冬姉」

「パンツ！」

「織斑先生と呼べ。学習しろ。馬鹿者が。それより山田君」

「そ、そうでしたっ。お、織斑君来ましたよ！織斑君の専用IS！早く来てください」

「いくぞ、一夏！-！」

どうやら、間に合っただけ。一夏は幕と麻耶に引っ張られていく。

「織斑先生、一夏はフォーマットとフィッティングがありますよね？ だったら僕が先に出ますね」

「いや、待て、篠ノ之。お前の乗るISは『ラファール』では無い」と千冬に言い、優希は『ラファール』の準備を始めようとするのを止められた。

「えっ？ どういうことですか」

「こっちだ、ついて来い」

千冬に先導され優希はピット搬入口に向かう。ゆっくりと開く防壁扉が開く、するとそこには

――二つの『白』がいた。

「これが・・・」

「はい！ 右にあるのが織斑君の専用IS『白式』です！ そして左にあるのが篠ノ之くんのISです！」

「ぼ、僕のIS!？」

優希は驚いた、自分には専用機は用意されなかったのに、目の前のISは自分の専用機だというのだから。

「そうだ、先程お前宛に届いたものだ」

千冬が背後からそう告げる

「ちなみに差出人の欄には『天才のウサギちゃん』と書かれていた・
・・・・・あのバカウサギが」

最後のあたりは、小声で呟いた千冬だった。

「束姉・・・・・」

優希は姉の送ってくれたISを見つめて涙ぐんだ

「山田先生、このISの名前はなんていうのですか？」

「え、ええと、それが、このISなんですが」

優希がISの名前を聞くとなぜか真耶は言い淀む。すると千冬が告げた

「このISには名前は無い。いや、まだつけてないという方が正しいな」

「つけてない？」

「そうだ、ISの名前はお前がつけろ、篠ノ之弟。それが送り主の意向だ」

「僕が・・・・」

優希は名も無き純白のISを見つめる。すると長いアンテナが伸びたヘッドギアを見つけた

（あのアンテナ、まるで角みたいだ……白くて角まるで……）

その時、優希の脳裏に、一頭の神獣の姿が浮かび上がった。純白の一角獣の姿が……

「…………ユニコーン」

「えっ？」

「ユニコーン、決めました。このISの名前は『ユニコーン』ですっ！」

優希は千冬にそう宣言した。

「『ユニコーン』……一角獣か、それでいいのだな？」

「はいっ」

「わかった、IS名は『ユニコーン』で登録する。」

「よろしく『ユニコーン』ね」

と優希は装甲を開き、主を待っているISに語りかけた

「さっさと装着しろ二人共、時間がないからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ。できなければ負けるだけだ。わかったな」

優希は慣れた動きでISを装着する。すると優希は優しく包み込まれる感覚がした。そして優希の体に合わせて装甲が閉じて、装着が完了した。各種センサーに映し出された数値は全て問題は無かった、隣の一夏を見るとあちらも装着が終わったようだ。

「終わったようだな。さてどちらが先にいく」

「俺が先に『僕が行きます』って優希!？」

「篠ノ之弟が先だな」

と千冬に聞かれると一夏より先に優希が答えた。

「おい、優希、俺が先に」

「一夏はISの訓練まともにしてないんでしょ？勝たたいならせめてフォーマットとフィッティングを済ませないと勝てないよ」

「お、終わってないのはお前もだ『僕はー夏と違ってちゃんと練習したから、大丈夫だよ』うぐっ」

優希の言葉はその通りであるため一夏は黙った。

「で、でも『そこまでしておけ織斑』千冬姉!..」

「まともにISを動かしたことのない、お前が代表候補生であるオルコットと戦って勝てるわけはないだろうが。ここは篠ノ之弟の言う通りにしろ」

なお、くらいついてくる一夏を千冬が止めた。

「わ、わかったよ。優希、絶対に負けるなよ」

「うん、絶対勝つよ」

と一夏に言い優希はピットの入り口へ向かう、すると後ろで不安そうな顔をしていた。（ISに搭載されているハイパーセンサーによつて優希は360度全方位を見渡せる）

「箒姉」

「なつ、なんだ」

思い返せば、これが優希と箒、二人が再会してから初めて交わした言葉だった。そして優希は振り返って

「行ってきます」

と一言、優希は昔のように笑顔で箒に言う、

「・・・ああ、いつて来い」

そして箒も笑顔で優希を送り出す

「うんっ」

ISを少し傾けてピットゲートに進ませる。

（大丈夫、僕は出来る）

ガチャンツ、という音とともにゲートが完全に開く、

「さあ、行こう」ユニコーン『!!』

ISを加速させて優希はゲートから飛び出し、アリーナへ躍り出た。

第四話（後書き）

はい、第四話でした。

実は完成間近に操作ミスで消してしまいまして、UPがかなり遅れてしまいました。

次回は、セシリア戦、なのですが作者が課題の再提出をくらってしまいました。更新がしばらく無いかもしれません。
本当にすみません。

第五話（前書き）

課題があるのにも関わらず更新してしまった。

第五話

優希はゲートから出ると、先にアリーナに出ていたセシリアと高度を合わせた。

「あら？逃げずに来ましたのね」

IS『ブルー・ティアーズ』を身に纏ったセシリアは腰に手を当てたポーズで宙に浮いていた。手には2メートルを越す大型のレーザーライフル《スターライトmk-?》が握られていた。

「それにしても遅かったですわね。てっきり、もう一人の方と負けるのが怖くなって、一緒に逃げ出したのかと思いましたのよ？」

――警戒、敵IS操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティのロック解除を確認。――

センサーからセシリアが優希をロックしたことを告げるが優希は同様もせずに会話を続ける。

「遅れたことは謝ります、ごめんなさい。でも、残念だったんじゃないですか？不戦勝だったら負けた時の無様な姿を晒さずにいられたんですから。」

「つゝゝゝ、また、わたくしを侮辱しますのね！！いいですわ、その減らず口が二度と開けないように徹底的に叩いて差し上げますわ！」

セシリアの挑発を軽く流して優希は逆に挑発する。その言葉に、

顔を真っ赤にして怒るセシリアはその手に持った《スターライト m k - ? 》の照準を優希に合わせた。

- - - 警告！敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。- - -

「喰らいなさい！！」

キュインツ！と独特な音と共に閃光が優希の元へ駆ける。だが、優希はそれを体一つ分、右に移動して最小限の動き攻撃をかわして、手を軽く叩いて拍手する。

「おー。見事な不意打ちですね。」

「つ~~~~~~~~！！！！？！！？つ、潰しますわ！！」

「??？」

先程よりも顔を赤くするセシリア。だが優希はなぜセシリアが怒っているのか分からず首を傾げていた。

「つ~~~~~~~~！！？踊りなさい！！わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で！」

「円舞曲^{ワルツ}？盆踊りじゃないの？」

「キーーーーー！！！！」

~~~~~第三アリーナAピット~~~~~

「・・・・・・・・なあ、箒」

「・・・・・・・・なんだ」

「優希なんか、黒くないってないか」

「・・・・・・・・そうだな」

「でも途中、首傾げてたよな。演技かあれ？」

「・・・・・・・・いや、天然だと思う」

「・・・・・・・・天然か」

「ああ、天然だ・・・・・・・・多分」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

攻撃、攻撃の嵐。雨の様に降り注ぐレーザーを優希はジグザグに飛行して回避する。

（くっ、さすが代表候補生。頭に血が昇っていても攻撃が鋭い。なにか武器を・・・・）

優希の思いに答えたのか、すぐさま使用可能武装の一覧が現れる。

一覧の中からは優希はライフルを選択しコールする。するとISSの手の平に粒子が集まり始める。だが、それはいきなり霧散した。

(えっ!?)

- - - ERROR。武装粒子化システムに問題が発生しました。  
全武装使用不可です。 - - -

(し、システムトラブル!? さっき確認した時は大丈夫だったのに・  
・・・)

武器を出すことで、回避の専念するしかなかった。

「あら? あれだけ大口叩いた割りには、回避だけで精一杯みたい  
ですわね・・・・だったら、こうですわ!!」

セシリアはブルー・ティアーズの非固定浮遊部位アンロックユニットからフィン状の  
パーツが切り離されると、意思を持ったかのように飛び回り、優希  
に向かってレーザーを放った。

「くっ・・・・!!」

「よくかわしましたわね。でも・・・・いつまで持つかしら!」

「やってくれましたわね・・・・貴方!!」

あれから十分、優希とセシリアの両者のISには傷がついていた。優希のユニコーンのシールドエネルギーは半分に減っていた。

一方セシリアの方もシールドエネルギー半分まで減っていた。ブルー・ティアーズの装甲は所々傷つき、へこんでいた。だが良く見ると否固定浮遊部位からビットが二つ無くなっていた。

「武器無しで《ブルー・ティアーズ》を二つも落すなんて。どんだけの野蛮人なのですか!!」

武装を展開できなく攻撃手段のない優希が取った手段は、徒手空拳による格闘戦だった。

優希は飛び交うレーザーを掻い潜り接近し、拳や蹴りでセシリアを攻撃するなどを繰り返した。途中飛んできたビットを掴み手でへし折ったり、オーバーヘッドキックの要領で蹴り壊すなどの顔に似合わない荒業を繰り返したりもした。

「くっ……。さっさと落ちなさい!!」

セシリアは焦ったのか、再度ビットを展開させて優希へ攻撃する。先程よりも数が減ったので優希は難なくかわしセシリアへ急接近する。

（もらった!!）

拳を振り上げてパンチを繰り返そうとした時、優希は悪寒を感じた距離を取ろうとしたのだが、既にかなり加速していて急には止まれなかった。するとセシリアがニヤリと笑った。

「かかりましたわね」

セシリアの腰部から広がるスカート状のアーマー。その突起が外れて、動いた。

「残念でしたわね。ブルー・ティアーズは六機ありますのよ!!」

展開されたビットは他のビットとは違い、撃ち出されるのはレーザーではなく《ミサイル》であった。

ドカアアアッ!!

回避が間に合わずミサイルが直撃した。強烈な爆発を受けて優希は吹き飛ばされる。そこへセシリアが止めをさそうと全武装を優希に向けた。

「さあ、<sup>フィナーレ</sup>終曲ですわ!!」

そして、レーザーとミサイルが一斉に放たれた。

だが、それは当たることが無かった。

「「優希っ……!!」」

モニターを見つめていた一夏と篤は思わず声を上げた。

千冬と真耶も真剣な面持ちで画面を見つめていた。セシリアの撃ったレーザーやミサイルが着弾しようとした時、ユニコーンの装甲

の継ぎ目から赤い光が漏れ始めた。

「……どうやら、間に合ったようだな」

ほっとしたように千冬は、そう呟くいた。その時の画面には着弾する瞬間だった。

――フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。――

爆発を受けて意識が朦朧としている優希の頭の中に確認と書かれたボタンのあるウィンドウが現れた。

（……なんだろうこれ？とりあえず押してみよう。）

ボタンを押すとウィンドウは消えて、新しいウィンドウが出てきた。そこには

――『NT-D』systemを起動しますか？――

と書かれていた。優希は迷わずOKのボタンを押した。

（約束したから、ぜったいに負けないってだからユニコーン……  
・僕に力を貸して！！）

――『NT-D』system起動を確認。これよりDモード

に移行します……

と、ウインドウに映し出された瞬間、装甲の継ぎ目から赤い光が溢れ出した。

セシリアの放ったレーザーは当たる瞬間、優希を避けるようはずれミサイルは勢いを無くし地面に落ちていった。

（こ、攻撃が外れた！？しかもレーザーが不自然に曲がった……  
いたい、どういうことですか！？）

セシリアが混乱していると、優希のISに変化が現れた。

ISの至る所の装甲がスライドし、内側から赤く発光した装甲が現れる。背部のフィンボードも変形し、頭に着けていたヘッドギアのアンテナも真ん中から開きV字型になり、ユニコーンは変形、いや、変身したのだった。

ファースト・シフト

「ま、まさか……一次移行！？あ、あなた、今まで初期設定の機体で戦っていたというの！？」

優希は、両腕の前腕部に搭載された《ビーム・トンファー》を起動する。折りたたまれていたクリップが展開しビーム刃を形成する。

「……オルコットさんだったけ？」

「な、何ですか？」

突然優希に話しかけられ身、構えるセシリア

「ごめんね……勝たせてもらつよ」

「えっ」

と、言った瞬間セシリアの視界から優希の姿が消えた。見えたのは発光していたユニコーンの赤い光のみであった。

ドカアアンツ！、ドカアアンツ！

と爆発音が響いた、セシリアの目の前に、ビットが二機破壊されたと書かれたウィンドウが現れた。セシリアは爆発があった方を見るとそこには、ビーム刃を振り下ろした体勢のままの優希がいた。

（ま、まさか、あの方……一瞬であの距離を移動してブルー・ティアーズを破壊しましたの！？）

ユニコーンの起動が早すぎて、センサーが反応できなかつたのである。優希はビーム刃を展開している左腕をゆつくりとセシリアに向ける。そして、赤い軌跡を残しながら突撃した。

セシリアは慌てて手に持ったライフルとミサイルで弾幕を張る。だがユニコーンの速度が速すぎるため照準が定まらず、弾幕は意味をなさなかった。

（は、速すぎて姿が見えない……）

「す、すげえ」

「・・・あ、ああ」

圧倒的なスピードでセシリアを翻弄する優希を見て、一夏と箒は啞然としていた。だが教師陣の二人は険しい顔をしていた。

「・・・織斑先生、あれじゃあ篠ノ乃君は・・・」

「ああ、危険だ。山田君、保険室に連絡を・・・」

「はいっ」

千冬の指示で真耶は保健室に内線で連絡を取り始めた。

（東、お前はなんて物を、あいつに寄こしたんだ・・・）

と、千冬は行方不明になっている幼馴染に問いかけるのであった。

優希はセシリアの前で動きを止めた。セシリアには優希がいきなり目の前に現れたかのように見えて動きが止まってしまった。優希は両腕を振り上げてバツを描くように一気に振り落とした。

「し、しまっ・・・!？」

「僕の勝ちです!！」

《スターライトmk-?》を盾にして何とか防ごうとしたが。ビーム刃はライフルごとセシリアを切り裂き『ブルー・ティアーズ』のシールドエネルギーを0にした。

その瞬間、試合終了を告げるブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者・・・篠ノ乃 優希』

と、告げられると客席の方から、歓喜の声が上がった。

「ま、負けた、このわたくしが」

セシリアは負けたショックで呆然としていた。

そして、勝利した優希だが、様子がおかしかった。目は虚ろで焦点が合っていない、顔は青白くなっていた。ユニコーンも変身前の形に戻る。さすがに変だと思ったセシリアは優希に声を掛けた。

「あ、あなた。大丈夫ですよ・・・？顔色がとても悪くなっていますわよ？」

「や、やった。勝った・・・ぞ・・・」

セシリアの声は聞こえないらしく、一言呟くと、体からISが解除されて優希は自然落下を始めた。現在優希達がいた高さは20メートル、ビル七階相当の高さである、生身の人間が落ちたらひとたまりも無い高さであった。観客席からは悲鳴が上がる。

「えっ！？ちよつと・・・！？」

『オルコット！！篠ノ乃を回収しろ、急げ！！』

「つく！」

千冬の緊迫した叫びに反応し、セシリアは急降下して落下する優希を追いかけるのだった。

「優希っ……………!!」

優希は意識がなくなる寸前、姉の悲痛な叫び声を聞こえたような気がしたのだった。

## 第五話（後書き）

第五話でした。イヤー、戦闘シーン書くの難しいですね。

作業用BGMはガンダムUCのサントラ、これを五回位繰り返し聞いてました。

でも、楽しかったです。

感想などありましたらお願いします。

## 第六話（前書き）

更新できずにすみませんでした。

ですが課題が無事に終わりましたの更新を再開します。  
では、第六話どうぞ！

## 第六話

静かな部屋に時計の秒針が動く音だけ響く。眠っていた優希の意識が徐々にはつきりしていく。まだ頭がボンヤリとしていたが自分の部屋の天井ではないことだけはわかった。

「・・・・・・・・知らない天井だ」

「なに、ふざけたこと言っておるのだ、馬鹿者」

「あう!?!」

優希は、いつの間にかいた千冬にペシンツと出席簿で叩かれた。

「お、織斑先生」

「起きなくていい。まだ寝ている。」

千冬がいることに気づいて体を起こそうとするが千冬に額を押されまたベッドに戻された。

「あ、あの。僕は、いつたい・・・・・・・・」

「お前は、勝ったすぐ後に気絶したのだ。危ないところだったぞ、かなりの高さから落下したのだからな」

「気絶に落下・・・・ですか」

「ああ、そうだ。オルコットに感謝しろよ、お前を回収したのはあ

いつだ。」

「オルコットさんが……」

あとでセシリアに感謝しなければと思いながら、窓の外を見たら景色は真っ暗になっていた。

「……織斑先生。今何時ですか？」

「今か？今は……八時だな」

優希に時間を聞かれ千冬は腕時計で確認して現在の時刻を伝える。優希は頭の中で自分がどれほど眠っていたのか計算した。

「八時ですか……。じゃあ僕は三時間ほど寝てたんですか。」

「違うぞ」

「え……。？」

試合が終わってからそれほどたったわけではないようだと思っていたら、千冬が否定した。

「試合があつたのは昨日だ。お前は丸一日寝ていたんだぞ」

「は……。？丸一日……。つて、ええええ！？」

「静かにしろ、うるさいぞ」

また、千冬に出席簿で、ペシツと叩かれた

「ぼ、僕そんなに眠ってたんですか？」

「ああ。保健教諭の話によると、体にダメージが蓄積していたらし危険な状態だったところをISが強制的にお前を眠らせたらしい。まあ、異常な速度だったからな、Gも相当なものだったろう。……ISに救われたな」

自分がそんな状態に陥っていたと聞いて優希は耳を疑ったのだった。

「……優希。あのISは一体何なのだ」

「えっ……?」

千冬が突然、優希にユニコーンのことを聴いてきた。篠ノ乃では無く優希の名を呼んだ、相当真剣なようだ。

「お前のISの姿が変わった時に見せた、あの機動。あれは完全に操縦者の安全を無視したものだ。……まあ、そういう危険な装置はいくつか存在するがな。」

優希の方をじっと見つめて話し続ける。

「だがな、お前のISを造ったのは束だ。あいつがお前にあんな危険な物を渡すなんてありえないことだ」

あいつはお前には過保護なところがあるからな、と言って少し笑う

「どうなんだ、優希？」

「……それはユニコーンに使われているサイコフレームのせいだのだと思います。」

「サイコフレーム？あの赤く発光していた装甲か」

「はい。サイコフレームというのは、人の感脳波を伝達してISの操縦をしやすいしたり、反応を良くする為の素材です。本来はISの一部に使う物なんですけどユニコーンには……」

「一部ではなく、ほぼ全て……、ということか。」

「はい、それとサイコフレームだけじゃあれほどの性能は発揮できません。おそらく……」

「ワンオフ・アビリティー単一仕様能力か……」

優希は言葉の続きを答えた千冬に頷きながら話を続ける。

「はい、ファースト・シフト一次移行した時にユニコーンが覚えた単一ワンオフ・アビリティー使用能力、これがサイコフレームの力を増幅させた……か、もしくはサイコフレームのリミッターを外したのかもしれませんが」

「そうか……。優希、よく聞け。」

「はい？」

千冬が先程よりも深刻な表情を優希に向ける。

「昨日、お前が倒れてから数時間後にIS委員会がユニコーンのデータを取りに来た」

「ユニコーンのデータを？」

千冬の言ったことに頭を傾げる優希だが、千冬は話を続ける。

「ああ、どこから漏れたかは判らないが、お前とオルコットの試合の映像が委員会の連中に渡ったらしくてな。いきなりやって来てはデータを取らせると言ってきおつてな………搭乗者の容態など気にせずにな」

千冬はかなり不機嫌顔になるが、すぐに元の表情に戻り話を続ける

「……じゃあ、ユニコーンはデータはIS委員会に渡ったということですか？」

「いや、データはIS委員会に渡っていない」

「え？どういうことですか」

優希はIS委員会がユニコーンのデータを取っていったものだと思っていたのだが千冬が否定した

「データを取ろうとした時にユニコーンに搭載された機密保護プログラムが発動してな……正直いつてやばかったぞ。委員会の連中が用意した全ての機材のデータを消したうえに、原子力発電所の制御プログラムにハッキングしていたらしい。私がケーブルを引っっこ抜いて止めたが、後一步遅ければ日本の一部が停電するところだったらしい……危なかった」

「……………姉が本当にすみません」

優希はベッドの上で土下座して千冬に謝った

「まあ、いい、話を続けるぞ。データは取れないことが分かったんだが。委員会の連中、今度はユニコーン自体を持っていくとしたのだが、それはIS学園の特記事項をフルに使ってなんとかやめさせた」

「あ、ありがとうございます。織斑先生、それでユニコーンは……」

「心配するな、ここにある」

千冬はスーツのポケットからペンダントを取り出して優希に渡す。ペンダントは銀を基調として中央にユニコーンの姿が彫られていてアンティークの様な物だった。

「優希、気をつけろよ。今回は引いたが、奴等はまだユニコーンを狙っているだろう。次は庇え切れん……………わかったな」

「はい……………でも、大丈夫です。もう対処方は見つかりましたから」

そう言う優希を見て、千冬は『やはり、こいつは束と同じで天才だな……………』と心の中で呟いた。

「そうか、ならとりあえず、保健教諭が戻ってくるまで寝ている。篠ノ乃」

千冬が優希の名前を呼ばずに教師の時のように名字で呼ぶ、この話は終わり、ということであろう

「わかりました。織斑先生」

「よし。……そういえばあと五分くらいだな」

千冬は、腕時計を見て、ふと呟いた。

「何がですか？」

「ん……。？ああ、お前が目覚めそうになった時に、お前の姉に連絡をしないと。来るならそろ『ドドドドドドドドドッ』だろうと……。なんだこの音は？」

不意に廊下から聞こえてきた音を不信に思い千冬は廊下を覗こうと立ち上がろうとした時

バンッ、ピシッ

保健室のドアが凄い勢いで開けられた。開けられた力が強すぎてドアのガラスに罅が入る、そこに立っていたのは

「ほ、箒姉……。？」

優希の姉、篠ノ乃 箒であった。彼女はドアに手を付き荒く息を吐いていた、どうやらここまで走ってきたらしい。箒は優希に視線を向けると

「優希っ！！！」

ベットで寝ている優希を抱きしめた。一瞬でベットへ行き優希を抱きしめた。あまりの速さに千冬も反応できず『動きが見えなかった・・・私が反応できなかった』と言って呆然としていた。

「優希！？体は大丈夫か、痛いところは無いか？気持ち悪くないか？心配したんだぞ、いきなり空から落ちるから。しかもずっと眠ったままで、本当に心配したのだぞ」

箒は優希を抱きしめたまま言い続ける、あまりのことに千冬も啞然となっている。そして抱きしめられている優希はと言うと・・・

（い、息が・・・！？）

箒の年齢のわりには良く育った豊満な胸に顔を埋めさせられて優希は、呼吸ができないでいた。何とか逃れようとしてタップするのだが、箒は抱きしめる力を強めて優希の顔はさらに箒の胸に密着し呼吸ができなくなった。そして優希の意識は徐々に薄れていきタップする手も力を失っていき

「きゅう・・・」パタッ・・・・・・・・

優希の意識は落ちた、啞然としていた千冬も我に返る。

「お、おい篠ノ乃姉、とりあえず離しやれ、弟・・・気絶しているぞ」

「本当に心配・・・ってゆ、ゆゆゆ優希！？し、しっかりしろ、優

希ーーーー!?」

千冬に言われて箒はようやく優希が気絶していることに気づいた。パニックにしている箒に千冬は

「落ち着かんか。馬鹿者」スパーンッ!!

と、出席簿の一撃を与えるせたのだった。

余談だが、箒が罫を入れたドアのガラスは、翌日には直された。そして箒の元に届いたガラスの請求書には、高校生の財布にはかなり厳しい額が書かれていて、箒の昼食はしばらく質素なものになったのであった。

翌日の朝、優希は軽い健康診断を受けて(この時、保健医は何故か息が荒かった)保健医から授業に出ていいと言われたので少し遅れたが、教室へ向かった。優希はノックしてから教室に入ると

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいい感じですね!」

真耶がクラス代表を発表していた。

「ん?ああ、篠ノ乃君もう大丈夫なんですか?」

「あ、はい」

「そうですか。じゃあ席に着いてください」

優希の登場に一瞬クラスがざわめくが千冬が腋に挟んでいたクリップボード（出席簿は真耶が持っている）に手を伸ばすとすぐに静かになった。優希が席に着くと麻耶はSHRを続ける。隣の一夏を見ると何故か落ち込んでいた。

「それと、クラス副代表は篠ノ乃優希君に決定です。がんばってくださいね！」

（はい？）

麻耶の言葉に優希は耳を疑った。優希は呆然としてしていると一夏が拳手していた。

「先生、質問です」

「はい、織斑君」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか？それに優希はオルコットさんに勝ったのに何で副代表なんでしょうか？普通だったら優希かオルコットさんのどちらか何じゃないですか？」

「それは……」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

真耶が理由を言おうとしたらセシリアが割り込んで答えた。

その後、回りッくどい言い方をしているセシリアの話を要約すると。一夏が自分に負けたのはよく考えれば当たり前、優希が自分に勝利したことは素晴らしいとのこと。そして、怒ったのは大人げなかった反省している。だから代表、副代表の座を二人に譲ろう、経験を積みめもつと強くなれる。が理由らしい。周りの女子達も賛同して逃げ場はないらしく、優希は諦めていたが一夏はまだ足掻いていた。

「じゃ、じゃあなんで俺が代表なんですか。強さなら優希の方が上なのに」

「織斑、お前はオルコットに負けた。そうだな」

教室の隅で黙っていた千冬が口を開いた。

「そ、そうだけど」

「お前は、万全の篠ノ乃弟と戦って勝てると思うか？」

「そ、それは・・・」

「どうなんだ」

言いよどむ一夏に千冬は聞く。

「か、勝てないかも」

「そうか、これで篠ノ乃は全勝、でお前は全敗だ。篠ノ乃」

「はい？」

「お前は代表か副代表どちらがいい？」

優希は一夏の方をチラリと見るてクチパクで『ゴメンね』と言って

「副代表をお願いします」

「だそうだ。というわけでクラス代表は織斑一夏、副代表は篠ノ乃優希で依存はないな。」

「『はーい！』」

と一夏と優希を除くクラス全員の返事でSHRは終わったのであった。

## 第六話（後書き）

明日も更新できたらします。

## 第七話（前書き）

更新遅れましたすみません。

えー風邪と花粉症のダブルパンチでダウンしてました。  
では第七話、どうぞー！！

## 第七話

「やっぱり、データ見る限りじゃ射撃武装が少ないな」

優希はユニコーンのデータを見て一人唸っていた。部屋の一角には無人状態で展開されたケーブルに繋がれたユニコーンがあった。ここは学園内にあるISの整備室、優希はそこでユニコーンの整備をしていた。先日判明したことで優希の専用IS『ユニコーン』には強力な機密保護プログラムが存在しており。優希以外の者が解析しようとする、ハッキングによる反撃がされるようになっていくのだが、困ったことにプログラムが強力すぎて簡易な整備をしようとしただけで敵と見做されてしまったため（麻耶が整備しようとした端末のデータが消されてしまっただけで泣いていた）、優希が整備するしかなくなったのである。（普通のIS操縦者なら無理であるが、束の元でIS工学を学んでいた優希には簡単なことであつた）

「威力は申し分ないんだけど弾数が少ないんだよね」

優希はユニコーンの射撃武装のデータを見て考え込んでいた。

「うーん・・・そうだ！」

腕を組んで考え込んでから数秒、何か思いついたらしく優希は座っていた椅子から立ち上がり。

「無ければ創ればいいんだ」

優希は整備室の一角へ向かう、ここには下手な研究所の機材よりも良い機材もあるので優希は早速製作に取り掛かった。

「まずは、簡単な方を……」

嬉々として作業に取り掛かる優希を千冬が見たら『本当に束に似てきたな……』と言うだろう。

「え〜と、ここをこうして〜で、ここはこうで」

整備室の使用時間ギリギリまで優希は作業に没頭していたのであった。

四月も下旬、優希達一年一組は、アリーナに整列していた。前に立ちジャージ姿の千冬が全員に聞こえるように言う。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらっ。織斑、オルコット、それに篠ノ乃弟。試しに飛んでみせろ」

優希は首に掛けたペンダントに右手を当てて集中してISを展開させる

（いくよ、ユニコーン）

一瞬、優希の体が光に包まれる。光が収まるとISを装着し終えて地面から十数センチ浮いた状態の優希がいた。

一夏と、セシリアも展開し終えたようで優希と同じく浮かんでいた。

「よし、飛べ」

千冬に言われた瞬間、優希とセシリアはほぼ同時に急上昇し始める、少し遅れて一夏も上昇するが速度は二人よりかなりおそいものであった。

スペックではユニコーンの方が上なので優希が先に行く。ある程度の高さに到達すると停止する、少し遅れてセシリアも追いつく。

『お速いですわね。優希さん』

セシリアがプライベート・チャンネルで優希に話しかけてきた。ちなみに二人の仲は、優希が副クラス代表になったと日の夜にセシリアが部屋にやってきてお互いの暴言を謝り合った時に、優希がセシリアを部屋に招き入れて話し合っていたら自然と仲良くなっていた。（優希が満面の笑みで「これで友達ですね」と言った瞬間セシリアは優希の可愛さに抱きしめたい衝動に駆られたのは内緒である）

『ユニコーンのおかげですよ。セシリアさん』

『いいえ、スペックもありますけど結局は使う人間の腕ですわ。自信をお持ちください、優希さん』

『ありがとうございます／＼／＼』

「や、やっと追いついた」

セシリアに褒められて照れる優希だった。そして遅れて一夏も優希と同じ高度に到達した。

「何をやっている。スペック上の出力では白式はブルー・ティアーズよりも上なのだぞ」

一夏は千冬にお叱りを受ける。急上昇と急降下は先日習ったばかりなのだが一夏はまだ飛ぶというイメージがつかめていないのだろうだろう。

「うーん、やっぱり飛ぶって感覚がいまいちな。二人共、なんかコツみたいのはないのか？」

優希は少し悩むが思い当たらず、すまなそうな顔をしながら首を振った。

「ごめん、特に思い当たらないや。僕は一週間ずっと飛び回っているうちに感覚をつかめるようになったから。セシリアさんは？」

「そうですね・・・やはり所詮イメージはイメージ、自分が一番やりやすい方法を模索する方が建設的だと思いますわよ、一夏さん」

「そうだね、ようは慣れだよ、一夏」

「と、いわれてもな」

一夏は困ったように頬を掻く。

「そもそも、何で浮くのかよく分からないんだよな、俺」

白式の翼状のパーツを見てそう呟く一夏。

「説明しても構いませんが、長いですわよ？反重力力翼と流動波干涉の話になりますもの」

「そのことについては、僕は詳しいから教えてあげようか？全部教えるとなると短くても三時間くらいかかるけど」

「いいです、結構です」

即座に断る一夏、優希に具体的な時間を言われて想像したのだから。

「そう？でも結局は慣れだよ、今日の放課後も訓練するんでしょ？」

あの試合から一夏と優希はほぼ毎日訓練している。最初の頃のコーチは箒だったのだが箒の教え方は

『ぐつ、とする感じだ』

『どんつ、とする感覚だ』

『ずかーん、という具合だ』

と、いう感じに擬音ばかりで参考にはならず、優希も姉はちゃんとISを動かせるのだから心配したくらいであった。唯一教えられるのは白式の装備は『雪片』だけのため剣術くらいである。

そして、ISの操作を教えているのはセシリアなのだが、彼女の教え方は理論的過ぎて一夏には伝わりにくいのだが、セシリアの説明がある程度理解できる優希が一夏にも解るように説明しているの  
で実質、一夏は優希がコーチだと認識している。

「ああ、するぞ」

「あの、お二人ともよろしければ今日もわたくし一夏っ！いつまでそんなところにいる！早く降りて来い！」くっ、またあの人は」

セシリアがなにか言おうとした時に箒が麻耶から奪ったと思われるインカムで通信を入れてきた。セシリアの方は会話を邪魔されて恨めしげに箒を見る。

箒とセシリア、この二人は一夏を賭けてただいま絶賛恋の鞘当中であり、お互いの邪魔をし合っている。そのせいもあり訓練中はよく二人で言い争いをしている。

二人共様々なアプローチをかけて一夏の気を引こうとするのだが一夏は超が付くほどの鈍感であり二人の努力は無駄になることが多い。

「織斑、オルコット、篠ノ乃、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地表から十センチだ」

「了解です。では一夏さん、優希さん、お先に」

と、二人に言うとセシリアは地上に向かって急降下する。そして地表十センチのところ完全停止した。

「さすがセシリアさん。じゃあ、一夏、次は僕が行くね」

「あっ！ちよつと待てよ優希」

優希もセシリアに続き急降下を開始する一夏が何か言っていたが気にせず優希は集中する

（大丈夫、僕とユニコーンならできる……今！！）

徐々に迫る地面、地表から二メートルのところで優希は姿勢を直して脚部スラスターを噴かして地表十二センチのところで停止した。

「十二センチか、まあいいだろ次からはもう少しタイミングをずらしてみる、できるはずだ」

「わかりました」

千冬からアドバイスしてもらっていると一夏から通信が来た

『ゆ、優希！？ど、どいて、どいてくれええええ！！』

「ふえ？」

刹那、優希の体に衝撃が走った、それと同時に大量の土煙が舞い上がる、同時にクラスメイト達の悲鳴のようなものが上がる、徐々に土煙が晴れていくとそこには大きなクレーターができていた。そしてその中心には、

「い、いててて」

「あ、あう」

一夏が優希を押し倒しているような光景があった。

二人共先程の衝撃でISは解除されて生身の状態である、優希は軽く意識を失っている。そして一夏の手は優希の胸の位置にあり、はたから見れば完全に気を失っている美少女をケダモノが襲っている図であった。



~~~~~回想~~~~~

あれは、小三の夏休みのことだった。（ナレーション・一夏）

いつも通り箒と優希の家の剣道場で稽古していた時のことだ、俺と優希がちよっとしたことでもケンカした時に優希を泣かせてしまったんだ（昔の優希はいつも束さんが箒の後ろに隠れていてとても気の弱いやつだった）すると突然道場の壁が爆発したんだ、舞い上がった土煙が晴れるとそこには恐ろしい形相の箒が立っていたんだ。

それからのことは思い出たくない。俺は竹刀で何度も叩かれた、その時千冬姉が助けようとしてくれたんだけど、その時信じられないことが起きたんだ。俺が瞬きをして目を開いたらそこには……・……折れた竹刀を手にした千冬姉が『ぐふっ……無念』と言いながら倒れる瞬間だった。最強だと思っていた姉が倒されて俺は逃げ出そうとしたのだが怒り狂った箒がそんなことを許すはずもなく逃亡空しく捕まり気絶するまで竹刀で叩かれた。それから、篠ノ乃家と織斑家の間には優希を泣かせてはいけないという暗黙のルールができた。

………恐ろしい出来事だった。

ちなみにバーストモードというのは、この時の光景を見ていた束さんが箒の姿をそう命名したらしい。

~~~~~回想終了~~~~~

見るだけで誰かを殺せそうな箒の視線に一夏は産まれたての小鹿



そして一年一組では『篠ノ乃優希を泣かすな』という暗黙のルールができたのであった。

「なあセシリア、なにがあつたんだ？起きたら授業は終わってるし体中が痛いし白式は壊れているし」

「ええと……、一夏さん、覚えていないのですか？」

「なにが？」

あの宴の後に目覚めた一夏は何も覚えておらず、何があつたのかセシリアに聞いていた。

「……思い出さない方がよろしいかと」

「え？どういうことだ？」

「そ、それでは、わたくしこれから用事がありますので」

「わ、私も用事が」

「そうだ、私先生に呼ばれてたんだ」

「私も」

「え、ちよつ、セシリア、みんな！？」

逃げるようにその場から離れるセシリア、クラスメイト達も一夏から離れる。

「い、一体何があったんだ。優希、何か知らないか？」

「ゴメン、僕も分からない」

「そうか」

結局何が起こったのか分からず二人で首を傾げるのだった。

「織斑、篠ノ乃ちよつといいか」

「え、はい」

「何ですか？」

悩んでいると真耶を連れた千冬が話しかけてきた。

「ええとですね。織斑君の白式なのですけどダメージレベルがDに達してしましてね、修理の為にしばらく使えないんです」

「え？白式壊れてたんですか」

「しかもダメージレベルDって相当じゃないですか」

麻耶の言葉に驚く二人だが、千冬と麻耶は一夏の言ったことのほうに驚いていた。

「……………織斑、お前覚えていないのか？」

「えーと、何がですか？」

「そうか、だったら気にするな」

「えっと、どういうこと……」

千冬に聴こうとする一夏だが肩を強く掴まれ止められた。

「一夏、私は気にするなと言っているんだ分かったな」

「は、はい」

千冬の真剣な眼差しに負けて一夏はこれ以上の追求はしなかった。

「それでいい、山田君続けてくれ」

「あ、はい。それでですね、もしかしたらクラス対抗戦までに修理が間に合わないかもしれないのでその時は」

「篠ノ乃、お前が出る」

「僕がですか？」

優希は自分を指差す。

「ああ、間に合わなかった場合だな」

「分かりました」

「そうか、では、私達は行くぞ」

「あ、はい」

「お疲れ様です」

千冬と麻耶は教室を出るのを見送ると一夏が優希に話しかける。

「すまないな優希、俺の代わりに対抗戦出ることになっちまって」

「別にいいよ。しかも、もしかしたらの話でしょ」

「まあ、そうだけだな。でもなんで白式壊れたんだろな」

「本当だね。それより一夏、放課後どうするの？白式が使えないと訓練できないよ」

「あっ、そうだったな。どうしよ」

「だったら今日は座学にしようか。一夏はまだISの知識が少ないし」

「うげえ、また専門用語の嵐かよ」

「まあまあ、なるべく分かりやすくするからさ」

と次の授業が始まるまで放課後の予定を立てる二人であった。

ちなみに筈は暴走した時の罰として一夏の開けたクレーターの処理を命じられたのであった。

## 第七話（後書き）

・・・・・・・・すみません（土下座）

篤さんを暴走させてみたくてついやってしまいました。でも、後悔してません。

次もなるべく早く更新できるようにがんばります。  
感想などありましたらお願いします。

## 第八話（前書き）

震災からの無事復興を心よりお祈り致します。

## 第八話

「ふうん、ここがそうなんだ……」

夜。IS学園の正面ゲート前に、小柄な少女が立っていた。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ」

少女はポケットからくしゃくしゃになった一枚の紙を取り出す。

「本校舎一階総合事務受付……って、だからそれどこにあるのよ」

一人、文句を言いながら紙をまたポケットにしまう。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ」

ぶつくさ言いながらも少女は学園内に入っていく。

「ほんと無駄に広いわねこの学園……！」

三十分ほど歩いたのだが受付は見つからなく少女は苛立っていた。

（あーもー、面倒くさいな……。空飛んで探そうかな……）

と思ったのだが電話帳三冊分くらいありそうな学園内重要規約書を思い出してその考えはすぐにやめた。

「はぁー、一体どこにあるのよ」

「あのー、どうかしましたか？」

「えっ？」

ふと、後ろから声を掛けられ少女は振り向く。

「あの、大丈夫ですか？」

「え？ええ大丈夫よ」

少女に声を掛けたのはユニコーンの整備が終わって部屋に戻る途中の優希であった。

「そうですか。だったらよかったです」

（……………っは！？なによこの可愛さ、ずるすぎない）

ニコツと微笑む優希に少女は見惚れるのであった。

（同姓のあたしでもドキドキするなんて）

どうやら少女は優希のことを同姓だと思っているらしい。そんなことは知らずに優希は少女に話しかけるのであった。

「それで、どうかしたんですか？」

「え、ええ、そうだ！ねえ、ここの場所分かる？」

少女はポケットからくしゃくしゃになった紙を取り出して優希に見せる。

「えーと、本校舎一階総合事務受付ですか？はい、わかりますよ」

「ホント！だったら案内してくれない」

「案内ですか？いいですよ」

「え、いいの？ありがとう、この学園広すぎてわからなかったのよ」

「あはは、確かに広いですよねこの学園。あつ、こっちですよ」

優希は先導し案内し始める少女はそれに着いていく。

「そういえばまだ名前も言ってなかったわね。私の名前は凰鈴音、あなたは？」

鈴音は自分の名を名乗った後、優希に名前を聞いてきた。

「あ、僕は篠ノ乃優希です。よろしくお願いします」

「篠ノ乃優希ねよろしくね！……ん、篠ノ乃？ってまさか、あんた」

優希の名前特に姓を聞いたとき鈴音の動きが止まった。鈴音の考えていることに気づいたのか優希は少し笑いながら鈴音に言った。

「あ、はい、僕は篠ノ乃束の弟です。」

「えええええーーーーー!?!」

優希の言葉に驚愕し鈴音は大声を上げるのであった。

「そ、そんなに驚くことですか?」

「お、弟って、あんた男だったの!?!」

「驚くのそこですか!?!」

今度は優希が驚くのであった。

「あたし、てつきり女の子だと思ってたのよ!?!」

「女の子じゃありません!?!男です!?!」

「…………ホントに?」

「本当です!?!ホラッ」

優希は鈴音に生徒手帳を見せる、性別の欄にはちゃんと男と書かれていた。

「うわっ、ホントだ!?!」

「だから、そう言ってるじゃないですか」

「あはは、ゴメン」

鈴音は謝りながら手帳を優希に返してまた歩き出す。

「えーと、鳳さん」

「鈴よ」

鈴音が優希の言葉を遮る

「え？」

「私のこと、鈴でいいわよ」

「えっと、じゃあ僕も優希でいいです」

「そう？じゃあ優希、あんたさ織斑一夏が何組か知ってる？」

「えっ？一夏」

鈴音が一夏の事を聞いてきたので優希は少し驚いた。

「そう、あんたと同じISを使える男、織斑一夏。何組かわかる？」

「う、うん、知ってるよ、ていうか僕と同じクラスで一組だよ」

「そう、一組ね」

「あの、なんで一夏を」

「あ、もしかして受付ってあそこ？」

鈴音が一夏のこと聞いてきたことを疑問に思い、優希は理由を聞いた。こうとしたが鈴音に遮られた。

案内しているうちに本校舎の近くについてようだ。鈴音は校舎の灯りのついているところ指差し優希に聞く。

「あ、うん、そうだけど。鈴、どうして一夏の」

「そう、案内ありがとう！また今度お礼するね。じゃっ」

「あ、ちよつ、待って……いちゃった」

優希の話も聴かず鈴音は一言礼を言って校舎へ駆け出して行ってしまった。

「まあ、いいか。部屋に戻ってシャワー浴びよ」

一夏との関係はまた会った時に聴こうと思って、優希は部屋に戻っていった。

「はい、これで手続きは以上で終わりです。ようこそIS学園へ、  
凰鈴音さん」

「はい。あの、織斑一夏って一組ですよね？」

長い手続きも終わってようやく鈴音はIS学園に入学できた。  
優希からの情報を疑っているのではないが鈴音は事務員に一夏の事を聴いていた。

「ああ、噂の子？ええ、一組よ。鳳さんは二組だから、お隣ね。そうそう、その子一組のクラス代表になったんですって。やっぱり織斑先生の弟さんなだけはあるわね。それと副代表になった子も」

事務員はどうやら噂好きらしくどんどん鈴音に喋ってくる。事務員を冷ややかに見ながら鈴音は質問する。

「あの二組のクラス代表って、もう決まってますか？」

「決まってるわよ」

「名前は？」

「え、ええと・・・聞いてどうするの？」

鈴音の質問を少し変に思い事務員は聞き返した。

「お願いしようかと思って。代表、あたしに譲ってって」

と言い、鈴音はニヤリと笑った。

ここは寮の食堂の、壁には『織斑一夏&篠ノ乃優希クラス代表・副代表就任パーティー』と書かれていた。優希と一夏は中央のソファーに並んで座っている、そして二人以外の各々の手にはクラッカーが握られていた。

「というわけでっ！織斑君、篠ノ乃君クラス代表・副代表就任おめでとう！」

「くくくく おめでと〜！」「くくくく」

パンツ、パンパーンッ！

誰かの音頭と共に優希と一夏以外のクラスメイト達がクラッカーを鳴らした。クラッカーから飛び出してきた紙テープは主役の二人の頭に乗っかる。

「・・・・・・・・・・」

「あ、あはは」

現状に呆れたのか一夏は無言、優希は苦笑していた。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がりねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

クラスメイト達は嬉々として話し合っている。ちなみに先程から相槌を打っているのは二組の女子である。食堂にはかなりの人数がおり一組だけではなく、なぜか別のクラスの女子もいた。

「人気者だな、一夏」

「・・・・・・・・本当にそう思うか？」

「ふん」

箒は一夏の隣に座っていたのだが不機嫌そうにしていた。大方、多くの女子に囲まれた一夏を見てやきもきしたのだろう。そして一夏は、なぜ箒が不機嫌なのか分からず首を傾げていた。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑一夏君と篠ノ乃優希君に特別インタビューをしました〜！」

メガネを掛けた女子生徒が優希達の前にやってきて食堂にいる全員に聞こえるように宣言した。すると一同は、オーと盛り上がった。

「あ、私は二年の薫子。よろしくね。新聞部副部長やってます。はいこれ名刺」

優希と一夏の二人は名刺を渡された。

「まずは織斑君ずばり、クラス代表になった感想をどうぞ！」

薫子は一夏にずっとボイスレコーダを向ける、その瞳は子供のように無邪気に輝かせていた。

「えーと……まあ、なんというか、がんばります」

「えー。もっといいコメントちょうだいよ。俺に触るとヤケドするぜ、とか！」

一夏のコメントに不満そうな薫子、どうやら新聞部はインパクトのあるコメントを求めているようだ。

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的!」

薫子の要求に返した一夏のセリフは昔の俳優の名台詞だった。

「じゃあまあ、適当にねつ造しておくからいいとして、次は篠ノ乃君、副代表就任の感想をどうぞ」

一夏の不満げな視線を傍目に薫子は優希の方にボイスレコーダーを向けてきた。

「え、えと、がんばります……」

「はい織斑君と同じようなコメントは受け付けませーん。ほらほらあと十秒以内に答えないと恥ずかしいコメントねつ造しちゃうぞ。じゅーう、きゅーう」

「え、え!？あの、そのっ、あわわっ」

薫子がカウントダウンを始めたので優希は慌てて何か言おうとするのだが何も思いつかず少し涙目になっておろおろとする姿を見た食堂にいた女子の殆どが。

( )( )(何?この可愛い生き物)( )( )( )

「はーち、なな、ろく、こ」

と心の中で呟いた。薫子は優希の反応を見て少し悪戯したくなりカウントダウンを少し早める。

「あ、あう〜」

「よん、さん、にい、い（シュツ）……あれ？」

優希の反応を楽しんでいた薫子、最後の一秒を数えようとした時に手に持っていたはずのボイスレコーダーが消えていた。どこにやったのだろうと辺りを探してみるとすぐに見つかった。

「先輩、いい加減にしてください。優希を困らせないでください。壊しますよこれ」

優希の姉、箒の手にボイスレコーダーが握られていた。箒はボイスレコーダーを壊すと言えばもう止めるだろう思っていたのだが薫子の反応は違っていた。

「ふふ、なんの！私のボイスレコーダーは百八つあるのだよ！！」

薫子は制服のポケットから新たなボイスレコーダーを全ての指の間に挟んで取り出しポーズを決めた。

「そうですか、なら」

メキメキメキッ

「後、百七つ……全部数えてあげます」

箒は握っているボイスレコーダーに力を入れ始めた。ボイスレコーダーのボディには罫が入り嫌な音を上げていた。

「あ、ちょっと待ってウソ、うそです、百八個あるなんてウソです。だから、あつ、らめええーーーーー!!!」

それから本気で壊そうとしていた箒を優希が宥めてボイスレコーダーは何とかボディに罫が入っただけで済んで中身のデータは無事だった。その時、箒はまた優希を困らせることをしたら今度は本気でやると言っただけで二度と優希を困らせないと薫子に約束させた。

「気を取り直して、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

と言っているセシリアであるが髪の設定に気合が入っているように見えた。

「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表、副代表を辞退したかというと、それはつまり……」

「ああ、長そうだからいいや。写真だけちょうだい」

「さ、最後まで聞きなさい!」

「いいよ、適当にねつ造しておくから。よし、織斑君に惚れたからってことにしよう」

「なっ、な、ななっ……!?!」

薫子はニヤニヤしながらそう言つとセシリアは一気に赤面した。だが、一夏はそれをセシリアは怒ったのだと思つて助け舟を出すことにした。

「何を馬鹿なことを」

「え、そうかなー？」

「そ、そうですね！何をもつて馬鹿としているのかしら！？」

助け舟を出したつもりが逆に怒られた一夏はなぜ怒られたのか分からず首を傾げる。そんな鈍感な幼馴染を見て優希は彼に恋する姉と友人が不憫に思えてきたのであった。

「だ、大体あなたは――」

「はいはい、とりあえず三人並んでね。写真撮るから」

「えっ？」

セシリアは意外そうな声を上げるのだが、その声には喜色を含んでいた。

「注目の専用機持ちだからねー、はいはい並んで並んでー」

一夏とセシリアの背を押し並ばせる薫子、優希もそれに着いて行く。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「？　なんだよ？」

「べ、別に、何でもありませんわ」

三人は一夏を真ん中にして並んだ、セシリアは一夏の隣に写れるので少し嬉しそうだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なんだよ、箒」

「何でもない」

二人の視線の意味に気づかない一夏に優希は溜め息を吐いたのであった。

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は？」

「え？えつと・・・・・・・・2」

「ぶー、74・375でしたー」

シャッターが切られる瞬間クラスメイト達が素早く優希達の回りに並ぶ見事な統率力と行動力である。優希は隣に来た箒を自分の位置と入れ替える、そしてパシャッとシャッターが切れる音がした、これで箒の隣には一夏が写っている。優希の恋する姉へのお節介であつた。

「なんで全員入ってるんだ？ていうか何で箒が隣にいるんだ？」

「・・・・・・・・／／／」

「あ、あなたたちねっ！」

「マーマーマー」

「セシリアだけ抜け駆けはないしょー」  
「ねー」

「う、ぐ・・・」

セシリアは文句を言おうとするがクラス全員に丸め込めようとするがセシリアは苦虫をかみつぶしたような顔になる、それをクラスメイト達はニヤニヤしながら見ているのであった。

「優希」

「ん？」

優希は何か飲み物を取りにいくと思いテーブルに向かっていると簿が話しかけてきた。

「・・・・・・・・ありがとう／／／」

「簿姉」

「なんだ」

「がんばれ」

「っ！？ああ！」

と頷くと箒は一夏のもとへ駆けて行った。

なんだかんだパーティーは十時過ぎまで続いた。優希は疲れて部屋に着くなり制服のままベットに倒れこんだ。

「あー、疲れたー」

このまま寝たいところだが、まだ新しい制服に皺がつくのがイヤなので起き上がりパジャマに着替える。

「でも、楽しいな・・・」

三年間、姉以外の人間と交流を持っていなかった優希には毎日が楽しくて仕方がなかった。パジャマに着替え終え制服をハンガーに掛け、優希はもう一度ベットにダイブした。

「明日はどんなことがあるのかな、そうだユニコーンの新しい武装のデータ纏めなきゃな」

この部屋にルームメイトがないの優希は目覚ましをセットしたの確認し、電気を消しベットに入る。

「それから、それか・・・ら」

するとだんだんと目蓋が閉じていき。

「・・・スー、スー」

優希は眠りについた、首に掛けたユニコーンが少しだけ光る、それはまるで優希にお休みと言っておるようであった。

## 第九話（前書き）

地震の被害がすごいですね。

## 第九話

「織斑君に篠ノ乃君、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

朝。優希と一夏が席に着くと近くの席の女子が話しかけてきた。

「転校生？今の時期に？」

「転校生……」

一夏は転入生のこと疑問を持ったのだが、優希には昨日会った鈴音のことだとすぐに分かった。

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

こちらの会話を聞いていたのかセシリアが腰に手を当てたポーズを決めながら話しに入ってきた。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐほどのことでもあるまい」

先程まで自分の席に座っていた篤も優希達の席に近づき話に混ざる。

「どんなやつなんだろうな」

「気になるの？」

「ん？ああ、少しは」

「ふん・・・今のお前に女子を気にしている余裕はあるのか？来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「そう！そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実践的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのわたくしが務めさせていただきますわ。なにせ、専用機を持っているのはまだクラスでわたくしと一夏さん、それに優希さんだけなのですから」

セシリアは一夏の訓練に自分が付き合うと言いつつ『だけ』という部分を強調する。だが、その通りで他のクラスでは、訓練機の申請と許可、整備に丸一日かかってしまうので、手早く模擬対戦するには専用機持ちのセシリアか優希に頼むのが効率がいいのだが。

「でも今、俺の白式、修理中だからー」

「あ・・・」

一夏の専用機『白式』は筈の暴走による攻撃で損傷し、只今絶賛修理中なので、今の一夏は訓練するには、一般生徒と同じで訓練機を借りなくてはいけない身なのである。そのことをセシリアは忘れていた。

「篠ノ乃さん・・・」

「・・・」

一夏と二人きりになれるチャンスが潰され、セシリアは箒の方を見るが箒は目を逸らす。

「まあ、クラス対抗戦までには修理は終わるだろ。なあ、優希」

一夏は優希に尋ねると、優希は白式の損傷具合を思い出しながら頭の中で計算して答える。

「うん、何もなければ来週には直ると思うよ」

「そうか。まあ、やれるだけやってみるか」

と、一夏は軽く気持ちで言ったのだが周りの反応は違った。

「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていただきませんか！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

「織斑君が勝つとクラスみんなが幸せだよー」

「織斑君、がんばってねー」

「フリーパスのためにもね！」

「目指せ、優勝！」

セシリアと箒は一夏の弱気な発言を叱咤し、クラスメイト達は一夏を応援する。ちなみにこのクラス対抗戦で一位のクラスには優勝

商品に学食デザートが半年間無料になるフリーパスが配られるようになってる。

「今のところ専用機を持っているクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

一夏は周りの空気を読んで「おう」と返事をする。すると――

「――その情報、古いよ」

教室の入り口から声がした。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単に優勝できないから」

腕を組み、片膝を立ててドアにもたれかかっている少女がいた。

「鈴・・・・・・・・？お前、鈴か？」

「あ、鈴だ」

それは先日、優希が出会った少女、鈴音であった。優希はなんとなく予想できていたので反応は薄かった。

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

ふっと小さく笑みを漏らす鈴音、つられてトレードマークのツインテールが軽く揺れる。

「何格好付けてるんだ？ すごい似合わないぞ」

「んなつ・・・！？ なんてこと言うのよ、アンタは！」

格好良く決めようとした鈴音だったのだが、一夏の一言ですぐに元の調子に戻されてしまった。

「おい」

「なによ！？」

鈴音は声をかけられて後ろへ振り向く、するとバシッ！と鈴音の頭に強烈な一撃が加えられた。そこには、一組の担任、鬼教官千冬が立っていた。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん・・・」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません・・・」

鈴音は千冬に怯えながらドアからどく。

「またあとで来るからね！ 逃げないでよ、一夏！」

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

千冬の睨まれて鈴音は走って二組の教室に戻っていった。

「っていつかアイツ、IS操縦者だったのか。初めて知った」

一夏がそう呟いたらクラスメイト達が一夏の席に集まった。

「・・・一夏、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだったな？」

「い、一夏さん！？あの子とはどういう関係で・・・」

一夏はクラスメイト達の質問攻めにあうのだが、彼女達はこの教室に鬼教官がいるのを失念していた。ゆえに

バシンッバシンッバシンッバシンッ！

立っていた女子達は全員、千冬の出席簿で叩かれた。

「席に着け、馬鹿ども」

「バシンッバシンッは、はいっ！！」「バシンッ」

「全員着いたな・・・よし、それでは始めるぞ」

千冬の一声で女子達は大急ぎで自分の席に戻っていく。全員が席に着くのを確認し今日の授業が始まったのであった。

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

「なんでだよ……」

「まあまあ、箒姉もセシリアさんも落ち着いて」

昼休みに入ると箒とセシリアが一夏に文句を言っていた、そして優希はその二人を宥めていた。

何故怒っているのかというと。この二人は午前中の授業の間、新たな恋のライバルの登場で集中していなかったために麻耶に注意を五回され、千冬の出席簿で三回叩かれていたのだが、その原因であるの一夏は何故自分が文句を言われなくてはいけないのか分からず呆れていた。

「まあ、話ならメシ食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」

「む……ま、まあお前がそう言うのなら、いいだろう」

「そ、そうですね。行って差し上げないこともなくってよ」

「はやく行こー、僕お腹すいちゃったよー」

「ああ、行こうか」

ピンポンパンポン

一夏達が学食へ向かおうとした時、校内放送が流れた。

『一年一組、篠ノ乃優希君、職員室まで来てください。繰り返しま

す一年一組、篠ノ乃優希君……」

「え？」

「優希、呼ばれてるぞ」

「あ、うん」

「優希何かしたのか？」

「うーん、何もしてないけど、とりあえず行ってくるよ」

「ああ、じゃあ先に行ってるぞ」

「うん」

一夏達と別れ、優希は職員室に向かっていった。

「失礼しまーす」

「あつ、篠ノ乃君よく来てくれました」

職員室に入ると真耶が優希の前に来たのだが、何故か真耶は疲れた顔をしていた。

「山田先生、大丈夫ですか？」

「え、ああ、大丈夫ですよ。」

「そ、そうですね」

「山田君、篠ノ乃は来たか」

「あつ、織斑先生、篠ノ乃君来ました」

「そうか」

優希は首を傾げていると千冬が職員室の奥からやってきた。

「あの、織斑先生何かあったんですか？」

「ああ、少し困ったことになってな」

「困ったことですか？」

「そうだ、実は織斑のＩＳの修理を頼んでいた研究所でトラブルが起きてな」

「トラブル？機械類ですか？」

「いや、そういう類ではなくてな」

「ええと……」

「？」

優希が原因を聞くと千冬と真耶は言いにくそうに話した。

「そのだな……トラブルというのは」

「ス、ストライキなんです・・・」

「・・・・・・・・はい？」

「研究所の職員達が待遇にかなり不満を持っていたらしくてなそのせいでストライキを起こしてな」

「それで白式の修理ができなくて困っているんです」

二人から事情を聞いているうちに優希は嫌な予感がしてきた。

「えーと、もしかして僕を呼んだのって・・・・・・・・」

「そうだ、お前に白式の修理を依頼する」

「あの、なんで僕なんですか？普通だったら学園の技術者の方がやるじゃないですか」

「ああ、普通ならそうなのだがな」

「ええと、簡単な修理は可能なのですが今回はダメージレベルがDまでに達していると学園のスタッフでは修理できなくて」

「そこで、お前というわけだ。お前なら白式の修理ができるだろ」

「できるだろ、と言われましても白式の状態次第だと思いますけど」

「そうだな、山田君」

「はい、篠ノ乃君、どうぞ」

真耶はクリップボードに挟んだ資料を取り出し優希に渡す。  
優希は資料をじっくりと読み白式の破損箇所を把握し自分にできるか考える。数分考えて優希は口を開いた。

「可能だと思います。このくらいだったら僕でもできると思います」

「では、引き受けてくれるか」

「・・・はあ、わかりました。お引き受けします」

「そうか、機材なら学園にあるのでできるだろう、部品はこちらが用意する。時間が必要なら授業の時間を使ってもいい」

「はい、わかりました」

「では、頼んだぞ」

「失礼します」

優希は千冬と真耶に礼をし職員室を後にした。

「はあ、これからしばらく忙しくなるな、えーと、どこから手をつけようかな」

優希は真耶にもらった資料を見ながら廊下を歩いていく。

「やっぱり装甲は全部変えなきゃいけないな、フレームも若干歪んでるし、ここも・・・」

とブツブツと呟きながら歩いていくうちに優希は教室に戻っていた。そのまま席に着き資料に集中しているうちに昼休み終了のチャイムが鳴り、そこで優希は気が付いた。

「あつ、お昼ご飯・・・」

集中しすぎて昼食をとること忘れていた。

急いで何か買ってこようと思ったが授業まで後、数分だったので優希は諦めて空腹のまま午後の授業を受けるのだった。

放課後、一夏達と一緒に訓練をしないかと誘われたがISの整備があると言って断った。その時、優希は一夏に気を使われるのがイヤで白式の修理のことは伏せておいた。

一夏達と別れた後、白式が保管してある整備室に向かうと何故か真耶と見知らぬ女性が数名いた、誰かと尋ねると学園のスタッフだと紹介された。一人では大変だろうと千冬が手配してくれたらしく優希はこの時千冬に感謝した。

この日は学園内にあるパーツでできる範囲の修理を行った、一人でやると時間の掛かる作業もあったがスタッフが数名いてくれたおかげで作業は順調に進み、七時にはこの日できる作業は全て終わらせてしまった。（この時、優希が笑顔で感謝するとスタッフの女性たちは鼻血を垂らしながらどこかへ走っていつてしまった）

作業も終わったので優希は遅めの夕食をとった後、部屋に戻ろうとして一夏と第の部屋の前を通った時にドアの向こうから怒鳴り声が聞こえてきた。

「最つつつ低！女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けないヤツ！犬に噛まれて死ね！」

ボタンツ！と勢い良くドアが開き大きなボストンバックを持った鈴音が出てきた、その目には涙が溜まっていて、起こっているような悲しんでいるような表情をしていた。どうかしたのかと優希は鈴音に声を掛けた。

「り、鈴、大丈夫？」

「ゆ、優希？だ、大丈夫よ、なんでもないわ」

「なんでもないって」

「ホントなんでもないからっ、じゃあね！」

「あ、鈴！？ちょっと待って」

優希の制止を振り切って鈴音は走って行ってしまった。

（また、一夏が何か言っただろうな・・・本当に鈍感なヤツなんだから）

優希は一夏に話を聞こうと思ったが止めた。今日ではなく明日聞くことにして、優希は自室に戻った。

（何もないといいんだけど、無理だろうね・・・はあ）

優希は鈍感でトラブルメーカーな幼馴染のこと思い浮かべため息

をついた。

翌日、生徒玄関前廊下にクラス対抗戦の日程表が大きく張り出されていた。

一組の一回戦の相手は二組、鈴音のクラスであった。

## 第九話（後書き）

更新遅れてすみません。（土下座）

三人称の書き方が難しく筆が進めませんでした。

次回、優希の一人称を試してみようと思っています。

感想、アドバイス等ありましたらよろしく願います。

## 第十話（前書き）

更新遅くなってしまいましたすみません。

前回の予告どおり書き方を変えてみました。一人称の方が書きやすいですね、でもクオリティがさらに低くなってしまいました・・・・o r z  
でもがんばったよ。

設定の変更のお知らせがあります。わたくしはユニコーンのワンオフ・アビリティーを《NT・D》としていましたが、この世界にはNTはいないだろうと指摘されましたので《NT・D》を《IS・D》に変更します。

## 第十話

クラス対抗戦当日、僕はユニコーンを装着して第二アリーナにいた。正面には二組の元代表の人がラファールを装着している。

なぜ、こうなっていたのかというと、今回の対抗戦では副代表も試合をするようになったんだ。でも一番最初の試合なのは緊張するよ。セシリアさんの時より観客席の人数も多いし……一夏達も応援してくれたし、うんっ、がんばろう！

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに従って僕と二組の人は空中で向かい合う。僕は一回深呼吸をして開始の合図を待つ。

『それでは両者、試合を開始してください』

ビーツと開始のブザーが鳴った、鳴り終わると同時に僕と二組のラファールは動き出す。二組の子はサブマシンガンを展開してこちらを狙ってきた。

『当たれっ！』

ダダダダダッ！！

断続的に発射される弾がこちらに迫ってくるが僕は左に移動して回避する。加速と減速を織り混ぜた回避運動しながら僕はユニコーンに登録されていた武器ビームマグナムライフルを展開してラファールに狙いをつけトリガーを引く。

キューーン……バシューーンッ！！

銃口に収束したエネルギーが一気に放たれる。相手のラファールは慌ててビームを避けたけどそれだけじゃだめだよ。

『えっ！？な、なんでこんなにシ、シールドエネルギーが減ってるの』

驚くのはいいけど動きを止めるのはだめだよ。僕はライフルを収<sup>クロ</sup>納して左のビームトンファアからサーベルを取り出して接近する。

『え？しまった！？』

「遅いつ！」

二組の子は僕の接近に気づいて慌ててシールドを構えて防御体勢に入るけど僕はそのままビームサーベルを一閃する。シールドによって攻撃は防がれたけど僕はユニコーンのパワーに任せてサーベルを振りぬいて体勢を崩させてそこに蹴りを入れる。

「でえいつ！！」

『きゃあっ！？』

僕の蹴りで吹き飛ばされた二組の子は地面に激突する、その衝撃でシールドエネルギーが0になり、アリーナにブザーが鳴り響いた。

『試合終了、勝者一組』

試合終了のアナウンスが流れると客席から歓声が溢れ出した。・・  
・勝ったのはいいけどは、なんか恥ずかしい、客席からなんか「か

わいいー」とか聞こえるし、普通はカッコイイじゃないかな？

『両者、ピットへ戻ってください』

僕はアナウンスの指示に従って急いでピットに戻った。すると一夏にセシリアさん、箒姉がいた。

「お疲れ、優希」

「お疲れ様ですわ、優希さん」

「優希、よくやった」

「うん、ただいまー」

ユニコーンを待機状態にしてみんなもとに駆け寄ると箒姉が頭を撫でくれた、気持ちいいけど恥ずかしいからやめて。

箒姉は不満そうだけど手を離してくれた、え？撫でたりない、後で撫でさせてあげるから我慢して。

「それにしても、凄かったなああの武器」

「そうですね、掠ただけで二組のラファールのシールドエネルギーが殆どなくなっていましたね」

「そうそう、優希あれなんだっただんだ？」

「えーとね」

「お喋りはそこまでだ、織斑」

「え、千冬姉？」

僕は一夏達にビームマグナムライフルの説明をしようしたときスピーカーから流れた千冬さんの声に止められた。

「織斑先生だ、馬鹿者。お前の番ださつさと準備しろ」

「は、はい」

千冬さんに急かされ一夏は白式を展開してカタパルトに脚部を固定する。

「まさか最初から鈴が相手か」

何かばやいている一夏の目にウィンドウが開きISの情報が表示されて山田先生が説明する。

『あちらのISは《甲龍》織斑君と同じ近接格闘型です』

へえ、あれが鈴のISかアンロックユニット非固定浮遊部位の形状は球体か・・・スラスター類ではなさそうだし何かあるな。

「わたくしの時とは勝手が違いましたよ、油断は禁物ですわ」

「硬くなるな、練習の時と同じようにやれば勝てる」

箒姉とセシリアさんが一夏にアドバイスする、僕もしておこう。

「一夏、甲龍アンロックユニットの非固定浮遊部位には気をつけてね」

「あれで殴られたらすげえ痛そうだな」

そういう意味じゃないんだけどなー、まあいいか。

ガコンッ！と音が鳴りゆつくりとピットゲートが開いていく。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

一夏はカタパルトで勢いをつけてゲートから飛び出していった。空中で何か話し合っているけどこちらには聞こえない何話してんだろ？

『それでは両者、試合を開始してください』

ビーツとブザーが鳴り、一夏と鈴は動き出し試合が始まった。

白式の『雪片式型』と甲龍のでかい青龍刀がぶつかり合い火花が散る、何合か切り結んでから鈴は青龍刀をもう一振り取り出して連結した、鈴の繰り出す連続攻撃に防戦一方になる一夏、やっぱり練度が違うな。

一夏はいったん鈴から離れようとすると甲龍の非固定浮遊部位アンロックユニットの装甲がスライドして球体の中心が光ったと思うと一夏を掠ってアリナーナのバリアにぶつかり爆発した、あれってもしかして……今度はまだもう片方の非固定浮遊部位アンロックユニットの球体が中心が光ると一夏は見えない何かに吹き飛ばされて地面に衝突した。やっぱりあれって……

「なんだあれは……？」

「『衝撃砲』だね（ですわね）」

モニターを見ていた箒姉が呟くと僕がセシリアさんが同時に答えた。

僕が説明すると難しくなりそうだからセシリアさんに任せた。

「空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出すブルーティーズと同じ第三世代型兵器ですわ」

セシリアさん、説明を僕も補足する。

「しかもあの衝撃砲ほぼ射角に制限が無いみたいだね」

「ということはつまり死角が……」

「そう、死角はないですね。砲弾自体は直線にしか進まないけど砲弾が見えないから避けるのは難しいだろうね」

「一夏……」

て、説明したのはいいけど箒姉は聞いてなかった、まあいいんだけどさ。モニターを見ると一夏は衝撃砲を避けながら素早く動いて攪乱している一夏何かやろうとしてるのかな？

攪乱し続けて鈴に隙ができる、一夏は接近して攻撃しようとしたとき『何か』が遮断シールドを突き破ってアリーナの中で爆発が起きた、なにが起きたんだ！？

「何、何がありましたの！」

「い、一夏……」

箒姉とセシリアさんはパニックになっているけど山田先生は冷静に分析して報告する。

「システム破損、何かがアリーナの遮断シールドを貫通してきたようです！」

「試合中止！織斑、凰直ちに退避しろ！」

千冬さんがすぐに一夏達に退避するように指示を出したけど一夏と鈴は退避しようとしなくて何か話し合っている、そんなことより早く退避しなよ！そんなこと思っていると言っている鈴に向かって熱線が放たれた、けど一夏が鈴を抱きかかえて何とか無事だった。

「今のビーム兵器？しかも遮断シールドを破るほどの威力の」

爆炎が晴れると乱入者の姿が徐々に見えるけど、なにあのIフルスキン  
S『全身装甲』の上にニメートルはある腕、かなりの異形だ。

一夏が呼びかけているようだけど返事は無いみたいだ、まあ当たり前だよねその為に顔隠してんだから。

「織斑君！凰さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生たちがISで制圧に行きます！」

山田先生が一夏達に指示を出したけど二人はそれを無視してISと戦うと言い始めた、危険だから止めさせようと山田先生が説得しようとしたけど敵ISが一夏たちに仕掛けてきて通信が切れてしまった。

「もしもし！？織斑君聞いています！？凰さんも！聞いてますー！？」

プライベート・チャネルだったら声を出す必要も無いんだけどな  
ーだめだ山田先生も完全にパニックッてそのことを忘れている。

山田先生・・・危ない人にしか見えませんよ。

「本人たちがやると言っているのだから、やらせてみてもいいだろう」

おおっ、さすが千冬さん、冷静ですね。片手にはコーヒーの入った紙コップが握られている。

「お、お、織斑先生！なにのんきなことを言ってるんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

千冬さんはコーヒーに砂糖を入れようとするのだけど、でもそれ  
って・・・・・・・・

「・・・・・・・・あの、先生。それ塩ですけど・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

千冬さんもかなり動揺してましたね。なんだかんだで千冬さんブラコンだもんな・・・・一夏が心配なんだろうな。山田先生がそのことを声に出して言ってしまう塩入りのコーヒーを飲まされていた、言わなくてよかった。

あれっ？箒姉どこ行くつもりなんだろ千冬さんたちは気づいてないし・・・・・・・・とりあえずついて行こう。

あの、箒姉？そこは中継室だけど？ドアを開けて審判とナレータ

ーの人と殴って気絶させた、ちよっ、ホント何してんの!?

「一夏あつ!」

マイクに向かって大声で一夏の名前を叫ぶ箒姉、止めさせないと!

「箒姉、何やってるの危ないよ!」

「男なら・・・男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする!」

「箒姉!一夏が心配なのはわかるけど危険だよ!」

「放せっ!優希!」

「あーもうっ、いいから・・・っ!?!」

箒姉の手を引っ張って中継室から出ようとしたときあのISが右腕をこちらに向けているのが見えた。ヤバイ!

『箒!優希!逃げろっ!!!』

一夏が逃げるように言うけどここには箒姉が気絶させた審判とナレーターの人がいる、それにもう間に合わない、だったら!

「っ!!!」

「ゆ、優希!?!」

ユニコーンを緊急展開すると中継室の窓を突き破って外に出る、

シールドを両腕に展開して全身が隠れるように構える、すると敵ⅠSから放たれたビームが遮断シールドを破り凄い衝撃と熱量が僕を襲う、後ろに下がりそうなるけど出力を上げてその場に留まる。

「ぐうっ……!!」

「優希!!」

篝姉の声が聞こえるけど答える余裕はないシールドがビームの熱で溶け出しユニコーンのシールドエネルギーも徐々に減っていく、歯を食いしばって耐えているとようやくビームの照射が終わった。前を見ると遮断シールドに穴が開いていた。

『篠ノ乃、行くな! 戻れ!』

千冬さんが止めるけど僕はシールドを捨ててアリーナに飛び込んだ。

「ゆ、優希、大丈夫なのか?」

「ゆ、優希、なんでここにいるのよ!」

「う、うん、大丈夫だよ」

僕がアリーナに入ってきて一夏と鈴が驚いていたけど僕を見るとなぜか顔を青くしていたどうしたのかな?。

「お、おい、優希。お、怒ってるのか?」

「……うん、僕、怒ってるよ」

だってアイツ僕ごと姉を殺そうとしたんだよ、許せるわけ無いよ。

「お、落ち着け、優希」

「そ、そうよ、とりあえず、落ち着きましょう、ねっ」

ここまでキレたのいつ以来かな？まあいいや、とりあえずアイツを潰そう。

僕の怒りに呼応したのかユニコーンの装甲の間から赤い光が漏れ始める。ウィンドもノイズが走り画面の表示が変わって《IS-D》と表示された。するとアイツは僕を危険だと判断したのか右腕をこちらに向けてビームを撃ってきた、僕はそれを空中でバク宙するように回転して回避する、その時ユニコーンの装甲がスライドして変身した。

「ま、また、変身した」

「えっ！？形が変わった！」

一夏と鈴は驚いていた、そしてアイツはビームを連射してきた、それを僕は三枚目のシールドを展開して攻撃を防ぐ、ビームは直撃したけどシールドには一つの傷もついていなかった。ユニコーンのシールドエネルギーも減っていない、僕はバックパックから展開されたビームサーベルを引き抜いて加速してアイツに接近する。

「はああああっ！！」

「！？！？！？」

ビームサーベルを振り下ろしてアイツのでかい左腕を切ったけど浅い、そのまま返し刃でもう一度攻撃をするけどかわされる、残った右腕で殴りかかってきた僕はヘッドギアの両端に付けたビームバルカンをアイツの顔目掛けて撃つ、けどアイツは首を傾け攻撃を避けそのまま殴りかかってきた。僕は急いで距離をとって回避する・・・アイツ何かおかしい。

「一夏、アイツって・・・」

「あ、ああ、アイツ無人機かもしれない」

「無人機・・・」

束姉からコアのことについては教えてもらわなかったから詳しくは知らないけど、そんなことはありえないはず・・・でもアイツが無人機ということは。

「一夏」

「な、なんだ？」

「【零落白夜】を使えるだけのエネルギーはまだ残ってる？」

ヤツが無人機なら遠慮する必要はない。このメンバーの中で一番の攻撃力を白式ならヤツを倒せる。

「・・・ああ、残ってるぜ、一回分な。どうやら同じ考えみたいだな」

「一夏も同じこと考えていたみたいだね。だったら僕のことは一っ。」

「一夏、僕が何とかアイツに隙を作るからその時に……」

「ああ、【零落白夜】をやツにぶち込む！」

「ちよっ、優希アンター人でアイツと戦うつもり！？なに無茶なことやってんのよ、あたしも一緒に……」

「ダメだ」

「一夏！？なんでよ！」

「鈴には頼みたいことがあるんだ」

「え？」

「くるよ！」

「「っ！？」」

アイツが痺れを切らしてビームを撃ってきたところを散開して回避する、僕はユニコーンのスピードを上げてヤツの周囲を飛び回って攪乱する、体に凄いいGがかかって息が苦しくなるけど無視して飛び回る。

「???!??」

ヤツは何回か攻撃してきたけど僕にはまったく当たらない、ユニ

コーンのスピードにセンサーが追いつかないためかヤツの動きが鈍った、今だ!!

バックパックについているビームサーベルを二本引き抜いてヤツの背後に回る、ヤツは振り向こうするけどもう遅い、僕は両手に持ったビームサーベルをヤツのスラスタに突き刺すけど振り返ったヤツに殴り飛ばされた、でもこれでヤツの動きは鈍る。

「一夏あつ!!」

「おうっ! 鈴!」

「ああもうっ……!! どうなっても知らないわよ!」

鈴がそう叫ぶと一夏に衝撃砲を撃った、てっ、なにしてんの!? 鈴の衝撃砲を背中に受けると一夏は凄い勢いで加速した、そうか衝撃砲のエネルギーを利用しての瞬間加速か、イクニッショーン・フーストこれなら白式のエネルギーを使わないで加速できる。でも無茶するなー、あれ凄く痛そう。

「……オオオッ!」

一夏は【零落白夜】を発動させた雪片式型を振り下ろしてヤツの右腕を切り落とした。けど残った左腕で殴られて吹き飛ばされた、ヤツはそのままビームをチャージを始める。

「一夏っ!!」

箒姉と鈴が叫ぶけど大丈夫、だってもう援軍は来ているから。

「……狙いは?」

『完璧ですわ!』

セシリアさんの声が聞こえるとブルー・ティアーズの一斉射を受けてヤツは小さな爆発を起こして落下した。

これで終わったはずなのに嫌な予感がしてヤツの方を見る、セシリアさんの攻撃で貫通したんだ動けるはずが・・・っ!動いてるしかも残った左手が最高出力の状態になってる、一夏たちはまだ気づいていない、くそっ!

「一夏っ!」

「えっ?うおっ!?」

僕は一夏を突き飛ばしてビームトンファアを起動して、ヤツに突っ込む。

「「「ゆ、優希(さん)!!」「」「」

「うおおおっ—————!!」

発射されるビーム、僕はためらいなく光へと飛び込む。

視界が真っ白になる、腕を真っ直ぐに伸ばしヤツにビーム刃を突き立てたところで僕の意識は途切れた。

えーと、優希です。目が覚めると前にも見た知っている天井、保

健室でした。

ふと横を見ると鈴が寝ている一夏にキスしようとしていた・・・  
・うん、見なかったことにしよう、もう一回寝よう。

あっ、一夏が起きた。鈴、残念だったね。そして箒姉にセシリアさん、よかったね一夏の唇は守られたよ。なんか二人が話し始めた、少し気になるけど聞いちゃ悪いよね、寝よう・・・zzzz

「一夏さ・・・具合の・・・」

セシリアさんの声が聞こえる・・・何か騒ぎ出した。

「私だっ・・・幼馴染・・・だ！」

あ、今度は箒姉の声も聞こえる・・・。

「一夏・・・誰に」

眠ろう、ねむる、ねむ・・・っ！

「うるさー－－－－－－－－い！」

「「「「「ゴメンなさい・・・」」」」

もっつ、もめるなら別の場所でやってよね！

ところ変わってIS学園地下五十メートル。機密ラボで千冬と真耶は機能停止したISを解析していた。

「織斑先生、あのISの解析結果が出ました」

「ああ。どうだった？」

「はい。織斑君がにらんだ通り無人機でした。しかもコアは登録されていなかったものでした」

「そうか」

ISの遠隔操作と独立稼働、それはどこの国も完成していない技術である。

「どのような方法で動いていたかは不明です。篠ノ乃君の最後の攻撃で機能中枢が焼き切れたので修復は不可能だと思います」

「・・・・・・・・・・」

「織斑先生？」

麻耶が呼んでみるが千冬はディスプレイの映像を見続けていた。

## 第十話（後書き）

はい、第十話でした。

ようやく原作一巻が終わりました。これでシャルとラウラが書けるぞ！

一人称にしてみましたかどうか？がんばってはみたのですが……前の書き方が良かったという方がいましたら、コメントを下さい。

改善できるよう努力してみます。では

## 第十一話（前書き）

早めに書きあげましたので投稿できましたー！。  
原作二巻目に入ります。  
では、十一話です。どうぞ。

## 第十一話

クラス対抗戦から月日は流れて六月になりました。

今僕はIS学園の外・・・昔住んでいた篠ノ乃神社の近くをうろついていた。

「うわゝ、懐かしいな」

小学五年の頃に引越して以来だな。あつ！あそこの駄菓子屋なくなってる、残念だな。

なんで、町を歩いているかというと、一夏と鈴の話を聞いていたなんか昔いた場所を見なくなった、ただそれだけ。ついでに神社に寄って雪子おばさんに挨拶しておこうと思ったから。

「でも、駅前もそうだけど、随分と変わったな」

四年間、たったそれだけの時間で思い出の場所などが消えていく・・・悲しいな。

グ~~~~

なんて考えていたらお腹が鳴った、携帯の時計を見ると午後の一十二時三十分、歩き回っているうちにお昼の時間になっていた。そりやお腹減るよね。

「うゝん、少し歩くけど駅前まで戻ろうか」

頭の中の地図を引っ張り出して駅までの道を探る、うろ覚えけど多分大丈夫だろう。

先程まで通らなかった道を歩いていく。ん？なんかいい匂いがする、どこだろう？辺りを見回してみる、ここの辺りは通ったことがないからよく分からないけど匂いのするほうへ行ってみると、少し古臭い食堂があった、匂いはここからみたいだ。

「五反田食堂？入ってみようかな」

こういうところ案外美味しかったりするんだよね♪暖簾を潜りドアを引いて中に入る。

「いらつしゃい、一人ですか？」

「あ、はい」

「じゃあ、カウンター席でいいですか？」

「はい、いいですよ」

「じゃあ、こちらです」

中に入るとうちの母さんと同じくらい年の女性が来て席に案内してくれた、席に着くとお冷とお絞りを出す。カウンターの向こうの厨房を見ると中華鍋を二つ振る筋肉隆々のおじいさんがいた……すごいな。

「ご注文は何にいたしますか？」

「あつ、えーと」

なににしようかな？色々あって悩むな……取り合えずなんか壁

にデカデカと張られているやつにしてみよう。

「じゃあ、業火野菜炒めとライスの中を」

「はい、業火野菜とライス中ですね、少々お待ちを」

女性は厨房に行つて注文を伝えるに行く、注文を聞いたおじいさんは凄い量の野菜を刻み、中華鍋に放り込んで炒め始めた。それにしても凄いな、あの重い中華鍋をあんな簡単に振り回すなんて。

出来上がるのを待っていると入り口が開くと、同年代くらいの赤毛の女の子が入ってきた、ここの娘さんかな？

あ、また誰か来た、さっきの女の子と同じ赤毛だ、兄妹かな？後ろにもう一人いるみたいだけど同じ兄妹なのかな？

「へい、業火炒めとライス」

「あ、どうも」

目の前にドンツと皿に盛られた大量の野菜炒めとライスが置かれる。おお、美味しそうだ。それじゃあ、割り箸を取って手を合わせ  
て……。

「いただきま「優希？」……す？」

なんか聞き覚えのある声だな……後ろを見ると。

「あれ？一夏」

「あ、やっぱり優希だ。何やってんだよ」

「なにつて、ご飯食べようとしてんだけど」

なんでここに一夏がココにいるんだ？確か実家の様子を見に行く  
って言ってたけど。

「そうなのか？」

「おい、一夏、この娘誰だよ！紹介しろ！」

「お、落ち着け、弾」

赤毛の人が一夏を激しく揺さぶってるけど、今、子が『娘』って  
聞こえたような……

「あ、失礼、俺は五反田 弾って言います。一夏とは中学の頃から  
の友人ですっ！」

「えっ、あ、はい」

赤毛の人、弾と言う人が凄い勢いで自己紹介してきた。ちよっ、  
顔近いつて。

「あー、弾」

「なんだよ！一夏、俺は今大事な」

「えーと、優希は男だぞ」

「話を……は、男？」

弾って人の動きが止まった。ていうか、店にいる全員の動きが止まってる厨房のおじいさんも鍋を振る動きが止まってる……焦げますよー。それにしても僕ってそんなに女に見えるのかな？

「あ、あははははは。な、なに言ってるんだよー夏、どこからどう見ても女の子じゃないか。男？寝言は寝てから言えよ」

「そ、そうですよー夏さん、なに冗談言ってるんですか。……こんなに綺麗な人が男なわけじゃないじゃない」

あ、信じてない。女の子方は小声で何か言ってる。

「はあ、優希……見せてやれ」

「あ、うん。えーと……はいこれが証拠」

生徒手帳を兄妹に差し出す、性別の欄をよく見てねー。

「……………」

「うそ……………ホントに男……」

あー、二人共固まっちゃったそんなにショックだったの？

「だから言っただろう、男だって」

ん？なんか焦げ臭いな……おじいさん、鍋こげてますよー。

「神……のバ……ろう……」

「ん？どうしたんだ弾？」

弾さん？の体が震えている。寒いのかな？

「神様の・・・・・・・・」

「弾？おい弾」

徐々に震えが大きくなる。だ、大丈夫かな？

「神様のバカヤローーーーーー！！！」

弾さん？は泣きながら走ってどっか行ってしまった。えーとこれって僕のせい？

「あー、まあ、気にするな」

赤毛の女の子も固まったままだし。

「おっ、ホントだ。おい、蘭、しっかりしろー」

赤毛の娘は蘭って名前なんだ、取り合えず蘭っていう子は一夏に任せて野菜炒めを一口・・・・うん、少し冷えちゃったけど美味しい。おじいさん、いい仕事しますね。

おじいさんは「ありがとよ」とぶっきらぼうに答えてまた鍋を振る、今度は回鍋肉ホイコーロが美味そうだなー。

「納得いきませんっ、こんな綺麗な人が男なんて！女として！」

うわっ！？びっくりした！

「お、おい、どうしたんだよ蘭？」

「あなたが男なんて私には信じられません！もっと確実な証拠を見せてください」

「えっ？いや、生徒手帳見せましたよね」

「手帳なんて偽造できます！」

「えー」

いや、IS学園の生徒手帳は偽造なんてできないよ・・・ダメだこの子、パニくって冷静さが無くなってるよ、どうしよう・・・  
・あつ、そうだ。

「失礼」

「えっ、ちよっ？」

蘭って子の右手を掴んで僕の胸に当てる、周りの人達がざわめく、なに期待してんの？

で、この子は僕の胸を探るように触る、いやそんな丹念に探しても女性にある物はないよ？だって僕は男なんだから。

時間にして二分くらいかな？蘭って子は僕の胸を触るのを止めた、やっと分かってもらえたかな？すると彼女は手を下ろしてうつむいてしまった、あれ？

「不公平よ・・・」

拳を握り締めてワナワナと震え始める。あれ？なんかデジャヴュ。

「神様のバカーーーーーー！！！」

「え？あ、ら、蘭！？」

ああ、弾さんと同じように走り出してしまった、やっぱり兄妹だったんだー。一夏もあの子の後を追って行った。席に着いて野菜炒めをパクリと一口、やっぱり美味しいなあ。

黙々と食べて完食した・・・美味かったー。

「ごちそうさま。すみませーん、お愛想お願いします」

「あ、はい」

先程の席に案内してくれた女性が来て会計を済ませる。うん、安いね、あの量と味でこの値段また来よう。

「ありがとうございましたー」

さて、学園に戻ろうかな。帰ったらユニコーンの武装製作の続きをしよう。・・・さて、携帯のGPSを起動して駅までの道を探ろう、まずはそこからだ。

休日も終わって月曜日の朝、クラスメイトのみんなはISスーツのカタログを見ながら談笑していた。

なんでカタログを見ながら話しているのかというと来週からスーツの申込期間が始まるからである、一応みんな学園指定のスーツは持っているけど、今回申し込むスーツは個人に合わせた機能のスーツを買う為であるらしい。まあ機能もそうだけどみんなは、色やデザインの方基準に選んでいるらしい。

まあ、女の子だからね、オシャレがしたいよね。一回カタログを見せてもらったけど、いろんなデザインがあるんだよね、まあ、スクミズとワンピースを合わせたようなデザインなのは変わらないけどね。

「ねえねえ、ゆうーはどここの会社のスーツなのー」

「えっ？ ゆーゆうー？ って僕のこと」

「うん、そーだよー。で、ゆうーのスーツはどこ製なのー、おしえてー」

いきなり話しかけて来た、女の子。確か布仏 本音さんだっけ？  
一夏がのほほんさんって呼んでたっけ？

「あ、私も聞きたーい」

「篠ノ乃君のスーツもどっかのヤツの改造品なの？」

「織斑君のと少しデザイン違うよね？」

さすが談笑好きな女子高生、すぐに僕の席の前に集まってくる。

「えーと、僕のスーツだっけ？」

「そうそう、教えてー」

「詳しくねー」

みんな興味津々みたいだね。

「僕のスーツはこの会社のやつでもないんだ」

「え、どういうこと？」

これは話していいのかな？まあいいか。

「僕のスーツは、束姉から送られてきたやつなんだよね」

「え、束姉？」

「それって、篠ノ乃博士のことっ！」

「じゃあ、篠ノ乃君のスーツって博士の特製品！？」

「すごーい」

案の定みんな騒ぎ始めちゃったよ、やっぱ言わない方が良かったかな？

「いや、確かにスーツは束姉が作ったやつだけどそんな凄いものじゃないよ。ただ耐G性能が市販のやつよりいいだけだよ」

「えー、そうなの」

「最新技術の塊だと思ってたのに」

「つままないなー」

「あ、あはは」

なにを期待していたのみんな？

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます！」

千冬さんが入ると教室の空気が一気に変わる。やっぱりみんな千冬さんの出席簿アタックがイヤなんだろうな、あれ痛そうだし。

千冬さんが教卓に、連絡事項を言う。

「さて、今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のISスーツが届くまで学校指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもないものは、まあ下着でかまわんだろう」

いや、構いますよ！と、心の中で突っ込んだのは僕だけではないはずだ。千冬さんなら本気でやらせそうだけど、僕と一夏の男二人がいるのに、それはまずいでしょ。

ちなみにこのIS学園の指定水着はスクール水着、体操服はブルマである。時々この学園には男の邪な意思を感じることがある。（入学の為の物が届いた時、事務のミスで制服および全ての物が女子用の物だったときは本気で泣きそうになった）

「では、山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ」

眼鏡を拭いていた山田先生が慌てて千冬さんと場所を交代する。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！なんと二名です！」

「『『『『えええええつ！？』『』『』』」

山田先生の転校生の紹介にクラスが一気にざわめく、どうやら誰も知らなかったみたいだ。新聞部に入部した子なんてメモ取り出たよ、取材する気満々みたいだ。でもこの時期に転校してきたってことは代表候補生ってことかな、でもなんで分散させないでうちのクラスに集中させるのかな？

「失礼します」

「・・・・・・」

ドアが開いて二人が入るとざわめきがピタツと止まる。

一人は制服を軍服風に改造してある銀髪で眼帯をした女の子。問題はもう一人の方。

だって・・・・・・男子だったんだから。

## 第十一話（後書き）

原作を読み直して五反田兄弟のとき思い浮かんだネタをやってみました。

シャルとラウラの本格的な出番は次回からになります。作者自身書くのが楽しみです。

では、次回の更新で会いましょう。

## 第十二話（前書き）

いやー、大変でした。使ってるパソコンが執筆中に突然フリーズしまして。書いていたものが全部消えました。・・・・・・保存しておけばよかった。

遅くなりましたが第十二話です。

やっと、シャルとラウラの出番が！！

## 第十二話

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

シャルル・デュノアさんが一礼する。

クラスにいる全員が啞然としている。もちろん僕も。

「お、男…….?」

誰が呟いた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方たちがいると聞いて本国から転入を……」

呟いた誰かに丁寧に受け答えるデュノアさん。容姿は中性的で整っている、セシリアさんより濃い金髪、それを首に束ねている。体格は華奢、まるでそう『貴公子』のようだ。

「きゃ……」

「はい?」

はっ、聴覚防御っ! (ただ、手で耳を塞ぐだけ)

「きゃあああああ————————っ!」

うわ。凄い音、窓にヒビ入ってるんじゃないかな? あっ、入ってる。

「男子！三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

元気だなー、みんな。でもこれで隣のクラスとかに情報が伝わっただろうからHR終わったら大変だろうなー。一時間目なんだっけ？

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

千冬さん面倒くさそうだなー。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介は終わってませんからー！」

いや、忘れてませんよ。ていうか、存在感がすごくて意識から外せません。

もう一人の転校生、綺麗な銀髪は腰近くまで長くおろしている。

そして目を引く眼帯、医療用の眼帯ではなくて漫画とかで見るような眼帯。

印象は『軍人』。そんな彼女はクラスの女子たちをくだらなそうに見ていた。でも、それは僅かなことで視線は千冬さんに向けられた。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

教官？そっいえば千冬さんって一時期どっかの軍で教官をしていた

って束姉に聞いたような……。ということはラウラって子は軍  
人か軍関係者ってことかな？

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も  
一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました。ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

えっ、それだけ？

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

みたいですね。山田先生が泣きそうになってるし。ていうか、山  
田先生そのくらいで泣きそうにならないでくださいよ。

あれ、ラウラさんが一夏のほつに……。どうしたんだろう？

バシンッ！

「……………」

「う？」

殴った一夏を、平手打ちで。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

みんな呆気にとられてる。箒姉も口をポカンと開けてる……  
珍しい。

「いきなり何しやる！」

「ふん……」

一夏がくいかかるけどラウラさんは無視して僕の方を向く。えっ、僕も殴られるの？

「貴様が篠ノ乃優希か……」

「そ、そうだけど」

「……フツ」

ラウラさんは僕たちの前から立ち去って空いている席に座ってしまった。……あれ、僕、鼻で笑われた？どうして？

「あー……ゴホンゴホン！ではHRを終了する。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦を行う。解散！」

千冬さんが手を叩いて行動を促す。一夏は納得してなさそうだけどそうは言ってられない。

このままだと女子と一緒に着替えるはめになってしまう。それはやばい。

だから、僕たちは急いで移動しないといけない。まあ、僕は制服の下に着てるからすぐに終わるけどね。

「おい織斑、篠ノ乃弟。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろ」

はい。分かってますよ。

「君たちが織斑君に篠ノ乃君？初めまして。僕は……」

「ああ、いいから、とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから。」

「一夏準備できた？」

「おう」

一夏はスーツの入ったバッグを持つ、ていうか一夏も下に着れば楽なのに。っと、急がないと。

僕はデュノアさんの手を引いて教室を出る。

「簡単に言っけど男子は空いてるアリーナの更衣室で着替えないといけないの。実習のときはいつもこうだから慣れてね」

「う、うん」

あれ？デュノアさんの様子が変だ。大丈夫かな？

「大丈夫？」

「え、あつ、うん大丈夫だよ」

「それなら、よかった」

階段を下つて一階に向かう。ここで速度を落とすわけにはいかない。だって……

「ああっ！転校生発見！」

「しかも、織斑君に篠ノ乃君も一緒！」

あっ！見つかった。まあ、予想はしてたけどね。あれだけ騒いだんだしみんな来るよね。

でも、今の僕たちにとっては迷惑でしかない。だってここで足止めをくらつてたら着替えに移動の時間足して計算すると確実に授業は遅刻する。なぜだか分からないけど僕は出席簿で叩かれない。（叩いたら筈が暴走しそうだから）けど、怒った千冬さんは怖いから遅刻するのは避けたい。

「いたっ！こつちよ」

「者ども出合え出合えい！」

ここはいつから武家屋敷になつたんだろう。

「織斑君たちの黒髪もいいけど金髪つてもいいわね」

「しかも瞳はエメラルド！」

「きゃああっ！見て見て！あのふたり！手！手繋いでる！」

「日本に生まれて良かった！ありがとうお母さん！今年の母の日は河原の花以外のをあげるね」

「優希きゅんと金髪美少年のツーショット！これは会長やみんなに報告しないと！」

いや、お母さんは大事にしなきゃダメだよ！ちゃんとカーネーションをあげようよ。それに最後に喋った人！優希きゅんって何！？会長やみんなって他にもそう呼ぶ人がいるの！？

「な、なに？何でみんな騒いでるの？」

デュノアさんは状況が飲み込めてないみたいで困惑してる。

「そりゃ男子が俺たちだけだからだろ」

「・・・・・・？」

デュノアさんは意味がわかってなさそうだから補足しておこう。

「ISを操縦できる男子って今のところ僕たちだけでしょ。だからみんな珍しがってるんだよ」

「あつ！・・・ああ、うん。そうだね」

「それにアレだ。この学園の女子って男子と極端に接触が少ないから、ウーパールーパー状態なんだよ」

いや、一夏、ウーパールーパーって・・・せめてエリマキトカゲにしておこうよ。

「ウー・・・・・・何？」

「えーとね、1980年代に日本で流行った珍獣のことだよ。たしかメキシコサラマンダーの幼形成熟態だっただけ？」

「へー」

「へー、そうだったのか」

うん、懐かしのCM集を見た、束姉に一日掛けて教えられたから多分あつてると思うよ。

あつ、また増えた。

「ま、これからよろしくな。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

一夏が自己紹介した。じゃあ僕も。

「よろしくデユノアさん。僕は篠ノ乃優希。優希って呼んで。」

「うん。よろしく一夏、優希。僕のことシャルルでいいよ」

「わかった、シャルル」

「わかったよ、シャルル」

おっと、いつの間にか校舎を出ていたようだ第二アリーナまであと少しだ。

「よし、到着！」

ふう、なんとか着いた。やっぱり着替えの時、一々移動するの面倒くさいな。まあ、仕方がないんだけどさ、はあ……。

「うわ！時間ヤバイな！すぐに着替えちまおうぜ」

あ、本当だ、急がないと。

一夏が脱ぎだしたので僕もボタンを外して制服を脱ぐ。

「わあっ!？」

ん?どうしたんだろ?

「どしたの?シャルルってまだ着替えてないの?早く着替えないと遅れちゃうよ。織斑先生時間に厳しい人だから怒られるよ」

「ああ、千冬姉は時間にくるさいぞ」

「う、うんっ?き、着替えるよ?でも、その、あっち向いてて・・・  
・ね?」

「???いやまあ、別に着替えをジロジロ見る気はないが・・・  
って、シャルルはジロジロ見てるな」

「み、見てない!別に見てないよ!？」

「二人ともー、早くしないとホントに遅れるよー」

脱いだ制服をハンガーに掛けて待機状態のユニコーンを首に掛けて・・・よしっ。

「うわっ、本当だ!」

遅れたら千冬さんに怒られるよー。着替え終わるまでユニコーンの状態でも見ておくか・・・うん大丈夫そうだな。

「うわ、二人とも着替えるの超早いな。なんかコツでもあんのか？」

あ、シャルルはもう終わったんだ。

「い、いや、別に……って一夏まだ着替えてないの？」

「一夏、本当に遅れるよー」

まだ、下しか履いてない。まあ着ずらいのはわかるけどさ。

「これ、着るときに裸っていつのがなんか着ずらいんだよなあ。引  
つかかって」

「ひ、引つかかって？」

「おう」

あー、確かに引つかかるよね。

「……………」

あれ？シャルルの顔が赤いような？どうしたんだろう？

「よっ、と。…………よし、行こうぜ」

「うん、行こう」

「う、うん」

みんな、着替え終わったから更衣室を出て、グラウンドに向かう。

「そのスーツ、なんか着やすそうだな。どこのやつ？」

「あ、うん。デュノア社製のオリジナルだよ。ベースはファランクスだけど、ほとんどフルオーダー品」

「デュノア？デュノアってどっかで聞いたような……」

「はあ、一夏。IS乗ってんだからそのくらい覚えておこうよ。デュノア社っていうのは量産ISのシェア第三位の大企業だよ。うちの訓練機のラファール・リヴァイブがデュノア社のだよ」

一夏、興味がなかったとはいえそのくらいは覚えておこうよ。……座学の時間を増やした方がいいかな？

「へえ！じゃあシャルルって社長の息子なのか。道理でな」

「うん？道理でって？」

「いや、なんつうか気品っていうか、いいところの育ち！って感じがするじゃん。納得したわ」

「いいところ……ね」

あれ？今シャルルの表情が曇ったように見えたけど、気のせいかな？

「それより一夏や優希の方がすごいよ。一夏はあの織斑千冬さんの弟で、優希は篠ノ乃束博士の弟だもん」

「ハハハ、こやつめ！」

「へ？」

「・・・・・・・・」

「・・・・いや、なんでもない。それと優希、俺から距離を取るな  
地味に傷つくぞ・・・。まああれだ、お互い地雷を踏んで一機ずつ  
減ったってことで」

一夏、そんなんじゃ意味わかんないよ。

「????よくわかんないけど・・・・・・・・」

ほら、シャルル首傾げてるし。はあ、ん？あつ！もつこんな時間、  
ヤバイッ！

「二人とも、時間！」

「「えっ？」」

「あと三分で始まる！」

「うそっ!？」

「あわわっ」

「走れば間に合うよ、急いじっ！」

「おっっ」

「うん！」

ゆっくりしすぎた。全力で走る、間に合え！

「遅い！」

間に合いませんでした。あのとき転んだのがダメだったな……。鼻の頭が痛い。

「早く列に並べ！」

ばしーん！あ、一夏が叩かれた。

僕たち三人は一組の列の一番端に加わる。

「ずいぶんゆっくりでしたわね」

セシリアさんが一夏を構う。アピールしてるな！。

「スーツを着るだけで、どうしてこんな時間がかかるのかしら」

「道が混んでたんだよ」

「ウソおっしゃい。いつも間に合うくせに」

セシリアさんの言葉に棘があるな、やきもち焼いてるのかな？まあ、一夏には違う風にみられてるだろうけど。

「優希、大丈夫？さっき顔からいったけど？」

「ん？あつ、大丈夫だよ」

シャルルが心配してくれた。ありがとう、シャルルは一夏と違だねちゃんと心配してくれたよ。一夏なんて僕がこけたとき、笑ってたもんな。

あつ、いつの間にか鈴も加わって騒いでる。後ろに千冬さんが迫ってきてるのも知らずに。

バシューンッ！あー、今日も出席簿の音がよく響くなー。

## 第十二話（後書き）

あれ？あまり進んでない。すみません書き直してるうちに長くなっ  
てしまって二つに分けました。昼頃に更新しますのでお待ちを・・・  
・  
・  
・。

## 第十三話（前書き）

なんとか書きあげました。  
第十三話です。

## 第十三話

「では、本日から格闘及び射撃を含む実践訓練を開始する」

「はい！」

現在、グラウンドには一組と二組の生徒全員がいるのでいつもの倍の人数がいる。

セシリアさんと鈴が一夏を恨みがましい目で見ている。自業自得だと思うよ。あつ、鈴が一夏を蹴ってる、どうせ一夏が変なこと考えてたんだろう。

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子がいることだしな。――凰！オルコット！」

「なぜわたくしまで！？」

セシリアさんがとばかりで戦闘するはめに。まあ専用機持ちだからしょうがないか。

「専用機持ちはすぐにはじめられるからだ。いいから前に出る」

「だからってどうしてわたくしが……」

「一夏のせいなのになんでアタシが……」

あー、ぼやいてるよ、ふたりとも。ん？千冬さんがなんか小声で言ってる。

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！専用機持ちの！」

あれ？なんか二人がすぐやる気になってる。千冬さんなにか言ったのかな？例えば「一夏にいいところを見せられるぞ」とか。（正解）

まあ、一夏には効果は薄いと思うけど。

キイイイン・・・・・・。

ん？なにこの音。あれはラファール？だよね。どうしたんだろ、なんか凄い勢いでこっちに・・・・って！？

「シャルル！！」

「ふえ？」

「ああああーっ！ど、どいてくださいーっ！」

ドカーン！

急いでシャルルの腕を引っ張ってここに引き寄せた。ふう、間に合った。一夏は？

・・・・山田先生の押し倒して胸を揉んでいた。

あっ、セシリアさんがライフルを一夏に向けてる。一夏、逃げてい。

チュインッ！

なんとか避けたようだ。まあ、白式を展開してたから死ぬことはないけど。あつ今度は鈴がデカイ青龍刀（双天牙月っていうらしい）を連結したためらいもなく投げた。

一夏はのけぞってなんとか避けた。でも、連結した双天牙月ってブーメランみたいに返ってくるからあんな体勢で避けたら次は避けられない。

「はっ！」

ドンッドンッ！

と、火薬銃の発砲音が響いた、放たれた弾丸が双天牙月の両端を叩き機動を逸らした。

い、一体なにが起きたんだ。とりあえず一夏の方を見ると、抱えられていた山田先生が両手でしっかりとライフルをマウントして構えていた。ま、まさか、あんな体勢で双天牙月を狙い撃ったの！？す、すごい。

あ、あの、いつも子犬みたいにワタワタしている人がこんな芸当をするなんて……。

「……………」

この場にいた全員が驚いていて啞然としてる。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今のくらいの射撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし……………」

山田先生は体を起き上がって、ずれた眼鏡を両手で直していた。  
・この仕草はやっぱり山田先生だ。

「あ、あの……優希？」

「ん？」

「も、もう大丈夫だから。は、放して……」

「あっ！」

山田先生のこと忘れてたけど今の僕の体勢ってシャルルを抱きしめるような形になっていた。慌ててシャルルを放す。

「ごめん、危なかったから」

「えっ、あ、うん。あ、ありがとう」

シャルルの顔が真っ赤になっていた。

「大丈夫？顔真っ赤だけど」

「だ、大丈夫！大丈夫だよ！それより、ほら！始まるよ！」

「あ、うん……」

なんか、ごまかされた気がするけど戦闘の方を見る。おお、始まった。

「さて、今の間に……そうだな。ちようどいい。デュノア、山

田先生が使っているISの解説をしてみせろ」

「あつ、はい」

シャルルの解説を聞きながら空中で繰り広げられてる戦闘を見る。さて、どんな結果になるんだろう。

えーと、戦闘の結果は山田先生の圧勝だった。

セシリアさんと鈴は連携して山田先生に挑んでいった。即興の連携だったけどさすが代表候補生、鈴が前衛、セシリアさんが後衛でちゃんとものになっていた。

けど、山田先生には通用しなかった。二人の攻撃を避けながら、射撃でセシリアさんは誘導して鈴とぶつけさせて二人が固まっているところにグレネードを投擲で模擬戦は終了、見事の一言だった。で、負けた二人は今……。

「ぐぐぐぐつ……！」

「ぎぎぎぎつ……！」

いがみ合っていた。

お互い負けた原因を言い合っていたのだが、どちらの主張も的を得ているのでみっともなく感じる。

結局、ふたりのいがみ合いは一組二組の女子たちのくすくすと笑い声が聞こえるまで続いていた。

「さて、これで諸君にも教員の实力は理解できただろう。以後は敬

意を持って接するように」

うん、千冬さんの言う通り、教員達の実力がわかったのと同時に自分がどれほど未熟だったのかがわかった。うん、もっと練習をがんばろう！

そして、千冬さんの手を叩く音を聞いて意識を切り替える。

「専用機持ちは織斑、篠ノ乃弟、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰だな。では七人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？では分かれる」

千冬さんが言い終わると、僕と一夏、シャルルに女子が一気に押し寄せてきた。

「織斑君、一緒にがんばろう！」

「篠ノ乃君、わからないところ教えて〜！」

「デュノア君の操縦技術を見てみたいなあ」

「ね、ね、私もいいよね？同じグループにいられて！」

あわわ！？ど、どうしよう。ちょっ！今誰かお尻触らなかった！？触り方が痴漢の人と同じだったよ！？（一回満員電車に乗った時に痴漢にあった）周りになんか鼻息の荒い女子がいるよ！たすけてーっ！！

「この馬鹿どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラウンドを百周させるからな！」

千冬さんの鶴の一声で騒いでいた女子達は二分くらいでそれぞれのグループリーダーの前に集まった。たすか……。ってなかった

！周りにいた女子の半分が僕のグループにいるよっ！？  
ん？千冬さん聞こえないようになんかヒソヒソと喋ってる。

「……………やった！篠ノ乃君と同じ班になれた！」

「……………うわぁ、ほんとに男の子なの？」

「……………綺麗よね」

「……………肌、真っ白。うらやましい」

「……………優希君と同じ班……………じゅるり」

「……………フフフフフ、どさくさにまぎれて触り放題よ！」

「…………………………ゴクリッ」

こ、怖い！？特に後ろの三人！僕どうにかされちゃうの！？き、  
気にしないようにしよう。うんっ！

「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を一班一体取り  
に来てください。数は『打鉄』に『ラファール』が三機ずつです。  
好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよ！」

山田先生張り切ってるなー。やっぱさっきの模擬戦で自信を取り  
戻したんだろうな。ええと、打鉄かラファールのどっちかだけ取  
り合えずみんなに聞いてみるか。

『各班長は訓練機の装着を手伝ってあげてください。全員にやって  
もらうので、設定でフィッティングとパーソナライズは切っており  
ます。とりあえず午前中は動かすところまでやってくださいね』

ISのオープンチャネルで山田先生が連絡してきた。うん、と  
りあえずは慣れさせろってことですね。わかりました。  
とりあえずはどっちのISを使うか決めるか。

「えーと、打鉄がラファール。どっちがいいですか？」

「私、ラファールがいいかな？」

「私は打鉄ー！」

「ラファールがいいです」

「私も・・・」

「優希君の好きにして。むしろ私を好きにして！」

「フフフフツツ・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（ツー）↑鼻血を垂らしている」

後ろの三人はスルーで・・・ええっと、打鉄が一人でラファールが三人か。

「じゃあ、ラファールだね。取ってくるよ、待ってて」

「あつ、篠ノ乃君の班はどのISにするんですか？」

「ラファールをお願いします」

「ラファールですね。はい、って篠ノ乃君持ってくださいか？」

「あつ」

そういえば訓練用のISって待機状態じゃなくて専用のカートに乗せてるんだっけ忘れてた。これ結構重いんだよねー。

「大丈夫ですか？班の誰かを呼んだ方がいいんじゃないですか？」

「あー、山田先生。あそこまで乗って行ってもいいですか？」

「えっ？ああ、いいですよ」

「じゃあ……よつと」

ラファールに乗って手早く装着する。よしっ、大丈夫だね。ラファールを起動させてみんなの前まで歩く。うーん、前に乗ってたのにすこし違和感あるなー、ユニコーンに慣れたからそう感じるのかな？みんなの前にしゃがんで降りる。

「じゃあ、始めようか。出席番号順に装着と起動をして歩行までしようか、最初はじゃあ佐藤さん」

「あ、はい」

まず、佐藤さんをラファールに乗せて起動させる。うん、ここまでは順調だね。

スパーンッ！

「………いったあぁっ！」「……」

ん、なんだ？今、ハモツた悲鳴があがったな。ああ、シャルル班の女子が騒ぎすぎて千冬さんに叩かれたのか。ご愁傷様です。

「はい。真面目にやらないとあそこと同じように織斑先生に叩かれるよー。ちゃんとやろうねー」

みんな、千冬さんの出席簿は嫌みたいだね必死に首を縦に振ってるね。よしよし。

「篠ノ乃君。もういいかな？」

「あつ、じゃあ、しゃがんでISから降りて次の人に代わってね」

「はい」

ん？またどつかが騒がしいな、今度は一夏のどこか。白式を展開して女子を抱えてる。あー、交代の時にちゃんとしゃがませなかったんだ、あれじゃ乗りにくいよなー。うちも気を付けさせないと・・・って。

「佐藤さん、なんで立ち上がってISから降りようとしてるの？」

「え！？いや、その威圧感が・・・・・」

はあ・・・・

「言っておくけど、僕はあんなことしないよ。乗るならよじ登ってでも乗ってもらってからね」

みんなが「えー！」と文句を言ってる、黙らせるためにみんなに聞こえるように呟く。

「そのくらいもできないなら織斑先生に直接指導してもらった方がいいかな？」

ガシヨンッ！プシュー。シュッタ！

「交代よ！」

「ええ！」

佐藤さんがISをしゃがませて降りるとすぐに次の人に交代した。そこまで千冬さんの指導が嫌なの？まあ、こっちはやりやすいけどさ。

「篠ノ乃くん、ちょっと来てー、なんか歩きづらんだけどー」

「あつ、うん、待ってて、今行くよー」

ま、とりあえず教えることに集中しますか。

「……………あつ、一夏が篝姉をお姫様抱っこしてる。よかったね篝姉。」

### 第十三話（後書き）

はい、十三話でした。うーん、もうちょっとシャルと絡ませたかったんですけどこうなってしまうました。

次は絡ませよう！！

あつ、ご意見や感想などありましたらどしどし送ってください。  
ではっ！次回の更新で

## 第十四話（前書き）

早めに書けましたので投稿します。  
第十四話です。

## 第十四話

「では、午前の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を行うので、各人格納庫で班別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。では解散！」

僕の担当した班は順調に起動テストを終えてISを格納庫の戻してまたグラウンドに集合。その後、千冬さんと山田先生の連絡事項を聞いて解散した。

「あー……。あんなに重いとは……」

「あはは、確かに重いよねあれ」

「優希はいいだろ……。手伝ってもらったんだからよ、俺は一人でやったんだぜ」

ISを格納庫に持つていくとき僕とシャルルは体育会系の女子達が持つて行ってくれた。

「まあ、いいや。シャルル、優希着替えに行こうぜ。俺たちはまたアリーナの更衣室まで行かないといけないしな」

「そうだね行こうか」

「え、ええつと……。僕はちよつと機体の微調整をしてからいくから、先に行つて着替えてよ時間がかかるかもしれないから、待つてなくていいから」

「ん？だったら待つよ」

「そうだぞ。別に待ってても平気だぞ？俺は待つのは慣れ……」

「い、いいからいいから！僕が平気じゃないから！ね？先に教室に戻っててね？」

「お、おう。わかった」

「う、うん」

な、なんかシャルルが強く言うから頷いてしまった。どうしたんだろ、なんか必死そうだったけど……どうしたのかな？

「優希。行こうぜ」

「う、うん。じゃあシャルル先に行ってるね」

「うん」

一夏と一緒に更衣室に向かって着替える。まあ、着替えといってもスーツの上から制服を着るだけだけど……よし、できたつと。

「一夏。先に行ってるねー」

「ん？もう終わったのか？やっぱコツとかあるのか」

「ないよ、じゃあ」

「お、おい。優希？うおっ！？」

タオルで頭を拭きながら更衣室を出る。ドアが閉まるとガシャーン！と音がしたけど多分一夏がこけたんだろ。さっき僕が転んだ時笑ってたから心配はしない。ざまあ。

「……どういうことだ」

「ん？」

「どうかしたの？箒姉？」

昼休み、僕たちは屋上に集まっていた。

このIS学園の屋上は生徒たちに開放されている。

なんでここにいいのかというと、僕とシャルルは学食へ向かうとしてただけどその時、一夏に誘われたのでここにいるというわけだ。んゝ、風が気持ちいいな。

でも、なんか箒姉が不機嫌そう。どうしたんだろ？……まさか、一夏。

「天気がいいから屋上で食べるって話だったろ？」

「そうではなくてな……」

箒姉がセシリアさんと鈴の方をちらつと見てる。ああ、やっぱり。箒姉は一夏と二人でお昼を食べようとしてたんだ。はあ、この鈍感

は……………。

箒姉に小声で謝っておく。

「……………箒姉、ゴメンね。知らなかったとはいえ邪魔して」

「いや、気にするな。優希」

「せっかくの昼飯だし、大勢で食った方がうまいだろう。それにシヤルルは転校してきたばかりで右も左もわからないだろうし」

「そ、それはそうだが……………」

箒姉は拳を握り締めているその手には一夏分の箒姉お手製のお弁当が握られていた。

一夏……………鈍感すぎるのも程があるでしょ。なんか箒姉がかわいそうに思えてきた。

ちなみにIS学園の寮にはお弁当を持参したい生徒達のために早朝キッチンが使えるようになっていた。僕もよく使っている。キッチンの設備はプロが使うような器具も置いてあってかなり驚いた。

……で、箒姉が持っているお弁当、実は今朝僕と一緒に作ったものだ。箒姉あまり料理は得意ではなかったんだけどがんばったんだよ唐揚げなんて何回も失敗したんだから。

そういえば、僕が自分の作つてるとき周りの女の子たちが「ま、負けた」って落ち込んでたけど、どうしたんだろう？

「はい一夏。アンタの分」

鈴が一夏にタッパーを放り投げてる。こら、食べ物を粗末にしない！

「おお、酢豚だ！」

「そ。今朝作ったのよ。アンタ前に食べたいって言うてたでしょ」

タッパーの中身はどうやら酢豚だったみたいだ。そういえば今朝キッチンにいたな。てか、酢豚オンリーってすごいな。鈴も一夏にお弁当を・・・餌付けか。そういえば母さんが言うてたな「男の心を掴むならまずは胃袋からよ」って、でもなんで姉じゃなくて僕に言ったんだろう？謎だ？

「コホンコホン。・・・一夏さん、わたくしも今朝はたまたま偶然何の因果か早く目が覚めてしましまして、こういうものを用意してみましたの。よろしければおひとつどうぞ」

セシリアさんがバスケットを開くとサンドイッチが並んでいた。見た目は普通なんだけどあれは食べる物ではない。

この前セシリアさんにタマゴサンドを一つ貰って食べてみたんだけどなぜかタマゴサンドにはケチャップではなくタバスコが塗られていてあまりの辛さにその日は喋ることができなくなった。やつぱりお嬢様だからだろうか一度も料理をしたことがないみたいだ。・・・せめて味見をすることを覚えてください。お願いします。

「お、おう。あとでもらうよ」

一夏がこっちを見てるけど目線を合わせないようにする。ごめんそれだけは勘弁して。

「？どうかしまして？」

「いや！どうもしてない！」

一夏もいらないうて言えはいいのに。まあ言えないと思うけど。

「ええと、本当に僕が同席してよかったのかな？」

僕の隣に座っていたシャルルが遠慮しながら言ってきた。

「大丈夫だよシャルル。それに学食だとゆっくりできないし」

「でも……」

「いいのいいの。それに男同士仲良くしようよ、ねっ、一夏」

「ああ、そうだな。色々不便もあるだろうが、まあ協力してやっていこうぜ。わからないことがあったらなんでも聞いてくれ。――  
ISのことは優希に聞いてくれ」

えっ？僕に丸投げ。

「アンタもうちょっと勉強しなさいよ」

「一夏、寝る時間を減らして座学増やした方がいいかな？」

「ゆ、優希……悪かったからそれだけはやめてくれ」

「アンタもうちょっと勉強しなさいよ」

「してるって。多すぎるんだよ、覚えることが。お前らは入学前から予習してるからわかるだけだろ」

「ええまあ、適性検査を受けた時期にもなりますが、遅くてもみんなジュニアスクールのうちに専門の学習をはじめますよね」

まあ、そうだよね。ただ遅くても中三の時から勉強を始めるんだけど、一夏は突然の入学で知識0の状態が入ってきたもんね。入学の重要事項の冊子も古い電話帳と間違えて捨てたし。

「ありがとう。二人とも優しいね」

うっ！シャルルの笑顔って綺麗だな。不覚にもドキツとしてしまった。

「そ、そんなことはないよ。そ、そういえばさ、シャルルって部屋ってどうなるのかな」

「そっか、優希って今は一夏と同じ部屋になったんだっけ？」

「あ、ああ部屋が空いたから男二人になったんだよ」

そう、部屋の調整ができたので僕は一人部屋から一夏と一緒の部屋に移ったのだ。その時、篤姉が残念そうな顔をしてたけど、これはさすがにしょうがないよ。

ちなみに僕が使っていた一人部屋は物置として使われていると千冬さんに聞いた。

「じゃあ、どっちかが一人部屋になるのかしら？」

「そうですわね。転校生をしかも日本に来たばかりで慣れてない留学生を一人部屋にするわけにもいきませんですわよね。」

「だったら、俺は二人部屋の方がいいかな」

「えー、僕も二人部屋がいいよ、一人部屋は寂しいからイヤなんだけど。一夏だって一人部屋が羨ましいって言ってたじゃん」

部屋に戻ったときに真っ暗になってるのって結構寂しいんだよ。

「そんな話、後でしなさいよ」

「そうだぞ、今は昼食中だぞ、後にしろ」

そうだね、この話は後でにして今はお昼だ僕も食べよう。えへへ、今日のお弁当は自信があるんだよね」

「うわ！なにその弁当！すごく美味そうじゃないの」

「す、すごいですわね。ゆ、優希さんがお作りになったの？」

「うん、そうだよ」

で、僕が頷いたら何故か二人が落ち込んだ、ど、どうしたんだろ  
う？

「ま、まずは味よ。優希、おかず交換しましょう！酢豚あげるから  
さ」

「う、うん、いいよ。じゃあこの玉子焼きと」

箸で玉子焼きをつまんで鈴のタッパーのフタに乗せる。鈴も酢豚を僕の弁当箱のフタに乗せた。

「わ、わたくしも、サンドイッチあげますから！」

「そ、それは結構です！」

セシリアさん、アナタのは要りません！タダであげますから！はいっ、玉子焼き！

「そ、そうですか。」

「じゃあ、いただくわ……はぐ」

「では……はぐ」

ど、どうかな、東姉以外に食べさせたことなかったから緊張するな。

「……………」

「……………」

あ、あれ？もしかして口に合わなかった？

「……………うまいわ」

「……………美味しいですわ」

え？美味しい？よかった。でもなんで二人とも暗くなってんの？

「……………可愛くて料理も完璧ってどんだけずるのよ」

「・・・・・・・・神様は残酷ですわね。あれだけの容姿に加えて料理の才まで与えて、不公平ですわ」

な、何かブツブツ言ってるけど。だ、大丈夫かな？なにか悪いことしたかな？

「気にするな、優希。しばらくすれば直る」

「そ、そうなのかな？」

「そうだ。ほら、食べるぞ」

「う、うん」

い、いいのかな？まあ、箒姉の言う通りお弁当を食べるか。鈴の酢豚を食べてみるか・・・・うん、まあまあかな。

って、なんか知らないうちに面白い展開になってる。一夏が箒姉にアーンってしている。どうしてこんな風になってるんだろう？

まあ、箒姉はなんかうれしそうだからいいか。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

あつ、ブツブツ言ってた二人が一夏をすつごく睨んでる。青春してるな。

「ねえねえ、優希？これってもしかして日本でカップルがするっていう『はい、あーん』っていうやつだよね？仲睦まじいね」

シャルル、そんなこと言つとあの二人が・・・

「だ、誰がつ！なんでこいつらが仲いいのよ！？」

「そつ、そうですわ！やり直しを要求します！」

ほら、きた。

でもシャルルはそんな二人に対して笑顔で絶やさない。余裕だね。もう、なんか面倒くさくなってきたから自分のお弁当に集中する。うん、美味い。

結局、おかずの食べさせあいっこで収まった。一夏が三人にアーンをした後、セシリアさんと鈴に食べさせてもらっていたけど。一夏もうちょっと嬉しそうにすれば、これを不幸だっと思ってるんだつたら一夏、全国の男子に殺されるよ、絶対。まあ、僕はそう思わないけど。

そんな光景を見ながらお弁当を食べているとシャルルがこっちを見ていた。どうしたんだろ？

「どうしたの？シャルル？」

「あつ、う、ううん！なんでもないよ」

「？ あつ！わかった。シャルルどれがいい？」

「え？」

「あれ？違つたの、なにかオカズが欲しかったのかと思つただけど？」

「えっ！？ち、違うよ！」

「そうなの？」

「そっだよ！」

購買で買ったパンだけだったから物足りないのかと思ったのに。

「そうなんだ、でもどれか食べてみない？」

「い、いいよ。優希に悪いし」

「そう……」

美味しいのに……。

「あ、え、えーと、や、やっぱもらっていい！このハンバーグすごく美味しそうだね！（そんな捨てられた子犬みたいな顔をされたら頷くしかないよ）」

「あ、うん！このハンバーグ自信あるんだ！」

やっぱ、シャルル食べたかったんだ。遠慮なくてよかったのに……あつ、シャルルって箸じゃなかったけ、どうしよう？しよ  
うがないあの手でいくか。

「シャルル」

「ん？」

「はい、アーン」

「ゆっ、優希！？な、なにしてんの！？」

あれ、なんかシャルルが驚いてるけど、どうしたんだろ？

「えっ、だってシャルル箸使えないでしょ」

「だ、だからって」

「そんなにイヤ・・・・・・・・（僕の作ったハンバーグ）」

「うつ・・・・・・・・い、いただきます（だから、その顔はズルいよっ！）あむっ！」

「どう？」

「お、美味しいよ」

「よかった！次は・・・・・・・・」

「も、もういいよ！お腹いっぱいだから！」

「そうなの？」

「う、うん！」

「そうなんだ」

無理に食べさせるはダメだからね。早く食べよう、次の授業もあ

るし早く食べなきゃ。

あ、一夏がみんなにボコられてるどうしたんだろ？えっセクハラ？どうぞもっとやってください。一夏そんな目で見ても助けないよ。ん？どうしてこっち見てるの？

「いや、男同士っていいなと思ってな」

どうしたんだろ、一夏？

「そ、そう？一夏いいなら良かったよ。ね？優希」

「う、うん？」

良くわからないけどシャルルと一緒に頷いておいた。本当にどうしたんだろ？箒姉たちもなんか咳いてるし。

・・・はっ！なんかとんでもない勘違いされたような気が。・・・まあいいか。

## 第十四話（後書き）

あれ？なんかすっごいg d g dになってしまった。  
でも、優希がシャルにアーンができて満足です。

・・・・・・我、人生に一片の悔い無し。ガクッ

まだだ！まだ終わら（ry

すみません、暴走しました。  
では次の更新で

## 第十五話（前書き）

更新が遅くなってすみません。

大学が始まって忙しくてなかなか執筆する時間がとれませんでした。これからも更新速度はかなり落ちると思いますのでよろしく願います。

今回は、少し長めになっています。

では、第十五話です。

## 第十五話

「じゃあ、シャルル。よろしくね」

「うん、優希」

「ちくしょう負けた……」

いつも通りの放課後の訓練が終わると僕たちは千冬さんに呼び出された。内容はどっちがシャルルと相部屋になるかだった。当然僕たちはもめたけど勝負で決めることになった。

勝負はじゃんけん五回勝負、勝った方がシャルルと相部屋になるという話になった。

で、結果は僕の圧勝。シャルルは僕と相部屋になった。

「では、デユノアと篠ノ乃が同室ということでもいいな？」

「「はい」」

「そうか。では、織斑は荷物を纏めて一人部屋に移動しろ」

「……はい」

一夏は僕が前に使ってた部屋を使うんだ。あれ？でも一人部屋ってたしか物置に使ってるって千冬さんが言ってたような？

「ん、そういえば忘れていたな。織斑」

「なんですか？」

「実は一人部屋は今、物置として使っていてな。お前が寝るスペースもない」

「はあ！？どういうことだよ！千冬姉！！」

スパーンッ！！

「織斑先生だ、馬鹿者」

「……すみません」

うわぁ、痛そう。シャルルも顔をしかめてる。

「デュノアの転校は急な話だったものでな、我々も片付ける時間もなかった。それは今もだ」

「ていうことは、まさか……」

千冬さんがニヤツと笑った。

「そうだ、お前一人で片付けろ」

「やっぱりいいーーーー！！」

あー、一夏、ご愁傷様。

「片付かなかつたら廊下で寝てもらうことになる。……冷たい床で寝たくないだろ？」

「ちくしょー！ー！！」

一夏は泣きながら廊下を走って行ってしまった。

「はあ、あの馬鹿は……。篠ノ乃、織斑の荷物を纏めといてやれ」

「はい、わかりました」

「うむ、では私は職員室に戻る。篠ノ乃、デュノアの面倒をしつかりみろよ」

「わかりました」

「ではな」

と言って千冬さんは職員室に向かっていった。さて、じゃあ寮に戻るか。

「じゃあ、行こうか」

「あ、うん」

僕はシャルルを部屋に案内する。戻ったら一夏の荷物を纏めないと。

「ねえ、優希。一夏は大丈夫なのかな？」

「んー？大丈夫じゃないかな。多分そこまで重い荷物もないと思うし、それに本当に遅くなりそうだったら千冬さんが手伝うと思うし」

「織斑先生が？」

「うん。千冬さんなんだかんだで一夏に優しいからね、だから大丈夫だと思うよ……つと、ここだここ」

いつの間にか着いていたみたいだ話てると早いな。

「ここなんだ」

「うん。あつ、シャルルちょっと待ってて一夏の荷物纏めるから」

「あ、うん。わかった」

さて、適当にやるか。えーと、まずはダンスに入った着替えを一夏のバッグに詰めて……………

「はい、シャルル。お茶」

「あ、ありがとう」

入れたての緑茶をシャルルに渡す。さっき部屋の片づけが終わった一夏に荷物を渡してようやく一息がつけるようになった。一夏相当くたびれてたけどそんなに荷物多かったんだ。

「あ、おいしい」

「気に入った？緑茶」

「うん、紅茶とは違って不思議な感じだけど、おいしいよ」

「そう、よかった」

セシリアさんは苦手だったみたいだけどよかった。

「そういえば、シャワーの順番ってどうする？」

「あ、僕が後でいいよ。優希が先に使って」

「いいの？実習終わってすぐにシャワー使いたい日だってあるんじゃない？」

「ううん、平気だよ。僕あまり汗かかないし」

シャルルがそう言うなら。

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらうね。でも、遠慮しないでね。男同士なんだから」

「うん、ありがとう」

あー、やっぱりシャルルの笑顔って綺麗だなー。

「あつ、そういえば優希達ってさいつも放課後にISの訓練してるって聞いたけど、そうなの」

あら？誰から聞いたんだろ、まあいいけど。

「うん、そうだよ。僕と一夏はみんなと比べて遅れてるからね。少しでもみんなに追いつく為にね」

今日はシャルルのこともあったから訓練はお休みにしたけど明日はやらないと。それに今月は学年別トーナメントもあるからがんばらないと。

「それならさ、僕も加わっていい？何かお礼もしたいし、専用機もあるから少しは役に立てると思うんだ」

「うん、いいよ。一夏も喜ぶと思うし」

僕もだけど、だって箒姉たちの教え方はわかりにくいし。それに一夏のことで揉めて訓練ができないし。

「うん。任せて」

これで明日からはちゃんとした訓練ができそうだ。それからすこし世間話をして僕たちは眠りについた。

部屋に誰かがいるとわかって、この日は安心してぐっすりと眠れた。

「ええとね、一夏がオルコットさんと凰に勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ」

「そ、そうなのか？一応わかってたつもりなんだが……」

シャルルが転校してきてから五日が経って今日は土曜日、僕たちはアリーナで訓練していた。

土曜日は授業が午前中は理論学習で午後からは実習となっていてアリーナも全開放されていて殆どの生徒はアリーナを使う。

先程、シャルルと軽く模擬戦をした一夏はシャルルにレクチャーを受けていた。

僕は……

ドーーーーンッ！！

ユニコーンの武装のテストをしていた。

「んー？少し照準がずれてたかな。まあ、バズーカだから多少の誤差はあるか」

ユニコーンに初期登録されていた武装の中に今まで使っていなかったものがあつたので使ってみていた。

今使っているのは『ハイパーバズーカ』という武器でユニコーンに登録されていた唯一の実弾兵器である。まあ、名前の通りバズーカなんだけどなにがハイパーなのかっていうと、このバズーカは様々な弾頭が撃てて選択した弾頭次第では全距離対応できるという優れたものなんだ。おまけに威力もピカイチ束姉いい仕事するね。

（まあねえ~~~~~♪）

ん？今、束姉の声が聞こえたような……まあいいか。バズーカの性能もわかつたし、次にいこうか。

「優希、ちよつといいか？」

「ん？なに一夏？」

バズーカを収納<sup>クロース</sup>して次の武装を出そうとしたら一夏がやってきた。  
どうしたんだろ？

「いや、軽くだけど模擬戦してくれないか？」

「模擬戦？いいけど、なんで？」

「いや、なんとなくだけど。俺達って模擬戦したことなかったじゃん」

「そついえばそうだね」

一夏とは訓練ではいつも一緒だったけど模擬戦はしたことはなかったっけ、いつもだったらセリアさんと鈴が一夏の相手してたかな。

新武装のテストがてらやってみてもいいかな。

「いいよ」

「そうか、じゃあやろうぜ！」

僕たちはある程度の高さまで飛んで向かい合う。

「一夏さん！わたくしの教えたことをお忘れなく！」

「アタシの教えたことちゃんとやりなさいよ！」

「一夏、優希に怪我させるのではないぞ。それと負けるなよ、負けたら剣道場で特訓だ」

「うわー、僕には応援ないんだ。それと篤姉、過保護だな心配しすぎだよ。」

「え？織斑君と篠ノ乃君、模擬戦するの」

「うわ、本当だ」

「あの二人が戦うのって初めてじゃない」

「か、カメラカメラ！」

「周りがなんか騒がしくなってきたけど、どうしたんだろ？まあいいか、今は一夏との模擬戦に集中しよう。」

「それじゃ二人とも、準備はいい………始め！」

「うおおおおおっ！！」

シャルルの合図とともに一夏が突っ込んできた。てか、一夏さ行動が単純すぎるよ。とりあえずバルカンで牽制しとこう。

「うわっ！？」

「いや、一夏そこは避けたらダメでしょ。やっぱり射撃武器の特性を理解してないでしょ。まあ、こっちはやりやすいからいいけど。」

「えーと、じゃあまたバズーカを出してっど………うりゃっ！」

「おっと！当たらないぞ優希！」

「うーん、やっぱり弾速が遅いから当たりにくいかな。だったらバズー」

力の弾頭を変更して…………。

「これでどう!」

「だから当たらなっ!?!」

避けたつもりだったみたいだけど残念、弾頭を拡散弾にしておいたからね。ダメージは少なくなるけど当たりやすくなるんだよ。

「くっ、うおおおっ!」

「うわっ!?!」

「くっ、まだまだ!」

くっ体勢を立て直して瞬間加速してくるなんて。無茶するな一夏。  
イグニッション・ブースト  
距離を取ろうとしても追ってくるし。でも、この距離だったらあれ  
が使えるな。

この勝負貰ったよ一夏。僕はアレを展開する。

「でりゃああーーーーーって、ええ!?!」

一夏が驚いてる。まあそうだよな、だって今の僕の両腕にはぐっ  
ついガトリング砲が二門ずつ付いてるからね。

「一夏」

「えっ、ちょっ、優希!」

「いっくよ!」

両腕のガトリングのトリガーを引く、すると銃身から無数の光が放たれていく。じつはこのガトリング砲の弾は実弾ではなくてビームだ。

前から考えてたんだけどユニコーンに登録されてた射撃武装は全部、威力は凄くても弾数と連射性があまりよくなくて困ってたんだけど僕は昔、束姉とした会話を思い出した。

『いい、ゆー君。必要だと思った物がなかった時はどうすればいいと思う？』

『んー？変わりになる物を探す？』

『チツチツチーズちくわ。違うよゆー君、それは凡人の発想だよ。なければね』

『なければ？』

『創ればいいんだよ！』

『創る？』

『そう！創るんだよ！代わりの物なんかじゃなくて自分で創造すればいいんだよ。天才の私たちなら簡単なことなんだよ！』

『んー？よくわかんないよ束姉』

『あはは、ゆー君には分かりづらかったかな？でもいつかわかるよ。ゆー君は頭いいからね』

というわけで作った。エネルギーはビームマグナムと同じでEパ  
ックにしたからユニコーンのエネルギーを使わないで済む、僕の自  
信作である。しかも四丁作った。制作費は一夏の白式の修理依頼を  
受けた時の報酬を使った……。貯金しようと思ったけど調子に  
乗って四丁も作ったら全部使っちゃったけど。  
では、いつてみよー。

「うりゃー……………」

「ぎゃああ……………」

四丁のガトリングからビームが放たれて当たる。よし、成功だ。  
それになかなかの爽快感だ。

途切れることなく放たれるビームを一夏は避ける。でも両腕につ  
けたせいか振動で収弾性が悪いな。

「くそお……………」

おおっ！？一夏が突っ込んできた。肉を切らせて骨を絶つてや  
っ？でもそんなことしたら。

「もらった……………」

ピーー。

「あれ？もうシールドエネルギーがゼロに？」

「はい、僕の勝ち。一夏？なんで突っ込んでくるのかな？普通は弾  
切れになるまで避け続けるのが基本でしょ」

「いや、その前に一撃入れられると思ったんだけど」

「はあ、一夏、その癖直した方がいいよ白式はただでさえ燃費の悪い機体なんだからさ」

やっぱり一夏はもつと勉強したほうがいい、知識がなさすぎるよ。

「まあ、それは下のみんなに教えてもらいなよ、待ってるよ」

「待ってるって、箒達がか？なん・・・で」

「「「一夏（さん）。戻って来い（来なさい）」」」

箒姉達三人がいい笑顔で手招きをしている。笑顔なんだけど目の錯覚かな？三人の背後にどす黒いオーラが見えるような・・・うん、気のせいだね。

「・・・・・・優希」

「ん？」

あれ、一夏の様子がおかしいな、だらだらと汗かいてるし、暑いのかな？

「俺は逃げる！」

あつ！一夏がすごい勢いでピットゲートに！

『優希』

あれ？箒姉から通信が、どうしたんだろ？

「なに、箒姉？」

『優希、一夏をここに連れてきてくれないか』

「う、うん。いいけど・・・」

『優希』

あれ？今度は鈴だ。

『優希、一夏をここに連れてきてくれたら、優希が食べたがってた《小龍亭》の桃まんを最優先で取り寄せてあげてもいいわよ。あそこのおじさんはアタシの知り合いだから』

っ！？《小龍亭》の桃まんを！？あの開店と同時にすぐに売り切れる《小龍亭》の桃まんを最優先で食べれるの！？

『優希さんっ！だったらわたくしはこの前のティータイムに食べた《ベルモンド》のショートケーキをホールであげますわよ！』

《ベルモンド》のショートケーキをホールで！？あの名店のショートケーキを、一日五十個しか作らないあのショートケーキをホールで。

『『『優希（さん）』』』

ユニコーン力を貸して！箒姉達の（桃まんとショートケーキの）為に！！・・・あとでフルメンテしてあげるから。

《IS・D》起動します。

よしっ！目標との距離八百、なおも逃亡中。……………逃がさない！

ドンッ！「ん？」ガシッ！「ウオッ！？」ギユンッ！「グエ！」  
ドサッ「グハッ！」

箒姉達の前に一夏を投げる。これまでに使った時間は約六秒、自分でもびっくりだ。

「な、なにが起こったん……………だ？」

「……一夏（さん）、お帰り」「」

『裏切ったな……優希』

あつ、一夏から秘匿回線だ。  
プライベート・チャネル

『ごめんね、一夏。桃まんとショートケーキのた……………箒姉達のためなんだ』

『今、桃まんとショートケーキって言わなかつ』

うるさくなりそうだから秘匿回線を一きって箒姉達に任せよう。

「た、ただいま……………」

「……さて、説教の時間だ（ですわ）」「」

「お、お手柔らかに」

あっ、はじまった。邪魔になりそうだから、あっちいておこう  
つと。

「ねえ、優希。さっきISの形が変わったけどどういうことなの？」

「ああ、そういえばシャルルはユニコーンのDモードデストロイ見るの初めて  
だっけ？」

「デストロイ  
Dモード？」

「ええとね、Dモードっていうのは……ん？」

なんか周りが騒がしいな、どうしたんだろ。

「優希、あれ……」

ん？あれは、確かドイツ軍の第三世代機だっけ？乗っているのは  
ボーデヴィツヒさん、一夏と話してるけど友好的な感じじゃないね・  
・って、武装を展開した！

ガギインッ！

「優希！」

「！」

ふう、間に合った、でもすごい衝撃だったなあ左肩の武装……

・なるほど大型のレールカノンか。

「・・・こんな人が密集しているところにレールカノンを撃つなんて正気？」

「ふんっ、小動物に用はない、どいていろ」

しょ、小動物！？確かに同年代の男子と比べれば背は低いかもしれないけど。君よりは身長は高いよっ！

「私が用のあるのはその男だけだ、どけ」

「いきなり攻撃してきた人に、はい、そうですか。って言うと思う」

ボーデヴィツヒさんと僕は睨み合いになる。

『その生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』

スピーカーから声が聞こえた、たぶん騒ぎを聞いてやってきた担当の教師だろう。

「・・・ふん。今日は引こっ」

ボーデヴィツヒさんは戦闘態勢を解除してアリーナゲートへ向かっていった。

「二人とも大丈夫？」

「ああ、俺は大丈夫だ。優希、大丈夫か？」

「あ、うん、大丈夫だよ。でも一夏、何でボーデヴィツヒさんは攻撃してきたの？」

「・・・・・・・・・・」

一夏は口を開かない、何か言いにくいことなのかな。

「とりあえず戻ろうか、もうアリーナの閉館時間だし」

「そうだね。戻ろうか」

「ゴメンな優希」

「いいよ、話せる時に話してよ」

更衣室に戻って着替えを始める、まあ、スーツの上から制服を着るだけだけど。更衣室にもシャワーはあるけど、あまり使いたくない。あれは一夏にも見られたくないから。

そういえばユニコーンの状態はどうだろ？さっきもそうだけど無茶な加速したりしたからなー。って、うわー、スラスター周りの調整が狂ってる直さないと、狂ったままだと癖になるし。ついでに武装の照準調整もしとこうかな。

「ごめん、二人とも。僕ユニコーンの整備しに行くよ」

「え、手伝おうか？」

何を言って・・・・・・・・そういえばシャルルはプロテクトのこと知らなかったけ。

「あー、ありがとうシャルル。でもユニコーンにはプロテクトがあつてね僕以外は触れないんだ」

無差別にハッキングするからと付け加えとく。

「そ、そうなんだ、大変だね」

「でも、ありがとうねシャルル。あつ、シャワー先に使っていていいよ」

「う、うん」

ちよつと時間掛かりそうだし。

「じゃあ、俺達は先に戻ってるな」

「がんばってね優希」

「うん」

さて、整備室に行くか。この時間ならまだ整備課の先輩達もいるだろうし少しアドバイスでもしてもらおうかな。

そういえば、弟子入りしたいって言っていたスタッフさんたちはどうしたんだろ？最近見ないな、忙しいのかな？

まっ、早く終わらせてシャワー浴びよ。

## 第十五話（後書き）

はい、十五話でした。

アニメの最終話をネットでやっと見ました、第二期やるといいな！。

## 第十六話（前書き）

なんか早くできましたので更新します。  
第十六話です。どうぞ。

## 第十六話

「ふう、思ったより早く終わったな」

あの後、整備室に行つてユニコーンの調整をした、ちょっと悩んだ所もあったけどそこは整備科の先輩とこにアドバイスしてもらつて、順調にできた。

教えてもらった先輩に新聞部の黛先輩がいて少し驚いた。黛先輩も整備科だったらしくて他の先輩に聞いてみたら整備科二年の एसだと言っていた、人は見かけによらないな。

まあ、先輩達の協力もあつてユニコーンの整備も早く終わった。汗かいたから早くシャワー浴びたいよ。

ガチャツ「ただいまー」

あれ？シャルルがいない、どうしたんだろう？

シャーーー

あつ、なんだシャワー浴びてるんだ。

じゃあ、シャワーが空くまで暇だな、どうしよ…………とりあえず着替えて、適当にISの設計でもしてみるか。

……………

ガチャツ

「ふう、着替えだけじゃなくてタオルも忘れちゃうなんて優希が戻

ってこないうちに早く着替えないと」

あっ、シャルル上がった・ん・ん・お、女の子？  
シャワールームから出てきた女の子は産まれたままの姿だった。

「・・・・・・・・」

「ん？・・・・ゆ、優希ッ！？えっ、な、なんでここに！？こ、こ  
っち見ないで！」

っは！しまった、綺麗で見とれてしまっていた。

「じ、じっつ、ゴメン！」

僕は慌てて目を瞑って後ろを向く、でも何で女の子がここに、  
ん？そういえばあの子なんで僕の名前を・

「そ、そのままだよ！こっち見ないで！」

あれ？この声、もしかして・・・・・・・・。

「き、着替えるから、絶対こっち見ないでね！」

女の子は奥の方のベッドに行き、仕切りを出したようだ。あつ  
ちのベッドに行っただことはやっぱりあの子は・・・・・・・・。  
部屋は静かになる、目を閉じてるから何も見えない。しばらくす  
ると仕切りを引っ込める音が聞こえた、終わった・・・・・・・・のかな？

「き、着替えたから、もういいよ」

「う、うん」

内心ドキドキしながら、女の子方を向くとそこにはジャージ姿のシャルルがいた、でもジャージの胸の部分は膨らんでいた。シャルルは顔を赤くしていた。や、やっぱり僕が、は、裸見ちゃったから？

「しゃ、シャルル、女の子だったんだ」

「う、うん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ど、どうしよう会話が続かないよ。何とかしないと・・・・・・・・。

「お、お茶入れるね、紅茶でいい？」

「あ、う、うん、いいよ」

部屋にある電気ケトルでお湯を沸かして、マグカップにティーパックとお湯を入れる、できるまでの沈黙の時間が苦しい、早くできないかな。

「・・・・・・・・もうそろそろいいかな、マグカップを持ってシャルルに渡す。」

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

シャルルは僕から受け取った紅茶を一口飲む、僕も同じように一口……渋い、砂糖入れ忘れた。

「じゃあ、そろそろ聞いていいかな？」

「あ、うん」

「なんで男のフリをしてたのシャルル？」

「それは、その……実家の方からの指示で……」

「実家のからの？」

シャルルの実家ってデュノア社だね……でも、なんで。

「僕の父、デュノア社の社長からの命令なんだ」

「父親からの……命令。でもどうして」

シャルルの顔はだんだんと曇っていく。シャルルはゆっくりと口を開いた。

「優希、僕はね。愛人との子なんだよ」

愛人との子。それを聞いて僕は絶句してしまった。

「引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんが亡くなったときにねデュノアの家の人が来たの。それで色々と検査していくうちにIS適正が高いことがわかって、非公式だけどデュノア社のテストパ

イロツトをやることになってね」

シャルルは話したくないことだろうに健気にも喋ってくれた。僕は何も言わずただ黙って聞く。

「父と話したのは二回くらい。会話は数回くらいかな。普段は別荘で生活しているんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あの時はひどかったなあ。本妻の人に殴られたよ。『この泥棒猫の娘が!』ってね。母さんもちょっとくらい教えてくれたら、戸惑わなかったのにね」

あはは、と愛想笑いをするシャルルを見て、僕はいつの間にかシャルルを抱きしめていた。

「ゆ、優希？」

シャルルは突然の行動に戸惑っているけど僕は放さずに抱きしめて頭を撫でる。

「辛かっただろうね苦しかっただろうね、もう、無理に話さなくていいんだよ」

「でも、僕は……」

「もう、無理に笑わないで。泣いてもいいんだよ、ここには僕しかいないから」

「……うえ、うええーん」

シャルルは僕の胸に顔を埋めて泣き始める。僕はシャルルが泣き

止むまで頭を黙って撫で続けるのだった。

「ご、ゴメンね優希、服汚しちゃって」

「ううん。大丈夫だよ。落ちついた、シャルル？」

「う、うん、ありがとう、優希」

うん、シャルルの顔赤くなってる。でも、僕の顔も絶対に赤くなってる！何してんの、僕！思わず抱きしめちゃったけどなんでこんな恥ずかしいことしちゃってんだろ。

「え、ええとね、続き……話すね」

「いいんだよ、無理に話さなくても」

「ううん、話すよ。ちゃんと優希に話したいんだ」

シャルルの顔は先程みたいに曇ってはいなかった。

「そう、わかったよ、だったら話してシャルル」

「うん。……僕が本邸に行ってから少し経ったときにね、デュノア社が経営危機に陥ったんだ」

「デュノア社が？」

そういえば聞いたことがあるな、欧州連合の『プライングニッシ

ヨン・プラン』にデュノア社が外されたって・・・なるほど、そういうことか。

「優希は気づいたみたいだね、そう、デュノア社は欧州連合統合防衛計画『イグニツション・プラン』から除名されたんだ。この計画に必要なのは第三世代型ISの開発、デュノア社はね量産型ISシェアは世界第三位なんだけど、元々遅れに遅れての第二世代最後期、第三世代の開発には時間とデータが不足していて、なかなか形にならないんだ。それで、政府からの通達で予算を大幅にカット、次のトライアルで選ばれなかった場合、援助は全面カットされて、その上ISの開発許可を剥奪するってことになったの」

そして、シャルルを性別を偽らせてIS学園に入学させた理由は・・・

「僕が男装してまでIS学園に入学したのには二つ理由があるの、一つは広告塔として。そしてもう一つは・・・」

シャルルの声には少し苛立ちを含んでいる。言葉の続きは想像はできるけど、僕は黙って聞く。

「優希と一夏、二人の使用機体データを取るため・・・あの人は僕に二人のデータを盗んで来いって言っただよ！」

やっぱりか、訓練のときシャルルがよく僕と一夏を見ていたのはそういうことだったんだ。

でも、この話を聞いて、僕はシャルルの父親に対しての怒りが沸いてきた。たまたま、適正があったただけなのに、自分の娘を利用するなんてことが僕には許せなかった。

「とまあ、こんなところかな。でも優希にばれちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は、潰れるか他企業の傘下にはいるだろうね。まあ、僕にはどうでもいいことかな」

シャルルは淡々と話すのを僕はただ黙って聞く。

「なんだか泣いて、話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう優希。それと、今までをウソついていてゴメン」

シャルルは僕に深く頭を下げた。でも僕は親のために頭を下げる、その姿に納得がいかなかった。

「……それでいいの？」

「え………?」

「親のこと関係なく、シャルルはそれでいいの!? シャルル・デュノアはそれでいいの!？」

「ゆ、優希………?」

僕はシャルルの肩を掴んで思わず声を荒げてしまう。シャルルは戸惑いと怯えの表情をしているけど止めない、僕は言葉を続ける。

「確かに生んでくれた親は大事だよ。でも、それでいいの!僕は許せないよ、親だからってそんなこと言っていていいはずないよ、誰にだって自分の道を選ぶ権利があるんだよ!」

「い、痛いよ、優希。ど、どうしたの? 変だよ?」

気づかないうちにシャルルの肩を強く握っていたみたいだ、僕は力を抜いてシャルルから離れる。

「ご、ゴメン。熱くなりすぎちゃった……肩、大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ、でも……本当にどうしたの？」

……僕は一夏も知らない秘密をシャルルに話すことを決心した。

「シャルル、僕はね、篠ノ乃の子じゃないんだ」

「え……？」

シャルルは驚いている、そうだよね情報では束姉の実の弟だったことになってるもんね。結構前に束姉が日本政府のデータバンクにハッキングして僕の戸籍を本当の弟にしたからね。……何やってんだろ束姉は。

「僕が三歳の時にね本当の両親と一緒に乗った車がね交通事故にあったんだ、本当だったら即死だったらしいけど奇跡的に助かってねほら、これがその傷」

僕はシャツを捲って背中を見せる、シャルルの息を呑むのが聞こえる。僕の背中には大きな傷が残っている大分消えたけどこの傷は完全には消えない、一生残る傷だと医者に言われた。

シャツを着なおしてシャルルの方を向いて話を続ける。

「僕の両親達は駆け落ちしてたみたいでね、警察とかが調べたんだけど二人に血縁がいたかわからなくてね、僕は孤児院に行くとこ

だっただけ、その時にね父さんの親友だった篠ノ乃の父さんが僕を引き取ってくれたんだ」

「篠ノ乃さんのお父さんが？」

「うん、篠ノ乃の父さんは一度も会ったことのない僕を引き取ってくれたの、母さんも僕のことを反対しないで、むしろ喜んで僕を篠ノ乃家に向かい入れてくれたんだ、そして自分の子のように愛情を注いでくれたんだ」

篠ノ乃家に行った時は幼くてよくわからなかったけどね、と少し笑いながら付け足す。

「その……ゴメン」

「気にしないでいいよ。今は篠ノ乃の父さんに母さん、束姉も箒姉もいるし。……だからかなシャルルを道具のように使うそのデュノア社の社長、シャルルの父親が許せないんだよ！」

「……」

「ゴメンね、また声を荒げちゃって。でも、どうするのこれから？」

「どうって……時間の問題じゃないかな、フランス政府もことの真相を知ったら黙っていないだろうし、代表候補生をおろされて、よくて牢屋かな」

「……それでいいの？」

「良いも悪いもないよ、僕には選ぶ権利はないから、仕方がないよ」

そう言って見せたシャルルの微笑みは痛々しかった。せつかく友達になったのに僕は何もできないの、ずっとウソをついて騙していたしてもシャルルは僕の友達だ、何か、何かいい方法はないの！考えろ、考えるんだ！……っは、そうだ、あれだったら。

「ここにいればいいよ」

「え？」

「シャルル、特記事項第二十一ってわかる？」

「特記事項第二十一って、確か……まさか！」

シャルルは特記事項は覚えてたみたいだね、すぐに理解したみたいだ。

「そう、特記事項第二十一。本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意しない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする。これを使えば最低三年はシャルルはフランスに戻らないですむよ、その間に何か方法を考えよ」

「た、確かにそれを使えば戻らないですむけど」

うん、無茶を言ってるのはわかる、これは僕のがままだ、でも僕はシャルルに諦めて欲しくない。だから僕は自分ののがまます。

「……優希、勝手過ぎるよ。でもよく五十五個もある特記事

項を覚えてたね？」

「僕はできたばかりの友達をなくしたくないんだ。それに、僕は記憶力はいいいからね特記事項は全部覚えてるよ」

「そうなんだ。ふふっ」

やっと笑ってくれた、先程のような作った笑顔じゃなくて年相応の女の子の笑顔だった。

（う、シャルルの笑顔って、か、可愛いな。今までは男だっと思ってたからそうは思わなかったけど・・・）

シャルルの顔立ちは良いけど、周りに纏っている優しい雰囲気がそれを引き立てている。そのせいかシャルルがとても可愛く見える。心臓の鼓動がはようになってるのがわかる。

「う、うん、とにかく決めるのはシャルルなんだよ、考えよう。僕も手伝えることがあったら手伝うからさ」

「うん、そうするよ。ありがとう優希」

話はここで切り上げてすっかり冷えてしまった紅茶を一口飲む、うえ、渋い。

そういえば今何時だろう、と時計を見ようとしたらシャルルと目が合った、なんか恥ずかしくなったので目を背ける。

「ん？どうしたの？」

「いや、なんでも・・・」

シャルルは顔をのぞき込んでくる。心配してくれるのはありがたいけどその角度だと、その……胸元が……。

「と、とりあえず、は、離れて、シャルル」

「どうして？」

「そ、その……む、胸元が」

そういつとシャルルは一気に頬を染めて僕から離れて胸元を隠す。

「え、えっち……優希も男の子なんだね……」

「う、ゴメン……」

うう、さっきから心臓がバクバクいつてるよ、お、落ち着け、落ち着くんだ僕の心臓。

「……」

「……」

何を話せばいいかわからず黙ってしまう、それはシャルルも同じみたいで顔を赤らめて僕の方をチラチラと見ている。

ふと時計を見ると、もう夕食の時間になっていた。結構話していたんだな。

「えーと、シャルル」

「な、なに、優希」

「僕、夕食を取りに行ってくるね」

「え？夕食？」

「うん、だってもうこんな時間だし」

「だったら僕も……」

「いや、シャルル、その格好で行くつもり？」

「あ！」

今のシャルルの格好はいつものラインの入ったカッコイイジャー  
ジなんだけどコルセットを巻いていないからか胸元が膨らんでいて  
一目で女の子だってばれてしまう格好だった。

「今から着替えるのは面倒でしょ、僕が持ってくるよ。なにがいい  
？」

「わ、わるいよ、そんな」

「いいから、いいから、で、なにがいい？」

シャルルはうー、と唸っていたけど諦めたのか、申し訳なさそう  
に僕に注文する。

「じゃ、じゃあ、お魚の料理を……」

「魚ね、わかった」

「優希！」

僕はドアを開けて外に出ようとするとシャルルが呼び止めた、どうしたのかな注文変更？

「その、ありがとう……」

「どういたしまして」

そう言っ僕はドアを閉めて部屋を出る。

さて、これからどうしようか……とりあえず、いざという時のためにフランス政府との交渉材料を作っておこうかな。

そんなことを考えながら僕は食堂に向かっていく。……僕は何にしようかな、カレーな気分でもあるんだけど、なんかカツ丼も食べたくなってきたー、どうしようかな？

## 第十六話（後書き）

・ ・ ・ ・ ・ 文才が欲しい。

シャルの真実のところがうまく書けない ・ ・ ・ ・ ・ 文才が欲しいです。

## 第十七話（前書き）

第十七話です。どうぞ！

## 第十七話

「…………一夏、何してんの？」

食堂に向かう途中に両手に花状態の一夏に遭遇した。

「ゆ、優希か助けてくれ」

「む、優希」

「あら、優希さん、夕食ですか？」

箒姉とセシリアさんが腕にひつついて……なるほど、いつもと同じで一夏の取り合いか……。

「あ、はい、そうです」

「そ、そうか、だったら優希、一緒に食べないか？」

「ゴメン、シャルルが具合悪いみたいだね。夕食は部屋で取ることにしたんだ。だから三人で食べてきてね。一夏ちゃんとエスコートしなきゃだめだよ」

箒姉達の邪魔はしないよ、残念だったね一夏、僕は箒姉達の味方なんだ。

「う、わかった」

「そつだな、優希の言つとおりだな」

「そうですね、さすが優希さん、よくわかってらっしゃいますわ」

二人が一夏の腕を締める力が強くなった、痛そうにしてるけど一夏、原因は君の鈍感さにあるんだよ。

そういえば箒姉の持っているが気になる。竹刀じゃなさそうだな。

「箒姉、それって……？」

「ん？ああ、実家から送ってもらったんだ、優希も知っているだろ  
『<sup>あけよい</sup>緋宵』だ」

袋の紐を解いて、ほらっ、と刀を見せる箒姉。いや、それはわかるけど、どうして真剣を持ってるの……って、そうか、ここIS学園は『どこにも所属していない国』だったね。真剣を持っていたも捕まることはないか。

「優希も使いたいたときは貸してやるからな」

いや、僕は使うことないからね、箒姉。

「じゃ、僕、行くね。シャルルも待ってるし」

「おお、シャルルにお大事につて伝えといてくれ」

「うん、わかった伝えとく」

一夏達を追い越して食堂に早足で向かう。混んでなきゃいいな。

「失敗した……」

シャルルの分も持つてくるって言ったのは失敗だった、考えてみれば僕が二人便の料理を運ぶのって無理があったか……。重い。まあ、でっかいお盆を貸してもらえたのがせめてもの救いだった。

でも、ようやく部屋に着いた。ドアを開けて、あけ……。しまった、両手がふさがって開けない！ど、どうしよう。

ふう、しょうがないシャルルに開けてもらうか。手は使えないし、蹴るか。

ガンッ！ガンッ！

強くしすぎたかな？まあ、これでシャルルは気づいただろう。

「だ、誰……？」

あ、来た。

「シャルル、僕だよ、ドア開けて」

「えっ、優希？い、今開けるよ」

ガチャッ

「ふう、開いた」

「ゆ、優希！大丈夫？持つよ」

「ありがとう」

あー、ようやく軽くなった。やっぱりもうちょっと筋トレしたほうが良いかな？でも、しようとするとう姉とかが止めるんだよね、何でだろ？

「シャルルは焼き魚定食でよかった？」

「あ、うん、大丈夫だよ。優希は何したの？」

「ん？僕はねカツ丼」

「かつどん？」

シャルルは知らないか、まあ、日本の料理だもんね。

「カツ丼ってのはね、豚肉のフライをタレと一緒に煮込んでご飯の上に乗せた料理かな……」

「ふーん、そうなんだ」

「まあ、食べよ。僕、お腹すいちゃった」

「そうだね、食べよっか。あっ！」

ん？どうかしたのかな？

「どうしたの、シャルル……って、ああ」

しまった、定食にしたから、箸を持ってきちゃったよ。シャルルがフランス人ということ忘れてた。

「ゴメンね、フォークとスプーンとってくるよ」

「い、いいよ、お、おいしそうだなー。いただきます」

いや、シャルル箸を持つ手がプルプルしてるけど……。

「あっ」

ぼろっ。

「あっ、あっ……」

ぼろっぼろっ。

はあ、しょうがないな、もう……。

「やっぱり、フォークとか取ってくるよ」

「い、いいよ。なんとかこれで食べてみるから」

「で、でも……」

「シャルル、自分ひとりでがんばるのはいいけどさ、すこしは甘えたほうがいいよ」

「う、うう……」

今まで味方がいなかったから誰かに頼るのが苦手なんだろうな、どうすればいいか悩んでるよ。

「いきなりは難しいかもしれないけどさ、ゆっくりと慣れていこうよ、僕はシャルルの味方だからね」

「優希……、じゃ、じゃあさ、あの……」

「ん？やっぱ、フォークとか取ってくる？」

「そ、その……。ゆ、優希が食べさせてほしいな、前みたいに」

うつ、シャルル、上目遣いはずるい、断れないよ。

「わ、わかった。じゃあ、その……。あーん」

「あーん」

シャルルは僕の差し出した魚の身をぱくりと一口、なんか恥ずかしいな、これ。シャルルの頬も少し赤くなってる気がする。

「お、おいしい？」

「う、うん、おいしいよ」

「そ、そう」

「じゃ、じゃあ、その、次はご飯がいいな」

「こ、ご飯だね、はい、あ、あーん」

「あ、あーん」

シャルルに食べさせるたびにすごくドキドキする。でもなんか、これって雛鳥に餌やるみたいでいいな。

「つ、次は和え物が良いな」

「あ、和え物だね」

結局、最後まで僕はシャルルに食べさせることになった、終わった頃には僕のカツ丼は冷え切っていた。うう、カツ丼……。食事が終わったときには会話も殆どなくなって、食べ終わったら僕たちはベッドに入ってた。

今日はシャルルのこととか色々ありすぎて、なんかとっても疲れたのか、僕はすぐに眠りについた。

月曜日、教室に入ったらなんか騒がしい、セシリアさんと鈴もいるどうしたんだろ？

「なんだ？」

「さあ？」

とりあえず近くにいた子の話を聞いてみよう。

「本当だつてば！この噂、学園中で持ちきりなのよ？月末の学年別トーナメントに優勝すると織斑君と交際でき……」

「俺がどうしたって？」

「「「きゃああっ!?!」「」」

うわっ！お、驚いた。ど、どうしたんだ、いきなり。一夏が普通に話しかけただけなのに。

ん？箒姉、どうしたんだろ？なんか様子がおかしいような・・・？あとで聞いてみよ。

いつの間にか集まっていた女子達は自分のクラス・席に戻っていた。

「・・・・・・・・なんなんだ？」

「「さあ?」「」

あっ、ハモツた。

時間は飛んで、放課後、僕は箒姉と屋上に来ていた。どうして屋上に来ているのかというと、朝の箒姉の様子が気になってここまで連れてきたというわけだ。

「箒姉、なにかあったの？」

「ど、どうしたんだ、優希、いきなり」

「いや、なんか様子が変わったからさ」

「な、何もないぞ」

うーん、箒姉って昔から一人で解決しようとして相談とかしないからな。

「箒姉、話してよ、僕達は姉弟でしょ」

「う．．．わかった。優希、相談があるのだが．．．．．」

「うん、いいよ、なんでも聞くよ」

「そ、そのだな．．．．じつは」

「うん？」

どうしたんだろ、そんなに言いにくいことなのかな？

「実は．．．．一夏に、じ、こじ、告白したんだ」

「へ？」

．．．．．こくはく？酷薄？（NO）刻薄？（NO）告白？  
（YES！）えええええー！！！？

「こ、告白ってホント！？」

「あ、ああ」

信じられない。いや、いつかするとは思ってたけど、まさかこん

な早くするとは……あれ？

「でも、一夏の様子は全然変わってないけど？」

「い、いや、今月の学年別トーナメントで優勝したら付き合ってくれっ、と言ったんだ」

「そ、それは大きくでたね篝姉……でも、なんで悩んでるの？」

「いや、実は学園内でその……トーナメントで優勝したら一夏と付き合えると噂されていて」

あー、なるほど、そういうことか。

「付き合えるは私だけのはずだ！一夏もいいぞって言ってたのに何でこんな状況になるのだ！」

へえー、一夏OKしたんだ……あれ？でも、あの鈍感な一夏が簡単にOKするとは思えないんだけどな。

ここは、篝姉の言ってたことを思い出してみよう。えーと……

『い、いや、今月の学年別トーナメントで優勝したら付き合ってくれっ、と言ったんだ』

……あー、これは、どうしよう篝姉に言ったほうがいいのか……？いいよね？篝姉のためだよね、うん。

「あ、あのさ、篝姉、とても言いにくいんだけどさ」

「ん？なにがだ優希？」

「あの、その、一夏がOKしたのって多分だけど買い物に付き合うってことじゃないかな……」

「……どういことだ、優希」

「いや、だってさ、あの一夏だよ、鈍感な、そんな遠回りな言い方をしたら一夏は絶対にそう理解すると思うよ」

「そんなことは……いや、でも……そんな……」

あー、箒姉に悪いことしちゃったかな、でも、後々からわかるよりも今のうちに知つといた方がダメージは少ないから、こっちのほうがいいよね。

でも、箒姉、落ち込んでるな……しょうがない、アドバイスするか。

「箒姉、大丈夫だよ」

「優希……？」

「一緒に買い物をするってことはデートだよ、ライバル達と差を開く為のチャンスだよ」

「チャンス！？」

「そうだよ、チャンスだよ！より親密になるための、だから落ち込んでたら一夏は落とせないよ！」

「そうだな！こんなところで挫けてられないな！ありがとう優希！」

よし、箒姉復活！でも、一夏、女の子の告白を勘違いするなんてちょっとひどすぎない？よし、決めた、今日はずつと一夏を的にした射撃訓練にしよう、ダンマクノアメヲフラセテヤル……。

「では、行くぞ！優希！」

「え？」

あの？箒姉手が痛いんですけど？それと引つ張らないで欲しいな、僕はちゃんと歩けるからね。だから引つ張らないで、あ、ちよつ、こわ、階段が！？待って箒姉、ホントに！ああーーーーー！

「だ、大丈夫？優希？」

「なんとか……………」

人間ってすごい勢いで引つ張られると浮くんだね…………怖かった。箒姉は一夏に話しかけていて僕の状態に気づいてないし、シヤルルの優しさが心に沁みる…………。

ドカーンッ！

「な、なんだ！？」

「アリーナの方からだ！」

ば、爆発音！？と、とりあえずアリーナに急ごう！

「「「「！？」」「」」」

「鈴！セシリア！」

鈴とセシリアさんが苦しい表情で『シユヴァルツェア・レーゲン』を纏ったボーデヴィツヒさんを睨んでいた。

二人のISは所々損傷していて、場所によってはアーマーが完全に失われていた。一方のボーデヴィツヒさんは無傷とはいえないけど損傷は少ない。完全にボーデヴィツヒさんの優勢なのがわかる。

「くらえっ！！」

鈴が衝撃砲を最大出力で撃った、訓練機などの量産型ISだったら一撃で沈められる攻撃なんだけどボーデヴィツヒさんは回避もせずに手を前に出しただけで鈴の攻撃はかき消された、あれって……まさか？

そのまま戦闘を続ける三人、でも、鈴とセシリアさんの連携攻撃を楽々といなして攻撃を加えるボーデヴィツヒさん………つよい。

代表候補生二人を相手にあれだけの戦闘………機体の性能もあると思うけど、あれは操縦者の腕もある、しかも鈴には相性悪い敵だ、あの二人………負けるかも。

って、セシリアさん、至近距離でミサイルって………無茶するな。でも、これならかなりのダメージを与え………だめか、装甲も相当なものだな、あの機体。

それから一方的な攻撃が始まる、二人をワイヤーブレードで絡み付けてから殴る、蹴るの攻撃……。やばい、あれ以上は危険だ！  
って、一夏！？なに白式を展開してるの！？しかも零落白夜を最大出力で発動してるし。

「おおおおっ！！」

一夏は雪片式型をバリアーに叩きつける、あらゆるエネルギーを消滅させる零落白夜がアリーナのバリアー切り裂いて一夏はアリーナに入ってしまった。そのまま瞬間加速をしてボーデヴィツヒさんに切りかかった。

「あーもう！シャルル！」

「うん！」

僕達もISを展開して、バリアーの中に入る。

「第姉は待つてて！」

「ゆ、優希！？」

一夏が雪片式型を振り上げた状態で動きが止まっている。やはり、AICかつ！厄介な能力だな……。

動きが止まった状態のままボーデヴィツヒさんがレールカノンの照準を一夏に合わせる。でも、シャルルがアサルトライフル二丁を撃って邪魔をした。

AICによる拘束が外れた一夏はセシリアさんと鈴を抱えて離脱する。

「ちっ……。雑魚が……。」

ボーデヴィツヒさんが二人を抱えたままの一夏にレールカノンを向ける。

させない！ビームマグナムをコールしてボーデヴィツヒさんに照準を合わせて撃つ！

「っ……！？小動物が……！」

外れたけど、注意はこっち向いた。これでいい。

「一夏……。二人は……。」

「大丈夫だ……。二人とも意識はある」

そうだったら、よかった……。

「優希」

シャルルがライフルの銃口をボーデヴィツヒさんに向けたまま僕の隣に来る。

「ふっ……。いいだろ、実力の差を教えてやろう……。いくぞっ！」

……。くるっ！ボーデヴィツヒさんがこちらに向かってこようとした瞬間、僕達の間影が割り込んできた。

ガキンッ！

え？あれって千冬さん！？なにやってんですか！？しかも持っているのってIS用の近接ブレードだし、それをISの補助なしで片手で使ってる・・・あなた本当に人間ですか？（あなたの姉も補助なしで使えます）

「・・・やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「千冬姉！？」

「模擬戦をするのは構わん。・・・が、アリーナのバリアーまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るなら」

ボーデヴィツヒさんは千冬さんの言葉には素直に頷いて、ISを解除した。

「織斑、篠ノ乃、デュノア、お前達もそれでいいな？」

「あ、ああ」

「教師には『はい』と答える。馬鹿者」

「は、はい」

千冬さんにギロツと睨まれて一夏は言い直す。千冬さん、相当苛立ってるな。

「僕はそれで構いません」

「僕も」

僕達の返事を聞くと、千冬さんはアリーナにいる全員に聞こえるように言った。

「では、学園別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散!」

千冬さんはパンツと手を叩いた、その音は銃声のように鋭い音だった。

## 第十七話（後書き）

いやー、昨日けんぷファーを見たんですけど・・・いいですね。いつか番外編で優希をTSさせてみたいです。

あまり期待しないでくださいね。作者は文才ありませんから。では、次回の更新で。

## 第十八話（前書き）

遅くなってしまう、まことに申し訳ありません。  
第十八話です。



ん？なんだろうこの音？前にも聞いたことが・・・いつだっけ？（第六話）

・・・そうだ、箒姉がすごい勢いで廊下を走った時の音だ。ってことは、まさか・・・！

ドカーーーンッ！

うわっ！？ドアが吹っ飛んだ！開くじゃなくて吹き飛んだ！ちよっ、なに！？どうしたの！？

「織斑君！」

「デュノア君！」

「篠ノ乃君！」

女子が雪崩れ込んできた、五十人くらいが一気に入ってきた。その全員が僕達に手を伸ばしてくる。こ、怖い。ど、どうしたの・・・？

「「「「「これ！」「」「」「」」

ん？なにこの紙？申込書？てか一人でいいよ、全員が出さないで怖いって。

「な、なになに・・・？」

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦を行うため、ふたり組での参加を必須とする。なお、ペアができなかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切り

は――」

「ああ、そこまでいいから！とにかくっ！」

また、みんなが手を伸ばしてくる。だから、怖いよ……。

「私と組もう、織斑君！」

「私と組もうよ、篠ノ乃君！」

「私と組んで、デュノア君！」

いきなりの仕様変更で混乱してるけど大体わかった。ペアに関しては僕は誰とでもいいけど。これはヤバイ。シャルルは女の子だ、誰かと組んだ時にバレてしまう可能性もある。だったら僕が取る行動は一つだけだ。

「ご、ゴメンね！僕はシャルルと組むことにしてんだ」

しーん……。あつ、静かになった。

「まあ、そういうことなら……」

「他の女子と組まれるよりはいいし……」

「まだ、織斑君がいるし……」

全員の視線が一夏に向く。ハイエナみたいだなみんな……。あれ？一夏が口パクでなにか言ってる、なにになに……？

『う・ら・ぎ・っ・た・な』か……。裏切ってなんかないよ別に、ちゃんと助け舟は出すよ。篝姉のためにもなるし。

「そつえばさ、一夏って箒姉と組むんじゃなかったっけ？」

「え？あ、ああ、そうだったな！忘れてたぜ！ありがとな優希！」

助け舟は出したよ一夏。まあ、あとは知らないけど。

「ちっ！すでに手が回っていたか……！」

「チャンスだったのに……」

「ちえー」

。そう言いながらみんな不満そうに保健室から出て行った……でも、壊れたドアって誰が直すのかな……？

「ふう……。たすかつ……」

「一夏っ！あ、あたしと組みなさいよ！幼馴染でしょうが！」

「いえ、一夏さんっ！クラスメイトとしてここはわたくしと！」

あー、やっぱりきたか、もう助け舟は出さないよ。まあ、出さなくてもふたり共ペアは組めないけど……。

「ダメですよ！」

あっ、山田先生だ。

「おふたりのISの状態をさつき確認しましたけど、ダメージレベルがCを超えています。当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。ISを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可できません」

あー、やっぱりか、まあ、あれだけ壊れてればダメージレベルCはいくよね。

まあ、これで、ふたりは引き下がるしかないでしょ、それでもやるって言うなら代表候補生失格だね。

でも、一夏がなんでふたりが諦めたのかわかってない顔してるな．．．．．。本当に勉強してるのかな一夏？これってIS基礎理論だよ。

忘れないうちに言うておくか．．．ふたりに聞こえないように．．．。

「一夏、箒姉に口裏合わせなくていいの？」

「あつ、そうだった！ゴメン、俺行ってくる！セシリア、鈴お大事に！」

「ちよっ．．．．、一夏あ！」

「お待ちなさい！一夏さんっ！」

セシリアさんと鈴の制止を振り切って、一夏は走っていつてしまった。さて、箒姉にメールするか．．．えっと、『トーナメントは一夏と組んでね。箒姉、がんばれ！』っと、送信。

「じゃあ、僕達も行くね、二人共、お大事に。行こうシャルル」

「あつ、うん、オルコットさん、凰さん、お大事に．．．」

僕達も保健室から出ていく．．．．ドア、ほんとにどうするんだろ？

夕食も食べ終わって僕達は部屋でのんびりとしていた、んゝ．．．  
おなかいっぱいになったら眠くなってきた。

「あ、あのね、優希っ」

「んゝ？」

「あの、遅くなっちゃたけど．．．保健室で助けてくれてありが  
とっ」

「べつに気にしないでいいよー」

「ううん、でも、優希がトーナメントのペアを言い出してくれたの、  
すごく嬉しかった」

「そゝなんだ、だったらよかった．．．ふあゝゝゝ．．．た」

あう、やばい目蓋が落ちてきた．．．．．眠い．．．．．。

「優希、眠いの？」

「うん．．．、眠い．．．．．」

「優希、寝るんだったら、着替えないと」

「んゝ．．．．、着替えるゝ」

ん〜、制服脱いで…………。

「うわわっ!?!」

…………どうしたんだろ、シャルル…………? まあいいや、それよりパジャマ…………。

…………できた。おふとんがぼくをまっている…………。

「シャルル、おやすみ…………」

「う、うん、おやすみ」

明日からトーナメントに向けて…………がんばろ…………。

「…………寝ちゃった」

くすつ、お腹がいつぱいになって眠くなるなんて子供みたいだな…………優希は。

「…………すー…………すー…………うにゅ…………」

うにゅ、って…………かわいいな〜優希は。

(こんなに小さな体で僕を抱きしめてくれたんだね…………)

…………お母さんが死んでからあんなに泣いたのって初めてだったな。血の繋がりのだけのあの人のところに行ってから、何もかも

が空っぽな感じで、ただその繰り返し．．．．。日本に行くことになっても何も感じなかった。

でも、優希に抱きしめられて声をかけられた時、僕は泣いていた．．．優希の温かさが優しさが空っぽだった僕を満たしてくれた．．．だからね．．．

「優希．．．ありがとう」

優希の額にキスをする。

．．．．．思わずしちゃったけど、は、恥ずかしいな。ぼ、僕も寝よう．．．。

「．．．．．おやすみ、優希」

そして、ありがとう．．．．。

．．．．．その前に寝顔の写真撮って良いかな？

「優希、シャルル、勝たせてもらっぞ！」

「優希、本気で行くぞ．．．．．け、怪我をさせなければいいよな（ボソツ）」

．．．．．まさか、一回戦の相手が一夏と篤姉だとは思わなかったな。しかも一夏は二回戦の相手がボーデヴィツヒさんだからか

すごく張り切ってるし。

『優希、どう戦う？やりにくいなら僕が篠ノ乃さんの相手しようか？』

プライベート・チャンネル  
おっと、秘匿回線だ。そうだなー、二人とも完全に近接型だし・  
・・・よし。

『シャルル、僕が箒姉とやるから、一夏の方をお願い』

『了解、じゃあ、行こうか』

この、数日間ずっと連携の訓練してたんだ、勝たせてもらっようー  
夏、箒姉！

ビーーーーッ！

「おおおーーーーっ！！」

「はああーーーーっ！！」

開始のブザーがなった瞬間二人はこちらに突っ込んできた。まあ、距離を取られたたら攻撃手段は無いもんね二人とも。

「じゃあ、シャルル！」

「わかってるよ、優希！」

一夏は僕を、箒姉はシャルルを狙ってたみたいだけど、残念そう  
はさせないよ。僕はビームガトリングを展開しながら頭部のレーザ  
ーバルカンを箒姉の進路に撃ち込む。シャルルもアサルトライフル

を一夏に撃つ。

「うわっ……!?!」

「くっ……!」

一夏は何発か当たったみたいだけど、箒姉は避けられて当たらなかった。まあ、牽制だから当たらなくていいけど。

「箒姉の相手は僕だよ」

「優希……わかった、いくぞっ!」

よし、箒姉の武装はおそらく近接ブレードだけ、射撃武装は付いてないだろう。でも、箒姉の剣術は油断できない。

「はああーーーーっ!」

箒姉はブレードを構えながら接近してくる。でも、僕の武装がビームガトリングだつてことを忘れてない?

銃身の横に付いているグリップを握り構えて撃つ!

「くっ……!近づけない」

絶え間なく撃ち出されるビームは箒姉に当たらない、でもこれだつたら安易に近づけないはずだ。

「逃げてばかりじゃ勝てないよ、箒姉!」

「ぐっ……」

避けられてるけど少しずつ当たってシールドエネルギーを削っていく、シャルルの方も一夏を豊富な射撃武装で追い込んでるみたいだ。

ん？あつ、ガトリングのエネルギーが切れた、トリガーを引きっぱなしだったしな。

「もらったっ！」

「うわっと!？」

ガキンッ！

あ、危ない、箒姉速いな、結構距離を取ってたのに。でもシールドで防いだからダメージは無い。バルカンを撃って牽制しながら一旦距離を取る。

『シャルル、そっちはどんな感じ？』

『あ、うん、いい感じにダメージを与えてるよ。優希』

『ん？なに？』

『僕の合図と同時にビームマグナムを撃ってくれない』

『ビームマグナムを？……………わかった、シャルルの言うとおりにするよ』

『ありがと……………じゃあ、行くよ!』

シャルルが瞬時にアサルトライフルからサブマシンガンに交換す

高速切替ラビット・スイッチシャルルの得意技だ、事前呼び出しを必要とはしなくて戦闘と平行して行われるリアルタイムの武装呼び出す技能。  
サブマシンガンを掃射して一夏を誘導する。僕はガトリングを収クロ納してビームマグナムを展開するして移動する。

「逃がさないぞ、優希！」

移動する僕を箒姉が追ってくる。

『優希、今！』

「当たれっ・・・！」

「くうっ・・・！」

シャルルの合図と同時にビームマグナムを構えてトリガーを引く。高出力のビームが箒姉に迫る。けど、ギリギリで避けて当たらなかった箒姉には

「うおおっ！？」

「なっ！？い、一夏！？」

高出力のビームが一夏に直撃した。先程のシャルルからの攻撃でエネルギーは半分減っていただろうから今ので0になっただろう。箒姉は一夏がやられたのを見ていて動きが止まっている。僕自身もどうして一夏に当たったのかわからなかった。

でも、その隙をシャルルは見逃さない。

「もらった！」

「はっ、しまった!？」

シャルルは箒姉に接近して両腕に装備したショットガン『レイン・オブ・サタデイ』を連射する。至近距離で撃ちだされた散弾は箒姉のシールドエネルギーを容赦なく削っていく、0にした。か、勝ったけど、なんかシャルルの一人勝ちみたいだな。

「くっ・・・不覚!」

「優希、やったね」

「あ、うん」

「ちくしょー、負けたー!」

『それでは、両チームはピットに戻ってください』

おっと、次の試合もあるから早く戻らないと。

「戻るよー、一夏」

「お、おう」

だて、次はあのボーデヴィツヒさんか、がんばろう!

「ふっ……今度の相手は小動物か」

「また、小動物って……」

「優希、気にしない方がいいよ」

トーナメント二回戦の相手はボーデヴィツヒさんのペアだった。でも、いきなり僕のことを小動物ってのはちょっと傷つくんだけな……。まあいいや、それより気になるのは……。

「……………」

ボーデヴィツヒさんのペアの人が凄い形相で僕を睨んでるんだけど、なんで？

「優希？あの人すっごく優希を睨んでるんだけど、なにかしたの？」

「いや、特に覚えは無いけど……………」

そもそも、僕、あの人に会ったことって……………あつ。

「思い出したの？」

「うん、あの人って二組のクラス副代表だ」

「二組の？でも、なんで優希が知ってるの？」

「えーとね、シャルルが来る前に副代表同士の試合をしたんだ」

「へえー、そうなんだ。ねえ、優希、ちなみに結果はどうだったの」

『?』

『結果は、開始三十秒くらいで勝った。無傷で』

うん、余裕で勝ったね、あの時は。

『あー、それだね、原因は。あの人、絶対優希に逆恨みしてると思うよ』

『えっ、ほんと?』

『うん、あの人プライド高そうだしね』

あー、完全な女尊男卑タイプの人か。まあ、珍しくは無いけどね、それで男にやられたっていうことで僕を恨んでるのね。

『それでは、両チーム定位置に移動してください』

おっと、始まるか。移動しなきゃ。

「優希、がんばろう」

「うん!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あちらもやる気満々みたいだね、開始まであと十秒・・・・・・・・、  
五、四、三、二、一。

ビーーーーッ！開始のブザーが鳴った。試合開始だ！

## 第十八話（後書き）

遅くなつてしまい、本当にすみません。第二次スパロボZが面白くてなかなか書けませんでした。

次はなるべく早く更新できるように努力します。

## 第十九話（前書き）

十九話です。

## 第十九話

開始のブザーが鳴ると同時にあちらは動き出した。

「叩き潰すっ……っ！」

「篠ノ乃優希！」

って、二人の狙いは僕！？ボーデヴィツヒさんは腕部に付いているプラズマ手刀で、二組の副代表さんは近接ブレードで斬りかかってきた。どうやらラファールに打鉄の近接ブレードをインストールしたようだ。

「っ……っ！」

ボーデヴィツヒさんはビームサーベルを受けて、二組の副代表さんのシールドで受けて何とか防いだ。あ、危なかった、いきなりすぎて避けられなかった。

「優希！」

「……っ！」

「くっ……っ！邪魔しないで！」

二人が押し切ろうと力を加えようとした瞬間にシャルルがアサルトライフル《ヴェント》を撃って援護する、すると二人は僕から離れたけど二組の副代表さんはターゲットをシャルルに変えたらしくて今度はシャルルに斬りかかった。

「シャルル！」

「大丈夫、こっちは僕に任せて。優希はボーデヴィツヒさんをお願い！」

シャルルは振り下ろされるブレードを近接ブレード《ブレット・スライサー》で捌きながら距離を取っていく、ここはシャルルの言うとおりにして僕はボーデヴィツヒさんに集中しよう。

「わかった！」

「ほう……私の前でお喋りとは余裕だな！」

「っ！」

シュバルツエア・レーゲンのアンロック・ユニットの否固定浮遊部位からワイヤーブレードが射出された、撃ちだされたブレードは不規則な動きをしながら僕に迫ってくる。

僕はレーザーバルカンで撃ち落とそうとするけど当たらない、当たったとしても破壊までには至らない……………だったら！

「これで……………どうだ！」

ホーミングしてくるワイヤーブレードに向けてビームマグナムを撃った。放たれたビームは直撃はしなかったけどワイヤーブレードを全部破壊した、掠っただけでシールドエネルギーを大幅に削る程の威力だ壊せないはずが無い！

「っ……………！やってくれるな！」

ボーデヴィツヒさんは残ったワイヤーブレードを射出する、そして右手を前に突き出した。あれはっ！やばい！

僕は急いでその場から離れた、でも急に動いたせいで体勢を崩してしまつて、飛来してきたワイヤーブレードに左腕部のシールドを弾き飛ばされてしまつた。

ダメージはない・・・大丈夫だ、でもあれにはAICには当たつてはいけない。

AIC（アクティブ・イナーシャル・キャンセラー）、ISの飛行に用いられる基本システム、その発展型だ、一対一だと反則気味な装置だけど・・・やりようはある！

「ほう、このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界をかわすか・・・だが、いつまで避けられまい！」

ボーデヴィツヒさんは先程と同じようにワイヤーブレードとAICを僕に放ってきた、さつきは驚いてあんな避け方になつたけど来るとわかつてるんだ、先程みたいにはいかない！

機体を少し移動させてAICの範囲外へやつて、ビームマグナムをワイヤーブレードで撃ち落とす、これであのワイヤーブレードは殆ど撃ち落としたはずだ。

「ぐっ・・・！貴様やつてくれたな！」

またワイヤーブレードを撃ち落とされたボーデヴィツヒさんは僕に右肩の大型レールカノンを発射した。

「くっ・・・！ええいつ！」

「当たるかつ！」

それを避けて僕もビームマグナムで反撃する、けど軽々と避けられた。

（ヤバイ……ビームマグナムを撃てるは後一発、予備のカートリッジ持ってくればよかった。こうなったら当たらないとしても撃ち尽くしたほうが良いな）

「いけっ！」

「当たらんと言っている！」

やっぱり当たらないか……だったら「きゃあっ!？」……

・あれ？

副代表さんが膝を着いている、ラファールからも煙が出てるし……もしかして、今の当たったの？

「優希、ありがとう、この人しつこくて困ってたんだよ」

「え？」

「ほう……私を狙ったフリをして本当の狙いはあっちというわけか」

「あれ？」

あれー、なんか勘違いされてるー、僕そんな器用なことできませんよー……って、副代表さんがまた僕をすごい目つきで睨んでる。その、なんか……ごめんなさい。

……まあ、何はともあれ一人倒したんだこれで二対一だ、

勝率は上がる。

「ふんっ、雑魚を倒しただけで私に勝てると思うなよ……  
イグニッション・ブースト  
瞬時加速！」

ボーデヴィツヒさんはイグニッション・ブースト瞬時加速で一気に加速して僕に接近、プラズマ手刀を振り下ろしてきた。

「くっ！？」

ボーデヴィツヒさんの攻撃をプラズマ手刀をビームマグナムの銃身で受ける、銃身はすぐに切り裂かれたけど構わずに距離をとるために離れようとしたが……。

「逃がすかつ！」

「ぐあっ！？」

「優希！」

レールカノンの直撃を受けてしまった、至近距離で放たれた対IS用徹甲弾の衝撃は絶対防御を突き抜けて僕にダメージを与える。

「まだまだ！」

ボーデヴィツヒさんが右手を突き出した瞬間、僕の体はその場に固定されたのように動けなくなった、やばいつ、AICに捕まった。

「喰らえっ！」

ボーデヴィツヒさんはAICによつて動けなくなつた僕にまたレールカノンに向ける、またあの大口徑を喰らつたらやばい、さっきのすでにシールドエネルギーは半分は切っている……でも、忘れてないボーデヴィツヒさん？僕達は二人組みなんだよ。

「僕を忘れてもらつたら、困るよ！」

「なっ!？」

ボーデヴィツヒさんの不意を着いて接近したシャルルが《レイン・オブ・サタディ》をゼロ距離でレールカノンに連射した、するとレールカノンは轟音を上げながら爆散した。

「くっ……!」

AICの弱点……それは使用時には対象に集中していなくてはならないことだ、一対一では最強ともいえる能力だけどこの二対一の状況じゃ逆に大きな隙を作ってしまう、これを利用してもらった。

これで、シュヴァルツェア・レーゲンの武装は腕部のプラズマ手刀だけだ、この勝負もらった！

「優希！」

「はあああ———!!」

両腕部のビームサーベルを引き抜いてそのまま、振り落とす。

「くっ……!」

「後ろがガラ空きだよ！」

振り下ろされた一撃はプラズマ手刀で受け止めた。でも、シャルルはボーデヴィツヒさんの背後に移動し追撃をする。

ダダダダダダッ！

サブマシンガンの銃弾が容赦なくシールドエネルギーを削っていく。

「ぐうつ………！雑魚があ！」

罅迫り合いになっていた僕はボーデヴィツヒさんに腹を蹴られて吹き飛ばされた、そしてそのまま片手をシャルルに向けてAICを放った、銃弾は届かなくなりシャルルの動きは止まる。

「ぐつ………！」

「このまま叩き潰つ《ドカーンッ！》………何っ！？」

AICを使ってシャルルに集中しているボーデヴィツヒさんにバズーカを撃つ、放たれた弾頭はそのままシュヴァルツェア・レーゲンの背部に命中した。

「だから、言っただでしょ、僕達は二人だって」

「貴様………！！」

プラズマ手刀で僕に斬りかかろうとするボーデヴィツヒさん、だけれど残念、チェックメイトだ。

「もらった！」

「なっ！『シールド・ピアース盾殺し』だと！？」

ラファールの左腕部に付いている盾の装甲が弾けるとその下から  
パイルバンカーが露出した。

《グノー・スケール灰色の鱗殻》シャルルの持つ武器の中で一番の破壊力を持つ武器だ。

「この距離だつたら外さない！」

シャルルは左腕をボーデヴィツヒさんの腹に叩きつける、そして  
トリガーを引いた。

ズガンッ！！！！

パイルバンカーの一撃はシールドを突き抜け大ダメージを与える、  
絶対防御で相殺しきれなかった衝撃がボーデヴィツヒさんを襲う。

でもまだ終わらない、リボルバー機構の弾倉が速やかに次弾を装  
填し、また一撃を加える。そう、《グノー・スケール灰色の鱗殻》は連射可能なのだ。  
ズガンッ！ズガンッ！ズガンッ！

連続で三発撃ち込まれて、ボーデヴィツヒさんの体はくの字に曲  
がる、ISも紫電を上げ始める、強制解除の前兆だ、僕達の勝ちだ！  
・・・・・・・・と、思っていたが異変は突然起きた。

私はこんな・・・・こんなところで負けるのか、イヤだ！負けら  
れない、負けるわけにはいかない！教官にあのような顔をさせたあ  
の男を叩きのめすまでは！

『・・・・・・・・願うか・・・・・・・・？汝、自らの変革を望むか・・・・・・・・』

「より強い力を欲するか・・・？」

力を？ああ、欲しい、欲しいっ！比類無き最強を、唯一無二の絶対な力を――私によこせ！

Damage Level・・・D.

Mind Condition・・・Uplift.

Certification・・・Clear.

《Valkyrie Trace System》・・・bo  
ot.

「あああああっ！！！！！」

突然ボーデヴィツヒさんが絶叫し始めた、それと同時にシュヴァルツェア・レーゲンから激しい電撃が放たれてシャルルは吹き飛ばされた。

「い、一体何が・・・。――！！？」

「っ！？」

目の前の光景に言葉を失った、シュヴァルツェア・レーゲンにと

り込まれていた。

いや、ISの装甲は変形……、いや、溶けるように変わっていきボーデヴィツヒさんを飲み込みながら形を変えていく、溶けた装甲はぐにやぐにやと蠢き段々と形ができていく。

出来上がったのは真つ黒なフルスキンのIS、でも『何か』が違った。

「セカンド・シフト  
二次移行……？違う、でもあれは……」

なぜ変化したのかの疑問はあつたけど僕の目は黒いISが握っている物に集中していた。だってあれは

「《雪片》……！」

「っ……！」

シャルルが警戒態勢をとろうとした瞬間、黒いISは動いた。シャルルの懷に入り込み《雪片》を一閃、シャルルはブレット・スライサーで受けたがそのまま吹き飛ばされアリーナの壁に衝突する。

「シャルル！」

「あ、ぐっ……」

僕はすぐさまシャルルの下へ駆けつける。

「大丈夫……！？」

「う、うん……大丈夫……だけどISの方はだめかも」

シールドエネルギーは切れていないみたいだけどさっきの攻撃で右腕部と背部のスラスタが損傷していた……これじゃ、戦闘は無理だな。

それにしてもいまの剣筋……千冬さんのだ、やはりあれは《VTシステム》か……とんでもないものを隠し持っていたものだ。

「あいつは、あいつはー！」

「一夏、やめろ！」

「お、落ち着いてください、一夏さん！」

「どうしたのよ！てか、白式を展開させようとすんな！」

一夏が、なんか騒いでる……大方、千冬さんの剣技を真似されて怒ってるのだろ？あのシスコンは。

でも、今はそんなことを気にしてられない、この状況はやばい……黒いISがこっちに近づいてくる。

アラームが鳴り響いてアリーナ席のシャッターが閉まる、警戒レベルDか……やばいね、これは。

『篠ノ乃君、デュノア君！そのISは教師部隊が相手をします！だから早く退避してください』

山田先生からの通信、先月のこともあったから対応が早いね……それでも、ちょっと遅かったですね。

「……山田先生、教師部隊は後どの位で来ますか？」

『あ、あと六分……いえ、四分ほどです！』

「そうですか、だったら無理そうです、シャルルのISは損傷して  
いて動けませんし、それに……」

『それに……？』

「もう、目付けられてます……」

『篠ノ乃、教師部隊が到着するまでなんとか時間を稼げ』

「織斑先生……了解しました、なんとかやってみます」

『無理はするなよ』

そこで通信は切れた。無理はするなか……それは相手次第かな。

……エネルギー残量はあと僅か……IS-Dの使  
用可能時間を計算……三秒か、だったら非固定浮遊部位への  
エネルギー供給をカット、武装もカット……それでも六秒……  
絶対防御をカット、よしっ、十五秒これでいける。

武装は……。

「シャルル、これ借りていい？」

「う、うん、いいよ、使って」

すぐそばに落ちていた《ブレット・スライサー》を拾い上げる、  
うん、許可を出してくれたみたいだねちゃんと使える。

「さて、四分か……持つといいけど」

「優希……！」

「ん？」

「気を付けてね」

「うん、わかった」

ブレードを構えながら前に出る、それに合わせて黒いISも雪片を構える。

IS-Dを発動可能は最大十五秒、戦闘機動を行えば五秒も無いだろうね。でも、あれが千冬さんのデータを使ってるなら絶対あの技で来る。

その場で静止して睨み合って一分ほど過ぎたのだろうか？ ついに黒いISが痺れを切らしてこちらに突っ込んできた。

（来るっ………！一閃二断が！）

僕はIS-Dを発動させる、エネルギーの大半をセンサーにつき込む、すると高速で振り抜かれる刀がスローモーションになる、ブレードを握る手を緩めて剣先が当たるか当たらない位置までバックステップする。

放たれた横一閃にブレードは弾き飛ばされる、この時剣先が自身の腕を掠って血が出る、けど気にしない次だ。

黒いISはそのまま、雪片を振り下ろす、今だっ！  
ガキンッ！！

「……………」

振り下ろされた雪片の刀身をタイミングを合わせて両手で掴む・

・・・真剣白刃取りだ。

剣技を止められて黒いISの動きは止まる、けどそれもつかの間力を加えてそのまま押し切ろうとする、まだ終わらないっ！

「おおおおおっ！」

ユニコーンの出力を上げて手首を返す、すると雪片の刀身は、バキンッ！

と音を立てながら中程から折れた。

「!?!?!」

「はああああーっ!」

折れた雪片の刀身を掴み、上段から一気に振り下ろし一刀両断した。

「ぎ、ぎ・・・・・・ガ・・・・」

すると黒いISは紫電を走らせながら二つに割れる、その切れ目からボーデヴィッヒさんが零れ落ちる、左目の眼帯は外れていて金色の瞳が露出していた。

でもその瞳は助けを求めるかのような弱々しかった。

崩れ落ちる彼女を抱きかかえて一言。

「もう、大丈夫だよ」

彼女に聞こえてるかどうかわからないけど僕はそう言つと、二つに割れた黒いISは轟音を上げて爆発した。

強さとは……何なんなのだろう？

その答えが無数にあるのも知っている。

けど……私にはわからない……何が強いということ  
なのだろう？

『それは……僕にもわからないな』

わからない……？あれだけ強いのか……？

『うん、僕は強くないよ……でもね』

でも……？

『強くなりたとは思ってるよ、誰かを守れるくらいに』

誰かを……守る……

『うん、守られるだけじゃない、守りたいんだ。そのための強さを  
僕も探してんだと思う……』

お前も……探しているのか？

『うん。だからね、一緒に探そう、そして守ってあげるよ。ボーデ  
ヴィッヒさん』

そう言われた瞬間、私の胸に衝撃が走った、何だろう、痛いので

はないむしろ温かい……。ああ、そうか、私は……。そう。

優しく語りかけてきたこの少年に……。ときめいて、しまった。

心臓の鼓動が早まる、所詮私はこの少年の前ではただの十五歳、  
『女』なのだ。

――篠ノ乃、優希……。か。

惚れてしまいそうだ。

## 第十九話（後書き）

難産でした……。戦闘シーンもそうでしたけど。最後のラウラのシーンが特にそうでした。

原作二巻が終了まであと少しです。でも少し悩んでいます、このまま三巻に突入するか、オリジナルをいれるか。

どうしましょ？

なんか意見がありましたら、感想に送ってください。  
では、次の更新で。

## 第二十話（前書き）

今回は長いです。

## 第二十話

「いやあああーーーーー！やめてえーーーーー！」

「ええいつ！おとなしくしろ！」

アリーナの試合から数時間、僕はあの上のピンチを迎えていた……………。

「そうですわ！優希さん！」

「いいかげん、あきらめなさい！」

ここは僕の部屋、シャルルはいない、かわりにいるのは箒姉、セシリアさん、鈴の三人、それと…………

「ふふふふ……………優希きゅん、はあ、はあ」

「うわゝ、ゆーゆーの肌真っ白だゝ」

「ほんとだ、しみ一つ無い……………うらやましい」

のほほんさんをはじめとする一組のみんな、その女子たちが何をしているのかというと……………

「し、篠ノ乃君の柔肌……………（タラー）」

「よいではないか、よいではないかー」

服を脱がされていた。

「た、助けてえーーーーー！」

なんでこんなことになったのかというと、VTシステムが発動したシュヴァルツエア・レーゲンと戦うときに絶対防御を切っていたことが箒姉にばれてしまい、罰は何にしようかと悩んでいたときのほほんさんが……。

『ゆーゆーに女子の制服を着せてみようー！』

と、言ったのが始まりであつた、僕は逃げようとしたんだよ、でも一組のクラスメイトたちが僕を拘束して……それでこの現状である。

そつえば、なんで鈴もいるんだ？

「面白そうだからよ！」

……そうですか。

でも、これは非常にやばい……女装もそうだけどそれよりもこのまま脱がされたら背中中の傷をみんなに晒してしまう、どうしよう……。

「優希の着替えは私がやる、お前達は外に出ている」

ほ、箒姉……そうだね、僕が背中中の傷を気にしてることを知っているもんね。

「……えー！篠ノ乃さん横暴ー！！」「」「」

チャキッ！

「今宵の『緋宵』は血に餓えているな……」

「……失礼しましたー！ー！ー！ー！」

箒姉はどこから出したの『緋宵』、しかも妖刀じゃないからねそれ……まあ、助かったけどさ。

「あ、ありがとう箒姉……」

「なに、気にするな……それより優希……」

「なに？」

「ミニスカートかロングスカート、どっちがいい？」

あ、そっちについては助けたくないんですね……ああ、箒姉の笑顔が僕に女装させようとする束姉と同じだ……あきらめよう。はあ……

『トーナメントは事故により中止になりました。ただし、今後の個人データ指標と関係するため、全ての一回戦は行います。場所と日時の変更は……』

「ふむ。シャルルの予想道りになったな」

「そうだねえ。それより優希大丈夫かな？」

アリーナのことでの事情聴取が終わって僕は一夏と学食で夕食をとっていた、優希も誘おうとしたんだけどクラスの女子たちに担がれて連れて行かれてしまった。

「あー、大丈夫じゃねえか、箒もいたし」

「そうかな……？あれっ？」

「ん？どうしたシャルル？」

「なんか、あそこに人だからが……」

入口の辺りに人が集まっている。どうかしのだろうか？僕も行ってみよう。

「うわー、あ、あんな子一年にいたっけ？」

「し、知らないわよっ、でも、なにあれ可愛すぎる」

「か、神様、不公平すぎます」

集まった人の間からなんとか中心の人物を見ることができた、そして見惚れた……。

その子は長い黒髪はツインテールで肌は透き通るに白い、大きな瞳は少し垂れぎみだけどそれが優しい印象を与える。綺麗ではなく愛らしいという表現が似合う少女だった。同じ女性でもため息を付くほどの美少女だった。

でも、僕はあの少女に見覚えがあつた……信じたくは無いけど、もしかして……。

あつ、あれは！オルコットさんに凰さんだ、でもなんかひどく落ち込んでる、とりあえず話を……。

「あ、あの・・・・・・・・・・」

「ああ、デュノアさん、どうかしましたの？・・・・・・・・・・はあ〜」

「どうしたの・・・・・・・・・・はあ〜」

な、なに、この落ち込みようは・・・・・・・・・・て、いうことはやっぱりあの子って・・・・・・・・・・。

「そうですね・・・・・・・・・・優希さんですわ・・・・・・・・・・」

やっぱり・・・・・・・・・・！信じたくなかったけど、本当だったあ  
・・・・・・・・・・！

「反則過ぎるわよね・・・・・・・・・・あの化粧の乗り具合は・・・・・・・・・・化けるとは思っていたけど、まさかここまでとは思わなかったわ」

「ええ、優希さんって本当に男なんですの？ありえなさすぎますわ・・・・・・・・・・」

「あ、あははは」

それについては同感だよ、優希、本当に男なの？性別偽ってない？

「騒がしいぞ、貴様ら！それと入口を塞ぐな！無言で食べるとは言わんがもう少し静かに・・・・・・・・・・」

夕食を食べにきた織斑先生が入口を塞いでいた集団を叱っていたのだけどそれは優希を見た瞬間止まった。どうしたのだろうか？ま

さか見惚れたのかな？

「・・・・・・・・・・優希か？」

き、気づいた！！あの状態の優希に！でも、普通に名前を呼んでるってことは相当混乱してるのかな。

「・・・・・・・・・・は、はい・・・・・・・・」

消えそうなほど小さな声で答える優希、恥ずかしくてそうだったのだろうけど、逆にその仕草がカワイイ。

「あ、あはははははははははは」

「あつ、ちようちよだ〜待ってえ〜〜〜」

「そうよ、これは夢だわ、夢よ・・・・・・・・起きなさい私」

ああ、みんなが現実逃避を始めてしまった。

「とりあえず、優希。着替えて来い」

「はい・・・・・・・・」

えっ、もう終わりなの・・・・・・・・せ、せめて写メを一枚っ！

パシャッ！ピロリロリ〜ン

よしっ！これでOK。

優希は部屋へ早足で戻っていった・・・・・・・・・・また、やってくれないかな。

「大変な目にあつた、優希」

「あ、あはは」

「・・・・・・・・・・今は何も言わないで、お願い・・・・・・・・」

結局、あの後すぐに着替えて化粧をとって食堂に戻り食事をとった。学食にいた全員の僕を見る目が生暖かくて泣きそうになったのは別の話だ。

で、僕達はいま部屋に戻っている最中だ。

「あつ、織斑君、篠ノ乃君、それにデュノア君、ここにいましたか」

「あれ、山田先生」

「どうも」

「お疲れ様です、どうかしましたか？」

「みなさんに朗報です！ついに男子の大浴場使用解禁です！」

「本当ですか！」

「やった！」

はあ、お風呂に入れるよ、入学してからずっとシャワーだったからね、お湯に使ってゆつくりしたかったんだ。

でも、一夏・・・・・・・・ちよつと興奮しすぎじゃないかな、山田先生の手まで握っちゃてるし。

「やったな！優希、シャルル！」

「うん」

「あ、う、うん」

あつ、やばい！シャルルは……どうしよう、このままじゃ……  
……ん？あれは、箒姉だ……

「い、一夏……」

「ん？箒か、どうした？」

そうだ！一夏には悪いけどここは……気絶してもらおう、恨むのだったら己の鈍感さを呪ってね。

「ねえ？そういえば一夏ってさトーナメント優勝したら箒姉と付き合うんじゃないか？」

「なっ！？優希、そのことは！」

「そういえば、そうだったな」

「いや、あれはだな、その」

「いいぜ、付き合ってやるよ」

「ほ、本当か！」

箒姉、嬉しそうだな、でも次の言葉を聞いたら……。

「ああ、買い物くらいなら付き合ってもいいぜ」

「……………何？」

言った、言ったよこの男、箒姉見事に固まってるし。さよなら――夏。

「……………だろうと……………」

「ん？」

「そんなことだろうと思ったわ!!」

どすんっ!!

「ぐほあっ!!」

箒姉の腰を落とした正拳が一夏の腹に突き刺さる。一夏の体はくの字に曲がるけど、まだ終わらない。

「ふん!」

どどおっ!!

「ぐぶおあっ!!」

そのまま、うめく一夏の鳩尾を蹴り上げる。箒姉、パンツ見えてる。

「な、何を……」

「せいやぁーーーー!!」

「げはぁーーーー!!」

き、決まった……。顔を上げた一夏にアップercut。一夏……大丈夫かな？痙攣してるけど……。  
篤姉は怒ってそのまま帰っちゃった、どうしようこれ？

「一夏ってさ、わざとやってるんじゃないかって思うときがあるよね」

「そうだね……。でも、これが素なんだよ」

「そうなんだ……」

「はっ！お、織斑君、だ、大丈夫ですか!？」

あつ、山田先生がいたの忘れてた。

「山田先生、とりあえず部屋に運びましょう、邪魔になりますし」

「そ、そうですね。篠ノ乃君、デュノア君。て、手伝ってください」

「わかりました、シャルル、そっち持って、僕はこっち持つから」

「うん、よいしょっと、じゃあ、行こうか」

僕が右足を持って、シャルルが左足を持つ。よしっ、これでOK。

「うん」

「あのー、それじゃあ、織斑君を引きずることになるんじゃない」

「「いいんです、これで」」

「そ、そうですか？」

まったく、手間がかかるな一夏は。

「はふう~~~~~~~~、生き返る~~~~~」

あれから、一夏を部屋に放り投げて（文字通り）僕は入浴場に入った、女子はいいな〜こないいお風呂に入れるなんて。

「でも、シャルルには悪いことしたな……………」

僕は嬉々として入浴場に来たけど重要なことを忘れていた、入浴場に入るってことはシャルルと一緒にだってことを。

いや、一度、不可抗力で裸を見てしまったとはいえ一緒にお風呂に入るのはダメだ、っていうことでシャルルだけに入ってもらおうと思ったんだけど……………。

『ぼ、僕、あまりお風呂好きじゃないから優希が入ってきて』

と、言われたので、入らせてもらった。でも、やっぱり……

「気持ちいいな〜（カラカラカラッ）……………ん？」

あれ？今の音って脱衣所の扉が開く音だね……………。

「お、お邪魔します……………」

え……………？ええっ！？な、ななっ、なんでシャルルがここにっ！？

「あ、あんまり見ないで……………」

「こ、ごめんっ！」

すぐに目を瞑って右に回る。

「えっ！？ちよっ、なんでシャルルが来てるの！？入らないって言うたのに！」

「ぼ、僕が一緒だと、イヤ……………？」

「い、イヤじゃないけど……………その……………」

こ、困るよ……………ぼ、僕だって健全な十五歳の男子なんだから、やばいつ、心臓がバクバクいつてる。

「ぼ、僕上がるね、シャルルはゆっくりと……………」

「ま、待って！」

急に大声を上げたからびっくりして動きが止まってしまっ、ど、どうしたんだ？

「だ、大事な話があるの。だから、優希にも聞いて欲しい……」

「わ、わかったよ……」

だ、大事な話だったら、き、聞かないとね。シャルルを見ないようにながら、また湯につかる。

「そ、その……前に話したこと、なんだけど」

「前につて……学園に残るって話？」

「う、うん。僕ね、ここにしようと思う。僕はまだここだって居場所を見つけられてないし、それにね……」

「それに……？」

ちやぷ……。と、湯船の中を動く音が聞こえる、そして僕の背中にシャルルが触れた……。

「しゃ、シャル……!？」

背中に触れた手を滑らせて僕を抱きしめた。背中にシャルルが密着していて、僕の心臓はさらに鼓動を早くする。

「……優希が、ここにいればいいって言うてくれたから。そんな優希がいるから、僕はここにいたいと思えるんだよ」

「そ、そうなんだ……」

あれは、僕が言ったわがままなのにな、でもシャルルがそう感じてくれたのならよかった。

「それに、ね。もうひとつ決めたんだ」

「もう一つ？って、何？シャル……」

「シャルロット」

「えっ？」

「これからはシャルロットって呼んで、優希」

「シャルロット……それが本当の名前？」

「うん、僕の名前。お母さんがくれた、本当の名前」

「わかったよ……シャルロット」

「ん」

と、シャルロットの声が聞こえる、顔は見えないけどきくと彼女の顔は笑顔だろう。

「で、シャルロット。もう一つって何？」

「ん……ないしょっ」

機嫌がいいのかシャルロットは僕を抱きしめる力を強める……  
・あ、あの、そろそろやばい。二つの膨らみの、や、やわらかさが・  
・……。

「そ、その、しゃ、シャルロット。あの、そろそろ放してくれないかな……この体勢は色々やや、やばい……」

「あ、ああっ、うん！そうだね！ぼ、僕、先に体と髪洗っちゃうね！」

シャルロットもようやく気づいたのかあわてて離れて湯船から上がる。

「こ、こっち、覗いちゃダメだよ？」

「う、うん。わかった……」

「……。ゆ、優希だったらいいけど……」

な、何か言ったのかな？水音でよく聞こえなかった。

・……。あれ？なんだか、あたまがボーってして……  
き……。た……。

ザパーンッ！

ふえ！な、何！？どうしたの！髪洗って、よく見えない。

「ど、どうしたの、優希？．．．．．優希？」

返事がないな、どうしたんだろ？いったん泡を流して．．．よしっ！

「ゆ、優希．．．どうした．．．の、って、優希!？」

ちよっ、優希が浮いてる！た、大変だ！急いでお湯から上げて．．．。

「よ、よいしょっ！．．．優希っ、聞こえる？優希」

「う、うゝん．．．．．」

ふう、よかった。のぼちゃったのかな？とりあえず、脱衣所まで運ぼう。た、タオルを付けさせて．．．これでよし。

じゃあ、いこうか。

「運んだのはいいけど、どうしよう．．．．．」

僕は着替えて大丈夫になったけど、優希の着替えはどうしよう．．．  
．．．やっぱり、僕が．．．

「ゴクツ．．．．．」

そ、そうだよな、このままじゃ、優希が風邪引いちゃうもんね。  
僕が着替えさせないと．．．．．うんっ！

「う、う」

うっ、何この異様な色気は……女の子よりあるよ、絶対に……  
……！僕自身なくなってきた……。

そ、そんなことよりも優希の着替えを……。

「ゴクツ……では……」

[illegible]

ブハッ！

翌日のホームルームにシャルロットはいなかった、今朝も『先に行つてて』と言われて食堂から分かれたんだけど、何でだろう？今朝、起きてからシャルロットが目を合わせてくれないんだよね、僕何かしたのかな？

それにボーデヴィツヒさんもないし、まあ、ボーデヴィツヒさんは昨日の負傷もあるから今日はお休みかな、事情聴取もあるだろうし。

「み、みなさん、おはようございます……」

山田先生が教室に入ってきたんだけど、何だろう、とてもやつれているように見える、どうしたんだらう？

「えーと、今日はですね．．．みなさんに転校生を紹介します。転校生といいますが、すでに紹介はすでにいるといいますが、ええと．．．．．」

山田先生の説明はわかりにくくて、みんな首を傾げている、．．．  
・転校生？

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

あれ？この声は．．．．．

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしく願います」

ドアを開けて入ってきたのはスカート姿のシャルロットだった。シャルロットはぺこりと一礼をするとクラスの全員がぼかんとしながら頭を下げ返す。

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ということです。はああ．．．．．また寮の部屋割りを組み立て直す作業がはじまります．．．．．」

ああ、これがやつれてる理由か．．．．お疲れ様です。  
．．．．．て、あれ？いやな予感が．．．．．

「え？デュノア君って女．．．．．？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「ま、まさか、篠ノ乃君も……」

「って、篠ノ乃君、同室だから知らないってことは……」

「ちよつと待って！昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！？」

あ、やばい。

ドゴーーーーンッ！！

突然ドアが壊れた。ああ、一夏……死んだな。

「一夏あつ……」

甲龍を展開した鈴が入ってきた。そして、非固定浮遊部位アンロック・ユニットの装甲がスライドする。ちよつ、こんなところで衝撃砲を撃つつもり！？てか、射線上に僕がいるよ！

「死ね……」

あゝ、これは間に合わないな、生身で衝撃砲受けたらどうなるんだろう……？

ドオオオオンッ……！！

……あれ？痛くないし、生きてる。どうして？

前を見てみると、一夏と鈴の前にシュバルツェア・レーゲンを纏ったボーデヴィツヒさんが立っていた。

もしかして……助けてくれた？

「た、助かったぜ『邪魔だ……』うおっ！？ぐへっ！」

ボーデヴィツヒさんは一夏を掴み上げて鈴のいる方へ投げ捨てて、僕の方に歩いてくる。えっ？何？無言で僕の前に立ち、そして胸倉を掴み上げる。えっ、ちよつ……？

「むぐうつ!？」

いきなり――唇を奪われた。

「!?!?!?!?!？」

えっ?ええっ!?!?な、なんで僕キスされてるの!?

「お、お前は私の嫁にする!決定事項だ!異論は認めん!」

よ、嫁・・・・・・・・?婿じゃなくて?・・・・・・・・って、周りのみんなも『あー!』って納得したような顔しないの!僕は男なんだからね!

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする」

何その、知識?誰がそんなこと言ったの、出てきなさい。  
ガキンツ!

えっ!?!今度は何!?!?って、箒姉!何で『緋宵』振り下ろしてるの!?!?

「何をする・・・・・・・・!」

「優希の唇を奪い、尚且つ嫁宣言だと・・・・・・・・許さん!貴様なぞに優希はやらんぞ!一夏共々切り伏せてくれる!」

ああっ!?!箒姉がバースト・モードに!みんな、逃げて――  
――っ!!

「そうか、貴様はこいつの姉だったな．．．．．だったら、義姉さんと呼ぶべきか．．．．．」

「だれが義姉さんだぁー！ー！ー！ー！ー！」

ガキンツ！ガキンツ！

ちよっ！篝姉あぶな．．．．．って、ええっ！？なんでISの装甲に傷がいつてるの！『緋宵』は名刀ではあるけど、結局はただの刀だよ、なんで！？

「ちよっと待った！！」

「なっ．．．！？」

うわっ！？今度はなんだ！？ってシャルロットが助けてくれたんだ．．．．．。

「優希は渡さないよ！！」

あれえ？

「貴様もか！優希はやらん！！」

「いい度胸だ！だが嫁は私のものだ！！」

．．．．．何？この状況？どうしてこうなったの？

ドコーー！ンツ！！

チュインツ！チュインツ！

ガキンツ！！

ダダダダダダッ！！

一夏は……うん、絶賛ボコられてるね。

こっちも乱闘が始まってるし………IS二機に生身が一人・  
………凄い光景だなー！。

教室の状態はもう滅茶苦茶………ここ戦場？

………はあ………誰でもいいから………

「止めてえー………っ！！」

ドカアアアアアッ！！！！

「ギアアアアアアッ！！」

一夏あああああああああつ！？

「ふん、ふふふん」

やあやあ！天才の束さんだよ！やる事が無くて、とっても暇だったんだけど、今はとてもきげんがいいのだあー………だって、愛しの箒ちゃんが電話してくれたんだもん、束さんとっても嬉しいよ！しかも、内容がおねだりだもん、箒ちゃんは昔から全然甘えてくれなかった、もう束さん感激だよー………！さあーって箒ちゃんの専用機『あかつはぎ紅椿』の調整を………。

チャララーチャララー。

むっ！この着信音は！！職業の名前の最初にヤのつく奥さん達の

テーマは！

「とうっ！」

ガシャーーンッ！ピッ！

「もしもし！ゆう君、みんなのアイドル東お姉ちゃんだよ、ぶいっ！」

「あはは、元気そうだね東姉」

やっぱり、わたしの可愛い弟のユー君だあ！ああ、声だけでも涎がでてきそうだよー！。

「で、で？どうしたの？ゆう君？お姉ちゃんが恋しくなったの？だったら、今すぐにも学園に行ってはくはくしよー！」

「い、いや、そうじゃなくてね、ユニコーンのことなんだけど・・・」

「ユニコーン・・・？」

ユニコーンって神獣の？清き乙女にしか近づかないっていう、あの？

「あっ！そうか、東姉は知らなかったか・・・ユニコーンっていうのは東姉がくれたISに僕が付けた名前」

「なるほどー！ゆう君もいい名前付けるねえー。で、そのユ

「二コーンがどうしたの？」

「あ、うん。そのね、修理用の部品が足りなくてね困ってるんだ・・・  
．．．なんとか代用のきくパーツで修理してるからいいけど・・・」

「あ、あはは、そうだったねー、そのこと忘れてたよ」

「そうだよ、あのISって完全なワンオフ機だったもんね、むしろ  
パーツを代用して修理するなんてさすがわたしの弟」

「はあ・・・だから、パーツを送って欲しいんだけど・・・  
無理かな？」

「ううん、大丈夫だよ。箒ちゃんへの贈り物と一緒に届けるよ」

「え？箒姉に贈り物ってなに？」

「ふふふっ・・・！それは、箒ちゃんの専用機だよ！」

「せ、専用機って・・・。それって色々と問題が・・・」

「ん？何言ってるのかな、ゆー君？『ピーー』おっと、計算が終了したね！」

「じゃあ、ゆー君、また電話してねー、電話してくれないと束お姉  
ちゃんさびしすぎて死んじゃうからね」

「あ、ちょっと、束姉まつ・・・」

さーて、箒ちゃんのために『紅椿』を仕上げちゃおうか！それと  
ゆー君のも準備してっど……そうだ！ふふふふ……、  
ゆー君待っててね。さーて、忙しくなるぞー！

## 第二十話（後書き）

。 なんとというか……すみません。シャルが変なことに……

。 反省しています。でも、後悔はしていません。

。 さて、問題は次からだ、そのまま進むかオリジナルにいくか……

まあ、少し考えて見ます。

では、次の更新で！

## 第二十一話（前書き）

すみません、今回は何か上手く書けませんでした。  
・・・・文才が無いだけかもしれませんが。

二十一話です。どうぞ

## 第二十一話

「すうー……すうー……うにゅ」

ふに。

ん？なにこれ？やわらかいな。そろそろ起きないと……でも眠い、でも、目覚まし鳴ってないし、もうちょっと寝ててもいいよね。お休み……zzz。

「すうー……すうー……」

ドンッドンッ！

……なんかうるさい……誰だろ？こんな朝から……。

ドンッドンッドンッ！

むう、なに、うるさい……。

ふにふに。

あれ？そういえばこれってなんだっけ、寝る前にこんなの布団に入れたっけ？

ドオオオオンッ！！

「ふえっ！？な、なに！？って、わああー！！！！！！」

「優希！！大丈夫……か……」

。 箒姉が入ってきたけど固まる、それは僕もだ。だつて……。

「ん……。なんだ……騒がしい、朝か……」

僕の布団からラウラが出できた、いやなんで、ここにいるのかも問題なんだけど、それよりもなんで裸なの!!

ラウラはいつもの眼帯と待機形態のIS、右の太ももに着けた黒いレッグバンド以外何も身に纏っていないかった。

「あ、あわわわ」

「き、ききつ、貴様……!!」

「ん?どうしたのだ?」

「と、とりあえず、隠して!」

僕はなるべくラウラを見ないようにしながら毛布を渡す。

「おかしなことを言う。夫婦と包み隠さぬものだ聞いたぞ」

「た、たしかにそうだけど……ってそれよりも服着て、服!」

「そ、そうだ!さっさと服を着ろ!というか何故裸なのだ!」

「私は寝る時は何も着ない!」

「「着てよっ(ろ)!!」」

「なにをそんなに怒っているのだ?」

と訳がわからなそうにしながら、シーツを体に巻くラウラ。  
ちなみに、なんでラウラと呼んでいるのかというと、あのキスさ

れた日から毎日付きまとわれるようになってボーデヴィツヒさんと言つと・・・・・・・・

『私のことは名前で呼べ、夫婦なのだからな、拒否権は無いぞ！』

と、言われたからだ。まあ、最初はそのままボーデヴィツヒさんと呼んでただけど、その度に言われるので、諦めてラウラと呼ぶことにしたのだ。

あれ？そういえば何か足りないような・・・・・・・・あつ、一夏。

「ね、ねえ？ラウラ、一夏ってどこに行ったの、合部屋だったはずなんだけど・・・・・・・・？」

「ん？ああ、一夏が、それなら・・・・・・・・」

「なんだ朝から騒がしい。また一夏の奴が・・・・・・・・まったく」

はあ、まったく今年の生徒は騒がしくて疲れるなまったく。。。ガチャツ、ゴンツ！『ウゴツ！？』

何だ・・・・・・・・ドアになにか当たったな。しかも鳴いたぞ。ガチャツ。

「まったく、だれの悪戯・・・・・・・・だ」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

疲れているのか私は、弟が布団で簀巻きにされているように見えるのだが・・・・・・・・。

「むーっ！（千冬姉！）むーっ！（助けてくれ！）」

「一夏・・・・・・・・」

「？」

「・・・・・・・・放置プレイか？」

「む——————っ！！！（ちげえ——————！！！！）」

「簀巻きにして、教官の部屋の前に置いてきた」

「何してんの（をしてる）！？」「」

本当になにしてんの！まあ、この季節だったら風邪を引くことは無いだろうけどさ・・・・・。

「ええいつ！もう我慢できん！斬り伏せてくれる！」

ちよっ！？箒姉落ち着いて、真剣出さないで！僕、僕がいるから！

「ふんっ！やれるものだったらやってみろ！」

ラウラも止めて！部屋の中で暴れないで！  
ああっーーーーー！！

「うっ、大変な目にあった……………」

「俺もだ……………」

場所は変わって一年寮の食堂、一夏と朝食を食べている。焼き魚定食美味……………。

えっ？箒姉とラウラ？今頃職員室で千冬さんに絞られてるんじゃないかな。ドア壊したし、部屋を滅茶苦茶にしたし。

ふっ、美味かった。

「ごちそうさま。一夏、早くしないと遅刻するよ」

「うおっ！？もう、こんな時間かよ！？」

「僕先に行くね」

「ちよっ、待ってくれよ優希！」

やだ、遅刻したくないもん。

「あ、優希。おはよう」

「うん、おはよう。シャルロット」

シャルロットも教室に行くところみたいだ。うう、まだ、スカート姿のシャルルには慣れないな……。前まで男子の制服だったからな！。

「急ごう、遅刻しちゃうよ」

「う、うん。行こう」

「ま、待ってくれえー」

だから、やだ。

すばあんっ！

今日もいい音するな、あの出席簿。

僕とシャルロットは予鈴が鳴ったときに教室に入れて、なんとか間に合った。でも一夏とセシリアさんは何故かISを展開して教室に入ってきた。

いや、いくら遅刻しそうだからって勝手にIS展開しちゃダメでしょ。まあ、そのせいで千冬さんに叩かれてんだけどね。自業自得だね、うん。

キンコーンカーンコーン。

「それと、来週からはじまる校外特別実習期間だが、全員忘れ物な

どするなよ。三日間だけだが学園を離れることになる。自由時間では羽目を外しすぎないように」

校外特別実習期間、まあ簡単にいえば臨海学校だ。この三日間の初日は全部自由時間、十代の僕達にとっては嬉しいこと！……なんだけど、僕にとっては憂鬱だ。臨海学校、つまりは海に行くのだ。

僕は海では泳げない、いや泳げるんだけど、海に行くって事は水着を着るってことで背中が露出する。僕の背中には大きな傷跡が残っている一生残る傷跡が……。これを見られるは避けたい。だから、僕は海では、誰かがいる場所では泳げない。

はあ……。憂鬱だ。

授業も全部終わって放課後、僕はIS格納庫でユニコーンの整備をしている。でも、困ったことに……。

「これは、直せないな……………」

ラウラ戦で真つ二つにされたビームマグナムがパーツ不足で直せなくて困っていた。

「ん…………代用のできそうなパーツは無いしな……………」

てか、このライフル、ネジの一本からワンオフな気がするよ……  
・…まったく、少しは整備性を考えてよ束姉。

まあ、電話じゃ今度持つて来るって言ってたけど……………いつ

来るのかな？

「はあ……。これは後回しにしておこう。次は……………」

まあ、ISには自己修復機能があるから本当ならいつもやらなくていいんだけど、僕は自分でやりたいからやっている。

「あつ、優希。ここにいたんだ」

「あれ？シャルロット、どうしたの？」

「あ、えーと、その……………ね」

「？」

もじもじしちゃってどうしたんだろう？言いにくいことなのかな？

「えーとね、優希、今週の日曜って空いてる？」

「今週の日曜……………？」

日曜か。えーと、確か予定は……………無かったな。

「うん、空いてるよ」

「本当！」

「う、うん」

ど、どうしたの、いきなり大声出して。びっくりした……………。

「だ、だったらさ、買い物に付き合ってくれない」

「買い物……？うん、いいよ」

「本当！約束だよ！絶対だよ！」

「う、うん、わかったから、声下げて……見られてるよ」

今は放課後だけど整備科の先輩たちはまだ結構残っている、するとシャルロットが大声を出したから格納庫にいる生徒達の視線はこっちに向いている。

先輩達はくすくすと笑っている。

「あ、あう……」

シャルロットの顔はすぐに真っ赤になった。茹蛸みたいだ。

「じゃ、じゃあ、僕行くね！日曜、忘れないでね！」

そう言うとシャルロットは凄い速さで走っていった……。

「……………さて、続きしよつと」

そういえば、買い物って何買うんだろう？生活用品かな？

日曜日、天気恵まれて快晴で、見事な買い物日和！・・・・・・  
なんだけど。

「よし、殺そう！」

自販機の陰に隠れていた鈴が何か物騒なことを言っていた。って、  
こらこら勝手にIS展開したらダメでしょう、千冬さんに叱られる  
よ。

ところで、なんで怒ってるんだろ？

「ねえ、シャルロット」

「優希、行こう・・・・僕達は何も見えないよ」

「え？でも・・・・？」

「いいから、行こう。邪魔しちゃダメだよあっちからも行けるよね  
？」

「え？うん、行けるけど・・・・」

「じゃあ、行こう」

「あつ、待つてよ、シャルロット！」

そんな急いじゃって、どうしたんだろ？謎だ・・・・・・？

よ、予想外だった、あんなところにオルコットさんと凰さんがいるなんて、しかもあの様子……一夏が絡んでる。

あのまま、あの二人と接触したら絶対に巻き込まれる……。そしたら、優希との、その、で、デートが台無しになる。それだけは避けないと！

今日は二人きりで買い物するんだ！

「ほ、欲しいものって……まさか……」

「うん。臨海学校の水着」

シャルロットに連れてこられたのは水着ショップだった。

ま、まさか水着だったとは。……そうだね、この時期の買い物っていえば普通は水着だね。どうして思いつかないんだ僕の馬鹿……。

「そ、それでね、ゆ、優希に水着を選んで欲しいんだ……」

「Est-ce que c'est maintenant  
orsqu'il a dit comment? (なんて言った  
の今?)」

「なんで、フランス語なの?……だ、だから水着を優希に選んで欲しいの……」



何かヒソヒソと話してる、絶対変態だと思われてるんだ……。

実際は……

「うわゝ、見て見て！あの二人！」

「モデルさんかな？」

「黒髪の子はかわいい」

「金髪の子はきれい」

「ん？あの制服って確かIS学園のじゃなかった！」

「IS学園ってあの偏差値相当高くなかったっけ？」

「ええ、頭も良くて美人ってずるいわね」

「でも、綺麗よね」

「ええ……」

こんな会話だった。

「ねえ、優希、聞してる！」

「え！？あ、な、何……？」

「もうっ、ちゃんと見てよ！」

「ゴメン……」

「ふんっだ……」

あう……へそ曲げちゃったよ。

「だから、ご、ゴメンって、シャルロット……」

「シャル」

え？何？いきなりどうしたの？

「シャルって呼んで」

「え？シャ、シャル……？」

「うん！」

シャルって……愛称のことかな？まあ、そのくらいだったら。

「じゃ、じゃあ……シャル」

「シャル……シャル、うふふっ」

あれ？おい……シャルが笑顔のまま違う世界に行ってしまった。おい帰ってこーい。

シャルの目の前で手を振ってみるけど反応はない。どうしよう？しょうがない怒られるかもしれないけど、シャルの耳に……。

「ふう〜」

「うひゃあっ!？」

あっ、戻った。

「な、何するの、優希!？」

「いや、だってシャル反応ないんだもん」

「だ、だからって……！」

あー、やりすぎちゃったかな？ところで、これもセクハラになるのかな？

「ゴメン、なにか奢るから許して……ね」

「うー……じゃあ、パフェ。パフェ奢ってくれたら許してあげる」

パフェか……。だったら、あそこがいいかな。

「うん、いいよ、僕いい店知ってるからお昼に行こう」

「うん、じゃあ、許してあげる。で、どっちの水着がいいかな？」

シャルは二つの水着を見せる、一つはセパレートとワンピースの中間みたいな水着、色は夏を意識した鮮やかなイエローでなかなかいいデザインだと思う、そしてもう一つは……。シャル、大胆だねこんな布の面積が小さい水着を出すなんて。僕もびっくりだよ……。

「え、えーと……。そのイエローのやつがシャルに似合うと思うよ」

「本当？だったらこっちにするね」

うん、そっちにした方がいいよ、もう一つの水着はなんていうか、目に毒っていうか……。

「じゃあ、僕、試着してくるね、ってあれ？」

ん？どうしたんだ？試着室の方に何かあるのかな……って、なにあれ……。

「む？優希にデュノアかお前達も水着を買いに来たのか？」

「そ、そうですけど……何してんですか、あれ？」

僕は視線をそっちに向けるとそこには……。

「いいですか、十五の男女が同じ試着室に入るのは感心しません。教育的にもダメです」

「す、すみません」

一夏と箒姉が正座をして、山田先生に叱られていた。同じ試着室に入るって、二人とも……。

てか、その物陰に見える金髪とツインテール……セシリアさんと鈴もいるし、本当になにやってるのみんな？

「織斑先生、僕達は失礼しますね」

え？ちよつ、シャルどうしたの？まだ試着してないんじゃない？……。

「そうか、あまり遅くまで遊ぶんじゃないぞ」

「はい、優希、行こう」

「え？う、うん、織斑先生、失礼します」

「ああ」

シャルに引つ張られるようにレジに向かう。ほんと、どうしたんだろ、シャル？今日はなんか変だな。

あつ、男物の水着だ。泳がないけど一応買っておくか、適当に無地で黒のトランクスを手に取る、これでいいか。

「これください」

「えっ！？あの、これは男物ですけど・・・？」

「いいんです、それで。僕、男ですから」

「・・・・・・・・・・え？」

はあ、どうしてみんなこんな反応なんだろう。僕ってそこまで女顔なのかな・・・・・・・・。最近もうどうでもよくなってきた気がする・・・・・・・・。あれ？どうして涙が出てくるんだろう？

「・・・・・・・・・・見失った」

くそっ……！私としたことが……。

今朝から同室のシャルロットの様子がおかしく、後を付けてみたのだが……。なんと私の嫁と一緒に買い物をしていたのだ。

しかし、あいつには私の嫁という自覚は無いのか！ええいつ、あとでとつちめてやる！

だが、さすがシャルロットだ……。一瞬の隙について私の追跡を振り切るとは……。早く探さなければ！

……。しかし、水着か……。一応学校指定のやつは持っているのだがな。まあ、あれでいいだ『似合わない水着着ていたら彼氏に一発で嫌われちゃうもんね』ろ……。う……。。

「他のことが全部百点でも水着がカッコ悪かったら致命的だもんね」

な、なん……。だと……。。

こ、これは由々しき事態だ、ど、どうすればいいのだ！？……。・……。そうだ、こんな時は！やつに聞けばいい。

「クラリツサ、私だ！緊急事態だ」

私の腹心、黒ウサギ部隊の副隊長のクラリツサに聞けばいい。やつは日本に詳しい、優希を嫁にするというのもやつから聞いたことだ。

『これは、ボーデヴィツヒ隊長、何か問題が起きたのですか？』

「う、うむ……。例の篠ノ乃優希のことなのだが……。」

『優希きゅんのことですか、どのようなことで？』

「優希きゅん？」

『いえ、気にしないでください。それで内容は……』

？前に優希の映像を見せてから、クラリツサの優希の呼び方が変だな……。？まあ、いい。それよりも本題だ。

「うむ、今度臨海学校というものに行くことになったのだが、どのような水着を選べばいいか選択基準がわからん。そちらの指示を仰ぎたいのだが……」

『了解しました。この黒ウサギ部隊は常に隊長と共にあります。ちなみに隊長が所有されている装備は？』

「学校指定の水着が一着のみだ」

『ぐう……。！何を馬鹿なことを！！』

ぬうつ！？な、なんだ、そんなにかしいことなのか。

『確かIS学園は旧型スクール水着でしたね、それも悪くはないでしょう、だが、それでは……』

「それでは……」

な、なんなのだ、クラリツサ……！

『色物の域を出ない！！』





## 第二十一話（後書き）

黒ウサギ部隊の全員は優希のファンです。近いうちにISS学園地下組織である優希ファンクラブと接触するとかないとか……………。

すみません、こんな作者で……………。

次から臨海学校です、海のシーン、うまく書けるかな……………不安だ。

では、次の更新で。

## 第二十二話（前書き）

二十二話です。どづぞ。



「・・・・・・・・楽しそうだな・・・・・・・・シャルロット」

隣の列に座っていたラウラがジト目でこっちを見ていた。どうしたの？

「うん、楽しいよ」

「くっ・・・・・・・・あの時チョコキを出していれば・・・・・・・・！」

「何の話してるの？」

「優希は気にしなくて良いよ」

？？謎だ？

「全員座れ、そろそろ目的地に着くぞ」

千冬さんの言葉で全員がすぐに席に戻る、さすが千冬さん、みんなに恐れられてるだけはある。

あっ、あれかな、泊まる旅館って？

僕達を乗せたバスが駐車場に止まる、どうやら当たりみたいだ。そして荷物を持ってバスから降りて整列する。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「「「よろしくおねがいします」「」「」「」

千冬さんの言葉の後に全員で挨拶をする。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があつてよろしいですね」  
旅館の女将さんも笑顔で迎えてくれた。

「あら、こちらの二人が噂の……」

「ええ、まあ。今年は二人男子がいるせいで浴場分けが難しくなつて申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それに、いい男の子達？じゃありませんか。二人ともしっかりしてそうな感じを受けますよ」

あの、女将さん……今、男の子達のところに？を付けませんでした、僕は男ですからね。

「感じがするだけです。挨拶をしろ、二人とも」

頭をぐいって押される。いや、千冬さんが話してるからできなかつたんですよ。

「お、織斑一夏です。よろしく願いします」

「篠ノ乃優希です、今日から三日間、よろしく願いします」

「うふふ、ご丁寧にも。清洲景子です。……あら？」

ん？どうしたんだろ、女将さんが僕の顔を見る。

「あの、どうかしましたか？」

「あつ、いえ、篠ノ乃君の顔が昔、来たお客さんにそっくりだったらしい……」

「僕が、ですか？」

「ええ、本当に……偶然ってあるものね」

僕にそっくりな人か……。まあ、世の中には自分に似ている人が三人いるっていうしね。

「話し込んだじゃいましたね、それじゃあみなさん、お部屋に方にくうぞ。海に行かれる方は別館で着替えられるようになってますから、そちらをご利用なさってください。場所がわからなければいつでも従業員に訊いてくださいまし」

みんな、はいと返事をしてそれぞれ割り振られた部屋に向かう、僕も部屋に荷物を置きに行くか。

「……」

一夏に引つ張られて海に行くことになり更衣室に向かっていた、途中箒姉と会ったんだけど、それはいい、問題は……。道端にウサミミが生えていた、バンパーとかが着けるあれが……。なんか、すごくシュールな光景だな、これ。

まあ、こんなことするのはあの人しかないだろうな……。はあ。

「えーと．．．抜くぞ？」

「好きにしる。私には関係ない」

いや、箒姉、関係あるでしょ、あれって絶対．．．．．

「行くぞ、優希」

えっ？箒姉、なんで僕の引つ張ってるの？あ、ちよつと待つてそ  
っちは女子の更衣室じゃ．．．．．待つて箒姉、そっちに引つ張らな  
いでえー．．．．．！？

危なかった．．．．女将さんが止めてくれなかったら女子更衣室  
に行く羽目になるところだった。ありがとう女将さん。

ちなみに僕は背中傷を見せないようにパーカーを羽織っている。  
でも、なんでだろう？この格好を見た、女子が膝を突いて落ち込ん  
でいるんだけど．．．．．僕何かした？

「ば、パーカーでブロックだと．．．！」

「そんな、優希きゅんの上半身裸を見れると思ったのに．．．．．」

「でも、パラソルの下にいるだけでも絵になるわねー」

「本当ね．．．．．深窓のお嬢様って感じ？」

「そう、それ！」

・・・・・・はあ、海か・・・・・・。一夏達、楽しそうだな・・・・・・でも泳いだら背中を見られちゃうし・・・・・・適当に時間を潰したら旅館に戻るう。

「優希、こんなところにいたんだ」

「あ、シャル、って！？な、何そのバスタオルのミイラは！？」

シャルの隣には全身をバスタオルで包まれた何かがいた・・・・・・あれ？あの眼帯って、まさか！

「ほーら、優希に見せたら、大丈夫だよ」

「だ、大丈夫かどうかは私が決める」

や、やっぱり、ラウラか！でもどうしてそんな格好なんだ？シャルがラウラの耳？に顔を寄せて何か話しているけど聞こえないな、なに話してんだろ？

「え、ええいつ！」

と、ラウラは掛け声とともに巻いてあったバスタオルを一気に外した、すると・・・・・・。

「わ、笑いたければ笑うがいい・・・・・・！！」

黒の水着を纏ったラウラが出てきた。でも、その水着がすごかった、俗にいうビキニで色は黒でレースがふんだんにあしらわれていて、セクシーランジェリーにも見える、髪は左右にアップテールにしている。

もじもじとして恥らっている姿が可愛い。

「おかしいところなんてないよね、優希？」

「うん。可愛いよ、ラウラ」

「なっ……！か、かわっ、可愛いだと……私が」

「ほら、言った通りでしょ、髪は僕がセットしたんだ。せつかなんだらおしゃれしくちゃね」

「そうなんだ。シャルも水着似合ってるよ」

「あ、ありがとう優希」

照れくさそうにしながら髪をいじるシャル。………な、なんか僕も恥ずかしくなってきた。

「おい、優希」

「ん？」

あれ？一夏、どうしたんだろ？

「何？一夏」

「ビーチバレーしようぜー」

「篠ノ乃く〜ん！」

「ゆーゆーと対戦だ〜！」

「デュノアさん、ボーデヴィツヒさんもやろつよ」

ビーチバレーか、それだったらパーカー脱がなくてもいいし、やってもいいかな。

「うん、いいよ。シャルとラウラはどうする？」

「僕もやるよ」

「私が可愛い……私が……可愛い……」

ダメだラウラの反応が無い。ん、とりあえず連れて行くか。ラウラの手を持って……。

「行こう、シャル」

「ずるいよ……ラウラ」

「ん……？何か言った？」

よく聞こえなかったんだけど？

「な、なんでもないよっ！ほら、行こうー夏達が待ってるよ」

「あ、うん」

どうしたんだろシャル？ほら、ラウラ行くよ。

「私が……私が……」

はいはい、行くよー。でもビーチバレーか……やったこと無いな？まあ、適当にやればいいか、バレーと同じでしょ。

あれから時間が過ぎて、現在七時半。僕達は旅館の大宴会場で夕食を取っている。目の前には海の幸をふんだんに使った豪華な物。では、一口……。

「うーん♪お刺身、美味いな♪お昼もだったし、ほんと、豪勢だよね」

「そうだね、ほんと、IS学園って羽振りがいいよ」

隣に座っているシャルも頷く。

まあ、国営でやっている学園だからね、予算もいっぱいあるんだろう。でも、ほんと、美味いな。

次は山葵を乗せて……あむ、ん…………♪

「美味い……、これ、本わさだ、豪華だな」

「本わさ？」

「あつ、シャルは知らないか。本わさっていうのは、本物の山葵をおろしたやつのこと」

「あれ？じゃあ、学食にある山葵は？」

「あれは、練り山葵でちょっと違うんだ。でも味は本わさの方が美

美味しいよ」

「ふーん、そうなんだ。はむ」

あれ？今シャル、皿に盛ってある山葵を全部食べなかった？そんなことしたら・・・。

「~~~~~!!」

鼻を押さえながら涙目になるシャル。うわ、辛そう・・・。

「大丈夫、シャル？ほら、これ飲んで」

「あ、あらひょう・・・ゴクツ、ゴクツ！」

僕のお茶を渡すとシャルは一気に飲み干した。

「ふ、風味があつて、いいね・・・。お、おいしい・・・。よ？」

ほんと優等生だなシャルは、とりあえず頭を撫でておこう。

「あ、あつ、優希・・・／／／／／」

・・・はっ！何恥ずかしいことをしてるんだ僕は！？熱い！顔が熱い！あつ、いいとこに水が！

ゴクツ、ゴクツ、ゴクツ！！

ん？水ってこんな味だったっけ？

「あれ？優希、か、顔が凄く赤いよ、大丈夫？」

なん．．．か、視界が．．．ばやける？

「ちよっ！優希？」

あれ？しゃるが．．．さんにん．．．いる？．．．なん  
で？

「ん？この匂いって．．．まさか！」

あうゝゝゝ、もうだめゝゝゝたおれるゝゝゝ。

「あっ、ちよっ、優希！？」

バターンッ！

バターンッ！  
と、音と共に優希は後ろに倒れた。

「ゆ、優希！」

「んゝゝ．．．」

ほっ、寝ただけか．．．でも、やっぱりこれって．．．。  
僕は空になったコップの臭いを嗅ぐ、するときついアルコールの  
臭いがした。原因はこれか．．．。

「ど、どうしたのだ！？なんで、優希は倒れてるのだ！？」

「お、落ち着いて、箒さん。優希は酔っ払っただけですから」

「よ、酔っ払った……だど？」

「うん、ほらこれ」

僕は箒さんの顔の前にコップを持ってくる。すると、箒さんも理解したのだろうか、ホッと息をつく。

「ふう、よかった……」

「うん、でも、なんで優希のコップにお酒入ってたんだろ？」

従業員さんのミスかな？とりあえず先生に報告を……。

「にゃあ~~~~」

ん？猫……？

「うにゃあ~~~~」

なんで猫？ここは旅館の大宴会場なのに……。。ん？膝に重みが……？

「にゃ~~~~」

「ゆ、優希!？」

ぼ、僕の膝に優希が頭を乗せてる!？……って、なんで猫の

鳴き声になってるの？

「しまった！忘れていた」

「えっ、何とうしたの、篤さん？」

「優希は酔うと……猫みたいになる」

えっ、なにそれ？

「昔、父がふざけて酒を飲ませたことがあってな……今と同じで猫のようになったのだ」

「な、なるほど……」

「にゃ……」

で、でも酔うと猫みたいになるって……優希どんだけ面白い体質なの。

「まあ、暴れたりするわけでもなく、ただ膝の上で甘えるだけだから害は無い」

あ、そうなんだ。でも優希可愛いな……。

「にゃ……、ゴロゴロ」

にゃ……って、なにこの可愛い生き物？持ち帰っていい？

「デュノアさん、ずるーい！」

「変わって!」

「羨ましい……」

「はあはあ……はあはあ」

うわっ!?! いつの間に周りに人が! 変わりたいって言われても優希が頭を乗せてるんだよ。

「でゅっちゅ、でゅっちゅ!」

「でゅ、でゅっちゅ……? って僕?」

た、確か布仏さんだっけ? 優希や一夏はのほほんさんって呼んでたっけ?

「そっだよ。で、でゅっちゅ」

「な、何……?」

「はいこれ、ゆ〜ゆ〜に着けて〜」

「えっ。これって……!」

布仏さんが差し出したのは黒のカチューシャ、でも普通のカチューシャではなかった。それは……!

「ネコミミだよ〜」

ネコミミって……! なんで持ってるの布仏さん? でも、そんなの優希に着けたら……!?

「ゆるゆるに、そ〜ちや〜くっ!」

「あっ!?!」

シャキーンッ!

「うにゃ?」

「くくグハツ・・・!」くくく

・・・なに?この破壊力は、一瞬意識が飛びかけた。恐るべし猫化・・・!

「シャルロット変われ。ここは姉である私が優希の面倒を見る」

「別にいいよ、優希も動きたくなさそうだし」

「なんだと!そんなことは無いよな!ゆう・・・き?」

ん?どうしたんだろ?

「すーすー・・・うにゃ・・・すー」

あれ、寝ちゃったよ。でも、寝顔も可愛いなあ〜。

バンッ!!

「なんだ、騒がしくぞ!お前らは夕食くらいは静かに・・・」

くくくくシーーーーーッくくく

「す、すまん……」

うるさくしたら優希が起きちゃうでしようか、まったく……

「で、どうしたのだ？」

「えーと、優希が酔っ払って寝むちゃったんですけど……」

「酔っ払った？　どういうことが」

「いえ、優希のコップに何故かお酒が入っていて、それで……」

「……そうか、まさかあいつか……」

「うにゃ……すー……すー……」

織斑先生が何か言ったけどよく聞こえなかった。なにか心あたりがあるのかな？

「まあいい、ここで寝られても邪魔だな。織斑！」

「は、はいつ!？」

織斑先生が一夏を呼ぶけど、一夏驚きすぎなんじゃないかな？　ん？　セシリアさんが何か睨んでるけど……ああ、邪魔してゴメンね。

「篠ノ乃弟を部屋まで連れっててやれ」

「え、優希を？」

「そうだ」

「はい、わかりました。．．．よつと」

一夏が優希を持ち上げるけど、その持ち方って．．．．．なん  
で、お姫様抱っこなの？

「キャーーーー！！お姫様抱っこよ！」

「織斑君、大胆」

「やっぱ、アリね！一夏×優希」

「いえ、案外、優希×一夏かもしれないわっ！」

ほら、十代の女の子の前でそんなことするから、みんな騒がしく  
なるじゃない。ていうか最後の二人！絶対そんなことは無いからね！

「一夏の馬鹿者が．．．．．！」

「．．．．．一番のライバルは優希さんかもしれませんわ．．．．．」

「優希．．．．．アンタだけは信じてたのに．．．．．！」

こちら、その三人も変なこと言わないの。ありえないから、  
絶対に。

「？　じゃあ、部屋に持っていくよ」

「ああ、頼む」

一夏が優希を部屋に連れて行く、お休み優希・・・・・・・・。はっ！しまった！！写真を撮るの忘れてた、あんな可愛い優希を撮りわすれるなんて・・・・・・・・。一生の不覚だよ！・・・・・・・・。はぁ・・・・・・・・。

「それでは、夕食を続けろ、あまり騒がしくするなよ」

「~~~~~はい~~~~~」

僕たちの返事を聞いて織斑先生は戻っていった。

はぁ~~~~~、写真が・・・・・・・・。

チヨイチヨイ

ん？何・・・・・・・・？

「デュノアさん・・・・・・・・これ欲しい？」

えーと、確か同じクラスの長谷川さん・・・・・・・・。だっけ？何デジカメがどうした・・・・・・・・こ、これは・・・・・・・・！！

「まだ、売り手はついてないよ」

デジカメのディスプレイにはネコミミ優希の映像が写っていた。しかもこのアングル！浴衣の胸元が少しはだけていて、すごく色っぽい。

「・・・・・・・・メモリーごと買うよ、幾ら？」

「・・・・・・・・本体込みだと・・・・・・・・このくらいで・・・・・・・・」

長谷川さんが指を立てる……そのくらいだつたら余裕だ……。

「…………買った」

「…………毎度」

よし、これで優希のネコミミ写真は僕だけのものだ！

「…………受け渡しは、明日で…………」

「…………うん、わかった、明日ね…………」

「…………では…………」

長谷川さんが自分の席に戻っていく。  
ふふふつ、明日が楽しだなあ！

## 第二十二話（後書き）

すみません、今回はなんか上手く書けませんでした。

優希の猫化は思いついたもので、つい。

次回では束が登場します。では

## 第二十三話（前書き）

更新遅くなりました。  
二十二話です。

## 第二十三話

「・・・・・・・・死にたい」

「朝から何言つてんだよ優希」

昨日のことは全部覚えていた。酔っ払ってから寝るまでのことを全部、なんだよ猫って昔も同じことがあった気がしたけど、あの時はみんな何も無かったって言ってたから信じてたけど、やっぱりあったじゃん！死ぬる・・・・恥ずかしさで死ぬる。

・・・・・・・・お酒を飲まないようにしよう。絶対に・・・・・・・・。

「おい、優希。早く着替えろ、千冬姉に叱られるぞ」

「・・・・・・・・うん」

ううー、みんなと顔を合わせるのはイヤだな・・・・・・・・でも千冬さんに怒られるほうがイヤだからな、着替えよう・・・・・・・・。

臨海学校二日目。今日は朝から夜までISの装備の試験運用及びデータ取りを行う予定だ特に専用機持ちは、代表候補生は国から大量の試験用装備が送られてくるからデータ取りが大変だ。

まあ、僕と一夏は送られてくる装備も無いんだけどね。

「ようやく全員揃ったな・・・・おい、遅刻者」

「は、はいっ」

ラウラが遅れてくるなんて珍しいな。軍人だから時間に厳しいはずなんだけど、寝坊かな？

「そうだな、ISのコア・ネットワークについて説明してみろ」

「は、はい。ISのコア・ネットワークは……」

ラウラが説明を始める。でも、ISのコア・ネットワークの説明か……少しマニアックなところを出してきたな千冬さん。まあ、ラウラだったら説明できるでしょ。

「さすがに優秀だな。遅刻の件はこれで許してやろう」

そう言われるとラウラはふうと息をつく。よかったねラウラこんなんじゃ済んで。

「さて、それでは専用機持ちは専用パーツのテストを行う」

「先生、箒は専用機を持っていません」

鈴の言うことはもっともだが、確かに箒姉は専用機を持っていない今は。

「それは……」

「私から説明しよう、実だな」

あれ？ 篝姉の専用機のこと千冬さんも知ってたんだ。まあ、束姉の連絡先知ってるからな聞いててもおかしくないか。  
ずざざざざざ・・・・！！

「や~~~~~ほ~~~~~ん！！」

こ、この声は束姉！

束姉は近くの崖の斜面を土煙を上げながら滑ってきた、そして・・・・。

ダンッ！

跳んだ、すごいな人間ってあんなジャンプできるんだ。そして跳んだ束姉の目標は・・・・

「ゆーく~~~~~ん！！」

あつ、僕なんだ。てつきり千冬さんだと思ってたのに・・・・  
つて、あぶない！？

落下してくる束姉との距離がだんだんと近くなってくる、うわ  
ゝあんな速度で突っ込まれたら僕生きてられるだろうか・・・・  
？無理だな。

ガシッ！

「はぐっ！？こ、このアイアンクローはちーちゃん。相変わらず容赦ないね、でもそんなちーちゃんも束さんは大好きだ・・・・イタタタタッ！？」

「ふざけるのも大概にしろ」

せ、千冬さん、束姉の頭がミシミシいつてますけど！？人間の頭からは鳴らないはずの音が鳴ってるんですど！？

「ご、ゴメンゴメン、ちーちゃん放して！さすがに痛くなってきたよー！」

「…………ふう、まったく」

そう溜め息を吐きながら千冬さんは束姉の頭から手を放した。

「うううう…………もう、ちーちゃん。束さんの頭はデリケートなんだよ、バカになったらどうするのさー」

「安心しろ、元からバカだ」

「えー……」

なんか懐かしいな、二人の漫才みたいな会話。数年ぶりかな……………？つて、あれ？束姉がいない……………？

束姉は千冬さんとの会話を切り上げて大きな岩の陰へ向かった……………なるほど、そこにいるんだ。

「やあ！」

「…………どうも」

「篝ちゃん久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかな。大きくなっただね、特におっぱいが」

手をワキワキと動かす束姉、昔からセクハラじみたこととしてから特に千冬さんに。

あつ、束姉が木刀で吹っ飛ばした、あれは痛い……………。

「殴りますよ」

「殴ってから言ったぁ・・・・・・・・・・。ひどい！箒ちゃんひどい！」

さつきからのやり取りで僕と一夏以外は全員ポカンとしていた。  
まあ、普通はそうだろうね。

「まあ、それはどうでもいいとして・・・・・・・・・・」

束姉はくるりと向きを変えて・・・・・・・・・・。

「ゆーーく~~~~ん!!」

僕に向かってきたリターンズ。

束姉の速度が速かったため僕は避けることもできずそのまま・・・・・  
ポフッ！

「ウプッ!？」

束姉に抱きつかれた、でも僕の顔の位置は束姉の胸、箒姉と同じく  
豊かな胸の間に入った・・・・・・・・・・い、息が・・・・・・・・・・!

あれ?前にもこんなことがあったような・・・・・・・・・・?

「あゝも、ゆーくんの抱き心地は相変わらず最高だなゝ!しかも  
可愛いし!むしろ更に可愛くなった?やっぱりIS学園なんかに送  
らないで一緒に暮らしていればよかったよ~~~~!」

あ・・・・・・・・あの・・・・・・・・束姉・・・・・・・・息・・・・・・・・が・・・・・・・・・・。

「東、放してやれ、窒息するぞ」

「は〜い」

東姉はパツと手を放して僕を解放する。

はぁ．．．．．はぁ．．．．．ようやく呼吸が．．．．．できる。

「おい東。自己紹介くらいはしろ。うちの生徒達が困っている」

「えー、めんどくさいなあ。私が天才の東さんだよ、はろー」

東姉が簡単に挨拶？を済ませる。はぁ．．．．．東姉は昔から興味が無いことのはとことん無関心だからな．．．．．でももう少し、まじな挨拶はしようよ。

啞然としていた一同はようやく目の前にいる破天荒な人物がISを開発した天才科学者、篠ノ乃東だと気づいた、すると、周りがざわざわと騒がしくなる。

「はぁ．．．．．もう少しまともにできないのか、お前は。一年生、手が止まっているぞ。こいつのことは無視しろ。山田先生、各班のサポートをお願いします」

「は、はい、わかりました。皆さん班ごとに分かれてください」

山田先生がそう言う専用機持ちである僕達以外の女子は散っていった。

「それで、頼んでおいたものは．．．．．」

篤姉は少し躊躇いながら束姉に尋ねる。

「うっふっふ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ！」

束姉が空をビシッと指す。……空？  
ドーンッ！ドーンッ！ドーンッ！

「うわっ！？」

凄い衝撃を伴って、金属の塊と二つのウサギ？の絵が描かれたコンテナが二つ落ちてきた。

束姉がボタンを押す、すると金属の塊が一瞬で消えた、するとそこには……。

「じゃじゃーん！これぞ篤ちゃん専用機こと『あかつはき紅椿』！全スペックが現行ISを上回る束さんお手製ISだよ！なんたってこのISは天才、束さんが造った、事実上、世界初の第四世代型なんだよ」

赤い、いや真紅のISが佇んでいた。全スペックが現行機を凌ぐって……しかも第四世代型って……束姉なんてものを造ったんだ。

あれ、でもさっき、事実上って言ったような……どういうこと？

「束、事実上とは、どういうことだ？」

あ、千冬さんもやっぱりそこが引っかけだったんだ。

「ふっふっふ。さすがーちゃんは鋭いね。だったら説明しよう！

本来なら世界初の第四世代型ISはユー君のユニコーンの筈だったんだよ！」

えっ！？ユニコーンが第四世代型！？

「でもね．．．．ユニコーンは変異しちゃったからね。だから『紅椿』が世界初なんだよ」

「へ、変異．．．．．？」

「あ、あの束姉、変異ってどういうこと．．．．．？」

変異って．．．．ISは進化するものでしょ、でも世代が変わるって．．．．．。

「うん、ユニコーンはの造った時はれっきとした第四世代だったんだけど、ファースト・シフト一次移行をしたときに変異、．．．いや進化したんだよ」

進化．．．．．。

「ちよつと待つて束。じゃあ、ユニコーンは第何世代なのだ．．．．」

そうだ、第四世代じゃないなら何世代なんなんだ！？

「さあ？何世代なんだろうね？天才の束さんにもわかんないや」

．．．．．え？

「ちよつ、束姉、わかんないって！？」

「しょうがないじゃん、元はというとゆー君のせいなんだよー」

え？僕のせい……？なんで？

「だって、ゆー君の造ったサイコフレームが原因でユニコーンは変異したんだよ」

「サイコフレームが……？」

サイコフレームって……いや、それなら納得がいく。Dモイドの時の性能、あれは造った僕でさえわからない物だった。束姉がそう設計したんだと思ってたけど、まさかサイコフレームが原因だったなんて。

「はあ……。まあいい、とりあえずこの話は一旦終了だ。束、『紅椿』の調整を始めろ」

「はい。じゃあ、篝ちゃん始めようか」

「………わかった」

ユニコーンに隠されていた真実を聞いて沈黙していた僕達は、千冬さんの言葉で我に返った。そして千冬さんは束姉と篝姉に『紅椿』の調整を指示した。

……でも、第四世代型を変異させたって。サイコフレームって一体何なんだろう、造ったのは僕だけど、こんなのは予想はしてなかった……。僕は造ってはいけない物を造ったんじゃないのだろうか……。

「じゃあ、箒ちゃん、今からフィッシングとパーソナライズをはじめようか！私が補佐するからすぐに終わるよん」ゆー君も手伝って」

「あ、うん。わかった」

とりあえず考えるのは後にしよう。

「じゃあ、ゆー君はこっからここまでをやってね」

「わかった。束姉、データちょうだい」

「ほいほい、今送るよー！」

お、きたきた……えーとここからここまでか……よしっ！

僕は束姉と同じく、六枚の空中投影型ディスプレイとキーボードを出して指を走らせる。

これだったら二分くらいでできるかな？

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピッ！

「近接戦闘を基礎に万能型に調整しておいたから、すぐに馴染むと思うよ。あとは自動支援装備もつけておいたからね！お姉ちゃんが！」

「それは、どうも」

箒姉の反応も薄いな……。まあ、昔からそうだったもんね……。でも自動支援装備か……。だったらビット系かな？

まあ、それより作業に集中しよう。えーと……。

「す、すごい……信じられないスピードだわ」

「ゆ、優希さんも……は、早いですわ」

えーと、これがこうで、こうでしょ。だから……こうで。

「ゆー君終わった？」

「うん、あと少し……終わったよ」

「じゃあ、フィッティング終了」。超早いね、さすが私！そしてゆー君もさすが！」

「ちょ、束姉、抱きつかないで！」

は、恥ずかしいからやめてえー！そしてまだ、パーソナライズが終わってないから！

「ちえ~~~~」

ふう………まったく。

……でも、『紅椿』か……腰部に付いたあの二振りの刀を見る限り、完全な近接戦闘型だな……まあ、箒姉の専用機だからこれで正解だな。でも、束姉は万能型って言ってたからな………  
………  
よし、これで………。

「束姉、終わったよ」

「うん、じゃあこれで全て終了。じゃあ、試運転をかねて飛んでみてよ。篝ちゃんのイメージ通りに動くはずだよ」

「ええ、それでは試してみます」

篝姉は目を閉じる、精神を集中してるんだ……。そして、飛んだ。

「は、速い……」

「これが第四世代の加速……」

「す、すごい……!」

確かに速い……。この加速、第二世代の瞬間加速イグニッション・ブーストとおなじんじゃないか？これが第四世代……。凄い……。

「あ、そうだ！ ゆー君」

ん？なに、束姉？

「頼まれてたパーツのリスト送るね〜!」

「え……。？うわ!？」

突如僕の目の前にディスプレイが出てきた、そこにはユニコーンの交換用のパーツの詳細が書かれていた。

「こ、こんなに……。でもこれだったら修理には困らないな……。あれ？」

何だろう、これ？超長距離戦闘用パッケージに近接用パッケージ、それに特殊兵装パッケージ・・・ってこれは！た、束姉・・・。

「じゃあ、次はこれ行ってみようー！！」

この装備のことを聞こうとした瞬間、束姉はミサイルをぶっ放していた。・・・そのミサイルランチャーどっから出したの？・・・、って、ちがう！

「た、束姉。これっていった・・・「お、おっ、織斑先生！た、たたっ、大変です！」・・・い？」

あれ、山田先生、どうしたんだろう？何をそんなに慌ててるんだろう？

「どうした、山田先生？」

「はあ、はあ・・・、こっ、こっ、これをつ！」

息を整えながら山田先生が千冬さんに小型の連絡用端末を渡した。千冬さんは端末から写し出された情報を見ると表情が険しくなった。どうしたんだろう一体？

そして、山田先生と小声で何か話し合っている。でも山田先生の慌てっぷりがいつもより凄かった何かあったのかな・・・？

・・・話し終わったらしく、山田先生は旅館の方へとまた慌しく戻っていった。

「全員、注目！」

千冬さんがパンパンと手を叩くとみんなの視線が集中する。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼動は中止。各班、ISを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ！」

特殊任務行動に稼動テストの中止……これは、相当やばいことなんじゃ……。どうなってんだ一体……。

千冬さんの言葉に女子全員がざわざわと騒がしくなる。

「とつと戻れ！以後、許可無く室外に出たものは我々で身柄を拘束する！いいな！！」

「……はっ、はいっ！」「……」

全員が大急ぎで動きはじめ、ISを片付けを開始する……。でも、あの千冬さんの怒号、学園に来てから初めてだ……。でも今の千冬さんの態度でわかった、これは相当やばい事態だつてことが。

「専用機持ちは全員集合しろ！織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰！……それと篠ノ乃姉弟！」

専用機持ちも……。？人数がいる作戦なのか？でも篝姉まで……。さつき専用機を使い始めたばかりなのに戦闘をさせるつもりなのか……？

「はい！」

篝姉の気合の入った返事が聞こえた。……。でも、なんだ

か・・・。

（とてつもなく、嫌な予感がする・・・。）

何も無ければいいのだが・・・。

## 第二十三話（後書き）

はい、束さん登場です。

次から福音戦ですけど、オリジナルの敵を入れようと思っています。

まあ、ユニコーンが好きな人には何が来るかは大体わかってしまう  
と思いますけど。

では次の更新で。

## 第二十四話（前書き）

はい、二十四話です。今回は戦闘がメインです。

では、どうぞ。

## 第二十四話

僕達専用機持ちと教師陣は旅館の最奥にある宴会用の座敷に集められた。

照明が落とされて薄暗くなった部屋には空中投影型のディスプレイが映し出されていた。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼動にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS『シルバー・ゴスペル銀の福音』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱、さらにそれを静止しようと出撃した軍用試作型IS、コードネーム『クシャトリヤ』も同じく暴走したと連絡があった」

軍用ISが暴走……！しかも二機って……とんでもない事じゃないか。

「……………」

その情報を伝えられると僕達の表情は険しくなった。……一夏以外は……………。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先、クシャトリヤは二・五キロ先の空域を通過することがわかった。時間にして両機とも約五十分後。学園上層部からの通達で我々がこの事態を対処することとなった」

僕達が……？じゃあ、バックアップに徹するのかな？

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よっ

て、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

なっ！？・・・・いや、それが妥当だろう、第二世代型である訓練機で新型機を相手するよりも同じ第三世代型を持つ僕達がやる方が勝てる可能性が高い。でも・・・・僕達はまだ一年生だ・ ・何故経験豊富な教師陣に任せない・ ・学園の上層部は何を考えているんだ。

・・・・文句を言っても仕方ない、今は作戦に集中するしかない・・・・。

「それでは作戦会議をはじめろ。意見があるものは挙手するように」

「はい」

セシリアさんが早速手を挙げた。

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

いい質問だ、敵の情報があるだけで少しは戦いやすくなる。

「わかった、ただしこれは二カ国の最重要機密だ。けして口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」

「了解しました」

千冬さんの注意事項を聞くとディスプレイにIS二機のデータが映し出された。

そして僕達は教師陣を交えてデータを見ながら相談を始める。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃機体・・・わたくしのISと同じ、オールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だわ。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうの方が有利・・・」

「この特殊武装が曲者って感じがするね。ちょうど本国からリヴァイブ用の防御パッケージがきてるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルもわからん・・・」

みんなはまずは福音の方からの対策を考えていた、僕はクシャトリヤの方について考えてみようか。

『クシャトリヤ』まず、印象からして・・・デカイ。通常のISよりも一回り大きく見える、その原因は肩の四つの非固定浮遊部位だ、これはISの全長と同じ大きさのシールドらしい、でもただのシールドではなく表面に拡散ビーム砲が備えられていて攻防、両方とも使える設計になっている。

さらには機体の各部にもビーム砲が付いている完全な攻撃特化の重装甲機。でも、そのために機動性は殆ど無い。これが攻略の鍵だ・・・あれ？でもなんで、福音に着いていけているんだろう？機動性に特化した福音と機動性を捨てたクシャトリヤ、なんでほぼ同じ速度出せているんだ？

「織斑先生、なんでクシャトリヤは福音のすぐ後ろについているのですか？速度に圧倒的な差があるはずなのですが・・・」

「そのことか、クシャトリヤは福音を追うさいに高速移動用の大型ブースターを着けたと報告が入っている、これが原因だ」

なるほど、大型ブースターか。

「質問は以上か？」

「あ、はい。ありがとうございます」

「教官、偵察は行えないのですか？少しでも情報が欲しいのですが・  
・・・」

確かに、もうちょっとはデータが欲しいところだ、これだけでは  
少なすぎる。

「無理だな。両機とも現在超音速飛行を続けている。最高速度は時  
速四五〇キロを超えるとある。アプローチは一回が限界だろう」

「一回きりのチャンス・・・・ということはやはり、一撃必殺の  
攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

一撃必殺・・・・それができる機体は・・・・。

「え・・・・？」

「一夏、あなたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ、問題は・・・・」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃  
に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるISでなければいけない  
な。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

「でも、相手は二体だよ、速度だけじゃなくて一夏が攻撃しやすい  
ように援護ができる機体じゃなきゃ」

ここにいる全員の中で一番の攻撃力を持つ機体、それは一夏の白式だ。白式のワンオフ・アビリティー『零落白夜』なら、シールドを貫通して直接ダメージを与えられることができる。

「ちよつ、ちよつと待ってくれ！お、俺が行くのか！？」

「『当然！』『』『』『』」

僕達の声が見事に重なった。何を言ってるの一夏、当たり前じゃないか。

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟ないなら、無理強いはいしない」

「――っ！？……やります。俺が、やってみせます」

千冬さんの言葉で、及び腰になっていた一夏は覚悟を決めたようだ。

「よし、それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

「それならわたくしのブルー・ティ『待った待った』。アースが……？」

この声は……。

全員が声の主を求めて上を見上げると天井から束姉が首を出していた。……何やってるの？

束姉はトゥッ！と声と共に、空中で身体をひねって一回転をして

着地した。

「その作戦ちよつと待ったなんだよ」

「はぁ……何をしに来た。束」

「ちーちゃん、ちーちゃん。もつといい作戦が私の頭の中にナウ・プリンティング！」

「……………出て行け」

千冬さんは頭を押さえ始める……………。本当に姉がすみません。

「聞いて聞いて！ここは断・然！紅椿の出番なんだよっ！」

「なに？」

あ、紅椿が？どういうこと……………？

「織斑先生っ！大変です！」

「どうした」

「後方を飛行していたクシャトリヤが進路を変更！二手に分かれました！」

「なんだと……………！進行方向は」

っ！？二手に分かれたって、これじゃあ一回のアプローチじゃ両機とも倒すのは無理になった……………一体どうすれば……………。

ん？そういえば、束姉からのリストに確か……。

コレとコレの二つを使えば……いけるはずだ。

「織斑先生」

「後にしろ！今はそれどころでは……」

「僕に考えがあります」

「なんだと……？」

「よし、これでOK……」

装備変更をしたユニコーンの最終チェックが終了した。現在のユニコーンは束姉が持つて来てくれたパーツの中にあつた、超長距離戦用パッケージを装着している。

このパッケージ、名前の通り長距離からの攻撃を目的とした装備で、武装は右腕部に固定されたロングバレルビームマグナムの一つだけ、後は左腕部に設置されたセンサー用のレドームのみだ。

アウトレンジからの狙撃……それが子のパッケージの特性だ。その代わりこの装備、敵に接近されたら一切対処できない。一応ビームサーベルが一本付いてはいるけどね。

でもこのビームマグナムは一回の攻撃で五発分のエネルギーが込

められている特殊なEパックを使う、つまり威力は五倍……  
一撃でISを行動不能にできる。

そして、移動面ではデルタを使うことになった。

デルタは、ISをエネルギーを使用せずに現場まで運ぶキャリアのことだ。このデルタはなんと超高速飛行も可能で、今回の作戦にはうってつけだ。

千冬さんにこの装備を提示した時はもちろん反対された、シャルやラウラ、箒姉からもだ。でも、すぐにクシャトリヤを撃墜できるのは僕のユニコーンだけだと事実を述べたら、全員渋々だが賛同した。

『篠ノ乃弟、準備はできたか』

「はい、織斑先生、準備終了しました」

『そうか……。織斑、篠ノ乃、そっちはどうだ』

「だ、大丈夫です……」

「問題ありません」

一夏達も準備は終わったみたいだ、でも白式も第四世代だとは思わなかった……。てか、僕が初めて触ったISってそういう白式だったもん……。おかしいことは無いか。

こつちのことも不安はある。それよりも……。僕は秘匿ト・チャネル回線を開く。

『一夏』

『うおっ！？今度は優希か……。どうしたんだ？』

今度は・・・？

『一夏、篝姉のことなんだけど・・・・・・・・・・』

『・・・・・・・・わかってる、千冬姉にも同じことを言われた。篝のこととは俺がしっかりと見ておく』

そう・・・・・・・・千冬さんが・・・・・・・・。

『わかった・・・・・・・・気を付けてね、一夏』

『ああ、優希もな』

プライベート・チャンネル

秘匿回線を切って通信を終了する。  
何も無ければいいけど・・・・・・・・。

『では、作戦開始！！』

行こうか、ユニコーン、デルタ。

僕はデルタの上に乗る、僕は飛び立った、デルタは徐々に加速してすぐに超音速飛行に入る。身体にGが掛かる、けどユニコーンのDモードの時よりもマシなので気にしない。

（篝姉と一夏もとりあえずは作戦に集中しよう・・・・・・・・・・）

（いたっ、あれか！）

デルタで飛行すること数分、目標のクシャトリヤをセンサーに捕らえた。僕はクシャトリヤのセンサーの範囲内に入らないように後ろにつける。

前からだと避けられる可能性がある後ろから狙撃する。一撃で倒せなくてもブースターを破壊すれば他のみんなでも対応できるはずだ。

ロングビームマグナムを展開、構え狙いをつける超高感度ハイパーセンサーがクシャトリヤを拡大する。狙いはブースター、息を吸い深呼吸をし集中する。そして息を止めて引き金を……。

《注意！敵IS、ブースター切り離しを確認、接触まで八・七秒。回避を推奨》

なっ……！？ブースターが切り離されたって！？なんでだ……！いや、それよりも回避はダメだ、このままブースターごと撃ち落とす……！

僕は迷わずトリガーを引く、普通のビームマグナムよりも高出力のビームが撃ちだされる。一条の閃光はそのまま突き進んでブースターにぶつかり爆発した。

（さっきのビームは貫通した、そのままクシャトリヤにも威力は落ちても当たっていればかなりのダメージを与えられているはずだ……）

ブースターの爆炎と煙のせいでクシャトリヤを落としたかどうかわからな……っ！？。

ビシューーーンッ……！

煙を突き破り、高出力のビームが僕のすぐそばを突き抜けた。

「・・・・・・・・・・どうやら、ダメだったみたいだね。」

ようやく煙が晴れるとそこには無傷のクシャトリヤが佇んでいた。クシャトリヤの視線は完全に僕に向いていた。

僕はロングビームマグナムのリロードをする。相手は鈍足だ上手く当てられれば勝てるはずだ、デルタも収納する、戦闘では邪魔なだけだ。

「・・・・・・・・・・！」

クシャトリヤが動き出した、僕へ一直線に突っ込んでくる。データー通りだ奴は遅い十分対応できる。僕はまたロングビームマグナムを構え狙いをつける。

すると、クシャトリヤはランダムに動き始める、さっきの攻撃で学習したか・・・・・・・・当てさせないつもりか。

徐々に近づくクシャトリヤ、ダメだ狙いがつけにくい・・・・・・・・。落ち着け・・・・・・・・ここだ！！

クシャトリヤがドットサイトに入った瞬間僕はトリガーを引く。でも、放たれたビームは外れた。

そして反撃とばかりに両腕を僕に向けて袖の部分にあるビーム砲を撃ってきた。

「くっ・・・・・・・・・・！」

僕はクロス・グリット・ターン三次元躍動旋回で避ける、でもクシャトリヤは全身に装備されたビーム砲を連続で放ってくる。

正直言って避けるのが精一杯だ、リロードする暇さえない。

「・・・・・・・・・・！」

「え？」

どうしたんだ、クシャトリヤは突然ビームを撃ってこなくなった、エネルギー切れか？

クシャトリヤは数秒静止、すると全面にあるシールドが中央部から折れるように開いた。・・・なんだあれは・・・？

開いたところから小型の機械が飛び出す、その機械は自力で浮遊しクシャトリヤの周囲を飛び回り始めた。数は十二機・・・まさかあれって・・・。

飛び回っていた機械が止まり全機の先端が僕の方へと向き・・・。

「・・・・・・・・！！！」

一斉にビームを放ってきた！僕は急上昇してそれを避ける。やっぱりあれはビット兵器！

「でもなんで！？」

提示された情報にはこんな装備は無かったはずだ、でもなんで・・・。っ！まさか・・・情報改竄・・・！！？

だったらさっきのブースターパージのことも納得がいく、センサーの有効範囲も改竄されていたってわけか・・・やばいな、これは。

ビシュンッ！ビシュンッ！ビシュンッ！

「くっ！？」

なんて考えてる暇もないか・・・セシリアさんとの訓練で

全方位からの攻撃には少しは慣れてはいるけど数が多い、でも一発の威力は低い………だったら！

左腕部のレドームをパージしてビームサーベルを引き抜く、そして………。

「いくよ、ユニコーン！！」《IS-D system 起動》

IS-Dを発動させて持ち前の機動力でビットの攻撃をかわし、一気にクシャトリヤに接近する。

（もらった！！）

ビームサーベルの出力を最大にして振り下ろす。………はずだった。

ガッ！！

「なっ………！？」

クシャトリヤの非固定浮遊部位アンロック・ユニットの一つ、シールドの先端から出てきたアームにより僕の腕は掴まれていた。

「し、隠し腕！………くっ！！」  
シークレット・アーム

離れようとしてもアームの力が強く離れられない、だったらと蹴りを入れようとするけど残ったシールドのアームで右腕と両足を掴まれ固定されてしまった。

やばい、これじゃあ動けない！僕はバルカンを顔面に目掛けて撃つ、だがそれも首を曲げるだけで簡単にかわされてしまった。

そして、クシャトリヤの胸部装甲が光を収束し始める。いったい何を………。

「・・・・・・・・まさか!？」

クシャトリヤの提示された情報の中で最も攻撃力の高い武装、それは千冬さんにも出撃前に注意された。

『いいか、篠ノ乃。こいつの胸部収束荷電粒子砲だけは絶対に受けるなよ、チャージが長い分撃つまで時間がかかるが、こいつはお前のビームマグナムと同等威力を持っているが、照射時間はお前のものよりも長い、いいか絶対にこいつを受けるのではないぞ』

まさか、こいつゼロ距離射撃を!? ヤバイ!!

「離せ! 離せえ!!」

僕は何とか逃れようと暴れるがアームの寄る固定は一向に外れない。

荷電粒子砲はもうチャージを終えて発射体勢に入ってる。・・・・

・・・・そうだ!

イメージをするだけの時間はない、僕はその武装の名前を叫ぶ、間に合えっ!!

「・・・・・・・・おっ!!」ズヴァアアーーーーーッ!!

呼び出した武装が現れたのと同時に荷電粒子砲が放たれた!

「ああああああああ!!??」

熱い痛い熱い痛い熱い痛い熱い痛い、身体が焼けるように痛い。

照射の時間は約八秒だったけどとても長く感じた。早く終わって欲しいこの痛みから解放して欲しかった。

そして照射が終わったクシャトリヤは僕が死亡したと判断したのだろう、拘束を解き海に放り投げた。

――でも、それは失敗だよ。

残った力を振り絞って無事だったロングビームマグナムをクシャトリヤに構え、そして……。

「いけえっ!!」

トリガーを引くと再びクシャトリヤに高出力ビームが撃ち出される、放たれた閃光はシールドの一つを完全に破壊し本体をも掠め、そしてそのままクシャトリヤは海に落下していった。

「やつ……た……」

僕も、浮いているのも限界になってきた、意識が朦朧とする……でも、戻らないと。

「デル……タ……」

残ったエネルギーを全て使いデルタを足元へ展開する。するとユニコーンは解除されて僕はデルタの上に倒れ込んだ。僕は行き先を入力する、するとデルタはゆっくりながらも進み始めた僕が落ちないように。

倒れ込んだまま、ふと西を見ると、大きな爆炎が上がったの

が見えた。

（一・・・夏と篝・・・姉・・・は・・・無事だ・・・ろう  
か・・・）

二人のことが心配だったが、僕の意識は途切れてしまった。

## 第二十四話（後書き）

いやー、戦闘シーンは難しいですね。こんなんでよかったのでしょうか（ビクビク）

シナンジュを期待していた皆様、すみませんクシャトリヤでした。いえ、シナンジュにしようかなと思っていたのですが、シナンジュってユニコーンのプロトタイプみたいなもんですよね、ですから出したら設定が狂ってしまうので今回はクシャトリヤにしました。

さて、次回か次々回には三巻目も終了すると思います。  
では、次の更新で。

## 第二十五話（前書き）

更新遅れまして、すみません。  
二十五話です、どうぞ。

## 第二十五話

(あれ?ここは・・・・・・・・?)

僕は目が覚めると知らない場所に立っていた、目に入るのは透き通るほど綺麗な泉、そして泉の中央には一人の少女が立っていた。少女は帽子を目深に被っていて顔は全部見えない、でも俯いている姿は何か寂しそうであった。

「ごめんなさい・・・・・・・・」

(えっ・・・・・・・・?)

距離は遠いはずなのだが少女の声はなぜか聞こえた。そんなことはどうでもいい、何で謝るんだ、僕は彼女に何もされていないのに。

「私をもつと強ければ、あなたを傷付けずに済んだのに・・・・・・・・」

(傷付けずに済んだ・・・・・・・・?どうということなんだ?)

「だから、私はもつと強くなる、あなたを守るために・・・・・・・・」

どうということなんだ!と彼女に聞きたいが、僕の声は出ない。

一陣の強い風が吹いた・・・・・・・・静かだった、水面は揺れ大きな波紋を作る。

「そろそろお別れの時間ですね・・・・・・・・」

お別れの時間って・・・・・・・・どういう・・・・・・・・?

「こんな形で出会ってしまったのは残念です……。でも、これだけはあなたに言いたかった」

僕に、言いたいこと？

「名前をくれて、ありがとう……」

(な、名前って……。どういうこ……。！)

また風が吹いた、先ほども強い風が。すると、周りの景色が薄れていく。少女は帽子を外し僕に微笑みかけた。

帽子が無くなって見えるようになった彼女の顔に僕は……。

……。なぜか、とても懐かしく感じたんだ。あの人は……

「……。地図から無くそうかな、アメリカとイスラエル」

私は今とてつもなく怒っている、こんなに怒ったのは初めてなんじゃないだろうか？

でもやってくれたね、この束さんを騙すなんてさ、まあ本当のスペックデータが紙媒体のアナログなものだなんてね、してやられたよ。まあ、ゆー君に怪我無くて本当によかったよ。もし、ゆー君の肌に傷が付いてたりなんかしたら……。世界中の核ミサイルをピンポイントで撃ち込んでやるところだったんだけど。

とりあえずその責任者達の断罪は後にして、今はユニコーンの修理だ。まあ、修理するだけじゃつまらないからちよつと改造しようかな。ゆー君も喜ぶだろ……あれ？

「あはは〜、ほんと面白いなこのISは、何もかもが私の予想を裏切るなんて、興味が絶えないよ」

まさか修理中に『セカンド・シフト二次移行』するなんて、今度はどんな進化なんだろう？楽しみだよ。

とりあえず、ちーちゃんに渡しておこう。データ取りは今度にしておこう。

………ゆー君こと、頼んだよ………

………なんか、頭がボーとする。でもなにか夢を見ていたはずなんだけど………ダメだ、思い出せない。

「何か大切なことだった気がしたんだけど………」

ところでここはどこなんだ？………旅館の部屋？

「っ！そうだ、作戦は！」

僕は布団を跳ね除け飛び起きる。

「とりあえず、千冬さんのところに行こう」

あの時、完全には撃墜できなかった。だったらまだクシャトリヤは動いているはずだ！

旅館の廊下を走り、司令室となっている座敷部屋に向かう。たしかあそこだ！って、あれ？なんでのほほんさん達がいるんだろう、のほほんさん泣いちゃってるし。

「お、織斑先生」

「だから、室内待機だと！・・・篠ノ乃か、起きても大丈夫なのか？」

「あ、はい。えーと、それでどうしたんですか？この現状」

山田先生はすごく慌ててるし何かあったのか。

「・・・・・・・・お前以外の専用機持ち全員が命令違反で勝手に出撃した」

「は・・・・・・・・？」

僕以外って・・・・・・・・みんなが！？

「さらに、先ほどまで五人だったはずなのだが・・・・・・・・織斑も増えて六人になった、負傷したままな」

ちよっ！？一夏、怪我したまま出たの、なんて馬鹿なことしてんの。

「・・・・・・・・・・はあ、相手は？」

「福音だ、クシャトリヤはお前が撃退してから姿を見せてはいない」

六対一か・・・・・・・・・・でも福音は、一対多を目的とした機体だからな・・・・・・・・・・苦戦するだろう。

ビーーーーーッ！！

えっ！今度は何！？

「織斑先生、行方を晦ましていたクシャトリヤが発見されました！」

「状況は！」

「は、はい・・・・・・・・・・そんな！？」

「どうした」

山田先生の顔が青ざめていく、何があっただんだ？

「こ、こちらに一直線に向かってきてます！」

「なんだと！？」

こっちに向かってくるって・・・・・・・・・・旅館に！？そんな、ここには学園の生徒、従業員も大勢いる。そこにあんな大火力の機体が出来たら・・・・・・・・・・。

「山田先生、到着までの予測時間は！」

「お、およそ二十分です！」

二十分……ブースターがなくなったせいで速度が大幅に下がったんだろう。もし、ブースターが残っていたら数分もしない内に到着していただろう。

「教師部隊に緊急出動をスクランブルかけろ」

「は、はい！教師各員に緊急連絡！教師各員に緊急連絡！」

教師部隊を出すのか……でも、使うのは訓練機、最新型のクシャトリヤのスペックは間違いだ。どこまで対抗できるか……。

「篠ノ乃」

「はい？」

「ユニコーンだ、修理は束が済ませた」

千冬さんから待機状態のユニコーンを投げ渡された。束姉、修理してくれたんだ。あとで感謝しておこう。

でも、これでクシャトリヤにリベンジできる。

「篠ノ乃、今回お前は待機だ」

「え……？た、待機？」

「そうだ、お前は旅館にて待機、部屋に戻れ」

「な、何ですか！？」

暴走ISの撃退は専用機持ちの仕事だったはずだ、確かに先ほどは負けてしまったけど。あれは装備の問題もあった、今度は負けない！

「くどい！お前は待機だ！迎撃には教師部隊がやる、一生徒であるお前がしゃしゃり出る……」

「織斑先生、大変です！」

「今度は何だ！！」

「ひいつ！？す、すす、すみません！あ、あの、教師部隊から緊急連絡が……」

緊急連絡？

「なんだ？」

「は、はい！訓練機全機が起動しないということです！ど、どうしましょう！？」

「全機だと？原因は？」

「わ、わかりません、ですけど何をしても起動しないことです」

「……あの、バカは……」

こんな時に突然のマシントラブル……おそらくは束姉が何かやったのだろう。千冬さんも感ずいてる、でも何故？

「・・・・・・・・・・篠ノ乃」

「はい」

「出撃を許可する、行つてこい」

「お、織斑先生！？そんなことしたら上層部が・・・・・・・・」

「責任は全て私が取る、今はこれしかない」

上層部？責任？いたい何なんだ。

「篠ノ乃、何をしている。さつさとリベンジしに行つてこい」

「は、はい！」

何か裏で色々なことが起きてるかもしれないけど、今はクシャトリヤのほうが先だ、考えるのは後にしよう。

僕は、部屋を飛び出し中庭へ向かう。今度は絶対に負けられない、後ろにはクラスメイトのみんな、旅館の従業員さんたちがいるんだから、それに・・・・・・・・。

「僕だって男だ、負けっぱなしは嫌だからね！」

最後の角を曲がり、中庭に出た。ここなら飛んでいける！

「ユニコーン！」

ISスーツごとユニコーンを一秒で展開、僕の相棒が姿を現す。

でもその姿はいつもと違っていた。

「え、あれ？ユニコーンの形が違う……………これってまさか……………二次移行！」  
セカンド・ソフト

ユニコーンの姿は大きく変わっていた。頭部のバイザーは耳まで覆うように変化、身体を覆う純白の装甲は継ぎ目が増え、外見がさらに機械的になった。

アンロック・ユニット  
非固定浮遊部位には、三枚のプレートが増設されていてまるでマントを羽織っているようだった。プレートは中心に結晶のようなものがあるだけのシンプルな造りだ。

そして背中には翼が付いていた……………。シャルのリヴァイブのスラスターみたいではなく、バックパックのサイドからアームが伸びていて、そこに放熱板のようパーツが五つずつ連結されている、それが羽のように見えた。

目の前にウィンドウが浮かび上がった。そこにはユニコーンのスペックデータが映されていた。

「第二形態『レイディアント・ホワイト（光り輝く白）』……………  
・、ユニコーンの進化した姿。でも、なんで……………」

いつの間にか進化したユニコーンに戸惑う僕、でも、脳裏に少女の映像が流れた。

『私はもっと強くなる、あなたを守るために……………』

なんで、少女の姿が思い浮かんだのかはわからない、でも……………  
・、なんだか、わかる。

「僕のために変わってくれたんだね、ありがとう……………ユニコー

ン」

さあ、行こうか、リベンジに！」

「いいのですか？篠ノ乃君を行かせてしまつて」

「構わん、この状況ではこれが最善の策だ」

「そう、ですね……ですが、上層部も何を考えてるのでしょうか、作戦中にいきなり篠ノ乃君を戦わせるなつて」

「確かに、それまでは専用機持ちで対処させようとしていたと思つたら、急遽篠ノ乃弟だけを作戦から外せだからな」

「それに、そもそも何故専用機持ちに対処させたのでしょうか、いくら代表候補生といつてもあの子達は生徒なのに……」

「そうだな、だが、今はあいつらの成功を祈るだけだ」

「はい……」

大丈夫だろう、あいつらだつたらな。

……さて、それよりも……

「いつまでいるつもりだ貴様ら？」

「「「ギクツ!?!」「」」

「織斑のことを報告したのは、許してやる……が、ここにすることは許しては無いぞ」

「あ、あわわわわわ……」

「あの、その、これは……」

「出るタイミングを逃したっていうか……」

「……まあい、今回は見逃してやる」

「「「ほっ……」」」

「ただし……口外にしたらどうなるか、わかっているな」

「「「Yes, Ma'am!」「」」

「ならいい、さっさと部屋に戻れ」

「「「はい!」「」」

釘を刺したから喋ることはないだろう、あいつらもそこまで馬鹿じゃないだろう。

さて、こちらでできることをするか。……一夏、優希、死ぬなよ。

「見つけた」

進化したユニコーンの速度は凄まじく、旅館から出てから数分でクシャトリヤを目視できる距離まで来れた。

「・・・・・・・・・・」

クシャトリヤの動きが止まった、どうやらあっちも気づいたようだね。

「残念だけど、ここからは通行止めだよ」

「・・・・・・・・・・」

クシャトリヤは腕部をこちらに向ける。すっかりやる気みたいだね、シールドを一つ落としたことを根に持つてるのかな？

僕はいつものビームマグナムを展開したが形が変化していた。ビームマグナムは銃身が収納型へ変わり、ビームのパワーも調節可能となって連射性能がアップしてた『ビームマグナムライフル Mk - ?』へと変貌した。

ビームマグナムを低出力モードにして構える。

「・・・・・・・・!!」

武装の展開が終わると同時にクシャトリヤは全身のビーム砲を僕に撃ってきた。最初から全力ってわけか・・・・・・・・でも！

「当たらないよ!」

身体を翻して砲撃を簡単にかわす。すごい、思ったとおりに・・・

いや、思った以上に早く動かせる！前もユニコーンの反応は早かったけど、今はそれ以上だ！

次々と放たれるクシャトリヤのビームだが僕には一向に当たらない。

（不思議だ・・・撃たれてくるビームがどこを狙っているのが手に取るようにわかる）

無駄の多かった動きを段々と少なくする、当たる位置から身体一つ分だけ移動するようにして回避する。

「そこっ！」

ビームマグナムをクシャトリヤに撃った。ビームはそのままクシャトリヤのシールドのビーム砲に当たり暴発。シールドのビーム砲は破壊された。

「・・・・・・・・！？」

ビーム砲を破壊されたクシャトリヤは砲撃を止めた、そして三枚のシールドを開き十八機のビット、全てを射出した。

ビットはまた機体の周囲を旋回し始める。

「・・・・・・・・本気ってことか」

でも、どうしようか・・・・・・・・あれだけの数、ビームマグナムだけで撃ち落すのは難しいだろうし、ガトリングでは、命中率が低すぎるし・・・・・・・・どうしようか・・・・・・・・。

て、考える時間もないか。ビットは旋回を止め僕へと向かってくる。全方位から撃たれるビームを避ける、性能が上がったユニコー

ンなら難なく避けられる、でもこれでは反撃できない。

「っ！ええい！」

ビームマグナムを三発撃つ、するとそのうちの一発がビットに当たり爆散した。

（当たったか……でも、このペースじゃあ先にEパックのほう  
が尽きる、どうしたら……）

と、全方位のビームを避けながら考えていると。目の前にウィン  
ドウ現れた、なんだ？

『一定起動時間を越したため、思考操作兵器、《フェアリー・ワ  
ルツ（妖精の円舞曲）》ならびに自立防御兵器《スピリッツ・ラ  
ンパート（精霊の城壁）》のプロテクトを解除します』

し、思考操作兵器に自立防御兵器？そ、それってブルー・ティア  
ーズみたいなビット兵器のことかな？こんなものまであるなんて・  
・でも、この状況を打破するには使うしかない！

「スピリッツ・ランパート！！」

スピリッツ・ランパートを起動する。すると大型化した非固定浮  
遊部位のプレートが外れた、プレートは浮遊し僕を中心に囲い、向  
かってくるビームを防ぐ。クシャトリヤのビットがプレートとプレ  
ートの間を縫うようにビームを放ってくるけど、それもプレートが  
自動で防ぐ。それに、結構防御力もある。

防御のことはスピリッツ・ランパートの守りがある、だから今度  
はこっちが攻撃だ。

「じゃあ、次は……フェアリー・ワルツ！」

フェアリー・ワルツを起動させると、すると今度はユニコーンの翼、バックパックの放熱板が切り離された。そして中央が左右に開き、そこからビーム砲がのぞく。

……完全に放熱板だと思っていた……。って！  
こんなことを考えている場合じゃなかった！

ビット兵器なんか使ったことはないの、分からないはずだった  
でも……。

（わかる……手取るように使い方がわかる！）

「いけっ！！」

僕の思考を受け取りフェアリー・ワルツが動き出した、クシャトリヤは僕が射出したフェアリーを撃ち落そうとビット動かす、でも……。

（遅いよ）

ビシュンッ！

計十機からなるフェアリーの一斉射でビットの半数は一瞬で爆散した。……残り七機だ。

クシャトリヤは焦り始めたのだらう、残った全てのビットの攻撃を僕に集中させた、だけどそれもスピリッツがオートで防ぐ。そしてフェアリーで破壊する、これでもうビットは使えない。

「……！！?!?!?!」



「うおっ！」

腕部を斬られて硬直していたクシャトリヤだが、それもつかの間、  
シークレットアーム  
シールドの隠し腕で僕を拘束、そしてそのまま荷電粒子砲のチャージを開始する。

拘束を解こうと少し力を入れるけど動かない、前より力を入れているんじゃないか？まあ、それだけ必死ってことか。でもね……

ミシッ！

「せっかく、ユニコーンが強くなってくれたんだ……………」

力を強める。

ミシッミシッ！

「負けられないんだ！！」

「！？！？！？！」

バキヤッ！

シークレットアーム  
隠し腕を力技で押し折り、がら空きの腹に蹴りを叩き込む。完全に油断していたクシャトリヤは後ろへ飛ばさせる。

でも、すぐに体制を立て直して僕から距離をとった、荷電粒子砲のチャージが完了したみたいだ。クシャトリヤはそのまま発射体勢に入る。

「これで、終わらせる！！」

避けるな、下がるな、前に出る！！ユニコーンを加速させて前に

出る。

ビームトンファアを戻し、ビームサーベルを取り出してリミッターは外す、するとビーム刃は僕の身長の二倍ほどに伸び高出力のビームの奔流を作り出す。

荷電粒子砲が発射された、そして僕もビームサーベルを振り下ろす。高出力同士のビームがぶつかり凄まじい衝撃と熱を生む。力と力が拮抗して前に進めない。

（前へ！前へっ！！）

イメージするは刃、薄く鋭い折れない刃を！

ビームサーベルから流れ出るビームが徐々に形成され、約三メートルの日本刀ができた。

「おおおおおおっ！！」

ビームでできた刀が荷電粒子砲を切り裂きながら前に進み、そして八秒、荷電粒子砲の照射が終わった。

「はあああああー！！！！！！」

最大加速をし、僕は一気に接近ビームサーベルを振り下ろした。防ごうとだしたシールドごと切り裂いて本体に攻撃する。ビームの刃はシールドバリアを破り、絶対防御を発動させエネルギーを削る。残った腕部を僕に向け反撃しようとするクシャトリヤ、だがすぐにエネルギーが尽き活動を停止した。

「はあ・・・はあ・・・おっと！」

ISの展開が解除され操縦者が落ちそうになったので慌てて受け

止めた。

「ふう……織斑先生聞こえますか？」

『ああ、聞こえている。……勝ったか』

千冬さんに通信を入れるとすぐに出てきた。

「はい、操縦者にも怪我はありません」

『そうか、よくやった。戻って来い……。待っているぞ』

「はい」

そこで通信を切れた。

「ふう……。あっ」

暗かった空に明かりが差し込んだ、夜明けだ。眩しい、けどとても綺麗に見える。

「さあ、戻ろう」

操縦者を落とさないようにしっかりと抱え、僕はゆっくりと旅館へ向った。

## 第二十五話（後書き）

はい、作者です。

色々スランプになりました。今回のクオリティは低いです。  
すみませんでした（土下座）

スランプ抜きでもユニコーンの第二形態の名称など考えているうちに一日かかったりと、かなり難産でした。

ユニコーンの第二形態の詳細につきましては後ほど設定に追加します。

戦闘シーンも滅茶苦茶で今回はまことに申し訳ありませんでした。  
では、次回の更新で。

## 第二十六話（前書き）

まだ、若干スランプ中。  
二十六話です。

## 第二十六話

「ね、ね、結局なんだったの？教えてよ」

「……ダメ。機密だから」

あれから時間も経って、僕達は臨海学校最後の夕食をとっていた。そこでクラスメイトの数名がシャルに群がって何とか作戦の内容を訊こうとしていた。

彼女達はシャルならまだ訊きやすいと思っているのだろうが、残念それは検討違いだ。シャルは専用機持ちの中じゃ一番責任感が強い。だから訊こうとしても無駄だ。

それにしても、やっぱりこの刺身はおいしいな。

「ねえ、いいでしょシャルロット」

「あのねえ、聞いたら制約がつくんだよ？いいの？」

「あー……それは困るかな」

「だったら、この話はこれでおしまい。もう何も答えないよ」

「ぶーぶー」

シャルは上手くあしらい、追及を逃れた。

「優希」

「ん？あ、ラウラ、どうしたの？ていうか、何で隣に？」

確か長谷川さんが座ってたはずなんだけど。しかも、ラウラは座敷がダメだからテーブル席に座って言ったのに。

「変わってもらったただけだ気にするな。……………少々高うついたがな」

「？」

何か最後聞こえなかったけど……………まあいいか。

「で、どうしたの？」

「いや、身体の具合は大丈夫かと思ってな」

「うん、大丈夫だよ。怪我もなかったし」

「そうか……………だが、よく一人で勝てたな。さすが私の嫁だ」

いや、だから僕は嫁じゃ……………まあいいや、言ってもどうせ直さないだろうし。

「そんなことないよ、勝てたのだってユニコーンがセカンドシフト二次形態移行したからだよ」

「……………何、セカンド・シフト二次形態移行だと」

あー、そういえばみんなにまだ言っていなかったけな。

「え、何？篠ノ乃君のIS、セカンド・シフト二次形態移行したの！」

「スゴイ!!」

「見せて見せて」

どうやら聞き耳をたてていた、女子達が僕の周りに集まり騒がしくなった。すると……。

バンッ!!

「うるさいぞ!夕食中は静かにしろ!」

「『『『『『す、すみません!』』』』」

我らが鬼教官こと千冬さんがやってきた。しかも、事後処理や報告で忙しくともイライラしているみたいだ。千冬さんの登場で騒がしかった宴会場は一気に静かになった。

「まったく………篠ノ乃!」

「『は、はい』」

「いや、弟のほうだ。ちょっと来い」

僕の方が、どうしたんだろ?千冬さんに呼ばれ僕は宴会場を出る。そしてそのまま歩きだす千冬さんの後ろを着いていく。どこに行くんだ?

数分歩いて旅館の奥、離れのほうに連れてこられた。

千冬さんは古びた扉の前でノックをする。

「女将、連れてきました」

「ああ、織斑先生、ありがとうございます」

え、女将？なんで、僕をこの旅館の女将のところに連れてくるんだ？

「篠ノ乃君でしたね。実はあなたに見てもらいたい物があるの」

「僕に……ですか？」

「ええ………これです」

女将は着物の袖から一枚の写真を取り出した。僕は写真を見る、するとそこには………。

「これって!？」

「ざあ………ざあん。」

女将の部屋を出てから僕は浜辺を散歩していた、ちなみにちゃんと千冬さんの許可を貰った。

「………。」

浴衣の袖から先ほど貰った写真を取り出した。そこに写っていたのは、とても仲の良さそうな家族の写真だった、でも注目するのはそこではなかった、問題は中心に写っている女性だった。

だってその女性は僕に瓜二つだったのだ。

「こ、これって……僕？でもなんで……」

写真を見た瞬間、僕は驚愕した。だって撮った覚えもない写真に自分が写っているのだから。

あれ？でもこの写真、日付が……。

「この写真はですね。昔、旅館に来たお客さん一家の写真なのです」

そうなんだ……でも、ほんとに。

「そっくりだ……」

「この写真は、まだ私が女将じゃないときのお客様の写真です。今先ほど整理していたら偶然見つけまして、それで」

そっいえば女将さん、僕とそっくりなお客さんを見たようになって言ってたな。

「そうなのですか……でもなんでこの写真を僕に？」

そうだ、ただのそっくりさんだけかもしれないのに、何故僕に写真を見せるんだ。

「優希、この写真の人物だが……お前の母親だ」

「え？」

僕の・・・母親？

「ああ、お前の母だ。戸籍も確認したから確実だ」

この人が・・・僕の本当の母さん。

「それでだ、母親の家族の所在もわかった」

「ほ、本当ですか！？」

あれ？でも確か警察の調べでは血縁者はいないって父さんは言っていたのに・・・どういうことだ？

「その件については調べがついた、どうやら当時の警察官の調査ミスだったらしい」

ちよ、調査ミスって・・・、それでいいのか警察官。

「そうなんですか・・・あれ？でもいくらなんでも早すぎませんか、この写真を見つけたのってつい先ほどだったんじゃない・・・」

「・・・実はだな、今回のことはその写真が切欠ではなく、あちら側、つまりお前の血縁者からの報告でわかったことなんだ」

僕の血縁者が・・・？

「いいか優希心して聞け、お前の血縁者だな・・・」

「まさか、あの『蘭堂』だとはね……」

『蘭堂財閥』日本の経済界のトップの地位を数十年間の動かない、日用雑貨から飛行機、そしてIS、なんでもござれの世界にも名を知られている大企業である。

僕の母さんはその令嬢だった。しかも次期会長は確実とまで言われた、でもある日、僕の父さんとの結婚を反対されて即座に駆け落ち。それから行方知らずなっただけらしい。

てか、どんだけ行動力あるんだよ母さん。

「はぁ……とんでもないことだな」

僕を見つけた切欠はなんでも、この前の学年別トーナメントだった。

どうやら社長が、僕の祖父が偶然、僕の戦闘の映像を見たらしい、驚いただろうな。だって、映像に出ているのが、家を出た自分の娘と瓜二つなんだから。

しかも、あちらは僕に会いたいといってるらしい。

「母さんの家族には会ってみたい、でも、どんな顔をして会えばいいのかな。はぁ……」

……とりあえず、姉に相談してみよう。姉にも相談したいけど、どっか行っちゃったし。  
かんがえるのはそれからしよう。

チュドーーーーンッ!!

「な、なんだ!」

ま、また暴走ISの襲撃!?……………なんだ、一夏か。

「た、助けてくれーーーー!!」

「待てっ!一夏!!」

「お待ちなさい!一夏さん!!」

後ろには、ISを展開したセシリアさんと鈴が一夏に向けてレーザーや衝撃砲撃っている。…………あれ?一夏が手を繋いでるのって、箒姉?しかも水着だし…………。なるほど大方、二人がいい感じになってきたところにあの二人が乱入したってわけか…………残念だったね、箒姉。

「……………めんどくさいから、知らないふりをしておこう」

だって疲れたし、巻き込まれたら千冬さんに叱られそうだしね。

「あ、優希!助けてくれ!!」

「え!?ちよつとこっちに来ないで、来るなら箒姉だけ来て!」

あ、ちよつと僕も射程範囲に入った!?に、逃げろーーーー!!

「優希、大丈夫？」

「大丈夫……じゃないかも、ふあ~~~~。」

眠い……。結局、昨日はいろんなことを考えていて眠れなかった。寝たい……。

「優希、僕の肩に頭乗せる？」

「ん~~~~……………」

いいの？ 行きの時もやつちたけどいいのかな？ じゃあ、お言葉に甘えて……………。

「ちょっと待て、シャルロット！ お前は行きのバスでそれを行ったろう、次は私だ！」

て、あれ？

「いいじゃないべつに、それに優希の隣は僕なんだからさ」

「なら、席を換われ！ 私が優希の隣に座る！」

「ダメ譲らないよ。そんなに換わって欲しかったらさ、今朝渡したアレ、返してもらおうかな」

「ぐうつ！？ ひ、卑怯な……………」

なんの話なんだろう？アレ、って何だろう、聞いてみようか――。

カシユツ。

バスのドアが開き、二人の女性が入ってきた、誰だろ？

「ねえ、織斑一夏君と篠ノ乃優希君っているかしら？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

入ってきた女性は二人とも二十代くらい、片方は金髪のサマードレスを纏った女性、そしてもう一人は茶髪の女性なんだけど・・・・・・軍服を着ていた。あれはイスラエルのだったかな？

「あ、はい。俺が織斑一夏ですけど」

「・・・・・・・・僕が篠ノ乃優希です」

僕が手を上げると、軍服を着た女性はツカツカとこちらに向かってきた、ラウラは警戒していつでも動けるようにしている。

「安心しろ、危害を加えに来たのではない」

「・・・・・・・・・・？」

「私はマリヤ・J・アーレス、階級は大尉だ」

「は、はあ。そ、それでアーレス大尉は何の御用で？」

「礼を言いに来た」

は？礼、ってなんで？

「私はクシャトリヤの操縦者だ」

「え………？」

く、クシャトリヤの……操縦者だって、この人が……。

「あいつを、クシャトリヤを止めてくれて、ありがとう」

そう言つと彼女は手を差し出した。僕はそれに答えて彼女の手をとり握手する。

「では、私は行く………で、ナターシャ何ふざけたことをしている」

マリヤさんの連れ、ナターシャさんは一夏の頬にキスをしていた。  
………一夏、死んだな。

「もう、マリヤ、ちよつとしたお茶目よ」

「はぁ………さつさと行くぞ」

「じゃあ、またね。バイ」

「失礼する」

二人はバスを降りドアが閉まった。一夏手振ってるし……。  
さらば一夏。

ゴスッ……！

箒姉、セシリアさん、鈴が中身入りの五〇〇ミリリットルペットボトルを一夏に全力で投げる。．．．うわぁ、痛そう。．．．。

一瞬眠気は飛んだけどやっぱり眠くなってきたな。．．．．．寝よう。

「ふぁ~~~~~．．．僕、少し寝るね。お休み。．．．。」

「じゃあ、優希僕の肩を。．．．。」

「させるかぁ！」

「ちよっ！？ラウラやめっ！？」

「ええい！そこを渡せえ！」

なんか二人が騒がしいけど気にしない、寝よう。．．．．．おやすみ~~~~。

~~~~蘭堂財閥、会長室~~~~

「お父様、先ほど連絡がありました。．．．．．話したそうです」

「．．．．．そうか、して様子は？」

「やはり、戸惑っているようです。仕方のないことですけど。．．．。

．．」

やはり．．．．の、あの子には悪いことをしたかの。

「そうじゃな．．．．だが、ワシはあの子の子供に会ってみたい」

「．．．．私もです、姉さまの子を、この目で」

「うむ．．．．すまんが一人にさせてくれないか．．．．」

「．．．．わかりました、失礼します」

バタンツ．．．．、娘はワシの言つと通り、部屋から出て行く。

「．．．．ワシより先に逝きおつて、この親不孝ものが．．．．」

ずっと、探していた娘が．．．．もうこの世にはいないと知ったときはワシもポックリ逝きそうじゃったわ．．．．。

「篠ノ乃．．．．優希」

死んだ娘の忘れ形見、その子の映像をそつと撫でる。

「本当にそつくりだな、お前の子は、まるで昔のお前を見ているようだぞ．．．．なあ」

ワシは机の引き出しから一枚の写真を取り出す。そして写真を映

像に照らし合わせ娘の名を呟いた。

『詩織』

第二十六話（後書き）

はい、原作三巻終了です。

ですが、なんか滅茶苦茶ですね・・・すみません。

次回からは、優希の実家編？に突入したいと思います。初の完全オリジナルなのであまり自信がありません。

ですが、がんばってみます。

では次回の更新で。

第二十七話（前書き）

K A ・ N ・ Z E ・ N オリジナル、イエエー————！！
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・ クオリティが低いよ ・ ・ ・ ・ ・ 文才を
くださ ・ ・ ・ ・ い。（バタツ）
二十 ・ ・ ・ ・ 七 ・ ・ ・ ・ 話で ・ ・ ・ ・ す。（チーーン）

第二十七話

臨海学校から数日経ち、夏休みがやってきた。

夏休み初日、僕は母さんの父親である祖父と会いに来たのだが・
・・・。

「で、でか・・・・。」

指定された場所は都会のド真ん中にある巨大な高層ビル、蘭堂財閥本社ビルだった。

さすが日本で世界を股に掛ける大財閥というべきなのか無駄にデカイ、よく都会にこんな土地が余っていたもんだな、ってそんなことよりも入ろう、確かロビーに迎えが来るって言ってたし。

「じゃあ、行こうかな」

「こちら侍娘、ターゲットがポイントを通過、オーバー」

ガピッ『了解、侍娘はターゲットに気づかれぬように監視を続ける。オーバー』

・・・・・何やってるんだ、こいつらは・・・・・。

「侍娘、了解・・・・ん？一夏どうした、具合でも悪いのか？」

「いや、そうじゃないが……なあ、箒？」

「なんだ？」

「俺たちは、何をやってるんだ」

夏休み初日、俺たちはグラサンとマスクを顔に着けて優希を尾行していた。てかなんでこんな暑い日に、しかも変質者同然の格好をしているんだよ！

「何をつて……優希の尾行だ！」

威張るな、そして大声を出すな、ばれるぞ。それに周りの行きかう人の視線が怖い。け、警察を呼ばれるのは時間の問題か……。

「それよりも、一……スーパー鈍感男、お前もちゃんと優希を見ている、それと今の私は侍娘だ」

「なんで俺まで……てか、何だよそのスーパー鈍感男つてのは、俺のことか？」

俺は鈍くないぞ、むしろ空気を読めて鋭いほうだぞ。

「……勝手に言ってる馬鹿者が……むっ！」

なんで不機嫌になるんだよ、わかんねーな。て、どうした？

ガピッ『こちらフランス製菓より各員へ、ターゲットが高層ビルに入ったのを確認。オーバー』

『こちら、じゃじゃ馬中華及びドリル淑女、こつちも確認したわ。オーバー』

セシリアも鈴もノリノリだな、オイ……。しかもシャルロットまで、お前だけは大丈夫だと思ったのにな……。

でも、優希はなんでこんなところ来たんだ、えーと、蘭堂……。財閥？どっかで聞いたことがあるような……。。

「くっ！建物の中に入られては優希の姿が見えん！」

『黒ウサギより各員へ、これより目標建築物への潜入を開始する。支給されたツールを用いて各自潜入せよ健闘を祈る！』

ラウラ、お前は本当に軍人なのか？ふざけすぎだろ。しかし支給した装備って何なんだ？ここに来る前に全員に渡されたけど……。

「ダンボールじゃねえかつ！！」

からかつてるのか！？からかつてんだよな！！これが本気だってんなら病院に行けよラウラ！

「おい、箒！ちょっとこれは……………」

「さすがラウラだな……………分かっている」

……………俺、疲れてるのかな。今箒が変なこと言っ
たような気がしたんだけど……。幻聴か？

「よしっ！行くぞ、一夏……いや、スーパー鈍感男！！」

「よしっ、じゃねえよ！！しかも今ちゃんと言ったのに、名前言い直したよな！あと、ダンボールを被るな！絶対にバレルだろ！！」

ダンボールを被ってビルの入りに向かおうとする幼馴染を俺は全力で止める。止めてくれ！これ以上、可哀想な物を見るような視線を向けられるのは嫌なんだ！

「なにを言っているんだ、ダンボールといえば究極のスニーキングツールではないか、あの程度の警備の目を欺くことなんて簡単だ！」

何言ってるんだコイツ、みたいな目で俺を見る篤。ダメだこいつ早く何とかしないと………。

「いいか、篤。そんな目を引くようなものであそこにいる警備員さんの目を欺くことなんて無理に決まって……」

ガピッ「こちら、黒ウサギ潜入に成功した、各員、現状を報告せよ」

「こちらフランス製菓、問題ないよ。やっぱりすごいね、ダンボールって」

「こちらじゃじゃ馬中華、問題ないわ。まあ、ダンボール使ったんだから当然よね」

「こちらドリル淑女、異常はありませんわ。ですが、もうちょっといいダンボールはありませんでしたの？せめてイギリス製の箱にして欲しかったですわ」

「……………るはずなんだけどな。どうなってるんだ、俺がおかしいのか？それとも、ここの警備員がおかしいのか？」

「む、いかなん早く行くぞ、スーパー鈍感男！」

と、言いながら。ダンボールを被り、入り口へ向かう筈。……………とりあえず、俺も被ってみるか……………もうどうでもよくなってきたよ。

「……………入れたよ」

ダンボールすげえ……………。

ロビーで受付を済まして、迎えを待つ。でも、受付嬢が、いや、ほんの少しだけ通り過ぎていく社員の人が僕の顔を見て驚いているけど、もしかして寝癖とかついてる？……………うん、大丈夫、ついてない。でも、寝癖じゃないなら何なんだろう、一体？

「失礼いたします。篠ノ乃優希様ですね」

後ろから声を掛けられた、迎えの人かな？声からして女性だな。

「あ、はい。僕です」

「お迎えに上がりまし……………た」

僕が迎えの人と顔を合わせると、女性は固まってしまった。ど、どうしたんだ………？

「あの、大丈夫ですか？」

「あつ！？は、はいっ、大丈夫です！！」

「そ、そうですか………？」

どうしたんだろう、この人急に顔を赤くして、あとなんかテンパッてるし。

「そ、それでは行きましょう！か、会長がお待ちです」

「は、はい」

ほんと、どうしたんだこの人。まあいいか、とりあえず今はお爺ちゃんに会うことが先だ、行こう。鞆を持って………なんだ、あれ？

鞆を取るため、しゃがんだ瞬間、僕の視界に変な物が入ってきた。

（ダンボール箱………だよね？でもなんでこんなところに？しかも六個もあるし）

「ど、どうかしましたか？」

「………ちょっと失礼します」

なんか嫌な予感がするし、確認しておこう。

僕はダンボールに近づく、すると六つのうち一つが、ガタンッと

動いた。．．．．．確実に誰か入ってるでしょ、これ。
てか、警備員もそうだけど、なんで皆気づかないんだ？明らかに
おかしいでしょ。

（．．．．．とりあえず、取ってみるか）

一番近くにあったダンボールに手をかけ、一気に持ち上げた。

「！（タラランッ）

「．．．．．何やってるの、一夏？」

ダンボールの下には一夏が三角座りをしていた。じゃあ、残りの
五個は．．．みんなか．．．。

「．．．．．えーと．．．。スニキングを少々．．．
．．．．．？」

．．．．．えーと、番号はつと．．．これだ。

「（プルルルルッ．．．．．ガチャッ）あつ、織斑先生、あなた
の弟を含めた五人が．．．．．」

「『『『『『それだけは、やめてっ！！（くれ！！）』『』『』『』

残りの五人もダンボールから飛び出してきて僕の携帯を取り、阻
止する。

．．．．．はあ、頭が痛くなってきた。

「ダンボール………潜入………コレだっ!!」

この光景を見ていたゲーム開発部主任が後に、世界で大ヒットするスニーキングゲームシリーズを生み出すのは、また別の話だ。

「まったく何やってるの、みんな!」

「………す、すみません(ですわ)」「………」

その後、ロビーはパニックになるわ、警備員が駆けつけてくるわで大変だった。

案内の人に事情(?)を説明して、何とかみんなを連行されないようお願いしたり、警備員さん達に頭を下げたりと、色々大変だった。

で、今はロビーの端の方で六人に正座させて、お説教中である。

「で、何でこんなことしたの」

「いや、だってな、優希が朝から一人でコソコソと学園から出て行くのを見かけて………なあ、シャルロット」

「えっ!ここで僕に振るの!?う、うん。しかもなんか深刻そうな顔してたから」

「嫁である、お前が心配だったのだ」

心配してくれるのは嬉しいけど、はぁ…………お説教はこのぐらいにしようか…………。

「だから、お前に発信機を着けてここまで来たのだ」

うん、やっぱりこのまま続けよう！あと一時間くらい。

「あ、あのー。優希様、会長がお待ちなのでそろそろ……………」

あつ…………忘れてた。

「は？会長？」

「会長つてこの会社の？」

「なんで、優希さんが？」

…………みんな何も知らないでここまで来たの？てか、箒姉には昨日話したでしょ。

「あつ……………」

すっかり、忘れてたみたいだね。

「えーと、それではお友達の皆様には応接室でお待ちになれてもらうという形でよろしいでしょうか？」

「あ、本当にすみません」

「いえ、大丈夫ですよ。それでは皆様はここでお待ちください、後ほど迎えが来ますので。では、行きましょう」

「はい、何でもここに来たかは箒姉に聞いてね」

「え、ちよっ！優希！？」

女性に先導されてエレベーターに乗る。

「……………これで、僕が篠ノ乃の子じゃないことがバレたか……………、まあいずれは話そうと思ってたしね。それが早くなっただけだ。」

エレベータは一回も止まらず上がっていく。

最上階で止まり扉が開いた。そして道なりに進むと立派なドアの前に出た。

案内してくれてた女性がノックする。

「入れ」

中から低い老人の声が聞こえた。

ガチャッ、ドアが開かれて中に入る。通された部屋のデスクには一人の老人が座っていた。あの人がおそらく僕の祖父なのだろう。

「失礼します、会長、篠ノ乃優希様をお連れいたしました」

「そうか、では下がってくれ」

「はい」

老人の指示で案内してくれた女性は部屋から出て行った。そして

部屋にいるのは僕と老人だけになった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

老人は無言で立ち上がり僕へと歩いてくる。杖を突きながら一歩一歩踏み出す姿は弱弱しくあるが、とても威厳がある。さすが大財閥の長だ。

ゆっくりと近づいていき、遂に僕の前に立った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

僕たちは向き合い無言になる、何か話さないといけないとはわかってはいるのだが何を言えばいいのか分からない。

「・・・・・・・・・・君が優希君だな」

「は、はい・・・・・・・・」

老人は僕の名前を聞いてき、僕はそれに答える。老人は僕の顔をじつと見る、おそらく母さんのことを考えているのだろう。そしてそのまま俯いてしまった。

「あ、あの、大丈夫で・・（ガッ！）・・・・・・・・はれ？」

老人が突然僕の肩をガシツと掴んだ、握力が込められていて痛い。そして、ガバツと顔を上げた。

「うおーーーーーんっ！！よくぞ生きていてえーーーーー！！」

「！」

老人の顔は涙と鼻水でグチャグチャになっていた。その顔はさっきまでの威厳は一切なくなっていた。

てか、肩が痛いっ！それに鼻水が、鼻水がつく！！

「うおーーーーんっ！！詩織にそっくりじゃーーーー！！！」

「あ、あの、は、放してくださいさ……イタッ！」

老人の肩を握る力が強くなった。てか、この人本当に老人なの！？力ありすぎだよ。

このままだと肩の骨に痺が入ってしまうかもしれない。でも、放してくれないし……。

「ウゴッ！？」

「え？」

老人の後頭部から鈍い音が聞こえると、肩への力は緩み、そのまま崩れ落ちた。な、何があったの、一体？

床にはガラス製の重たそうな灰皿が転がっていた。……まさか、コレが後頭部に当たったの？死んでないよね……うん、大丈夫だ。痙攣してるけど脈もあるし出血もしてない。

でも、誰が……？

「ちょっと、お父様。優希君が苦しそうにしてるでしょ、聞いているの？」

二人しかいない部屋に、女性の声が聞こえた、元を辿るとそこに

は金髪の女性が壁に寄りかかっていた。

「はぁ……失神してるのか、まあいいか、どうせすぐ復活するだろうし……で、君が優希君だね」

「あ、はい」

「ふむふむ……」

女性は僕に近づき、顔をじっと見る。か、顔が近い。

「うん！やっぱり姉さまにそっくりだわ」

「！？」

ね、姉さま？ってことはこの人は……！

「あ、自己紹介が遅れたわね、私は蘭堂 果歩^{かほ}。あなたの叔母に当たるわ。まあ、気楽に果歩お姉さんって呼んでね」

この人が僕の……叔母さん。

「で、そこで延びてるのが父親の蘭堂 剛三^{こうじ}よ」

あ、やっぱりこの人が僕のお祖父ちゃんだったんだ。

「優希君、よろしくね」

叔母さんはとてもいい笑顔で僕にそう言った。
これが、僕の血の繋がった人たちとのファーストコンタクトであ

つ
た。

第二十七話（後書き）

．．．．．なんかもう色々とすみません。

前半は遊びすぎましたし、文章は滅茶苦茶ですし．．．．．

．。

次にはもっとましなのを作れるように努力します。

では次の更新で。

第二十八話（前書き）

五日ぶりの更新、やっぱりオリジナルになると難しいです。
第二十八話です、どうぞ。

第二十八話

「ウォホンッ……すまん、見苦しいところを見せてしまった」

「い、いえ、別に気にしてませんし……」

あれから、数分後にはお祖父ちゃんは復活した。後頭部を強打したのになんで何ともなさそうなんだ、謎だ？

「さて、自己紹介もしてなかったの、ワシは蘭堂源三……君の祖父だ」

先ほどまでの表情から一転し、財閥のトップの顔になる、威厳、自信に満ちた表情に。

ここは、僕もちゃんとしたほうがいいかな。

「篠ノ乃……優希です」

「……すまんが、よく顔を見せてくれぬか」

「……はい」

僕はお祖父ちゃんの前に移動する、すると僕の頬に手を触れ撫でる。

「本当にそっくりじゃの詩織に、……君を見ているとあの子が死んだとは思えない」

お祖父ちゃんが母さんのことを思い出しながら、僕の頬を撫で続

ける。その目からは涙が零れていた。

「そうですね、お父様。髪の色以外は本当に姉様そっくり」

ん？髪の色？

「あの、髪の色って母さんの髪の色は黒だったんじゃない？」

そうだ、旅館で貰った写真に写った母さんの髪の色は確か黒だったはずだ。

「ん？ああ、それはね染めてたのよ。姉様の髪の色は私と同じ金色なの」

「そ、そうなんですか」

「ええ、学校の校則で黒にしなければいけなかったのよ、地毛だったのに……」

母さんの髪は金髪だったんだ……じゃあ、僕の髪は父さんの遺伝なのかな？

「蘭堂家に生まれた女は遺伝のせいなのか髪の色が金になるのじゃ、男は普通に黒なのだが……」

へえ、そうなんだ。てことは、もし僕が金髪だったら……
……完全に女と認識され……うん、考えないようにしよう。

「ねえ、優希君」

「あ、はい。何でしょうか？叔母さん……」

「果歩さん」

「へ？叔母さん……」

「果歩さん」

「お……」

「果歩さん」

「……果歩さん」

「はい、よくできました」

叔母さん……果歩さん、顔は笑ってるんだけど、背後に仁王像が見えた……こ、怖いよ。

「……で、なんですか？お……果歩さん」

「ええ、優希君のことをね教えてほしいの」

「え……？」

「何でもいいの、好きな物とか趣味でもいいし」

「別にいいですけど、何で……？」

なんで、そんなことを聞くんだ、もつと違うことを聞くのかと思
つてたのに……。

「んー……。ほんとね、色々と聞きたいこととかあるんだ
けど、まずはね優希君自身のことが知りたいの。姉さまの息子であ
る優希君の……。ねえ、お父様」

「うむ！」

「……。わかりました。それと僕も聞きたいことがあります」

「ん？ なにかしら」

僕が母さんの家族のことを知ってからずっと聞きたかったこと、
それは……。

「母さんがどんな人だったか、教えてください」

母さんのことだった、写真を見るまで顔も忘れていた母さんのこ
とを知りたかった。篠ノ乃の父さんと母さんも会ったことが無く、
僕は母さんがどんな人なのか知ることができない。でも、この母さ
んの家族であるこの二人なら知っている、だから教えて欲しかった。
……。僕は死んだ両親のことをずっと気にしてはなかった、
いや、気にしないようにしてたのだと思う、僕が両親のことを思え
ば、篠ノ乃の家族に迷惑を掛ける……。心のどこかでそう思っ
たのだと思う。

でも、今は違う僕は知りたい。母さんのことを、本当の母さんこ
とを知りたい。

「・・・・・・・・ええ、わかったわ。私たちが知っている、姉さまを教えるわ」

「ありがとうございます・・・・・・・・じゃあ、何から話しましょうか・・・・・・・・」

僕は少しずつだけ話し始める、内容は少し滅茶苦茶かもしれないけど、聞いて欲しかった母さんの家族であるこの二人に・・・・・・・・。

「・・・・・・・・という訳だ」

あれから、この会社の応接室に通された俺たちは筈から優希が実は篠ノ乃の子供ではないということを聞かされた。

でも、信じられなかった、優希が養子だったなんてことが。

「あー・・・・・・・・やっぱそうかー」

「でも、これで納得できましたわ・・・・・・・・」

「ふむ、まあ、予想はしていたが、まさか本当だったとはな・・・・・・・・」

「あ、あはは・・・・・・・・」

あれ？なんか俺以外、反応薄くないか・・・・？

「ん、なあ、なんでお前らは、そう反応が薄いんだ？」

「なんでって……ねえ？」

「そうですわね……」

「だってねえ……」

「ああ、あれはな……」

「」「」「」 篤（さん）と顔の造りが違いすぎるし（ますし）……
「」「」

「……へ？顔？」

「おかしいと思ったのよね」

「ええ、いくら姉弟といえども、似てなさすぎですし……」

「遺伝子が違いすぎる……かな？」

「そうだな」

「……そういわれれば……」

「てかさ、一夏気づかなかったの？幼馴染でしょ」

「うぐ……いや、だって、子供の頃から一緒だったんだぜ、
そう思うだろ？」

「私は、てつきり知っていると置いていたのだが……」

「いや、知らねよ！てか、そんな話一回もしたことないぞ！」

だつてお前と束さん、優希と仲良いし普通はそんなこと思ねえよ。

「いや、分かるでしょ普通、てかそう思っていないの一夏だけだと思
うわよ……」

「マジかつ！？」

なんだつて……！？俺だけだと……おかしいな、俺
つて結構鋭いと思ってたんだけど、これが男と女の違いか？

「お前が鋭いなんてありえないだろう」

「一夏さんは鈍いですわ」

「ええ、犯罪級に」

だから、お前らは絶対読心術を身に付けてるだろ、はつきり言
いなさい、先生怒りませんよ。

「しかし、優希が蘭堂の人間だとはね……」

「ええ、驚きましたわ」

「ああ、私も話されたときは驚いたものだ」

あれ？無視ですか・・・・・・・・一夏、寂しいな、グスン。

「一夏」

おお、シャルロット！お前だけが最後の良心・・・・・・・・。

「それ、気持ち悪いからやめた方がいいよ」

では、なかったな、こん畜生っ！！

「しかし、蘭堂か・・・・・・・・かなりの大物が出てきたな」

「うん、そうだね」

「なあ、さっきから聞いてたんだけどさ、蘭堂って何？」

「「「「「はあっ！？」」「」「」」」」

え、何、そんな驚くこと？

「一夏、お前本当に日本人か？」

「あんた、バカ？」

「さすがに、これは呆れますわよ」

「知ってないほうが、おかしいよ」

「お前は、本当に教官の弟なのか？」

あれ？みんな呆れてる？俺なんか変なこと言った？てか鈴、誰がバカだ、誰が。

「…………一夏、蘭堂といえば日本で一番有名な企業だぞ」

「え？そうなのか？」

蘭堂…………駄目だ思い出せない。

「一夏、弾と一緒に行ったファミレス覚えてる？」

「ん？ああ、覚えてるぞ」

よく、遊びに行ったときの帰りに行ったな。

「あそこも、蘭堂の系列よ」

「え、そうなのか？」

「それにね一夏、蘭堂はIS学園の最大スポンサーでもあるんだよ」

「そ、そうなのか！」

ファミレスからIS学園って、どんだけすげえ会社なんだよ。

「さらにいえば、日本の経済は蘭堂が作ってるといっても過言ではない」

「はあ！？」

なにそれ？日本の支配者って実は蘭堂なんじゃないの？

「てか、会社名くらいだったら子供でも知ってるわよ」

「それを知らないってお前はどんだけ……」

「」「」「」「」「」「」「」

や、やめてくれ、その哀れなものを見るような目はやめてくれ！

「はあ……まあ、一夏はどうでもいいとして」

はいはい、どうせ俺はどうでもいい存在ですよーだ。

「優希はどうするのかしらね」

「……それはわからん」

ん？何の話だ、よく分からんな？

「ご両親は何て？」

「優希が決めることだ、そうだ」

「そうですか……」

「なあ……何の話をしてんだ？」

「……優希が蘭堂家に戻るかどうかの話だ」

はあ!?

「ちよつ、箒、何言ってるんだよ、お前!？」

「一夏、これは僕たちが口を挟むことじゃないよ」

「しゃ、シャルロット、でもな・・・!」

「これは、優希の問題だよ、僕達が口を挟むのは間違いだよ」

「くつ・・・!小父さんと小母さんは何て言ってるんだよ」

「優希が決める、とのことだ」

「そうか・・・」

「・・・優希、お前はとうするんだ・・・？」

「ふふ、優希君の友達は楽しい人達ばかりなのね」

「は、はい」

果歩さんとお祖父ちゃんは僕の何の変哲もない話を熱心に聴いてくれた。そして二人も母さんの昔話をしてくれた。

二人の話を聴いて分かったことは、母さんはかなり優秀な人だっただけだ。眉目秀麗、成績優秀、運動神経抜群などと、果歩

さんが言うには完璧超人だったらいい。．．．．．そんな人いたんだ。

「はははは．．．．．ところでの、優希君」

「は、はい？」

笑っていた先ほどまでと違い、真剣な顔をするお祖父ちゃん、どうしたんだろ？

「優希君、君さえよければ、蘭堂に戻ってこないかの？」

「．．．．．」

遂に来たかこの話、予想はしていた、どうすればいいかはかなり悩んだ、篠ノ乃の父さん、母さんにも相談したけど二人揃って『優希が決める』だもんね、唯一反対したのは束姉だけだったし。

悩んだ、眠れなかった日は何日もあった、でももう決めた。今までのことを振り返って、僕は決めた。それを僕は声に出して言う。

「．．．．．ありがとうございます、でも．．．．．」

これを言ったら、二人から完全に縁を切られるかもしれない、でも僕は言う。

「ごめんなさい！僕は蘭堂にはなれません」

「．．．．．なぜかしら、話してくれない？優希君」

「まったく面識もなかった、僕を蘭堂に迎えてくれるのはとても嬉

しいです、けど……………」

「けど……………」

「僕は、篠ノ乃です。篠ノ乃優希です。これからずっと」

これが僕なんだ。父さんに母さん、束姉に箒姉、篠ノ乃家のみんながいてくれたから今の僕がいるんだ。血の繋がりはない、けど僕は篠ノ乃だ。

「そうか……………」

「本当にごめんなさい……………」

僕は立ち上がり頭を下げる。心の中は申し訳ない気持ちで一杯だ。

「いいのよ、優希君」

「でも……………」

「いいのよ、ねえ、お父様？」

「……………頭を上げなさい優希君」

僕は、恐る恐る顔を上げる。二人の顔は微笑んでおり、とても穏やかだった。そしてお祖父ちゃんが口を開いた。

「……………優希君、篠ノ乃の家の人好きかの？」

「はい！僕の大事な家族です。血が繋がってなくても」

僕はその問いに断言する。

「……………そうか、いい人達に出会えて良かったの」

「……………はい」

「わかった、この話は忘れてくれ」

……………これで、僕は蘭堂家の人間にはなれない、でも後悔はない。コレでいいと僕が決めたんだ。

「だが忘れんでほしい、君は蘭堂ではなくても、ワシの孫であることは代わりはない」

！？

「そうよ、あなたは姉さまの息子なんだから」

「……………あ、ありがとう、ございます」

二人の温かいその言葉がとても嬉しかった、僕の目から自然と涙が零れ落ちたのであった。

あれから、また母さんの話を聞いたりと軽く話していたら、いつの間にかお昼の時間になっていた。

「あら、もうこんな時間。そういえば優希君、お友達を待たせてたんじゃないかったかしら？」

「あ、はい。すみません、勝手に着いてきてしまって……」

「そうだ、みんながいるの忘れてたよ。」

「いいわよ別に、お昼はどうしましょうか？」

コンコンツ

と、果歩さんと話している途中、ドアをノックする音が聞こえた。何だろ？お祖父ちゃんが入れと言うとドアが開く、そこには僕をここまで案内してくれた女の人がいた。

「会長、会議のお時間です」

「おお、もうそんな時間だったのか、時が過ぎるのは早いのに……すまんが、今日はここまでのようじゃ」

「いえ、時間を取らせてしまって、すみません」

「そうだよな、お祖父ちゃんってこの会社の会長だもんな。本当だつたら忙しいはずなのに。」

「いいんじゃないよ、孫の顔も見れたしの、ホッホッホッ」

「そう言ってくれるのは嬉しいな。……あれ、またあの人、僕の顔をじっと見てるよ、何だろう？」

「では、会長」

「うむ、では優希君、またの」

「あ、はい、今日はありがとうございました」

ガチャツとドアが閉まった。部屋には僕と果歩さんだけが残された。

「さて、お昼はどうしましょうか？」

「えーと、果歩さんにお任せします」

「そうね、んー……？あつ、そうだ、ねえ、優希君まだお時間ある？」

「え？はい、大丈夫ですけど、でも、友達が……」

一夏たちも随分と待たせてしまったし、そろそろ話しに行かないと。

「ああ、お友達も一緒にいいわよ、今、車の手配もさせるし」

車って、遠出ですか……大丈夫なのかな？

「それにね優希君に合わせたい子がいるのよ」

「合わせたい子？」

子、てことは僕と同年代ってことかな？

「えっと、合わせたい人って誰ですか？」

果歩さんは、少し笑うと言った。

「私の娘よ」

「え？」

第二十八話（後書き）

いやー、オリジナルは難しいですね。

ちよつと一夏をバカにしすぎたかなーとちよつと後悔しています。

まあいいけど。

まだオリジナルは続きますよー。ですから更新速度は下がると思いますが、ご了承ください。では次の更新で。

第二十九話（前書き）

第二十九話です、どうぞ。

第二十九話

果歩さんが用意したリムジンに乗り揺られること一時間、リムジンは山奥へと向かっていた。

「……………」

「あー、果歩さん。いったいどこに行くんですか？」

「んー、着いてからの、お楽しみ」

「……………」

この質問はさつきもしたが返される返事は全部コレだ。ほんとどこに行くんだろ？

ちなみに、僕が蘭堂に行くかどうかのことは全部話した、篠ノ乃のままでいると答えたら、篝姉に抱きしめられ泣かれた。

悪いことしたと思ったけど、そんなこと思えなかった、だってまた顔が篝姉の胸に埋まり窒息しかけた。いや、役得とかじゃないよ、本当に苦しいんだから、綺麗な川の向こうで誰かが手を振ってるんだよ。

しかも、開放されたと思ったらシャルとラウラがすごい形相でこっちを見てくるし。散々だよ、はぁ……………」

「あと、もう少しで着くから、我慢してねー」

「……………」

しかし、なんでこんな山奥に連れて来るんだろ、店がありそうな

気配もないし……何があるんだ？

それから、しばらくすると何かの建物が見えてきた、でもこれってさ……。

「どう見ても、研究所だね……。」

「さあ、着いたわよ」

リムジンが入り口に止まった、運転手さんが先に下りてドアを開く、それを、僕は恐る恐る降じる。でも、セシリアさんとシャルは堂々としている、さすが上流階級出身。

「ようこそ蘭堂社ＩＳ研究所へ」

「ＩＳ研究所って……いいんですか、僕たちをこんなところに連れてきて……。」

僕や一夏、篝姉はいいかもしれないけど、シャルたちは代表候補生なんですよ。

「いいのよ別に、さて、案内するわ……。」

「これはこれは、果歩様お待ちしていました」

果歩さんが僕たちを建物の中へ案内しようとしたとき、誰かの声がそれを遮った。声のしたほうを向くと、髪が薄く腹の出た、白衣を着た五十代くらいの男性が気味の悪い笑みを浮かべながら立っていた。

「……あら、所長何でここに？」

「何故って、あなた様はこのスポンサーなのですよ、お迎えするのは当然です」

「・・・・・・・・そう」

所長と呼ばれた男性は気味の悪い笑みを浮かべながら果歩さんに聞いてくる。

「で、今日はどのようなご用件で？」

「この子達を娘に会いに来たのよ」

「この子達？」

男性は視線を僕たちへ移す。

「ほうほう・・・・・・・・」

男性は僕たちを嘗め回すように見る、女性陣も同じ感じなのだろうが表情が曇る。てか、この人僕のこと見すぎだよ。
うつ・・・・・・・・この人の視線、なんか気持ち悪いよ。

「で、所長あの子は？」

「ああ、はい、ただいま第二演習所でテスト中でございます、案内いたします・・・・・・・・」

「知らないわ、あなたは自分の仕事をしなさい」

「わ、わかりました、では失礼します」

果歩さんが冷たく言い放つと男性は、建物内に戻っていった、その姿が見えなくなったらみんなが口を開いた。

「・・・・・・・・・・」

「あー！気持ち悪かった！」

「身体が腐りますわ！」

「うっ、夢に出てきそうだよ」

「下衆が・・・・・・・・！」

あー、やっぱりみんな同じ感想なんだね、僕もだよ。

「ごめんなさいね、あんな奴だけど、一応優秀なのよ」

「優秀ってどういうことですか？」

「あいつは・・・・・・・・名前は忘れたけど、このIS研究所の所長よ」

あんなのが、所長・・・・・・・・。

「さて、じゃあ行きましょうか」

僕達は歩き出した果歩の後ろに慌てて着いて行く。
てか、ご飯は？

果歩さんに着いていきしばらくすると、IS学園のアリーナと同じくらい広い場所に出た。ここは？

「ここは、第二演習所、主に開発中のISの起動実験をする場所よ」

開発中って・・・完璧、機密事項じゃないですか！？本当にいいんですか僕たち連れてきて。候補生のみんななんか、警戒してますよ。

「とりあえず管制室に行きましょう」

「は、はい」

階段を上って管制室へと向かう。

プシュッ！と空気の音が抜け自動ドアが開く、中はIS学園のピットの管制室とほぼ同じだった。まあ、スポンサーだから提供した機械が同じなんだろう。

「調子はどんな感じ？」

「か、果歩様！？」

「ああ、立たなくてもいいわ、作業に集中しなさい」

「は、はい」

立ち上がろうとしていた、研究員の人たちを果歩さんが止め、全員作業に戻った。

「で、あの子の調子はどう？」

「只今、高高度での飛行訓練をしています……ですが」

「そう……」

果歩さんが白衣を着た女性と何か話しているが飛行訓練ということはおそらくISのことだろう。

「ところで、あの、後ろの方々……は……」

ん？僕の顔に何か？

「し、詩織様っ！?!？」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

え？何、母さん？

作業していたはずの研究員の顔が全員僕へと向く。

「し、詩織様だ……」

「ほんとよ……」

「でも、若くないか？」

「そんなの関係ないわ、あれは詩織様よ！」

全員の目がギラギラしながらジワジワと迫ってくる。てか、なん

おお、さすが、会長の娘、部下？の扱い方がわかっている。

「ほんと、ごめんなさいね優希君」

「い、いえ、大丈夫です。．．．それよりもなんで、皆さんは僕を母さんだと？」

「ああ、それはね、ここにいる全員、姉さまのね．．．．」

母さんの？

「ファンなのよ」

「．．．．．ファン？」

え？ファンって、あの？

「そうよ」

「母さんはアイドルなんかですか？てか、全員って年齢層が違いすぎませんか？」

二十代くらいから四十代くらいまでいるんですけど．．．．。

「姉さまのいた学校はね幼稚園から大学までエスカレーター式だったのよ、それで上から下までにかなりのファンがいたわけ」

な、なるほど、つまり母さんは年上にも年下にも好かれてたうえに、新入生の殆どがすぐにファンになったってわけか。それだった

ら、納得がいく(?)

「知らないかしら、帝黎学園って」

「「帝黎学園!?!」」

箒姉と鈴が驚いている。まあ、そうだろう僕も驚いている、帝黎学園とは全国から才能ある者を呼び寄せその才能をさらに伸ばすためのカリキュラムが組まれており、そこを卒業すれば必ず成功するとまでいわれている。母さんがその卒業生だったなんて。

「ちなみに、帝黎の卒業生のうちへの就職希望率八十パーセントを越すわ、全員姉さまのファンだけど」

「ただだよ！」

「話がそれたわね。で、あの子は？」

「あ、はい。現在も飛行中です、けど……………」

研究員の表情が曇る、どうしたんだろ？

「どうかしたの？」

「いえ、何をしても予定していた数値までに行かないんですよ。操縦者の腕は問題ないんですけど」

「はあ……………やっぱりね、一体何が原因なのかしら？」

なんか、開発が難航してるみたいだな。まあ、新型の製造は問題

が多いからな．．．．東姉にはなかったけど。

「おやおや、何かあったのかね？」

「あ、所長」

げっ！また来たよ、気持ち悪い人。

「ふむ、またか」

「はい．．．．．」

所長がデータを見るために研究員の近くまで行く。あ、女性研究員の人が少し離れた、やっぱ嫌われてるなあの人。

「ふむ低いな．．．これはやはり、操縦者の問題だろうな」

「．．．．．なんですって」

あれ、今、果歩さんからプツンッて音が聞こえたような．．．．．

「だってそうでしょう、これだけテストを繰り返しても数値は上がらないなんて、原因はやはり操縦者にしかありませんよ」

所長は、ニヤニヤと気味の悪い笑みを浮かべながら果歩さんに言う。でもその姿はなんか挑発しているようにも見える。

「あーら、うちの子には一切問題はありませんよ、あの子は優秀ですから」

「……………なんですか、私の設計に問題があるとでも？」

「あら、私は何も言ってますよ、そんなこと言つのなら自覚があるのでは？」

な、なんだろう……急に寒気が……、部屋の温度が一気に下がったように感じる。

「……………！」

「……………！」

二人はいがみ合っているし、ていうか、この人よく会長の娘に喧嘩売れるな、普通はできないよ。

「まあいい、今日のテストは中止だ！テストーを呼び戻せ！」

「は、はい！……さん聞こえますか？今日のテストは終了です、戻ってください」

『……………はい、わかりました』

オペレーター的女性が通信で戻ってくるように連絡する、名前は聞こえなかった。でも、声の感じからして僕たちと同世代くらいの女の子だと思われる。

「……………蘭堂でも第三世代型の開発は難航してるようね」

「そうですわね、開発時期も結構遅れてましたし……………」

鈴とセシリアさんの会話の通り第三世代機の開発は難航しているようだ。で、問題は操縦者が機体でことか、大変だね……………
・あ、あれかな？

空に点が見えそれが徐々に大きくなる、ISだ。

「あれが、今、蘭堂で開発中の第三世代型IS『迅雷』よ」

「迅雷……………」

モニターに映されたISは『迅雷』は、機体全体はスマートな感じで無駄がない、スラスタも多く補助よくも見える限り、どうやら高機動型なのだろう。

でも、僕から見たら……………。

「うわ、ヒド……………」

「ん？優希どうしたの？」

「うつん、なんでもないよ」

何あれ、酷い、酷すぎるよ、スラスタの位置とか滅茶苦茶だし、補助翼が逆に制御性を悪くしているよ。

機動性を上げるために無理やりブースターや補助翼を付けなければいけないんじゃないよ。しかも、あれ『雷光』をベースにしてるよね、もったいない、日本のベストセラー機をここまで改悪できる人がいたなんて、逆に尊敬するよ。

『雷光』は蘭堂社が開発した第二世代型ISで、特徴は速度と特殊な機動で、雷光はかなりの速度を誇っていて、第三世代型でもその機動性を越す機体は少ない、それに機体各部に付いたスラスタ

が移動してトリッキーな軌道を出すことが出来る。

圧倒的な速度と変則的な機動で相手を攪乱して、死角から攻撃する、それがこのISだけに出来る戦法だ。

そのお蔭で前々回のモンド・グロッソでは日本代表がこの機体のカスタム機を使って優勝とまではいかなかったけど、かなりの成績を残した優秀な機体で有名だ。

「…………あの機体の設計者は一体、誰ですか？…………」

さあ、名乗りを上げる。

「ん？ああ、私だぞ！どうだすばらしい機体だろう！」

そうか、こいつか、あんないい機体をここまで酷くしたのは。逆に納得が行くよ、うん。

「あのですね…………」

「ん？なんだい？」

その気持ち悪い笑みをすぐに消してあげるよ。さあ、SE・K・KYO・Uの時間だ。

「この！無…………！」

『え？こ、コントロールが！？』

！？まさか！

「た、大変です！じ、迅雷のシステムに問題が発生、このままでは

機動停止します！」

「なんですって!？」

システムトラブルだって!ヤバイ、あの高さで機動停止したら操縦者が!!

『だ、ダメ、落ちないでお願い!迅雷……あ、ああっ』

迅雷の操縦者も停止しないように操作するが、迅雷の動きはドンと鈍くなつていき今にも止まりそうだ。

もう持たない……!僕は管制室を飛び出した。

『も、もうダメ!キャー!……!』

空を見ると遂にISは待機状態に戻つてしまい、操縦者は落下し始めた。

操縦者の悲鳴を聞いた僕はユニコーンを緊急展開する。本当だったら学園外で許可もなくISを展開するのは禁止されているのだけれはない、人命救助が最優先だ。

最大出力で加速する、第二形態になったユニコーンの速度だったら間に合うはずだ!

「……………」

落下する女の子の隣に並び、一緒の速度で落下する。

っ!ヤバイッ、気絶してる。

僕は女の子を傷付けないように優しく受け止め、徐々に速度を落とし空中で静止する。そしてすぐに脈を確認する。

ふう……………よかった、ん?これって……………。

なるほど、機能停止しているけど絶対防御が発動してこの子を守ったみたいだね．．．．よくやったよ。

『優希君！その子は大丈夫！？』

いきなり通信が入り、果歩さんの切羽詰まった声が聞こえてきた。

「はい、気絶していますけど大丈夫だと思います、微弱ですけど絶対防御も働いているみたいですし、内臓も大丈夫だと思います」

『よ、よっかた．．．．．』

果歩さんの安堵の声が聞こえた、よほどこの人のことが心配だったんだ。

『じゃ、じゃあ優希君、今すぐに救護班を向かわせるわ。とりあえず降りてきて』

「はい、わかりました」

抱えている人を刺激しないように、ゆっくりと降下する。地面に着いたら女の子を寝かせてISを待機状態に戻す。

うーん．．．．このまま、地面に寝かすのはダメだよなどうしようか．．．．しょうがない、あれやるか。

女の子の頭を少し持ち上げて僕の足に乗せる。そう、膝枕だ。

あー、なんか恥ずかしいな、これ。早く救護班の人たち来ないかな．．．．まあ、それよりもあの男だ、ISの設計もそうだけど、今回の不自然なトラブル、これは問い詰めないとな。覚悟してもらおうよ所長さん。

第二十九話（後書き）

オリジナルIS、迅雷および雷光が出てきました。雷光は名前だけです。

イメージ的にはマクロスのVFに少し機能を足したくらいです。果歩さんの娘はまだ出ません。まあ、読者の皆様はもう気づいてると思いますが。

次回くらいに出せると思います。では次回の更新で。

第三十話（前書き）

遂に三十話に突入しました。

第三十話

迅雷の操縦者の女の子を、救護班の人たちに預けて管制室に戻ったら、何故だかシャルとラウラに怒られた。なんでだ？

まあ、それはそうでもいいとして、問題は……。

「果歩さん」

「なにかしら」

「迅雷、本機を詳しく見せてもらっていいですか？」

「な、何をふざけたことを！あれは我が社の最高機密だ……」

「

「いいわ」

「なっ！？」

あれから、何故迅雷がトラブルを起こしたのか考えてみたのだが、原因は機体側にあると僕は考えている、それを実証するためにデータではなく、迅雷本体を確認したかった。

この男は、操縦者側に問題があると言っていたが、あれはどう見ても不自然だった、だから確かめる。

「か、果歩様、何を！」

「黙りなさい、今回のトラブルは不可解な点が多いわ、それを調べるだけよ」

「そ、それなら、私達が……………」

「はつきり言っておくわ、私はあなたが信用できないの、だから信用のできる子に調べてもらう」

おお、果歩さん言ったな。まあコイツ、トラブルがあつてから、なんか挙動不審だし。あと人望か。

「信用のできる子って……………この少年のことですか？ふつ、笑わせないでください、IS学園の生徒だから知りませんが。学生風情にできるわけが無いでしょう。だから、ここはプロである私達に……………」

「あら、そういえば言っていなかったかしら？この子は篠ノ乃優希、篠ノ乃束の弟よ」

「し、篠ノ乃束の弟！？」

「そうよ。この子は下手な技術者なんかよりも腕はいいわ、だから問題ない」

果歩さん、いい具合に僕を使うな。でも、IS開発者の弟と言ったところで、所長の顔色が一気に青ざめた、これで確証した、絶対何かある。

ていうかこの人、この位で顔色変えるなよ、小物だな。

「じゃあ、行きましようか。迅雷は確か第一ラボだったわよね？」

「は、はい、そうです」

「ありがとう、行きましょー優希君」

「はい」

果歩さんに連れられ、管制室を出る。おっと、そうだ。

『ラウラ、シャル』

僕は、歩きながらプライベート・チャンネル秘匿回線で、ラウラとシャルの二人に呼びかける。

『え、優希？』

『どうした？』

いきなり呼びかけたのに、微動だにせず自然体で受け答える二人、さすが代表候補生。一夏にやってたら絶対に反応するだろうな。

『二人に頼みがあるんだ』

『頼み？』

『……何にかあるのか？』

『所長を監視していて欲しいんだ、あと何か不自然な行動をしていたら報告して欲しい』

『監視……やっぱりトラブルの原因は……』

『あの男か』

さすが二人だ、大体解ってたみたいだね。だったら話は早い。

『うん、多分……いや、ほぼ確実に、だから……』

『わかったよ』

『了解した』

『ありがとう、じゃあ、お願い』

ここで、回線を切る。これでよしと。

話しているうちに第一ラボと書かれた部屋に着いた。さて、徹底的に調べるますか！

「……………これは、酷い」

第一ラボに着いてから、僕はすぐに迅雷を調べた、酷いと思っていて腹を括っていたけど、迅雷の内部の酷さは僕の予想を超えていた。

「ぱ、パーツとパーツの間に隙間が無い、これじゃすぐにショートするし、信号の伝達に支障が出るに決まってるよ、よくこれで動けたな……………」

さらによく見ると、使っているパーツの全てが高級なパーツだけだった。一つ一つは優秀なパーツなのだが、全部がこれではバランスが悪い、性能が下がるわけだ。

「……………優希君、このISを一言で表すと?」

「欠陥機、それ以下」

果歩さんが絶句してる、後ろに控えていた研究員もだ。まあそれはそうだろう自分達が莫大な費用と時間、労力を掛けていた機体は実は欠陥機だったと言われればそうなるだろう。

だけど、これは事実だ。酷すぎる、まだIS学年の整備課の人たちのほうがマシな設計をする。つまりは素人以下ということだ。

「……………で、今回の事故の原因はわかったの?」

「はい、パーツ同士が干渉、ショートして機能不全を起こしたんだと思います……………ん?これは……………」

ショートして焼き切れた回線の所に何か別のパーツを見つけた、ISのパーツではないな……………これは!

「果歩さん、これ」

パーツを取り出して果歩さんに渡す。

「ん?何これ?」

「多分受信機の類だと思います、ショートしていたパーツの傍にあ

りました」

「受信機？……まさか！」

受信機と聞くと果歩さんも気づいたようだ、そうこれは事故ではなく故意に行われたことだ。犯人は……。

「……………迅雷の調整をしたのは誰？」

「ひい！？しよ、所長です！」

後ろを振り向いた果歩さんの顔を見た研究員は短く悲鳴を上げた。他の人達もガクガクと小刻みに震えている、ちょ、果歩さん？

「そう、あの男なのね」

こ、声が違う、先ほどまでの優しい声色じゃなくて地獄の底から湧き出たような声になってますよ！

『優希』

あれ？ら、ラウラ、何かあったのかな？

『どうかしたの？』

『ああ、先程所長が逃げ出そうとした』

逃げ出すって……………これで、確定だな。

『……………そう、こっちも原因がわかったよ。で、所長は？』

『逃げ出そうとしたところを私が叩きのめした。今は縛り付けてある』

『そう、ありがとうラウラ。．．．そうだ、所長のポケットを調べてくれないスイッチ的な物があると思うんだけど』

『スイッチだと？了解した調べてみる．．．．．あつたぞ』

はい、これで決定。

『ありがと、ラウラ。じゃあ、そっちに向かうよ』

『何、気にするな。嫁を助けるのは夫の役目だ』

いや、嫁って．．．．．まあいいや。じゃあ、果歩さんと一緒に．．．．．って!？

「あら、優希君、どうかしたの？」

果歩さんの手には全長一メートルほどの銃を持っていた。

「あ、あの果歩さん、それって．．．．．」

「ん？ああ、これ？ミニミニよ」

ミニミニって確か軽機関銃ですよ、そんなものどうして．．．．．？ていうか、どこから出したんですか。

「あ、あのー、それで一体何をするつもりで．．．？」

「なにつて、あの豚にO・S I・O・K Iを」

ちよ、なにを！てか遂に所長の呼び方が、豚になった。

「さあ、逝きましよう、優希君」

「ちよ、待つて！果歩さん、それだめです、使ったらお仕置どころじゃなくなります。だからダメー！ー！！」

十分間の説得の末、何とかメリケンサックで我慢してもらいました。

ラボから管制室に戻ると、果歩さんが所長に殴ぐろうとしていた、でも、僕はその手を掴み止めた。

「邪魔しないで優希君、私はコイツを殴らなきゃ気が済まないの」

「殴るのは構いませんがそれは待つてくれませんか、僕はこの人に聞きたいことがあるんです」

迅雷のこととか色々だね。

「……………わかったわ」

「ありがとうございます。ラウラ、縄を解いて」

「わかった」

ラウラは、袖からナイフを取り出すと所長を縛っていた縄を切る。ラウラ、何では物持ってるの、あとで没収ね。

縄を外された、所長は立ち上がった、ラウラが逃げ出さないようにナイフをチラつかせてるから逃げ出すことは無いだろう。

「さて、所長さん。あなたに訊きたいことがあります」

「・・・・・・・・・・になかな？」

「・・・・・・・・・・なんで、あんなことをしたのですか」

「あんなこと？何のことかな？」

しらばつくれるつもりか・・・・でも、意味は無いよ。果歩さんに視線を向ける、するとその意味を汲み取ってくれたようで、ポケットから受信機を取り出し僕に渡した。

僕はそれを所長に見せ付ける。

「そ、それは・・・・!？」

「ずいぶんと巧妙に隠してありましたけど、ちゃんと見つけましたよ」

「うう・・・・・・・・」

「もう一度聞きますなんでこんなことを」

「・・・・・・・・・・」

「黙秘しますか、だったら当てましようかあなたは迅雷を破壊しようとしてましたね、操縦者ごと」

「!？」

少しだけど、反応があつた凶星か・・・・・・・・。

「そして、欠陥機である迅雷の破壊を操縦者のせいになつた・・・・・・・・違いますか？」

「欠陥機？何を言っている、あれは成功作だ！」

返つてきた言葉に僕は耳を疑つた。成功作、あれが!？

「・・・・・・・・何を言ってるのですか、あれは！」

「天才の私が設計したのだ、失敗などありえん！迅雷のこれまでの性能は全て、操縦者の腕のせいだ！」

こいつ、何身勝手なことを・・・・・・・・。

果歩さんも怒りで今にも殴りかかりそうになっている、だけど必死に抑えている、まだコイツから理由を聞いてないからだ。まだ抑えていてください。

「・・・・・・・・それで、迅雷を破壊しようとしたのですか」

「ふん、そんなことで迅雷を破壊するか。ただな・・・・・・・・飽きたの

だよいつまで経っても評価の出せない迅雷にな」

「……っ！！飽きた、ただそれだけで！僕は拳を強く握る、これまでに無いくらい強く。今すぐにこいつを殴りたい！でもまだ、まだ聞いてない。だから待て！

「そこでな、とあるところから連絡があつてな」

とありところ？

「とある企業がな、新プロジェクトに私を来ないかときたのだ、ちようど迅雷の開発に飽きてきたところだったのだな、私は喜んで受けたよ。だが少し困ったことにな、その企業は蘭堂の新型機の迅雷が邪魔らしくてな、破壊して欲しいと言ってきたのだよ、私は考えた、どうすれば蘭堂に怪しまれずに迅雷を破壊できるか。そして思いついたのだ」

「まさか………」

「そうだ、事故と見せかけて破壊すればよかったのだよ、事故だったら、責任は私ではなく操縦者のほうにいく、これで万事解決だ！ハッハッハッ……！ガアッ！？」

もうダメだ、我慢の限界だ。僕は高笑いするコイツの顔面を全力で殴った。

殴られた所長はそのまま床へ倒れる。人を殴ったのは初めてだ、でも我慢できなかった。コイツだけは許せなかった。

「ふざけるな！！」

そして所長の襟首を締め上げ、叫ぶ。

「そんな身勝手に、人を殺そうとしたのか！」

「ヒッ!？」

「自分が設計したから成功作？ふざけるな！あれは失敗作だ、欠陥機だ！成果を出せないのは操縦者のせい？大概にしろ！あれがお前の実力だ現実を見る！」

こんな自分勝手な奴ために人一人が死にそうになった、それが許せなかった。

「お前は、天才なんかじゃない。ただの凡人だ！それが勝手なことを言うな!!」

襟首を締め上げる力が無意識に強くなる。この男は苦しそうにするけど僕は気がつかない。だが、不意に肩を掴まれ僕の動きは止まった。

「もういいわ、優希君。放して」

肩を掴んだのは果歩さんだった、僕は言われた通り所長の襟から手を離れた。

「あ、あ………」

「いい、今回の件についてはあとでたつぷりと聞かせてもらっわ、覚悟しなさい」

「ヒイツ!？」

果歩さんが睨みを効かせると、所長は縮み上がる。

「あ、それと……」

何か忘れ物を取るかのように。
バキッ!!

「ゴフツ!？」

「私もあなたのことを殴りたかったの」

殴った、メリケンサック付きで。所長は今ので気絶したようで地面に伏せた。

「連れて行きなさい」

と言い放つと、研究員数名が所長を抱え、管制室から出ていった。
これで終わりか……。

「……………ごめんなさいね、こんなところを見せてしまって」

「……………」

空気が重い、なんか言わなければいけないんだけど、何を言えばいいか、わからない。

そしてさらに沈黙が続くそうすればいいんだ?と悩んでいるとドアが開く音がした。全員がドアの方を向くとそこには金髪の少女が立っていた、あれ?あの子は……………。

「えーと、ママ・・・・・・・・？」

「舞華！」

果歩さんが女の子を抱きしめた、ママ？ということはある子が果歩さんの・・・・・・・・。

「もう大丈夫なの？」

「う、うん、大丈夫だよ」

「よかった、あなたが無事で・・・・・・・・！」

果歩さんの声が震えている、怪我が無かったとはいえやはり心配だったんだろう。

「ま、ママ・・・・・・・・あれ？」

果歩さんに抱きしめられてくすぐったそうにしていた舞華さんの視線は僕を見たまま固まった。どうかしたのか？

「し、しっ・・・・・・・・し！」

し？

「詩織伯母様！？」

あー、この子も僕の子とを母さんと間違えるんだ、そんなに似てるの？

「な、なんで、詩織伯母様が！？しかもなんか若いし小さい！どうなってるの！？」

ち、小さい……ぼ、僕が一番気にしていることを……

「ま、ママ!どうなってるの!？」

「え？ ああ、そういえば舞華には言っていなかったわね、忘れてたわ」

おいおい、果歩さん、それって結構大切なことなんじゃ？

「いい、舞華、この子は姉さまじゃないわ」

「でも、写真の詩織伯母様にそっくり……！」

「あの子、彼はね篠ノ乃優希、姉さまの息子。あなたの従兄よ」

「息子？え、ええええええ——！！？」

舞華さんはすごい声量で絶叫した。この絶叫は研究所の隅々にまで響き渡ったとか無いとか。

第三十話（後書き）

小説を書き始めてから三ヶ月、早いもんですね。さて、今回でようやく果歩さんの娘、舞華ちゃんが登場しました。詳しいことについては次回の更新で書かれると思いますので楽しみに、では次の更新で。

第三十一話（前書き）

第三十一話です、とづづ。

第三十一話

「す、すみません、取り乱してしまつて……」

場所は研究所の食堂、僕達はその一角に座っていた。絶叫していた舞華さんはようやく落ち着き、僕達に頭を下げていた。

「いや、気にしないでいいよ、舞華さん」

「で、ですが……」

うーん、さっきからこう言ってるんだけど、頭を下げるのをやめないな……。どうしよう。姉達もどうすればいいか困っているし。

「舞華、もうやめなさい。みんな困ってるわよ」

「で、でも、ママ」

「いいから」

「はい……」

果歩さんに言われ舞華さんは頭を下げるのをようやく止めた。

「はい、じゃあ、自己紹介なさい。まだしてないでしょ？」

「は、はい……。蘭堂舞華、中学三年生です。よろしくお願いします」

ちゅ、中三！？と、年下だったのか。てつきり、同い年か年上だ
と思ってた。

舞華さんの身長は僕よりも大きく、箒姉とセシリアさんの間くらいだ。さらに、中三と思えないようなスタイルを持っている、特にバストが……。それもあって、とても大人びている。

で、舞華さんが中三と聞き彼女に殺意の籠った視線を送る二人がいた。それは……。

「……。あんなのただの脂肪よ、あんなのはただの脂肪よ、あんなのはただの脂肪よ、あんなのはただの脂肪よ、あんなのはただの脂肪よ、あんなのはただの脂肪よ！」

「ギリギリギリギリギリギリギリ……！」

言っでは悪いが、スタイルの乏しい中国の代表候補生とドイツの代表候補生だった。ていうか、ラウラ平然を装っていても、妬んでいるのはばれているからね。

そんな二人の視線を向けられていても、なんとも無いようにしている舞華さんは大物なのか？

「ん？どうかしましたか？」

ただの、天然だったか……。

「それで、舞華さん……。」

「あ、舞華でいいです、私は年下ですから」

「え、そう？じゃ、じゃあ、舞華ちゃん。怪我は無かった？」

一応、怪我しないように受け止めたつもりだけど。もしかしたら
と思い聞いてみる。

「怪我？あつ、はい、大丈夫です。ドクターにも問題ないといわれ
ました」

「そう、よかった……」

何も無かったのはよかった、女の子に傷が付いたら大変だもんね。

「でも、なんで私無傷だったんだろう、確かあの時、迅雷の展開も
解けてたのに」

「ああ、そのことね。優希君が助けてくれたのよ」

「え！」

果歩さんも発言で舞華ちゃんは僕の方を向く。

「優希君が落下するあなたを助けてくれたの」

「そ、そうだったんですか！？た、助けてくれてありがとうございます
ます！優希さん」

そう言って、また何度も頭を下げる舞華ちゃん。

「私も言っておくわ、優希君、娘を助けてくれてありがとう」

果歩さんも頭を下げる。

「あ、頭を上げてください、困ります……………」

「でも……………」

「舞華ちゃんが無事でよかったよ……………」

こんな僕が人の命を助けられたのが嬉しく思えてそういうと僕の顔は自然と微笑んだ。それが、母さんの家族の子なら尚更だ。

「ポ……………」

「あらあら……………こんなとこまで姉さまにそっくりね」

ん？僕なんか変なこと言った？舞華ちゃん、頬を赤くしてぼーとしちゃってるけど。

「な、なんでもありません！？え、えと……………ま、ママ！ところで迅雷はどうなったの？」

「え？ああ、迅雷ね……………」

そうか、舞華ちゃんはまだ迅雷が欠陥機だということを知らなかっただけ。どう説明するか……………。

「あー、少し質問いいですか？」

ここまで沈黙していた一夏が口を開いた、どうしたんだろう？

「何かしら？」

「えーと、さつきから気になっていたんですけど、えーと……舞華さんは何で迅雷に乗っていたんですか？」

「はあ？なんで今頃そんなこと聞くのよ、そりゃ……なんで……？」

ちょ、鈴……でも、そう考えるとなんでだ、普通は企業のテストパイロットだったらスカウトした人が所属している人を使うはずなのに……。

「ああ、そのこと。舞華はね日本の代表候補生なのよ」

「『『『『『代表候補生！』『』『』『』』』』』」

……お、驚いた。年齢もそうだったけど、まさか代表候補生だったとは……。でも、それなら納得がいくな、思い出してみれば落下前のリカバーもよくできてたし。

「そうだったんですの……。そういえば、挨拶がまだでしたわね。わたくしはイギリスの代表候補生セシリア・オルコットですわ」

こらこらせシリアさん、突っかからないの。まあ、自己紹介にもなってるからいいけどさ。

「なにやってるのよ、まったく……。あ、ワタシは凰鈴音、中国の代表候補生よ。よろしく」

「フランス代表候補生のシャルロット・デュノアです。よろしくね

舞華さん」

「ドイツ代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒだ。優希の夫だ」

「……………優希の姉の篠ノ乃箒だ、義理のだがな……………」

セシリアさんにつられてみんなも自己紹介し始める。てかラウラ、夫って言わないの。僕たちは結婚してないからそれにラウラは嫁のほうでしょう。

「み、皆さんも代表候補生でしたか!?ら、蘭堂舞華です!よろしくお願いします」

また、ペコペコと頭を下げる、舞華ちゃん……………頭を下げるの好きだな。

で、最後は一夏……………。

「あ、俺は織斑一夏だ、よろしくな」

「織斑……………?」

舞華ちゃんは一夏の名前を聞くと首を傾げた、まあ、聞いたことはあるだろうな。ニュースに大々的に出てたし。

「ん……………?あつ、思い出した!」

お、どうやら思いだしたようだ。

「蘭ちゃんが言った、超絶鈍感朴念仁!」

ゴンッ！

舞華ちゃんの発言を聞いてしまった瞬間、テーブルに頭をぶつけてしまった。な、なんてことを言うんだ、合ってるけどさ。

箒姉達は口元を押さえて必死に笑いを堪えてる。

「ちょ、なんてことを……って、蘭？」

ん？そうだ今、舞華ちゃん、蘭って言ったけど、もしかして……

「蘭って、五反田蘭のことか？」

「はい、そうです。私と蘭ちゃんは友達です。蘭ちゃんが生徒会長で私が副会長をやっています」

へえ〜、そうだったんだ、世間ってのは狭いもんだね。

「たく、なんだよ、超絶鈍感朴念仁って、今度蘭に会ったら、問い詰めてやる！」

「「「「「いや、事実だから」「」「」「」

「ええ！？」

だってね………。まあいいや、それよりも確か舞華ちゃんの話をしてたんじゃなかったけ？

「ああ、そうだったわね。で、舞華どうしたの？」

「どうしたの？じゃないよママ、迅雷はどうなったの？」

そうか、舞華ちゃんが代表候補生ということは迅雷は彼女の専用機だったてことか・・・これは言いにくいな、あなたの愛機は欠陥機だったんですって。

「・・・・・・・・いい舞華、迅雷のことなんだけど・・・・・・・・」

果歩さんが舞華ちゃんに説明し始める。話していくうちに舞華ちゃんの顔色が悪くなっていく。自分が必死になっていた機体が実は欠陥機だったと聞けば、それに、マシントラブルで死に掛けたと聞けばそうなるか。

「ごめんなさい舞華、私たちがもっとちゃんと調べていれば・・・・」

「・・・・・・・・大丈夫だよ、ママのせいじゃないよ。でも信じられないな、迅雷が欠陥機だったなんて」

「私もそうだったわ、優希君に教えてもらうまでは」

「・・・・・・・・あの、ママ、迅雷はどうなるの？」

「・・・・・・・・完全な欠陥機だったからね、普通だったらコアは初期状態に戻して、廃棄することになるはずなんだけど・・・・・・・・」

「なんだけど？」

「かなりの費用と時間を掛けたからね、そう簡単に廃棄できないのよね・・・次のコンペまでに新しい機体を作る時間もないし、困っ

たわね……」

果歩さんは頭を抱える、そうだろうなどこの国も新型ISを作る期間は三年以上はかかっている、それを最初から短期間で作り直せというのは無理な話だ。

まあ、手はあるんだけど、これは蘭堂社の問題だしな……。

「はぁ……どうしよう……」

「ママ……」

うーん……しょうがないか、蘭堂に行かないといっても母さんの家族だもんな手を貸そう。

「手はありますよ」

「「え……」」

僕がそう呟くと、二人は僕の方へと振り向く。

「どういうこと、優希君？」

果歩さんの表情は親族に向けるものではなく企業の人間のものだった。やはり会社の上に立つものとしての責任があるのだろう。僕はそれに答える。

「迅雷を廃棄しないで、新しい機体を作ることが可能です」

「ほ、本当なの!？」

「はい、さっき見た迅雷の状況から見て可能だと思います」

これは本当だ、迅雷が欠陥機理由は無理に高性能にしようとしてパーツを詰め込みすぎたのが原因だ。だから……………。

「少しの性能低下はありますけど、余分なパーツを抜いて、バランスを考えれば問題はなくなると思いますよ」

「そ、そうだったの。でも、それじゃ第三世代機としての性能基準が満たされないんじゃない？」

あー、それもあつたな。機体のバランスが取れたときには性能は下がるからな、心配もするか。

「だったら、追加装備を付けて性能を底上げすればいいんじゃないですか？」

たとえば、装甲とブラスターが一体型になったものとか……………。

「……………」

「……………だめ、でしたか？」

半分思いつきで言ってみただけど、ダメだったかな？と思ったけど。

ギョッ!!

「ウプッ!？」

「優希君、あなた最高よ!!」

いきなり果歩さんに抱きしめられた。し、身長的に僕の顔の位置が胸に……！

「ああっ、こういう機転の利くところまで姉さまに似ちゃって！あなた達、聞いてたわね！」

へ？あなた達？

「……はいつ！」「……」

ガタッ！

うおっ！？どっからともなく研究員達が！？てか、どこに隠れたの？

「どう？」

「はい、可能だと思われます！」

「よしっ！じゃあ、行動開始！」

「……はいつ！」「……」

果歩さんの号令と共に散っていく研究員達、本当にこの人たち忍者とかじゃないよね、どっからともなく現れて、一瞬で見えなくなっただけ……？

「いけるわ、これなら。パッケージでの性能底上げは古い考えだけど、コレなら迅雷本来の性能を引き出せるはずよ、優希君本当にありがとう！」

「今日は本当にごめんなさいね、色々と巻き込んでしまっただけ」

結局あの後僕はすぐに目を覚まし、騒ぎはすぐに収まった。ラウとシャルがなんかボロボロだったけどなんかあったのかな？

で、今は学園に帰るために研究所の入口で迎えのリムジンを待っていた。

「優希さん、今日は本当にありがとうございました、私、優希さんに会えてよかったです」

舞華ちゃんも見送りのためにここまで来てくれた。

「あ、大丈夫ですよ、果歩さん。舞華ちゃんも会えてよかったよ」

僕も年の近い従妹に会えてよかったと思っている。

「皆さんも、ご迷惑を掛けて申し訳ありませんでした」

「……い、いえいえ……」

僕以外のみんなにも頭を下げる果歩さん、大人だな。

「あ、迎えが来たようね」

駐車場に待機していたリムジンが入口前に止まり、運転手さんがドアを開く。相変わらず渋い人だな。

「じゃあ、この子達をIS学園までね」

「かしこまりました、果歩様」

「じゃあ、果歩さん、舞華ちゃん、今日は貴重な体験をさせてもら
いありがとうございます」

「あ、待つて優希君！」

果歩さん達に今日のお礼を言つて僕はリムジンに乗り込もうとす
ると果歩さんに呼び止められた。

「はい？」

僕は乗り込もうとするのをやめて果歩さんの前に行くと……。
ギョッ

先ほどは違つて優しく抱きしめた。

「優希君、あなたが蘭堂の家に来ないからってね遠慮はしないでね」

「え？」

「あなたは姉さまの子供、私達の家族なんだからいつでも会いに来
てね」

「で、でも、僕は……」

僕は篠ノ乃であることを選んだんだ、それなのに家族だなんて……。

「いいのよ。ねえ、舞華？」

「は、はい、優希さん……いえ、優希お兄様、いつでも来て

ください。歓迎いたします」

お、お兄様……なんかくすぐったいな。でもなんだろう、心が温かい。

「ほら、舞華もこう言ってるし、ね？」

僕はチラッと篝姉の方を見ると、篝姉はこくりと小さく頷いた。それを見た僕は声を大にして。

「はいっ！」

と、頷いたのであった。

「ふう……疲れた」

「確かに疲れたな……」

「ゆつくりとシャワーを浴びたいですわ」

「あー、疲れた……」

「あはは、みんなお疲れだね」

「ふん、鍛え方がなってるな」

リムジンで長い時間座っていた僕は、ようやく学園に戻ってきた。もう日は暮れかけ、門限まであと少しなのだが、この時間だったら大丈夫、間に合うだろう。

「優希・・・・・・・・」

「ん？何、箒姉？」

「本当に蘭堂の家に行かなくてよかったのか？」

「・・・・・・・・はぁ、心配してくれるのはいいけど、家族にそういわれると結構傷つくよ箒姉。よしっ！ここは、はっきり言っておこうか。」

「いいの！僕は篠ノ乃優希でいる、これはずっと変わらないよ！」

「優希・・・・・・・・」

「だから心配しないでね、箒姉」

そう言っ僕は箒姉に微笑む。すると、箒姉の瞳は少しずつ潤んでいき。

「優希・・・・・・・・」

僕を抱きしめた、優しく。そして僕は箒姉の髪を梳くように頭を撫でる。

「・・・・・・・・・・感動的な場面で悪いが邪魔するぞ」

「「「「「！？」」「」「」「」

ち、千冬さん、何故こんなところに？

「いや何、ダンボール箱を使って大企業に潜入などしようとした馬鹿どものお出迎えに行こうと思ってな」

あ、あれ？なんで千冬さんがその事を知ってるの？僕話してないはずなんだけど……………」

「……………親切な会長秘書の方が教えてくれてな、いい人だよ」

か、会長秘書？……………あつ、あの案内してくれた人？あの人秘書だったんだ……………」

「ああ、お前達の帰りを待ってたんだぞ。さあ、早く寮に入れ」

こ、怖い……………！？千冬さん笑顔なんだけど、とても怖いです！

「「「「「（ガクガクガクガクツ）」「」「」「」

みんな小刻みに震え始める、ラウラなんて虚ろな目をしながらなんか呟いてるし。

「心配するな私も鬼ではない、この中には明日帰国する者もいるかな無理はさせないさ」

その言葉にみんなはほっとする、けど……………。

「なんとか帰れるぐらいにしておいてやる」

な、なんとか帰れる？それって……相当扱ってことじゃないですか？

「さあ、逝くぞ」

「」「」「」「……はい」「」「」「」

ああ、みんな、ご愁傷様。

「ああ、それと篠ノ乃弟、お前もだ」

あれ……？僕もですか？

「お前、蘭堂の研究所で勝手にISを展開しただろう」

「あ……！」

しまった、忘れてた。

「まあ、人命救助の為だから特別に反省文二十枚で許してやろう」

に、二十枚……それでもかなり……。

「それともなんだ、お前も身体を動かす方がいいか？」

「いえ、反省文でおねが……」

「そうか、優希も一緒にやってくれるか、持つべきは友達だな！」

ちょ！？一夏何を！僕は反省文を書く方で！

「そうか、じゃあ篠ノ乃弟も来い、お前はもう少し身体を鍛えた方がいいからな、ちようどいいだろう」

待ってください！これは一夏の陰謀です！

「では、逝くぞ」

「あ、ちょ、待って……イヤァーーーーー！」

結局グラウンドを走らされ、翌日僕は筋肉痛で動けなかった。

ちなみに一夏は僕が走った距離の倍、走らされて隣のベットで死んでいる。ざまあみろ。

第三十一話（後書き）

はい、オリジナル話はこれでひとまず完結です。新キャラ達については後ほど設定を書くつもりなのでご了承を……。では、次回の更新で。

100万PV感謝記念番外編 TSパニック!? その一（前書き）

遂に100万PV突破しましたー！！！！

小説初心者の作者が書いたこんな作品を見てくださいました読者の皆様。本当にありがとうございます。

100万PV突破感謝記念として今回は特別番外編を書きました、以前、あとがきにて優希をTSしてみたいな、と書きましたが、今回はそれを実現させました。どうぞ！！

なお、今回はR-15?とTS要素がありますので、苦手な方はご遠慮してください。

100万PV感謝記念番外編 TSパニック!? その一

「あれ?これって……?」

ユニコーンの定期メンテナンスが終わり部屋に戻ってきた僕。でも、戻ってきた部屋には一夏はいなく、その代わりに机の上には、箱が置いてあった。

「なんだろ、これ?」

箱をよく見ると、丸っこい字で『ゆう君へ』と書いてあった。……束姉からか、よく見ると黒いウサギが同じ黒い仔ウサギを口に銜えている絵が描かれている。ヤ。ト?

「どうしたんだろ束姉。てか、いつの間に学園内に?」

……まあ、あの人のことだ不思議ではないか。

「で、中身はなんだろ?」

箱を慎重に開けると中には便箋と透明な液体の入ったビンが収められていた。とりあえず手紙を読んでみるか、えーと……。

『やつぽー!ゆう君、束お姉ちゃんだよー!今回、なんと束お姉ちゃんはずごい発明をしたのだー、凄いでしょー!』

凄い発明?なんだろう、もしかしてこのビンに入ってる液体のことかな?まあ、とりあえず手紙の続きを読むか。

『その箱に入ってるドリンクはね、なんと!』

なんと?

『身長を伸ばす薬なのだ――!』

カチツ!ゴクゴクゴクツ!!

飲んだ、その文字を見た瞬間すぐに飲んだ。少し不味いけど身長を伸ばす為なら!!

「プハー――ツ……しまった、反射的に飲んじゃったけど、大丈夫だよこれ?……ま、まあ、束姉のことだから毒物ってことはないだろうけど……」

そう考えたら、少し不安になってきたな……どうしよう。

「まあ、いいか……ふ、ふあ~~~~」

あれ?眠くなってきた……あのドリンクのせいかな……少し早いけど、寝ようかな。

眠い瞼を擦りながらパジャマに着替える……できた。制服はハンガーに掛けて、僕は布団に入る。

「じゃあ、お休み……スー、スー」

「ただいまー、はあ……第達、厳しすぎだった、まったく……」

放課後、恒例であるISの特訓が終わり、俺はようやく戻ってきた。疲れた……。

「あれ、優希？どうしたんだ？」

「スー、スー……」

「もう、寝たのかよ……早すぎるだろ」

今はまだ夕食時、子供が寝る時間だとしても早すぎる。でも、優希はぐっすりと寝ていた。

「疲れてたんだろうな、寝かしといてやろう……」

俺は寝返りをしてずれた布団を直してやって部屋を出る。今日の晩飯は何にしようかなー。

「一夏！早く食堂行くわよ！」

「おうつ！」

まあ、行ってから決めるか。

……でも、翌日、優希が大変なことになるのは俺はまだ知らなかった。

pipipipipipip……バンツ！

「ふあ……、……ねむっ」

目覚ましの喧しい音に急かされて俺は目覚めた。校舎が近くにあるから登校が楽なのはいいけど、やっぱりこの時間は眠いな……。

俺は、タオルを持って洗面台に向かい顔を洗う、冷たい水を一気に浴びせ眠気を覚ます。

「ふう……さて、優希も起こしてやるか」

すっかり眠気を覚ました俺は優希を起こすためベットへ向かう。優希は結構朝に弱い為、俺が起こすのが日常となっている。

「おい、優希起きろー」

「んー……」

起きないな、ならいつもの手でいくか。俺は布団を両手で掴み一気に引っ張った。

「起きろー……！！……え？」

「んん……」

……お、俺は幻覚でも見てるのか、優希が寝てたはずのベットに、パジャマのうえのボタンを全開にして、胸元が見えている金髪の少女が寝てるように見えるのだが……おい、起きるんだ俺。

「って！んな訳ねえだろ！！」

つか誰！この娘、金髪の知り合いなら二人程いるけど、俺こん

（脳内計算）箒を部屋に入れる↓半裸状態の金髪少女が見つかる
↓部屋に連れ込んだの俺と推測される「惨殺

「ヒーーーーー！？」

や、ヤバイ、この娘が見つかったら、俺の人生は終わってしまう！
！ここは何とかして箒を追いかさなければ！

「一夏、いるのだろう開ける！」

こ、ここは居留守だ！箒が引くまで沈黙するんだ！

「開けないか………だったら！！」

ドカーーーンッ！

轟音とともにドアが吹き飛び、ガラスに衝突した。すげえさすが
IS学園寮、防弾ガラス使ってやがる………って、そんなことより
りも！

「一夏！優希はどこだ！！」

朝練帰りなのか道着姿の箒が木刀を持って部屋に入ってきた。こ、
ここはなんとしてでもあの娘をみせないようにしない………。

「ふあ~~~~~………んにゅ………」

と、思った矢先、金髪少女が起きてしまい布団から出てきた、胸
を晒したまま。ああ、俺、終わった。

「い、一夏ーーーーー！！！」

箒は武器を木刀から空烈に換えて俺に斬りかかる、死んだ俺。きつと明日の新聞記事の見出しは、『ISを使える男子、浮気現場を発見され高校生女子に殺害される』なんだろうなと、箒が振り上げた空烈の刀身を見ながらそう思っていた。

「天ちゅー……」

「あふ……おはよー……一夏、箒姉？」

え？今、なんて……？

「う？何？」

金髪の少女は目を擦りながら俺達の方を見ながらそう言った。箒姉って呼び方は優希しかしな……あれ？よく見ればこの娘の顔、優希に似てるような……まさか？

「ゆ、優希……なのか？」

朝、僕が起きると箒姉が一夏に斬りかかっていた、また一夏が何かしたのかな？

「ゆ、優希……なのか？」

？なに变なこと言ってるの一夏？僕に決まってるじゃん……

それよりなんだる僕の目の前が妙に金色のような……「ミ
か？」

「本当に……優希なのか？」

「箒姉まで……変だよ、二人とも」

「いや変なのは……」

「お前の方だ……優希」

僕？僕が変なの？……あつ、もしかして昨日飲んだ身長が伸
びる薬のお蔭で大きくなったのかな！

「ゆ、優希……下を見てみる」

「ん？え、何、下を見る？それが何……か……」

……何これ、とりあえず触ってみるか。

ムニユ

「ん……！」

……柔らかい、それに感触もある……もしかして！？
僕は慌ててズボンの中を触って確かめる、けどそこには、あるは
ずのモノが無かった。

「ゆ、優希……まさか……」

「一夏……箒姉……どうしよう……」

どうしよう、混乱して泣きそうになってきたよ……。

「僕……女の子になっちゃった……。」

「……ええええええ——————————」

「———!」

「なるほど……で、お前は本当に優希なのか？」

「はい……。」

あの、混乱する僕達だったけど、騒ぎに駆けつけた千冬さんの指示でとりあえず身体検査をするために保健室に来ていた。

ここの保険医、なんか怖いけど千冬さんがいるから大丈夫だよ……ね？

「……信じられんが、本当のようだな、完全に女の体だな……。」

「はあはあ……え、ええ、そうですね」

「うつ……。」

今の僕は何も羽織っていない、つまり裸だ。女の身体になったせいか分からないけど普通より恥ずかしいよ……。

ちなみに一夏は僕が脱ごうとしたときも保健室に残っていたので、千冬さんと箒姉に目漬しをされてから徹底的にボコられて箒姉に外へと連れてかれた。まあ、授業もあるしね準備に向かったんだろう。

「……………どうですか、川井先生？」

「んー…………ダメです、さっぱり分かりません。ただ分かるのは篠ノ乃君の身体は百パーセント女の子ということだけです」

「そうですか……………篠ノ乃弟、もう服を着ていいぞ」

「あ、はい」

「あ、これ着てね……………着てきた服じゃ隠し切れないし」

僕は川井先生からワンピース状の患者衣を渡された、ここまで来るときまで着ていた服でも僕の無駄に大きい胸は隠しきれず、なんとか無理やり収めて、ここまで来た。胸が圧迫されて息苦しかった。患者衣に着替えると、恥ずかしさは幾分かマシになった。まだ、下はスースーするけど……………。

「で、なんでこんな状況になったか、なにか心当たりは無いか？」

「心当たりですか……………あっ！」

あつた、一つだけ。

「その様子だとあるようだな。なんだ？」

「あ、えーと、昨日、東姉に送られてきたドリンクだと……」

「束から送られてきた……？何故飲んだ……？」

「え、えと……身長が伸びるって書いてあったのでつい……」

そう言つと、はあとため息をつく千冬さん、だってこれでも悩んでたんですよ！同年代の男子の平均値を大きく下回ってたんですから！うつ……。。

「はあ、とりあえず束に連絡を入れてみる、しょうがないから今日はそれで登校しろ」

「………へ？今なんて言いましたか、千冬さん」

ペシッ！

頭を叩かれた、出席簿じゃなかったただけマシだけど、少し痛い。てか、今この人ともないことを言つたよな……。

「織斑先生だ、今日はその身体のまま登校しろ、制服は山田先生に用意させるから心配するな」

「ちょ、ちょっと待ってください！この身体で行けって言ってますか！？」

「そうだ、IS学園の生徒には休んでいる時間はない、だから行け」

「そ、そんな……」

いきなり女になりました．．．．．じゃ、済まないですよ。みんな混乱するような．．．．．。

「そういう時は束のせいだと言え、そうすれば大抵のことは納得される」

「いや、そう言われても．．．．．」

すると、千冬さんは僕の肩を掴みこう言った。

「私の実体験に基づく解決法だ、信じる」

そのときの千冬さんの目は何か諦めの混じったものであった。千冬さんのこんな目を見たのは初めてで僕は非常に申し訳ない気持ちになった。

「その．．．．．姉が申し訳ありません．．．．．」

僕は頭を下げた、そうだね、千冬さんは僕なんかよりもずっと長く束姉と付き合ってたんだよね、きつと．．．．．だめだ考えると、涙が．．．．．。

「わかったな．．．．．じゃあ、ちゃんと登校しろよ」

「はい．．．．．あれ？」

なんだろう、なんか上手く纏められたような気が．．．．．まあ、いいか。

「では、川井先生。篠ノ乃をよろしくお願いします」

「はい、わかりました」

「篠ノ乃、山田先生が来るまで大人しくするんだぞ」

「はー……………って、僕は子供じゃありませんよ!」

「ふっ……………冗談だ、では失礼する」

そう、言つて千冬さんは保健室から出て行つた。

はあ……………みんなどんな反応するんだろ? いきなり女の子になつちやつたし、教室に行くのが憂鬱だな……………。

「はあはあ……………」

ゾクツ!?

な、なんか、すごい寒気が……………。この保健室には僕と川井先生しかない、ということは……………!

「篠ノ乃君……………いえ、篠ノ乃ちゃん、ついでにスリーサイズも調べましょうか?」

か、川井先生? なんですか、その手は! 指の動きが凄く気持ち悪いんですけど! てか、スリーサイズって……………。

「制服のサイズもありますし、測っておきましょう、じっくりと……………」

河合先生が舌なめずりをしながらメジャー片手に僕に近づいてく

る。な、何だろうとてつもない危機を感じるんだけど……。

僕はにじり寄って来る河合先生から離れるように後ろへ下がる、けど、あまり広くない保健室すぐに逃げ場を失う。

「大丈夫、痛くないわ……じっくりゆっくり丁寧に調べてあげ・る」

「え、遠慮しま……ヒヤアーーーー！！！」

隅々まで調べられました……グスン。

100万PV感謝記念番外編 TSパニック!? その一（後書き）

はい、番外編その一でした。時系列的には二十六話と二十七話の間の話となります。

作者はどのくらいまでがR - 15なのかがよく分からないので実際はガクブルしながら書いてます。
では次々回の更新をお楽しみに。

100万PV感謝記念番外編 TSパニック!? その二(前書き)

妄想がとまらない

初っ端から気持ち悪くてすみませんでした。女体優希を書いている
とどうしても妄想が……。
とりあえずTSパニックその二、どうぞ。

100万PV感謝記念番外編 TSパニック!? その二

「バスト八十五センチ・・・・・・・・思ったり小さかったわね、でも身体の線が細いから充分巨乳ね・・・・・・・・」

「うっ・・・・・・・・」

結局、身体の隅々まで調べられた（数値を）僕は恥ずかしさで布団に包まっていた。河合先生、いろんなところ触りすぎだよ・・・・・・・・この身体、敏感すぎてとてもくすぐったかったんですから。ガラッ

「失礼します、篠ノ乃君いますか？」

布団に包まれたまま色々考えていると、山田先生が保健室に入ってきた。その手にはおそらく制服が入ってるであろう袋が握られていた。

「ああ、山田先生。ええ、いますよここに」

「お、お早うございます・・・・・・・・」

僕は布団を取って山田先生に挨拶をするけど、山田先生は目を見開いて驚いている。そりゃそうだよ・・・・・・・・。

「え、本当に篠ノ乃君なんですか？」

「・・・・・・・・はい」

残念なことに篠ノ乃優希本人です。

「わー、本当に女の子になちゃったんですね」

「……あの、山田先生、何でそんなに軽いんですか？普通はもっと驚くと思うんですけど……」

いくら説明されたとしても、軽すぎませんか？さすがに。

「え、だって、篠ノ乃博士のせいなんですよね、だったら納得できるような……」

「……否定できない自分が悔しい！束姉、ちょっと自重しようね！」

「それに……」

「それに……？」

「篠ノ乃君が女の子になっても違和感がないんですね……」

ドシュッ！！

山田先生のその一言は僕の心を深く抉った。ぼ、僕が一番気にしてることを……。

「ああ、それより篠ノ乃君、はいこれ制服です」

「あ、どう……も……」

あれ？僕疲れてるのかな？山田先生が渡してくれた制服……どう見ても女子のなんだけど……。

「ああ、これですか？大変でしたよそれを探すの、昔私が着てた制服ですから」

「あら？山田先生のなんですか？」

「はい、織斑先生から言われまして、普通のだとその……胸のサイズが合わないだろうと言われまして……。」

「ああ、なるほど……。」

山田先生、高校時代から豊満だったんですね……じゃなくて！！

「な、なんで、女子の制服なんですか!？」

「え？おかしいですか？」

「おかしいですよ!だって僕は男ですよ、女装癖はありませんよ!」

冗談じゃない、この前は罰ゲームでやらされたけど、これで教室に行くなんて……想像しただけでゾッとする。

「男って……今の篠ノ乃君は女の子ですよ？」

し、しまったぁーーーーー!?

「それに、ここは元々女子高だったんですよ、男子の制服は特注な

んですから、予備のサイズなんてありませんよ」

その事を失念していた、じゃあ、本当にコレを着て登校しろと・・・。

「ほら篠ノ乃君、早く着て下さい。もうHR始まっちゃいますよ!」

そう言いながら僕の背をグイグイ押す、山田先生。ちょ、待って!?

「や、山田先生!?!」

「どうしたんですか?.....ああ!ごめんなさい篠ノ乃君、私失念してました」

「へ?」

「制服の着方がわからないんですね」

え、ちがつ!?

「わかりました、私が着替えさせますのでちゃんと覚えてくださいね?」

だ、だから違.....っ!

「じゃあ、始めましょうか脱がしますよ」

ま、待つ.....!ああ.....!?

結局あの後、優希のことは千冬姉に任せて、俺は教室にやってきた。けど何でだろう優希を保健室に連れてからの記憶が無い……・誰かのすごく白い肌を見たような……・……・？

「おい、一夏！」

「ん？なんだ、ラウラにシャルロット？」

何とか思い出そうとしていたら、後ろからラウラとシャルロットに話しかけられた。どうした？

「ねえ、一夏。優希は？」

「まだ、来てないようだが……・……何かあったのか？」

ギクツ！？

ど、どうしよう、なんて説明すればいいんだ……・……優希は女になったとは言えないし……・……

「え、えーと、そのだな……・……ね、寝坊じゃないのか？」

苦し紛れの誤魔化し、何とかこれで……・……！

「何を言っている、優希はこれまで一度も遅刻はしなかったぞ」

「そうだよ、優希、朝弱いけど遅刻なんてしない人だよ」

誤魔化せなかったよ、畜生ッ！！

こんな時は・・・・・・・・・・助けて篤さーーーーん！

「・・・・・・・・・・（サッ）」

目線逸らしやがったあーーーーー！？俺一人に任せるんじゃない
えよ！優希の姉だろお前！！

「・・・・・・・・・・怪しいな」

「・・・・・・・・・・怪しいね」

ちよ、お前ら近寄るな！それにラウラなんだそれは、俺には細すぎ
てよく見えんがワイヤーに見えるのだが、どっかで聞いたことがある
けど細くて十分な強度のあるワイヤーだと、人を切れると・・・
・まさかそれか？それなのか！？

ど、どうする俺？話してしまうか・・・・・・・・だが・・・・・・・・！
ガラッ！

「立っている者はさっさと席につけ、HRを始めるぞ」

救世主到着！ああ、ちょうどいいところに、助かった！

「・・・・・・・・・・あとで、詳しく聞かせてもらってからな」

「逃げないでね、一夏・・・・・・・・・・」

なんで俺が・・・・・・・・。。。

「全員席に着いたな、じゃあ始めるぞ」

「先生、篠ノ乃君がいませーん」

「あ、本当だ」

「なんでだろう？珍しいー」

あ、きたよこの質問、どうするんだ千冬姉？

「……………いいか、お前等今日これから起こることは全て現実だ……………覚悟しろ」

いや、千冬姉、そんなこと言われてもみんなわからないと思うぞ。

「全ての元凶は篠ノ乃東にある、それだけははっきり言っておこう」

あー、あの人が原因か……………なら納得だ、でも何がしたかったんだあの人は……………？

「えーと、織斑先生？それはどういうことでしょうか？よくわからないんですけど」

「それはだな……………（コンコンッ）……………どうやら来たようだな」

え？来たって……………まさか女のみままで来たのか、優希！？なんで……………？

「山田先生入ってきてください」

「あ、はい、ほら篠ノ乃君行きますよ」

「あ、ちょ、ちょっと待ってください、心の準備が……！」

ドアのせいでよく見えないけど優希が入るのを拒んでいるようだ、大丈夫か？

「はいはい、行きますよ」

「ま、待つ……あうっ!？」

山田先生に手を引かれ優希が教室に入ってきた、けどその姿は……女子の制服を着ていて軽く化粧をした金髪の美少女だった。それを見て俺と箒以外のクラスメイト全員は固まってしまった。

「あ、あう……」

結局あの後山田先生に制服を着せられ、さらには化粧までされてしまった。なんで……。

で、現在は教室の前、HRは始まっているようだ。中で何か千冬さんが力説してるけどおそらくは束姉のことだろう、うん。

「山田先生入ってきてください」

つ、遂にこの時が……。

「あ、はい、ほら篠ノ乃君行きますよ」

そう言って僕の手を引き、教室へ連れて行こうとする山田先生。

「あ、ちょ、ちょっと待ってください、心の準備が……！」

せ、せめて深呼吸を！？

「はいはい、行きますよ」

「ま、待つ……あうっ！？」

山田先生の身体からは想像できない力で僕は教室内へと引っ張られた……。いや、ぼくが軽くなっただけか……。悲しい。

教室に入るとみんなの視線は僕へと向き、そして固まった。そ、そんなに酷いの？

「……えーと、篠ノ乃……。君？」

僕の隣の席の……。確か亀山さん？がそう聞いてきた。

「……はい」

僕は正直に答える。うう……。なんか言っけて悲しくなってきた……。

「ほ、本物……？」

「だって、そう言ってるよ……」

「き、綺麗……（うつとり）」

「綺麗というより……可愛い？」

「『『『『『グハッ！！』』』』』」

騒いでいた、上沼さんを筆頭に騒いでいた全員が出席簿で叩かれた。……今、千冬さんの姿がいくつもあつたよな……。残像！？

「それに、これ以上騒ぐと……。あれが暴走するぞ」

あれ？千冬さんの指差す方を見るとそこには……。。

「……………（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！）」

髪を逆立て、全身から不吉なオーラを出している箒姉だった。その手には愛刀の緋宵が握られていつでも抜ける状態であった。

「『『『『『す、すみませんでしたー！ー！ー！』』』』』」

「『『」

クラスメイトのほとんどが誤った、机に額を擦り付けて。

「はぁ……。そろそろHRを始めるぞ、篠ノ乃のことは休み時間にも聞け、わかつたな！」

「『『『『『は、はい！』』』』』」

千冬さんが睨みを効かせて全員を黙らせるとりあえずこれで一安心だな、ふう……。。

「……一体どうなってんの！（いますの！）（いる！）（いるのよ！）」「」

時間は過ぎ、一時間目終了と共にいつものメンバーが僕の机の前に集まって来た。

「優希、何があつたの！？なんで女の子になっちゃったの！？」

「そうですね、ちゃんと説明してくださいまし！」

「説明しろ、優希！」

「なんで、アンタが女になってるのよ！」

上からシャル、セシリアさん、ラウラ、鈴……って、なんで鈴がいるの？クラス隣でしょ。

「……優希（さん）……！」

「ちょ、そんな詰め寄らないでよ。ちゃんと説明するから！」

そう言つと、みんなは少し後ろに下がった、ふう………。

「で、なんで女になったのよ」

「なんでって、朝起きたらこうなってたんだよ………」

「ですが、先ほど篠ノ乃博士のせいだ、と織斑先生がおっしゃってましたわよ？」

あ、ちゃんと、覚えてるんですねセシリアさん。

「う、うん、昨日束姉から届いたドリンクを飲んで……それ
で」

「ドリンク？なんで飲んだの？普通怪しむでしょ？」

「そうだぞ、いくら姉からといっても無用心すぎるぞ」

ぐ……その通りだけど……だって。

「……だって、身長が伸びる薬だって書いてあったか
ら」

みんな呆れてる、だって悩みだったんだよ！去年から一センチも
伸びてないんだよ！

「身長が伸びるって……むしろ縮んでるわよ」

「ええ……」

「あ、ほんとだ……」

「私と同じだな」

なん……だと……！？僕はすぐに確認すると確かに
そうだった。今までだったらシャルと同じくらいだったのに、今
ではこのメンバーの中で一番小さいラウラと同じ身長になっていた。

「ひ、ヒーーーーー！！？ち、縮んでるーーーーー！！？」

「うわ、今頃気づいたんだ」

だって、まだ混乱してんだよ！気づくわけないじゃん！！

「うむ、これで私とお揃いだな」

「揃いたくなーーーーーい！！」

そ、そんな、さらに小さくなるなんて……鬱だ……

「で、でも、小さくなった優希も可愛いよ？」

「そ、そうですね、可愛らしいですわよ優希さん」

「そんなこと言われても嬉しくなーーーーーい！！」

そう叫んでると、鈴が僕のとあるところを凝視していた。殺気の籠った目で。

「り、鈴？どうしたの」

「………ナンデモナイワヨ」

いや、片言になってるよしかも目からハイライトが無くなって
し、本当に大丈夫？

「本当に大丈夫………うわっ！？」

僕は鈴の様子を見ようと立ち上がろうとしたら何かに足が引っかかり倒れそうになった。

「うわっ！優希、大丈夫？」

「う、うん、ありがとう……シャル」

何が引っかかったんだ？て、僕の鞆か、止め具から落ちちゃったのか直さないと。

なんか、また上沼さんがキヤーキヤー騒いでいるけど、気にしないでおこう。

「もう、優希はおつちょこちよいだな、普通は気づくでしょ？」

「いや、その、胸が邪魔で足元が見えなくて……」

そう、この無駄に大きい胸のせいで足元が見えないのだ、教室に来るまで何回こけそうになったことか……。女の人にはよくこけないな……。慣れか？

ブチンッ！！

ん？今なんか変な音が……。

「あてつけか……」

「へ？」

「アタシへのあてつけかこの胸は――――！！」

「へ、鈴っ！？ひゃ、ひゃあっ！？」

ちよ、り、鈴！？いきなり何を！！？？

鈴がよく分らないこと叫びながら、僕の胸を鷲掴み揉み始めた。いきなりのことで近くにいたシャルも啞然としていた。

「なによ！アタシより小さいくせにこっちは大きいなんて．．．
寄こしなさい、半分でもいいから寄こしなさい！！」

「り、鈴、やめ、ひゃうつ！？」

ほ、本当にやめて鈴！じよ、冗談じゃなくヤバイから、何かはわからないけど男として超えてはいけないものを超えてしまいそうだから！

てか、みんな見てないで助けてよ！？

「それに何よ！なんであんなノーブラなのよ！それなのにこの形つて……キイーーーーー！」

ふわぁ！？だ、だって、制服は用意できても、ひゃうつ！・・・
 ・下着は用意できなくて・・・きゃんっ！」

そう、説明しても鈴は、胸を揉む手を止めない、むしろ激しくなっていく。てかさこっ！まさか下も・・・なんて言わない！下はちゃんと穿いてますからね！

「きやうつ・・・あうつ！？はあはあ・・・や、やめ・・・鈴・・・っん！」

「この胸があ——！！！」

だ、誰でもいいから止めてーーーーー！
バシンッ！！

「ゲフッ！？」

「チャイムは鳴ったぞ、さつさと戻らんか凰」

鈴が女の子としてはダメな断末魔？を上げ、頭を抱えしやがみ込む。た、助かった……。

「お、織斑先生……！？」

「早く戻らんか、それとももう一発いくか？」

「失礼しましたーーーーー！！」

千冬さんが出席簿をチラつかせ脅すと鈴は凄い速さで教室から出て行った。

「お前等も、さつさと席に着かんか二時間目を始めるぞ！」

「「「「「「「「「「はい！？」「」「」「」「」

さすが鬼教官、固まっていたみんなをすぐに元に戻し、席に着かせた。みんな出席簿はイヤだもんね。

「いいか、お前等、篠ノ乃弟を弄るのはいいが、やるなら昼休みか、放課後にしろわかったな」

え、せ、千冬さん！そこは普通止めるように言いませんか！それ

じゃ僕は！

「「「「「はーい！」「」「」」」」」

みんなも頷かないで！？てか、今シャルたちの声も聞こえたよう
な……僕に味方はいないの！？

「それでは授業を始めるぞ、教科書の五十ページを……」

も、もうイヤアーーーーー！！

こんな感じで僕の長い一日が始まったのであった……
。

100万PV感謝記念番外編 TSパニック!? その二(後書き)

優希は口リ巨乳！異論は認めん！！

・・・・・・・・すみません、取り乱しました。

いやー、書けば書くほど、妄想がとm(ry

予定では全三話のはずなのですが、結構伸びてしまいますね、どうしましょう・・・・・・・・キンクリを使うか？

まあ、それは執筆中に考えましょう。では次回の更新で。

100万PV感謝記念番外編 TSパニック!? その三 (ふぁいなる)

はい、番外編は今回で終了です。

予定通り三話分にするため、今回はいつもの二倍の量です。
では、どうぞ。

「うう~~~~~!!」

「ごめんつてば、篠ノ乃君……!」

「や、やりすぎた事は謝るから……」

「涙目はやめて……すごい罪悪感が……」

時は昼休み、昼食も食べ終え教室に戻ってきた僕は、クラスメイトのみんなに襲撃された。そして身体中を触られた。……いや、冗談じゃなくて、本当に髪から胸、お尻も触れた。

みんなはおふざけのつもりだったんだろうけど、僕は怖かった。さらに小さくなった身長のせいかみんなが大きく見えた上に周囲を囲われて身体を弄られ、本当に怖かった。

箒姉が戻ってきて僕は何とかその背の後ろに隠れた。箒姉も何があったのかすぐに理解してくれたので、後ろに僕をかばってくれた。箒姉の後ろに隠れた僕の姿を見てみんなはやり過ぎたと反省し今僕に謝っている。

「泣き顔も、はあはあ……はあはあ!」

約一名反省してないようだけど……。

「うう~~~~~もうしない?」

箒姉の身体から、少しだけ顔を出し、聞いてみる。

「グハッ……!」

ヒイツ！？と、吐血！？

「……し、しません……」「……」

いや、そんなことよりも吐血は大丈夫なの！？

「……お前たち……優希に手を出したら、どうなるか分かってるな？」

「……は、はいつ！」「……」

ほ、箒姉、緋宵は抜いちゃダメ！！あぶないよ！？

「篠ノ乃弟、いるか？」

「あ、はい」

千冬さんが僕を呼ぶが、ドアの位置からじゃ箒姉の後ろに隠れて
いる僕は見つからないので、身体を出し返事をする。

「む、そこか……喜べ、戻る目処がついたぞ」

「ほ、本当ですか！」

「ああ、先程束に連絡して聞いた、あの薬の効力は一日半、つまり
明日の朝には元に戻るということだ」

「よ、よかった」

本当によかった……このままずっと、女だったら……考

えるだけでもゾツとするよ。

「えー、女の子の篠ノ乃君、今日までなの」

「勿体無い………」

「あ、あと、三日延長できない？」

「な、なん……だと………」

ちよ、そこ勿体無いって言わないの僕は男なんだからね！それに延長はしません！

「………よかったな………優希」

「なんで、箒姉も残念そうなの！？」

喜んでよ！弟が元に戻るんだよ！？

「優希にかわいい服を着せようと思っていたのに………実に残念だ（よかったな、優希）」

「ちよ、箒姉！？」

本音と建前が逆になってるから！てか、そんなこと考えてたの！？

「………冗談だ」

駄目だ、ああは言ってるけど目は本気だ………まさか敵が身内にいたとは………！

「まあ、とりあえず今日はそれで我慢しろ、よかったな」

「は、はい……………」

しょうがない……………今日はそれしかないな、明日までの我慢だ。
はあ……………」

「だが、お前、今日はどうするつもりだ？」

「へ？何がですか？」

「お前の部屋だ、今のお前は女だしな……………一夏と一緒の部屋
だと問題があるだろう。まあ、別にお前が構わないのならいいのだ
が……………」

なんだそんなことか……………別に問題はないだ……………。

「ダメだ!!」

「ダメよ!!」

「ダメですわ!!」

「ダメ!!」

「ダメだ!!」

え？ちよつと、みんなどうしたの？

「今の優希を一夏と同じ部屋にいさせるわけにいかん！」

「そうよ！今は女の子なんだから！」

「そうですね！ど、同棲なんて許せませんわ！！」

「い、一夏と同じ部屋はき、危険だと思います」

「あいつはケダモノだからな」

ひどい言われようだね一夏・・・・・・・・。

「俺って・・・・・・・・」

あ、いたんだ一夏。

「まあ、それは否定はせん・・・・・・・・」

「ち、千冬姉！？」

うわ、悲惨だな一夏、姉からも認められたよ。

「だが、どうする？篠ノ乃弟はどこに泊まらせるつもりだ？」

「私の部屋で！！」

おお、篤姉がすごい勢いで挙手をした。まあ、その考えが妥当だろうな、姉弟だし。

「却下だ」

「何故！？」

「お前、自分のルームメイトの姿を試みる」

と、後ろを指差す千冬さん、第姉のルームメイト？何が……ヒイツ！？

「優希きゅんと同じ部屋！優希きゅんと同じ部屋！優希きゅんと同じ部屋！優希きゅんと同じ部屋！」

なんか怖いことを言ってる！？や、ヤバイ、凄いの危険を感じる！

「すみません……」

「ならいい……で、どうする？」

「だから、僕は一夏と同じ部屋でいいんだけど……」

だって僕は男なんだし……今は女の身体だけど……。

「ダメだ！私が許さん！！」

「そうですわ！」

「優希、やめなさい！一夏と一緒にいたら大変なことになるわよ」

「優希はもつと自分を大事にして！」

「そつだ！お前は私の嫁だ！あいつなぞにやらん！」

一夏と同じ部屋いるだけでこの反応……一夏、君はどれだけ

変態だと思われてるんだ？

「俺は・・・！俺は・・・！！！」

あ、一夏が遂に崩れ落ちた、ご愁傷様…………。

「篠ノ乃弟、お前はどうしたい？」

「へ？だから、一夏と同じ部屋で…………。」

「一夏以外でだ」

一夏以外って…………んー？じゃあ…………。

「シャルとだったら大丈夫だと思います」

「ぼ、僕！」

「ほう、デュノアか…………そうだな以前は同室だったな、それにデュノアだったら問題も起こさないだろう、ボーデヴィツヒもいるしな」

あ、そういえばシャルとラウラは同室だったけ？

「い、意義あり！」

「どうした篠ノ乃姉？」

どうしたの、篝姉？そんなに慌てて？

「この二人の部屋は危険です！私の部屋に！」

「だから、お前のルームメイトが……………」

「優希に害するなら、滅します！！」

め、滅するって、篝姉ダメだよ、人を殺しちゃ！？

と、とんでもないことを言った篝姉は千冬さんの出席簿アタックを喰らい頭を抱えしゃがみ込んだ。痛そう……………。

「はあ、何を言っている馬鹿者が。篠ノ乃弟、今日はデュノアとボーデヴィツヒの部屋に泊まれ、わかったな？」

「あ、はい」

「よし、ならいい」

キーンコーンカーンコーン

「む、いい具合にチャイムが鳴ったな。さつさと席に着け、次の授業が始まるぞ」

そう言い、教室から出て行く千冬さん。えーと、次の授業は確か、丸山先生の数学か……………あの先生、時々僕のことジッと見てるんだよな、何なんだろう？

「そ、それじゃあ優希、後で僕達の部屋でね」

「うむ、待ってるぞ」

「あ、うん」

今日はシャルたちの部屋で寝るのか……。てか、なんで僕抵抗がないんだ？普通だったら、もっと拒むはずなんだけど……。これが身体に精神が引つ張られるって奴なのかな？まあ、どうでもいいけど。

「はい、授業始めますよ、席に着いてくださーい」

あ、先生が来たか。えーと、教科書つと。

「……。篠ノ乃……。君？」

「はい、何でしょうか？」

どうしたんだろう丸山先生顔が凄く赤いけど……。
僕は首を少し傾げそう返事をする

「ゲフウツ！？」

え、ええええー！！？血、血を吐いて倒れたー！！！！
ー！！？

「せ、先生！？」

「わ、我が人生に……。一片の悔い……。無しっ！！ガクッ……。
。」

「ちょ、先生！？」

「だ、誰か保健室の先生呼んで！」

「・・・・・・・・くつ、さすが篠ノ乃君、あんなつぶらな瞳で首を傾げられたら、私でも・・・・・・・・！」

「ビクンツビクンツ・・・・・・・・！！！」

ちよ、僕のせいなの！？てか、最後の人もなんか痙攣してるんですけど大丈夫なの！？

こんな感じで五時間目の授業潰れ、自習になりました・・・・・・・・。。大丈夫なのだろうか、ここの教師は・・・・・・・・？

今日の授業も全て終わり、僕はシャル達の部屋にやってきた。いつもだったら放課後は、アリーナでISの訓練をするんだけど、僕の身体がこんなんだから今日はお休みになった。

スーツも無いしね、いつも使ってるのも胸のせいで入らないし、このことを鈴の前で言ったらまた胸を揉まれた、僕が何を知ったていうの・・・・・・・・まったく。

で、今僕はシャルとラウラの部屋に向かっている。下着は自分の物を部屋から持ってきて、着替えは・・・・・・・・殆ど駄目だったので購買で大き目のYシャツを買った、これで大丈夫だよ。

と、どうこうしているうちにシャル達の部屋の前に到着、ノックをする。

コンコンツ

「む、誰だ？」

「僕、優希だよ」

「優希、うん、入っていいよ」

「じゃあ、おじゃましまーす」

二人の許可も取ったので中に入る、すると部屋着に着替えたシャルと制服のままのラウラがいた。

「い、いらっしやい、優希」

「よく来た」

「うん、二人とも、今日はごめんね……」

本来は二人部屋なんだけど、やっぱ三人になると少し狭いな……。

「気にしないでいいよ、優希の為なんだし、ねえ？」

「ああ、嫁のためだ」

「……ありがとう、二人とも」

こうやって心配してくれる友達がいるのって本当にありがたいな、うん。

「じゃあ、そろそろ夕食食べに行こうか？」

「そうだな、いい時間だしな」

「あ、あのさ……」

「ん？どうしたの？」

「何かあったか優希？」

「えーと、悪いんだけどさ、学食に行くのは遠慮したいんだけど・・・」

「え？なん・・・ああ」

「そうだな昼も大変だったからな」

そう、昼は大変だった。僕が女になったという噂が一気に広がりそれを見に来た生徒が大量にいたので学食が大混雑したのだ。僕はパンを手早く買ったので大丈夫だったけど、その他のみんなは大変だった、昼抜きになったという人もいた。だから夕食の時間も・・・

「あれは危険だもんね」

「ああ、怪我人が出るやもしれん」

いや、そこまではいかないと思うんだけどな、でも僕が学食に行くとか大変ことになるのは目に見えているので行かない方がいいと思うんだ。

「わかったよ、今日はここで食べよ、ご飯は僕達が取ってくるし」

「そうだな、その方がいいだろう」

「本当にごめんね、シャル、ラウラ……」

うつ、なんか今日はみんなに迷惑掛けっぱなしだな……直つたら、お礼しないとな……。

「いいよ別に、優希は何にする？」

「じゃ、じゃあ、何かお魚のやつで……少なめで」

この身体、小さくなったせいかなかなり小食になってしまったのだ、買ってきたアンパン一個でお腹一杯になるくらいに。

「お魚ね、わかった。ふふつ、まるでこの前と同……!!」

ん？どうしたんだろう、シャル？この前と同じって、シャルが女だつてばれたときのことかな？その時は確か……はっ！

「しゃ、シャル待つ……」

「さあ、行こうラウラ！早く行かなきゃ!!」

「ん？ああ、わかった。優希大人しく待ってるのだぞ」

「え、あ、ちよつと！シャル!？」

ボタンツ……。

行ってしまった……。だ、大丈夫だよ、まさかあの時みたいに『あーん』って食べさせるわけ無いよね、ね？

……不安だ……。と、とりあえず二人のためにお茶でも入れておこう！えーとケトルは……。あつた!……。んゝ少

し入ってるけど足りないだろうな。

流しへ行き水を入れる、これでいいだろう。後は専用のプラグに挿して沸かすだけだ。

でも、流しから数メートルに距離なのに僕はまたやってしまった。足元においてあったシャルカ、ラウラのカバンに足を引っかけ転んでしまった。

それだけではなく、転んだ拍子にケトルの蓋が開いてしまい入っていた水が僕にかかってしまった。

「あ、あうゝ、や、やっちゃったよ」

かなりの量が入っていた水は全て僕の身体にかかってしまい、すっかり濡れてしまった。うう、張り付いて気持ち悪いよ……。

「二人が居ないうちに、着替えちゃおうか」

この制服、山田先生のだし、汚すわけにいかないし。

「んっしょと！」

ボタンを外し制服を脱ぐが濡れていて脱ぎにくい。傷つけないように丁寧に脱ぎ、ハンガーに架ける。

スカートも脱いでパンツ一枚になる僕、下着は濡れてないな、よし早く買ってきたシャツを着よう。……パンツは女物じゃないよ、ちゃんと男物だよ。

コンコンッ

ん？誰だ？

「えーと、一夏だけど」

え、一夏？どうしたんだろう？

「あれ、一夏？どうしたの？」

「ん？おお、シャルか、実は優希の奴、部屋に携帯忘れてたみたいでな届けにきたんだよ」

え？あ、ほんとだ携帯忘れてたみたいだ、お礼言わないと……
・って、早く着替えないと。シャルたちも帰ってきたし。

「よつと……う、うわわっ!？」

ベットのの上にシャツを取ろうと一歩踏み出したときに本日三度目の足元不注意、今度は先程落としたケトルを踏んでしまい、バランスが崩し倒れてしまった。

「え！ちよ、優希！？大丈夫……夫」

「ん？どうし……た!？」

「む？んな!？」

「い、イタタツ……もう！本当に邪魔だよこれ!……て、あれ？どうしたのみんな？」

なにごとかと思い、ドアを開けたシャル達が、僕を見て固まっていた。僕は何をしているのだと思ったが、すぐに今の僕の格好を思い出す。パンツ一枚以外全裸だった。しかも今の僕の体勢はドアに向かって足を広げるように座っている、そうM字開脚状態である。

「ひゃ、ひゃわわ!？」

シャル達に見られていることに気づき、凄く恥ずかしくなって僕は足を閉じ、手で身体を隠した。

すると、固まっていたシャルたちも元に戻った。

「貴様は見るな!!!」

「ギャーーーーー目がーーーーー!!!?」

動き出したラウラは真っ先に一夏に目潰しをした。反応が遅れた一夏は避けることも出来ず、目にきた痛みで床をのたうち回ることになった。・・・ラウラ、よくお盆を片手で持てるな、ちゃんと物乗ってるのに。

「ゆ、優希!なんで何も着てないの!？」

「い、いや、制服濡れちゃったから、着替えようとしてたんだけど・・・」

「と、とりあえず早く着て!ラウラも早く入って、外から見えちゃうよ!」

「わかった!」

「ゲフツ!？」

ドアの前で倒れていた一夏を蹴り飛ばして、ラウラはドアを閉めた。

とりあえずシャルに言われた通り着替えよう、まだ糊のきいた新

品のシャツに袖を通しボタンを閉める。大きすぎたかな？胸はちょうどいいんだけど。

「ゆ、優希……下は？」

「え？……あ、忘れた！」

しまった、そういえばズボンは大丈夫だったの忘れてたよ。どうしよう？

「……まあ、いいか、シャツの裾で隠れるし」

ボタンをちゃんと閉めればワンピースみたいになるし。

「……………（グッ！）」

あれ？なんであの二人サムズアップなんてしてるの？

「気にしないで」

「ああ、そんなことよりも食べよう」

「あ、うん」

よくわからないけど、いいか。

「はい、優希は焼き魚定食」

「あつ、ありがと……あれ？シャル箸は？」

お盆に載せられた物のなかには箸が無かった。．．．．ま、まさか。

「あ、ごめーん、忘れてきちゃったよ（棒読み）」

「本当だな、すまないな優希（棒読み）」

．．．．や、やられた。まさか本当にやるとは、てか、二人ともすっごい棒読みなんですけど！

「ここは、責任を持って、僕達が食べさせてあげるよ！」

「そうだな！さあ、優希どれがいい！選べ！」

いや、なんでそうなるの！？ただ箸を取りに行けばいいことじゃん！

「料理が冷めちゃうよ、ほら、あーん」

「そうだぞ。あ、あーん」

二人はそれぞれ箸におかずを挟み、僕の口元に持ってくる。うう．．．はあ．．．こうなったな諦めるしかないか。

「あ、あーん．．．」

「おいしい？」

「う、うん．．．」

うつ……恥ずかしい。まさかこの年になって食べさせてもらうなんて……。

「優希！こっちもだ！」

「あ、うん……あーん……」

「今度は僕、はい、あーん」

ちよ、待って二人とも、少しは間を空けて欲しいんだけど……。

「あーん」

「あーん」

いや、だから、ら、らめえー！

「やりすぎたね」

「ああ、やりすぎた」

あれからずっと優希に食べさせていたら、すぐに小食になってしまった優希は満腹になってしまい、あーんをする時間は終わってしまった。残念だな。

で、僕達は食べ終わった食器を片付けに行き、食堂から帰ってき

たら優希はベットで寝てしまっていた。しょうがないか、今日はいきなり女の身体になってしまつて疲れたんだろつ、寝かせてあげよう。でも……………」

「なんていうかさ……………エロいよね」

「そうだな……………エロいな」

ベットの上で包まるようにして寝ている優希はとてつもない色気を醸し出していた。女である僕達ですら変な気分になりそうであった。

大き目のＹシャツの裾から覗くシミ一つ無い太もも、下着も見えそつで見えないのがさらに扇情的だ。ベットの白いシーツに広がる僕とは違つ金髪が光を反射していてとても美しく、まるで絵画を見ているようだ。

「……………（パシャパシャ）」

「ラウラ、なにやってるの？」

「……………いや、クラリツサから頼まれてな、写真を撮っている」

つて、何やってるの！？それつて肖像権の侵害つてやつだよ、それにそんなことしたら優希も怒ると思うよ。

……………でも。

「……………ラウラ、現像したら一枚頂戴ね」

「いいだろつ、ではあれと交換だ」

あれか……臨海学校で長谷川さんからカメラごと買った優希のネコミミ写真か……。どうしよう、あれは僕だけの物なものにな……。だけど、この優希は今日だけだし。くっ！何で僕はデジカメを持ってないんだ、長谷川さんから買ったのもラウラとの対決（写真争奪戦）で壊れちゃったし……。しょうがない背に腹は変えられないか。

「わかったよ、ただし一枚だけだよ」

「ああ、それでいい、交渉成立だ」

よしっ、これで女版優希の写真を手に入れることが出来るぞ。ちなみに、このあとにはいろんな角度から優希を撮ったり、＼シヤツのボタンを全て外した際どいものを撮ったりと、楽しみました。おっと、鼻血が……。

「……さて、写真はこれぐらいでいいか」

「そうだね……」

優希のいろんな写真を撮れて、満足した僕達は撮影を終了した。

「さて、疑問があるのだがシャルロット」

「何、ラウラ？」

「優希は誰と寝るのだ……？」

そう・・・ラウラも気づいてたんだ。そう、この部屋は二人部屋、用意されているベットも二つどちらかが一つのベットで二人で寝なければいけないのだ。つまり、どちらかが・・・！

（（優希と一緒にのベットで寝れる！！））

「・・・・・・・・ここは僕が（私が）！！」

ギリギリギリ！！

「ここは・・・・・・・・」

「公平に・・・・・・・・」

「じゃんけんだ！！」

日本が生み出したもつとも公平な勝負じゃんけん、これで決めるしかない！！

「最初はグー、じゃんけん！！」

裏の裏を読んで、パーだ！！

「ポンッ！！」

僕がパーでラウラもパー・・・・・・・・引き分けだ・・・・・・・・もう一回！

「あいこで、しょっ！！」

・・・・・・・・また同じ、まだまだ！！

「「あいこで、しょっ！！あいこで、しょっ！！あいこで、しょっ！！あいこで、しょっ！！」」

．．．．．こんな感じで百回引き分けになり、結局優希を真ん中にして三人で寝ることになりました。優希とラウラが小柄だから出来ることだね♪じゃあ、おやすみなさーい．．．．．。

．．．．．幸せ。

「ふう．．．．．ほんと大変な目にあつたよ．．．．．」

朝目覚めると僕はちゃんと男に戻っていた、髪も黒くなってたし胸も平らになってたし、下にちゃんとしてたし．．．．．でも、それよりも大変なことになっていた。シャルとラウラが同じベットに寝ていたのだ、しかもラウラは前回同様、全裸だし。シャルもなぜか下着だけで寝てるし。起きて早々悲鳴を上げちゃったよ、女の子みたいに。

そして、木刀を持った箒姉が登場、シャルとラウラとで乱闘が始まり、部屋は大惨事になり、千冬さんに僕までも叱られた。ヒドイ．．．．．。

さらに、辛かったことといえばみんなの視線と時々聞こえる話声だ、これのせいで今日、僕は何回も泣きそうになった。だって！

「あ、戻っちゃった」

「勿体無い．．．．．」

「篠ノ乃博士、もう一回やってくれないかな？」

「……決めた、私、性転換薬作る!!」

僕が女の方がいいような言い方してるんだよ! ヒドイよね!

まあ、そんなことや鈴からどうすれば胸がでかくなるのかとしつこく聞かれたりと色々大変な一日だったけど、わかったことが一つ。

「やっぱ、男の身体のほうがいい」

ちゃんと足元見えるし、弄られないし。素晴らしい……!

「さて、シャワーでも浴びようか……な……」

僕の目に見たくないものが飛び込んできた、今回の騒ぎの発端と言える箱がまた机の上に置いてあった。しかも前より大きいし。

「ま、まさか……」

恐る恐る箱を開けるとそこには!!

「もう、いやぁーーーー!!!」

『東お姉ちゃんからの贈り物♪』と書かれた紙と、ドリンクーダースが入っていたのだった。

100万PV感謝記念番外編 TSパニック!? その三 (ふぁいなる)

はい、番外編でした。実際優希のTSを書いていて楽しかったです。またいつか、書くかもしれません。もしかしたら本編でも?

次回から原作四巻に入るんですけど、あれはもともと短編の集まりみたいになっているので、どうしようか悩んでいます。蘭堂の話を入れるかとか、まあ、それは追々考えます。では、次回の更新で。

第三十二話（前書き）

今回の優希は技術者です。

それでは第三十二話、どうぞ。

第三十二話

蘭堂家でお祖父ちゃん、果歩さん、舞華ちゃんとの出会いから一週間。僕は……。

「そこ、もたもたしないの！それとその二人、装甲板はまだ！今は内部の方が先！」

「…………はい！！…………」

蘭堂社ＩＳ研究所で研究員に檄を飛ばしていた。
何故こんなことしているのかというと……………。

「ぼ、僕が所長に！？」

「正確には名前だけ貸して欲しいの、お願い」

果歩さんたち蘭堂家の人たちと会った日から二日後、僕はまた蘭堂社の会長室にやってきていた。

会長室に通された僕は果歩さんに大事な話があると言われて緊張したが、果歩さんの口から出てきたのはとんでもない話だった。

「な、なんで僕が！」

「優希君の技量にあった役職だからよ」

この前の事件で前所長は解任、ようは首だ。になって、新しい所

長を選別し就任させるつもりだったらしいのだけど……問題が発生した。

この蘭堂社IS研究所、優秀なスタッフは多いのだが、新型ISを開発するほどの技量を持つ人間がいないのだ。

いや、正確にはまだ、と言うのだろう。

先ほど言ったとおり、優秀な研究員はいるがまだ若くキャリアがないのだ。蘭堂社に就職する人間は母さんの追っかけ、帝黎学園の卒業生で構成されている。帝黎学園にも工学科はあるのだが、IS工学についての学科はない、つまりここにいる殆どの人間はISについては素人だったのだ。けど、そこはさすが帝黎というべきか、素人だった彼らは短い期間でIS工学の基本知識を習得した。

けど、やはり結局は付け焼刃の技術、本格的にIS工学を学んだ者に比べれば劣ってしまう。

この前の事件、あそこまで大きくなったのはこれが一因でもある。一応、帝黎以外からきた技術者もいるが、その殆どが優秀だが前所長と同じく性格に難があったりと、所長を任せるには不安要素の多い人間ばかり、どうしようかと頭を抱えていたところ目をつけたのが……。

「僕ですか……………」

「そう、篠ノ乃博士の弟でIS工学では研究所の誰よりも優秀。これ以上ない人選よ」

「ですけど……まだ十五の子供に所長になれて、それに前から居る人たちは反対するんじゃないんですか……………」

いきなり、子供が上司だと言われたら反発するんじゃないんですか？

「ああ、そのことなら問題は無いわ」

「へ？」

「だって、推薦したのは研究員たちなのよ」

「えええー！ー！？」

ど、どういうことだ！？

「この前優希君、みんなの前であの豚を殴って本気で怒ったでしょ。あれが決定打だったみたい。一部を除いてみんな優希君しかないって言うのよ」

「え、でも……」

僕しかないって言われても、そんな……。

「それにね……これは私個人の想いなんだけど」

え？果歩さんの想い？

「優希君は蘭堂じゃなくて篠ノ乃を選んだから、実質はただの他人繋がりは薄い……」

たしかにそうだ、束姉が僕の戸籍を痕跡を残さず改ざんしたため、僕は蘭堂と一切関わりは無いことになっている。

「だからね、優希君にあそこを任せることで、少しでも繋がりを強くしたいのよ……」

「・・・・・・・・でも、これは」

「ええ、わかってるわ。優希君をあそこの所長にするってことは必然的にあなたの技術を蘭堂の物にするってことになる・・・・・・・・卑怯だと思っけど。でもわかって、これだけのことをするほど私も、お父様も舞華も、優希君との繋がりが欲しいのよ」

「・・・・・・・・」

ずるいな・・・・・・・・そんなこと言われたら・・・・・・・・。

「ごめんなさいね、勝手なことを言って。返事はいつでもいいわ」

「・・・・・・・・わかりました」

「え？」

「その話、受けます」

頷くしかないじゃないか。

「ほ、本当！」

「はい、でもまずは、学園に連絡して出来るか聞かないと・・・・・・・・」

千冬さんか山田先生に相談すればいいかな？こっいつことは。

「任せて！そっちはこっちがやるわ、沢渡！！」

「じじじ」

うおっ！？い、いつに間に！

果歩さんが手をパンツと叩くと、いつの間にかスーツ姿の女性が立っていた。誰？

「IS学園にこの件の交渉を、いくら使ってもいいわ！最悪学園への援助を全てカットすると言ってもいいわ！」

ちょ！なんてことを！？

「了解しました。必ず成功させましょう」

「任せたわ！」

沢渡と呼ばれた女性は一礼をすると、忽然と姿を消した。忍者！？

「さて、これでいいわ……優希君、今日予定は？」

「へ？あ、ありませんけど……」

今日はみんな予定があると言ってたし。

「じゃあ、舞華も連れてこれからご飯でも食べに行きましょうか」

「は、はい……」

「さあ、行きましょうー！」

こんな感じで、圧倒されっぱなしだったけど僕は所長をやることになった。けど、あの後学園に帰ったら千冬さんに呼び出されこつてり絞られた。僕悪くないのに……。

ちなみに所長の件については蘭堂の交渉（という脅迫）によってすぐに承諾された。なんていうか……ごめんなさい。

で、所長になった僕の最初の仕事が決まった、欠陥機であった迅雷の改修であった。案自体は前に僕が言ったことをすればいいので、そこまで大変な仕事ではない。

と思っている時期が僕にもありました。

更なる問題が発生この迅雷、ゆつくりと調べていると、とんでもない事がわかった、バススロット（拡張領域）の容量がまったくといていいほど無いのだ。よくてインストールできるのはIS用の小拳銃ぐらいの酷い物であった。バススロット（拡張領域）の殆どは全て、迅雷の各所スラスターの制御にしか使っている。これを見た瞬間僕は叫んだよ……。

「こんなんできるかーーーーー!!!!!!」

もう、改修どころの騒ぎではない、組み直しだった。作り直しだった。はつきり言って今までテストしていてよく壊れなかったのが奇跡だと思ったよ。これで簡単だと思っていた、作業は最高難易度の仕事になった。

それからが大変だった、再設計、使えるパーツの選別、新しいパーツの製作。この日から研究所に夏休みが無くなった。僕もである問題を発見してから今日までずっとラボに籠りっぱなしだ。

一からの設計になったが雷光をベースにするのは変えず、雷光の

発展できるところを徹底的に改造することにした。これは苦肉の策である。

第三世代型の特殊機能については僕に考えがあったので、後に回すことにした。

僕は設計図を徹夜で仕上げ、二日目は設計に不備は無いかシミュレート。三日目は迅雷の基礎フレームの調整。四日目には必要なパーツの製作、特に迅雷の特徴であるスラスタの。

で、今日が組み立てである。はつきり言って戦場になっている、これまで完徹の研究員そして僕、早く終わらせて寝たいのでみんながんばっている。

「だからそこっ！パーツが違う！」

「す、すみません！」

「ぐへへ、ボルトちゃん、縛めて上げますからね〜」

「おい、遂に山田が壊れたぞ！」

「え、いつもだろ？」

「「「「あ、そうだった」「」「」」

山田さん、いつもあんな感じなんだ、優秀なんだけど……
・近寄らないようにしよう。

「所長！PIC制御伝達回路、接続しました！」

「こっちも、ハイパーセンサーの設置完了！」

よしっ！いいペースだ、これなら昼までに終わる！

「じゃあ次！脚部の回線やるよ！」

「「「「「はいつ」「」「」「」」

早く終わらせるんだ！そして、学園に帰って、寝るんだ！！

「お、終わった……」

「「「「「やっ……た」「」「」」」」」

お、終わった、ようやく終わったよ、すごい人の執念って……
……まさか五日間で新型ISを開発したなんて、ギネスに載るんじゃない？

まあ、完成したっていつでも本体だけで調整などの細々とした作業はこれらだ、でもよかった、シャルのためにとか暇つぶしで考えていたISの設計がまさかこんなところで役立つとはね。でもそのおかげでこんなに早く造ることができたんだよししよう。

「おじやまするわよ、ってもう完成したの！？」

「お邪魔します。わー！すごい完成してます！」

ラボの入り口が開くと果歩さんと舞華ちゃんが入ってきた。

「あれ？果歩さんに舞華ちゃん、どうしたんですか？」

今日来るって連絡は無かったはずだけど……。

「ええ、ちょっと様子見にね。でもほんとすごいわね……た

った五日で完成してるんだから」

「すごいです、優希お兄様！」

「そう言ってくれるのはうれしいですけど、まだ完成してませんよ。できたのは本体のみでまだ武装、調整、テスト、やることはいっぱいありますよ」

そう、出来たのは器、骨組みだけだ。本番はこれからだ。

「それでもすごいわよ」

「はは、ありがとうございます」

「でも、急ぎすぎなんじゃないの？コンペまではまだ時間はあるしゆっくりでいいのよ」

日本の第三世代型のコンペまではあと一年、時間はあるように思えるが短い。本来ISの開発は最短でも二年はかかると言われている。時間が足りないのだ、それに……。

「いえ、急がないといけませんよ。機体のテストに調整なんか入れると一年は短過ぎます。それに夏休みが終わると僕は学園もありますので、だからなるべく夏休みの間に少しでも進めたいんです」

僕が本腰を入れて開発できるのはこの夏休みの間だけだ、学園が始まってしまえばこちらを優先できない、それに……。

「それに、問題点がいくつもありますからね……」

「問題点？」

「はい。性能面に問題は無いのですが、武装……バスのスロット（拡張領域）に問題があるんですよ……」

迅雷の問題点でもあった部分はすこしは改善されたんだけどそれでも容量が少ないのだ、元々ベースである雷光自体もバススロット（拡張領域）が少ないという点があつてか、どうやっても最大容量が増えないのだ。そのまま使うとしたら問題ないのだが、このISのコンセプトである『複合装甲による機体性能の大幅向上』には足りないのだ。

「そうなの……」

「はい……複合装甲自体の設計はできてるんですけど。インストールするにはどうしても……」

まいったな、こっちの方面はあまり束姉に習ったこと無いんだよね……ちゃんと習っておけばよかった。……まあ、束姉は白式に刀一本だけ装備するような人だから、教えてはくれなかったと思うけど……。

「バススロット（拡張領域）の容量ね……しょうがないあれを受けるしかないかしら」

「え……」

あれ？受ける？何の話だ？

「優希君、私に考えがあるんだけど」

「はい？」

「デュノア社って知ってる？」

「はあ・・・とんでもないことになったな」

果歩さんの考え、それはデュノア社との共同開発だった。僕が開発に集中している間、デュノア社が蘭堂に共同開発を持ちかけてきたというのだ。

デュノア社はどこからか迅雷の開発失敗の報を聞きつけたらしく、チャンスとばかりに蘭堂にこの話を持ちかけてきた、確かに第三世代型の基礎情報がほしいデュノア社に、優秀な技術者が欲しい蘭堂、どちらも欲しい物が揃っており、手を組むには最適だ。

でも、技術者として僕が来たことで、手を組むメリットが無くなったため蘭堂はその話を断つたらしい。だけど、今回の問題が発覚したため結局手を組むこととなったというわけだ。

この話をしたらデュノア社は見事に喰らい着いてきた、これを見る限りどうやら第三世代型の開発に相当混乱してようだ、まあシャルに男装までさせてデータを盗んでこいって言うほどだもんね当たり前か・・・。

「でも、シャルにどう話そうかな」

シャルは父親、デュノア社の社長のことを嫌っているしな、話したらどんな反応をするか。

「はあ……」

「優希様、まもなく到着いたします」

「あ、はい」

ちなみに、今僕は蘭堂のリムジンに乗っている。あの後果歩さんに目の下に隈がついていると指摘され正直に五徹目ですと言ったらすぐ怒られた。そして明日、明後日は休めと言われ強制的に研究所を追い出され、リムジンに乘せられた。

まあ、さすがにこれ以上は限界だと思っていたので、ちょうどよかった。うん。

リムジンは通常車が入れれるゲートの前に止まった。そして運転手さん（大辻さんというらしい）が先に下りてドアを開け僕は降りる。

「ありがとう、大辻さん」

「いえ、ではまたお迎えにあがりますのでご連絡を」

そう言うのと、リムジンに乗り込み颯爽と去っていった。かつこいなあんなのが大人っていうのかな？

「さて、早く部屋に帰って寝よう……さすがに疲れた」

五日間連続で徹夜……さすがにきつかった、でもあと少しでようやく眠れる……ベットが僕を待っているんだ。

そう思うと必然的に歩く足が速くなる、今の僕の頭には睡眠のことしか考えてない。歩くこと十分寮へ入り自室に向かう、あと少し

だ！と最後の角を曲が部屋に一直線！と思っていたのだが……

「遅かったな、優希」

部屋の前に箒姉が恐ろしいオーラを出しながら待ち構えていた。

「ほ、箒姉！？」

「ずいぶんと遅かったじゃないか、寮を出て行ったのは確か五日前か？何をしていたんだ？」

や、やばい！あの笑顔はやばい！あれは本当に怒ってる顔だ！

「そ、その……ですね」

「いや、ここで話すのは邪魔になるな……私の部屋に行こう」

「へ？い、いや、僕の部屋で話せば……それに箒姉のルームメイトの邪魔になるんじゃない？」

「気にするな、それに同室のあいつは今は帰郷している」

……終わった。

「さあ、行くぞ」

「………はい」

箒姉に引きずられ部屋に向かう、こういつときの箒姉の説教は長いんだよね……。さよなら僕の睡眠時間。

結局姉の説教は日が昇る時間まで行われ、僕は六日間連続で徹夜することになったのであった。

第三十二話（後書き）

はい、三十二話でした。

優希君は一気に責任者になってしまいました（笑）蘭堂社の設定については少し無茶があったように思えますが、これはプロットの段階でそうだったのでご了承を。

夏休み編はこのように感じてオリジナルメインになっていくと思います。空気だったデュノア社の名前も出しましたし。シャル救済？イベントもあるかもしれません。

では、今回はこの辺で、次回の更新で。

第三十三話（前書き）

一話に纏め様としていたのに、なぜか二話分の長さに！？
三十三話です、どうぞ。

第三十三話

「買い物？」

「うん、そう」

僕は学食で少し早めの朝食をとりながらラウラにそう提案した。

朝食のメニューはマカロニサラダとトースト、そしてヨーグルトである。女の子のお腹にとってはちょうどいいくらいのメニューだ、でもラウラはもう一品。

「あ、朝からステーキって……胃がもたれない？」

「そうか？朝に一番食べるほうが効率がいいと教官が言っていたのだが、違うのか？」

織斑先生……あなたは男ですか……。まあ、下手な男よりも男らしいですけど。

「で、何時に行くのだ？」

「へ？」

「へ、ではない買い物は何時に行くのだ」

「んーとね、十時くらいに出ようかなって思っただけど、どうかな？一時間くらい街を見て、どこかよさそうなお店でランチしようよ」

その一時間で何とかラウラのパジャマを買わないと……。寝

るときに全裸はあまりよくないよ。

「そうか。では優希も誘っていい。うむ、私はいい亭主になるな」

「あ、あはは………。そうだね……」

そう言っけどラウラ、優希は渡さないよ。

「……………あう……」

ねむい……………。いまんじ……………？十時……………起きよ……………。

「ふあ……………うにゅ」

寝ぼけ眼を擦りながらシャワーに向かう。まずは眠気を取ろう……………。

「……………」

キュツキュツ、シャーーーーー！

「……………つめたっ！？」

「ふう、ようやく目が覚めたよ……………」

箒姉の長時間説教のせいでやっと眠れたのが五時だった、本当はもっと続きそうだったんだけど眠くてしょうがなく、箒姉に泣きついてようやく眠らせてもらったのだ。でも、起きたのが十時ってことは僕、五時間しか寝てないんだよね？いくらなんでも少なすぎない？まあ、いいけど。

「さて、今日はどうしよかな・・・ってあれ？」

あれ？おかしいな？携帯の日付が・・・・・・・・。まさか、僕・・・・・・・・丸一日寝てた？

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

き、気にしないでおこう！うん！

「って、あれ？メールだ誰からだろう？」

携帯にはメール着信のアイコンが出ていた。それを開いてみるとシャルからであった。

内容は短く

『優希、よかったら一緒に買い物行かない？』

シャルロット

と書かれていた。

買い物か・・・・・・・・たまにはいいかな？じゃあ、返信を・・・・つてあれ？メール着たの十時・・・・今は十一時・・・・・・・・どうしよう・・・・・・・・合流するか、じゃあ返信を・・・・・・・・よしっ、

これでいい。

じゃあ、用意していいとか。

「ラウラ、こんなのどう？」

「う、うむ……すこし……派手ではないか？」

僕はラウラに合う服を探していた。ラウラは制服と軍服しか持っていないって言うし、服には興味はないと女の子としてはだめな答えが返ってきたので、無理やりにも服屋に連れてきた。とりあえず店員さんにラウラに似合う服を選んでもらって試着させてみたんだけど、それからが驚いた。

ラウラが服に興味を持ち出した、もうそれからが楽しかった。ラウラは元もいいからどんな服を着せても似合う、だから僕もかなり熱が入る。

「いいんだよ！ラウラの髪にはこのくらいの色のほうが」

「そ、そうなのか？」

「うん！とても似合ってるよ！」

あゝ。もう！しおらしいラウラかわいいよ。次は………！

「ラウラ、今度はこんなのどう？」

「う、うむ……わかった着てよう」

今度はちょっと大人っぽいワンピースをチョイスしてみた、ラウラには絶対合うはずだ！さて今度はどんなのがいいかな？

さうて！今日はラウラを立派な女の子にするよ！

……ラウラに熱中するあまり僕は携帯が震えているのに気付かなかったのであった。

「うーん、連絡ないな………気付いてないのかも」

学園から出発し街に到着した僕は一人、歩いていた。シャルたちの行き先は同じクラスの小林さんが何故か知っていて教えてもらいその通り来たのだが、シャルたちから一向に連絡が来なく、どうしようか悩んでいるのであった。

「うーん………」

「ねえねえ？君一人？俺たちと遊ぼうよ？」

「ほえ？」

駅前のベンチに座りながら考えていると、いつの間にやら数名の男たち囲まれていた。

この男たち、ボツサボツサの痛んだ金髪やら茶髪にセンスの悪い大量のアクセサリを付けている、これが俗に言うチャラ男ってやつか。ていうかもしかして僕、ナンパされてるの？男なのに？

「暇？だったらさ、俺たちと一緒に遊ばない？」

「俺たち良い店知ってるんだ」

「よかつら行こうよ？な？」

「うわぁー、こんなセリフ言ってるのってまだいたんだ、絶滅危惧種なんじゃないの？」

「て、おい、なんか言えよ」

「えーと」

「お？何々？」

「残念ですけど、僕……」

「おっ！僕っ子か！いいねえ」

「しかもかわいいし！」

「うわっ！？気持ち悪い！男に可愛いって言われるとなんか気持ち悪い！しかもこの人たちさっきから僕の体ジロジロ見てるし……
……ここは早く言ってしまうおう。」

「本当にすみませんけど、僕は男ですよ」

「へえ、男なんだ？道理でカワ……あれ？」

「お、男？」

「はい」

「「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」」」

僕の発言で固まってしまったチャラ男たち、なんかめんどくさいからほおっておこう。

ベンチから立ち上がり、その場を後にする。どこ行こうかな？

「・・・・・・・・・・・・・・・・惚れたぜ」

「「「ちよつと待て!？」」」

ゾクッ!?

な、何だろう・・・・・・・・今すごい悪寒が・・・・・・・・。早くこの場から離れよう・・・・・・・・うん!

えへへ、買っちゃったよ。超合金ゲツ。ーロボ結構高かったけど、欲しかったんだよね。この前までは束姉と逃走生活ばかりだったから買えなかったんだよね。帰ったら早速飾ろう!そして改造しよう、完全変形合体するように!ISの技術を屈指すれば可能はずだ!

「お待たせしました、冷製クリームパスタです」

「あ、はい」

ちなみに僕は今、お洒落なオープンテラスのあるカフェで昼食をとろうとしていた。前にこのパスタが美味いとクラスの女子が言っていたので来てみたのだ。

「それじゃあ、いただきますーす」

フォークにパスタを巻きつけて一口。うん、美味しい！

「ん〜美味しい〜」

「どうすればいいのよ、まったく……………」

「んにゅ？」

パスタをチュルツと食べていると、どこからか暗い声が聞こえてきた。

どこからだ、少し見渡してみると発生源は隣からであった。二十代後半くらいでスーツ姿の女性がぐつと首を落とし落ち込んでいた。どうしたんだろう？

「はあ……………」

うう……………せつかく、美味しく食べてるのにそんなため息を聞かされると美味しくなくなるよ……………話を聞いてみるか……………僕もお人好しだな。

「あの？どうかしたんですか？」

「え？……………!？」

僕を見るなり女性は勢いよく立ち上がり、僕の手を握り。

「あなた！バイトしない!？」

「へ？」

「「優希？」」

「あれ？」

シャルにラウラ、奇遇だね。

「――！　あなたちも!？」

「「はい？」」

・・・だれか、説明して。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

・・・僕は何をやってるんだ。

あの後、僕たちはあの女性から事情を聞いた、どうやらあの女性
はカフェのチェーン店の店長だったらしく、今日本社から視察が来
る予定だったのだが・・・急にバイトの人が三人も辞めてしまい
（二人は駆け落ち、もう一人は傷心旅行に行ったらしい）大変困っ
ていたらしい、そこに僕とシャルたちが現れ、一日限りのアルバイト

トに誘ったというわけだ。女性の勢いに負けて頷いてしまったのだが、大変なことがわかった、この女性が勤めるカフェ、なんと『メイド&執事喫茶』だったのだ。

そして僕に渡された衣装は何故かメイド服、シャルは執事服だった。なにかの間違いだと思っただけでこれでもいいと言われ、しょうがなく着ているけど。なんで僕とシャルが反対なんだ、納得いかない！

あ、ちなみに店の名前は『@クルーズ』と言っらしい。

「すみませーん、注文いいですか？」

「はい、ただいま」

心の中では文句を言うけど、引き受けてしまったのでちゃんとやる、男に二言はない！

「アール 그레이とコーヒーをください」

「かしこまりました、お嬢様。では少々お待ちください」

ぺこりと頭を下げ、その場を離れる。接客はこんな感じでいいのだろうか？他の人のを手本にしているのだが……。店長に聞いても、あなたは自然体でと言われるし。

「デュノア君、四番テーブルに紅茶とコーヒーお願い」

「わかりました」

シャルは執事服でテキパキと働いている、元々男装していたからな、実に似合っている。シャルが対応している女性客も見とれてい

るし。でも執事服……いいなあ。交換してくれないかな？

「ねえ？君、名前教えてよ？」

あれ？ラウラが対応しているお客さん……あのときのチャラ男たちだ、顔を見られないようにしよう……なんか、いやな予感があるし。

「……………」

「何時に終わるの？一緒に……」

ダンッー！

お盆に載せていたお冷を叩きつけた。（垂直に置くような感じだったけど）そして冷たい声で。

「水だ。飲め」

「こ、個性的だね。もっと君のことをよく知りたくなっ……………」

今度はコーヒーを持ってきて威圧的に用がないなら帰れと遠まわしに言う。ラウラ、お客さんにそんな態度とっちゃだめでしょう。……まあ、なんかあのチャラ男たち嬉しそうだからいいか。

「優希ちゃん、これお願い」

「あ、は……………」

バンッー！

「全員、動くんじゃない！！」

ドアを壊すくらいの力で五人の男たちが雪崩れ込んできた。よく見るとこの男達、銃で武装していた。

「きゃあーーーーー!?」

「騒ぐんじゃない！静かにしろ！」

リーダ格の男が手に持った拳銃を叫んだ女性に向ける、すると女性は無言のまま固まる。

入ってきた男たちの格好はジャンパーとジーパン、それに目出し帽。うん、どこからどう見ても強盗だよね、抱えてるバックから紙幣も見えるし。

てか、漫画みたいな格好する強盗っていたんだ。

よく耳を澄ますと外からパトカーのサイレンの音も聞こえる、警察から逃げているところだったんだ。

「あー、犯人一味に告げる。君たちはすでに包囲されている。大人しく投降しなさい。繰り返し――」

「・・・・・・・・・・なんていうか」

「・・・・・・・・・・警察の対応も」

「・・・・・・・・・・古」

今喋った刑事さん絶対、古い刑事ドラマとかに憧れて刑事になったでしょ。てか、その対応、犯人たちを刺激して最悪の事態を招くかもしれないからやめたほうがいいよ。

「あ、兄貴！このままじゃ、俺たち全員……」

「うるたえんじゃね！俺たちには人質がいるんだ。強引な真似はできねえさ」

リーダー格の男がそう言うと、拳銃を天井に向けて一発撃った。

「きゃあーーーーー!？」

「大人しくしてな！俺たちの言うことを聞けば殺しはしねえよ。わかったな？」

威嚇に怯えきったお客さん達は顔を真つ青にしながらコクコクと頷く。

そしてリーダー格の男はそのまま、窓の外に向かって警察に何か言い、また発砲する。ちなみに僕は……。

「……………」

テーブルの下に隠れ、強盗たちに見つからないようにしていた。

（……………んー。反射的に隠れちゃったけど、そこまで危険性のあるような相手じゃなかったな、どうしよう？）

僕が隠れているテーブルは強盗たちの死角に位置するテーブルでみんなが店の一箇所に集められているのに一向に気付く気配はない。

（えーと、あいつらの装備は、グロック17が二丁にサブマシンガン……. UZIが一丁、それにアサルトライフル、M16とショットガン、ベリネM4か……. 強盗にしては随分と豪華な装備

だな……よしっ！)

『ラウラ、シャル、聞こえる？』

二人に、プライベート・チャンネル秘匿回線で呼びかける。

『優希！？どこにいるの！』

『お前の姿を見かけないのだが……』

『みんなの死角にある、テーブルの下に隠れてる。で、どうする？』

シャルとラウラは、僕の位置を確認して安堵したようだ、心配させちゃったな。

『んー、相手は素人だから制圧できそうだけど……』

『この状態では難しいな……』

今の二人は他の人質同様、店の一角に集められている。いきなり動けば狙われる可能性がある。じゃあ……。

『僕が一人か二人、無力化するしそのうちに残りを何とかして』

『ゆ、優希！？何言ってるの！？無理だよ！』

『そうだ、お前は何の訓練もしていないだろう！変なことを考えるな！』

二人は僕を必死に止めようとする、確かに僕は代表候補生と違っ

て国から訓練を義務付けられてないから危険だと思ってるだろうな、でも……。

『じゃあ、いくよ！後はよろしく！』

『『優希！？』』

通信を切り、出るタイミングを測る。狙いは一番後ろにいる男、グロックを持った男だ。店内を警戒している全員が、前を見るのを待つ。……今だ！

テーブルの下から飛び出すように男の背後に近づき、襟を掴み……。

「グハッ！？」

後ろに引つ張り、後頭部から床に叩きつけた。これで、確実に気絶するだろう。これで終わらない、今の音で強盗たちは僕の存在に気付いたけど、突然のことで反応が鈍る、その隙に次の男、M16を待った男に接近する。

男はようやく反応し銃を構えるが握りも構えも甘い、僕は銃身を掴み一瞬引き、相手の体勢を崩し、クリップを握っている手を力強く叩く、痛みで握る力を緩めた隙に一気に銃を奪いそのままストックで男の顔面を叩くと男はそのまま崩れるように倒れる、けどまだ意識はあるようだ。

「こ、このガキッ！？」

残った全員が銃を構え僕を狙うけど、僕はそのまま崩れ落ちそうになる男の身体を正面に向かせ首にチョークスリーパーのように手を回し、男の動きを止めると同時に盾にする。

「くっ！」

仲間を盾にされ、撃つか撃たないか判断が鈍り一瞬の隙が出来る。その隙をあの二人は見逃さない。

「なっ!？」

「ガアッ!？」

「グヘエッ!？」

ラウラはUZIを持った男に一気に接近し鳩尾を殴り一瞬で意識を刈り取り、シャルはリーダー格の男の拳銃を蹴り上げ、その勢いのままショットガンを持った男の肩にかかと落としを決め無力化。その威力のせいかな男の肩は外れたようだ。

「目標3、制圧完了……優希、無茶しすぎ！」

「目標4、完了だ……」

「ごめんごめん……よつと!」

「グエッ!……」

僕も、盾にしていた男の頸動脈を絞めて、完全に気絶させる。

「ふ、ふざけるなあっ!お、俺がつ、こんなガキどもにつ!」

最後に残ったリーダー格の男は先ほど蹴り上げられ、指が折れて

しまった手とは反対の腕で予備の拳銃を握り、僕たちに狙いを付ける。

でも、僕はすぐに男の前に行き拳銃のスライドを持ち、押してそのままスライドを外した。

「な!？」

「そんなんじゃ撃てませんね。では、おやすみなさい」

持っていたM16のストックを男の額に叩き込み気絶させた。

「はい、終わり」

「……もう！驚かせないでよ!」

「さすがに私も肝を冷やしたぞ……」

「ごめん……でもこうしたほうが効率がよかったし」

しばらくの間静かになっていた店内の人達は恐る恐る頭を上げ始める。

「お、終わった……?」

「た、助かったの……?」

「いったい何が……?」

倒れている犯人たちを見て少しずつ頭が働き始め、そして助かったと分かり歓喜の声を上げ始める。

この騒ぎを見て、何か変化があったのだと理解した警察たちが動き出した。そろそろ僕たちも退散したほうがいいか、こんな騒ぎに巻

き込まれたとなれば千冬さんになんて言われるか。特にシャルとラウラは代表候補生だし、問題はご法度だ。

僕たちはこの場を退散しようとした時……。

「捕まってムシヨ暮らしになるくらいなら、いつそ全部吹き飛ばしてやらあつ！」

あれ？結構強めに叩いたのにまだ気を失ってなかったか、しぶといな……。

てか、あのお腹に巻いてあるのってダイナマイト？うわ……。
・古っ。いろんな意味で古い。

「諦めが悪いな」

ラウラは足を振り上げ男の頭にかかと落としを決め（パンツ見えるよラウラ）、意識をもぎ取る。

そして僕は床に落ちている、グロックを二丁拾い上げ、二人に投げる。（ちゃんと安全装置はかけてある）

二人はそれを受け取り。

ダダダダダンッ！

「「チェック・メイト」」

トリガーを五回引き、的確に起爆装置と爆薬の信管、そして導線『だけ』を撃ち抜いた。

「まだやる？」

「次はその腕を吹き飛ばす」

「人間、諦めが肝心ですよ」

僕もM16を構え、威嚇しておく。

「す、すみません！も、もう、しませんで、い、いの、命だけはお助けっ……」

僕たちは男の言葉を最後まで聞かず、店を飛び出した！これ以上いたら危ないしね。

「ところで優希？いったいどこであんな技術身に付けたの？」

「そうだな、どこかの軍隊格闘技に近い動きをしていたが……」

「

「ん？あれ？あれはね、東姉と逃亡していたとき、助けた傭兵さんに教えてもらったんだ」

「傭兵……」

懐かしいな、あの人は何してるんだろう？また、ダンボールでも被ってるのか？

「で、なにを習ったのだ？」

「えーとCCCっていう格闘技なんだけど、少ししか教えてもらえ

なかったからほとんど我流だね」

「へえー」

「我流であの動きか・・・さすが私の嫁だな」

はいはい、もう突っ込みませんよー。

「で、次はどこに行くの？」

「んーと、そろそろなんだけど・・・あつた！」

シャルが辺りを見渡し一点を指差した、そこは・・・・・・・・。

「え!？」

「優希、ラウラ、ニヤーって言って、ニヤーって」

「・・・・にや、ニヤー／／／／／」

「・・・・にやー」

あの時シャルが指差したお店、それはきぐるみパジャマなどの少し変な物を扱っているファンシーショップであった。

どうやら、のほほんさんに進められて来たらしい。確かにあの入いつもこんな感じのパジャマ着てたよな、水着もそうだったし。

で、シャルはラウラに黒猫のパジャマ、そして自分用の白猫パジャマを買ったのだが、何故か僕にまで買っていたアメリカンショートヘアの柄のパジャマを、僕はいいのに。

買い物も終了し寮に戻ってきたら早速着てくれとせがまれ着てみたんだけど……。

「二人とも、もう一回言って!」

「にゃ、ニャア」

「……シャルロット、なぜ私まで」

シャルたちの部屋でなぜか僕とラウラの撮影会が行われていた。カメラマンはシャルで。

「いいじゃん、可愛いし」

そう言いながらラウラに抱きつくシャル、パジャマのせいか子猫がじゃれあってるようにしか見えないな。

「わ、私が可愛いなど!?!」

シャル凄く嬉しそうだな、どれ写真に一枚。
パシャ!

「な、優希撮るな!?!」

「えーいいじゃん。優希、もう一枚お願い」

「はーい」

パシヤッ！

「だ、だから撮るな！！こんなもの残ったら末代までの恥だ！」

「えー、そんなことないよラウラ、可愛いよ」

実際ラウラは小柄で猫っぽいし、銀髪が黒猫のパジャマにマッチしてよく似合う。

「そ、そうか………だったら、いいだろう」

ラウラは照れているのか、もじもじしながらソッポを向く。ほんと猫っぽいな。

コンコン

ん？誰だろ？

「はい、どうぞ」

シャルは女子同士特有のフランクさで答え、来客を部屋に招いた？

「おーい、優希いるか？」

あれ、一夏だ、どうしたんだろ？

「い、一夏！？」

「………！？」

まさか、一夏が来るとは思わなかったので驚いている。まあ、パ

ジャマ姿を男に見られるのはあまりいい思いはないだろう。

「お、猫が三匹。凄いな」

「そう？で、どうしたの？」

「あー、実はな白式でわからない所があつてな、教えて欲しいんだよ」

白式の？どこだろう、それだったら一回部屋に戻って端末で調べないと。

「うん、いいよ。じゃあ、部屋に戻ろうか」

「お、いいのが優希。そうだ、なんか街歩いてたらこれもらつてな、二人とも食べてくれよ」

「「「！？」」」

そう言つて一夏が取り出したのは@クルーズのマークが書かれた袋だった。ま、まさか一夏@クルーズにいたの？

「いや、なんか@クルーズって店に行ったら、マスコミやら警察が集まつててな何だろうて見に行つてみるとバイタリティーあふれてそんな店長さんが巻き込まれたお客さんにクッキー配つててな、何で俺にも渡されてな・・・変な話だろ」

「へ、へえ・・・」

「そ、そうなのか・・・」

「で、事件って・・・？」

それって確実に僕たちのやつだよね、そこまでの騒ぎになったんだ。

「どうやら、銀行強盗だったらしいぞ、物騒だなよなー」

「そ、そうだねー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「取材を受けてる人の話を聞いたんだけど、なんでももの凄い美少女メイド二人と美少年執事が事件を解決したらしいぜ。映画とかドラマの世界だよな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

い、言えない、それやったの僕たちですとは絶対に言えない。ここは話を逸らそう。

「い、一夏、白式のことがあるんじゃないの？」

「お、そうだったな、優希教えてくれ」

「う、うん。じゃ、じゃあシャル、ラウラ、僕行くね」

「う、うん、また明日ね」

「あ、ああ」

「じゃ、じゃあ、早く行こう一夏」

「ん？お、おう」

一夏の背を押して部屋から出る、少し強引だったけどこうでもないとかクルーズのはなしが続きそうだったからこれでいい。

「で、どこが解らないの？」

「えーとな、スラスター出力の調整が……」

こんな感じで、僕は白式の調整に夕食の時間まで付き合っていた。で、終わったら……。

「馬鹿野郎！スーパーロボット言えばマ○ンガーZだろ！」

「いーや！ゲッ。ーロボだよ！だって変形だよ、合体だよ！」

一夏とスーパーロボットについて議論していた。

「はっ！あんな変な顔のロボットのどこがいいんだ！ゲッ。ーにはロケットパンチがないじゃないか！」

「ロケットパンチなんて非効率的な武装のどこがいいの、男だったらドリルでしょ！ビームでしょ！」

。ツターの素晴らしさが理解でないなんて、確かにマジン。ーは初代スーパーロボットだけどやはりゲ○ターの方がいい！

このスーパーロボット議論は千冬さんが怒鳴り込んでくるまで続いたのであった。

ちなみに千冬さんはダン。ーガ派らしい。なかなかいいチョイスですね。

こんな感じで僕の休暇は幕を閉じた、また明日から研究所だ。がんばろう！

第三十三話（後書き）

ゲッターロボ好きですよ、作者。

すみません、ここ最近、新ゲッターのはまってしまいネタとして出
してしまいました。・・・・マジンガーも好きですよ。

優希のメイド服、そしてCQCもどきの描写がとても難しかったで
す、作者の文才ではあれが限界でした。（ガクッ）

CQCを教えた人については皆様のご想像にお任せします。・・・・

・蛇ではありませんよ？

次回からまたIS開発記になりますので、しばらくはオリジナルが
続くと思います。

では、皆様、次回の更新で。

第三十四話（前書き）

すみません、今回は少し短いです。

第三十四話

「所長、ここはどうでしょうか？」

「そこは、センサーとリンクするようにしてください」

「はい」

二日の休日（一日は全て睡眠に注ぎ込んだ）が終わり僕はまた蘭堂の研究所に来ていた。目的はもちろん迅雷の完成、特に問題も起きず製作は順調そのものであった。

「優希君！スラスターの推力はマニュアルどおりでよかったのかしら？」

「マニュアルよりも3パーセント上げてください」

「了解！」

今日やっているのは迅雷の複合装甲、正確には攻防機動すべてを向上させるためのパッケージだ。まだ、デュノア社との正式な技術交換を行っていないのでインストールは出来ないけど。そのまま装着するだけなら出来るので、もう製作を開始することにした。

「しよちよー、こっちできましたー！」

「そうですか。じゃあ、別のところを手伝ってください」

「わかりましたー」

うん、まだ未熟だった研究員の人たちも教えればすぐに吸収して自分のものにするから作業が楽になって助かるよ。

「よし。あとはこれを繋いで・・・出来た」

うん、これで外部から直接装着したとしても反応が鈍くはならないはずだ。

「じゃあ、僕はいったん迅雷のほうを見に行ってきますので、ここはよろしく願います」

「了解です」「」

後、残っているところだったらみんなに任せていいだろう。僕は作業を中断し迅雷のあるラボに向かう。

迅雷の完成率は八割、後もう少しだ。でも、僕が休んでいるときにも作業を続けていたなんて思ってもいなかったな。

僕が果歩さんに二日間強制的に休まされた間、他の研究員の人たちは僕以外じゃできないところ以外の箇所の作業を続けていたのだ、しかもチェックをいれるとまったくの問題なし。寝る間も惜しんで作業をしていてくれたことちょっぴり感動したのは内緒だ。

「失礼しまー・・・」

「ええい、放せっ！」

「やめて下さい、そんなことをしたら！」

「これだけでは、インパクトが足りん！もっと浪漫を追求しなければ

ば！」

あれ？何やってるんだ？なんか変なパーツ（ISの腕部かな？）を持った男を研究員たちが総出で止めていた。

「えーと、何してんですか？」

「「「所長！」「」」

「か、加田博士を止めてください！博士が勝手に変なパーツ組み込みもうとしてるんです！」

パーツ？ってあの手に持っているやつを……どういうことだ？

「何をやっているんです加田博士？迅雷にはそんなパーツを組み込む予定なんてなかったはずですが」

再設計した迅雷には前の失敗を繰り返さないために余計なパーツを入れないようにしているのだが、この人はいったい何をやっているのだ。

「ふんっ！若造か……………」

「…………加田博士、その手に持っているのは何ですか？教えてください」

今度は口調を強めて言う。

「ふっ、貴様の設計した機体はつまらんなのでな、私が少し手を加え

てやろうと思ったのだよ」

「手を・・・？結構です、迅雷にはこれ以上手を加える予定はありませんし、これ以上手を加えるとバランスを崩し性能が低下する可能性があります。ですから何もしないでください」

はつきり言えば迷惑でしかない、せつかくここまできたのに今更に出てきて、余計な物を入れないで欲しい。邪魔だ。

「・・・・・・・・後悔するなよ、小僧」

「後悔もしませんし、そんな物を入れて後悔もしたくもありません」

「・・・・・・・・っ！ふんっ！！」

加田博士は僕の発言に腹を立て、早足でラボから出って行った。

「・・・・・・・・ふう」

はぁ・・・・・・・・。年上の人にあんなこと言うのは緊張するな・・・・・・・・でも、あんなよくわからないパーツを付けられたらどうなることか・・・・・・・・。

「あ、ありがとうございます所長」

「あの人、一度言うとか中々引き下がらないんですよ」

「しかも実績があるから、言い返せなくて」

確かに、あの人、加田博士は第一世代の開発で猛威を振るった人だからな、みんな言い返せないか。

「で、あの人は何をやろうとしてたんですか？」

ISの腕部のパーツだったのはわかってるんだけど。

「えーと、その……」

「ロケットパンチの……パーツらしいです」

「……はい？」

ろ、ロケットパンチ？

「博士が言うには迅雷にはインパクトと浪漫が足りないと……」

」

そ、そんな理由でロケットパンチ付けようとしてたの！？

「と、止めてよかった……」

ロケットパンチって何であんな非効率な物を……武装を掴む重要なパーツを飛ばす上、狙われやすい、さらには使っている間は手を使えないっていう武装を……。

二次元では使ってもいいと思うけど、現実ではやめて欲しいよ。それにロケットパンチっていうのは圧倒的質量を飛ばし叩き付ける物なんだから、ISの腕部の質量ではシールドエネルギーを削るのも難しいよ。

まあ、もうわかったからあの人の作った物は使わないようにしよう。

「さて、それじゃあ気を取り直して迅雷の完成を急ぎましょう」

「「「はいつ！」「」「」

さーで、やるか！

「ねえ、優希君？聞きたいことがあるんだけど」

「何ですか？果歩さん。あ、三番取ってください」

迅雷の仕上げに取り掛かろうとした時、果歩さんが視察しにきた。舞華ちゃんは生徒会の仕事があるから来てないらしい。

「迅雷の複合装甲のシステムはいいアイデアだと思うのだけど、肝心の第三世代型の特殊機能はどうなっているの？」

果歩さんが懸念するのもわかる第三世代型と第二世代型の違い、イメージ・インターフェイスを使用した特殊システムを使用しているか否かだ。

この特殊システムが無かった場合、第三世代型として開発していても第二世代型と判別されてしまうのだ。

「大丈夫です。ちゃんと用意していますよ」

「そ、そうなの？」

「はい」

僕が迅雷の再設計で一番悩んだ物、それがこれだ。これのさじ加減でこの機体の評価は変わってしまうのだ。

「で、どんな物なの？」

ラボにいる全員が聞き耳を立てているのがわかる、まあしょうがないが特殊システムはどれも新技術だからね技術者としては興味が無いわけが無い。

「迅雷の特殊システムはこれです」

僕は空中投影型のディスプレイを出し、データを映し出す。

「僕が考えたシステムはシールドバリアの操作技術です」

「シールドバリアの操作？」

「はい、ISのシールドバリアは機体全体に球状に張られている物です」

ディスプレイを操作して説明のためにシールドバリアを目視化したISのCGを映し出した。

「この球体状のバリア、案外面積も大きく被弾率も高いんです」

僕も当たってないと思っていたのにシールドエネルギーが減っていたということがよくあった。それに常時この範囲のシールドバリア常時張っていると燃費も悪い。

「だから今回僕が考えたのは、シールドバリアをこのようにします」

ディスプレイのCGが変わり球状のシールドバリアがISに膜状に張られていく。

「これで被弾率の低下、及び第三世代特有の燃費の悪さも改善されます」

「あの、でもこれはあまり目立つような技術ではないような……」

研究員の一人が手を挙げ、そう発言する。まあ、そう言われてもしようがないよね、でもこのシステムのメインはそこではない。

「今言ったのは、システムの運用方法の一つです。このシステム本来の使用方法はこれです」

僕が操作すると、ディスプレイに新たな画像と情報が映し出された。そこにはシステムの運用方法が書かれていた。

「こ、これは！」

「攻防一体型のエネルギー操作システム『A D Sシステム』^{エディス}です」

『A D Sシステム』^{エディス} 本来は防御に回されるシールドエネルギーを効率的に使用することで、戦闘の持続性、及び戦力の向上を図るシステムである。

防御の時は被弾箇所に最小限のシールド面積で攻撃を防ぐ。そして攻撃の時は武装にシールドエネルギー纏わせ、相手のシールドエネルギーと相殺し直撃させ絶対防御を発動させる。

まあ、簡単に言えば白式の零落白夜を簡易的に、かつ燃費を良く

したのが『A D Sシステム』だ。^{エディス}零落白夜よりも攻撃力は低いけど
戦闘では十分通用するはずだ。

「す、凄いわね、こんな技術まだどこも採用されてなんかされてないわ」

「でも、この制御には大容量の拡張領域^{バススロット}が必要なんです、そのせいで……」

「武装が載せられないと……」

まあ、この件については運良くデュノア社との共同開発をするってことになったから問題は解決するだろう。デュノア社のIS、ラファールリヴァイブは拡張領域^{バススロット}の容量、そして読み込み速度の技術についてはどの企業に比べてトップクラスだ、それはシャルのリヴァイブカスタム？を見ていればわかることだ。

「……ですが、いくら燃費を良くしたといっても、それじゃあすぐにエネルギーが尽きるんじゃない？」

おお、気づいた人もいるか。

「……確かにこのままだと、燃費が悪い機体になってしまいます。そこで、これを使います」

僕はポケットから一つの結晶を取り出す。

「それは？」

「これは、僕がとある物の開発段階に偶然できた物です」

まさか、これを出すとは思わなかった。これはサイコフレームを作っている時に失敗したものから偶然できた物だ複製はできないし量産もできない、だがこれには凄い特性があるのだ。

「この結晶は、少し特殊でISのコアから発生するエネルギーに反応して、この石自身からもエネルギーを発するんです」

「……!?」「……」

これで、気づいた人もいるだろう。こんな小さな結晶体からエネルギーが発生する……。まるでISのコアみたいだということ。

「そ、それって……。ISのコアなんじゃ!？」

「いえ、それは違います。この結晶が生産するエネルギー総量はコアなんかよりも少ないです、それにこの結晶単体ではエネルギーを発生もしません」

いわゆるコアの劣化版だ。でも、これにも使い道はある。

「で、これを迅雷に組み込みます。そうすればA D S^{エディス}で使う分のエネルギーを緩和することができて、結果的には燃費もよくなります」

って、あら?この部屋にいた全員は僕の話についていけず全員が固まってしまっていた。まあ、しょうがないか、束姉以外は作れないと言われているコアの劣化版みたいな物も突然出されて、しかも使うというんだから。

でも、迅雷の問題を解決するにはこれが一番いい方法なのだと思います

ったのだ。

「じゃあ、そろそろ作業を再開しましょうか」

「え？ああ、ごめんなさいね、邪魔しちゃって」

「いいですよ休憩にもなりましたし。じゃあ、始めましょう！」

「」「」「はいつ！」「」「」

僕はパンツと手を叩いて研究員の人たちに指示を出す。

「ねえ？あとどれくらいで完成するのかしら？」

「んーと……調整を含めて後三時間で出来ると思います。出来たらパイロット待ちです」

「そう、じゃあ明日は舞華も連れてくるわね」

「はい、お願いします」

さてと、それじゃあ完成させますか！

そして三時間後、装甲と配線の全てを組み終えて、コアと結晶を設置して迅雷は完成したのだった。

第三十四話（後書き）

はい、なんかいつの間にやら優希が技術チートになっているような・
・・・・。

ま、まあ、これもプロットのうちに入っていました。・・・本当ですよ。

ついにオリジナルIS迅雷が完成しました。優希が作った結晶のモデルはマクロスFのフォルドクォーツです。

これからしばらく完全オリジナル路線になりますので書くのが大変です。

では、次回の更新で。

第三十五話（前書き）

遅くなって申し訳ありません。

某アトリエゲームをしていたら書くのが遅くなってしまつて。

三十五話どうぞ。

誤字、修正いたしました。

第三十五話

迅雷が完成した日から一週間が経った。完成した翌日に舞華ちゃんにあわせたフィッティング、パーソナライズを行い、起動テストを開始した。

元々舞華ちゃんが迅雷、雷光系のISとの相性がいいせいか、テストを楽々とこなし。迅雷のほうも特にこれといった不具合やトラブルも起こさず、順調そのものだった。

そしてつい先日、フランスからデュノア社のIS開発部門の技術者達がやってきた。彼らは拡張領域技術パススロットを僕達に提供し、僕等は第三世代型の情報を彼らに提供、レクチャーをした。

渡した情報の価値が釣り合わないように思えるが、第三世代型の情報を渡したとは言っても結局は基礎だ、イメージインターフェイスについては自分達で考えろと言うことだ。しかし、これがあるだけ開発期間は大幅に短縮されるはずだ、デュノア社の足りない物は第二世代型から集めた情報からの第三世代型の基礎だ、対価としては十分だ。

で、技術交換の最終日。予定に組まれてたとおり、迅雷の戦闘力を測るための模擬戦が行われることになった。

模擬戦の相手の情報は教えられてなく、誰が来るのかというのは一切わからず、当日にならなければわからない状態だった、そして当日にやってきたのは………。

シャルだった。

………考えればわかることだね。デュノア社が用意するパイロットといえばシャルの可能性が一番高いってこと………。

でも、シャルが相手か……。舞華ちゃんは腕もあつて優秀なんだけど、まだ経験が少ないから……。勝てるかどうか……。まあ、たとえ負けたとしても、それが舞華ちゃんの糧になるんだがんばってもらおう。

『それでは両者、準備はいいですか？』

「はい、問題ありません」

「こつちもありません」

どちらも準備が終わり、第一演習場の中央まで移動する。ここで僕は舞華ちゃんに通信を入れる。

『舞華ちゃん、今回はテストは模擬戦、相手はフランスの代表候補生のシャルロット・デュノア、会ったことあるよね？彼女は強いからがんばってね』

「はいっ！がんばります。優希お兄様！」

緊張してるかな？と思っていたけどそんなことも無く、僕の通信に元気に答える舞華ちゃん、どうやら杞憂だったようだ。

ちなみに今回の迅雷の装備は複合装甲『旋風』を機体に直接装着している。『旋風』は迅雷のバランスを崩さずに性能を上げることの出来る装備だ。まあ、特徴が無いのが特徴の使いやすい装備だ。

他にも火力・装甲重視の『台風』と加速力・機動力重視の『突風』があるがそれはまた今度だ。

「ふう……。間に合ったようね」

「果歩さん」

演習場の管制室のドアが開くと額に少し汗をかいた果歩さんが入ってきた。

「もう少しで始まりますよ」

「ええ、よかったわ」

『開始まで3・2・1・0・・・模擬戦開始!』

オペレーターの合図とともに両者、勢いよく飛び出し戦闘が始まった。

今朝突然、あの人・・・・・・父親から連絡が入った。僕が男装をやめて女の子として学園を通うと宣言してからずっと連絡が無かったのに。

内容は蘭堂の新型と模擬戦をしろとのことだった、本当は断つてすぐにでも通信を切ろうと思っていたのだが、フランス政府からの指示でもあると言われたので断れるわけが無かった。それだけ言い、あの人はすぐに通信を切った。はあ・・・・・・行きたくないな・・・・・・あれ?でも蘭堂ということは優希もいるんだよね?・・・・・・よしっ!やる気出てきた!

と、現金なことを思いながら、蘭堂の研究所に向かった僕だった。

なのに……、優希と全然話せない！来て早々模擬戦用の調整をするといわれてうちの技術者たちに拉致られるし、優希は舞華ちゃんの方に行っちゃったし！うう……。。

もういいよ！早く終わらせて、優希と話すんだ！新型か第三世代型かなんか知らないけど、速攻で勝って終わらせる！

オペレーターがカウントを始める。たしかこう言っただけ？えーと……。見せてもらうか、蘭堂の新型の性能とやらを……。だっけ？

『・0……。模擬戦開始！』

さあ、行くよ！

「始まった……。」

開始の合図と同時に両者は飛び出し、相手に接近する。シャルは得意の高速切替^{ラビット・スイッチ}でアサルトカノンを瞬時に展開し舞華ちゃんに撃った。シャルの高速切替^{ラビット・スイッチ}のことを知らなかった舞華ちゃんは驚き一瞬隙が出来てしまった。シャルの放った弾丸はそのまま舞華ちゃんに当たるかと思われたが、当たらなかった。

迅雷の背部に付いていたスラスタが腰部へとスライドし一気に噴射、上昇し回避した。

これが雷光の特徴である、スラスタの移動によるトリッキーな機動だ。これがあったからこそモンドグロッソで好成績を残せたのだ。

実際、シャルは回避は出来ないと思っていたのに、回避されてし

まっで一瞬だが動きが止まってしまっている、それが隙になってしまった。

『いきますっ！！』

『え、くっ！？』

舞華ちゃんはガンポット《雷鳴》を展開し放った、反応が遅れてしまったシャルは慌てて避けたが何発か受けてしまった。

しかも、ディスプレイに映されている迅雷のパラメーターを見る限りじゃ『ADS』^{エディス}も発動している、ということは……。

『え……！な、なんでこんなにシールドが減ってるの！？少ししか当たってないのに！』

うん、ちゃんと機能してるみたいだね。簡易といっても白式の零落白夜と同じ機能なんだ、しかもそれが弾丸の一発一発に……よく考えれば、結構恐ろしい物だね。

「ねえ、優希君」

「はい、何でしょうか？」

「ADSの凄さはわかったんだけど、いくらなんでもこれは誤魔化せないんじゃないの？」

果歩さんが迅雷のパラメーターの映った小型ディスプレイの一角を指差す、そこには迅雷のシールドエネルギー残量が書かれていて、迅雷のエネルギーは5しか減っていない。

「こんな強力なシステムなのに燃費が良すぎるわ」

うん、確かにそうだ、あの結晶のおかげで燃費はほぼゼロということになってしまった。

「それにあの結晶、複製が出来ないのでしょ？そんなんじゃ量産することになったら出来ないんじゃないの？」

「ああ、大丈夫ですよ。量産化することになった時のための手は考えてますから」

「え？そうなの・・・」

「はい」

量産化のことはちゃんと考えてますよ。じゃなきゃ量産できないパーツなんて使わないですよ。

「・・・どうするの？」

「とりあえずADSの出力を下げます、そうすれば燃費も良くなります。それと結晶の変わりに大容量のエネルギーコンデンサーを積みます、そうすれば少し性能と稼働時間を下がるだけで済みますよ」

まあ、コンデンサーのことはこれからなんだけど。

「・・・心配する必要も無かったわけね。それじゃあ、なんであの迅雷には結晶を使ったの？」

「理由は二つあります。一つは製作時間、コンデンサーを一から作

るとなるとまた時間がかかってしまいますので。そして、二つ目は・
・・・・・」

「二つ目は・・・？」

少し溜めて。

「従妹の舞華ちゃんへのプレゼントです」

僕も束姉のと言えないな、紅椿までとはいかないけど結構なスベックの機体作っちゃったし。

「・・・・・はあ、あまりやり過ぎないようにね」

「はい」

と、僕は軽く返事をして模擬戦の方に集中する。
おっ、シャルが巻き返し始めたか。

くっ！油断してた、迅雷の特殊な機動のことも忘れてたのもあるし舞華ちゃんの腕も中々だ！さすが日本の代表候補生だけある。
通常からは考えられない機動での回避で僕の攻撃は外れ、さらに強力な謎の攻撃で僕は翻弄され防戦一方になっていた。けど、よし・
・・・・ようやく頭が冷えてきたな。

さっきは苛立ちで単調な動きになっちゃったけど、これからは反撃させてもらおうよ！

「そこっ！」

「きゃっ!？」

ガラムからレイン・オブ・サタデイに変えて撃つ、広範囲に広がった散弾が彼女の迅雷にヒットした、特殊な回避行動だけど面攻撃をすれば当たる!その代わりダメージは低いけどね。

それでも怯んだ彼女に僕は瞬間加速で一気に接近してブレット・スライサーで斬りかかる。

「っ!？」

「逃がさないよ!」

振り下ろしたブレット・スライサーはガンポットを盾にして防がれてしまった、でも砲身の部分に深く刺さっているのでこれでもう使えないはずだ。

盾にしたガンポットを捨てて僕から離れようとする舞華ちゃんだけど、逃がさないよ。

ミラージュ・デ・デザート

僕は砂漠の逃げ水で相手を翻弄しながら少しずつだけシールドエネルギーを減らしていくんだけど、なにこれ?全然減る気配がないんだけど!

センサーには着弾する部分だけにシールドバリアが集まってるように見えて、ほとんど攻撃が通らないし通ったとしても追加装甲のせいでダメージにならないし。

優希なんてものを造ってくれたの………これじゃあ、勝てるかな?弾薬にも限りがあるし。………あれを使うか。

「ええいつ!!」

「あつ!?!」

舞華ちゃんは一瞬の隙を付いて離脱してしまった。追おうとしても迅雷とリヴァイブカスタムとじゃ速度差があるから追わない。

離脱した舞華ちゃんはある一定の距離を取り、両肩に付いた小型のコンテナを開いた。何だろう、予備の武装かな？

コンテナの中には太目のマジックペンサイズの筒がぎっしりと入っていた。ま、まさか……!?!?

「アタアーークッ!!」

やっぱりーーー!!?

コンテナから放たれた筒の正体、それはマイクロミサイルだった。実用化している国もあるがそれでもここまで小さいのは見たことが無い、しかも避けようとしたところ追ってくるのでホーミング機能までもある……。ヴェントを両手に展開し打ち落とす、けど数が多い間に合わない!

スドーーーンッ!!

「や、やった?」

「まだだよっ!」

「え?」

爆炎を切り裂いて動きが止まっている迅雷へと一気に接近する。危なかった……。とっさにシールドの装甲をパージしてデコイにして正解だった。あのマイクロミサイルあんな小さいのにこん

なに威力があるなんて。でも、動きが止まった今が絶好のチャンス、終わらせる！

僕は剥き出しになった灰色の鱗殻グレー・スケールを突き出し69口径のパイルバンカーを打ち出す。

ズガンッ！

打ち出したバンカーは迅雷にヒットするが例のシールドバリアに拒まれて大して効いていない、ただエネルギーは減っているはずだ。攻撃の手は緩めない！

ズガンッ！ズガンッ！ズガンッ！

立て続けに三射、灰色の鱗殻グレー・スケールの太いバンカーを迅雷に叩きつける。さすがにこの攻撃にはあのシールドバリアは耐え切れず、バンカーは装甲に突き刺さる。

「くっ！？まだ！」

舞華ちゃんは左腕に付けられたシールドの裏からナイフを取り出して、僕へと突き立てる。

ナイフはシールドバリアを軽々と突き破り背部のスラスタの一つに刺さる。でも、気にしない！そのままバンカーを打ち続ける！

「あああああっ！！！」

ズガンッ！ズガンッ！

このまま、灰色の鱗殻グレー・スケールの弾が尽きるまで打ち続ける、連射されるパイルバンカーで削られていくシールドバリア、こちらも突き刺さったナイフのせいなのかじわじわとシールドエネルギーが減っている、根競べだ。

ズガンッ！

こっちのシールドエネルギーは五十を切った、あちらはどうかわからない。

ズガンッ！

次がラスト、これで決まる！

「ああああー！ーっ！！」

ズガンッ！！

ピーーーーーー！！

『両者のシールドエネルギーが同時に0となりました、よってこの模擬戦はドローといたします』

ふう……ドローか、負けではなかったからいいかな。

でも疲れたな……早く優希分を補給したい……。

まさかドローになるとは思わなかった。てかシャル無茶するな……
……攻撃されてるのに灰色の鱗殻グレー・スケールを打ち続けるなんて。

でも舞華ちゃんも良くやったよ、シャル相手に引き分けに持ち込めるなんて。まあ、次に戦ったら難しいかもしれないけどね、迅雷のADSは初見殺しだし。次に戦う時にはシャルも対策を立てるだろうし。

でも、やっぱり灰色の鱗殻グレー・スケールレベルの攻撃になると防ぎきれないか……改善は出来るかな？

さて、収容も終わったし迅雷のチェックをしなきゃ、今日も帰れ

るかな？

追い出された。

デュノア社の技術者たちを見送り、今日の模擬戦のデータを纏めようとラボに戻るうとしたら。果歩さんに今日はもう帰っていいよと言われて、シャルとともに研究所から追い出されてしまった。いいのかな？データ纏めなくて……？

「でも、凄かったよ迅雷。優希が作り直したんでしょ？」

「うん、フレームと使えそうなパーツ以外は全部僕が設計しなおした……さすがに疲れたけど」

僕とシャルは大辻さんの運転するリムジンの中で今日の感想などを話し合っていた。

「そ、そこまで？……あれ？じゃあ、この前の数日帰ってこなかったのって……」

「うん、急ピッチで迅雷を造ってたの」

あれはさすがにしんどかったな、五徹だったし。

「は、ははは……凄いな。でも、無茶はしちゃだめだよ優希」

「はい」

「……でも、知らなかったな。蘭堂とデュノアが共同開

発しているなんて知らなかったな」

「……共同開発というより技術交換だけだね。あつちには第三世代型のノウハウ、こつちは拡張容量バススロットの技術だしね」

こつちもあつちもISはいじらせてないしね。

「そうなんだ」

「大丈夫だよ、迅雷のデータは盗まれてないよ」

「……そう、よかった、あの人のことだから、また……」

一応、僕もそのことは懸念してたからね、前例があるし。データバンクのプロテクトのレベルを上げといた。束姉位でしか解除できないようなレベルに。

「……」

シャルは俯いたままだ、やっぱり嫌っているとはいえ父親が迷惑をかけるのに罪悪感があるのか……どうしようか……あつ。

「大辻さん、ここで降ろしてください」

「よろしいのですか？学園までお送りしますか？」

「はい、少し買い物しよう。電車もありますし」

ちょうどリムジンは街に入っただので降ろしてもらうことにした。

シャルも気分転換が必要だろう。

「わかりました」

大辻さんはリムジンを手早く路肩に止めて、ドアを開いて僕たちを降ろし一礼をして去っていった。

「……………優希？」

「シャル、お腹空かない？」

「え？」

今は二時、昼食も摂っていなかったから僕はお腹が空いている、シャルも食べてないからそうだろう。

「う、うん……そういえば、そうだね」

ほらね。

「この近くにいい店があるって聞いたことがあるんだ、行かない？」

「で、でも……………」

「僕が奢るから」

「……………わかったよ、行こう。優希の奢りだったら高いの頼もうかな？」

「……………なるべく、普通ので……………」

この前、ゲッ。ーロが買ったから財布にあまり余裕が……。

「どうしようかな〜?」

「シャル〜」

結局、シャルはまあまあ値段の物を頼んで僕の財布はさらに薄くなってしまった。・・・でもシャルが元気になったからいいか。

学園に帰ってきたらラウラに「私とも食事に行け!!」と言われ
てしまった。何で知ってるの？

第三十五話（後書き）

はい、シャル対舞華でした。最新型の迅雷と旧式のカスタム機であるラファールが渡り合えたのはシャルの技量と経験の差のおかげです。これで経験の差が無かったら迅雷が勝っていたでしょう。

次は巫女さんの話（オイツ）・・・もとい、篠ノ乃神社の話なのですが、オリジナルを入れるとあれは飛ばすしかないという結論になってしまったのですが、どうしましょうかね？

まあ、とりあえず次回の更新で。

第三十六話（前書き）

お待たせしました三十六話です。

作者はただいまスランプに陥ってしまって。

今回はかなりクオリティが低いです。

文才が欲しいよ。

第三十六話

とあるビルの一室、そこで僕は今……。

「娘を誑かすウジムシがあ——！！この手で捻り潰してくれるわ
————！！」

猟銃を待ったおじさんに狙われていた。
どうしてこうなった……！！

くく二十七時間前くく

「優希君、海外旅行に行かない？」

「はい？」

シャルと舞華ちゃんの模擬戦から数日、夏休みも終盤に入って研究所で今日も迅雷の開発をしていた僕に果歩さんはそう告げた。

「旅行……ですか？」

「まあ、旅行というよりもフランスのデュノア社に派遣、ってこと
だけだね」

ああ、なるほど……そういうことか。

「でも、なんで僕なんですか？一応、技術を教えられる人は別にいますけど……」

「うーん……それは、あちらからの指定なのよね」

僕を？……なんか怪しいな。

「ほんとどうしてかしらね？まあ、行きたくなかったら行かなくてもいいわよ、代理を行かせるし」

うーん……まあ、魂胆はみえみえだけどな、どうせ第三世代型のノウハウだけじゃ物足りないから僕を呼んで開発に協力させようと考えてるんでしょ。

でも、どうしようかな。フランスか……エクレアとかクレープとか美味しそうだな。

「で、どうする？」

「うーん……滞在期間はどのくらいなんですか？あまり長いと学園が始まってしまうんですけど……」

「大丈夫、滞在期間は五日間よ飛行機の時間を考えると三日ね」

五日間か……だったら大丈夫かな。

「うーん行ってもいいですけど、いつに行くんですか？僕パスポート持ってませんよ」

他にも準備とかあるし、無理なんじゃないかな？

「あ、大丈夫よ。パスポートも着替え諸々、全て用意はできてるわ」
「……はい？ えっ？ なんで、てかパスポートに着替えとか
っていつの間に？ ちょっと怖いんですけど。」

「さあ、じゃあ行きましょうか」

「へ？ 行くて……」

ま、まさか……。

「ええ、フランスへ」

ええええええ！？ 承諾してすぐにですか！？ って、ほかにも色々
と手続きとかは！ 学園とかの！

「そんなもの、とつの昔に終わらせたわ！」

だったら、先に僕に言ってください。

「というわけで……沢渡……！」

「はい、ヘリはいつでも発進できます。飛行機の間には十分間に
合います」

で、出た！ 果歩さんの秘書、沢渡さん！！（忍者の一族ではない
かと噂が）

「よし、じゃあ優希君、ヘリポートまで急ぐわよ」

「え、えええー！？」

こんな感じで、半場拉致に近い感じで研究上から空港に行き、それから蘭堂の自家用ジェット機に乗り換え、フランスへと飛び立ったのだが、何故か飛行機にはシャルとラウラが乗っていた。

ラウラは自分の部隊の様子を見るために帰国しようと思ったのを果歩さんが聞き、途中までどう？と誘われたらしい。まあ、お隣だからね。

だが、問題はシャルだった。シャルはデユノア社を嫌っているはずなのになんで帰国するんだ？代表候補生だから、ISのメンテや稼動データの報告をするために必ず戻らなきゃならないのに。

で、実際聞いてみたら。シャルは政府から帰国命令が出ていたよ
うで、本当は戻るの嫌らしい。でも呼び出された理由は、候補生
を継続するための書類だったのでしょうがなかったらしい。

まあ、シャルが飛行機に乗っているのはラウラと同じでつい
でと果歩さんが誘ったらしい。全員タイミングがいいな……。

でも、なんで果歩さん、シャルとラウラのスケジュールが分
かつたんだ？謎だな……。

（この三人は定期的にメールで連絡をとっている、内容は優希の写
真だったりと色々と変なネットワークが構築されている。最近
は舞華も入りそう……）

まあ、そんなこんなで、十二時間の長いフライトの末、フランス

に到着した。途中、ドイツの空港でラウラも降ろしたし。

飛行機に乗っている間はシャル達と喋ったり、迅雷のデータを見直したりしていたので暇にはならなかった。

空港に着いた僕たちは目的地が違ったため、一旦別れることになった。シャルは迎えに来た政府の車に乗り政庁へ、そして僕と果歩さんはそのままデュノア本社に向かった。

で、デュノア本社に到着し、シャルの父親である社長と対面した。十数分ほど対談すると、彼は僕と二人だけで話をしたいと言ってきたので承諾し、二人だけで話すことになり……。

現状がこれだ。

「死ねえー！ー！！ウジムシ！」

「うわぁっ!？」

床を蹴って横に転がって回避、僕のいた場所を銃弾が通り過ぎた。

「ちいつ！避けるな!!！」

社長は慣れた手つきでレバーを引き、次弾を装填し僕を狙う。

「止めて！」

「又ウ!？」

このままじゃ危ないので反撃することにした。
射線上に入らないようにしながら、一気に近づき銃を蹴り上げ、そして下ろした足で床を蹴って、跳び。

「くださいっ!!」

「グホッ!？」

そのまま社長の首に回し蹴りを叩き込んだ。そして蹴りを喰らった社長は少しふらついた後、銃を手放し、そのまま床へ倒れこんだ。

「はあはあ……あ、危なかった」

「ヴァンツ!何をしてい……る」

「優希君!大丈夫……夫?」

肩で息をしていると、ドアが勢いよく開き知らない男の人と果歩さんが入ってきた。誰だろあの人、顔立ちからして確実にフランス人だろうけど……。

「……えーと君、現状を説明してくれないか?」

「はい……」

「じゃあ、シャルロットさん。少し待っていてね、すぐに書類を持って来るから」

「はい」

代表候補生管理官のメリエさんが執務室から出て行くと僕はこっそりとため息をついた。早く帰りたいな……。フランスにいと必然的にデュノア社に行かなくちゃいけないし。それに、うるさいあいつがやって来るし……………。

「はぁ……………」

「待たせてごめんなさいね、シャルロットさん。はい、これが書類ね」

戻ってきたメリエさんはぶ厚い封筒を取り出して僕に渡した。相変わらず多いな書類……………。

「期限は明後日まで、まあシャルロットさんだったらすぐに終わるだろうけどね。ここでやっていくでしょ？」

メリエさんは僕の家の事情を知る数少ない人の一人、そのことあってか僕にとっても優しくしてくれている。男装の件の時もメリエさんは一人反対してくれた僕の姉みたいな人だ。

だから僕があまりデュノア社に行きたくないことも知っているからいつも、書類を各場所を提供してくれる。

「なにか、分からないところがあつたら私に聞いてね」

「はい、ありがとうございます」

さーて、早く終わらせて優希に会いに行こうと。まずは……………。

プルルルッ、ガチャッ。

「はい、こちらメリエです。・・・はい・・・はい分かりました。はあ・・・」

ガチャ。

？ どうしたんだろ、メリエさん。何かあったのかな？

「シャルロットさん、今日は戻ったほうがいいわ」

「へ？どうしてですか？」

「あの子が来るわ・・・」

「あの子って・・・まさか」

僕がそう聞くとメリエさんは先ほどよりも深いため息をついた、
・・・どうやらその通りらしい。

フランスの代表候補生の中で一番のトラブルメーカー。

「そうよ、あの子。セリーナさんが来るわ・・・」

コンコンとドアをノックする音が聞こえた、どうやら来たらしい。
そしてメリエさんの返事も聞かずドアが開かれあの人が入ってきた。

「メリエ代表候補生管理官、これは一体どういうことですかなぜ私がこんな・・・ってあら、あなたは」

あの方は部屋に入るなりメリエさんになにやら文句を言い始めた。
でも僕がいることに気づいたら見下すような笑みを浮かべた。
あいかわず人を不愉快にする笑みだ。

「あーら、愛人の娘がこんなところで何をしているのですか？ここはお遊びをするところではありませんよ」

・ 僕を愛人の娘と呼ぶ、この人はセリーヌ・デュノア。僕の……

腹違いの姉だ。

「申し訳なかった」

「は、はあ……」

先ほど部屋に入ってきた男性が頭を下げる、社長は椅子に縛られたまま、まだ気絶している。

「あの馬鹿がとんでもないことを」

この人はエドガー・アドック。デュノア社の代表取締役専務である、さらには社長であるヴァン・デュノアの子供の頃からの親友でもあるらしい。

だから、社長を椅子に縛ったつりできたのか普通の社員だったらしいぞ。

「いえ、気にしないでください。怪我ありませんし」

「よくないわっ！優希君に何かあったらどうするつもりだったんですか！」

僕はもうよかつたんだけど果歩さんは許せないでいるらしい、まあ僕を心配してのことなのだけど。

「本当に申し訳ない！」

「果歩さんもいいですから、アドックさんも頭を上げてください」

「うー……………」

果歩さん猫みたいに威嚇しないでくださいよ、いい年なんで（ギンッ！）……………何でもありません。

「そ、それで何で社長はあんなことをしたんですか？なんか娘をどうとか言っていましたけど……………」

娘って……………シャルのことだよな？でもおかしいなこの人って、確かこの人ってシャルを道具のように扱っていたはずなのに。

「あ……………そのことが……………まったく、心配して暴走するくらいだったらシャルロットちゃん本人の前ですればいいものを」

ん？シャルロットちゃん？

「アドックさん今、シャルの名前を……………」

「ああ……………あいつ、ヴァンはなシャルロットちゃんのこと」

なるとすぐに暴走してしまうんだよ」

「え？あ、あれ？」

お、おかしいな、想像していたシャルの父親像からどんどん離れていっていくんだけど……。

「その様子だと、君はシャルロットちゃんの事情は詳しく知っているようだね」

「……はい」

「そうか……なら話しておこう。ヴァンはな見ての通りシャルロットちゃんのことを溺愛しているんだよ」

「え？でも……」

「ああ、確かにあいつはあの人が、シャルロットちゃんの母親が亡くなるまでシャルロットちゃんとは会わなかった……。いや、会えなかったというのが正しいか」

「会えなかった？」

「ヴァンの奥さんはな、あいつの行動を監視していたな。そのためのエージェントまでいるくらいだ、そのせいで会いに行こうとも行けなかったんだよ」

か、監視って……本当に奥さんなの？

「まあ、シャルに会えなかった理由は分かりますた。でも溺愛して

いるなら何で男装させてIS学園に入学させたんですか」

そうだ、溺愛しているならそんなことするはずは無いのに、しかも僕と一夏のISのデータを盗めと命令までしている、なんでなんだ。

「……本来はシャルロットちゃんには男装などせずにIS学園に行つて貰う予定だったのだが、あいつの奥さんが口を挟んできてな。その時だ、ちょうどISを使える男である君の報道があつてな、それで男装をさせることになつてしまつてな……情けないことに止めることができなかったんだ」

あの人の奥さんつて、シャルを泥棒猫の娘がつ！と言つて引つ叩いたていうあの人が……。

「……」

「本当だつたら、ヴァンもシャルロットちゃんをこの手で抱きしめたいのだらうけど、できないんだよ」

いや、すればいいじゃないか。奥さんのことなんて考えずにさ。

「……いや、そうなのだがな。あの人は、その……俗に言うヤンデレ、というやつでな。そんなことをすると包丁を持つてシャルロットちゃんを殺しに行きそうなんだよ、本当に……」

や、ヤンデレ？つて確かとある人物を愛しすぎちゃつてその人に近づいた者を容赦なく排除するつていうあれ？……
た、確かにそれは危険だ。

「そ、そうですか……」

「ああ」

い、色々大変なんだな社長も、奥さんのこととか奥さんのこととか。

コンコンッ。

「ん？誰だ、入ってくれ」

「失礼します。あら？お客様かしらエドガー小父様？」

入ってきたのは……すごいドリルでした。セシリアさんの上をいくほどの、頭には漫画で見えるような金髪をいくつも巻いたドリルがたくさん付いていた、何個あるんだ？

それに無駄に露出の多いドレスを着ていて、ここにいる全員とはいる時代を間違っているんじゃないかと思う。

「セリーナちゃんか。ああ、そくだよ日本の蘭堂社から来てくださった人たちだよ」

「あら、それは……わたくしはセリーヌ・デュノア、この社長長の娘です。以後お見知りおきを」

セリーヌ……デュノア！？てことはシャルの……！！

「あら、ご丁寧には蘭堂果歩です、それでこつちが」

「し、篠ノ乃優希です」

第三十六話（後書き）

はい、主人公まさかの下僕発言をされるの巻でした。

そして、今作品ではシャルロットの父親は親バカという設定にしてみました。

書いてみたはいいものの、結構めちゃくちゃだな、やっぱり文才欲しいよ。

それと、ここ最近、別に書いてみたい作品がありまして、それを書くかどうか少し悩んでいます、もともと遅筆な作者がもう一作品書こうとしたら大変なことに・・・どうしようかな・・・。

とりあえず今回はここまで、次回の更新で。

第三十七話（前書き）

スランプのため投稿が随分と遅くなりました。
お待たせしました三十七話です、どうぞ。

「何ふざけた事を言ってるんですか!!」

ドアが勢いよく開きシャルが大声を上げながら、入ってきた。び、吃驚した・・・!

「あら・・・愛人の子がこんなとこまで来るなんて・・・無礼ですわね」

「・・・無礼とかそんなことどうでもいい!下僕って・・・・優希を物みたいに言わないでください!」

しゃ、シャルが怒ってる・・・それも本気で。

「物みたいですって?ふふっ・・・物はあなたなんじゃないのかしら?」

・・・なんだって。

「だって、そうですわよね?あなたみたいな汚らしい愛人の子を我がデュノア家が人として引き取ると思ってますの?そんなわけないわ、あなたは物。デュノア家のために働く為のただの駒よ!」

ブチッ!!

「セリーヌちゃん、やめな『黙れ、頭部に大量のドリル女』さ・・・い」

僕の突然の暴言に全員が呆然となりながらこちらを見た、結構一緒にいるシャルですら呆然としてた。でも関係ない、これはキレた。完全にキレた、今この人シャルを物扱いしたよね?僕がこの世で一

番嫌いなことはね、人を物扱いすることなんだよ。

なのにこのドリル女はシャルを物扱いした。人ってこれほど人を嫌いになれるもんなんだね初めて知ったよ。

「あ、ああつ、アナタ！！今、わたくしを！！」

「黙ってくれないドリル。口も開かないで凄く不愉快になるんだけど。むしろ酸素が勿体無いから呼吸もしないで」

束姉が興味ない相手と話す時みたいになってるけど構わないよね、だってドリルなんだし。

「~~~~~っ！！」

おお、ハンカチ噛んでるよ、そんなことする人っていたんだ。

「わ、私を侮辱するとは…………。決闘ですわ！」

「決闘？なにで？」

「ISで、ですわ！あなたもISの専用機を持っていると聞きます、だからISで勝負ですわ！！」

『も』てことはこの人も専用機持ちか、まあ親のコネとかだろうどうせ。ていうかこのやり取りどつかで…………ああ、セシリアさんとの始めて会ったときだ。お嬢様ってのは必然的に癩癩持ちなのかな、それに決闘好きだし。

「いいですよ、勝負しましょう」

「ゆ、優希!？」

「ふふ、いい覚悟ですわね。わたくしが勝ちましたら。あなたは下僕、私の命令を忠実にきく犬になってもらいますわ」

「せ、セリーヌちゃん何をっ!」

下僕ね……どうせ狙っているのは、僕のユニコーンとISの知識、それに後ろにいる束姉^{スズメ}だろう。

すこしは頭の回る……いや、素か……この人は典型的な女尊男卑思考の人なんだろうな、だから男は女の下に付くのが当たり前だと思っているのだろう。

「いいでしょう。負けたら下僕にでも何でもなりましょう。負けたら、ですけど」

「いい度胸ですわね、でも、あなたが私に勝つことはありえませんが」

勝手に言っていればいい。

「では、僕が勝ったら、あなたはシャルに謝罪してもらいます」

「なんですって!何故わたくしが愛人の娘に頭を下げなくてはならないの!」

「あれ?なんですか、あなたは自分の要求だけ通そうとしていたんですか?そうだったらかなり傲慢ですね。そんな人が社長の娘だなんて……操縦の腕も高が知れていますね、どうせ専用機はコネかなんかなんでしょう」

「~~~~~っ!??!いいですわ!!わたくしが負けました
らその愛人の子に頭でも何でも下げてやりますわ!!」

「……掛かった(ニヤリ)この手の人は異様にプライドが高
いからね、挑発したら簡単に引つかかってくれたよ。セシリアさん
も同じだったしね。」

「勝負は明日、デュノア社の演習所を使いますわ!逃げるんじゃない
りませわよ!」

「逃げるって誰がですか?あなたがですか?」

「キーーーーーツ!……失礼いたしますっ!!」

僕の挑発でさらに怒ったドリルはバタンツ!!と勢い良くドアが
閉め部屋から出ていった。

「優希!何やっているの!!」

「何怒ってるのシャル?」

「何?じゃないよ!何であんなことしたの!」

「何でって……あの女、シャルのこと物扱いしたんだよ怒るの
は当たり前だよ」

友達を侮辱されたんだ、怒るのは当たり前だ。

「うつ……それについては嬉しいけど、負けたらあの女の下僕

になるんだよ！」

ああ、なんだシャルが心配しているのはそこなのか。

「大丈夫だよ。あんなドリル女に負けるわけないし、どうせ大した事無いよ」

僕がそう言うときシャルは大きな溜め息をついた、どうしたんだ？

「あー、篠ノ乃君。言いくいんだがあの子、セリーヌちゃんはフランスの代表候補生なんだよ」

へー・・・・・・・・え？

いやー、驚いたね。あのドリル女がフランスの代表候補生だなんて。シャルに言っちゃ悪いけど・・・・・・・・いいのかフランス？あんな女が国の代表になってしまうのかもしれないんだぞ。国の信用に関わるぞ。

後でシャルから聞いたところ、あの唯我独尊な性格なのに代表候補生やっていられるのは適正値が候補生の中でトップだからなのとデユノア社のご令嬢だからしい、まああの性格なので政府の代表候補生管理部署に無茶難題を押し付け、相当嫌われているらしい。

「ふーん、そうなんだ」

「そうなんだよ、いつもメリエさんそう言ってるし」

メリエさんとやらご愁傷様です。

で、今はデュノア社が用意してくれた車で予約していたホテルに向かっている。席は僕を真ん中にして右には果歩さん、左にはシャルといった感じなのだが二人の距離が近い。大きな車だからスペースには余裕があるのに、暑いです。

「で、優希君。本当に勝てるの？」

「うーん、少し手こずるかもしれませんが勝てると思います」

僕は小型端末の画面をもう一度確かめる。そこにはあのドリル女の使っているISのスペックデータが映し出されていた。

第三世代型実証試験機『ミストラル』。第三世代型と名前に書いてはいるが実証試験機なので実際は2・5世代型らしい。

外見はラファール・リヴァイブの装甲がさらに厚くなり一回りほど大きくなっているのと、翼状のスラスターが六枚になっていて、通常のISよりも大型になっている。さらに目を引くのは両肩部からの伸びるアームに支えられた二枚の大きなシールドそれがさらにこのISの威圧感を増している。

「ふーん。随分と凄いの作ったね、いろんな意味で」

「うん、そうだね。装甲は厚いけどこれじゃあね……………」

ラファール・リヴァイブはバランスの良い汎用性が高いISだったのだがこのミストラルは非常にバランスが悪い。厚い装甲に二枚の大型シールド、防御力は高いけどその代わりに機動力と運動性能が最悪だ。スラスターを増設したからなんとか動けるといいうくらいだ、こう言っては悪いが…………設計者馬鹿でしょ。まあ、色々言

いたいことはあるけど、今はもつと分析しておくか。

「ところでシャルはあのドリル女と戦ったことってあるの？」

「うん、一回だけあるよ。でもだいぶ前もことだしあの時は専用機じゃなかったからここ最近のことは……」

そうか……。せめて戦法だけでも分かればよかったんだけど。

「でも、あの人の癖なら分かるよ」

「え？本当？」

「うん、随分と印象的だったしね」

「そうなんだ。で、癖っていうのは？」

癖が分かるだけでも勝率はかなり上がる。

「あの人の癖……ていうよりも戦法なのかな？弾幕を張ることなんだよね」

「弾幕？」

「うん、僕と戦ったときは両腕にガトリングを持って弾幕を張ってきたんだ、弾が切れれば次のガトリングを出してその連続、反撃する暇も無かったよ、ああいうのをトリガーハッピーていうんだよね。まあ、数分もしないうちに残弾使い切って僕が勝ったけど」

圧倒的弾幕による反撃も許さない戦法か……。それだった

らミストラルの重装甲や機動性の低さに納得できる。

「ありがとうシャル、参考になったよ」

これだけ分かればいくつか戦法も立てられる。

「いいよ優希。でも絶対に勝つてよ！」

「わかってるよ」

「二人ともいい具合に話が纏まったみたいね、後もう少してホテルに着くわよ」

窓の外を見ると高層ビルが見えてきた。ホテルってあれかな？

「着いたら、ご飯にしましょうか。私フランス料理って好きなのよね」

「すみません果歩さん。僕の方まで」

「別にいいのよ気にしないで。それにシャルロットちゃん、実家に行きたくないんですよ」

今回シャルは果歩さんの誘いで僕たちと同じホテルに泊まることになった、シャルは別のホテルに泊まるつもりだったらしいんだけど、今回シャルの事情を知った果歩さんが強引ほかったがこっちのホテルに泊めさせることにしたのだ。シャルは断つたのだがすでに予約もしてしまっていたので渋々頷いたのであった。

「部屋代は自分で払いますので」

「いいのよ、子供は大人に甘えなさい。それにここはお高いわよ」

た、高いってどの位なんだろう？

「・・・・・・・・ど、どの位なんですか？」

「えーとね（ゴニョゴニョ）位かしら？」

果歩さんが僕に聞こえないようにシャルの耳元で金額を言つとシャルの顔はサーと青ざめた。そ、そんなに高いのか・・・・・・・・？

「あ、甘えさせてもらいます・・・・・・・・」

「ふふ、それでよろしい。さあ、もう着くわよ」

「あ、はい」

い、一体幾らだったんだ、後でシャルに聞こう。

そして金額を聞いて後悔した僕であった。とりあえずゼロがいっぱいありました・・・・・・・・。

食事も終わり、ホテルマン案内され部屋にやってきたんだけど問題が発生した、それは・・・・・・・・。

「「な、何でシャルー（優希）と相部屋なの！？」」

案内されたのは最上階のスイートルーム。なんだけど何故か僕とシャルは相部屋ということになっていた。しかも部屋のベットはダブルベット、どうなってるんだ！？

「と、とりあえず果歩さんに聞かないと！」

「そ、そうだね！」

えーと、果歩さんの部屋の内線番号は………これでよし。

『はい？』

「か、果歩さん、なんで僕とシャルの部屋が一緒なんですか！」

『優希君？………あらごめんなさい、すっかり部屋の予約を間違えてしまったわー（棒読み）』

ちょ、凄い棒読みなんですけど！？もしかしてわざとなの！？わざとなんですね！

『もう時間も遅いし、私は寝るわー、おやすみなさーい（棒読み）』

「え、ちょ！？果歩さん、まだ八時ですよ、果歩さーん！？」

ガチャッ！と無常にも内線は切られてしまったのであった。ど、どうしよう？

「ゆ、優希？どうだったの？」

「…………どうやら果歩さんの仕業みたい。どうしようか部屋を変えてもらうわけにいかないし……」

もう一部屋とろうとしても値段がとんでもないからとれないし……。。。。。

「……………これってある意味、チャンスだよね。もしかして果歩さん、僕のことを考えて……」

「シャル？どうかしたの？」

なんか、小声でなんか言ってるみたいけど？

「う、ううん！なんでもないよ！」

「そ、そう……」

どうしたんだろ急に慌てたりして、身体の調子でも悪いのかな。

「ゆ、優希、今日はもう仕方ないから、同じ部屋に泊まるしかないね」

「そうだね、それしかないか……」

部屋は取れないし、果歩さんは何もしないだろうし、しょうがないか。でもベットは……。。。。。

「でも、ベットはどうする？あれダブルベットなんだけど……」

・さすがに二人同じベッドで寝るわけには……………」

いや、同室で数週間、一緒に住んでいたこともあったけど同じベッドで寝るのはちょっと……………」

「そ、それは、その……………優希がよければ僕は一緒のベッドでも……………(ゴニョゴニョ)」

「よしっ、僕はそのソファで寝るからシャルはベッドを使って一緒に寝るわけにもいかないしね、これが妥当でしょ。スイートルームだからソファもフカフカで大きいし、僕だったら充分なサイズだ。」

「むう……………」

「あれ、シャル？どうしたの？」

なんでそんなむくれいるんだ、僕何かした？

「なんでもない！先にシャワー浴びさせてもらってから」

シャルはキャリーバックから着替えを取り出しバスルームへ入る、でも顔だけを出して。

「……………覗かないでね」

「の、覗かないよ！」

そ、そんなことしないよ！この前のあれは、その、事故で、自分

からは行かないよ!?

「むうー……ふんっ!」

シャルはさらに不機嫌になって、勢い良くドアを閉めたのだった。
僕が何をしたっていうの……。

まあ、いいや、とりあえず明日の勝負の為に色々と考えておこう
か……。

「ふあ~~~~……あれ?」

何で欠伸が?まだ八時なのになんで……あ、時差のこと忘れてた。

思い出したら、なんか急に眠気が……ソファーもフカフカで気持ちいいし、だめだ寝るとしてもせめて着替えないと……。

ポスツ……スー……スー……スー……。

「優希、シャワー開いたよ。……あれ?」

僕がバスルームから出ると優希の姿が見当たらなかった、どこに行っただろう?

「スー……スー……」

「あれ?優希?」

どこから寝息が．．．いた、優希寝ちゃってるよ。

「あーもう、着替えもしないで寝ちゃうなんて、しょうがないな優希は」

「うにゅ．．．．．」

は、鼻から血が．．．．．うにゅ、って可愛すぎるよ優希は！でもどうしようかな、いくら上質なソファーでも、身体を痛めちゃうかもしれないしな．．．．．やっぱ、ベッドで寝かせよう！これは優希のためなんだ僕の欲望なんかじゃないよ！

優希を起こさないようにお姫様抱っこで抱えてベッドにゆっくり降ろす．．．よしっ！後は．．．。

「着替えだね（ゴクリ）」

ごめんね優希、服が皺になっちゃうから、下着は換えないでおくから許して。

優希のバックを開いてパジャマを探す．．．あつた、この前買った着ぐるみパジャマ、これを優希に着せて．．．．．出来た！！

「ウニヤア．．．．．」

優希、パジャマ着たらネコの鳴き声に．．．！ヤバイよ可愛すぎるよ～～～！

と、とりあえず、携帯で写真を（パシャッ）で、ラウラに送信！この可愛さは一人いじめできない！これでよし。

「ファ〜〜・・・僕も眠くなってきたな・・・寝よう」

優希の隣に寝そべって掛け布団をかける、隣を見ると気持ちよさそうに寝ている優希・・・ううゝ抱きしめたい。

で、でも我慢だ、これ以上何かすると優希に悪いし抱きしめちゃ・・・。

「ウニヤ〜〜」

ギュッ！

「!?!?!?!?!?」

ゆ、優希から抱きしめてきた!?!?したいと思っていたけどまさか優希からしてくるなんて、また鼻から血が・・・。

「コロコロ」

・・・僕は今日眠れるのだろうか。

~~~~~今日の黒ウサギさん達~~~~~

ピロリーン

「む?なんだ、シャルロットからメール?」

私は今、我が部隊『シュバルツェア・ハーゼ』部隊を率いて夜間訓練を行っていたのだが、突如携帯がなりメールが届いた、なんだ、こんな時に・・・！？こ、これは！

「隊長？どうかしました・・・か！？」

隣に立っていたクラリッサも画面を見て固まる、シャルロットから送られてきたメールに添付された画像そこにはこの前購入したあの着ぐるみパジャマというのをきて心地よさそうに眠っている優希の姿だった。

な、なんだこの愛くるしい生き物は！？

「た、隊長・・・・・・・・・・」

隣からとんでもない威圧を感じ私はその場から飛びのく、でもいるのはクラリッサだけだった。

「な、なんだ、クラリッサ」

ま、まさか今の威圧はクラリッサからか？一体どうしたというのだ？

「その画像、よろしければぜひ私にも・・・・・・・・・・」

な、何故だ、この画像をクラリッサに渡してはいけない気がする。  
・・・・・・・・・・ここは直感通り！

「やらん！」

「だったら、奪って見せます！！」

クラリッサは専用機『シュヴァルツェア・ツヴァイク』を展開する、本当にやるのか……だったら、この部隊最強が誰なのか分からせてやろう!!

「行きます!!」

「かかって来い!!」

私もシュヴァルツェア・レーゲンを展開し迎え撃つ!

こうして、夜間訓練のはずだったのだが、いつの間にか私とクラリッサの模擬戦闘に変わってしまったていたのだった。

画像はちゃんと死守した、だが最後のストレートが入っていれば恐らく私は負けていただろう、クラリッサ腕を上げたな。

### 第三十七話（後書き）

はい、三十七話でした。スランプです。

書こうと思っても上手く書けず何度も書き直しています。

ですので今回は結構メチャクチャなところも・・・

早く脱せるようがんばりますのでもう少しお待ちください。

では次回の更新で。

### 第三十八話（前書き）

はい、お久しぶりでございます。  
スランプは何とか脱したと思われる作者です。  
何とか書けたので投稿いたします。  
三十八話です、どうぞ。

### 第三十八話

「シャル大丈夫？眠れなかったの？」

フランス初日の朝、昨日は時差もあつたから早い時間に寝てしまった。まあ、旅の疲れもあつたんだろう、飛行機乗ったこと無かつたしね。

でもなんでパジャマ着てるんだろ？昨日はすぐに眠っちゃたんはずなんだけど・・・寝ぼけながら着替えたのかな？まあそれよりも、シャルが凄く眠そうにしている、分かりにくいけど目の下に隈あるし。

「・・・大丈夫だよ優希、心配しないで。・・・役得だつたし」

役得？いいことでもあつたのかな？

「まだ時間あるし寝とく？」

ドリル女から指定された時間までまだ結構あるし。

「うん・・・そうする。おやすみ・・・スー・・・スー」

シャルはベットにバタリと倒れこむとすぐに寝息を立て始めた。とりあえず起こすのは二時間前位にしておこうかな、女の子は準備に時間がかかるって言つてたし。

「お休み、シャル・・・・・・・・。さて、僕も準備しておこうかな」

ドリル相手の対策も考えておこつかな一応。まずは……………。

「よく逃げずに来ましたわね、褒めて差し上げますわ」

デュノア社の演習場に着くとドリル女が待ち構えていた。うん、化粧も昨日と比べると一段と濃い、ケバイね。

「どうします？今ここで頭を下げ、わたくしに忠誠を誓えば昨日の暴言を許して差し上げてもよろしくてよ？」

「キャンキャン煩い、犬みたいに騒がないでくれません。あ、犬に失礼か」

「……………っ！いいですわ、やはり私が直接叩きのめしてあげますわ！」

本当に煩いな……………。代表候補生がこんな挑発に乗ってどうするのさ。ほんとこのドリル、実力あるの？

「行きますわよ！！」

なんか喚きながら、ドリル女は付き人を連れて建物内に入っていた。あの付き人さん目の下に隈があつたよ、あんな女の付き人なんて可哀想に……………別の仕事をお勧めします。

「・・・・・・・・・・優希、なんか挑発の仕方が篠ノ乃博士と同じで容赦ないね・・・・・・・・・・」

「そうかな？」

ん〜、挑発っていうよりも本気なんだけどな〜・・・・・・・・・・最近、束姉と行動パターンが同じになってきてるような・・・・・・・・・・疲れてるのかな最近忙しかつたし、今度ゆっくり休もう。

「まあいいか・・・・・・・・・・それより僕たちも行こう」

「そうだね、優希スーツ着てる？着てなかったら更衣室に案内するけど」

「大丈夫、もう着てるよ」

「そう、じゃあ行こうか」

シャルに先導されて建物内に入る僕、へえ〜、結構綺麗なところだな。

「おお、篠ノ乃君にシャルロットちゃん。待ってたよ」

「アドックさん？」

「・・・・・・・・・・アドック専務」

アドックさんが入り口近くのソファーに腰掛けていた、どうやら僕たちを待っていたらしい。

「シャルロットちゃん、エドガー小父さんでいいと言ってるだろ」

シャルが役職で呼んだことに苦笑するアドックさん。

「いいえ、立場がありますので……」

「そうか……」

でもシャルは表情を硬くしたままアドックさんへ言う。  
そんなシャルを少し悲しそうな瞳で見つめるアドックさん。

「準備もありますので、僕たちは失礼します。行こう優希」

「え、あ、シャル？」

シャルは僕の手を引き、逃げるようにその場を去った。

「はぁ……ダメだな」

この一年間、俺はシャルロットちゃんとの壁を取り除こうと色々  
と努力してきたのだが全く進展は無い、理由は簡単あの馬鹿、ヴァ  
ンの為だ。あんな馬鹿でも一応親友だし、一緒に飲みに行ったとき  
いつもシャルロットちゃんへの想いを延々と聞かされてうんざりし  
ているのだが、その分あいつのシャルロットちゃんへの愛の深さは  
理解している。

まあ本当なら、あいつが解決しなければいけない問題なんだがな。

口下手でシャイな親友を持つ俺からのお節介だ。  
さて、めげずに頑張りますか。

「大変ですわね。エドガー専務」

「おや？Mrs・蘭堂。今お着きで？」

「ええ、昨日あの子達にちょっとしたイタズラをしたせいで置いていかれて、オホホ……」

何をしたのだ、この方は？見た目と違って結構お茶目なのか？

「それは災難で……」

「いえいえ、あなたほどでは。色々大変そうで」

ヴァンとシャルロットちゃんのことか……。

「まあ、そうですね。慣れてますので」

「慣れて？」

「あいつのつるんでいるとよく貧乏くじを引かれるんですよ」

まあ、半分諦めに近い感じなんだがな。

「そ、そうですね。……それよりも観戦席に案内してくださいませんか、時間は大丈夫でしょうか？」

「ん？ああ、そうですね。案内させていただきます」

「お願いします」

私はMrs・蘭堂を連れて、管制室に向かう。

篠ノ乃君か・・・彼の实力は知らないが個人的には勝つて欲しいものだ、セリーヌちゃんは少し・・・いや、かなり調子に乗っているところがあるからな。あの高すぎるプライドを一度叩き折って欲しいものだ。

演習場のピットに案内された僕はユニコーンを軽くチェックをした後、時間が来るまでシャルと一緒に待機していた。

まあ、適当に話していただけなんだけどね。

五分後に開始するとアナウンスが流れたので僕はユニコーンを展開して、待機する。

「優希、頑張つてね。負けないでよ」

「うん。・・・・・・・・・・シャル」

「ん？何かな優希？」

言おうか悩んでいたけど、さっきのアドックさんの悲しそうな表情や、いきなり襲い掛かってきた社長を思い出しやっぱり言うことにした。

「社長、シャルのお父さんは、シャルを道具とは思ってないよ、む

しろ愛しすぎてると思うよ」

「・・・・・・・・え？な、何言ってるの優希？そんなこと・・・・・・・・」

「信じられないかもしれないけどさ社長、いきなり僕に襲い掛かってきたんだ。銃向けて」

「は、はい？」

おお、混乱してる、混乱してる。

「そ、それってどういうこと！？」

「なんか、いきなり『娘を誑かすウジムシがー』とか言いながら。よく分からないけど襲い掛かって来た。これって道具と想っている人が取る行動なんかじゃないよね？」

「・・・・・・・・でも」

「それは色々と事情『準備が整いました、両者、配置についてください』が・・・・・・・・じゃあ、僕は行くね」

「ま、待つて優希、事情つて何！ちゃんと教えてよ！」

「それは、アドックさんか社長本人に聞いて。僕が話すことじゃないよ」

ピットの扉が開き外の光が差し込んで、僕はユニコーンを浮かし低速で外へ出た。

「最後通告ですわ、わたくしの下僕になりなさい」

「何度も言いますがお断りします。それともなんですか、僕と戦うのが怖いんですか？だから何度も・・・」

「勘違いなしないで下さる。これはあなたの身を案じてあげてのことですわ、せっかくの利用できる下僕に傷が入るのは嫌ですもの」

「・・・利用ね」

「ええ、わたくしには何人も仕えている男がいますの、どれも利用価値のある男ですわ、でも結局は所詮男、無能な輩が多くて、すぐに使えなくなりますわ。でもあなたは違いますわ篠ノ乃博士には劣りますが高度なISの知識に開発技能、そして何よりもISを使える・・・。。喜ばなさい、あなたはわたくし、セリーヌ・デュノアのために働くことを認められましたのよ」

歪んでいる、女尊男卑になった現代で珍しくは無いが、このドリルは歪みすぎている。

・・・束姉はこんなのがいる世界が見たくてISを広めたはずじゃないのに、なんでこうなったんだ。

「あなたの言い分は分かりました」

「そう、だったらわたくしの・・・」

「ふざけんな」

「なんですって……」

「誰があんたみたいな屑の下につくか、そんな事になったら僕自害するよ」

「く、屑ですって!？」

「さつきから聞いていれば男を物のように、あなた自分が神に選ばれた人間だと思ってるんですか？頭大丈夫ですか？いい病院紹介しましょうか？」

「だ、黙れえ!!もういいですわ、あなたはここで叩き潰しますわ!!」

勝手にキレたドリルがISの武装を展開した。両腕にガトリングガンを持ち、シールドの裏にもガトリングを展開し計四丁を僕に向ける。

「男が女に勝てるわけがないこと、力の差を思い知りなさい」

「……じゃあ、こっちも言っておきます」

僕はドリルに言い放つ。

「男をなめるな!!」

『せ、戦闘開始!!』

「喰らいなさい!!」

開始と同時にガトリング四丁を僕へと一斉射する、尋常じゃない量の銃弾が僕へと向かってくる。でも、こんなものあせるほどでもないので落ち着いて回避する。

初撃避けられたドリル女はすぐさまに銃身を僕の方へと向け直そうとするが、ガトリングのトリガーを引きっぱなしだったので振動で早く出来ずにいた。

「はい、隙だらけ!」

僕はビームマグナムを展開し、低出力モードで三発撃ちだした。放たれたビームはそのままテンペスタに直撃したと思ったのだが、肩部に装着されていた大型シールドが稼動しビームを防いだ、でもなんか変だった防いだシールドの表面は焦げてはいなく、一切の傷は無かった。

「ふふ、気づきました。このテンペスタのシールドには百層にも塗り重ねられたビームコーティングが施されていますのよ」

「ビームコーティングか……」

ビーム自体ここ最近で確立してきた武装だ、それを見越しての処置か……。でも百層ってどんだけコストかかっているの。無駄が多すぎない、あのIS。

「さらにはテンペスタ自身にもコーティングが施されていますわ。あなたのISの武装はすべてビーム兵器のみだということはすでに調べがついていますわ。故に、あなたが私に勝てることは不可能! 大人しく撃たれなさい!!」

まあ、ドリル女の言うとおりなんだよな。容量の問題で今ハイパーバズーカは無いから、ビームオンリーなんだよな、ユニコーンって。

「人間、最古の武器って何だと思う？」

「は？」

「それはね……」

《IS-D system 起動します》

「この身体だよ!!」

「え？キャアツ!？」

イグニッション・ブースト

瞬時加速で一気に接近し、加速でできた勢いを乗せた拳を叩きつけた、これを受けたドリルはそのまま吹き飛ばされて後ろに大きく下がったがダメージは無い、ドリルは持っていたガトリングを盾にして防いだようだが、銃身はくの字に曲がっていて使い物にならなくなっていた。

「じ、このっ!!」

ドリルは残ったガトリングをまた僕に向けて撃ってきた。僕は射線を外れるようにジグザグに動き回避しながら接近する。

「来るなあ————!!」

ガトリングの斉射を止めると今度はテンペストの装甲の一部が開きミサイルポッドが露出し発射された。

「この距離でそれは愚作だよ」

ヘッドギアのレーザーバルカンでミサイルを数発撃ち落すと誘爆し全弾爆散した。

広がった爆煙によって視界は塞がれた。ハイパーセンサーも爆発の熱量によって上手く働かない。だけど好都合だ。

僕は爆煙を煙幕代わりにし一気にドリルへと接近する。

爆煙の中から飛び出すと、動かず呆然としていたドリルの姿が見えた。この状況で動かないなんて素人以下なんじゃないかな。まあ、そんなことはどうでもいいか。

ようやく気づいたドリルはガトリングの銃口を僕に向けるが遅すぎたね。僕は腕を伸ばしガトリングの銃身を掴んだ。

「な、いつの間に!？」

「捕まえ……た!!」

掴んでいた銃身を強く握りこむ、すると銃身はグシャリと簡単に潰れ、ただの鉄屑へと成り変った。

「ひっ!？」

「逃がすと思う？」

潰されたガトリングを見て短い悲鳴を上げるドリル、ガトリングを手放し僕から距離を取ろうとするが、元々機動性の全く無いと言っているテンペストだ簡単に追いつく。

先回りして、振り返りざまに回し蹴りを放つ。

ガンッ！！

装甲と装甲がぶつかり合う音が聞こえた、どうやら二枚のシールドを使い攻撃を防いだようだ。これ邪魔だな壊すか。

「喰らいなさい！！」

シールドの浮間からドリルが《ブレット・スライサー》を突き出してきたけど。切っ先がぶれていて簡単に避けれた。

開いたシールドの隙間に腕を突っ込みシールドを接続しているアームの部分を掴み。

「でえいつ！！」

無理矢理引きちぎった。

「あ、ああ・・・」

「まだやりますか？」

テンペスタに残っている武装は分かる限りではシールド裏に付いているガトリングー丁に《ブレット・スライサー》のみ、ほとんど詰んだ状態だ。さあ、どうする？

「ま、まだですわ・・・。わたくしが男などに！！」

「そう。じゃあ、これで終わりに」

《上空より熱源反応、ロックオンされております。回避を推奨》

「っ!？」

僕はドリルを蹴り飛ばす、その反動を利用して僕もその場から離れた。

離れた刹那、僕が立っていた場所に何条ものレーザーが着弾した。

「くっ！」

あ、危なかった、でも誰が……。

僕は空を見上げるが何も見えない。だがハイパーセンサーには反応があった、どうやら遠すぎて見えなかったみたいだ、視覚を連動してその一点を拡大する、するとそこには大型のライフルをを構えている青いISがいた。

「あれは……ブルー・ティアーズ!？」

襲撃してきたISに僕は見覚えがあった。あれはセシリアさんが使っているIS『ブルー・ティアーズ』に酷似していた。

だが、何故……？

『聴こえるか?』

「!？通信……」

どうやらあの青いISからみたいだ。僕は通信に応じる。

『……聴こえている』

『そうか……まずは先の攻撃については謝罪しよう』

『……謝罪なんていらない、何の用だ』

シールドとビームマグナムを展開して臨戦態勢に入る。

『こちらに戦う意思は無い』

『だったら何だ、用が無いなら帰れ』

『いや、用ならある篠ノ乃優希。お前自身に』

僕に？

『私はお前を勧誘しに来たのだよ』

なんだって？

### 第三十八話（後書き）

はい、三十八話でした。スランプ中だったので色々と変なところもありますが、ご了承ください。

今回の優希君は完全な徒手空拳による戦闘のみでした。

漫画版ガンダムUCを見てどうしても素手だけの戦闘やってみたくこんな風になりましたwww

そして終盤ではちょっとお早いですが、Mさんにご登場していただきました。これからの展開を考えるのが大変だ（汗）

次回の更新はいつになるか分かりません。作者自身の課題やレポートが忙しくなる時期なので書ける時間を確保するのが難しいのです、すみません。

なるべく早めに投稿できるようにがんばりますので少々お待ちを・・・。

では、次回の更新で。

### 第三十九話（前書き）

お待たせしました。  
三十九話です、どうぞ。

### 第三十九話

「勧誘・・・？」

『ああ、そうだ』

Mと名乗る女は自分が所属している組織に入らないかと言ってきた。

『我々の組織はお前の力、技術力を欲している。もちろんメリットはあるぞ、こちらではお前の為に最高の設備と資金を用意している。どうだ、入らないか？』

いい条件ばかりを並べて僕を勧誘するM、でも組織名を明かせないところと装着しているブルー・ティーズ製のISをつけていることから考えると、危険な香りがプンプンするので答えは。

「断らせてもらうよ。僕は犯罪者になるつもりは無いしね」

『ほう・・・そうか、だったらしょうがない。今回は諦めよう』

え？随分とあっさりと手を引くな。てっきり力づくで僕を狙ってくると思ったのに。

『言っただろう戦闘の意思は無いと。それに君は我々にとっても、最高重要度に値する人物なんだ怪我をさせる訳にもいかない』

最高重要度？一体どうということなんだ・・・？

『では、私は去ろう。そろそろ軍の特殊部隊が着くころだしな。おっと、そうだ』

体を反転させ飛び去ろうとしていたMが急に止まり肉声が聞こえるくらいまで近づいてきた。

「言い忘れていた。忠告だ、身の回りに気をつける、特に飛行機に乗る時とかな」

「飛行機？　どういうこと……」

「おっと時間が無いな、失礼する」

「え、ちよつ！？……行っちゃた、なんだったんだ一体」

それにしてもあのIS、近くで見たから分かったけどやっぱりブル・ティアーズにそっくりだ。装備の多さからして上位機かもしれないな。

「戻ったらセシリアさんに聞いてみよ……っ！？」

ズドンッ！！

急に嫌な予感がしバックステップで下がると僕の立っていた場所に砲弾が飛んできて爆発した。危なかった……。一体誰が……。って、あいつしかいないか。

砲弾が飛んできた方角を見ると予想通り三メートル程ある大きな大砲を構えたドリルが立っていた。

「よくも、わたくしを足蹴にしてくれましたわね！！」

助けてやったのに何故か僕に怒りを向けてきている。もう嫌だよコイツ、疲れた……。

「優しくしてあげましてたけど、もう我慢の限界ですわ……この《竜の牙・改》ドラゴン・ファング・カスタームで葬って差し上げますわ!!」

《竜の牙》ドラゴン・ファングって確かアメリカが作った大型砲だったけ、大口径で威力が高くて《灰色の鱗殻》グレイスケールに並んで第二世代最強の威力を誇る武装なんだけど……でかすぎて誰も使わない、むしろ使えない。撃つときには地面にアンカーで固定しなければ反動で引っくり返ってしまうほどである、それに命中率も悪い。簡単に言えば失敗作だ、製作会社も雑誌のインタビューで失敗作だったと言っていた。

そんなのを使う人がいたなんて……。珍獣クラスでしょコレ。でも改つてことはなんらかの改造をしたってことだね。問題点が少し改良されているのか？

「喰らいなさい!!」

次弾を装填され、また砲弾が放たれるが少しだけ動き攻撃を避ける。

装填には時間がかかるはずだこのまま懷に潜り込んで終わらせる

!!

………と思ったのだが。

「これで終わりで無くてよ!!」

竜の牙の砲身の一部がスライドし薬莢が排出された。まさか……。

「平伏しなさい!!」

ドンッ！！

また轟音を立て砲弾が発射された、僕は慌てて上空へ飛び上がり攻撃を回避した。……でもそれが不味かった僕の背後にはシャル達がいる管制室があったのだった。

ここはIS学園のアリーナと違ってバリアーは無い。つまり当たったら大惨事になってしまうということだ。

外れて欲しいと思ったが残念なことに砲弾は管制室に直撃してしまった。

「シャル、果歩さん！！グアッ！？」

助けに行こうとした瞬間、背中に衝撃が走った。まさか……………。

「どこへ行く気ですの？まだ勝負は終わっていませんわよ」

「っ！？何を言ってるんだ！早く助けに行かなきゃ中の人たちが、あんたの父親もいるんだぞ！」

「そんなこと関係ありませんわ、今はあなたを叩き潰すことのほうが重要ですわ」

っ！？そんなこと……だと。人の命がそんなことで済ます気がコイツは……………！！

「さあ、続けますわよ！そして、平伏しなさい！！」

くっ、こいつを何とかしないと助けにもいけない……………シャル、果歩さん無事でいて。

「うう．．．．．ココは．．．．．」

視界がぼやけていてよく分からない。分かるのは周りの色が赤くなっていることだけ。体も痛い、腕は動く、でも足は何か挟まれて動けない。何でこうなってるだろう？

ボーっとする頭、総動員して何とか思い出そうとする．．．．．確か優希がアイツと戦っていて、勝ちそうになった。でも未確認ISが来て．．．．．それで模擬戦を中止しようとしたときに．．．．．つは！！

ここで僕の頭はクリアになり、現在の状況を全て思い出した。

「アイツの攻撃がココに当たったんだ．．．．．それで」

視界もスッキリよく見える、辺りを見回すと所々火の手が上がっている。まだ大丈夫そうだが長引けば爆発するかもしれない。

管制室にいたのは数名のスタッフと僕、果歩さん、アドックさん、それにアノ人だ。

果歩さんは模擬戦の途中、決着が着きそうになったときに仕事の連絡が入りココから出っ行って行ったので大丈夫だろう。

僕の他にも瓦礫や機材に挟まれ動けない人が数名、アドックさんは大丈夫みたいだが頭打ったらしく血を流し気絶している。下手したら危険な状態かもしれないが僕も足が挟まれていて動けない。助けが来るのを待つしかないか．．．．．。そういえばアノ人は．．．（ポタッ）．．．？これは血．．．．．？まさか！

うつ伏せの状態だったので気付かなかったが僕の上に誰かが被さ

っている、体を捻り確認するとそこには・・・。

「・・・・・・・・無事か」

僕を瓦礫から庇うように覆いかぶさり、頭から血を流しているアノ人の姿があった。

「な、何で・・・・・・・・」

何で僕を助けたの・・・

「・・・・・・・・親が子を守るのは当然のことだ」

「っ!?!・・・・親、何を今更・・・・だったらなんで僕に話しかけてくれなかったの!何で僕にデータを盗んでこいって言ったの!」

母さんが死んで、この人に引き取られることになった時、僕は会ったことのない父親に会えると聞いて不安もあった、けどそれよりも嬉しさのほうが上だった。

なのに僕が迎えた現実の本妻からの酷い仕打ちと父親からの冷たい態度。この時僕は分かったのかもしれない。ああ、僕には本当の家族はいないんだ、って。

なのに、何でそんなこと言うの!?今更、親だからって・・・・もう分からないよ!

「・・・・・・・・何を言っても信じてもらえないかもしれないが聞いてくれ、私はひと時もお前のことを考えなかった事はない・・・・」

っ！何を！！

「約束だったから……な。メリッサとの……」

メリッサ……母さんの名前。なんで母さんが……。

「あいつが死ぬ数日前に話し約束した……シャルロットを頼むと」

「母さんと……だったら何で、あんなこと……男装してまでIS学園に行かせたの」

「元々は普通に学園に入学させるためだった、だがアイツが私の知らぬうちに事を運んでいったのだ」

アイツ……本妻のことか。

「でも、僕を学園に入学させたのはやっぱり、優希が一夏のISのデータを盗ませるため……」

「それは……表向きの理由だ。本当の理由は……お前を守るためだ……」

僕を……？

「あのままお前がフランスにいたら……アイツは確実にお前を殺していた」

僕を、殺す……？あの人、本妻が……ありえそうだ。

「全ては・・・お前のため・・・シャルロット、お前を守るためだ」

そんな、じゃあ僕は何も知らずに、勝手に思い込んで守っていてくれていた人を・・・。

「・・・グウツ!？」

「だ、大丈夫・・・血が!」

急に苦しそうにしたのでこの人の体をよく見てみるとわき腹の辺りからも出血していた、しかも出血量はかなり多い。こんな状態で僕を守っていたの・・・。

「心配するな・・・掠り傷だ」

「そんなわけないでしょ、こんな怪我してまで何で!？」

「言った・・・だろう・・・親・・・だからな」

!？ヤバイ、呼吸も弱弱しくなってきた。このままじゃ・・・  
・せめてリヴァイブがあつたらこの状況を何とかできるのに・・・。

先ほどデータ取りとオーバーホールのためにISを預けてしまった自分が憎い。

「ムウ・・・」

「意識をしつかり!目を閉じたらダメ!まだあなたに聞きたいことがいっぱいあるんです!だから目を閉じないで父さん(・・・)!」

「！」

「ハハ……ようやく父さんといってくれたな……結構嬉しいものだ……」

「嬉しかったら、目を閉じないでよ！もうすぐ助けが来るから！」

助けがいつ来るかなんて知らない、でもこうでも言わなくちゃ、絶対に目を閉じてしまう。

「そうだな……私もお前と話したい……ことが……色々あるぞ……」

そう言っけど、父さんの瞼は段々と下がってくる。早く、誰か……

「助けて！優希……！」

僕を助けてくれたあの人の名前を呼ぶ、人形になっていたあの頃の僕を助けてくれた男の子の名前を力の限り大声で呼んだ。すると……

「お待ちせ、シャル！」

声のしたほうを見る、するとそこには僕を助けてくれた、僕の大好きな人。

優希がいた。

間に合った、あのドリル女にてこずって随分と時間がかかってしまった。バカスカと砲弾を撃ち込んでくるから、面倒臭くなつて一気に接近してビームマグナムをゼロ距離で連射してやった。いくらビームコーティングしているといっても高出力のビームをゼロ距離で受ければ壊れる。ドリルは今、気絶して演習場の真ん中で伸びている。

それから急いで管制室に向かうとシャルが僕の名前を呼んだ、だから。

「お待ちせ、シャル！」

と言って管制室に飛び込んだ。

で、現在はホテルの自室、あれからが大変だった。

まずはシャルのお父さんの上に乗っている瓦礫を急いで退かし、応急処置をした、素人の目から見ても危ないくらいの出血量だったのでとりあえず止血をしこれ以上の出血を抑える。

シャルの足を挟んでいた瓦礫もこの時退かした。シャルは真つ先にお父さんの方へ向かっていった。どうやらわだかまりは取れたようだ。

後はアドックさんや他のスタッフたちの上に乗った瓦礫を退かし安否を確認したところ、奇跡的に全員生きていた。このときは安心して胸を撫で下ろした。

「でも、果歩さんも無事でよかったよ」

無事だった全員の応急処置をしていると救護員を引き連れた果歩さんが入ってきて僕はビックリしたよ、ホント。

「しかし、ホント大変だったよ」

暴走したドリル女はその後警備員に取り押さえられ、どこかに連れて行かれた。いくら社長の娘といえどこれだけの惨事を引き起こしたのだ相応の罰は受けるだろう。

シャルのお父さんは結局のところ無事だったらしい。出血量は多く見えたが実はそこまでだったらしく命に別状はなかったらしい。

「ほんと、濃厚な一日だったよ……………」

ドリルとの模擬戦に謎のISにMと名乗る女、そして極めつけはフランス政府からの事情聴取。不法入国者であるMとの関連性の有無に今回の模擬戦の詳しい内容などと、それだけで一日が潰れてしまった。もう疲れたよ……………。しかも明日も、日本に帰りたいよ……………。

「でも、Mの最後に言った言葉…………あれは一体なんだったんだ」

彼女が去り際に言った言葉『忠告だ、身の回りに気をつけろ、特に飛行機に乗る時とかな』

忠告ってどういうことだ？それに飛行機…………帰国時に何かあるのかもしれない…………明日果歩さんに相談するか。

とりあえず今日は寝よう、明日も早いだろうし……………。

……………????????……………

「どうやら、ダメだったようね」

「オータムか……ああ、見事に断られた」

「手荒なことはしてないでしょうね？」

「していない……実力を測るために一発撃っただけだ。だが何故、こんな遠回しなことをする奴が必要だったら強引に連れて来ればいいことだろうに」

「それは、あなたが知らなくていいことよ」

「チツ……」

「ところでちゃんと伝えといたの？彼に」

「……忠告はしておいた、後はあいつの問題だ」

「ええ、それでいいわ」

「……（何を考えているんだこの女は、理解できん）」

「『革新への光』……さあ、あなたはこの危機をどう乗り越えるのかしら。楽しみにしているは篠ノ乃優希君」

「……（本当に理解できん）」

### 第三十九話（後書き）

はい、三十九話でした。

今回はMとの戦闘はお預け、シャルと父親の邂逅ということでした。

邂逅の部分がとてつもなく難産でした、作者の文才ではこれが限界です……。文才を上げるためにドラゴン。ールを探しに行こうかな……。

なんだかんだいいながらフランス編が四話目に……。おかしい、三話程度で終わらせるつもりだったのだが。

予定通りいけばあと二話？で終わると思いますので、それから五巻目に突入しますので会長ファンは少々お待ちを。

次回も少し遅れるかもしれませんが。  
では次回の更新で。

#### 第四十話（前書き）

大変お待たせしまして誠に申し訳ありませんでした。

ようやく作者も夏休みに入り、執筆に時間をまわせるようになりました。

では、四十話どうぞ。

## 第四十話

昨日に引き続き事情聴取……という名を借りた勧誘がようやく終わった。

綺麗な部屋に連れて行かれ、政府のお偉いさんらしき人たちがやって来て僕にフランス国籍を取得しないかとしつこく言ってきた。

狙いは第四世代型以上の性能を誇るかもしれないISのユニコーンと篠ノ乃束の弟である僕を利用してパイプを作ることだろう。

僕は日本の代表候補生でもないしユニコーンも国が保有するISでもないからね、どこの国も所有権を主張できるんだよね困ったことに。

まあ、断ったけど。面倒だし。

そんなこんなで、長いようで短かったフランス旅行？は終了。蘭堂社の自家用機でフランスを飛び立った。

フランス政府からの鬱陶しい勧誘でどっと疲れたので少し寝ようと思ったんだけど……。

『現在この飛行機は我々が包囲している、こちらの指定する航路を飛べ。さもなくば撃墜する』

窓の外を覗けば二機のISがこちらの速度にあわせて飛行していた、二機のISはライフルを構えこちらを狙っている。

Mが言っていたのはこのことか……。まさかISを使ってくるのは予想外だったな。

「優希どうする外に出て迎撃する？」

「ん……ダメだね」

「何で？あの位のISだったらすぐに迎撃できると思うんだけど・・・」

まあ、そうなんだけどね。外を飛んでいる二機のISはラファール・リヴァイブ、学園でも使っている機体だ。リヴァイブ自体は第二世代最後発の機体で性能は第三世代型に準ずる性能を誇る機体だけど。何もカスタムされていない通常機なので性能からして僕たちのほうが有利だろう。

「まあ確かに僕たちでも倒せそうだけどさ、この飛行機のこともあるし。ほら現在地」

「あ、国境・・・」

「うん、もうドイツに入っちゃてるんだよね。他国で許可なくISを展開するのは犯罪だし」

特にシャルの場合は代表候補生だし国家間問題になりえるし。

「じゃあどうする？」

「うーん・・・とりあえず従っておこうか。生憎指定された航路はドイツ（・・・）を通るみたいだし」

「そうだね。ドイツ（・・・）を通るなら僕たちが出る幕は無いね」

この人たちも残念だね、もっと襲う場所を考えればよかったのに。ドイツには怖い黒ウサギさんたちがいるのに。

「じゃあ優希君、とりあえず従っておけばいいのね」

「あ、はい」

「わかったわ……機長」

『了解しました。……そちらの指示に従う』

『了解した。懸命な判断だ、安心しろ抵抗しなければ何もしない』

こっちの安全よりも自分たちの心配をしたほうがいいよ、まあ教えないけど。

さーて、ラウラは何時来てくれるかな。なるべく早く来てくれるといいんだけど。

く日本・IS学園く

「!？」

ガタッ!!

「ん？どうしたんだ筈？」

「食事中にどうしたのですの？」

「行儀が悪いわね」

「優希に危機が迫っている気がする!!」

「「「・・・・・・・・・・あ、そう」「」

・・・・・・・・おかしい、定時になっても蘭堂家の飛行機から連絡が来ない。

このことに気が付いたのはつい先ほど、三日間の短い期間での訓練も無事に終わりに行きと同じように蘭堂家の自家用機に拾ってもらった予定だった。飛行機が到着するまで管制室で待機していたのだが定時になってもこちらに連絡がこない。何かトラブルでもあったのか・・・・・・・・。

「隊長！」

「なんだ？クラリツサ」

どうしたそんなに慌てて？

「隊長、出撃命令です」

「何だと・・・・・・・・？状況を話せ」

「はっ！つい先ほどフランスとの国境付近に未確認IS二機の反応があったと国境基地から連絡がありました」

未確認ISか・・・・・・・・どこかの国からの宣戦布告か・・・・？だがたった二機でドイツに来るのは考えられんな、どこからかISを奪取

したテロリストの可能性が高いな。

「なるほど続ける」

「はっ！現在未確認機はドイツ国領を横断するかのよう飛行、方角的にどうやら地中海を目指しているようです」

横断するように？

「何故横断するのだ？ドイツから出ようとするのならISを展開しなくてもいいものだが・・・」

解せんな・・・。

「あ、そ、それは・・・」

む？クラリッサが言いよどむとは、何かあるのか。

「あの、隊長・・・冷静に聞いてくださいね」

「私はいつも冷静だぞ。早く言え」

軍人だつたら迅速に伝えないか。

「えつとですね隊長・・・その未確認ISなのですが現在旅客機を人質に取っています。おそらくそれが・・・」

なるほど人質か、だつたら納得が・・・ん？旅客機・・・だと？

「・・・・・・・・クラリッサ」

「は、はい・・・・・・・・」

「その旅客機とはもしや・・・・・・・・」

「は、はい・・・・・・・・。蘭堂家のプライベートジェットです」

「・・・・・・・・・・・・・・・・フ、フフフフフフフフ」

「た、隊長・・・・・・・・お、落ち着いてください。軍人は冷静に・・・・・・・・」

何を言っているクラリッサ私は冷静だぞ。ではまずは・・・・。

「戦争の準備だ!!」

「た、隊長!?!お、落ち着いて・・・・誰か手を貸せ!隊長がご乱心だ!!」

「放せ!!優希に手を出すものは八つ裂きにしてくれるわ!!」

「落ち着いてください隊長・・・・・・・・!!」

「放せ・・・・・・・・!!」

「?」

何だろっ今ラウラの叫びが聞こえたような……気のせい  
か。

「優希どうしたの？」

「うっん、なんでもない」

早く来ないかな、ラウラ。

「すまん取り乱した」

「い、いえ………」

ふう、少し頭に血が上っていたようだ。

「クラリツサ出撃準備は」

「あ、はい。すでに済んでいます」

「では急ぐぞ！」

「はっ！全員出撃だ！」

「「「「了解！」「」「」」」

「優希に手を出した奴らを血祭りに上げるぞ!!」

「……了か……で、ええ!?!」

覚悟しろテロリスト供生まれたことを後悔させてやる!!

あれから数十分そろそろドイツから出そうだな。ヤバイな〜ドイツから出ちゃうとラウラも手は出せないし。

「あ、優希。来たみたいだよ」

お、どうやら間に合ったみたいだね。

「一、二……三機『シュバルツェア・ハーゼ隊』のIS全機で来たみたいだね。後ろには輸送機もいる」

部隊全員できたんだ。まあ相手もISだしね相応の戦力か。じゃあ……。

『ラウラ』

『おお、優希か!無事か』

『うん、大丈夫だよ』

『そうか、少し待っていてくれすぐに奴らを八つ裂きにして開放し

てやるからな』

『そうじゃあ待って……あれ？今なんか物騒なこと言わなかった？ラウラ……』

八つ裂きつて言っただけだよ……。

『ではすぐに終わらせる！！』

『ちょ、ラウラ！？』

プライベートチャネル  
秘匿回線切られた……大丈夫だよ……ね？

『隊長目標補足しました』

よし、間に合ったな。だが国境まであまり無いな早急に制圧しなければ。

『ラウラ』

『おお、優希か！無事か』

『うん、大丈夫だよ』

プライベートチャネル  
優希からの秘匿回線、よかった無事だったか。

『そうか、少し待っていてくれすぐに奴らを八つ裂きにして開放してやるからな』

本来なら塵すら残さないのだがな、優希が無傷でいたから、八つ裂きで許してやろう。

『そうじゃあ待って……あれ？今なんか物騒なこと言わなかった？ラウ……』

『ではすぐに終わらせる！！』

『ちょ、ラウラ！？』

優希が何か言っていたが気にしない。今はなんとしてでも救出しなければ！

『隊長、あちらもこちらを補足したようです。指示を』

「人質の救出が最優先だまずはあの二機を旅客機から引き放すぞ。クラリッサは右のISを、レイチエルは旅客機の護衛。私は左のを殺る」

『了解しました。隊長くれぐれも相手を殺害しないでくださいね。確保する方向で』

「分かっている」

話せるくらいまでに抑えるさ。

「では行くぞ………<sup>ブレイク</sup>散開！！」

散開命令を出し私とクラリツサは瞬間加速で接近し蹴り飛ばす。  
虚を突かれたISは簡単に吹き飛ばされ飛行機から離れた。飛行機  
の傍には敵はいなくなりそこに大型シールド二枚を持ったレイチエ  
ルがカバーできる位置に付く。これでいい。

「く、くそ!」

蹴り飛ばされた敵ISは体勢を立て直すとすぐにでも私に反撃し  
ようとするが、そんな隙を私が与えると思うか?

「う、動けない!」

AICで敵の動きを縛る。一対一でこのシュヴァルツェア・レー  
ゲンに勝とうなど千年早い。

「終わりだ」

「え!? ちょ、まっ……」

「ファイア」

ズガンッ!!

何か言おうとしていたが聞かん。私は容赦なくレールカノンを叩  
き込んだ、一発じゃ終わらんはずだからもう一発。  
ズガンッ!!

「ふむ、気絶したか」

シールドエネルギーも切れたようでISも待機状態に戻った。ま

だやり足りなかったがしかない、どうせ基地に戻ったら拷も……  
取調べがあるしな、せいぜい苦しむがいい。

ガキンツ!!

「ガッ!？」

『隊長、こちらも終わりました』

む、こっちも終わったようだな。ふう……よかった優希に何もなくて……。

『!？隊長下から熱源、ミサイルです!』

何!？しまった伏兵か!

センサーを地面に向けると大量のミサイルポッドを装着したISが確認できた。

こちらに向かってきているミサイルは約八十発、しかも大半がハイマニューバーミサイル、ヤバイ!

「なんとしてでも撃ち落せ!!」

私はレールカノン、クラリッサは拡張領域にインストールしていたマシンガンでミサイルを迎撃するが数が多すぎる!

「しまった!？」

爆煙に紛れて見えなかったミサイルが一発抜けてしまった。あれはIS用のミサイル、ただでさえ戦闘用ではない飛行機に当たったすりゃ……。

AICでミサイルを止めてみよう試みるが無常にも射程距離外だ

った。

そしてミサイルは飛行機に……。

「優希ーーーーー!!」

『大丈夫だよウラ』

「え……?」

ピシュンッ!ドオオオンッ!!

ミサイルは爆発した。だがミサイルは飛行機に当たる前に爆発したよう見えた、現に爆煙を切り裂き飛行機は飛んでいる。

……なるほど、そういうことか。

ヒュンッ、ヒュンッ、ヒュンッ

私の周りを飛ぶ十二機の浮遊物、ユニコーンのビットだ。これでミサイルを撃ち落したのか。

「フッ、さすがは私の嫁だ」

「だから嫁じゃないって」

「優希どうしたの?」

「うつん、なんでもない」

ラウラに嫁だって言われ気がして思わずツッコんでしまった。

それよりも今のは危なかった、まさかあんな大量のミサイルがくるとは思わなかったよ。ラウラたちが全部撃ち落すのが無理そうだったから《妖精の円舞曲》<sup>フェアリーワルツ</sup>を飛行機外に展開して当たりそうなミサイルを撃ち落した。いや、後数秒遅かったら死んでたね今のは。

「優希大丈夫なの？ ビット十二機同時操作なんて今までしたことなかったのに……」

「だ、大丈夫だよ。ビットの操作だけだったら同時にできる……はず」

セシリアさんの大変さがようやく分かったよ、確かにこれは大変だ。ビットの位置に移動のイメージ射撃のタイミング etc……ビットと同時に攻撃なんて難しすぎるよ。今度からはこれも練習メニューに加えないとな……。

「そう……無理しないでね。あつ！ もう一回来たよ」

きたか……さつきは直撃は防げたけど爆風をモロに喰らったからな……この飛行機にも結構ダメージいつてるはずだ、次は無い。

全部撃ち落す！

センサーから来る情報を整理する。余計な情報はカット、いるのは味方の位置とミサイルの飛来予測位置だけで十分だ。

タイミング計算……ビット位置調整、なるべく射線が重なるように。

三……二……一……今！！

『す、すごい……』

『たった、一射で全弾撃ち落すなんて……』

クラリツサとレイチェルが呆然となっている、実を言うと私もだ。優希の操るビットが放ったビームは飛来してきたミサイルを全て撃ち落した。こんな神業めいた技をやった優希に驚いていたのだ。

……優希の奴、まだビットを扱い始めてから一ヶ月もしていないのに、どこでこれだけの技術を……こんなことセシリアにもできるのか？

いろいろと疑問があるが今は！

「クラリツサ何をしている！犯人を確保するぞ！」

『りよ、了解！』

「レイチェル、これを持ってる」

私は気絶していた敵IS操縦者をレイチェルに放り投げた。

『え？了解……って、うわわ！？』

確保には気絶した人間は邪魔だ！視界を拡大してミサイルを撃つたISのほうを見ると奴は逃走を始めていた。

「逃がさん！」

「ヒッ！？」

ワイヤーブレード全弾射出し相手の進路塞ぐ、そして……。

「動くな！動けば首が体から離れるぞ……」

両腕のプラズマ手刀を起動し、相手の首に交差するように突きつける。いくら絶対防御があるといえど最大出力だ頸動脈をきるくらい可能だ。

それを理解したようで相手もISを解除し手を挙げ投降した、馬鹿ではないようだ。だが……。

ガスッ！

「ガフッ！？」

一発殴って意識を奪っておく抵抗されるかもしれんな。あとはISを回収するだけだ。

「隊長」

「クラリッサ拘束しろ」

「了解」

クラリッサは拘束具を取り出して気絶した操縦者を拘束する。ISを展開したままできるなんて器用だな。今度から訓練に入れるか。

「隊長、拘束完了しました」

「よし、では行くぞ」

「はっ！」

そう言い私とクラリツサは飛び飛行機がいる高度まで上がる。

「レイチエル」

「あ、隊長！」

「お前は犯人を連れ先に基地に帰還しろ、クラリツサお前もだ」

「了解しました。隊長は？」

「私はゲストたちをエスコートする。基地に戻ったら受け入れ態勢を整えさせる」

「了解いたしました。少尉行くぞ！」

「待つてくださいよ」大尉、一人持つてくださいよ」

行っただな……。だがレイチエル二人持った程度で根をあげる  
とは、今度徹底的に鍛えなおすか？いや、いつそのこと全員でやる  
か。そうすれば隊全体の訓練になるしな。

「そんなことよりもだ……。こちらドイツ軍IS配備特殊部隊  
シュヴァルツェ・ハーゼ隊長ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐だ。こ  
れよりそちらを基地まで誘導する、燃料は大丈夫か」

「誘導感謝します。燃料はギリギリですが問題ありません、行けま  
す」

「そうか、では最短ルートでエスコートする」

『了解しました』

そう伝えたと飛行機は旋回し始める。後は基地まで戻ればいいだけだが油断はできんな、先ほどのように伏兵が潜んでいるやもしれんな。

……だが、一体あいつ等はどこの所属だったのだ、どこかの軍だとしたら装備が粗末なものだったしな、少しだったがジャンクパーツ混じっていた。だがテロリストだとしてもISを三機も所持しているのは考えられん……。今は考えないでおこう詳細は後にわかるだろうしな。それよりも今は優希たちを安全な場所へと誘導しなければ。

「では誘導する」

『よろしくお願いいたします』

センサーは最大にする。先ほどと同じ失敗はせん！

~~~~~

『先導の光』それが我々の組織の名だ。我が組織の行動理念は>人類の宇宙進出だ<、私は元々某国の宇宙開発機関の代表者であった。長年の功績もあって軍でもかなりの地位得ていていわゆるエリートだったのだ。

だがあるときを境に私はどん底まで落とされた。篠ノ乃束のISの発表だ、宇宙空間での活動を目的としたマルチフォーム・スーツ。これを見たとき私の心は躍った、私が長年求めていたものだった。宇宙空間での自由な移動に精密な作業が可能な機体。これこそが私の求めていた物だったのだ。

……だが、世界の反応は薄かった。だから私は上層部へと掛け合った宇宙開発で絶対にISは有用なものになると強く進言した。

でも、それが悪かった。私の発言を鬱陶しく感じた上層部は私に理不尽な異動を下したのであった。それまで積み上げてきた功績は全て白紙に戻されたかのように。だがそれもすぐに無くなった、何故かって？簡単なことだよ『白騎士事件』だよ。あの事件で上層部は掌を返すように私に擦り寄つてき、そして新しい部署に就けた。だが私が就いたのは宇宙開発課ではなく兵器開発課だった。

このときほど絶望したことはなかったよ、私が求めていたのは宇宙開発のためだったのに何故兵器を開発しなければならないのかと……だから、私はやったのだISのコアを盗み国から逃げたのだ。家族ももういなかったし友人も少なかったので国を捨てることになにも未練はなかった。

そして長い年月を掛け、同じ志を持つ者たちを集め『先導の光』を立ち上げたのだ。だが、宇宙開発を目指すとも言っても我々はISのことにはまったくの素人だった。それに資金もあまりなかった、スポンサーはいたがそれもいつまで続くかわからなかった。これでは宇宙開発の前に組織の維持すら儼ならない状態だった。

だが、そんなときの匿名の情報が入った、それは『篠ノ乃束の弟、篠ノ乃優希がフランスに来ると』さらにはデュノア社と蘭堂の人間まで同じ飛行機に乗っていると。これは神からの恵みだと思った、情報源はどこかわからないが恵みだと思った。

それから私たちは動き出した。なけなしの資金で裏ルートにてI

Sを買い。篠ノ乃優希が乗った飛行機をジャックすることにした。篠ノ乃優希はここ最近で優秀な開発者だという噂がよく流れている、彼をスカウトできれば我々の目的であるIS開発が大いに進展する。それに世界的大企業二社の人間だ身代金を要求したらかなりの金額を手に入れることができるのだ、やらないはずがない。私は目的のためだったらどんな手段でもやる、たとえそれが犯罪でも人類の発展のためなら私は何でもやるつもりだ。

そして、もしもスカウトを断り、抵抗するのであったら始末するよう指示を出しておいた。彼は優秀な開発者だ、後に強力な兵器を作るに違いない、だから始末する。まだ幼い子供を始末するのは心が痛むがしょうがない、これも我々のもくてきのためなのだから。

そして、作戦が決行された。操縦者には金で雇った元軍人のIS操縦者たち、性格に難があるが腕はいいと聞いた。準備は万全、だから成功するはずだった……なのに。

ダンッ!!

「失敗だど!!! ISを三機投入したのか!!!」

「は、はい……全機ドイツ軍に鹵獲されたことです」

なんとということだ……。IS三機、それは我ら『先導の光』の最大戦力であつたのにそれが全機鹵獲だ……。悪夢だ。

「……それで篠ノ乃優希の始末は」

「そ、それも失敗したようで」

ダンッ！！

「クソッ！！」

なんとということだ。これでは我々の目的が……………！！

バタンッ！！

「た、大変だ！？」

「どうした！」

「こ、ここが軍に囲まれてる！」

「なんだって！？」

「隠し通路の出口も全部だ逃げられねえ！」

そ、そんな馬鹿な……………ここはスポンサーの一人、軍の上層部の人間が用意した場所だぞ……………まさか……………！

「あ、あははは……………我々はもう用済みということか」

おそらく情報をリークしたのもそいつだろう、やつは我々を利用して篠ノ乃優希の信頼を得ようとしたのだらうおそらく……………そして失敗した場合はテロリストとして我々を処分する。わかりやすい事だ。

……………私の夢はここまでか。

そして大きな音とともに扉は開かれ。なだれ込んできた兵士たちによって私は拘束されたのであった。

第四十話（後書き）

長い間、執筆してなかったの文がめっちゃくちゃですね。すみません。これからリハビリと同時に書いていくので暫くはクオリティが下がるかもしれませんが少しの間我慢してください。

なるべく更新ペースを直せるよう努力いたしますので。これからも見てやってください。

では、次回の更新で

第四十一話（前書き）

気が付けばお気に入り件数が1000件を超えていた。作者自身もビックリです。こんな駄文を読んでもくれてありがとうございます。これからもよりいっそうがんばれるよう努力いたしますので、応援よろしくお願いいたします。

それでは四十一話です、どうぞ。

第四十一話

「はあ、ほんと疲れたよ、今回のフランス旅行（？）は……」

あれからラウラに誘導されて僕たちはドイツ軍の基地へ着陸した。それからが大変だったよ、また事情聴取という名の勧誘……。なんだけど今回は違った。

僕がミサイルを迎撃するためにビットを展開したのが拙かったらしい。飛行機内でISを展開してたのはまだ大丈夫だったんだけどビットは飛行機外、つまりドイツ領内で攻撃行動をとってしまった。これが拙かった自国以外でのISの展開は世界的に禁止されているこれを犯したものは犯罪者として指名手配されることになっている。でもドイツは今回は自衛のためだったので犯罪行為にはしないでくれたんだけど……。その代わりに条件を出してきたそれは……。

シュヴァルツェア・レーゲンの改良だった。

僕の持つ技術を使って改良して欲しいと言って来たのだ。断れば犯罪者として捕縛されてしまうので僕は了承するしかなかった。まあ、千冬さんみたいに数年間ドイツへの従軍とかじゃなくてよかったよ。

で、その日は色々な事情もあるわけで基地に泊まることになったんだけど……。うん、まあ……。すごかったよ色々特にシュヴァルツェア・ハーゼ隊、全員が僕のこと血走った目で見てたし……。コワカッタヨ。

ああ、そういえば僕たちを襲ってきたテロリストたちなんだけであの後すぐに捕まったらしい。アジトは捕まえた捕虜の証言からフランスにあることが判明したのでフランス政府に通告し制圧したみたいだ。詳細はわからなかったけど一体何が目的だったんだろう？まあ、どうでもいいか。

それで今日、日本に戻る事になったんだけど。飛行機、やつぱり爆発の影響で結構危なかったみたいだ基地までの距離は大丈夫だったけど日本までは無理と判断されたのでドイツ政府がチャーターした飛行機で帰ることになったのであった。これ以上政府に借りをつくりたくなかったんだけどな・・・しょうがないか。でもまあ色々あつて疲れたし新学期までゆつくり過ごそう。とりあえず今はおやすみなさーい・・・zzz。

まあ、帰ってからも箒姉やお祖父ちゃんの暴走を止めたり、夏休みの課題をやつてないことに新学期前日に気付いた一夏、鈴、何故かシャルやラウラを手伝ったりして結局はゆつくりできなかったのは別の話だ。

・・・誰も僕を休ませてくれないんだよね、うん・・・。

「以上が織斑一夏、及び篠ノ乃優希の報告になります。お嬢様」

「やん、お嬢様は止めてつて言つてるでしょ」

「それは申し訳ありませんでした。ですがどういたしますか？織斑一夏については現状変わってませんが、篠ノ乃優希については・・・」

確かにね・・・蘭堂がバックアップしているけど彼は有名になりすぎたわね。重要度は織斑一夏をを遥かに上回る。彼は今全世

界から期待され狙われている……………。

「……………そろそろ動きましようか」

「遅すぎる気がするよ〜」

「あん、そんなこと言わないでよ」

「はあ……………」

「まあ、冗談はさておき。これからの方針を伝えます」

「……………」

二人は先ほどまでの間の抜けた空気から一転、真剣な面持ちに変わる。さすが……………の一員そうでもなきや勤まらないわ。

「織斑一夏、及び篠ノ乃に接触します。あなたたちはバックアップを」

「了解いたしました」

私は持っていた扇子を勢いよく広げる、開いた扇子には『覚悟』と書かれている。

「さて織斑一夏君、篠ノ乃優希君。覚悟してもらおうよ」

そう呟き私は静かに扇子を閉じたのであった。

「どりゃーーーーー!!」

「甘いっ!!」

ガキンッ!

金属同士がぶつかる音がアリーナに何度も響く、一夏と鈴が何度も交差し雪片と双天牙月が激しくぶつかり合う。

新学期に入り初めての実戦訓練は一組、二組の合同授業であつた。それで専用機持ちである僕たちは何度も対戦カードを変えて戦闘訓練を繰り返していたのだつた。現在一夏と鈴が戦っており他のみんなは場所の関係で見学中。僕はというと……。

「優希さん!聞いてますの!」

「は、はい!」

中央タワーの上空でセシリアさんに何故か説教されていた。なんで?

先ほどまでセシリアさんにビット操作のコツを教えてもらっていたんだけど、僕がビットを全機操作しはじめたら急に怒りだしたんだよね。何でだろう?

「いいですか優希さん!そんな多くのビットを同時に使うなんて何を考えているのですか!」

「え?何か悪かつたの?」

「悪いも何もありません！いいですか、ビット系の兵器の操作には脳を使います。これはわかりますね？」

「う、うん……」

まだ少ししか使っていないけど、それは分かる。

「本来人間単体ではそんなことは不可能なのですが、何故使えるのかというとISのサポートしているからですわ。ISが操縦者の脳の演算能力を向上させさらにはハイパーセンサーによる情報によってビットは動かせますわ」

なるほど……そうなってたんだ。ビット系の技術に関してはからつきしだったからな、知らなかったよ。

「ですが、いくらISのサポートがあつたとしても結局は操縦者の脳に負担が掛かってしまいますわ。私のブルー・ティアーズのビット数が六機なのは、負担を気にせず操作できる最大数だからですわ」

「そうなんだ……」

「それを越したら、機数分脳に負担が掛かってしまいますわ」

脳への負担か……。確かにセシリアさんが怒るのも仕方ないよね。僕が操作してたビットは十二機、セシリアさんが操作するビットの倍だ、それも同時に。

あのまま続けていたら僕の脳にすごい負担がかかって、下手したら事故に繋がってたかもしれない。心配してくれてたんだ……。

「教えてくれてありがとう、セシリアさん」

「ゆ、友人ですから当然ですわ……」

ん？でもセシリアさんの話通りだとおかしいな……。

「セシリアさん。僕まだ数回だけど十二機使っても頭、痛くなったりしてないよ？」

「そうなのですか？……まあ、ありえなくはないですわね」

「なにが？」

「ごく稀にビット適正値が尋常じゃなく高い人がいますの。おそらく優希さんはその類なのでしょう。臨海学校の時のクシャトリアの操縦者の方もそうなのでしょう」

ああ、確かアーレス大尉だったけ。そういえばクシャトリアもビットを二十機くらい使ってたっけ、そう言われると納得だ。

「優希さんがそういう体質だったら大丈夫かもしれませんが、くれぐれも無理はしないように。どうあっても負担は存在するのですから」

「ありがとうセシリアさん。気をつけるよ」

会話が終わったときに下のほうで一夏と鈴の戦いも終わったようだ。きりがよかったので僕たちも下に戻ることにした。

勝ったのは鈴みたいだ。一夏勝率低いな……。まあ機体の仕様だから仕方ないかもしれないけど。

午前の授業も終わって僕たちは学食で食事をとった。一夏は鈴に二連敗して奢らされた、高いのを注文されてたので僕は心の中で合掌していた。ご愁傷様。

ちなみに僕の勝率は八割、負けたのはビットだけで戦ってみた時に接近されてそのまま……やっぱ難しいな。

で、現在。僕は一夏より先に男子更衣室から出てアリーナへと向かっていた。待ってくれて言ってたけど一夏に付き合ってたならなんか遅刻しそうだったから先に出た。

「元々は女子高だったから、しょうがないんだけどもうちょっと近くに造って欲しかったな更衣室……」

そんなこと呟きながら廊下を歩いていると……………。

「!?!」

急に後ろに誰かの気配を感じ振り返る。するとそこには水色の髪をした女性が立っていた。リボンの色からして二年生か。でも、一体いつから……さっきまで誰もいなかったのに。

「うん、なかなかの反応だね。おねえさんは満足だよ」

そう言いながら持っている扇子を広げる先輩、扇子には『天晴れ』と書いてあった。何なんだ？

「「死ねえーーーー！！」」

「ギャーーーー！！？」

あ、吹っ飛んだ……。

それから、千冬さんが終了というまで一夏はボコられ続けたのであった。自業自得だけどご愁傷様。

「で、どうしたんだ優希？」

「ごめんねラウラ、急に来ちゃって」

時間は過ぎて夜、僕はシャルとラウラの部屋に来ていた。シャルは現在セシリアさんと学園カフェに行っていていない。まあ好都合だけど。

「別に構わん」

「そう、よかった……で、用件なんだけど、コレを見て」

僕は持ってきた情報端末をラウラに見せる。

「コレは……シユヴァルツェア・レーゲンの改良プランか

!？」

「うん、とりあえず設計図ができたから持ってきたんだ」

「は、早いな……予想以上だったぞ」

「まあ、迅雷の時は二日だったからね……」

あの時はがんばったもんな……寝てなかったし。

「だが、すごいな……このような運用方法を考えると……」

「そこまですごくないよ。殆どが今使っている技術の応用だよ」

新技術を入れたら、色々と大変なことになりそうだし。

「いや、それでも凄いぞ……。まさかAICにこんな使い方があつたとは……」

「ああそれ？うんまあ、それが切り札にもなるからね。欠点もあるけど」

「そうか……。それよりもいつから作業を始めるのだ？」

「うーん、そうだな……。キャノンボール・ファストの時までには間に合わせるようにするよ」

「わかった、だが無理をするなよ」

「うん分かってるよ」

「そうか……。ところで聞きたいのだがここは……」

「あ、ここはね……………」

それから、二人で小さな端末を覗きながら改良プランの議論を始めたのであった。

そして三十分後、シャルが帰ったきた……………怒りながら。

「ラウラ、ズルイよ！！優希と二人きりなんて、それに顔近すぎ！！」

「邪魔をするなシャルロット私は優希と重要な話をしていたのだ」

「だ、だからって近すぎだよ！」

「こつでもしなければ見えないだろう」

「端末を机のモニターに繋がればいいでしょ！」

あ、その手があったか。

「何を怒っているシャルロット。それにお前が怒る資格などないだろ？」

資格？

「な、何が……………」

「私は知っているぞシャルロット・・・お前フランスに滞在している時優希と同室だったと！」

「ギクツ！?・・・な、何でそれを!？」

シャル、自分でギクツて言うのどうかと思うよ・・・でも何でラウラが僕とシャルが同室だったって知ってるんだろう？

「果歩からメールが来た！しかも写真付でな！」

果歩さん、あなたか・・・しかも写真付って・・・。

「むしろズルいのはお前だろうシャルロット！こんな羨ましいことに・・・！」

と、ラウラが送られてきただろう写真を見せようと携帯をこちらに出そうとした瞬間僕の視界は遮られた。

「シャル、手外して・・・見えないよ」

「ゆ、優希は見ちゃダメ!!」

え~~~~~。

「何でいつもお前のほうなんだ私にもチャンスを・・・!!」

「ら、ラウラ今回のことは謝るから落ち着いて！」

「私も抱き枕に・・・!!」

「うわぁ~~~~!!?言っちゃダメエーーーー!!」

と、ラウラが変なことを言い暴れ出し、それを何故か赤面しながらラウラを止めようとするシャル。部屋は一気に騒がしくなった。これは騒ぎを聞きつけやってきた千冬さんが来るまで続いたのであった。

その後は正座で終身時間までたつぷりとお説教を喰らいました。何故か僕まで…………。

「お嬢様、お二人はどうでした?」

「うん、まあまあね…………でも、篠ノ乃優希君のほうは少しはできるかも。少し手を抜いたけど私の尾行に気づいたし」

「そうですか」

「うん♪本格的な接触は明日からにするわ」

「では、明日の全校集会で…………」

「ええ…………驚くでしょうね。特に織斑君が」

さて、忙しくなるわね。明日から…………。

第四十一話（後書き）

今回はすこし走り気味でした。ですが、これ以上オリジナル話でいくとgdgdになりそうだったので。少し無理をしました。

それと前からやってみたかった原作機の改造をやってみることにしました。このためだけに優希にIS開発技術をつけたといっても過言ではありません。

それにビットのことに關しては独自の解釈でやらせていただきました。未熟な作者が考えたことなので、穴があると思いますので。ご指摘がありましたらどうぞ感想などに。

次もなるべく早く出せるよう努力いたします。

それでは次回の更新で。

第四十二話（前書き）

四十二話です、どうぞ。

第四十二話

「ふぁ~~~~・・・眠い」

僕は眠い目を擦りながら壇上を見つめる。今日はHRと一限目の半分を使って全校集会が行われた。今は生徒会役員の人が今年度の学園祭についての説明を始めようとしてた。

「それでは詳しい内容は生徒会長から説明させていただきます」

生徒会長の名が出るとざわついていた館内が一気に静かになった。そつえば生徒会長ってどんな人なんだろう？一学期の全校集会では一回も顔を出さなかったからね。

「やあみんな。おはよう」

「あ!？」

壇上で挨拶する女子は昨日廊下であつた謎の先輩だった。

「さてさて、今年は色々と立て込んでいたから挨拶がまだだったわね。私の名前は更識楯無。君たち学生の長よ。以後、よろしく」

そつ言いにこりと微笑む生徒会長、その笑顔は異性同姓関係なく魅了する、そんな笑顔であつた。

「さて、今月のイベントである学園祭。今回に限り特別ルールを導入するわ。その名も・・・」

特別ルール？……なんだろうとてつもなく嫌な予感がするんだけど……。

「各部対抗織斑一夏、篠ノ乃優希争奪戦！！」

会長が手に持った扇子を広げると同時に空中投影型ディスプレイが浮かび上がった。そこには僕と一夏の顔がデカデカと映されていた。

「え？」

「……えええええええー……！？」

全校生徒の驚愕の声で体育館は揺れた、文字通り。

僕がポカンとしていると周囲の視線が一斉に僕へと向く……。
・コワッ！？

「静かに。学園祭では毎年各部活動ごとの催し物を出し、それに対して投票を行って、上位組は部費に特別助成金が出る仕組みでした。しかし、今回はそれではつまらないと思い……。」

扇子を僕と一夏のほうへ向けて……。

「織斑一夏を一位、篠ノ乃優希を二位の部活動に強制入部させましようー！」

また体育館に女子たちの雄たけびが上がった。

「うおおおおおっ！！」

「素晴らしいわ、会長！」

「今なら会長に抱かれていい!!」

「狙うなら二位よ! 優希きゅんを我が部のマスコットにするチャンスよ!」

「秋季大会? 何それ美味しいの?」

「こらこらその体育会系女子、秋季大会のこと忘れちゃだめですよ。それよりも誰だ! 僕をマスコット化しようとしているのは! 怒らないから出てきなさい!

でも、僕のことを完全に無視ですか・・・会長。職権乱用つてやつじゃないんですか、これ?

「あはっ」

笑って誤魔化そうとしないでください。まあ、そんなことよりも・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ）」

僕の前にいる箒姉をどうにかしないと・・・・・・・・。。ぼ、暴走だけはしないように。

何とか持たせた。途中、緋宵を抜こうとしたのはあせったけど・・・てかどっから出したんだろ、ほんと?

本日の授業は全て終わり放課後に開かれた緊急HR、議案はもち

ろん学園祭の出し物についてなんだけど……。

《織斑一夏のホストクラブ》

《篠ノ乃優希のコスプレ撮影会》

《織斑一夏とツイスターゲーム》

《優希きゅんのニャンニャン喫茶》

うん、凄くカオスだね。とりあえず……。

「「却下」」

「「「「ええええええー！ー！ー！ー！」」」」

ブーイングの嵐、てか本気でやるつもりだったの？これを……。

「あ、アホか！誰が嬉しいんだ、こんなもん！」

「ここにいる！！」

「優希きゅん、はあはあ／＼／＼」

「私たちを喜ばしてよ！」

「助けると思っ、ね？先輩たちがうるさいんだよ」

「優希きゅんがニャンニャン……グハツ！？」

なんかさっきからおかしいのが混じってるような気がするんだけど……。。それにしても纏まらないな、担任の千冬さんは終わりそうにないから職員室に行っ、たし……。。副担任の山田先生は……役に立ちそうにないし。

だれかまともな意見はないのかな。

「メイド喫茶はどうだ」

混沌と化している教室で立ち上がりそう提案したのはラウラであつた……え？

「客受けはいいだろう。それに、飲食店は経費の回収が行える。確か招待券制で外部からも客が来るのだろう？それなら、休憩所として少なからず需要はあるはずだ」

淡々と話すラウラ。言っていることはとても理に適っているんだけど言っている人物が人物なので全員ポカンと口を開けている。

ラウラ……もしかしてこの前のメイド喫茶、気に入ったの？

「ラウラがこう言ってるけど……みんなはどう？」

みんな動く気配がないから聞いてみたけど……まったく動かない。どうしよう？

「いいんじゃないかな？一夏には執事が厨房をやってもらって、優希にはメイドをやってもらえば」

援護射撃とばかりにシャルがそう言うけど、ちょっと待った！今僕はメイドって言ったよね執事じゃないの！？

「織斑君が執事で優希きゅんがメイド……イイツー！」

「想像だけでご飯何杯もいけそう……」

「メイド服は任せろ！ここは手芸部の出番だ！」

ああ、みんなやる気満々だ。それに僕はメイドで固定なんだ……料理には自信があつたから厨房がよかったんだけどな。

「ちょっと待った!」

クラスがメイド喫茶の計画で盛り上がっていたのだが、そこに革
新の風が吹いた。

「メイド喫茶でいいの、みんな!？」

待ったを掛けたのは確か・・・リアーデさんだっただけ? 彼女は
机の上へ昇り全員が注目するなか異を唱え始めた。

「リアーデどうしたの？」

「いいじゃんメイド喫茶」

「優希きゅんのメイド服・・・」

「メイド喫茶・・・確かにそれもいいわ。だがそれには大きな欠点
があるわ!」

欠点って何かあるの？

「リアーデ、欠点て何？」

「それは・・・」

「それは・・・?」「」「」

「優希きゅんのコスチュームが一つに固定されるのよ!」

「」「」「な、なん・・・だと!」「」「」

「……はい？」

「メイド服の優希きゅん……確かにそれもいいわ。だけど、折角の機会なのよ！学園祭なのよ！もつと優希きゅんの可愛い姿を見たいと思わないの！！」

「……た、確かに……」「」「」

「いや、みんなそこは納得しないで！？しかもシャルとラウラ、箒姉も頷かないですよ！！」

「では、想像イマジンしてみよう……メイド、チャイナ、バニー・c・様々な格好をした優希きゅんを。想像イマジンしてみよう……短いスカート履いて見えないように必死にスカートの裾を押さえモジモジしている優希きゅんを……どう思う？」

「……すぐく萌えです……」「」「」

「凄く悪寒が走ります。」

「メイド喫茶では君たちの想像通りにならないだろう。だから私はコスプレ喫茶を提案する。……賛成のものは拳手を」

「シュバツ！」

「一夏以外全員……てかなんで山田先生も手を挙げてるの。」

「では、一組の出し物はコスプレ喫茶に決定した！」

「……わあ……」「……」「」「」

はあ………。溜息しか出ないや、もう。

こうして、学園祭の出し物も決まって一組は動き出したのであった。

学園祭の件についてのHRも長くなったがようやく終り、僕はシユヴァルツェア・レーゲンの改良プランを練ろうと部屋に戻ろうとしてただけど……。

「何で僕は生徒会室にいるの？」

「ん？どつしたのゆーゆー……ズズズー」

隣で暢気にお茶を啜っているのは同じクラスの、のほほんさんと布仏本音さん。僕は彼女に連れられここに来たのだ。

「こら本音、だらしない格好しないのお客様の前で失礼でしょう」

「えーいいじゃんお茶くらい……ズズズー」

「本音……（怒）」

で、のほほんさんを叱っている三年生の先輩。この人の名前は布仏虚さん。名前で分かる通りののほほんさんの……。

「あつ、痛いよお姉ちゃん」

お姉さんである。今朝の全校集会で司会をしていたのもそういえば先輩だった。なんで姉妹で生徒会に入っているのかというと、どうやらこの二人は生徒会長の幼馴染でさらには生徒会長の家に代々仕える家系だったのでその縁もあって入ってもらっているらしい。しつかり者の姉とのんびり屋な妹、どこにでもいるような姉妹、そんな仲睦まじい二人を眺めているとドアが開き誰が入ってきた。

「ただいま」

「お帰りなさい、生徒会長」

入ってきたのは生徒会長と一夏だった。何でここに？

「あれ？何で優希がいるんだ？」

「僕は布仏さんに連れられて来たんだけど」

と、僕は連れてきた張本人を見るのだがのほほんさんは……………。

「うまうま〜」

幸せそうな顔をしながらケーキを食べていた……………美味そうだな〜。

「うん、ちゃんと連れてきたようね本音ちゃん」

「はい〜、連行してきました〜」

連行って……………。

「さて、なんで二人に来てもらったのかを最初から説明させてもらうわね。一夏君と優希君二人が部活動に入らないから生徒会に色々苦情が寄せられていてね。生徒会は君たちをどこかに入部させないといけないようになったのよ」

なるほど・・・それで争奪戦か。なんて迷惑な話だ、こっちはISの整備や特訓、それに蘭堂社のIS開発などで忙しいのに部活している暇なんてないよ。

「交換条件としてこれから学園祭の間まで私が特別に鍛えてあげましょう。ISも、生身も」

生徒会長が自ら鍛えてくれるのか・・・強くなるには絶好のチャンスだな。学園最強、それが生徒会長の条件、それは生身でもISでもだ。その人が鍛えてくれるのは嬉しくもあるのんだけど、時間がな〜。

「すみません、断らせてもらいます。時間に余裕がありませんので」
「遠慮します」

で、おい。一夏、君は受けるよ。こんなチャンス滅多にないぞ。

「そう言わずに。あ、お茶飲んでみて。美味しいから」

「いただきます」

「・・・いただきます」

生徒会長に薦められて布仏先輩が入れてくれた紅茶を一口……
うん、美味しいな。

「次はケーキもどうぞ」

さっきのほんさんが食べていたケーキとは別のケーキだが生クリームがたっぷり乗ったショートケーキを一口食べる……
・おいしい……」どのケーキだろう？ 今度教えてもらおう。

「私の指導もどうぞ」

「いや、だからいいですって。大体なんで俺たちを指導してくれるんですか？」

それは僕も知りたいな交換条件としては会長のメリットが少なすぎる。何を考えているんだ？

「ん？それは簡単、君たちが弱いからだよ」

お、挑発ときたか。まあ、僕自身弱いことは知っているからの射ているんだけどね。

「それなりに弱くないつもりなのですが……」

「ううん、弱いよ。滅茶苦茶弱い。だからちょっとでもマシになるように私が鍛えてあげようという話」

うわー、えげつない挑発だな会長。冷静だったら全然乗らない挑発なんだけど一夏は変なところで負けず嫌いといつかなんか、そんなところがあるから……。

「じゃあ、勝負しましょう。俺が負けたら従います」

このように簡単に受けちゃうんだよね。てか、一夏。この人が学園最強だって覚えてるの？ いや、そんなことどうでもいい奴だもんな・・・セシリアさんの時だってそうだったしさ。

「うん、いいよ。あ、優希君も参加よ」

え？

はあ・・・少しは考えようよ一夏。

あの後すぐに僕たちは畳道場へ連れて行かれ勝負内容を伝えられた。勝負内容は会長を床に倒せたら勝ちとのことだった。条件としてはとてつもないくらいいのハンデなんだけど・・・それでも勝てないだらうな一夏は・・・で、結果は予想通り一夏のボロ負け・・・いや、会長を捕らえたところまでは良かったんだけど、相変わらすのラッキースケベスキルが発動して袴から会長の下着を晒してしまい動きが止まったところを投げられて、気を失ってしまった。

ちなみに僕は死角に入っていたので会長の下着は見えてないよ、それにさらされた瞬間には下を向いたし。

「あら、のびちゃったわね？ まあ、これで私の勝ち。・・・じゃあ、次は優希君」

はあ・・・僕の番か・・・。さつきから見てたけど会長はまだ本気でもないだろうな。僕は勝てないだろうな・・・まあ、ただでは負けないけど。

「ルールはさつきと同じでいいわね？」

「はい」

「じゃあ・・・始めましょうか」

と会長は構えも取らずに静かに佇む。かかって来いってことが・・・。

「・・・・・・・・・・」

（お、あの構えは・・・・・・・・どこかの古武術かな？やる気にはなっ
たみたいね）

さて、どうしようか・・・攻めるか、待つか・・・・・・・・。相手は最強、攻めても流されてカウンターを喰らうだけだろうしな。でも、待っていても勝てないだろうし・・・・・・・・ここは誘いに乗るか。

「・・・・・・・・・・、シッ！！」

（お、中々早いな。でも・・・・・・・・）

僕は会長へと一気に接近して回し蹴りを放つが、少し後ろ下がるだけでかわされてしまった。

（まずは一回目・・・って!？）

回し蹴りは空振ってしまったがこれで終わらない蹴りでできた回転を利用してそのまま後ろ蹴りを繰り出す。会長は空振りした後に僕を倒そうとしてたんだろうか少し前に出ていたので、僕の後ろ蹴りを腕で受け後ろに下がった。

後ろに下がり少し体制を崩した会長、その隙を逃さない！僕は会長の懷に潜り肩を会長の身体に密着させ篠ノ乃流古武術裏奥義『鎧潰し』を放った。

「ぐっ・・・!？」

会長は足が少し浮き大きく後ろに下がった。後ろに飛んで衝撃を逃したか・・・このまま倒れてくれればよかったんだけどな・・・。

裏奥義『鎧潰し』一見、ただの体当たりだと思われるけど実は違う。これは足から練り上げた力を一気に爆発させて密着している相手にゼロ距離でぶつける技である。技の名前の由来は戦国時代の女性剣士が刀を持っていない時に相手を油断させるために敵に抱きつきこの技を放ったときに相手が着けていた鎧が潰れていたからとのことだ。

まあ欠点は自分が相手よりも小さいこととゼロ距離まで接近しなきゃいけないことだね。

「ふ、フフフ。ゆ、油断してたわ・・・ごめんなさい、あの言葉は訂正するわ。あなたはまあまあ強いわ、だけど・・・いえ、何も無いわ。続けましょうか」

だけど・・・?何を言おうとしてたんだ会長は？

「じゃあ、今度はこっちから攻めさせてもらっわー!」

「!?(来る!)」

会長はいきなり目の前に現れたのかと思うような速さで僕に接近してきた。早いっ!? 会長は僕へと掌打を繰り返された。おそらく会長よりも軽い僕は簡単に後ろに飛ばされ……。

「ぐあっ……………うっ」

壁に激突、背中から叩き付けられ僕はそのまま意識を落としたのであった。

「きゅ……」

や、やちゃった……………予想以上に優希君が強かったから遂、本気で攻撃しちゃった。怪我は……………なさそうね。

でも、さっきの一撃はヤバかった。油断してたとはいえとっさに後ろに下がらなければ負けていた。冗談じゃなく最年少生徒会長が誕生するところだったわ。

「さて……………勝ったのはいいけどどうやって二人を運ぼうかしら」

—夏君も優希君も気失ってるし……………どうしようかしら『ドカーーーン!!』……………え?

「・・・・・・・・・・・・・・・・（ゴゴゴゴゴゴゴゴ！）」

優希君たちを運ぼうとしたとき道場の扉が吹き飛んだ、そしてそこには一人の修羅が立っていた。あれって確か優希君のお姉さんだったわよ・・・・・・・・ね？なんか凄く怖いんですけど・・・・・・・・。

彼女は優希君の方をチラリと見た後、私へ・・・・・・・・・・斬りかかってきた。

「て、ええええ！？」

ちょ、いきなり何なのこの子は！？私が振り下ろされた木刀をかわして距離をとる。

「ちょ、ま、待って」

「優希に手を出したものには・・・・・・・・・・」

彼女の髪が風も無いのにゆらゆらと動く・・・・・・・・ま、まさかコレが報告にあったバーストモードってやつ？冗談かなんかと思ってたけど本当だったなんて・・・・・・・・。。でもこれが報告通りだったらヤバイ、今の彼女はブリュンヒルデ以上の力を持っているかもしれない・・・・・・・・逃げられないだろうし・・・・・・・・。

いいわ、掛かってきなさい学園最強の実力見せてあげるわ！！

「来なさい！！」

「死あるのみ！！」

こうして、死闘が始まったのであった。

第四十二話（後書き）

いやー、生身の戦闘シーンは難しいですね、難産でした。

今回もオリジナル要素として学園祭の出し物をメイド喫茶からコスプレ喫茶に変更してみました。作者の病気が発症してこうなってしまいました反省もしてないし、後悔もしてない。（キリッ）

後悔をしているといえば優希を強くしすぎたかな〜とかなり思い始めています、まあ、道場の子だったので技くらいなら覚えていていかなと思いやってみたのですが、なんか強くなってしまっで・・・。

あと、久々に出してみましたHOUKIのバーストモード。なんとなくです。

今回の学園祭編はちょっとオリジナル要素が多くなっていると思いますのでご了承を。

では次回の更新で。

第四十二話（前書き）

はい四十二話です、どうぞ。

第四十三話

頬を撫でる風が鬱陶しく感じてゆっくりと目を開ける僕、なんで寝てたんだっけ……。あ、そうか会長に吹き飛ばされて気絶してたんだ。いやー全然反応できなかった、さすが学園最強。てか、風が気持ちいいな……。ってあれ？ここは道場じゃなかったけなんで風が通るんだ？

「？……。！？な、何これ！？」

そこで僕はようやく気がついた。風通しがいいのは外に出たからじゃない道場の壁が無かったからだった。

さらに辺りを見回すと箒姉がなぜか地に伏せていた。

「ほ、箒姉！？どうしたの！」

「……………」

だめだ、気を失っている。一体誰が……。？
ガラッ…………。

「！？」

「ゆ、優希君……。ようやく目覚めたのね」

「やっと、お目覚めか……………」

「か、会長に……。織斑先生！？」

物音がした方向にはボロボロになった胴着をきた会長と同じくボロボロになったスーツを着た千冬さんがいた。

「い、一体何が・・・？」

この現状の原因を聞こうとしたのだが二人は・・・・・・・・。。

「・・・・・・・・・・・・・・・・（ガクガクガクガクガク）」

凄く小刻みに震えだした。な、何があっただんだ！？

「む、無理に言わなくていいですから！」

「「そ、そうしてくれるとありがたい」」

この二人がここまで怯えるなんて・・・・・・・・何があっただんだ？

「助かりました、織斑先生。私一人だけじゃ・・・・・・・・（ヒソヒソ）」

「

「いや、私こそだ・・・・・・・・あの状態の篠ノ乃を一人で倒すのは到底無理だったからな（ヒソヒソ）」

ほんとに大丈夫なのかなあの二人、なんか小声で話し合ってるけど。あれ？そういえば・・・・・・・・。

「一夏は？」

「「え？」」

あの後、瓦礫に埋もれていた一夏を掘り起こして、強引に目を覚まさせた。いや、生きていてよかったよホント。

その後は箒姉が千冬さんに首根っこを引っ張られ生徒指導室に連れて行かれた。明日まで反省文五百枚だとのこと……ご愁傷様、箒姉。……てかあの惨状をやったの箒姉だったんだ。後で説教かな。

で、今僕たちはというと。

「あれ？優希に一夏？」

「い、一夏さんどうかしましたの？確か第四アリーナで訓練と聞いていましたけど」

「それに優希は確か、改良プランを練ると言ってなかったか？」

会長に連れられて第三アリーナに来ていた。いたのはセシリアさんにシャル、ラウラの三人であった。

「……そちらの方はどちらさまですの？」

セシリアさんがむっとした表情で聞いてきた、嫉妬してるな。まあ、一夏には伝わらないだろうけど。

「せ、セシリア。生徒会長だよ」

「ああ……。そういえば、どこかで見たような顔ですね」

セシリアさん、機嫌が悪いのは分かるけどそれはさすがに失礼だよ。それとフォローご苦労様シャル。意味無かったけど。

「まあ、邪険にしないで。あ、私はこれから一夏君と優希君専属コーチをするから今後も会う機会があるわね」

会長がさらりと爆弾を投入した、この三人にそんなことを言ったら……。

「一夏さん！」

「優希……。ということ？」

「優希、お前……！」

騒がしくなるんだよね……てかシャル、怖いよ目が笑ってない。それにラウラ、AIC解いて、何もしなし逃げないから。

「はいはい、仲がいいことは結構だけどそろそろはじめましょう。まずは経験者の真似からセシリアちゃんにシャルロットちゃん、『シュータフロ』で円状制御飛翔をやってみて」
サークル・ロンド

あれ？それって確か……。

「え？でもそれって、射撃型の戦闘動作バトルスタンスなんですけど」

「やれと言われればやりますけど。一夏さんのお役に立ちますの？優希さんなら分かりますけど……。」

確かに、一夏の白式は完全な近距離型だ、一応第二形態になったことで大出力の荷電粒子砲が追加されたけどこの戦闘動作は面制圧が目的の動作だ。連射性が低い射撃武装でもできるだろうけど、一夏は……。

「まあ、一夏君の射撃能力じゃあまり役に立たないでしょうね」

射撃下手だもんな、十分当たる距離でも外すくらいだし。でも、だったら尚のこと役に立たないんでは？

「だから、あえて……」

「近距離で叩き込む」

「そう。鋭いね、ラウラちゃんは」

また扇子をバツと開く会長。そこには『見事』と達筆で書いてあった。一体何時変えたんだろう？

「じゃあ、はじめちゃって。二人とも」

『じゃあ、はじめます』

『一夏さんよくご覧くださいませね』

と二人は地面から少し浮かびお互い右に動き出した。二機のISはアリーナの壁を背に向けて円を描く。このとき二人は銃口を敵に向けたままである。

加速していき何回転か、した後二人は撃ち合いだした。円軌道を崩さずに不規則な加速を繰り返し攻撃を回避していく。減速はしな

い徐々に早まっていく。

「すごいな……あれだけの動作、かなり複雑なはずなんだけど」

あの二人は今、射撃と機体制御をマニュアルで同時に行っている。さらには回避と命中を同時に意識をしている、これは機体を完全に制御している人ができることだ。

僕にあんなことができるのだろうか……。

『一夏さん！何をしているのですか！！』

『ちよっ、セシリア、危ない！』

『へ？』

ドーンッ！

戦闘機動中に別の何か気をとられたセシリアさんがシャルの射撃を受けた後そのまま壁に衝突した。一夏がどうか言ってたな……なるほど。いつものことが。

現在一夏は背中に会長が載かっている状態、その姿に嫉妬したんだろう。

「一夏さんのせいですわ！」

「なんでだよ」

「はあ………」

そんなやり取りを見て僕はラウラと一緒に溜息をついたのであつ

た。

まあ、やることになったんだ精一杯がんばるか……。

「じゃあ、優希君さっき言ったことに注意してね」

「はい」

結局セシリアさんは一夏に気をとられすぎてお手本を降板させられて代わりにラウラがやった。で、今度は実践することになった。先に一夏がやったのだが結果は酷いものであり何度も壁にぶつかり終いには壁に頭から刺さった。どこをどうしたらそんなことができるの？

まあ、その姿を見て会長が爆笑してたけどね。ちなみに今はアリーナの隅っで膝を抱えている。

「じゃあ、始め！」

会長の合図と同時に僕はまずはゆっくりとターゲットバルーンの周りを正面に置くようにしながら旋回する。徐々に加速していくがこの時点で機体制御は中々難しいものである、ユニコーンのスラスタは量産型ISよりも多いためそれがより一層難易度を上げているのだ。

（スラスタのタイミングが合わない！マニュアルだとここまで難しいんだ……！！）

「優希君、動きがブレてるわよ。集中集中」

（してますよ！……うわっ！？）

会長に話しかけられたときに意識がそっちにいつてしまい。バランスを崩し壁にぶつかりそうになったがすぐに体勢を戻しぶつかるのは防いだ。

ふう……何とかカバーしたけどスラスターへの集中を少し切らただけでコレだ。やっぱバランスが悪い、なんでだ？……・……あっ！

「会長、ちよつとタイム！」

「ん？どうしたの？」

僕は止まりユニコーンのステータスが映ったウィンドを開いた。それを注意深く見ると僕の思ったとおりのことが映っていた。

僕が確認したかったのはスラスターへのパワー配分値だった。この前のメンテナンスのときに少しだけ値を弄ったのだ。結果は推力が上がり使いやすくなったのだが、それはオートの場合だけだ。この調整はマニュアル操作のときのような複雑な操作に向かないんだ。僕はスラスターへのパワー配分を元の値に戻す。コレで少しはマシになると思う。

「もういいかな？」

「はい」

「じゃあ、もう一度やってみて」

先ほどと同じようにゆっくりと旋回を始める。でもさつきとは違って動きはブレずとても安定している。

「（へえ〜）じゃあ、もっと加速してみよう。それと三十秒後に射撃開始」

やりやすくなったといってもやっぱり難しいものであり、制御は難しい。でも文句言ってもしょうがないので意識を集中させる。イメージをしつかりと固めそれを行動に移す。

旋回のスピードが徐々に上がっていくなかビームマグナムを展開してターゲットへと向ける。でもそれがダメだった。

「にやうっ!？」

ビームマグナムのほうへと意識がいきすぎたため僕は背中から壁にぶつかってしまった。

「あらら、大丈夫〜優希君？」

「だ、大丈夫です」

シールドバリアと絶対防御があるからこの程度じゃ怪我はしないけどやっぱり振動はある。僕は少しフラフラになりながらも立ち上がった。

「そう、だったら。もう一回行きましょうか」

「はい!」

まあ、いまのでなんとなくコツが分かってきた。後、空力を調整

すれば……。

「じゃあ、始め」

僕はもう一度、旋回を始めた。さっき掴んだイメージをより明確にしながら。

……信じられないわね。アリーナ内を優雅に旋回している少年がISの操縦を始めてまだ半年程度だなんて。

この円状制御飛翔は機体制御が難しくて操縦暦が半年程度では相当練習しなければできないはずの技術なのに彼は……優希君はたった数回でマスターしようとしている。まだ完成はしていないが、後二回ほどすればできるようになるだろう……こんなことができるのは天才かよほど飲み込みがいいのどっちかだ。

「……末恐ろしいわね」

さっきの道場の時もそうだったけど、彼が最近体術の訓練をしていないのは知っていたのだが、それであの威力の技と動きを見せたのだ、鍛えればもっと強くなる。

「……もしかして、私が在学中に生徒会長が変わっちゃうかもしれないわね」

『うにゃー!?』

あ、また失敗した。だけどそれもまだ先っぽいわね、それに私もそう簡単に最強の座を渡すつもりもないし。

それにしても優希君、悲鳴が猫っぽいわね。今度ネコ耳でもつけてみようかしら。

「「あー……疲れた」」

ようやく会長から解放され、何度も壁にぶつかり僕たちはボロボロだった。

「優希はまだいいだろあの後すぐにできたんだし。俺なんか何回ぶつかったか覚えてないぞ」

「そうだけどさ……」

まあ、僕はあの後何回か失敗した後できるようになった。ただしバルーン相手に限るけど。相手が動くようになったらさらに難易度が上がった相手の銃弾を避けるための加速のタイミングや射撃の照準やるが多すぎる。一体シャルとラウラの何発の銃弾を浴びたことか。

「あ、ヤベッ！優希、ちょっと俺教室に行ってくる！」

「どうしたの？」

「明日提出のプリント置きっぱなしだった、シャワー先に浴びてい

いぞー!」

そう言い一夏は慌てて部屋から出て行った。

「・・・・・・・・あ、そうだ」

僕は携帯を取り、電話する。誰にかというと・・・・・・・・。

『優希お兄様、どうかいたしましたか?』

舞華ちゃんにである。

「あ、うんちよつと舞華ちゃんに用事があつてね」

『私にですか?』

「うん、舞華ちゃんIS学園の学園祭の日って知ってる?」

『学園祭の日?はい、知ってますよ。それがどうかしたんですか?』

あ、知ってるんだ。じゃあ、大丈夫そうかな。僕が舞華ちゃんに連絡した理由、それは今日配られた学園への招待券を彼女がいるかどうか確認するためだった。

「いやね、今日、生徒に一枚ずつ招待券が渡されてね。舞華ちゃん欲しいかなーって」

舞華ちゃん、この前話をしたときに来年にはIS学園に入学しようかと思っているらしく。学校見学もかねてちょうどいいかと思っただけで誘ってみることにしたのだ。

『欲しいです！あ、でも……』

「ん？どうかしたの？」

もしかして用事あったのかな？

『あ、実はその、蘭堂家はIS学園のスポンサーなので毎年学園祭に招待されているんです。だから……』

そ、そうだった。忘れてたけど蘭堂家ってIS学園の大手スポンサーだったんだ……。

「じゃ、じゃあ招待券は必要ないんだ……。」

あー、どうしよう呼ぶ人いなくなったな。しょうがないからクラスの誰かにあげようかな……。

『すみませ……あつ！そうだ。お兄様、やっぱり招待券ください』

え？どうしたんだ？

「え、でも舞華ちゃんには必要ないんじゃない？」

『そうなんですけど、実はお友達にIS学園に受験しようとしている子がいます。その子に……』

なるほど、そういうことか。

「わかった。じゃあ招待券は郵送するからね」

『ありがとうございます!』

「そのお友達によろしくね」

『はい!では……』

そこで、通話が切れた。それにしても嬉しそだったな舞華ちゃん。でもお友達って誰なんだろう、もしかして五反田食堂で会った蘭って子かな?この前友達って言ってたし。

まあ、舞華ちゃんが喜んでくれてよかったよ、招待券も無駄になら無かったし。

「さて、一夏が戻ってくる前にシャワー浴びちゃおう」

着替えを持ってシャワールームに入る。また、お風呂に入りたいなー、今度はいつだろう?

「はいはい、どうしたの舞華?」

夕食も終わって、部屋でゆっくりしていると友達の舞華から電話が掛かってきた。

『あ、蘭ちゃん。今大丈夫?』

「ええ、大丈夫よ。で、どうしたのよ？」

珍しいわね、舞華から電話が来るなんて。

『えへへ、蘭ちゃん。IS学園に行ってみたくない？』

「へ？IS学園って……まあ、確かに来年受験しようと思ってるけど」

お爺ちゃんもお母さんも反対してないし、まあ兄貴だけは反対してるけど。

『違うよ、今年に行きたくない？』

「舞華、どうしたのよ？」

さっきから変ね。まあ、ちょっと外れた子だから気にならないけど。

『答えて』

「そりゃ行きたいけど……………」

一夏さんに会いたいし…………。

『そんな蘭ちゃんに朗報です！実は…………』

「実は…………？」

なによ、まさかIS学園に行けるとでも言うの。

『私の手元にIS学園学園祭の招待券があるんです!』

なん……ですって!

「ちょ、ちよつと舞華、それ本当なの?」

IS学園って国の重要施設だから見学もできないし、行けるのは年に何回しかないのよ。それに行けるなんて……。

『蘭ちゃん、欲しい?』

「ほ、欲しい!」

こんなチャンス滅多にないわ! なんとかしてでも行かなければ!

『フッフ……そう言うと思った。いいよ、あげる』

「本当! ありがとう舞華!」

やった! 一夏さんに会える!

「ホントにありがと舞華。でも、どうやって手に入れたの?」

これって、IS学園関係者とかにしか渡されない貴重な物のはず
なんだけど……。

『優希お兄様に貰ったんですよ』

「お兄様って……いつも舞華の話に出てくる例の?」

よく、お兄様お兄様って言うてるけど、IS学園の関係者だったんだ。まあ、あの蘭堂財閥の人だもんね変では無いか。

『はい。あ、学園祭の時に蘭ちゃんにも会わせてあげるね。優しく綺麗で……』

「はいはい、楽しみにしてますよ。じゃあまた明日ね」

『あ、うん。じゃあね蘭ちゃん』

ふう……あのまま続いてたら絶対長くなってたわ。でも、その優希お兄様が……どんな人なんだろ？

まあ、目的は一夏さんよ！ただでさえ会える時間が少ないんだから、コレを機にアピールするんだから！

「やってやるわ！おー！」

「早く書け、後三百枚だ」

「うう……何故私が……」

「いいからさっさと書け」

「……優希分が足りない」

「ちょっと待て篠ノ乃！ここで暴れるな！」

「優希……………」

「わ、分かった。後十枚でいい！だから……………」

「わかりました（カキカキ）」

「……………はぁ」

第四十三話（後書き）

はい、四十三話でした。

原作では学園祭に弾しか来ませんでした。が蘭も来ることにしました。
作者は蘭が結構好きです、なのにあまり出番がないのでせめて・・・。

今回ここまでです。では、次回の更新で。

第四十四話（前書き）

早く書き上がりましたが、少しだけ短いです。
四十四話です、どうぞ。

第四十四話

「最近の優希、凄いな」

「うむ、確かに吸収力が凄まじいな」

学園カフェで僕たちはお茶を飲んでいた。話し合っているのは優希のことだ。

「教えたことをすぐに覚えて自分の物にしちゃうしね」

「ああ、私たちが何度も練習したことでもな……」

ホントだよ、軽く嫉妬を覚えるよ、ああいうのが本当の天才っていうんだろうな……。

「ところでさウラ、一体いつからシュヴァルツェア・レーゲンの改良が始まるの？」

「うむ、詳しいことは教えられないが学園祭が終わってから始めるとのことらしい」

「そうなんだ」

優希が改良した機体か……改悪にはならないと思うけどどんな風になるんだろう？

「そつえばシャルロット。報告にもあったがフランスが第三世代型ISの開発に成功したというのは本当か？」

「耳が早いね。うん本当だよ、この前実家から連絡が来たんだけど。数日前に完成したみたい元々機体自体は完成して以後はイメージインターフェイスだけだったみたいだからね。まあそこは優希の協力があつたからなんだけどね」

これはエドガー小父様が通信で言ってたからね、父さんは優希の力を借りたのが癪みたいらしいけど。

「そうか・・・新型のテストは誰がするのだ、お前か？」

「それはまだ分からないんだ、政府はまだ検討中みたいだし」

コレが成功しないとイグニッションプランに入れないし、政府も慎重になるよ。データ取りの場としてはIS学園は最高の場所なんだけどね。

「まあ、良かったのではないか。これで実家の倒産は免れそうではないか」

「う、うん・・・」

「?どうしたそんな驚いた顔をして何か変か・・・?」

「い、いや、ラウラも変わったなーって思ってたさ」

「そうか?私は私のままだぞ?」

「そんなこと無いと思うけどな」

少し前までのラウラだったら、絶対にそんなこと言わないと思うしね。変わったよ……。やっぱり恋のお蔭だったり……。なんちゃって。

「どうかしたかシャルロット？」

「な、なんでもないよ。そ、それよりもさラウラ、なんであの時メイド喫茶なんて言ったの？」

「あの時？……ああ、学園祭の出し物を決めるときか」

「そうそう、僕と優希以外全員固まって大変だったんだよ」

まさかラウラがあんなこと言うなんて誰も思わないだろうし。実際僕も固まりかけたよ。

「あれか、別に変わったことではないだろう。学園祭はそういうものだとクラリツさも言っていたぞ」

ま、まあ、そうなんだけど……。てか、またクラリツさんか。あの人日本のサブカルチャー変な風に取り込みすぎだよ。まあ僕も完全に理解してるわけじゃないけど。

「それにだな……」

「それに？」

「その……。まあまあ楽しかったからな、喫茶の仕事も」

か、カワイイ！少し照れくさそうにしているラウラがカワイイ！

だ、抱きしめたいよ……。ってダメダメ。

「そ、そうなんだ」

「うむ」

今日はネコパジャマを着てもらおう、そしてギューってしよう！

「ところで、シャルロット。準備はできてるだろうな」

ラウラの声が変わった、準備……。あれのことか。

「もちろんだよラウラ」

「そうか、ならいい」

「ラウラも準備は怠ってないよね？」

「だれに言っている、すでに終わっている」

学園祭の出し物が決まったときからこの計画は始まっていたんだ。
そう全ては……。

「「優希のコスプレ姿を全部撮るために！」」

このために某電化街の至る所を回って最高のカメラを買ってきた
んだから。絶対に撮る！

「「ふ、フフフフ……」」

楽しみだな〜学園祭♪

ゾクッ！！

「！？い、今、何か悪寒が……………」

な、何なんだ一体…………。

「優希、ここ手伝ってくれー！」

「あ、うん」

気のせい…………だよね？

で、会長の指導や準備、ISのことなどで忙しかった日々は過ぎていき。ついにこの日がやって来た。学園祭当日である。

一般開放はしないので開始の花火はないけど。生徒たちはすごく盛り上がっている。

「うわぁ、織斑君が燕尾服で執事してる！」

「うそ！ホントだ、みんなに知らせなきゃ！」

「あ、あの服力ワイイ！」

「うわっ、これ露出度高くない？」

「篠ノ乃君はどこっ！」

「か、カメラの用意を！」

一組の『コスプレ喫茶「神の領域」』も朝から盛況でてんでこ舞いだ。盛況すぎて厨房が回らないため僕も入っている。

「クラブハウスサンドできたよ！」

「はい！」

「篠ノ乃君、こっちに戻ってきてよ！」

「ダメよ、今篠ノ乃君に抜けられると回なくなるよー！」

「こっちだって篠ノ乃君を指名しているお客さんいっぱいいるのよ
！！」

ちょっと待って、指名って何！？ここってそんな制度あったの！？

「うぐぐ……しょうがない篠ノ乃君。接客に戻って」

「え？いいの……？」

こんな忙しいのに。

「大丈夫よ、代わりにこの子が入るから」

「え？ちょ、私は接客のほうが……」

「ほらほら、お客さんが待ってるんだから」

「う、うん」

良かったのかな？でも大丈夫って言ってたしね。僕も接客のほうに帰ろう。

僕はエプロンを外してお盆を持ちカフェスペースに入った。あ、ちなみに今の僕の服装は・・・。

「……ま、まさかの巫女服だと・・・！？」「……」

そう巫女服だ。コスプレって言ってたけどこんなのでよかったのかな？これ神社の手伝いしているときはいつも着てたからね。昔は普段着みたいなものだったし。

カシャカシャカシャカシャカシャッ！！

うわっ！ま、眩しい、これってカメラのフラッシュ？なんで・・・。

「お、お客様！撮影会はまだですから。カメラのご使用はお止めください！」

さ、撮影会？何それ、僕聞いてないんだけど？

「ゆ、優希。大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ。シャ・・・ル」

チカチカする目を擦りながらシャルを見ると・・・・・・・・なぜか執事服のシャルが立っていた。

「・・・・・・・・シャル、なんで」

「言わないで！わかってるから……！」

何でまた男装してるんだ。体格も前みたいに男っぽくなってるし、多分だけど男装用のISスーツを着ているんだろう。でもなんで？

「うう……優希が巫女服とか着ることになったから男分が足りないって話になってそれで……」

なるほど、だから男装してIS学園に入学してきたシャルに白羽の矢が立ったというわけか……ご愁傷様。

「僕もカワイイ服着たかったよ……」

「が、がんばれ……シャル」

本気で落ち込んでいるシャルの肩を叩く。僕だってそっちの方がいいけどさ。

「優希……」

「コラー……そこっサボらないの……！」

「うわっ！？驚いた、そうだった今は仕事だった、戻らないと……」

「と、とりあえず仕事に戻ろうシャル」

「……うん」

シャルは少し肩を落としながら接客に戻っていった。後で何か奢

ってあげよう。

さて、僕も仕事に戻らなきゃ。あ、そこのお客様写真はNGですからね。

その後から僕は接客に集中した。まあ、何回もお色直しとか言われて、服を着替えさせられたけど。メイド服にナース服、で、今はメイド服。ほかにチャイナ服とかもあったんだけどスリットが際ど過ぎたので何とかやめてもらった。で、忙しすぎるなか、あの人はやって来た。

「はあ、い、楯無おねえさんですよ」

「「あ、会長」「

IS学園の生徒会長更識楯無先輩が一年一組にやって来た。相変わらず扇子には達筆で文字が書かれていて今回は『参上』と書いてあった。

でも格好が変だった。この人は何故かメイド服を着ていた。

「やん、楯無って呼んでよ」

「で、会長はどうしてここに？」

「つれないわね、優希君。あ、とりあえずケーキセット一つね」

「接客しないんですか……」

「うん」

だったらなんでその格好で来たんだ？

「どうもー突撃隣の新聞部でーす！あることないこと捏造しにきましたー！」

新たな来客は新聞部の副部長、黛薫子先輩だった。ことあるごとに僕と一夏の写真を撮りにくる人だ。

「いらっしやいませ、ご注文は？あ、ぶぶ漬けですね。わかりました」

「え、私まだ注文はしてないよ。てかそれって遠回りで帰って意味だよねー！」

あ、分かるんだ。これって関西圏の人にしかわからないネタだと思ったのに。

「もう、何でそんなこと言うのかな先輩は寂しいぞ。おっと、それよりも優希君のメイド服姿を一枚っと」

だって、入ってくるなりあんなこと言われれば、帰ってほしいと思いますよ。それよりも許可なく写真撮らないでください。箒姉に言いつけますよ。

「そ、それだけはやめてください。カメラ全て壊されそうだし」

土下座までするなんて。よほど箒姉にボイスレコーダーを壊され

そうになったのがトラウマになったんだ。今度からこれを使おう。

「あ、薰子ちゃんだ。やつほー」

「わお！ たっちゃんじゃん！ メイド服も似合うわね！」

あれ？ 会長と黛先輩って知り合い？ まあ、二人とも二年生だから変ではないか。あれ？ 箒姉が手招きしてる。何だろう？

「どうしたの箒姉？」

「優希、休憩だ」

「あれ？ 休憩ってまだのはずじゃ・・・」

「いや何、優希は人一倍がんばっているからな、代わっていいという言っのがいてな。だからな・・・」

箒姉が後ろを見ると今が休憩時間のはずの人が三人が頷いていた。でも何で顔が青いんだろう風邪かな？

「だから気にするな」

「じゃあ、お言葉に甘えて行って来ようかな。そろそろ舞華ちゃん来る時間なんだよね」

「そうか、だったら迎えに言ってやれ」

「うん。じゃあ行ってきます」

そう言って僕は代わってくれた三人のも一瞥して教室から出た。
とりあえず校門の辺りで待ってたらいいかな？そしたら会えるだろうし。

〳〵真相〳〵

まったく忙しすぎるぞ！何なんだ一体、でもまあ久々に優希の巫女姿が見れたから悪いことばかりでもないな…………。

「篠ノ乃さん！控え室から茶葉の替えを持ってきてくれない？」

「む、わかった」

この姿で廊下を歩くのは気が進まないが、しょうがないか。

「茶葉は確か…………む、何だあれは？」

控え室の一角に設けた一夏と優希用の着替えスペースに誰がいる、何をしているのだ？

「カメラの位置は大丈夫？」

「OK、全部写るわ」

「これで、織斑君と篠ノ乃君の…………」

「…………グフフ…………」

…………ほう、これが巷に聞く盗撮とやらか。一夏はいいと

しても優希までやろうとするとは・・・どうしてやろうか？

「随分と楽しそうだな」

「・・・へ？・・・ヒーーーーー！？」

失礼だな化け物を見たときのような悲鳴を上げるとは。

「こ、これは、その・・・」

「あ、アハハハハハ」

「あ、ちようちよだ、まってー」

最初のほうはいいが後の二人大丈夫か？一人は目からハイライトが消えたし、もう一人は何も無い虚空に手を伸ばしてるし。

まあいい、優希に手を出そうとするものには・・・。

「地獄を見せてやろう」

「・・・い、イヤアーーーーー！？くぁwせdrftgyふじこlp」

結局、休憩時間を返上して優希を休ませることにした。私は優しい姉だな。

第四十四話（後書き）

ここ最近暴走が……！特に篝ネタがかなり思いついてしまつて。

学園祭に入りました、さてこれからどうしようか……。優希をメイド服を着せたら、ミルクを持たせたいと思っている作者の脳は腐っているのでしょうか？

まあ、今回はここまでです次回の更新で。

第四十五話（前書き）

ゆ、指が進む・・・こんな早く書きあがるなんていつぶりだ？
まあ、そんなことはどうでもいいとして四十五話です、どうぞ。

第四十五話

急にできた休憩時間、僕は舞華ちゃんを迎えに行こうと校門に向かっていたんだけど。

「結構なんで、それとちゃんと学園の許可は取ってるんですか？取ってなったらIS学園規約違反になりますけど」

「そ、そう言わずに」

途中、IS装備開発企業の人に捕まってしまってた。よくいるのだこいうのが。世界で二人しかいない男性のIS操縦者、そのどちらかに自社の製品を使って貰えば広告効果が高いのでよくこのような問い合わせがくるのだ、まさか学園祭にまで来るなんてな・・・ついてない。

「結構です」

「せ、せめてカタログだけでも・・・」

ほんとしつこいなこの人・・・お、あれは。

「山田先生！」

「え？・・・ああ、篠ノ乃君」

ちょうどいいところに山田先生が、この人を注意してもらおう。でも何ですかその一瞬の間は？

「やばっ……こ、今回はこれで、では！」

あ、逃げた。

「どうかしたんですか？」

「助かりました、どこかの企業の人がしつこくて困ってたんです」

「企業……どこの企業かわかりますか？」

あーそういえば名刺も貰わなかったからな。

「すみません、聞いてませんでした」

「そうですか……でも気をつけてくださいね。限定的ではあるとはいえＩＳ学園は一般開放されるときはこのようなことが多いんですから、特に専用機持ちは巻き込まれやすいんで」

「すみません……」

「いいですよ、何かあったらすぐに先生たちを頼ってくださいね」

「はい」

やっぱり山田先生も教師なんだよな、頼りになるよ。

「じゃあ、私も見回りがあるので行きますね。学園祭楽しんでくださいね」

「あ、はい」

そう言い山田先生の姿は人ごみに消えた。

「あ、ヤバッ、時間！」

企業の人のせいで時間が！舞華ちゃんいるといいんだけど・・・
とりあえず急がなきゃ！

遂にやって来たわ、IS学園！！一夏さんがここにいるんだ・・・
・数少ないチャンス一夏さんにアピールしなきゃ！！・・・
・なんだけど。

「なんでバカ兄貴がいるのよ！！」

「それはこっちのセリフだ！！」

舞華とは校門前で待ち合わせしているんだけど着いたらバカ兄貴
が一人で高笑いしていた。ハッキリ言ってキモい。

「私は舞華に招待券を貰ったからよ！」

バツと招待券を取り出して兄貴に見せ付ける。てか兄貴は招待券
持つてるの持っていない状態で入ろうとしたら容赦無く警察にお世話
になるって聞いたことがある。嫌よ、身内を警察に迎えに行くのは
しかも原因は女子高の学園祭に入ろうとしたから・・・考えた
だけでも吐き気が。

「なんで、お前が・・・！」

「兄貴は、持ってなかったら捕まって警察行きよ」

「フツ、フツ、フツ・・・。」

うわぁ、キモッ。

「今の俺はそんなことを恐れない！見よこれを！！」

何よそれ・・・ってええ！？何で兄貴が招待券持ってるの！？

「これはな・・・一夏から貰ったのだよ！」

え？一夏さんが・・・。。。。。

「いやーあいつはやっぱり親友だわ、俺にこんな素敵なものをくれるなんてなー」

私じゃなくて兄貴に・・・。。。

「すまなかったな蘭、でもお前だって貰えたんだから良かったじゃない・・・ウゴッ！？」

兄貴の態度にムカついたから鳩尾を思いっきり殴ってやった。

「蘭ちゃんー！」

「あ、舞華！」

「ごめんね、遅れちゃって行くときにママがごねちゃって・・・」

「ごねるって・・・まあ舞華のお母さん、果歩さん若いからな・・・
・うちのお母さんもちかなり若く見えるけど。」

「お仕事があるのに行きたいって・・・落ち着かせるのが大変でした」

「この子も大変ね。」

「では行きましようか・・・ってあれ？そこに蹲ってるのって蘭ちゃんのお兄さんでは？」

「気にしないの、バカだからしょうがないのよ」

「バカって大変なんですネ・・・」

「グフツ!？」

「うわぁ・・・相変わらずの天然ねこの子。今の一言で兄貴死んだんじゃない？まあ、どうでもけど。」

「ほら行くわよ」

「あ、待ってよ。蘭ちゃん」

「一夏さんはどこにいるんだろう？クラスどこか聞いておけばよかった。」

「あ、いた！」

よかった、まだ校門の辺りにいて。隣にるのが舞華ちゃんの言
つてた友達かな？

「舞華ちゃん、こっちだよー！」

「え？」

大きな声で呼んだんだけど舞華ちゃんは僕がどこにいるのかわか
らずキョロキョロしている。もう一度……。

「こっちだよー！」

もう一回呼んだら気づいたみたいでこっちに近づいてきた。でも、
なんで入ってきてるのかな舞華ちゃん？お友達置いてけぶりだよ？

「お兄様カワイイですっ！！」

「うにゃ！？」

凄い勢いで突っ込んできて僕に抱きついてきた。

「あうっカワイイですっ」

「ま、舞華ちゃん。お、落ち着いて」

そして頬擦りまでしてくる舞華ちゃん。

「落ち着なさい、舞華」

「イタツ・・・痛いよ蘭ちゃん」

「暴走するアンタが悪いんでしょ、大丈夫ですか？」

「は、はい。ありがと・・・」

あれ？この子って確か一夏の友達の・・・。

「確か・・・五反田蘭ちゃん、だっけ？」

「え、そうですね・・・あなたは？てかお兄様って？」

あ、覚えてないんだ。てかこんな格好だからしょうがないか。

「前にも会ったけど覚えてないかな？前に食堂で会ったんだけど。それと僕は男だからね」

「食堂で・・・男・・・ま、まさかあの時の一夏さんのお友達なの！？って、ええ！？舞華のお兄様って・・・」

「あ、はい。従兄の優希お兄様です」

「えええええー！！！！！！」

そ、そこまで驚くかな？

「す、すみません取り乱しました」

ま、まさかあの時の人が舞華のお兄様だったなんて……世間は狭いわね。

「いいよ気にしてないし」

「でも……」

「いいから」

「はい……」

あんな人がいる中で大声出して……恥ずかしかった。でもこの人が舞華のお兄様か……もっと大人な人だと思ってたわ。

「でも、驚きました。蘭ちゃんとお兄様が知り合いだったなんて」

「僕も驚いたよ。舞華ちゃんの友達が一夏の友達だったとはね」

驚いているのはこっち何だけどな……この前会った美人さんな男の人が友達の従兄だったなんてね……でもほんと似合ってるわねメイド服。男の人だなんて信じられないくらいに綺麗だしそれに世界に二人しかいないIS操縦者……やっぱ神様は不公平よね。

「蘭ちゃん？どうかしたの？」

「あ、なんでもないわよ」

「そう？で、どうする？優希お兄様が案内してくれるみたいなの」

「そうなんですか？」

「うん、休憩時間の合間だけだね」

へえ、舞華の言うとおり優しい人なのかもしれないわね。

「じゃあ、お願いできますか？」

「うん、いいよ。どこに行こうか？」

「じゃあ、あの一夏さんの所に……」

それが目的でもあるわけだし……。

「一夏？いいよ、僕のクラスでもあるし」

「じゃ、じゃあ、お願いします！」

やった、一夏さんに会える！ありがとう篠ノ乃さん！！

会いに来たのに……なんでもないのよ一夏さん！！

「ごめんね一夏、ちょっと前に休憩に行っちゃったみたいなんだ」

「い、いえ、篠ノ乃さんのせいじゃありませんよ……」

一夏さんはいつも私がいなときに遊びに来るような人だったものね……。いつもタイミングが悪いというかなんというか……。

「そのうち戻ってくると思うし喫茶の中で待つてなよ、サービスするよ」

「い、いえ、いいですよ。すぐにでも会いたいというわけじゃありませんし、それにお忙しいみたいです……」

篠ノ乃さんのクラス確かコスプレ喫茶だったけ？なんかとても繁盛しているみたいだし。ていうかどんだけ行列ができてるのよ、奥の階段まで続いてたわよ。

「そっ？ほんとごめんね」

「気にしないでください篠ノ乃さん」

本当に優しい人なんだなこの人は……。気にしなくてもいいのに。

「じゃあ、二組の中華喫茶にでも行こうか？あそこのゴマ団子、結構美味しいんだよ。」馳走するよ」

「そ、そんないいですよお兄様」

「わ、悪いですし……」

一応遠慮しておく、会ったばかりの人に奢ってもらうなんてちよつと……。

「遠慮なくていいよ、それにね……」

それに？なんなの……。

「僕もゴマ団子もう一回食べたかったんだよね」

と、少しハニカミながら篠ノ乃さんは言った……き、綺麗……。って、なに見惚れてるのよ私！？

「じゃ、じゃあお言葉に甘えて……」

「よし、じゃあ行こう」

本当にこの人男なのかな？女の子にしか見えないよ外見も内面も私は溜息をつきながら篠ノ乃さんの後を着いていった。

「いっちらしゃいませ……あら？優希じゃないどうしたの……って、蘭！？なんでここに！」

「り、鈴さんこそなんで！」

篠ノ乃さんの後に着いて行き、隣のクラスに入ると何故か二年前に中国へ帰ってったライバルがいたのであった。

「あれ？知り合い？」

「知り合いっていったら、そうね」

「ええ……」

くっ、まさか鈴さんが戻ってきてたなんて……。一夏さんも何も言わなかったし。あのバカ兄貴また黙ってたな……！

「そうなんだ……。鈴、ゴマ団子三人分お願い」

「わ、わかったわ。とりあえず適当な席に座つといて、アンタんこのクラスのせいで暇だから全然客が入らないのよ」

確かにガラガラですね……。閑古鳥が鳴くってこの事ですよね。

「うん、わかった。あ、後お茶は烏龍茶ね」

「はいはい、サービスしておくわよ」

「ありがとう」

そう言い、鈴さんは厨房に行った。篠ノ乃さんって鈴さんとも仲がいいんだ……。

とりあえず私たちは言われたとおりに適当な席に座った。

「ふう……。あ、そういえば舞華ちゃんから聞いたけど。鈴ち

やん、IS学園にじゅけんするつもりなの？」

「あ、はい。そのつもりですIS適正も簡易ではありますけどAを取れましたし」

学校の先生は成績も適正もこんだけあれば十分合格できるって言うてたし。

「そうなんだ……でも何で？」

「え？」

ど、どうしたんだろう篠ノ乃さん急に真剣な目付きになって……
・どうしたの？

「はいお待ちどう様。ゴマ団子三人前に烏龍茶です」

そう言い割って入ってきたのは鈴さんだった。た、助かったのかな？

「で、なんの話してるの？」

助かってなかった、てか何で席に座ってるんですか今のあなたは店員でしょうが。

「だって暇なのよ。で、何の話してるの優希」

「いや、蘭ちゃんIS学園に受験するみたいだね。どうしてかなって思ってたね」

あー、言わないでほしかったな鈴さんには絶対に反対するし・・・。

「へ、へへ、そうなの」

うわあ、目付きが鋭い・・・だから嫌だったのに。

「で、なんで？」

「そ、それはその・・・ちよつとISに興味があつたし。舞華もIS学園に入るって言つてましたし・・・。」

本当の理由はちよつと違うんだけどな・・・本当は。

「一夏と同じ学校に入りたかったから？」

「!？」

な、なんで・・・分かるの!?この人!

「はあ・・・やっぱりそうか。まったく一夏の鈍感さがここまでする悪影響を及ぼすなんて」

？最後のほうは聞き取れなかった、一夏さんがどうとか言ってたけど・・・。

「蘭ちゃん、ハッキリと言つけど僕はね、君がIS学園を受験するのには賛成できないな」

な!？

「なんでですか!！」

「落ち着きなさい蘭！」

「う．．．．」

「蘭ちゃん座って．．．．。優希お兄様、どうしてそんなこと言うんですか？これは蘭ちゃんが決めたことで．．．．」

「ごめん、今のは言い方が悪かったね。僕が言いたかったのはね、そんな動機でここにくるのは善くないっていうことだよ．．．．」

動機？それってどういうこと？

「お兄様、動機が善くないとはどういうことですか」

「別に僕は絶対にIS学園に入学するなって言ってるわけじゃないんだ。でもね、今の蘭ちゃんの気持ちで入学するのは絶対にためにならない」

気持ちがダメ．．．？

「気持ちがダメだって．．．．」

「私も優希に賛成だわ」

り、鈴さんまで．．．!？」

「いい、蘭。ISってのは兵器なのよ、武装を生身の人間に撃てば

簡単に殺せてしまう代物なの。確かに蘭と同じような気持ちで入学してきた子は沢山いるけど現実はそのなのよ。舞華、あなたも専用機持ちだったら分かるでしょ」

「そ、そうですね・・・でも」

そうか、舞華も日本の代表候補生だったよね。篠ノ乃さん達のこと理解できるんだ。

「別に今の気持ちのままで入学しても私は構わないけど。でもね蘭、そのままだったらアンタはいつかその現実にあいつかつて、大切なものを失ってしまい事もある。もしかしたら自分自身が死んでしまうこともある・・・それだけは覚えておきなさい」

鈴さんの言葉が重く押し掛かる・・・私の考えは甘かったのかな・・・どうすればいいのかな・・・。

「・・・まあ、今すぐに答えを出せと言わないよ。それはじっくりと考えればいいから」

「篠ノ乃さん・・・」

「それと、これ」

「え？」

篠ノ乃さんは一枚のメモを私に渡してきた。これは・・・？

「僕の携帯の番号とメールアドレス、相談したいときはいつでも連絡して」

「え？」

「僕も成り行きで来ちゃったようなものだけど。相談くらいにはのれるよ。だからいつでも連絡して」

篠ノ乃さんは微笑みながら私に紙を渡した。やっぱりこの人は優しいな……。この話も私の為にしてくれたわけだし……。

「それに、君には友達もいるでしょ。ね、舞華ちゃん」

「は、はい！蘭ちゃんのためならがんばります！」

腕をギュツとして小さくガッツポーズを決める舞華。いい子だわ……。

「ま、まあ、必要だったら私にも連絡しなさい。これでも中国の代表候補生なんだから。アドバイスくらいできるわよ」

鈴さん、相変わらずだな……。こんな人だからライバルであっても嫌いにはならなかったんだよね。

「だからさ、今はいっぱい悩みな、悩み抜いた後には最高の答えがあるから」

「はい！」

今は悩もう、それからがスタートなんだ。

第四十五話（後書き）

書いているうちに蘭視点が多くなってしまった。

今回の話は書いていて難しかったです。前々から蘭のIS学園に入学しようとする動機が軽すぎるな～と思いついたので今回のようになりました。でも難しかったです。

今回はここまで、次回の更新で。

第四十六話（前書き）

だいぶペースを取り戻してきました。この調子で進めていきたいものです。

では、四十六話どうぞ。

第四十六話

「あ、そろそろ戻らないと・・・・・・・・」

舞華ちゃんたちと話しているうちに結構時間は過ぎていたようで、休憩時間終了五分前だった。

「もう終わりなんですか？」

「うん、忙しいしね」

戻ってあげないと他の人が休憩に行けないし。

「そうですか・・・・・・・・あ、篠ノ乃さん今日はありがとうございました。あとご馳走様でした」

「どういたしまして。いつでも連絡してね相談に乗るから」

「はい！」

うん、いい返事だ。

「じゃあ鈴、会計お願い」

「はいはい、でも結構食べたわね、財布大丈夫？」

「うん・・・・・・・・何とか」

あの後二人はゴマ団子が予想以上に美味しかったのか別のものま

ラウラも！何その一眼レフは！？

「それでは撮影開始です！！」

それから僕の視界はカメラのフラッシュにより真っ白になった。

「う~~~~、疲れた……………」

あれから何回も衣装を変えられ、写真を撮られた。僕もうお婿に
いけない……………。

「優希とてもよかったよ」

「うむ」

…………二人とも、元気だね……………。

「あ、篠ノ乃君。お疲れ様」

「鷹月さん…………お疲れ様……………」

一組のしつかりもの鷹月さんが話しかけてきた。結構暴走しがちな一組の中でもまともな人物だ。

「ハハ…………随分とお疲れの様子ね」

「カメラのフラッシュが怖いって始めて知ったよ……」

ずっと光が止まなくて何も見えないんだよ、聞こえるのは奇声だけだし……怖かった。

「そ、それはご愁傷様……そ、そうそう！優希君休憩に行ってもいいわよ」

「あれ？僕さっきも休憩に行ってたんだけど……」

また休憩なの？

「いやね、さっきのお客さん達でね、料理の材料が殆ど無くなったのよ……まあ、そう仕向けたんだけどね（ニヤリ）」

なんで食材が切れたのかというと、先ほど行われた撮影会の参加条件が指定した額以上を注文しなければいけないとのことだったらしい。だからこんな早くに材料が切れたのか……結構あったはずなのに。

そういえば鷹月さんの実家って確か代々商人の家計だったんだよね、そのせいで彼女は結構商魂が逞しいんだよね。喫茶の準備も殆ど彼女が仕切ってたし。

「追加の材料は既に手配してるんだけど後一時間程掛かりそうなのよね、だからそれまで休憩に行つて来て」

「そういうことなら……」

「デュノアさんにボーデヴィツヒさんも休憩行つて来て、ずっと働き詰めだったしね」

「そうさせてもらっかな」

「そうだな」

二人とも働き詰めだったんだ。まあ途中からカメラしか持ってなかったけどね……。そういえば一夏は？

「あ、そうそう織斑君は先に休憩に行ったわよ……。どうやら一人三十分ずつで交代することになったみたいよ」

あ、だから篤姉があそこでそわそわしてるんだ。

「篠ノ乃君もそうすれば？ちょうど二人ずつなんだし」

「そうだね。二人ともそれで……。」「

「「あいこでしょっ！あいこでしょっ！あいこでしょっ！」「

……。それでいいってことだね。てか、二人とも手速すぎて何かなんだか分からないよ……。

「「あいこでしょっ！」「

終わった？どっちが勝ったの？

「「無念……。」「

「ふっ、千年早い」

いや、なんで篝姉がいるの？ていうかそれ反則だよ、グチヨパつて……小学生じゃないんだから。

「えへへへ」

ご機嫌だなシャル。五分間にも及ぶジャンケンで勝利したのはシャルだった、ラウラはというところの世の終わりみたいな顔をして。r z になつてたけど……。

「優希、どこに行こうか？」

「僕はシャルの行きたいところでいいよ」

僕的には模型部に行ってみたんだけど女の子がいるのにそれはね……でもなんで模型部なんてあるんだ？

「そう？じゃあ行ってみたいところがあるんだ」

「行ってみたい所？どこなの」

「えつとね……料理部」

「着いたけどなんで料理部？」

「ここ、日本の伝統料理も作ってたって。せっかくだから作れるようになりたいなあって思ってた」

「そうなんだ。シャル、料理上手だもんね」

この前、シャルのお弁当少し貰ったけど、とても美味しかったな。そういえば最近忙しいから、料理してないな……。腕が鈍ってなければいいんだけど。今度時間作って何か作ろう。

「そ、そう？じゃあ、また今度作ってあげるね」

「うん、ありがとう」

そんな話をしながら僕たちは調理室に入ってた。で、調理室に入った僕たちの視界に入っただのは様々なお惣菜だった。

「うわぁ〜結構いっぱいあるんだね」

「ほんとだね」

大皿が所狭しに並べられていて、そこにはおでんに肉じゃが、和え物などなど日本料理が中心に並べられていた。どれも美味しそうだ。

「あ、あれって肉じゃが？」

「うん、そうだよ。前に一回作ったことあったよね」

シャルが一回食べてみたいって言ったから作ったんだよね。僕の得意料理の一つだ。

「うん！あれ、美味しかったなあ〜」

ずいぶんと気に入ってくれたみたいだね。また今度作ってあげよう。

「おお！篠ノ乃君に一時期は男子だったと噂のデュノアさんだ！」

「ど、どうも」

テンション高い人だな……。まあ学園祭だからしょうがないか（？）

「で、どうしたの？あ、もしかして入部希望？それだったら大歓迎だよ！」

「いえ、違いますから」

「ちえー、なんだせつかくマスコットができると思ったのに」

マスコットって何！？

「まあいいわ。さあさあ食べてって、どれでも特別にタダでいいわよ。その代わりうちに投ひよ。．．」

「ちゃんと払いますんで。じゃあ、肉じゃが二つ」

不正はダメですよー。生徒会に通報しちゃいますよー。

「そ、それだけは止めてね……。肉じゃが二つねー、はい」

ちゃんと保温のできる大皿からほかほかの肉じゃがを小皿に移して僕たちに渡す。うん、いい色だ。
では早速……。

「うん、美味しい」

「そうだね」

ちゃんとジャガイモにも味が染み込んでるし、よくできてるよ。

「美味しいでしょ、うちの一番人気なのよ」

へえー確かにこれは人気がでるな。

「うーん……。美味しいんだけど、やっぱり僕は優希が作ったやつ
のほつが好きかな」

「そうなの？」

「はい、優希のはひと口食べただけで虜になっちゃいますよ」

ちょっとシャル、僕の作った肉じゃがは薬物か何かなの？

「へえ……。それは是非食べてみたいわね」

ちよっ、この人の目……。ヤバイ。ここは……。

「肉じゃがのお金、ここに置いておきますね！シャル行こ・・・」

「優希、お願いがあるんだけど」

「な、何かな・・・？」

シャルは僕が逃げないように手を掴みながらにこりと微笑む・・・嫌な予感が。

「優希、肉じゃが作って」

や、やっぱりそうか。

「わ、わかった、また今度作ってあげるよ」

「違うよ、今」

い、今って・・・。

「今って・・・時間無いよ。ラウラとの交代の時間まで後二十分くらいだし・・・」

「むー・・・わかったよ。じゃあ、また今度作って」

「うん、美味しいの作るからね」

ふう・・・よかった。今から作ったりしたら一時間以上かかるよ。

「そのときはご馳走になります」

「「「「まーす」」」」

そこっ！勝手に決めないの、それと材料費は払ってもらいますからね。

「「「「ブーーーーー」」」」

はぁ………疲れる。

「うむ、着たな。では行くぞ。茶道部は確か、二階だったな」

シャルの番は終わってラウラの番なんだけど………。

「ラウラ………」

「どうした優希？」

「何で僕………着物なの？」

ラウラと一緒に茶道部に行くはずだったんだけど何故か僕の衣装は着物に変えられていた。着付けは箒姉がやった。さすがに僕もこれできないよ。でも、何で着物？

「む？茶道とはそういうものだと聞いたのだが、正装は着物だと」

いや、間違つては無いけどさ……今は学園祭なんだからそこまでしなくていいんだよ。

「そ、そうなのか？だが……似合ってるぞ？」

いや、似合つてると言われても。

「じ、時間は少ないのだ！さっさと行くぞ」

はぁ……しょうがないこれで行くしかないか……。でも歩きにくいな、着物なんて着たことないし……。

「ら、ラウラ待つてよ……」

「む？どうした優希、歩くのが遅いぞ」

「き、着物は着たことが無いから歩き難いんだよ……。わわっ！？」

来客にぶつかって僕は扱けそうになった。

「むっ！大丈夫か？」

「あ、ありがとうラウラ」

あ、危なかった……。やっぱり動きにくいよ。

「むう……。そこまで動きにくいのか」

「う、うん」

「そうか………だったら」

「……あのラウラさんなんであなたは僕の手を握っているのですか？」

「こ、この人ごみだ、離れたら危ないだろう！だからだ！」

顔真っ赤だよラウラ………でもそういうことにしておいてあげるか。

「ありがとう」

「い、行くぞ！」

ラウラは顔はこっちに向けずに僕の手引いて歩き出した。耳まで真っ赤になってるカワイイところもあるんだな。

ラウラに手を引かれてやってきた茶道部の茶室、ちゃんと畳張りだ。さすがはIS学園、世界中から注目されているだけあって設備にはかなりお金をかけている……。しかも蘭堂が大手スポンサーだし。しかも僕のことが発覚してからさらに金額を上げたみたいだし。

で、僕たちは現在茶道部の部長に進められて茶室で正座をしている。

「うちはあまり作法にうるさくないから、気軽に飲んでね」

部長は微笑みながら、茶菓子を差し出した。

「では」

僕は茶菓子を取り一口……うん、おいし^いで、次は……
ってあれ？ラウラの様子が変だ。どうかしたのかな？

ラウラは茶菓子を持ち固まっていた。

「こ、これはどうやって食べればいいのだ……」

ラウラの取った茶菓子は白餡でできたうさぎの練細工だった。うさぎはそのつぶらな瞳でラウラを見つめ、まるで『僕を食べちゃうの？』と言っている様だ。

「ラウラ」

「う……わ、わかっている。あむっ！」

あ、一口でいった。ラウラ歯形の残ったうさぎを見たくなかったんだろうな。僕も多分同じことをすると思う。

「うむ、美味しいな」

あ、食べた後はなんも思わないんだ。

「どうぞ」

今度は抹茶のほうを差し出され。

「お点前いただきます」

一礼をして、先ほど教えてもらったとおりの手順で抹茶を飲みほして。

「結構なお点前でした」

また一礼をする、これで終了だ。

「よかつたらまた来てねー」

部長に見送られて僕たちは茶室を出る。いや、貴重な体験をした。

「結構よかつたね」

「うむ、日本の文化は興味深いな」

へえーラウラ、日本の文化に興味があるんだ。

「興味があるならさ、ラウラも着物着てみれば？」

「わ、私がか！？ま、まあ確かに興味はあるが……………」

お、あるんだ。

「そ、その優希は見てみたい……………のか？」

ラウラが着物か……………うん、似合うと思うな。

「見てみたいかな、ラウラ似合うと思うし」

「そ、そうか！っ！？ま、まあ機会があつたら見せてやってもいいぞ」

また耳まで真っ赤にしてる。恥ずかしいんだな。

「で、では戻るぞ！そろそろ時間だ」

お、ほんとだ結構時間がたってるもんだな。

「ほら手を貸せ、また連れてってやる」

顔はこっちに向けずに僕へと手を差し出すラウラ、僕はその手を取った。

「うん、行こうラウラ」

「うむ」

僕の歩調に合わせてラウラがゆっくりと歩く。教室までは短いはずなんだけど、結構長く感じた。

こうしてラウラとの休憩時間は終了した。

第四十六話（後書き）

はい、学園祭デート（？）編でした。デートって難しい……。次回では会長のあの企画が遂に始まります。どうなるのかは次回のお楽しみで。
では次回の更新で。

第四十七話（前書き）

シンデレラ
灰被り姫の幕が開ける！
四十七話です、どうぞ。

第四十七話

ラウラとのひと時を終えて教室に戻ってきた僕は仕事に戻った。材料も先ほど届いたので店は問題なく機能しお客さんもまた入り始めたのだが……。

「じゃじゃーん、楯無おねーさん参上です」

会長がやって来た。何だろう逃げたほうがいいような気がする。

「だが、逃げられない!」

無理か……。

「だあつ!進路妨害をしないでくださいよ!」

逃げ出そうとしていた一夏も行く手を阻む会長、今なら逃げれそうだけどおそらく無理だろうな、会長だし。

「まあまあ、逃げ出そうとしないの。時に一夏君、優希君、君たちの教室の手伝いをしたのだから生徒会の出し物に協力しなさい」

「疑問系じゃない!？」

「確定ですか……」

「だって決定事項なんだもん」

勝手に決めないでほしいんですけど……。

「で、何をするんですか……」

「あら？無抵抗」

あなたに何言っても無駄なのはわかってますから。

「で、出し物は」

「演劇よ。観客参加型演劇」

「は!？」

観客参加型演劇？聞いたこと無いな……。まあ、おそらく文字通り観客も参加できる劇なんだろう。

「とにかく、おねーさんと一緒に来なさい。はい、決定」

はあ……。しょうがない着いていくしかないか。

「あの待ってください。一夏はどうでもいいですけど優希を連れて行かれると、困るんですけど……。一応、指名No.1です」

シャル、そのまま会長に言ってやって、こっちにも事情があるって……。って、ちょっと待ってシャル、って何！？そんなの聞いてないよ！

「そうだ、シャルロットちゃん、あなたも来なさい」

「ふえ!？」

「おねーさんが綺麗なドレスを着せてあげるわよう？」

「ど、ドレス……………」

ひ、卑怯な……………！ドレスは女の子の憧れ、それを天秤に掛けさせるとは……………！

「じゃ、じゃあ、あの……………ちょっとだけ」

「素直でよろしい。じゃあ、篝ちゃんもセシリアちゃんもラウラちゃんもゴーね」

「……はっ！？」「」

シャル、陥落……………。そして何で三人を……………？

「全員、ドレスを着せてあげるから」

「そ、それなら……………」

「まあ、付き合っても……………」

「ふ、ふん。仕方がないな……………」

上から篝姉、セシリアさん、ラウラ。ドレスにつられて皆陥落した、これでもう抗うすべは無くなった……………。あきらめてやるしかないか……………。

「ちなみに演目は何なんですか？」

「ふふん」

ばっ、と扇子を広げる、そこには『迫撃』と書かれていた。何故？

「シンデレラよ」

迫撃関係ないし……。。

「蘭ちゃん、こっち空いてるよ」

「ほんと？じゃあ、ここにしましょうか」

篠ノ乃さんと別れた後、私達は色々と学園内を廻ってみた。いろんなところの出し物を見たりスイーツ巡りをしたりと楽しんでいた。……途中、兄貴と会ったけど気持ち悪い笑みを浮かべていたので他人の振りをしておいた。

で、今は体育館でここの生徒会が演劇をすると聞いたので見に来てみた。

「人いっぱいだね」

「そうね」

本当ね、来客のほとんどが入ってるんじゃないかしら？ところで演劇は何をするのかしら。

中が急に暗くなった、始まるみたいね。

「むかしむかしあるところにシンデレラという少女がいました」

シンデレラか・・・普通ね、IS学園なんだからもつと何かあると思っただけれど。

「否、それはもはや名前ですらない。幾多の舞踏会を駆け抜け、群がる敵兵をなぎ倒し、灰燼を纏うことさえいとわぬ史上最強の兵士たち。彼女らを呼ぶにふさわしい称号それが・・・『灰被り姫^{シンデレラ}』」

・・・・・・え？

「今宵もまた血に飢えたシンデレラたちの夜が始まる。王子の冠に隠された隣国の軍事機密を狙い、そして囚われの身となった亡国の王女を救出すべく、舞踏会という名の死地に少女達が舞踊る！」

ちょ、ちょっと何これ！？シンデレラってこんなバイオレンス内容だったけ！？って、王子役って、まさか・・・・・・一夏さん！？ということももしかして王女役ってもしかして・・・・・・やつぱり篠ノ乃さんだよ、ドレス姿も綺麗だな・・・・・・じゃなくて！なんで二人がいるの、あーもう！どーなってるのよ！！

「お、お兄様が囚われの身に・・・・・・あう」

「ちょ、舞華！？すっかりしなさいよ、舞華！？」

何で、気絶するのよ！これはフィクションよ、真に受けるんじゃないわよ！舞華あーーーーー！！

「う、うつん……あれ？僕は……」

。 ぼ、僕なんで寝てたんだ？眠った記憶が無いんだけど……。

「「一夏あー……！！」」

「ひ、ヒイイ……！！？」

はぁ………また一夏が何かしたのか。とりあえず起きる（ギシッ）か………あれ？（ギシギシッ）な、何で僕はベットの上で両腕を縛られて拘束されてるのかな、しかも今気づいたんだけどいつの間にか衣装が変わってるし、これってドレス？

「どうなってるんだ、これ？」

とりあえず、どうにかして拘束を解かないとな………でも何でこんな目に………えーと確か会長に………。

「会長、少しいいですか………」

「ん？何かな、後少しで開演よ」

「何で僕は……ドレスなんですか!？」

「わお♪似合ってるわよ優希君、どっからどう見ても王女様よ」

「いや、なんでドレスなんですか!てかシンデレラには王女は出ませんよ!」

「それはオリジナリティを出すためよ。普通のじゃつまらないですよ?」

「いや、だからってなんで僕が王女なんですか!」

「カワイイから♪」

「知るかぁ—————!」

「じゃあ、優希君。準備しましょうか」

「せめて男物を……会長、何ですか、それ?」

「ガスマスクと催眠ガス」

「なんでそんなものを持ってるんですか……」

「なんでって、準備のためよ」

「準備って何をするんですか……」

「それはね……拘束♪」

「・・・・・・・・・・・・・・・・さよなら!!」

「ところがどっこい、おやすみなさい（プシューーーー）」

「あ、うう、あう~~~~（パタンッ）・・・・・・・・スウー、スウー」

そうだ、僕は会長に眠らされたんだっ！すぐにでも文句を言つてやりたいけどまずはこの状況から脱しないと、どうやってこの縄を解こうか・・・・・・・・。。。

キンッ！ガキンッ！

・・・・・・・・てか、なんでさっきから金属音が聞こえるんだ、しかもこれって刃物がぶつかったときの音だし・・・さすがに演劇で本物使うわけないよね、あはは。てか、シンデレラに殺陣って無かつたよね？

キンッ！！カキンッ！！ザクッ！！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え？

「え、えええええー！！！！！！？ほ、本物！！！！！！！！？」

僕が拘束されているベットの柱に刺さったのはタクティカル・ナイフだった。

「ラウラ、しっかりとナイフを握っている！優希に当たったらどうするー!!」

「私はしっかりと握っていた、お前のバカ力のせいだろうが!!」

「なんだと!!」

「事実だ!!」

このナイフってラウラのだったんだ……って違う!まさかあの二人、真剣でやってるの!?死人が出るよ!?

「お前を倒して、私は優希を……王女を助けに行く!!」

「ふんっ!貴様ごときに優希を……王女を渡すか!この場で切り伏せてくれるわ!!」

「やってみろ!」

「行くぞ!!」

「かかって来い!!」

そしてまたナイフと刀がぶつかり合う音が聞こえ始めた。

な、なんでこんな状況になっているんだ……誰か説明して……。

「優希」

「え?しゃ、シャル?」

シャルの声が聞こえたけどどこにも見当たらない。どこに?

「ベットの下だよ……騒がないでね」

な、なんでベッドの下にいるのシャル？まあ、シャルなら助けてくれるだろう。ここは静かにしておこう。

「すぐに助けるからね……」

シャル客席から見えない位置からベッドの柱に刺さったナイフを抜き取って拘束している縄を解こうとする。これで助かる。

ダンッ！！

と、思ったのだが……。

「抜け駆けは許さんぞシャルロット」

抜き取ったナイフ以外にまたナイフが刺さっていた。今度はスロ
ーイングナイフだ……。

「くっ、ばれないようにしてたのに……！」

「私の目からは逃れられん！」

いや、ここってラウラのいるところから死角だよね、なんでわかるの？

「フフフ……貴様ら、私を忘れてもらっては困るな……」

「ば、バーストモード……！？」

「い、いや、まだだ。まだなっていない一歩手前だ……まだ

は震え、怯えている。助けたい気持ちに駆られるが手はさせない。変態達はジリジリと距離を詰めていき、そして篠ノ乃さんに飛び掛った。でもその瞬間。

「にゃ、ニヤアアアアア――――――
!?!?!?!?」

猫みたいな鳴き声が聞こえると、襲い掛かった変態達は全員吹き飛ばされた。

それから酷いものだった、篠ノ乃さんは猫みたいに鳴き叫びながら襲い掛かってくる変態どもを次々と投げ飛ばしていった。だが、変態どもは投げられても諦めずにまた篠ノ乃さんに投げ飛ばされ、そのエンドレスだった。でも凄いわね篠ノ乃さん、あんな小さな身体なのにアレだけの力……。強いんだ……。

それが十分ほど続いた後に、投げられた変態どもは体力が限界に達し誰も動かなくなった、そして篠ノ乃さんは……。

「うええええええーん」

よほど、怖かったのか、子供のように泣いていた。不謹慎だと思つたのだが……。泣いている姿がカワイイと思つてしまった私はダメな人間なんだろうか……。まあ、隣でどこかから取り出したのか分からないカメラで篠ノ乃さんを撮っている友人に比べたら私はマシなほうなんだろう、きっと。……。でも本当にカワイイな……。

あれ？そういえば一夏さんの姿が見えないような……まあいいか。あ、舞華、その写真現像したら私にも一枚くれない？え、いいの？ありがとう！

あれ？変なウサミミを着けた人が篠ノ乃さんを慰めながらナレーターの前に連れて行った。あれが確か王女様救出の成功内容じゃない

かつたつけ？

「王女様は無事救出されました！」

舞台にいた金髪の人と銀髪の人、そしてポニーテールの人がポカ
ンとしている。考えたなあの人……。え？あの人篠ノ乃さんの
お姉さんなんだ。じゃあ舞華の親戚？え、違う？どうなってるのよ
一体！説明しなさいよ舞華！また今度？……。わかったわよ、
今度絶対に話しなさいよね……。まったく。

「あれ？なんで私こんなに篠ノ乃さんのこと知れたがつてるの？」

「たあああばあああねええええ！！！」

「ち、ちーちゃん！？そんな力を入れないで！こ、壊れちゃう！？マジで壊れちゃう！？！？！？」

どっからともなく現れた、千冬さんが篠ノ乃さんを慰めているウサミミにアイアンクローをかけた。普通はミシミシつと骨が歪む音は聞こえないはずなんだけど……これって明らかに聞こえてるよね、人間から聞こえちゃいけない音が聞こえるよね？

「壊れろ！壊れてしまえ！！」

「あ、ちよ、まつ、ニヤアアアアア——?!?!?!?」

あ、ウサミミなのにニャーなんだ。面白い。

第四十七話（後書き）

色々と暴走しました。反省はしていない、後悔はしまくりんぐ。

何気に蘭とのフラグを立ててしまった優希、それが書きたかった。

それとウサミミも出してみた。出番は今回だけでも（え？

ウサミミは鬼教官のアイアンクローで撃退されニンジンに乗って帰った。

ここからは真面目に、今回は戦闘は無しにしました。亡国企業は優希に手を出さないということになっていきますので。一夏はちゃんと戦闘してましたよ、会長の胸に顔を埋めるのもww

予定では次回で学園祭編は終了です。その後はシュヴァルツエア・レーゲンの改造など少しだけオリジナルが入る予定です。

では次回の更新で。

第四十八話（前書き）

早く書きあがったのでうります。
四十八話です、どうぞ。

第四十八話

「ぐすつ、ヒック……………」

「ほら優希、泣き止んで。もう怖いのはないからね」

「うん……………」

シャルが何故か僕を慰めている。先ほどまで何があったか覚えていない、でもとても怖かったのは覚えている。何があったんだろう……………。

「会長！優希のことも考えてくださいよ！！」

「ご、ゴメンゴメン、まさか優希君が泣くとは思わなくて」

そしてシャルが会長を責めてた。

「優希は会長と違って繊細なんですよ！会長みたいに特殊装甲のハートじゃないんですから」

「……………なんだろうとても理不尽に感じる」

何の話をしているんだろう？

「シャル、何の話してるの？」

「優希は気にしないでいいからね」

「う、うん？」

よく分からないや。

「とりあえず会長の処分は箒に任せて……」

「そ、それだけはやめて!？」

「それは無理だと思いますよ箒ならあそこで……」

箒姉？シャルが指差す方を見るとそこで箒姉は砥石で緋宵を研いでいた。ドレス姿で刀を研ぐ……うん淒くミスマッチな光景だな……。

「お、終わった……」

会長が膝を着く……何があつたんだろう？って何で一夏も膝を着いてるの？もう、何がなんだかわからないな……後で誰かに聞こう。あれ？そういえば……。

「ねえ、シャル」

「何？優希」

「よく覚えてないんだけどさ、さっきまで束姉がいたような気がしたんだけど……知らない？」

何か束姉に手を引かれてたような気がしたんだけど……気のせいかな？

「き、気のせいじゃないかな！そ、それに篠ノ乃博士がここにいるわけ無いよ。いたら騒ぎになるだろうし……」

「そう、だよな……僕の勘違いか……」

いたと思ったんだけどな……昔みたいに束姉に手を引かれた気がしたんだけど……気のせいかな。

あれ？そういえば……。

「シャル、ラウラは？」

「え、ラウラ？あれ、さっきまでそこにいたはずなんだけど……どこに行ったんだろ？」

それにセシリアさんもない……どこに行ったんだろ？

「しくじったか……」

「申し訳ありませんわ、ボーデヴィツヒさん。わたくしの責任ですわ……」

「気にするな……あの状況は私も想定できなかった」

「くっ……！」

私とセシリアは先ほど襲撃者を追っていた。やつは演劇の騒動に紛れ一夏の白式を奪取しようとしていたようだ、だが楯無という女によってそれは阻止されたようだ。襲撃者は戦闘後ISを自爆させここまで逃走し私たちに捕縛され……。そうになったのだが邪魔をされた。まさかもう一機ISがいたとは……。しかもセシリアよりも優秀な狙撃主。私たちは突如現れたISの妨害によって襲撃者を逃してしまった……。不甲斐ない！

「セシリア……。お前、あのISのことを知っているな」

あのISに妨害されたときセシリアが異様に驚いていた……。おそらく、知っているのだろう。奴のことを。

「……。すみません、そのことは国家機密になりますので話せませんわ」

「……。そうか」

言えないが肯定というわけか……。だが、アレだけの狙撃能力、厄介だな……。

「とりあえず戻るぞ」

「わかりましたわ……。。」

今回は逃してしまっただが、次は逃さん。覚悟している『亡国機業』

「で、なんで会長がここにいるんですか？」

「だって私が一夏君の王冠を取ったからね、ここに居るのは当然です」

「一夏……」

「し、仕方ないだろ！変なやつは襲撃もあつたんだし」

今回の演劇の隠されたルール、それは王子の王冠を取ったものは生徒会長権限で一夏と同室になれるというものだった。これは僕にも適応されていたみたいで、僕の場合ナレーターの前まで連れて行けば同室になれるとのことだった。勝手なことを……。

「じゃあ、僕はすぐにでも出て行かなきゃいけないんですか……
・一夏のせいで」

「ゆ、優希」

「ん、おねーさんとしてはどっちでもいいんだけど……
一夏君、どっちがいい？」

「お、俺に聞かないでください！」

会長、一夏を弄って楽しんでるな。まあ助けないけど。

「お遊びはここまでにして……会長、聞きたいことがあります」

「ん？何かな、おねーさんのスリーサイズ？」

「違います。会長、あなたは何者ですか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

会長の目付きが変わった。

「今回の滅茶苦茶な演劇、おそらくあれは一夏を襲った襲撃者を誘き寄せる餌だったんでしょ？なかなか姿を現さない敵の姿を表に出すための」

「・・・・・・・・・・・・・・・・そうよ、その通りだわ」

「やつぱりか・・・・・・・・じゃあ、改めて聞きます。会長、あなたは何者ですか」

「ふう、優希君は鋭いな・・・・・・・・そうねえ更識家は昔からこの手の裏工作に関しては強いだよ。暗部ってわかる」

暗部・・・・・・・・決して表に出ない裏の組織。

「更識家是对暗部用暗部・・・・・・・・お家柄ってやつね」

と、笑いながら扇子を開く会長、そこには『常時戦場』と書いてある。

「しかし、これで当面の危機が去ったようだし、私も気が休まるわ」

「でも、なんで俺だけだったんだ、狙われるなら優希もありえそう

なのに」

そうなんだよな．．．なんで一夏だけだったんだろう？

「さあね．．．欲をかなかっただけかもしれないし、それとも優希君は狙わないことにしているのか．．．こつちにはわからないことよ」

僕を狙わないことにしている？．．．まさか今回の襲撃者が所属している組織はMと同じ組織なのか．．．？わからないな。

「まあ、この話はこれでお終い、私は部屋に戻るわね。じゃあね」

会長は手を振りながら部屋から出て行った。

「はあ．．．疲れたね」

「ああ．．．店のこと、演劇、戦闘．．．今日は疲れたよ」

「そうだね．．．」

色々ありすぎて疲れたよ．．．はやく寝よう。

「優希、俺寝るわ．．．」

「うん、僕も寝るよ．．．」

電気を消しベットに入る。

「おやすみ……」

「うん、おやすみ……」

ああ……明日から忙しくなるだろうな……でも、今は眠ろう……おやすみ。。

「みなさま、先日の学園祭ではお疲れ様でした。それではこれより、投票結果を発表します」

僕と一夏争奪戦の結果発表が行われようとしていた。
体育館に集められた生徒たち全員が息を呑む。一体どこの部活に入れられるんだろ。

「一位は生徒会主催の観客参加型劇『シンデレラ』！」

「「え?」「」」

え?……ああ、なるほど確かに一番人は入ったね。

「卑怯、ズルイ、イカサマ!」

「なんで生徒会なのよ!おかしいわよ!」

「私たちががんばったのに!」

全校生徒からブーイングがでる……まあそうなるよね普通。

「二位！二位はどこなの！」

「そうよ、優希きゅんはこの部活のものに！」

「優希きゅんさえいれば何もいらない！」

なんでそんな僕に部活に入ってほしいの、みんな。

「では二位を発表します。二位は………」

どこだ……。

「生徒会による貸衣装屋です」

「「「え？」」」

そ、そうきたか……。

「はい、苦情があるだろうけど。静かにしてね。劇の参加条件は『生徒会に投票すること』よ。でも、私たちは別に参加を強制したわけではないのだから、立派に民意と言えるわね」

あはは、これには誰も反論できないだろうな。劇にはかなりの人数が参加してたし……。あれ？何か思い出しそうな……。やめておこう、思い出してはいけない気がする。

でもまあ、そんなことで納得できる人はいないだろうけど。

「はい、落ち着いて。生徒会メンバーになった織斑一夏君と篠ノ乃優希君は適宜各部活動に派遣します。男子なので大会などには参加できないのでマネージャーや庶務をやらせてあげてください。それ

らの申請書は生徒会に提出するようにお願いします。あ、それと篠ノ乃優希君は多忙なのであまり参加できないと思いますのでご了承を」

「……あれ？結局は部活するの？」

「ま、まあ、それなら……」

「し、仕方ないわね、それで我慢しましょう」

「これはチャンスだわ……勝ち目が無かった私たちにもチャンスが……！」

「うわー、段々と騒がしくなる、はあ……忙しくなるな、これから……」

「それでは、特に問題も無いようなので、織斑一夏君、篠ノ乃優希君は生徒会に所属、以後は私の指示に従ってもらいます」

会長の宣言に賛同するように全員が拍手をする。はあ……結局は会長の思惑通りか。忙しくなるのはわかってるのでとりあえずはラウラのISの改良までは仕事を出さないようにお願いしよう、はあ……。

「……………」

「おいっ！M、貴様どういうことだ！！」

うるさいのが来た……大方あの剥離剤リムーバーのことだろう。バカなや

つだ少し考えればすぐにわかることを何も考えずに使うなんて。

「聞いているのか！その顔を切り刻んでやってもいいんだぞ！」

本当につるさいし鬱陶しい、ナイフをちらつかせるのが自分の無能さを誇示しているだけなのが分らないのか？

「やめなさい、オータム、うるさいわよ」

やっと出てきたか、スコールこの女の世話はお前の担当だ、鬱陶しくてかなわん。

だが、やはり理解できないなぜスコールは篠ノ乃優希には手を出さないんだ……。あのガキを襲わないことに何もメリットはない、あると言えば篠ノ乃束のお気に入りということだけのはずだ。理解できん……………。

「M、ISを整備に回しておいて頂戴。『サイレント・ゼフィルス』はまだ奪って間もない機体だから再度調整が必要よ」

「了解」

スコールはあの女を簡単に丸め込んだようだ。これでづるさくなる。私は立ち上がりドアを開けて部屋から出る。

（もっ少しだ……………）

迫る時に私の心は躍る。

（やっとだ、これで私の復讐が始められる……………やっと会える）

私の口元は歪む。

（織斑千冬………！）
ねえさん

「で、どうだね、二人の訓練状況は？」

学園長室に來た私はあの二人の報告をしている。

「ええ、順調です。二人とも凄い勢いで吸収しています、教えたことを数回の反復練習で覚えますし。特に篠ノ乃君が凄いですね……
・彼は天才ですよ。自覚はしてませんが」

「そうですか……蘭堂の者だったらありえなくも無いでしょうね。あそこの家系は天才と呼ばれる人間を多く輩出してますからね」

蘭堂家……数々の天才を輩出し日本の経済を支えてきた大財閥。あそこなくしては日本の経済的发展は無かった。篠ノ乃東の義弟で蘭堂の人間………とんでもない肩書きね、本人は気にしてないだろうけど。

「では次の報告をお願いします」

「はい、次に亡国企業についてですけど………」

まさかここまで早い接触だとは思わなかったわ・・・でも私
がこの長であるからには手出しはさせないわよ亡国機業・・・

第四十八話（後書き）

四十八話でした、優希の記憶は飛びました恐怖のあまりwww

次回からは前からちraftかせていたシュバルツエア・レーゲンの改造とフランスの第三世代型についての話になります。どんな反応があるか若干ビクついています。なるべく魔改造ならないようにしたいと思います。

では次回の更新で。

第四十九話（前書き）

今回は説明文が多い回となっております。

第四十九話

学園祭が終わり数日、学園祭の振り替え休日もあり平日の金曜日なのに今日は学園は休みなのだ、僕には関係が無いが。

場所はIS学園の地下ドック。そこで今シュヴァルツェア・レーゲンの改造が始まるうとしていた。なんでこんなところでやるのかというと機密保持のためだ、本来はできないことなんだけど僕のことであって今回は特別に許可された。

改造のために呼び寄せられたのはドイツ軍の技術者たち、ラウラが言うにはドイツでも選りすぐりの技術者達らしい。

「ではAICの改良から入ります。まずは……………」

さて、忙しくなるな……………なるべく今日中に終わらせたいな。まあ必要なパーツはそろえてあるから交換と調整だけで済むし、大丈夫だね。よし、がんばろう。

「作業終了です」

「……………おお……………!!」

作業開始から半日、最後のパーツを取り付けてシュヴァルツェア・レーゲンの改造は終了した。ドイツから来てくれた技術者の人たち

の作業が的確な上迅速だったので予定していた時間よりも早く終わった。

「凄いな……これが」

「うん、『黒き霧雨（シュヴァルツエア・ニーベルレーゲン）』ラウラの機体だよ」

新たな姿へと生まれ変わったシュヴァルツエア・レーゲンは主の帰還を待っているかのように佇んでいた。

機体色は以前よりも深い黒、装甲の形状は以前よりも流形状になっており空気抵抗を下げるようになっていいる。腕部脚部は一回り太くなり力強く感じる。

「素晴らしいな……こんな短時間で完成するとは」

「まだ終わってないよ、できたのは機体のほうだけ、これからコアへの情報入力やスラスターの微調整とか色々テストしないといけないからね」

今まで得てきた経験が無駄にしないように設計したつもりなんだけど、それでも差異があるからねデータ入力は慎重にしないと。

「手間をかけるな」

「いいよ……助けてもらったんだし。その借りを返しているだけだよ」

むしろこれだけで済んだのがよかったよ。

「データの作業自体は一時間程度で終わるからラウラも準備しておいて。それからはずっとデータ取りだから」

「了解した」

さて、始めますか……。本来ISの改造や新規製作するときはコアを初期化しなければいけない。何故かというとISのコアには自己進化機能がある、これはそれまで培ってきたISの起動データから被弾データなどの操縦者とのそれまでの記憶を蓄積しているのだ。これが一定の値に到達したときに進化、第二形態移行が起こる。

だがそのコアを途中で違うISに移植したり極端な改造をするとコアの培ってきたデータとの誤差が生じてしまい。進化の妨げになってしまうのだ、でもラウラのISのコアにはかなりのデータが詰まっておりますを無駄にするのはもったいないと考えた僕はシュヴァルツエア・レーゲンの改造を全体的な性能の向上にしたのだ、新しい機能はあまりつけず機体のバランスを崩さぬように設計し、コアへの違和感を最小限にしたのだ。

これなら第二形態移行への障害にもならないのでコアは初期化せずすむ。

「すみません、この場合はどうしたらいいんでしょう？」

「あ、そこはですね……」

おっと、作業に集中しなきゃ。

「それじゃあラウラ、まずはテスト飛行から始めようか」

『了解』

データ入力作業も難なく終わり第四アリーナでシュヴァルツエア・ニールレーゲンの起動テストを始める。

「スラスターの位置とかは変わったところはないから今まで通り使えるはずだよ、でも全体的性能が16%UPしているからそこだけは気をつけて」

『わかった』

ラウラは飛翔、徐々に速度を上げていった。加速に減速、上昇下降を繰り返し感触を確かめるラウラ。

「どう、感触は？」

『凄いな……使い勝手はまったく一緒なのだが出力が段違いだ』

「違和感はない？動かしにくいところとかは無い？」

『ああ、まったく無い』

「そう、よかった」

ディスプレイに映されるデータを見てみると問題は映されていない。

「じゃあ、次に移るね」

『ああ、いいぞ』

「次は武装のテストを兼ねての模擬戦に入るよ。武装のデータは全部覚えてる？」

『大丈夫だ、問題ない』

「相手は二人で近接戦闘型と遠距離型、一人ずつ戦ってもらうからね」

『ああ、わかった』

ちょっと急ぎすぎてるかもしれないけど時間が少ないからね。ドイツの技術者達の滞在期間は短いし。

「じゃあいくよ」

アリーナのピットから二機のISが出てきた。

ピットからISが二機出てきた赤と青、見知ったISだった。

「お前達か」

「そつだ」

「お相手してあげますわ」

箒とセシリアか、近距離戦と遠距離戦のテストには絶好の相手だな。

「それがお前の機体か」

「ああ、名は『黒き霧雨』だ」
シュヴァルツェア・ニールレーゲン

お前の弟が手を掛けてくれた機体だ、と繋げる。

『じゃあまずはセシリアさんからお願いします』

「わかりましたわ」

まずはセシリアからか。

『準備はいいですか？』

「ああ」

「ええ」

『じゃあ・・・始め！』

優希の開始の言葉で私は飛び出した。

始まった……んだけど、模擬戦はすぐに終わってしまった。

開始と同時に飛び出したラウラはAICでセシリアさんをその場に固定した、セシリアさんも警戒はしていただろうけど改造されたシュヴァツェア・ニーベルレーゲンの速度に反応できなかったみたいだ。

その後はAICで捕縛されたままレールカノンを至近距離で喰らいそのまま勝負は決したのであった。

この際使われたレールカノンにも改良を加えた。以前よりも変わったのは銃口が二つになったことだ、その分口径は若干小さくなっただけで連射性が向上した。さらに撃ち出せるのは徹甲榴弾だけではなくて砲弾の選択により散弾も撃てるようにした。これで接近戦時にでも使用可能になった。オプションでもう一機付けることも可能だ。

でも、本当ならもうちょっと別の武装を使って欲しかったんだけどな……。仕方ないか。

「セシリアさんお疲れ様です。次は箒姉、お願い」

『わかった』

定位置に移動する箒姉、スッペク的にはまだ紅椿のほうが上だから、さっきのようにいけないと思う。

「ラウラ、今度は全武装を使ってね。これはデータ取りでもあるんだから」

『善処しよう』

使ってくれないと困るんだけどな……。まあ今は自由にやらせておくか。

「それじゃあ……。始め！」

『はあああ!!』

開始の合図と共に箒姉が空烈を振るいエネルギー刃を飛ばした。

「……………」

A I Cではエネルギー刃を止めることはできないのでラウラは上昇して回避した。そしてそのままA I Cで箒姉を捕らえようとするがほつきは姉も既にその場にいずラウラに接近していた。

『はっ!!』

『ふっ!』

接近した箒姉は雨月を横薙ぎに振るう。それをラウラはプラズマ手刀で受ける。ブレードとプラズマ手刀はぶつかり合い火花を散らす。お互いの力は拮抗していて動かない。

『でえいつ!!』

『くっ!』

ラウラが一気に力を入れてブレードを弾き飛ばす。箒姉はそのまま距離を取ろうと離脱する。おそらくAICを警戒しているんだろう。

『逃がさん！』

プラズマ手刀発生器の一部がスライドし変形する。変形した露出した基部には銃口のようなものが覗いていた。ラウラは右腕を箒姉の方に向けると閃光が奔った。

『な、くっ！？』

箒姉はそれを受けてしまった。これも改良したものだ、前々から思っていたのだがシュヴァルツエアレーゲンには中距離武器が少なすぎると、改良するさいに付けようと思っていたのだけどラウラは固定武装の方が性に合っているというのでどうしようかと考えていたら、プラズマ手刀が目に入ったのだ、これなら腕部に固定されているのでちょうどいいと思ったのだ。プラズマ発生基部を少し弄りプラズマ弾を撃てるようにしたのだ。威力は低いが十分使えるものになった。

今までにない武器に反応が遅れてしまった箒姉は防ぐ術もなく攻撃を受けてしまった。威力は低いのでそれほどのダメージは無いのだろっけど、動きが一瞬止まってしまった。この隙をラウラが逃すわけもない。

『逃がさんっ！』

追撃するラウラ。以前ワイヤーブレードを収納していた部分が開く、だが収納されているのはワイヤーブレードではなかった。そこには刀身の短く小さい小型のブレードが大量に詰め込まれていた。

『いけっ！』

『な、なんだこれは・・・ぐあっ！？』

ラウラの声と共に小型ブレードが射出された、ブレードはまるで意思を持ったかのように箒姉へと向かった行った。ブレードが箒姉にぶつかった瞬間爆発が起きた。

これが、ワイヤーブレードに変わる武装ブレードミサイルだ。以前の武装であったワイヤーブレードはワイヤーの収納部分も必要だったため搭載できる数が少なかった。あとワイヤー同士が絡み合つて制御が不能になるという事態が多々あったらしい。この問題を解決するために僕はあえてワイヤーを排除した、ブレードの回収はできなくなったけど、ブレードの刀身を形状火薬にして敵機に接触したときに爆発するようにした。ブレードの後ろには小型のスラスターが付いているので若干ではあるが追尾することが可能になっている。

爆発によつて体制を崩した箒姉、ラウラは攻撃の手を緩めないレールカノンを上から撃ちつける、箒姉はそのまま地面へと叩きつけられる。そこへ散弾へと変えたレールカノンで追撃をする、地面は土煙が上がり視界は塞がれ何も見えなくなった。

『終わったか・・・』

『はあああっつー！』

『何！？』

突如ラウラの後ろに箒姉が現れた。紅椿は装甲が開いている状態になっている、紅椿の最大速度での瞬間加速だ、速すぎてセンサー

イグニッション・ブースト

も反応できなかったのだろう。箒姉はそのまま両腕に持ったブレードを振り上げる。背後からの不意打ち、これは防げない……はずだった。

『ぐっ！？な、なぜだ……』

箒姉の動きがブレードを振り上げたまま止まった。

『A I C F出力安定、そして』

ラウラが振り返り箒姉の方へ向きレールカノンを突きつける。

『チエックメイトだ』

『くっ……降参だ』

箒姉が降参し模擬戦は終了した。なぜ箒姉の動きが止まったのか。それが今回の改造一番の目玉だ。A I C F、アクティブ・イナーシヤル・キャンセラー・フィールド。まあ、簡単に言えばA I Cをシユヴァルツェア・ニーベルレーゲンを中心に半径四メートルに静止力場を発生されるのだ。

通常のA I Cは停止させる物体に意識を集中させなければいけないのだがこのA I C Fは範囲内の物体を無差別に停止させるのだ範囲が狭いから近接戦闘時にしか使えないけど使いこなせば強力な武器になる。実弾だったら完全に防げるようになっていくからね。まあその分弱点もあるけど。

でもこれでデータも充分取れただろうし、僕の仕事は終わりだ。後はドイツの仕事。

「模擬戦はこれで終了。三人とも戻ってきて」

『『了解（ですわ）』』』

三人はIS展開を解除してピット口に向かっていった。
ふう……。でもこれでようやくゆつくりできるよ。ここ最近
働き詰めだったし、ドイツの仕事に学園祭、蘭堂の仕事。明日は何
もないからゆつくりと休もう……。でもその前に……。

「「優希（さん）！！あれは何なんだ（ですの）！！」」

この二人にいろいろと説明しなきゃな……。はあ。

「うにゃ~~~~~休みだ~~~~~」

昨日でドイツの仕事はすべて終わったので今日はお休みだ。蘭堂
の方も休んでいいって果歩さんも言ってたし。だから……。

「今日はゴロゴロする~~~~~」

こんなのいつぶりだろ……。ダメだ思い出せない。まあいいか、
今日はお休みなんだし。

「二度寝しちゃおうか（コンコンッ）な……。んにゃ？」

ノック、誰だろう？一夏は会長の特訓を受けてるし、箒姉たちもおそらくそれに着いていつてるだろうし、ラウラは重要な書類をドイツ大使館に届けに行くって言うてたしな……まあ、とりあえず出てみるか。

「はい、ってシャル？どうしたの」

「あ、おはよう優希。あ、猫パジャマだ！ちゃんと着てくれてるんだ」

「あ、うん」

いや、最初は恥ずかしかったんだけど着てみると中々着心地がいんだよねコレ……じゃなくて。

「で、どうしたの」

「あ、そうだった。優希さ今日、暇かな？」

「え、まあそうだけど……」

ゆっくりするつもりだったけどね。

「だったら、ちょっとお願いがあるんだけど……ごめんねゆつくりしてたんだよね」

「いいよ、別に。で、お願いって？」

「いいの？」

「うん、シャルの頼みだもん」

「そう！だったらね・・・」

今日はゆっくりしたかったけどシャルには色々とお世話になってるし友達だもんね。こっちの方が優先的だよ。多分買物に付き合っ
てほしいとかなんだろーし。

「僕と模擬戦してほしんだ！」

・・・・・・え？模擬戦？

この時、僕は数分前の自分を呪いたくなっただのであった。さよう
なら僕の休日・・・・・・。

第四十九話（後書き）

オリジナル改造機ついに完成しました。構想事態は書き始めた当初から考えてあったのですが名前を考えるのが大変でした。ドイツ語の発音や単語が難しすぎて、かなり悩みました。

コアの件に関しては自己解釈でやりました。次はシャルとの模擬戦話です。新型が登場します。

ご意見、感想などがありましたら是非ご感想の方に。では次回の更新で。

第五十話（前書き）

気づけば五十話、半年間書いてきたものだが早いものだな。
それではどうぞ。

第五十話

「優希ありがとね。相手をしてくれる人が誰もいなくて……」

「あ、ううん……大丈夫だよ」

急にシャルから頼まれた模擬戦、その内容とは先日フランスが発表された新型のデータ取りだった。

「でも、新型のテストパイロットがシャルだったのは驚いたよ」

「僕もだよ、てっきり本国の人がやると思ってたんだけど父さんが……」

え？社長が何かしたの？

「父さんが新型を二機造ってね……データをより多く取るため、とか色々言って政府の人を言いくるめたみたい」

「えーとつまり……社長が親馬鹿を発動させて強引にシャルを新型のテストパイロットにしたってこと？」

「うん……」

うわー。

「政府の人に色々と言を貰ったよ……はあ」

「そ、それは……ご愁傷様」

「うん……」

社長、娘のためだと思ってやるのはいいんですけど。もうちょっと考えて行動してくださいよ……。

「でも、優希が製作が関わった機体に乗れるのは少し嬉しいかな……（ボソツ）」

「ん？何か言った？」

「い、いや、なんでもないよ！なんでもない！」

「そう？」

なんか言ったような気がしたんだけど気のせいか……。

「で、新型ってどんな機体なの？」

「それは……」

「こんなところにいたのかシャルロットちゃん……おや？篠ノ乃君じゃないか」

シャルが言おうとしたときに一人の男性が来た。あれは確か……。

「アドックさん？何でここに……」

エドガー・アドックさん。デュノア社の代表取締役専務、そしてシ

ヤルのお父さんの親友という、実質的デュノア社のNo.2な人だ。
でも何でISS学園に？

「ああ、新型の説明のために着いてきたんだよ。後はヴァンに言われてシャルロットちゃんの様子をね……」

と、虚ろな目をするアドックさん。あの一件以来、親馬鹿が爆発した社長に振り回されてるんですね……がんばってください。

「とつ、で、篠ノ乃君は何故ここに？」

「あ、エドガー小父さん優希は今日の相手をしてくれる……」

「おお、そうか！模擬戦の相手は優希君か、よろしく頼むよ」

「はい、がんばります」

でも、新型に乗ったシャルか……とんでもなく強そうだな……

「じゃあシャルロットちゃん。準備を始めてくれ。コアの移植は終わったよ」

「あ、はい」

「え？コアの移植？」

まさか、リヴァイブカスタムのコアをそのまま使ってるの！？

「ちょ、ちょっと待ってください。移植……初期化フォーマットしたん

ですか？」

「ん？いや……していないが。何か？」

「していないって……そんなことしたらコアの記憶されているデータが誤差を感じて機能不全を起こしますよ！それに自己進化機能にも障害が……」

「あ、ああ、そのことが……それだったら問題はないよ」

「は？」

問題ないって……どういうことだ？

「あのね優希、新型なんだけど機体のベースはね僕のリヴァイブなんだ」

「リヴァイブが……」

でも、ベースにしたって過度な変更があれば機能に支障をきたす危険性があるし……。

「大丈夫だよ優希」

「でも……」

「本当に心配しないで、大丈夫だから」

シャルがそういうなら大丈夫かな……。シャルもコアの基礎知識はあるだろうし、危険ならちゃんと分かるか……。

「わかった、もう何も言わないよ」

「うん。じゃあ、準備して待っててね、すぐに終わるから」

「うん」

そう言いシャルはアドックさんと一緒にアリーナの方に向かっていった。

「さて、僕も準備するか」

とりあえず簡易だけどコンディションチェックからいこうかな。

「はい」

『篠ノ乃君準備はいいかい？』

僕はユニコーンを装着した状態でシャルを待っている。

『シャルロットちゃんはもう少しで来るから、もう少し待っていてくれ』

「わかりました」

どうやら準備に時間がかかっているらしい。何か問題があったのかな？

『すまないな・・・っと、おお、準備が終わったみたいだ』

「あ、そうですか」

来るみたいだ。いったいどんな機体なんだろうリヴァイブカスタムがベースの機体って言ったのだけど・・・。

アリーナのピット口の扉が重々しく開いていく。そして開ききったときにオレンジ色のISが飛び出した。

「お待たせ、優希」

シャルは軽く手を上げてそう言った。

「そんなに待ってないよ。ところでそれが・・・。」

「うん、デュノア社製第三世代型IS『トルナード竜巻』だよ」

フランス語で竜巻か・・・風の名前を付けてきたデュノア社らしいネーミングだね。

トルナードの外見はシャルが以前に乗っていたリヴァイブ・カスタムと酷似している。背部の大型スラスタはさらに大型になり翼を連想させる。左腕のシールドは以前よりも若干であるが小型化している、おそらく内部の灰色の鱗殻を無くしたのだろう。攻撃力は下がったのだがその分動きを阻害しなくなっただろう。

アンロック・ユニット後気になるのが非固定浮遊部位だ。長方形型に変形されているのだ、以前はスラスタを接続しているだけだったが、今はただ浮い

ているだけの代物だ。スラスターは全て背部に接続されている・・・
・・・何かあるな。

「じゃあ、そろそろ始めようか・・・」

「うん・・・」

イメージインターフェイスがどんなものか分からないな・・・
・ここは慎重にいこう。

『準備はいいですか？では・・・始め！』

オペレータの合図とともにビームマグナムをコールする。タイム
は一秒もかかっていない。だがシャルは・・・。
ジャキッ！

重機関銃を両腕に構えていた。

「え？」

「いくよっ！！」

ダダダダダダダダッ！！

「う、うわわわっ！？」

僕は急ぎ襲い来る弾丸の雨を回避する。な、何でもう武器出して
いるの！？早すぎる！

「逃がさないよー！」

え、何で！？いつの間にかシャルの武装が大型のミサイルランチャーラビット・スイッチに変わっていた。いくらなんでも高速切替が得意なシャルでも早すぎる！こんな人間技じゃな……。はっ！まさか……。確認する必要があるね。

僕は撃ちだされたミサイルをレーザーバルカンで撃ち落とし一気に接近しようとするが、またシャルの手に持っている物がレイン・オブ・サタデイに変わっていた。やっぱりね。

「わかったよ……。トルナードの機能が」

「あ、もう分かっちゃったんだ。さすが優希だね」

トルナードのイメージ・インターフェイス、それは人工的に高速ラビット・スイッチ切替を可能にすることだ。なんて物を造ってくれたんだデユノア社。何でシャルが人間離れた展開速度を出せるのかはシャルが元からこの技能を持っているからだろう。元の技能プラス新機能であなつた……。はつきり言つて反則だよ。

「でもわかったからって勝てるわけじゃないよ」

「うん、でも知らないよりはマシだよ」

知っているだけで心持が変わるよ……。さて、どう攻めるかな……。。

「攻めてこないの？じゃあ……。僕からいくよ！！」

また持っていた武装が重機関砲に変わる。本当に目を疑うよ一瞬だ、持っていた物の形が変わっているようにしか思えない。粒子の光も見えなかった、コンマ一秒以下なんじゃないかな、あれ？

ダダダダダダッ！

また、雨のように襲い来る弾丸、でも！！

「ランパート！」

アンロック・ユニット

非固定浮遊部位からシールドが外れ、弾丸を防ぐ。ダメージを受けなければならないことだ！！

スピリット・ランパートの強固な守りにより重機関砲の弾丸は僕へは届かない。その間にビームマグナムを展開し。

「行けっ！」

「ふっ！」

最大出力で撃つ。が、シャルには軽々と避けられてしまう。Eパツクをリロード、今度は低出力で連射する。シャルはシールドを構築え防御体制に入った、するとシールドからエネルギー状の膜が出てきてビームは簡単に防がれてしまった。

「……ガーデン・カーテンのシールドを常備か……防御面でも優秀な機体だね」

「うん、だってデユノア社の技術の粋だもん」

攻撃面では弾切れのない射撃、防御面はガーデン・カーテンのエネルギーと実体シールド……凄いな。どう切り崩すか……。

「まだまだいくよっ！」

重機関砲からグレネードランチャーに切り替え、攻撃を再開するシャル。ランパートで防ぐが爆発の影響でランパートにダメージが蓄積していく。ランパートの枚数は六枚だが、これもいつまで持つかわからない・・・だったら！

ランパートを戻し、回避に専念する。

（急に避けることに集中し始めた、何をするつもり？・・・でも、防御を止めた一気に攻めるチャンスだ！）

シャルは先程使ったミサイルランチャーを再度取り出し放つ、これを待ってた！レーザーバルカンで撃ち落とし爆発させる。そして一気に・・・。

「はああああー！！！！！！」

「っ！！」

爆煙の中を瞬時加速で突っ切る、急な接近に対応が遅れるシャル。接近戦なら！！

ビームサーベルを引き抜き振り下ろす、だが・・・・・・・・。。

「残念だったね優希」

ガキッ！

振り下ろそうとした腕が何かに掴まれ阻まれた。動かない腕を見るとそこには巨大な機械の手、いやクローといった方が正しいか。それが僕の腕をしっかりと掴んでいたのだった。い、いったい何所から・・・・・・・・ん？よく見てみると非固定浮遊部位が見当たらない、まさか・・・・・・・・。。

「し、隠し腕！？」
シックレット・アーム

「そんな感じ！！」

レイン・オブ・サタデイを僕の腹に当てるシャル。や、ヤバッ！？
ドンッ！！

お腹に凄い衝撃が走る、離脱したいのだがあの巨大なクロウが僕の腕を掴んでいて離れられない。そうしているうちにまた衝撃が走る。な、何とかしないと！

「ええいつ！！」

「きゃっ！？」

パワーを最大にしIS-Dを起動する。そしてそのままシャルを蹴り飛ばす。その拍子にクロウも外れた、このまま畳み掛ける！！

「でえいつ！！」

「くっ！？」

ビームサーベルを両手に持ち斬るがシールドで防がれた、やつぱり硬い……。けど！

「まだまだ！」

ビームサーベルを何度も振り、シャルに反撃の隙を与えないようにする。

「くっ、いつまでもこのままじゃないよっ！！」

シャルが叫んだと同時に僕は殴り飛ばされた。あ、あのクローか。ダメージ自体は少ないが距離を離されてしまった。

「優希、この機体の名前が竜巻^{トルナード}なのか、見せてあげる!!」

な、何をするつもりだ……。

シャルは重機関砲を出し構えるがそれだけではない、左右のクローには大型のキャノン砲^{ドラゴン・ファング}《竜の牙》の発展型と思われる物が装着さらには側面にミサイルポッドらしき物もある。それと脚部の側面からも小型の隠し腕が出ておりそれにはサブマシンガンが握られている。も、もしかして……。

「ファイア!!」

や、ヤッパリー……!? 展開されている装備全てから火が吹いた。あのおびただしい量の弾幕を避けきれぬ自信はない。だからランパートを全展開して防御に徹する。

と、竜巻^{トルナード}……言い得て妙だよホント、名前通り凄まじい弾幕だ。隠し腕による武装展開数を上げ弾幕を張る、弾が切れても高速^{ラピッド}切替で武装を交換して弾幕を張り続ける。シャルが使うとその効果は倍増……。恐ろしすぎる機体だ。

でも、どうするか……。この状況じゃ反撃は難しいしビットを出したとしてもすぐに撃ち落されるだろうし、シールドエネルギーも残り半分。ランパートもいつまで持つか分からない……。こうなったら、玉砕覚悟で反撃するしかない。武装のエネルギーを全てビームサーベルに廻して一気に終わらせる! いくぞっ!!

「おおおおおおお……!!」

ランパートを前面に展開して突進する。近づくとつれてランパートが一枚ずつ減っていく。あと少しなんだ持つてくれ。

ガンッ！！ガンッ！！ガンッ！！バキッ！

最後の一枚が破壊されたとき僕とシャルの距離はすぐ近くまで来ていた、あれだけの重装だこれだけ近ければ反撃できまい！

「あっ！？」

「でりやああー！！！！！！！！！！」

最大出力にしたビームサーベルを振り上げる、勝った！

「させないよっ！！」

「え？」

左手の重機関砲を捨てシールドを突き出した、すると……………。
ジャコンッ！

シールドが縦に裂けるように変形し僕を挟んだ。でも、まだ終わってない、このまま振り下ろせば！だがその思いも虚しく、振り上げた腕はクローに掴まれ動かせなくなつた。

でも、この状況だビットを出せば！

「優希さ、このシールドを見たときに《灰色の鱗殻》グノースケールはないと思つたでしょ」

「え……………？」

な、何を言ってるんだシャルは……………。

「僕、あれ結構気に入ってたんだ、でもねあれって結構重量があつてね、載せれないって言われてたんだ、でもね……………」

トルナードの腕部からジャコンツと何か音がした、そう弾を装填したかのような。

「開発陣が頑張つてね内蔵型のを造ってくれたんだ」

シャルは貫手をつくる。ま、まさか……………。

「優希」

「な、何かな…………？」

「結構痛いかも知れないから先に謝っておくね。ごめん」

「謝るならやm……………！」

「ファイアツ……！」

「め………うにゃ……………!!?!?!?!?」

ドンツと凄まじい衝撃がきた、さっきのレイン・オブ・サタデイよりも凄いのが。インパクトの瞬間にシールドのクローを外し、僕はアリーナの壁まで吹き飛ばされた、そしてそのまま壁に衝突した。意識が……………。

「あ、あう……………」

「え？ゆ、優希？ちよっとしっかりして！優希……………!!?!?」

シャルが何か言ってるけど、もう・・・・・・・・ダメ。

「あ、う・・・・・・・・（ガクッ）」

「ゆ、優希――！？」

おやすみ・・・・・・・・なさい・・・・・・・・。

第五十話（後書き）

シャル専用第三世代機トルナード、完成しました。今回のオリ機は・
・・・趣味走りました、すみません（土下座）

圧倒的な火力に隠し腕、それと隠し武器。作者が好きなものを詰め込みました。

反省していない、後悔はしまくりング。

二機の機体解説は後に設定で書きたいと思っています。
感想などがありましたら感想のほうに・・・・。

では今回はここまで、次回の更新で。

第五十一話（前書き）

遊びすぎたかもしれん・・・五十一話です、どうぞ。

第五十一話

「まったく箒姉！何でこんなことをしたの！！」

「いや、だって・・・優希が・・・」

「口答えしない！！」

「はい・・・」

シャルとの模擬戦で気絶した僕が目覚めたときに見た光景はシャルを鬼のような表情で追いかける箒姉だった。トルナードの装甲は新品であつたはずなのにボロボロになり、シャルも涙目だった。

それから何とか箒姉を止めて、正座させて僕はアドックさんをはじめとするデユノア社の人たちに頭を下げた、修理は全部僕がやることにした、アドックさんはいいと言っていたが姉の責任は僕の責任でもあるのでそういうことにしてもらった。

で、今は箒姉を説教中だ。

「何でこんなことしたの！あれロールアウトしたての新型なんだよ、ダメージレベルはDだったからよかったものを・・・下手したら国家間の問題になりかねてたんだよわかる！」

「だ、だがな優希、シャルロットはお前にISごしだが気絶するほどのダメージを与えたんだぞ、それを黙って見過ごせなんて・・・」

「・」

「ISには絶対防御がついてるからそれくらいじゃ怪我はしません！」

「わ、私は優希が心配で……」

ここ最近の箒姉は暴走が多すぎる、この前の道場が半壊したのも箒姉がやったてもの聞いたし。僕のことを心配してくれるのは嬉しいけど、度が過ぎている。ここはガツンと言ってやったほうがいいかな、うん。

「過保護すぎる箒姉は嫌いです」

ピシャーーンッ！！

あれ？今なんか変な音が聞こえたような……。気のせいかな……。ええっ！？

「ほ、箒姉、何やってるの！？」

箒姉はどこから出したか知らないが制服を捲り、腹を出して緋宵を突きつけて、要は切腹の構えをしていた。

「優希に嫌われたのなら……。生きている価値はない。いざっ！！」

「だ、ただ、ダメだって、止めて箒姉！！」

な、何しようとしてるの！？手か、力強い！？押さえきれない……。！！

「離してくれ、私は……。私は……。！！」

「じよ、冗談、冗談だから！！切腹は止めて箒姉！！」

そう言ったら篝姉の動きは止まった……た、助かった？

「本当か……？優希」

「う、うん」

「私のこと好きか……？」

「う、うん……好きだよ」

「優希————！！」

「むぎゅっ！？」

ちょ、篝ね……急に抱きつかないで！？い、息が……！

「私も大好きだぞ————！！」

「ム——！！ム——！！？」

く、苦しい！息が！？あ……また意識が……。

「優希優希優k……む、優希？」

「……………（デローン）」

「ゆ、優希！？しっかりしろ————！！？」

もう……だめ……。

「ゆ、優希……大丈夫か？」

「……うん、大丈夫だよ」

「いや、目の下に酷い隈できてるぞ……」

ね、眠い……。トルナードの修理のために一昨日の夜から寝てない、基本がリヴァイプで助かったよ思ったよりも早く終わったし……。でも、眠い。結局休めなかったし、身体が重い……。

「きよ、今日は休んだほうがいいんじゃないか？」

「大丈夫だよこのくらい」

「そ、そうか？」

「うん」

「だったら、いいんだが……」

心配性だな一夏も、徹夜なんて技術者には当たり前なことだよ。

「ほら、一夏。今日日直なんでしょ？急がないと」

「お、おう」

部屋から出る一夏を見送る。さて僕も準備しないと。

「あ、あら……？」

着替えようとしたら足がもつれ尻餅をついてしまった。立ち上がろうとしても足に力が入らない。

「ど、どうしちゃったんだろ？よいっしょ！」

もう一度、力を入れて立ち上がったけど……。

「あ、あれ……なんかぼやけて見え……」

それに、頭もクラクラして……きた……。ドサッ

コンコン

「優希ー、大丈夫ー？」

「返事がないな、もう出たのか？」

連休明けの朝、僕とラウラは優希の部屋の前に来ている。一夏から優希の調子が悪そうだったて聞いたから来たんだけど、もう行っ

ちゃったのかな？

「む？」

「どうしたのラウラ？」

「鍵が開いているぞ」

「あ、ほんとだ」

開けっ放しなんて無用心だな。

「・・・・・・・・まさかな」

「ラウラ？」

ラウラが険しい表情をしながらドアを開ける、すると僕たちの視界に入ったのは。

「「優希！？」」

床に倒れた優希の姿だった。

「過労ね、それに熱もあるわね・・・・・・・・でも、心配なくていいわよ。今日一日、寝てれば治るわ」

「「よ、よかった・・・・・・・・」」

僕たちはあの後すぐに優希を保健室に連れて行った。床に倒れたまま動かない優希を見た瞬間心臓が止まるかと思ったよ、ラウラも顔を真っ青にしてたし…………。

「さて、篠ノ乃君は私に任せてあなた達は教室に行きなさい。もうHR始まるわよ」

「でも……………」

「む……………」

で、できれば優希の傍にいたいな…………それはラウラも一緒みたいだ。

「あらあら、篠ノ乃君はずいぶんとモテるみたいね」

「「う……………」」

な、なんか恥ずかしいな…………今、絶対顔が赤ってるよ。

「でも、早く行ったほうがいいわ…………あ」

「「あ?」「」

「後ろ……………」

後ろ?……………ヒイ!?

「ほう…………私の授業をそんなにサボりたいのか。いい度胸だな」

お、終わった．．．．出席簿は覚悟したほうがいいかな．．．．

「はあ．．．．さつさと教室に行け！」

「「は、はい！」」

叩かれなくてよかった．．．．。僕たちは急いで保健室から出、教室に向かったのだった。昼休みにまた様子を見に行こう．．．．。

でも、教室に入ったら刀を持った箒に迫られるというハプニングがあるのを僕たちはまだ知らなかったのだった。

「あ、あれ．．．．？ここは．．．．？」

「あ、目が覚めましたか篠ノ乃君？」

この声って確か保険医の川井先生．．．．なんで？

「気分はどう？吐き気とかはない？」

「だ、大丈夫です．．．．あっ」

起き上がろうとしたら眩暈がした。

「起きたら駄目よ、寝てて。あなた部屋で倒れてたのよ」

「そう……なんですか？」

ボーとする頭で思い出してみるが、ダメだ……。はつきりしない。

「とりあえず今はゆっくりと寝ていなさい。熱もあるんだから」

「はい……」

そうか……。熱もあるのか、道理で頭がボーとするのか。とりあえず今は寝ておこう……。おやすみ……。

「はっ！」

ピコーンッ！

「ゆーくんの身に何か！！」

東さんの篝ちゃん&ゆー君レーダーに反応が！！

「待てってね、すぐにお姉ちゃんが行くから！とっっ！」

ガシヨンッ！シュタッ！

「はっしーん！」

ゴォーーーーーー！！

いつものニンジン型ロケットで私は飛ぶ、ゆー君の元へ！！

ここは学食の厨房、ちゃんと申請して使用時間外だったら私たちでも貸してもらえる。なんだけど……。

「……（ゴゴゴゴゴゴゴゴ）」「」

な、何なのよ、この空間は……！

「り、鈴さん……何とかしてくださいまし……！」

「わ、私にどうしろってのよ！」

私は一夏のために酢豚を作りに来ただけなのに……。厨房の真ん中で箸とシャルロットそれにラウラが睨み合っている、ただ全員その手には土鍋を持っている、おそらく中身は優希のためのお粥でしょうね。

「……優希のお粥は私ので十分だ」

「それはどうか？ 箸のお粥、ずいぶん塩が多かったような気がするけど。病人にはきついんじゃないの？」

確かにねさつき見たけど、塩をドバツって入れてたわね。大さじで二杯くらい。あれはしょっぱいわね絶対。

「そういうシャルロットもおかしいのではないのか、それはどう見てもリゾットだ。病人食ではない。だから、ここは私の」

確かにお粥じゃないわね・・・途中までよかったけどチーズを入れた時点でそれはリゾットよシャルロット。

「ラウラはお粥ですらないよね。炒めている時点で炒飯じゃん！」

ラウラはお粥ですらなかったわね。でも地味に美味そうねあの炒飯。

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・（ゴゴゴゴゴゴ）！！」「」」

も、もういや・・・・・・・・この空間。

「ん？何、この臭い？セシリア、知らな・・・」

「あら？どうかしましたか鈴さん」

セシリアはお玉を持ち鍋をかき混ぜている・・・・・・・・でも、その中身が・・・・・・・・。

「せ、セシリア・・・それは・・・・・・・・」

「ん？ああ、これですか？以前シャルロットさんに日本の殿方は肉じゃが・・・という料理が好物だと聞いたのでそれを作ってみる

のですが・・・なかなか上手くできませんの。なぜかしら？」

そりゃそうでしょ。肉じゃがにはウスターソースやチョコソースはいらないわよ、てかそんなもの一夏が食べたら死ぬわよ。

「んっ・・・そうですわ。あれを入れてみましょう」

あれ？あれってなに！？セシリアが取り出したのは液体味噌だった、お湯に溶かせばすぐにできるというやつだ。まさかあれを・・・

「とりあえず一本入れてみましょう、味噌は万能だとチエルシーが言っていました」

液体味噌をドバドバと入れるセシリア。もうだめだ・・・あれは食べ物ですらない・・・。私は何も見なかった、何も見なかったのよ。

「透明感が足りませんわね・・・ここはお酒を・・・確かここにスピリタスが・・・。フフ、これで見栄えがよくなりましたわ。そうですわあれも入れればさらに・・・」

聞こえない聞こえない聞こえない！！

「優希、大丈夫か？」

「うん、だいぶよくなったよ」

まだちよつと体がだるいけど、朝よりも随分とましになった。

「そうか・・・飯は食えるか？」

「うん、ちよつとだけなら・・・」

食欲は少しだけ戻ってきた。

「そうか・・・だったらお粥でも作ってきてやるよ。もう学食は開いてないけど厨房は使えるだろうし」

「ごめんね一夏・・・」

「いいんだよ、優希には世話になってるしな。特に勉強面で。じゃあ、作ってくる。それまでもうちよつと寝ておけ」

「わかった、ありがと一夏」

「おう」

ボタン

そう一言いって一夏は部屋から出て行った。じゃあ、もうちよつとだけ寝てようかな。目を閉じるとすぐに眠くなり僕は眠りについた。

さわさわ

(あれ？誰だろう・・・僕の頭を撫でるのは・・・)

さわさわ

誰かが頭を撫でているのはわかるのだがその手が心地よく、目蓋を上げられない。

(なんだろう・・・気持ちいいこの手、それになんか・・・
・・・懐かしい)

誰が撫でているんだろう、気になる・・・でも目を開いたら、
終わってしまいそうで開けたくない。

さわさわ

(もういいや・・・このまま身をゆだねよう)

以前にも同じようなことがあった気がする・・・いつだった
ろう・・・。眠いからどうでもいいや・・・。

さわさわ

(あ・・・そうだ、あれ・・・は・・・)

「おやすみ、ゆー君」

束姉が看病してくれたときだ・・・。

「何をしにきた束？」

「おや、チーちゃん。おひさー」

夜中、誰もいないアリーナの中央そこにニンジンが刺さっていた。その上にはウサギが立っている、バカなウサギが。

「ああ、臨海学校以来だな。で、何をしにきたのだ。ISに細工でもしにきたのか？」

「んー？そんなことには興味はないね。あ、ゆー君が弄ったISにはすこし興味あるかな？」

「そのISに何かしたのか。事と次第によっては……」

一応こいつは指名手配されてるやつだしな。

「そんなことはしないよ。今日はゆー君に会いに来たんだよ」

「優希に……」

「そうだよー。束さんの箒ちゃん&ゆー君リーダーにビビッときてね。急いで来たのだよ」

優希の看病に来たのか……相変わらず何をするかわからんやつだ。

「そうか・・・・・・・・」

「そうだよ」

こいつは昔から優希には甘いな・・・・・・・・。

「さて、束さんは戻ろうかな」

「そうか、早く帰れ」

「チーちゃんは冷たいなー。でもそこが」

体をくねらせる束。

「さっさに行け、気持ち悪いぞ」

「ヒドイッ!? む・・・・・・・・いーもーん!! さっさと帰っちゃうもーんだ。チーちゃんは枕を濡らせばいいんだよ色んなし・・・・・・・・」

手に持っていた未開封の缶コーヒーを投げる。

「帰れ」

「はい・・・・・・・・」

頭にデカイたんこぶを作った束は刺さってるニンジンに入ると大きな噴射音を上げ空に浮かび始める。

『じゃあねえ~~~~チーちゃん』』

ニンジンが凄まじい速度で飛び去った。はぁ・・・・・・・・まったく。

「おはよう」

「あ、篠ノ乃君だ！」

「もう大丈夫なの？」

「優希きゅんの看病したかった・・・」

「うん、もう大丈夫だよ」

翌朝、僕の体調は戻ったので。保健室に行った後、教室にやってきた。まだ早い時間なので教室にいる人数は少ない。

「優希、おはよう。もう大丈夫なの？」

「無理はしてはいないか？」

あ、シャルとラウラだ。

「おはよう二人とも。もう大丈夫だよ」

「そう・・・よかった」

「そうか」

安堵の息を吐く二人。

「でも、治ってよかったよ……あれ？そっいえば一夏は？」

「遅刻か……？」

「ああ、一夏ね。それが……」

なんて言えはいんだろっな、あれ？

「何があつたの？」

「それが……昨日の夜から保健室にいるみたい」

「保健室だと、何故だ？」

「それが……何でか厨房で倒れていたみたい」

「厨房で？」

「ガスか……」

物騒なこと言わないのラウラ。でもなんでなんだろうな？よくわからないや。

あれ？なんか廊下が騒がしいな……どうしたんだろう？

「にゅ、ニュースニュース！今日の授業は全部中止だって！」

へ？中止、どういうことだ？

「何があつたの？」

「よくわからないんだけど、学食で突然意識を失う生徒が続出してるみたい！それでテロの可能性があるかもしれないからって事みたい」

て、テロ！？しかも食堂って。

「み、皆さんいますね！？」

あ、山田先生だ・・・慌ててるな、いつも通りにしか見えないけど。

「ええと、ですね。現在、学食で突如意識を失う生徒が続出しています。学園はこれを見無差別テロの可能性があるとみています。この事態の調査のため本日の授業はすべて中止します。皆さんは指示があるまで各自部屋で待機してください！」

い、いったい何が起こってるんだIS学園で！？と、とりあえず部屋に戻る。

このとき滝のような汗を流している鈴がいたのを誰も知らなかったのだ。

第五十一話（後書き）

優希倒れる。厨房の対決。バイオ兵器製造機セシリアの三本でした。

はい、遊びすぎたと今更後悔している作者です。

セシリアの料理は見た目は普通ですが味はバイオ兵器並みの破壊力を持ちます。最後の事件もこれが原因です。学食のおばちゃんがかの手違いで学食の日替わりメニューとして出してしまったため今回の事件は起こってしまいました。

一夏はお粥を作っているときにつまみ食いをしたため意識を失い倒れました。後に原因がわかった学園はセシリアを厨房に入れること禁じましたwww

次回からは原作六巻目に入ろうと思います。オリジナルのネタが今は無くて……。

では次回の更新で。

設定2（前書き）

オリ機の紹介です。

設定2

○ドイツ第三世代型IS・改良機

シュヴァルツェア・ニーベルレーゲン（黒の霧雨）

操縦者 ラウラ・ボーデヴィツヒ

ドイツ軍第三世代型ISであるシュヴァルツェア・レーゲンを篠ノ乃優希が立案した計画により改良された機体。

コアの自己進化機能への干渉を防ぐため極端な改良は控えているが、パーツの効率や出力の調整により全体的性能は16%上昇している。

機体性能だけではなく武装面も向上している。特に新機能であるAICFは近接戦闘型にとっては天敵ともいえる効力を発揮する。

○武装

・大型二連レールカノン

以前のレールカノンよりも口径は小さくなり一撃の攻撃力は弱くなったが連射性能が向上し結果的に総合的な攻撃力は上がった。選択式でレールカノンをもう一門着けることが可能である。

・ブレードミサイル

ワイヤーブレードに代わる新装備、一つ一つが形成火薬でできているがその攻撃力は絶大である。ブレード後部に小型のスラスターが付いているため敵をホーミングする

ことができる。

・プラズマ手刀・改

使用用途は以前と変わらないのだが、発生器部が変形することで小型のプラズマライフルが展開する。威力は低いが、腕部についているため近接戦闘時にも使いやすい。

・AICF（アクティブ・イナーシャル・キャンセラー・フィールド）

シャヴァルツェア・ニールレーゲン最大の特徴である機能。従来のAICは停止する対象物に対して意識を集中しなければいけなかったがAICFは自機を中心とした半径四メートル以内に静止力場を発生させることが可能である。

この力場は範囲内のものを無差別に静止させるため味方機も例外ではない。ただし、近接戦闘を主体とする相手にとっては天敵ともいえる機能である。さらに実弾はすべて防ぐことも可能である。

ただし、この機能は燃費が悪いうえPICに干渉してしまい自由に飛行することができなくなってしまうというデメリットを抱えている。

○デュノア社製第三世代型実証IS 二号機
トルナード（竜巻）

操縦者 シャルロット・デュノア

待機状態 ラファール・リヴァイブ・カスタム？同様ネックレス

なのだが翼のレリーフが二対の翼に変更されている。

デュノア社が日本の蘭堂財閥と技術交換をした際に得た第三世代型のノウハウと専属機であるラファール・リヴァイブ・カスタム？のデータと評価試験中であつたミストラルのデータを元に開発した最新鋭機である。拡張領域バスロットの容量は世界中の第三世代型ISの中ではトップでありこの機体のスペックを見たものは『移動式武器庫』などと呟く者もいる。

諸事情のため二機製作され、シャルロット・デュノアが搭乗する機体は二号機、一号機はフランス本国で評価試験中である。

一号機は高機動型、二号機は重装型と仕様が別れている。重装型である二号機は武装テスト用の機体である。重装型と呼ばれているがその機動力はモデルとなつたリヴァイブ・カスタム？よりも上である。

この機体最大の特徴は特殊スキルである《高速切替》ラビット・スイッチ人工的に発生させることができ、これにより技能を持たない者でも《高速切替》ラビット・スイッチを使用することが可能になつた。

さらにこの技能を持つものが使用すると武装の展開速度が倍になりタイムラグが一切無くなり通常では考えられない速度で武装展開ができるようになった。

○ 武装

・ 銃器類

武装の殆どはリヴァイブ・カスタム？と同様の物を使っているがバスロット拡張容量領域が拡張されたため、様々な武装が追加された。

・ミラージュカーテン

防御用パッケージ『ガーデンカーテン』のシールドを改良した高性能シールド。若干大きくはなったが動きを阻害することも無く使える。

エネルギー状と実体のシールドでありその強度は白式の零落白夜を十秒間までなら耐えられる設計である。

シールドには変形機構があり敵拘束用のクローへとなる。

・隠し腕

トルナードの非固定浮遊部位と脚部に装備された武装。
アンロック・ユニット

通常時の非固定浮遊部位は長方形の箱型なのだが展開することによって大型クローへと変化する。このクローは主に格闘用使用するがアタッチメントが付いており武装を装着し可能である。

脚部に搭載されているものは格闘には使用できないが殆どの銃器を使用することが可能。

全展開することでフルバーストモードに移行する。

・グノースケール・カスタム
灰色の鱗殻・改

灰色の鱗殻の改良型。リヴァイブ・カスタム？ではシールド内部に内蔵されていたがトルナードでは小型化に成功し左腕部に内蔵された。杭は手刀であり脆く見えがちだが左腕部は強度の高いレアメタルを使用しているので破損の心配は無い、それに口径が大きくなつたため威力が上がった。シールドが変形したクローで敵を拘束しゼロ距離で放つ。全時代的な装備ではあるが威力は一級品である。

最大三回まで連射が可能。

設定2（後書き）

こんな感じです。

次回の更新は少々お待ちください。

第五十二話（前書き）

五十二話です、どうぞ。

第五十二話

「そういえば一夏の誕生日ってそろそろだったよね？」

「ん？ああ、そうだったな」

学食での何気ない会話、そこで僕はそう呟いた。

「そ、それは本当ですよ！？」

一夏の誕生日を知らないセシリアさんが大声を上げ、食いついてきた。

「お、おう」

「いつですよ！」

「く、九月の二十七日だ。と、とりあえず落ち着け」

「わ、わかりましたわ」

椅子に座りなおすセシリアさんだけど落ち着きがない。

「い、一夏さん。そういう大事なことはもっと早く教えてくれないと困りますわ」

「す、すまん」

一夏、謝ってるけど絶対なんでかわかってないだろうな……

鈍感が。

「とにかく、二十七日の日曜日ですわね」

手帳を取り出して二十七日の部分を何重にも丸をつけるセシリアさん。

「そ、そういえば優希の誕生日はいつなのかな？」

「僕？僕は十月二十日だよ」

「十月二十日だね！わかった」

「う、うん？」

どうしたんだろう？まあ、どうでもいいか。

「い、一夏さんその日予定は……」

「ん？ああ、その日は中学のときの友達が祝ってくれるから俺の家に集まる予定なんだが、みんなも来るか？」

友達って蘭ちゃんと蘭ちゃんのお兄さんかなのことかな？

「も、もちろんですわ！いつですよ！？」

「えーと四時からかな、当日はあれがあるだろ」

あー……。あれか。二十九日にはIS学園の行事としてISの高速バトルレース『キャノンボール・ファスト』が行われる。元は

国際競技でもあるのだけどIS学園のは少し違い、市のイベントとして生徒全員が参加することになっている。無論専用機持ちが有利になってしまうので専用機部門と訓練機部門に別れている。

場所は学園ではなく市の臨海地区にある特別アリーナで行われる。あそこはとてつもなく広く観客も二万人収容できるらしい。

「そういえば明日からキャノンボール・ファストの高機動調整に入るけど、具体的に何をするんだ？」

「ふむ、基本的には高機動用のパッケージのインストールなのだが、おまえとの白式にはないだろう。ムグムグ……」

ラウラ、口に物を入れながら喋るのは止めなさい。

「その場合は駆動のエネルギーの配分調整や、各スラスターの出力調整とかかな」

シャルは白身フライを齧りながらつなげる。

これは箒姉もだよな、今度手伝ってあげよう。

「そうか……ん？じゃあ優希と箒も俺と同じか」

「そうだな」

「あ、僕は違うよ」

「「「「「え？」「」「」「」」」」」

なんでみんな驚くのかな？

「ど、どういことだ優希？」

「えーとね、蘭堂でね好きに資材を使って良いって言われてね、作ってみたんだ。高機動用パッケージ」

「「「「「・・・・・・」」」」」

「あんだ、何気に出鱈目よね・・・・・・」

そうかな？

「優希にはあるのか・・・・これじゃ分が悪いな」

「そうでもないよ、白式には高機動パッケージは要らないよスペック上の機動力は相当なものだし」

そこらの専用機よりも凄いいし。まあ操縦者の腕がまだまだだから完全じゃないけど。これは姉もだ。

「そつえばシャルロットとラウラはどうするのだ？新型なのだから」

「え？あ、そうだね」

「うむ」

そうだよ、ラウラの機体は僕が改良したからパッケージの規格は合わないだろうし、シャルはロールアウトしたての新型だからパッケージの開発はまだだろうし、どうするんだろ？

「僕のトルナードは一号機のスラスターユニットを換装することになったんだ。本国もトルナードの宣伝に必死だからね、簡単に許可を出したよ」

そうなんだ、でもシャルのトルナードって重装型とは言うけどかなりの機動力なんだよね・・・それに高機動方のスラスターユニットをつけるって、これは強敵になるだろうな・・・。

「こちらはスラスターの調整だけだろうな。だがシユヴァルツェア・ニールレーゲンは高性能だからな引けはとらんさ」

「そうか」

まあ、ニールレーゲンの機動性は向上させといたからね。いい結果を出せる思う。

「鈴はどうなの？」

「それが聞いてよ。甲龍の高機動パッケージの開発は間に合わないって言うのよ。うちの国はなにやってんだか」

ふうん、いろいろとあるんだね。

「てかさ、一夏、あんたの貸し出してまだなの？」

「そうだよ、優希もまだなの」

ああ、あれか・・・忘れていたかったよ・・・。

「なんか今は調整と抽選中らしいぞ」

「申請が多すぎて大変みたい」

実際書類が山になってたし整理が大変だよ、しかも同じ部が何枚も出してきて迷惑しているんだよホント。

「そうなんだ……」

すこしがっかりするシャル、てかこんなことを聞くことは部活に入っただのかな？

「シャル部活に入っただの？」

「え、う、うん。その、料理部に」

「ああ、あそこ」

シャル日本料理に興味あったもんな。あそこだったらちゃんと覚えられるだろう。

「うん」

「そうなんだ、何かできるようになったら今度食べさせてね」

「う、うん！楽しみにしててね」

シャルは料理が上手いからな楽しみだよ。

「ラウラはどっかに入っただの？」

「む、私か？私は茶道部だ」

「へえ、茶道部か」

ラウラも学園祭に僕と回ったところだな。

「お、おかしいか・・・？」

「うん、変じゃないよ。日本文化好きなんだねラウラは」

「う、うむ」

「今度見に行くよ」

「あ、ああ、来い。歓迎するぞ」

抽選でいつになるか分からないけど。と思いながら最後の一口をばくり。うん、美味しかった。

「ごちそうさま。じゃあ、僕は戻るね」

「あれ？もう行くの？」

「うん、蘭堂の仕事がちょっとあつてね」

迅雷の量産化のプランを纏めないといけないんだよね。舞華ちゃんのは結局はプロトタイプだし。

「そうか」

「がんばってね」

「うん、じゃあ行くね」

食器を持ちテーブルから立ち上がる、一夏たちは……。

「「一夏（さん）夏休み中に何があったのか話して貰うわよ（貰いますわよ）……………」」

「あ、ちょ、待て二人とも、落ち着k…………ギャーーーーー!？」

なんか遊んでるみたいだし放っておこう。さて、戻ってさっさと始めよう。

「あら、おかえりなさい」

部屋に戻ってきたのはいいんだけどまた会長が忍び込んでいた。会長はベットのの上に寝転がりファッション誌を読んでいる。この人のことだ合鍵くらい持っているのだろう。

「はぁ…………で、今日は何ですか。一夏をからかいに来たんですか？」

「ん〜、それも面白いけど、今日は真面目な話なのよね」

真剣な表情になる会長だけど、寝転がりながらだから話が締まら

ない。

「どんな話ですか」

「よつと・・・例の組織のことよ」

例の組織・・・亡国機業か。

「先刻アメリカのIS保有基地が襲撃されたわ。狙いはIS本体でしょうね」

アメリカのISか・・・狙われたのは恐らく封印処理された福音だろうな・・・。

「結果は奪われなかったらしいけど、優希君も気をつけてな」

「はい。まあその可能性はまだ低いでしょうけど」

まだね・・・奴らが僕のことを完全に諦めたら、ISを奪いにくるだろうし。

「そうね、奴らはあなたを仲間に取り込もうとしている、故に襲わない。学園祭で優希君を襲わなかったのはそれがあつたからでしょうね。でも用心はしておいてね」

「わかりました。ではそろそろお帰りください。これから仕事なんです」

ドアを指差し、出て行くように言う。

「あん、いけず」

「箒姉呼びますよ」

携帯を取り出し箒姉の電話番号を出す。

「それじゃあね！優希君」

はやっ！？いつの間にかドアの前に立っている会長。でも、会長をどうにかしたいときはこれが一番だよ。これからも使おう。

「さて、始めますか……」

投影型ディスプレイを立ち上げてパネルを叩く。どっから行こうかな。

………

コンコンッ

ん？ノック、誰だろう？

「一夏……は死んでるか」

何をされたかは分からないが一夏は少し前部屋に戻ってくるなりベットへ倒れた。時たま痙攣してるけど問題ないよね。

コンコンッ

「おっと、はい」

いったん作業を中断し、ドアを開けるそこには。

「あ、優希」

「シャル？どうしたの」

シャルがいた。なんかそわそわしてるけど何かあったのかな？

「とりあえず入りなよ」

「う、うん」

シャルを部屋に招き適当に座らせる。一夏はスルーされた。

「で、どうしたの？」

「あ、うん。その、優希さ週末って空いてる」

「週末？うん、空いてるけど」

この前ぶつ倒れてから果歩さんも休みの日増やしてくれたからその日は暇だ。

「そ、そうなの？だったら一緒に買い物……行かない？」

「買い物？」

「う、うん。ほらコレ」

一枚のチラシを取り出し僕に見せるシャル。チラシにはリニューアルオープンされたショッピングモールが書かれていた。臨海学校前にシャルと水着を買いに行ったあそこだ。

「あ、これって確か駅前で改築してたやつだよな。もう終わったんだ」

「うん。改築したのは一部の場所だけだったからすぐに終わったみたい」

「へえ」

そうだったんだ……。

「で、でね……新しいお店とかもできたからさ、その、よかったら一緒に行かない……？」

「いいよ」

「ほ、本当！」

うわっ！？驚いた！

「う、うん」

「約束だよ！絶対だよ！！」

ど、どうしちゃったんだ、シャル？興奮しちゃってるけど……。

「わ、わかったから落ち着いて」

「あ、う、うん」

ふう・・・落ち着いたか。

「約束だよ」

「わかったから」

「じゃあ」

ん、と小指を出すシャル。ああ、指きりか。前に日本の風習だと教えたのだが妙に気に入ったらしくよくやる。でも・・・。

「指切りげんまん、ウソついたらナパーム弾のーますっ」

毎回怖いのだ、前はクラスター爆弾だったしその前はクレイモア地雷だったし・・・どうしてこうなったんだ？

「指切った」

とりあえず約束は破らないようにしよう。シャル怒ると怖いし。

「約束だよ」

「うん」

「えへへ週末が楽しみだな」

まだ月曜なのに気が早いな・・・まあ、喜んでくれてるしいい

か。

「じゃあ、僕戻るね」

「うん、お休みシャル」

「お休み、優希」

パタンッ。閉まるドアに手を振り、シャルを見送る。

「さて、もうちょっとやろつか。えーところは………」

ディスプレイをまた立ち上げて作業を再開する。

「えへへっ」

週末が楽しみだな、二人で買い物つてことはデートになるし、
うふふ

「何、着て行こうかな？」

頭の中でいろいろとコーディネートしていく。

「あ、そうだとウラにはれないようにしないと………」

ばれたら絶対に着いてくるもんね、気をつけないと。

「まずはちゃんと下調べをしないと・・・あれ？何か騒がしいよ
うな」

何だろう？とりあえず入ってみようか。

「フッフ、観念しなさいラウラちゃん」

「く、来るな！？近づいたら刺すぞ。本気で刺すからな！？」

部屋に入ったら指をワキワキと動かす楯無会長と怯えながらタク
ティカル・ナイフを前に構えるラウラが見えた。うわぁ・・・。

「た、助けてくれシャルロット・・・！」

涙目で僕に助けを求めるラウラ・・・可愛いな。

「隙あり！」

「しまった！？」

一瞬の隙をついてラウラからナイフを取り上げ抱きつく楯無会長、
ああ、もしかして。

「や、やめ・・・」

「イツツ・シヨウタイム！」

「う、うわあああーーーー！！？」

ラウラをくすぐり始める楯無会長、ラウラってくすぐりに弱いんだよね。さて、終わるまで時間がかかるだろうしココアでも作るかな。

それからしばらく、ラウラの悶え苦しむ笑い声が部屋に響いた。終わったあとラウラは。

「ご、拷問のほうマシだ……」

って、言ってたけど。楯無会長がくすぐりって元は拷問よって教えたら、ラウラはパタリとベットに倒れこんだ。ご愁傷様ラウラ。

第五十二話（後書き）

はい、今回から原作六巻に入りました。
特に変わったこともありませんので今日はここまでです。
では次回の更新で。

第五十三話（前書き）

ちよつと長くなつた上に文章が滅茶苦茶・・・・・・・・申し訳ない。

五十二話です。どうぞ。

第五十三話

時が過ぎるのは早いもので今日は日曜日、シャルとショッピングモールに行く約束をしていた日だ。朝食を食べた後一緒に行こうと思っていたのだがシャルが……。

「こういうときは待ち合わせするものの」

と言われたので僕はシャルが出発した二十分後に出て行くことになった。一緒に行けば良いのに何で待ち合わせるんだろ？謎だ……。

で、遅れること二十分ようやく待ち合わせ場所の駅前に着いたんだけど。

「いでででででっ!？」

「触らないでくれます？そのきつい香水の匂いが移ると困りますので」

シャルが俗にチャラ男と呼ばれる男の腕を捻っていた。おお、CCC!

「な、な、ななっ……!？」

「お、おいっ!離しっ……!？」

「僕の友達に何か用ですか？」

もう一人のチャラ男が手を上げようとしていたので、僕は走りチ

ヤラ男の腕を掴み止める。

「あ、あだだだだっ！？お、折れる折れる！？」

おっと、強くしすぎたみたいだ、僕はチャラ男の腕を掴む力を緩める。

「いでででででっ！？」

あれ？力は緩めたはずなんだけど？声がしたのは僕が掴んでいるほうではなく隣から聴こえた、そっちのほうを見てみると……。

「……………（ぼー）」

シャルがチャラ男の肩を決めたまま、こちらをじーつと見つめていた。ってシャル！そろそろ放さないとその人の肩が……。

ガコンッ

「ぎゃあああああー！！！！！！」

ああ、外れちゃった……………。

結局あのチャラ男たちは駅前の交番へ連行？され、騒動は治まった。脱臼した方のチャラ男は僕が治しておいた、まあ痛みで気絶したけど。

で、今は駅前のモニュメントの前で二人、ただ立っていた。

「えっと、そろそろ行こうか？」

「あ、うん。そうだね行こうか」

二人、並んで歩き出す改装が終わってから間もないショッピングモールには沢山の人たちがいた。家族づれにカップル、今日は日曜だからね変ではないか。行き交う人たちを見ていると見覚えのある後姿を見つけた、あれって？

「あれって、箒姉かな？」

「え？」

ショッピングモールの二階へ渡るためのエスカレーター付近に見える長身でポニーテールの女性、その人が横を向く。

「あ、やっぱり箒姉だ」

「ほ、本当だね……」

箒姉も買い物に来たのかな……ってあれは、一夏？

「一夏も一緒なんだ……もしかしてデート？」

「ゆ、優希、隠れて！」

「え？」

急に手を引かれて、近くにあったお店入れられた。な、何？

「ど、どうしたの、シャル？」

「え、えつと、その・・・いや、箒たちの邪魔しちゃいけないと思っ
てね！せ、せつかくのデートなんだし！」

「え、えーと、そうかな？」

「そうだよ！」

ど、どうしたんだろシャル？急に慌てて・・・でもまあ、箒姉嬢
しそうだったし邪魔しちゃ悪いか。

「そうだね、邪魔しちゃダメだね」

「うん、だから箒たちと鉢合わせないようにしないと・・・・・・・・
会ったら僕の命が危ないし（ボソッ）」

ん？今何が言ったような・・・・・・・・命がどうか・・・・・・・・気のせ
いか。

「じゃあ、もう少ししたら出て行く感じで・・・・・・・・」

「あれ？優希お兄様にシャルロットさん？どうしてここに・・・・・・・・
・・・・・・・・」

「し、篠ノ乃さん・・・・・・・・何でここに」

「「え？」」

僕たちの名前を呼ぶ声の方を見るとそこには舞華ちゃんと蘭ちゃん
がいた。てか、ここって!?

「あ、あの・・・優希お兄様・・・いくら女性に見えるからとい
って、その・・・男性がランジェリーショップに入るのはちよっ
と・・・」

「あ、あわわわ・・・!？」

店にはカラフルな布地の少ない衣類が沢山並べられていた。それ
は水着に似ているが違う、そうそれは女性の下着だ、ここは男性に
とつての禁域、ラジェリーショップなのだ。現に舞華ちゃんと蘭ち
ゃんは下着を選んでいたのかその手にはブラとショーツが握られて
いた。

「え、その、これは・・・」

「優希!見ちゃダメ!!」

ドシュッ!

「にゃ!？」

じ、地獄突き・・・しゃ、シャル・・・のどは・・・反則・・・
・・・ガクッ。

ピーンッ！！

「はっ！」

「ん？どうした筈」

「今、優希の身に何かあったような……すぐに相手を見つけ出し殲滅を！」

「はあゝ筈、そんなことばかりやってると優希に嫌われるぞ」

「うぐっ！だ、だが……」

「優希も昔と違って強くなってるんだし、大丈夫だろ」

「……わかった」

「じゃあ、行こうぜ」

「ああ（あとで、何があったか優希に聞いておこう）」

優希お兄様は寝顔も可愛いですね♪

「舞華、勝手に人の寝顔撮っちゃダメでしょ」

「だって」

「だってじゃないでしょ」

可愛いからいいじゃないですか……。

「そっだよ舞華ちゃん。……今回は見逃すから現像したら一枚頂戴ね」

「はい！」

「ええ!？」

シャルロットさんもわかってますね……やっぱり可愛いのは正義です!

「蘭ちゃんも欲しいですか？」

「う、うう……(コクン)」

ふふ、蘭ちゃんも可愛いです♪

「そういえば自己紹介がまだだったね。僕は優希の……友達のシャルロット・デュノアです。よろしく」

優希お兄様の友達、のところで溜めたってことはやはりシャルロットさんは……。前々から思っていましたけどやはりそうでしたか、ママに報告しないと……。フフフ♪

「あ、わ、私はご、五反田蘭っていいいます!よ、よろしくお願いし

ます」

蘭ちゃん緊張してますね……まあ、シャルロットさんは美人ですから、緊張しますもんね。

「舞華ちゃんも久しぶりだね」

「はい、お久しぶりです。模擬戦以来ですね」

「そうだね」

私もシャルロットさんと軽く挨拶する。

「う、ううん……」

あ、優希お兄様がお目覚めです。寝顔をもうちよつと撮りたかったです……残念。

「優希。大丈夫？」

「少し喉が痛い……でも大丈夫」

シャル、地獄突きなんて一体どこで覚えたんだ？

「篠ノ乃さん、大丈夫ですか？」

「あ、蘭ちゃん。うん、大丈夫だよ」

あ、そうだった。蘭ちゃんと舞華ちゃんもいたんだった、忘れてたよ。

「そうですか」

「でも、優希お兄様。なんであんなところにいたんですか？まさか・・・遂に女装する気に！？」

「そうじゃないよ！？ていうか遂につて何！？僕いつかするって思われてたの！？」

それとシャル！何でがっかりしてるの、絶対にしないからね！

「え、えっと・・・それで何故あそこに、随分と慌ててましたけど？」

「あ、えっと、それは・・・」

どうしよう、蘭ちゃんに言うべきか・・・。蘭ちゃん一夏のこと好きだからシヨック受けちゃうかもしれないし・・・とりあえずある程度ばやかして伝えるか・・・。

「と、友達を見つけてね！二人ともいい感じだったから邪魔しちゃう悪いと思ってね」

「へえ」。あ、でも友達つてもしかして・・・。」

「あ、友達つていうのは一k・・・」

「ぼ、僕の小学校の時の友達なんだ！この前、偶然再開してね」

「そ、そうなんですか」

「ご、誤魔化せたかな……。それよりもシャルだ！僕はシャルを引っ張り小声で話す。」

「シャル、一夏のこと言っちゃダメだよ！」

「ど、どうしたの優希？」

「蘭ちゃんはね一夏のことが好きなんだよ」

「あ、そうなの？」

「そこまで驚いてないっていいことは少しは感ずいてたみたいだね。」

「うん、だから箒姉と一緒にいるところなんて見られたら」

「ショック受けるだろうね……。わかった適当に誤魔化すね」

「ありがとうシャル」

「あの、どうかしましたか？」

「何でもないよ」

「うん、ちょっと世間話」

蘭ちゃんたちの方に向き直し何事も無いようにする。とりあえず一夏たちと鉢合わせないようにしないと……。

「そうですか。ところでこれからどうします？ 私たちは『セブンス・レイン』で買い物するつもりなんですけど」

「えーセブンス・レイン、僕たちもそこに行くつもりだったんだ」

えっと……セブンス・レインって何？

「そうなんですか、だったら一緒に行きません」

「いいの？」

「はいっ」

いや、だからセブンス・レインって何なの？

「お兄様、セブンス・レインは女性に人気の洋服店のことですよ」

「へえー、そうなんだ」

服にはあまり興味なかったから全然知らなかったよ。

「はい、デザインも豊富で値段も手頃な十代に大人気なお店です。男物もありますので優希お兄様も気に入ると思いますよ」

へえー、そういわれたら気になってきたな。

「じゃあ、行こうか」

「うん！」

「はい！」

「ふふ、楽しみです」

蘭ちゃんたちに先導されてセブンス・レインに向かった……
はずだったんだけど……。

「動くな！！このガキどもがどうなってもいいのか！！」

「ヒツ……！？」

目出し帽を被り銃を持った三人組みが蘭ちゃんを人質に店に立て
籠もっていた。なんでこうなった？

「ら、蘭ちゃんっ、お兄様っ！？」

「舞華ちゃん、落ち着いて！」

「だって蘭ちゃんとお兄様が！」

事の始まりは僕たちがセブンス・レインで服を見ていると突然モ
ールの中に銃声が響いた、しかも結構近くでだ、何かと様子を見に
行こうとした瞬間目出し帽を被った男三人に僕と蘭ちゃんは捕まり
人質にされてしまった。

警察の応援はまだやって来ず、現在は駐在所にいた駐在さんが男
たちを説得しようとしているが。

「うるせえ！！このガキどもがどうなってもいいのか、さっさと逃走用の車を用意しろ！！」

この男たちどうやら銀行強盗らしく、その逃走中にショッピングモールに入りその際、偶然いた僕たちを人質にしたようだ。

でもどうしようか・・・こいつら素人っぽいから僕一人で対処できると思うけど今は蘭ちゃんがいるから・・・下手に動けない。

『優希、大丈夫？』

あ、プライベートチャンネル秘匿通信だ。

『うん、大丈夫だよ』

『そう、よかった・・・でも、どうする？』

『うーん、蘭ちゃんがいるから下手に動けなんだよね』

『そうだね・・・あ、そうだ』

ん？どうかしたのかなシャル？

『ちょっと待ってね、今助けを呼ぶから』

助け？どういうk・・・ま、まさか！？

『ま、待ってシャル！姉は呼んじゃだm・・・』

「ゆーーーーうーーーーきーーーー!!」

ドコーーーーーンッ!!

「な、なんだ……うごおっ!？」

お、遅かったか……。店の壁を破壊し弾丸のように入ってきたのは何故か木刀を持っている箒姉だった。吹き飛ばされた強盗さんご愁傷様。

「な、なんだ貴様は!」

「通りすがりの姉だ!!」

箒姉、それ半身分明かしてるようなものだから。てか、そんなに気に入ったデイ。ケイド。

「よ、よくわからんが、こっちは人質があ!？」

箒姉に気を取られているうちに肘鉄を男の鳩尾に叩きつける。そして拘束が緩んだうちに脱出する。

「このガキがあ!!」

男は僕に銃を向けるけど何か茶色のものが通り過ぎたと思ったら銃身が真っ二つになった。

「へ?」

「優希に銃を向けるとは死にたいようだな……………」

．．．．．まさか箒姉．．．．．木刀で斬ったの．．．
．．．．．木刀で斬鉄したあー！？

「へ？」

「だが今日の私は淑女だ、半殺しにしてやろう」

「へ？え？ギャー！ー！ー！？」

箒姉は男を木刀でボコリ始める。あわわわわ．．．．！？箒姉がボコルのを止めて蘭ちゃんを拘束しているほうの男のほうを見る。

「ひ、ヒイ！？」

ボコられていた男は、なんと体の右側だけボロボロになっており左側だけまったくの無傷だった。箒姉半殺しの意味が違う．．．。

「く、来るな！？」

「む．．．」

「ヒッ！？」

動揺した男は銃を捨ててナイフを蘭ちゃんの頬に当てた。

「う、動いてみる、少しでも動いたらこのガキをころs．．．う
じゅっ！？」

「何か言ったか？」

箒姉・・・人質がいるんだから勝手に動かないでよ。でもまあ、倒せたからいいか。

「蘭ちゃん、大丈夫？」

「し、篠ノ乃・・・さん。こ、怖かった・・・ヒックッ・・・怖かったです」

「怖かったね、でももう大丈夫だよ」

「う、うええーん」

僕に抱きつき泣く蘭ちゃんのを背中をポンポンと優しく叩く。しっかりしてても女の子だ、よほど怖かったんだろう。

「ヒック・・・うう・・・」

「よしよし」

だいぶ落ち着いてきたな・・・。。。。そろそろ放しても良いかな。て、あれは！

「ち、チクシヨーーー！！」

「蘭ちゃん！」

「え？キャッ！？」

先ほど吹き飛ばされた男は完全に気絶していなかったようだ。男

はナイフを持ちこちらに突っ込んできた。

僕は蘭ちゃんを突き飛ばして男の前に出て……。

ザシユツ！

「なっ！？」

僕は突き出されたナイフの刀身は僕の右手の中、僕は今ナイフの刀身を握っている。切れた手のひらから出た血はナイフをつたい床に落ちる。

「っ！ああっ！」

「グハツ！？」

残った右腕で男の顔を全力で殴り、男はそのまま床に倒れ動かなくなった。今度こそ気絶したか。

「し、篠ノ乃さん！大丈夫ですか！！」

「優希！ああ、血がつ！？」

「優希！」

「お兄様！」

男たちが全員沈黙した後、みんなが僕へと駆け寄ってきた。

「大丈夫だよ、手を切っただけだし」

「切ったところの出血じゃないよ！？」

あー、確かに結構出てるね。もうダラダラと。

「し、止血しなきゃ！」

「さ、沢渡！蘭堂家救護部隊をすぐに送りなさい！何故かって？優希お兄様が怪我をしたからに決まってるでしょう！三分以内に送ринаさい、いいわね！」

「お前らが！お前らが！！！」

シャルはとりあえず落ち着いて、それハンカチじゃなくてトイレ
トーパーだからね。

舞華ちゃんも落ち着いて。大げさすぎだから、それとさすがに三分は無理だと思うよ。

そして箒姉、もう止めてあげて。もうその人たちのライフはゼロだよ、オーバーキルだよ！

「警察だ、無駄な抵抗をせずに投降しr・・・・あれ？」

警察の到着・・・・でも、事は既に終わっている。

「えつと・・・・確保！」

「ご苦労様です。あ、箒姉警察の人殴っちゃダメだよって・・・・遅かったか。」

「うわっ！？じゃ、邪魔をするんじゃない！」

「放せ！私はまだこいつらを殴り足りていない！」

「うっ！だ、誰か！こいつを取り押さえる！！」

「放せー！ー！！！」

．．．．．もう何、このカオス。

「で、何か申し開きはあるか．．．？」

「「「あ、ありません．．．．．」」」

結局ショッピングモールの事件の後、僕は舞華ちゃんが呼んだ蘭堂家の救護班によって治療を受けた。全治二週間だそうだ。結構深かったみたいだね。その後は警察による事情聴取を受けた、まあ殆ど姉が終わらせたことだからあまり聞かれなかったけど。

で、現在は学園に戻り鬼教官（千冬さん）による説教を受けている。あれだけの騒ぎだもんね、すぐに伝わるよね．．．。

「まったく、貴様らは問題を起こしおって」

「「「す、すみません．．．．．」」」

そろそろ、足が痺れてきた．．．。ただいま正座中であり、説教は一時間経過している。正座自体はそこまで苦ではないけど。一時間はしたことが無いからキツイ．．．外人であるシャルなんか特にきついだろうな．．．。

「はあ．．．．．まあ、今回は突発的な事件などもあったから仕方ないところもあるな。今回はここまでにしてやる」

ほお、僕たち三人は安堵のため息をつく、よかったこれで開放される．．．．．。

「だが、篠ノ乃姉とデュノアは残れ」

「え!?!」

え?なんで二人だけ残るの?

「篠ノ乃姉は店の壁を壊したな、修繕費は蘭堂が持ってくれたが罰は必要だ。グラントをそうだな．．．五十周して来い」

「なっ!?!」

「そしてデュノアは篠ノ乃をあの店に呼んだな。だからお前も走って来い、三十周でいいか」

「僕もですか!?!」

「篠ノ乃姉を呼んだらどうなるかわかっていただろう、だからだ」

「うう．．．」

うわー、二人ともご愁傷様．．．。

「それともなんだ、反省文七百枚のほうがいいのk．．．」

「走ってきます!!」

ものすごい勢いで走り去っていく二人、七百枚って何書けばいいんだろ……。

「はぁ……まったく。篠ノ乃弟、お前は戻って良いぞ」

「あ、はい」

「怪我をして不便だったら織斑を使え、私が許可する」

「わかりました、こき使ってやります」

「ふっ、ならいい。戻っていいぞ」

「はい、失礼します」

すこしだけ頭を下げてその場から移動する。でもどうしよう……
・キャノンボール・ファストまでに完治できるのだろうか……
まあ、なるようになるか。

「まずはご飯だ、お腹すいたし」

何食べようかな。あ、そういえば蘭ちゃん大丈夫かな？

「はぁ、篠ノ乃さん……………」

私を助けてくれた人の顔を思い浮かべると顔が熱くなる。今の私の顔は恐らく真っ赤になっているのだろう。

「篠ノ乃、優希さん……………」

ドクンッ！

名前を呟くだけで胸の鼓動が早くなる。私……………まさか。

「好きになっちゃたのかな……………」

よくわからない……………でも、胸が温かくなる。

「優希さん……………」

ガチャッ

「おーい蘭、大丈夫？飯の時間だぞ」

「勝手に入ってくんな！馬鹿兄！！」

「グベエッ！？オゴオッ！？」

抱きしめていた枕を全力で兄貴の顔に投げる。顔に当たった後は、そのまま後ろに倒れ壁に頭を打った。

「蘭、ご飯食べれる？」

下からお母さんの声がした、やっぱり今日のことを心配して聞いてきたんだろう。

「大丈夫、すぐに行くね」

元気に答えて下に行く。この気持ちはまだわからないけど、じつくりと考えていこう篠ノ乃さんもゆっくりでいいって言ってたしね。

「な、何故俺がこんな目に……ガクッ」

あ、兄貴のこと忘れてた。でもまあいいか。

第五十三話（後書き）

今回はシャルと買い物の五十三話のはずでしたが・・・シャルの影が薄くなってしまったのとそれと欲望に負けてしまい蘭フラグを建ててしまったな・・・どうしょ。

ユニコーン用高機動パッケージについてなんですが、今のところ候補が二つあります。

簡単に言えばマクロスタイプかスパロボタイプのどちらにしようか悩んでいます。

どっちがいいでしょうかね・・・そこで簡易的なアンケートを取ろうと思います。

どちらがいいか感想に書いていただけたら幸いです。

では次回の更新で。

第五十四話（前書き）

生存戦りやk・・・もとい生存報告。更新が遅れてしまい、まことに申し訳ありませんでした。理由はあとがきで書きますのでとりあえず

五十四話です、どうぞ。

第五十四話

「はい、皆さん。今日は高速機動についての授業をしますよー」

週末のショッピングモールの一件が終わってから数日、今日もキヤノンボール・ファストに向けての授業である。

専用機持ちではない生徒たちからしたらまだ未知の感覚であるためその眼差しは真剣だ。いつもこのくらいだったらいいのにと山田先生が隠れて溜息をついていたのは内緒だ。

「この第六アリーナは中央タワーと繋がっていて高速機動実習が可能なのは先週説明しましたね？それじゃあ、まずは専用機持ちの皆さんに実演してもらいましょう！」

山田先生はそう言い僕たちがいる方を指した。一組の専用機持ち全員はISを展開して待機している。僕以外。

「……あの篠ノ乃君？ISを展開して欲しいんですけど……」

「あ、すみません。展開しようとしたら少しエラーが出てしまいまして、今修復中です」

僕は空中に投影型のディスプレイとキーボードを出してパッケージ装着の際に出てきたバグを取り除いている。本当だったら数分で終わる作業なんだけど、右手が上手く使えないので現在、左手のみでの操作だから予想以上に時間が掛かってしまっている。

「篠ノ乃、どのくらいで終わる」

「数分でできます」

「そうか。なるべく早く終わらせろ」

「わかりました」

「山田先生、続ける」

「は、はい。ではオルコットさんと織斑君前に出てください」

パッケージを換装して高速機動が可能になったブルー・ティアーズとパッケージの換装無しで高速機動が可能な白式か・・・手本としてはいい選択だ、さすが山田先生。

「では・・・3・2・1・ゴー!!」

山田先生がフラッグを下ろすと同時に二人は飛び立った。中央タワーを旋回するように飛んでいく二人だがやはり経験の差が一夏はセシリアさんの後ろを着いていくような感じだ。スペック的にはまだ白式の方が上なんだけどな・・・。

でも、殆ど経験が無いのにセシリアさんの後ろに着いていける。これも会長との特訓のお蔭かな？

「一夏、だいぶ上手くなったね」

「うん、細かいところはまだ荒削りだけど最初の頃に比べたら上手くなったよ」

「そうだな。あの頃は機体のスペック任せで突進するしかないド素

人だつたからな」

ド素人って・・・まあ確かに学園に入ってから始めたから素人なのは当然だけだね。あ、そろそろ戻ってくるか。

コースを飛び終えた二人は、速度を落とし僕たちの前に戻って来た。

「はいっ。お疲れ様でした！二人ともとても優秀でしたよ」

山田先生は教え子が優秀だったのが嬉しかったらしくぴよんぴよんと飛び上がっているのだが、その豊満なバストも同時にはねるの
で目のやり場に困る・・・僕だつて十五の男子ですよ。

┐
┐
•
•
•
•
!
┐
┐

ギョッ！

「いッ！？」

わ、脇腹が……！？

「優希……早く終わらせて（ろ）」

「はい……」

な、何故こんな目に……。と、とりあえず早く終わらせよう、千冬さんの目が早く終わらせろって語ってるし……。

i
p i p i p i p i p

p i p i p i p i p i p i p i p i p i p i p

「ふう、終わった」

「あ、篠ノ乃君もう終わりましたか？じゃあISを展開してください」

「わかりました」

キーボードとディスプレイをしまい僕はユニコーンを展開する。

「白と・・・紅？」

展開し終わると誰かがそう呟いたのが聞こえた、その通りだ純白だったユニコーンは機体全体を覆った紅の装甲とラインのように覗く白の装甲によって全く別の機体に見えるのだ。

「それは高機動パッケージか？」

「はい、高機動用パッケージ『天剣』です。あ、自作です」

このキャノンボール・ファスト用に考えたパッケージだ。全体を装甲で覆ったから機体は若干であるが大きくなった。背部にあったビットラックは外しその代わりに大型の前進翼を取り付けた。この前進翼の先端側には大型のスラスタ・ポッドを取り付けた。さらに脚部にも大型のスラスタをつけ計四機の大型スラスタにより大推力を得た。ちなみに非固定浮遊部位のランパートも取り外したので外見がユニコーンとはまったく別の機体になってしまった。

「す、凄いですね・・・じゃ、じゃあ今度は篠ノ乃君に飛んでもらいましょう」

「はい、わかりました」

僕はスタート位置まで歩きそこで少し浮かぶ。動かすのは初めてだからな最初は軽く行こう。

「準備はいいですか？」

「はい」

「それでは・・・ゴーツ!!」

フラッグが振り下ろされると同時に僕は飛び出した。

ドンッ!!

「ひゃっ!?!」

優希が発進したと同時にもの凄い風が巻き起こった。その勢いでフラッグを振り下ろしていた山田先生は尻餅をついた・・・・・・ISに乗ったとしても強い人には見えないよなホント。

「も、もう見えないよ」

「す、凄い・・・・」

「織斑君たちよりも早いんじゃない・・・・」

クラスみんなが呟くとおりの優希の姿はもう肉眼で捉えるにはで

きないだろう。さつき飛んでいた俺たちよりも早い……。

「ま、まさかここまでとは思いませんでしたわ」

「そうだね……」

「確かにあの高機動パッケージは凄いな……だが」

「さらに凄いのは優希の操縦技術だな」

そう、さつきからハイパーセンサーで拡大されて見えているユニコーンのスピードは凄いけどそれよりも凄いのは操縦している優希だ。一見普通に飛んでいるように見えているが全身についたスラスタ―小刻みに動かして旋回時にできる減速を最低限に抑えている……俺にはできない芸当だ。

「だが、あれだけのスピードを出していたら相当なGがかかるのではないのか？」

「そうだよ、でも優希は……」

「何ともなさそうですわね……」

そうなんだよな……あれだけの加速していたらGがかかって苦しいのに何で大丈夫そうなんだ？

「あ、戻ってきたよ」

お、ホントだ。やっぱり早い、今度高速機動のコツでも聞いてみるか、優希教えるの上手いし。

「ふう……上々だね」

脚部のスラスターを吹かして減速した僕はそのまま地面に着陸する。

「す、凄かったです篠ノ乃君……」

「あ、ありがとうございます」

山田先生、ポカンとしてるけど何かあったな？

「ご苦労だったな篠ノ乃、戻れ」

「はい」

千冬さんに言われたとおり僕は先ほどまで立っていた位置に戻る。

「お、お帰り優希」

「うん、ただいま。って、どうしたのみんな？」

僕の顔をじっと見て何かついてる？

「いや……凄かったなって」

「ええ、そのパッケージ本当に優希さんがお造りになったんですね？」

「そうですけど何か変ですか？」

「いや、なんというかな・・・」

「うん・・・」

「ああ・・・」

「ええ・・・」

「???」

パンパンッ！

一夏たちが何か言おうとしてたのだが千冬さんが手を叩き遮られてしまった。何を言おうとしてたんだろ？まあ今は千冬さんの話に集中するか。

「いいか今年は異例の一年生参加だが、やる以上は各自結果を残すように。キャノンボール・ファストでの経験は必ず生きていくだろう。それではこれから訓練機組みの選出を行う。各自割り振られた機体に取り込め。それと専用機組みは各自調整を始める。ばやばやするな、開始！」

パンッ！とまた千冬さんが手を叩くと同時にみんなは動き出した。さて、僕も調整と訓練しないかね。

「さてと、じゃあどこから手をつけようかな？」

「優希、ちよつといいか？」

「ん？何、箒姉」

天剣の調整を始めようとしたら箒姉が話しかけてきた、どうしたのかな？

「紅椿の調整を手伝ってほしいんだ」

「紅椿の？うん、いいよ」

「そうか、助かる」

「で、どんな感じ？」

「うむ、展開装甲のエネルギー配分が上手くいかないんだ・・・」

ああ、確かにあれは難しいよね、普通のISと勝手が違うからね調整も大変だからね。

「じゃあ、さっさとやっちゃおうか」

「ああ」

ユニコーンを解除してから箒姉の隣に立つ。

「どこが上手くいかないの？」

「ここなのだが・・・」

「ああ、ここね。ここはね……」

左手でキーボードを叩き数値を弄っていく、今の調整は臨海学校の時に設定されてたのと同じだもんな、このままでも十分だけどキヤノンボール・ファスト向けじゃないな……とりあえず旋回しやすいようにと……。

p i p i p i p i p i p i p i p i p i p i p i p i p i p i p i p i

「うん。これでいいんじゃないかな、どう箒姉？」

「ああ、バッチリだ」

「そう、よかった。後は飛びながら微調整していつてね、わからないところがあつたら聞きに來てね」

「ああ、ありがとう優希」

そう言い、箒姉は離れていった試しに飛んでみるのだろう。

「さて、僕も調整するか」

まずはスラスターのエネルギー配分からと……。

「ふう、完成」

最後のエンターキーを押してディスプレイとキーボードを閉じる。

予想以上に時間がかかっちゃったな早く練習しないと……って、あれは一夏と山田先生？

「へえ……ラファールにロケット燃料の増設スラスターか……・あれなら量産型でも専用機並みの推力を得られるね。それに操縦者の腕も……」

いつもはあんなんだけど元代表候補生、腕は一級品だね。
チルドーンッ！！

あ、グレネード直撃した、巧いなマシンガンで攻撃し回避した場所にグレネードを置くさすが山田先生。
グレネードが直撃した一夏はそのままコースアウトし地面に叩きつけられた。

「大丈夫、一夏？」

「お、おう……」

苦しそうだね、でも絶対防御もあることだし怪我することはないだろう。まあ衝撃は来るしそれなりに痛いんだろうな。

「お疲れ様です織斑君」

「は、はい。お疲れ様でした」

山田先生はゆっくりと降下し一夏を気遣う。

「あ、篠ノ乃君。調整はもう終わりましたか？」

「あ、はい。ちょうど今終わりました」

「そうですか。あ、篠ノ乃君もしませんか、模擬戦？よかったらお相手しますよ」

「え、本当ですか？」

「はい」

ちょうどよかったかも、武装を使ったテストもしかったからね。

「じゃあ、お願いします」

「わかりました、じゃあ始めましょうか。織斑君スタートお願いしますね」

「あ、はい」

山田先生と共にスタートラインに立つ。さて、どこまで相手できるかな……。

「それじゃあ……3・2・1……ゴーツ！」

フラッグが振り下ろされると同時にスラスターを一気に吹かし飛ぶ。出力は70%で抑えていて山田先生とは並行している。

『さすが篠ノ乃君ですね。じゃあ先生も少し本気で行きますよ！』

山田先生は秘匿回線プライベート・チャネルでそう告げるとさらに加速した、僕もそれを追うように加速する。

先に行くラファールを追うように飛んでいると、最初のカーブに

差し掛かった。山田先生はカーブの手前で減速、そして加速して一気に抜ける。なるほどそうつやり方もあるんだ……。じゃあ、僕も！

「ふっ！！」

山田先生と同じように手前で減速し、加速する。

『上手ですね篠ノ乃君！ではもっと速くしますよ！』

さらにスピードを上げる山田先生を追従する僕。……そろそろ仕掛けるか。

キューインツ！

出力を上げ加速、山田先生を一気に追い越す。

『は、速い！？……でもこれは』

《警告、ロックされています》

追い抜いた瞬間、ロック音と共に警告文が流れる。

『模擬戦ですよ！！』

後ろではマシンガンを構えた山田先生が映し出される。そのとおりだキャノンボール・ファストは妨害ありの競技だ速いだけじゃダメなんだ。だから……。

（今だっ！！）

両翼のスラスタポッドが回転し逆方向に向き……。

ゴウッ!!

『え!?!』

逆噴射。先ほどまで前方にいたはずの僕が急に下がり山田先生は驚く、急に下がったためGで骨が軋んだような気がしたが後ろを取った!

「いけえ!!」

装甲の一部が開きそこから数十発のマイクロミサイルが飛び出す。発射されたミサイルはそのまま山田先生に向かう。本来の山田先生なら対処できるのだろうけど驚いていたため隙ができ……。

『え? ひゃあっ!?!』

全弾命中し爆風に揉まれコースアウトした。そしてそのまま地面に激突した……。顔からいったけど大丈夫かな。

「だ、大丈夫ですか?」

「は、はい……」

ふう、大丈夫みたいだ。

「ま、負けちゃいました……。生徒に」

あ、なんか落ち込んだじゃったよ、どうしよう。とりあえずフォロ―しておこうか。

「だ、大丈夫ですよ、さっきのは初見殺しなんですから次にやったときは僕負けちゃいますよ」

「そ、そうですね！篠ノ乃君のは新型ですもんね、次にやる時は負けませんよね！」

よしよし、戻ってきたな。

「で、どうでしたか。少しは参考になりましたか？」

「はい、とても。ありがとうございました」

「そうですか、だったらよかったです。それじゃあ、先生は他のみなさんの様子を見てきますね」

山田先生はペコッと頭を下げると訓練機組みの方に行った。

「さてと、もう一回調整しようかな」

さっき飛んでて直すところ見つけたし。

（今度は一夏辺りと飛んでみようかな・・・）

キーボード叩きながらそう思った僕だった。

第五十四話（後書き）

更新できず申し訳ありませんでした。長年使っていたパソコンが寿命によって壊れてしまい。まったく執筆作業ができないでいました、今は何とか友人からノートを借りて書いているのですがそのうち買わないとな……。

今月はエクリシアとか欲しい物がいっぱいあるのに……畜生。

とりあえず書ける環境は取り戻せましたので、少し更新速度は遅くなるかもしれませんが更新していきます。

では次回の更新で。

第五十五話（前書き）

えー、前回の話のとき寝ぼけていて書き忘れていましたので感謝と謝罪を。

アンケートにお答えになってくれた方々、本当にありがとうございました！そして感謝が送れて申し訳ありませんでした！

結果はお判りのとおりマクロスタイプが圧倒的に多かったので、Y F-29をモデルにして書いてみました。
個人的にはスパロボタイプも書いてみたかったのですが、こっちのほうがりっくりきますね。

それでは最後にアンケートにご協力くださった方々、本当にありがとうございました、それと申し訳ありませんでした。

長くなりましたが五十五話です、どうぞ。

第五十五話

「ふう……今日はこんなところかな」

整備室の一角で鎮座するユニコーンの剥き出しになった装甲を閉じ、待機状態に戻す。

「天剣を装備するのはよかったけど整備効率は一気に下がったな……パッケージでの強化は考え物だな」

それに今は右手が使えないし……完治まで後一週間だし。

「しかもキャノンボール・ファストまでに治らないとはね……ついてないな」

左手でも銃は持てるけど照準が安定しないんだよな……まあ、しょうがないか。

「お、やつぽー篠ノ乃君、今日も整備かい？」

「あ、黛先輩」

話しかけてきたのはつなぎ姿の新聞部で二年生の先輩である黛先輩。何かあるごとに僕と一夏にインタビューしてくる人だ。

先輩は整備科の生徒らしくこの整備室にはよくいるので必然的によく会う。

「いつも大変だね。私たちも手伝えたらいいんだけどね」

「はは、手伝ったら大変なことになっちゃいますよ」

整備中に僕と束姉以外の誰かが触ったりなんかしたらプロテクトが作動しちゃうからね、どんなことになるか予想できないよ……

「あ……ま、まあ何か手伝えることがあったらいつでも言うてね」

「はい、ありがとうございます。ってあれ？」

先輩に頭を下げようとしたとき整備室で見かけたことのない人と機体があった。あれって……？

「あの黛先輩、あの人って……」

「ん？ああ、簪ちゃんかそういえば篠ノ乃君がいるときにはいつもいなかったけ」

簪ちゃん？知り合いなのかな。でもあの人って誰かに似ているよ
うな……

「篠ノ乃君、簪ちゃんはねたっちゃんの妹よ」

たっちゃんて……会長！？会長に妹なんていたの！？

「そうよー。篠ノ乃君と同じ一年生、日本の代表候補生よ」

四組の代表って、そういえば誰かが専用機持ちだって言うてたな。それも日本の代表候補生か……あれ？でも今まで見たことない

なクラス代表トーナメントのときも臨海学校のときも。

「あー、そのことね。あの子の機体はちょっと問題があつてね」

問題つて欠陥機かなんかな？

「んー、ちよつといろんな問題があつてね．．．．完成してないのよあの子の機体は」

「完成してない？」

代表候補生の機体なのに？どういふことだろう。

「あの子の機体『打鉄式』は倉持技研が開発していた機体なんだから．．．．」

倉持技研つて確か白式と同じつてまさか．．．．。

「そうなのよね．．．．技研の研究者たちは白式の完成を急がせるあまりに未完成のまま簪ちゃんに渡されたのよ．．．．」

うわあ．．．．それは酷いな。

「じゃあ彼女は．．．．」

「ええ、打鉄式を完成させようとしているのよ。一人で」

ん？一人で？

「一人でつてどういふことですか？他にも誰かいなんですか？」

「いいえ、一人よ。あの子は一人で機体を完成させようとしている、何故かはわからないけど」

一人でつて……無茶でしょ。いや、一応できることはできるかもしれないけど一体何年かかるか……。

「でも何で一人で？」

「さあね？よくわからないけどあの子は何故か一人で完成させることに拘ってるの……まあいろいろあるんでしょう」

ふうん……そうなのか。

「……ちよつと挨拶してきます」

「え、ちよつと篠ノ乃君！？」

整備室の端の方で一人淡々と作業する彼女に近づく。今やってるのはプログラミングかな？随分と悪戦苦闘しているみたいだけど。

「こんにちわ」

「……誰」

無表情だね、しかも手は止めないし……会長とは正反対だ。

「はじめまして更識さん。僕は一組の篠ノ乃優希です」

「一組……篠ノ乃博士の弟」

む、少し指が止まった。でもまたすぐにまた動き出す……つかみにくい人だな。

「用が無いなら帰って………」

しかも帰れですか……。ほんとこの人って会長の妹なのか？ってあれ？

「あ、間違ってる」

ピタッ

「どういうこと………」

手を止めこっちを見る更識さん、でもその顔は不満そうだった。

「いや、そのプログラミング。バグを取るのはいいけど、そんなふうにしちゃうと逆に動きが悪くなっちゃうよ」

「そんなはずはない………」

「ん……ちょっと借りるよ」

「な、なにを……!」

僕は更識さんの退かしキーボードを叩きプログラムを弄る。んー
プログラム組むのは上手いんだけどバランスが悪いな、あと詰め込みすぎなんだよね、だから少し整理したほうがいいな。

「・・・・・・・・・・・・・・・・うん、これでよし」

「あっ！」

だいがマシになったな、更識さんもわかってくれたみたいだし。
とりあえずこれでよかったな。

「こんな感じだよ」

「・・・・・・・・」

あ、あれ？なにか悪いことしたかな・・・？

「ご、ごめん、勝手にいじちゃって。でもこれでだいがよくな
ったと思うから・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

う、うう・・・沈黙が怖い・・・。

「・・・・・・・・これ以上邪魔、しないで・・・・・・・・」

あう・・・・・・・・怒らせちゃったよ・・・・・・・・。

「・・・・・・・・でも、あ、ありがとう・・・・・・・・」

え？

「・・・・・・・・じゃあ、行く」

「え？ちよっ……行っちゃった」

ISを待機状態に戻して更識さんは行ってしまった。えーと、それほど怒ってない……ということでもいいのかな？

「ん……わからないな」

まあ、とりあえず戻ろうかな。そろそろ晩ご飯の時間だし。先輩たちに一言いい整備室を出る、今日は何にしようかな？

「やつほー」結城君

ぎゅっ！

「う、うわっ！？か、会長！？」

「ピンポン！楯無おねーさんです」

気配消して近づくのは止めてくださいよー！！

「断るわ！」

「威張らないでくださいー！！」

はぁ……まったくこの人は……………。

「先ほど妹さんに会いましたよ」

「簪ちゃんに？」

「ええ、一人でISを完成させようとしてましたけど」

「そう……」

そのことを聞くと会長の表情が少し曇った、何かあるのかな……？

「で、簪ちゃんは元気だった？」

「元気？ だったと思いますけど、なんでそんなことを？ 妹さんなんでしょう」

まるでずっと会ってなかったような聞き方だな。

「え、えーと、そのここ最近忙しくてね、会えてないのよ」

忙しいって会長……生徒会室じゃいつも何もしてませんよね、書類は殆ど布仏先輩に任せっぱなしだし……まあ、暗部のこともあるのかな？

「そうなんですか」

「そ、そうなのよ」

多分、他に何かあるのだろうけどこれ以上詮索するのも悪いしそういうことにしておくか。

「じゃあ、僕は行きますね」

「あ、うん。キャノンボール・ファストがんばってね」

会長は手をパタパタと振りながら去って行った。さて僕も行くか・
・・・やっぱ今日はラーメンにでもしようかな。

~~~~~

「これが例のアレ？」

「そうだ・・・。」

「ふうん・・・で、複製はできる？」

「結論から言わせてもらって無理だ。製造工程が一切分からん。それに素材も謎のままだ」

「そつなの残念・・・使用することは可能なの？」

「可能だ、だが少量であるから効果は少しか期待できないぞ」

「それでいい、これを私の機体に取り付けて」

「・・・どうなってもしらんぞ」

「かまわないわ・・・あの機体に対抗するにはこのくらいしなないと」

「……わかった、すぐに取り掛かる」

「頼むわ」

ボタンッ……………

「フフッ……会うのが楽しみだわ篠ノ乃優希君」

「うわぁー凄い人だねー」

遂にやってきたキャノンボール・ファスト当日、空にはポンポンと花火が上がり会場には二万人以上の観客がやって来ていた。

その中には各国のIS開発企業関係者や政府関係者たちもいる、警備もかなり厳重だ。

「さて、そろそろ準備しないと」

僕の出番はまだ先、一年生の出番は二年生のレースが終わった後だ。けど最終調整もあることだし早めに行くことにする。

「そういえば舞華ちゃんと蘭ちゃんは大丈夫かな？迷ってなければいいんだけど……………」

まあ、大丈夫だね。あの二人しっかりしてるし。

「ほら舞華、こっちよ」

「え？こっちじゃないの？」

「そっちはEよ、Fはこっち」

「あ、ほんとだ」

「もう、しっかりしてよ」

私と舞華はゆ、優希さん……に誘われて、キャノンボール・ファストを見に来た。でもここホントに広いわね。えーとここがここでしょ、だから私たちはっと。

入り口で貰ったマップを見ながら歩いていたら……。

どんつ。

「きゃっ!？」

「あら？」

下を見ながら歩いていたらせいか人とぶつかってしまった。あ、謝らないと……。

「い、ごめんなさいっ」

「いえ、いいのよ。ケガはない？」

「は、はいっ」

う、うわぁ、なんて綺麗な外人さんなんだろう。しかもスタイルも凄くて……モデルさんかな？

「そう、よかったわ。それじゃあ気をつけてね」

綺麗な人は小さく手を振り私たちの横を通り過ぎていった。

「凄く綺麗な人だったわね……舞華……って舞華？」

「今のイヤリングまさか……」

どうしたんだろ？

「舞華？どうかしたの？」

「え？あ、ら、蘭ちゃん。な、なんでもないよ！」

？変な舞華ね。

「さっきの人綺麗だったわよね……」

「う、うん。綺麗だったよね、モデルさんかなかな？」

「どうなんだろう？」

スタイルも凄かったし……うう、大丈夫よ私はまだ成長期よ。

「大丈夫ですよ、蘭ちゃんはまだ成長期ですし大きくなりますよ」

舞華、それ私への当てつけかしら……親友ながらこの子の成長率が憎く感じるわ特に胸の成長が……！

「だから大丈夫ですよ。それに……」

それに？

「優希お兄様は大きさは気にしない人ですよ」

「！？！？ ま、舞華……！！」

「ふふつ、先に行ってますね。蘭ちゃん」

「ま、待ちなさいよー！！」

うう……この気持ちを舞華に相談したのは間違いだったのかしら……。こんな感じですぐにからかわれるし。で、でも相談しなかったら気持ちに気づかなかっただろうし……。わ、私が優希さんが、す、好きだったことに……。と、とりあえず今日は優希さんの生IS姿を見る！だから……。

「舞華、待ちなさい！」

「ら、蘭ちゃん、その手つきはこ、怖いで……。ニヤーッ!？」

舞華にオシオキよ、とはいってもただの懺りだけだね。ホントこの子って懺りに弱いよね、まあ面白いからいいか。

「にやははは！や、やめてえー蘭ちゃっ、にやはは!？」

私をからかった報いよ、あと三分くらい続けてやる。

「にゃあ~~~~~!？」

「さて、そろそろ出番だね……………」

ピット内で僕はそう呟く、現在一年の専用機組みが全員並んでいる。アリーナからは盛大な歓声が聞こえて来る。今飛んでいるのは二年生だ、それも終盤に差し掛かりデットヒートしている。

出番が近いためみんな調整に余念が無い。

「あれ？優希、天剣のパッケージ何か変わってねえか？」

調整が終わったところに一夏がそう聞いてきた。

「うん、ちょっと物足りなかったからスラスターと武装を追加してみたんだ」

天剣の翼の先端には新たなパーツが追加されていた。翼の回転式のスラスターポッドと同じ型のスラスターだ少し小型化したから推力は弱くなったけど、十分な代物だ。しかも内部にはマイクロミサイルが三十発ずつ入っているから火力もアップされている。まだいろいろあるけどそれはあとのお楽しみだ。

「足りないって、お前な……………」

?? 何か悪かったかな？

「みなさん、準備はいいですか？スタートポイントまで移動しますよ」

お、出番か。さて、がんばりますか。

マーカー誘導に従ってアリーナへ入り、全員スタートポイントに立つ。

『それではみなさん、一年生の専用機持ち組のレースを開催します』

アナウンスと共にアリーナ内に歓声が響く。

僕たちは各自定位置に立ったままスラスタを点火する。

キイイイーーーーーッ！高速機動用のハイパーセンサー・バイザーを下ろし、前を見据える。

シグナルランプが点灯する。3・・・2・・・1・・・GO！！

ドオンッ！！

ランプが赤から青に変わった瞬間僕たちは飛び出し、キャノンボール・ファストの始まったのだった。

## 第五十五話（後書き）

五十五話でした。ちょっと早めに楯無会長の妹、簪を出してみました。今回はちよつとしか絡みませんでした。原作七巻目に入りましたらちゃんと絡める予定です。

それと新たにオリキャラ、しかも敵役を用意することにしました。立ち位置的には優希のライバル……。を狙っております。まだ姿は現していませんがそれは次回をお楽しみに。

では、次回の更新で。

## 第五十六話（前書き）

今回は短いです。

五十六話です、どうぞ。

## 第五十六話

ドォンッ！！

シグナルランプが青になった瞬間、爆音が上がり僕たちは飛び出した。

（先頭はセシリアさんか……）

最初のコーナーを曲がった時点でセシリアさんを先頭にした列ができた。僕は最後尾についている、仕掛けるのはまだだ……。

「行くわよ！！」

第二コーナーの前で早々に鈴が仕掛けた、思い切りがいいね……。  
……。衝撃砲を前に向かい連射す、それをセシリアさんがロールしかわすのと同時に追い越す。

「やりますわね！」

「へへん！おっそーい！」

これでトップに躍り出た鈴だったけど。

「甘いな」

「！？」

鈴の後ろにピッタリとついていたラウラがそれをすぐに追い越し  
レールカノンを放つ、レールカノンを受けた鈴はコースアウトはし

なかったものの順位は一気に下がった。

「くそっ！」

僕の前に行く一夏はコーナのたびに差ができることに悪態をついている。また鈴が先頭集団に仕掛け、それに続き箒姉とシャルも前へ出る。・・・そろそろ仕掛けるか！

「じゃあ、そろそろ先行くよ一夏」

「くっ、最下位だけにはならねえ！」

僕が前に行こうとするとブロッキングしようとする一夏、だけど・・・。

「邪魔」

「うおお！？」

マイクロミサイルを十発ほど撃つとロールし回避する一夏、今だ！計六機のスラスターポッドが火を噴き一気に加速し一夏を追い越す、差は一気に広がりすぐに箒姉に追いつく。

「くっ、優希か！」

僕の接近に気づき雨月のレーザーを放つ、それを僕はその場で口イルでかわし加速、箒姉も一気に抜かす。

「速いつ！」

「先に行かせてもらっよ、箒姉！」

コースの直線を駆け抜け差を空けていく、コーナーは…………。

「ふっ！」

脚部のスラスターと回転式スラスターポッドを上手く使い減速することも無く抜けていく。そして先頭集団であるセシリアさん・鈴・シャル・ラウラに追いつく、そこに…………。

「ファイアッ！！」

天剣に装填されたマイクロミサイルの半数を一気に放つ。

「……なっ！？」「……」

マルチロックしているので一人頭十発以上のミサイルが高速で飛来していく。みんなは急ぎそれを迎撃し、ミサイルは爆散した。でもこれでいい。

広がった爆煙の中を僕は突っ切る。集団合間を抜け僕は一気にトップへ躍り出た。

「お先に！！」

「逃がすかつ！！」

追い抜いた直後にラウラがブレードミサイルを四発放つ。後方から攻撃を迎撃しているうちには速度は下がる…………そのうちに追いつくと思うてるんだろっけど。

「そう簡単にはいかないよ」

「何!？」

背中 of 追加装甲の一部がせり出し変形する。変形し終えた装甲からは二門の銃身が伸びる、そう可動式のビーム砲だ。二門のビーム砲が迫るブレードミサイルをオートで迎撃しミサイルはとも簡単に爆散した。

「くっ・・・!」

「そう簡単に行かせないよ優希!」

ラウラの後ろから今度はシャルが飛び出してきた、速い・・・トルナード一号機の高機動スラスターユニットを追加した状態だ。ここまでの速度が出せるんだ。

「ええい!」

「っ!」

シャルはマシンガンで攻撃してくる、それをロールして回避しようとしたけど何発か掠った。ダメージ軽微・・・大丈夫だ、でも・・・。

「ふふっ・・・これで速度は落ちるね」

「くっ・・・!」

右翼の追加スラスターに弾が当たり煙を上げている。これじゃあ

バランスが取り難い……仕方ない。

両翼の追加スラスタをパージし、後方に飛ばす。高速機動状態なのでぶつかれば相当なダメージになる。ぶつかればの話だけど。

「そんなの当たらないよ！」

シャルはパーツのぶつからない安全な位置に移動した。でもね……まだあるんだよ。  
バクンッ、ジャキンッ！！

「え？」

パージされたスラスタポッドのハッチが開きそこから計六十発のマイクロミサイルが全弾発射された。

「う、うわわわ！？」

発射られたミサイルはすべてシャルへと向かう。シャルは慌ててマシンガンで迎撃するけど多すぎるため数発直撃した。

「ぐうっ！？」

「逃がしませんわよ！！」

「味なことしてくれるじゃない優希っ！！」

爆発に揉まれて速度が落ちたシャルに変わって今度はセシリアさんと鈴が追いついてきた。って、後方から警報！？  
慌てて回避して後方に意識を集中すると。

「私を忘れてもらっては困るな優希!!」

「まだ終われるかぁー!!」

遅れていた箒姉と一夏が追いついて来ていた。

そう簡単にはいかないか……でも負けないよ!

レースも中盤に差し掛かり、見せ場はこれから!……のはずだったのだが。

ゾクッ

「っ!？」

突如、僕の体に悪寒が走った。そして反射的に回避行動をとった。

ドシュンッ!!

先ほどまでいた場所に閃光が奔った……あれは。

「レーザー!？」

先ほどの攻撃は上からだった……センサーの精度を最大にし上を見るとそこには深い青色をしたISがライフルを構えていた。僕はあの機体を知っている。そう、あれは……。

「サイレント・ゼフィルス!」

Mの機体だ……。

突然の襲撃者のせいで会場はパニックになった。舞華ちゃんと蘭ちゃんが無事だといいいんだけど今はっ！

ギンッ！

空から降り注ぐB Tライフルの攻撃を右腕につけたシールドで防ぎ続ける。先ほどの不意打ちによってシャルとラウラのISが被弾したのだ。しかもスラスターをピンポイントに狙われて、どんな狙撃能力なんだよ！！

「優希、無事か！」

一夏は雪羅をシールドモードにして隣に立つ。よかったこれで楽になる。

「僕は大丈夫……でも二人が」

「ごめん、少し動けないや」

「不覚を取った……」

墜落した衝撃で歩行もできないみたいだ……。怪我は無くてよ

かったけど。でもこれじゃただの的だ。

「って、攻撃がきつくなってきた……！」

確かに……。なんか火力が集中していたような。てか特に一夏を狙ってるような……。どういうことだ？

「一夏さん、優希さん！あの機体はわたくしがっ……！」

「セシリア！？おいっ！」

「セシリアさん！無茶だよ、戻って！」

「BT二号機『サイレント・ゼフィルス』……。！今度こそっ！」

一人で行くなんて無謀だ！

「くっ……。！一夏、二人をお願い！」

「お、おい優希！」

シャルとラウラを一夏に任せてセシリアさんを追おうとしたとき。

「優希、右よっ……！」

「え？ぐあっ……！」

鈴の声が聞こえた瞬間、右から何かがぶつかり凄い衝撃が走った。大きさは僕と同じくらい……。それがISだとすぐに分かった。

「『『『『優希！？』『』『』』」

ま、まさか・・・伏兵！

いきなり突っ込んできたISは僕に組み付いたまま加速する。僕だけ隔離するつもりか・・・！

「は、放せ！」

「悪いが、今日は私に付き合ってもらうよ。篠ノ乃優希君」

な、なんだって・・・。

「優希！？くっっ！」

突如現れたISによつて優希の姿はすぐに見えなくなった、追わねば！

「待ちなさい箒！あんたの紅椿にはそんなエネルギーは残ってないでしょ、いつたらずくにガス欠するには目に見えてるでしょ！！」

「だが優希を放っておくわけにもいかんだろ！！」

鈴の言つとおり紅椿のエネルギー残量は残り少ない、先ほどの攻撃を防ぐのに使いすぎたのだ。『絢爛舞踏』さえ発動できれば、助けにいけるのに・・・！

「私が行くわ、甲龍のエネルギーはまだ大丈夫だから。あんたは残ってなさい」

「だが！」

「だが、じゃない！！そんなエネルギーが少ない状態で行かれるほうが邪魔なのよ！途中でエネルギー切れなんてされたら的になるだけよ、わかるっ！！」

「くっ……」

鈴の言うとおり、こんな状態で行ったら邪魔になるだけだ……  
・くそっ！

「安心なさい、あんたの弟は私が連れて帰ってくるわよ。だから安心なさい」

「……………頼む」

悔しいが今は頼むしかない。

「任せなさい！」

そう明るく言い飛び立った鈴であつたが表情は真剣なものであつた、あれが代表候補生の威厳か、やはり私はまだ甘いな……。

「頼んだぞ、鈴」

「このおっ!!」

アリーナから十キロ以上離れた地点でようやく謎のISの拘束を振りほどいた……。いや、放してもらったかな。今いるのは上空五百メートル地点……。奴は何者なんだ。

相対するIS、それは紅椿とは違う赤……。いや真紅かな。背部には翼のような大型のスラスタに袖のような金色ディテール、それ以外は特に目立つものは無いISだが……。なんだろうこの感覚は……。変な違和感が。

「ふふっ、初めまして篠ノ乃優希君。私はそうだね……。とりあえずリヴァーレでも呼んでくれ」

リヴァーレ?……。好敵手だなんてふざけているね。

「で、何のつもり。僕一人だけ連れていたってことは何かあるんでしょう?」

わざわざ僕だけを連れてきたんだ何かあるはずだ。殲滅するつもりだったらあの場で攻撃を続ければいいはずだしね。

「お分かりですか、でしたら話が早い、今日は」

リヴァーレは細身のブレードを展開してこちらに向ける。

「あなたとそのIS、ユニコーンの実力を……………」

僕もシールド内に収納してあったナイフを引き抜く。

「試しに……………」

……………来るっ！！

「来ましたあっ！！」

ガキンッ！！

ブレードとナイフがぶつかり合い火花が散る。セシリアさんとMの戦いが始まった同時に僕とリヴァーレの戦闘は始まったのである。

## 第五十六話（後書き）

はい、出ましたオリ敵が。名前については分かる人には分かると思います。

ISの方は描写は少なくて分かりづらいと思いますがシナンジュです。ユニコーンのライバル機といったらやはりコレでしょう。

一応リヴァールは優希のライバルとしてのキャラなので雑魚ではありません。強さは次回の話で。

今回の更新なのですが少し遅れると思いますのでご了承ください。

では、次回の更新で。

## 第五十七話（前書き）

何とか書けました。

五十七話です、どうぞ。

## 第五十七話

ガキンッ!!

リヴァーレのブレードと僕のナイフがぶつかり拮抗する。

「うん、反応はいいね」

「ふっ!!」

「おっと」

ナイフを傾かせブレードの向きを逸らさせた後僕は回し蹴りを放った、けどそれはリヴァーレのISの左腕につけられた大型のシールドによって防がれてしまった。

「っ!!」

スラスターポッドを回転させてバックで下がる、一旦距離をとったほうがいい。

（ミサイルの残りはさっきので三割を切ってる……だったらコレだ）

脳内でイメージした武装が粒子から形を成し左手に展開される。それを素早くリヴァーレに向けて放った。

「いけっ!!」

「むっ……!!」

展開したのは迅雷と同型のガンポッドだ。でも中身は違う、コレが撃ち出すのは弾丸ではなく……。

「ビームか……!」

そう、ビームだ。高速機動時には連射が利くこちらの方が効率はいい。ビームマグナムのデータを元に作り上げたものだ。でも……。

「そんな照準では当たりはしない!!」

弾幕を張れるけど当たらない、その理由は手だ。僕の利き腕は右手、だけど今ガンポッドを持つているのは左手だ。蘭ちゃんを庇った時にできた怪我のせいで右手を使えないのだ。いや使おうと思えば使えるのだけど、せっかく治りかけていた傷が開いてしまうのだ。……でも背に腹は変えられないか。

（でも、なんださつきから感じるこの違和感は……）

「その程度か君の力は!」

「くっ!？」

ガインツ!

リヴァーレは弾幕を掻い潜り接近しブレードを振った。それを右腕のシールドで防ぐけど……。

（いっ……っう!？）

受けたのはいいけど振動が・・・キツイ。

「こ・・・のお!!」

ガンポッドを戻し再びナイフを取り切り結ぶ。

「そうだ、それでいい。私にもっと君の力を見せてくれ!!」

「うる・・・さいっ!!」

「うおっ!?!」

ナイフの柄でブレードの腹を叩き逸らした後リヴァーレの腹に蹴りを入れる。そしてそのままバックしてミサイル発射体勢に入る。リヴァーレは蹴られて体勢を崩している、これなら!!

「ファイア  
発射!!」

装甲内に残っていたマイクロミサイル全てがリヴァーレに向かう。これは避けれまい!

「なるほどいい手だ、だが・・・」

「な!?!」

ミサイルは爆発したのだけどリヴァーレには当たってなかった。

(ミサイルが接触する寸前に下方向へ瞬間加速で回避しただって!  
イグニッション  
そんなことできるのか・・・いや、可能だけど機体が・・・)  
)

可能なのだが機体の反応が間に合わないはずだ・・・それにリヴ  
アーレの機体、あれはおそらく第三世代型じゃない第二世代型だ。  
ラファール・リヴァイブみたいに第三世代型に準ずる性能の機体の  
カスタム機なんだろうけど、反応速度が早すぎる・・・どうい  
うことだ。

「フフフ・・・」

「くっ・・・！」

何なんだこいつは・・・！！

「それが本気かい？篠ノ乃優希君」

「なんだって・・・」

「私は知っているよ、君がまだ本気ではないことを」

知っている・・・データは取られているってことか。まあ、  
勧誘するくらいだから当然か。

（僕の本気・・・Dモードのことか。でもあれは・・・  
）

Dモードは今使えない、この天剣はユニコーンを覆うように装  
着されているので装甲を展開するDモードは使えないのだ。装甲を  
パージすればできないことは無いけど・・・バランスが悪くなる。

「・・・」

「だったら、本気になるまで付き合ってもらおうよ！」

シールドをしまいブレードをもう一振り展開した。

「くっ・・・！」

イグニッション・ブースト

瞬時加速で一気に接近し二振りのブレード振りかざす。僕はその連激をシールドで受け、ナイフで逸らすのが防戦一方になってしまう。距離を取るうにも相手も速く中々離れられない。このままじゃジリ貧だ、どうにかしないと・・・！

ギンッ！

「・・・・・・・・ふう」

攻撃が止んだ？

「篠ノ乃優希君、どうやら私は君を過大評価しすぎていたらしい」

「・・・・・・・・・・・」

「がっかりだよ」

「だったらもう帰ってくれないかな？僕も忙しいんだよ」

今のユニコーンの装備での勝率はかなり低い、操縦者の技術もリヴァーレの方が上だ。冗談っぽく言っただけかなり本気だ。

「そうはいかないのだよ、今回は勝手に出てきたのだからな。手土産の一つは持って帰らないといけないのだよ、だから・・・・・・・・・・」

・・」

チャキツ

「そのIS、貰っていいっ」

「くっ……」

ブレードを構えるリヴァーレ、射撃は当たらないし防ぐのも限界、それに逃げることも不可能……やるしかないか。

チャンスは一回、奴が仕掛けてきたときに勝負だ。

僕は、シールドを構えて防御体制に入る。さあ、来いっ！

「終わりだ！！」

リヴァーレは一気に接近しブレードを振り下ろそうとする。

「今だっ！！」

「なっ！？」

構えていたシールドと腕部追加装甲を強制パージした。パージされた装甲はリヴァーレの目の前に飛んで行った。リヴァーレはそれをブレードで切り裂く。何も意味が無いように思えるけどそれでいい、一瞬の隙を作ればいいんだ。

「ハアアッ！！」

IS-Dを発動する。ヘッドギアのホーンが開き変形する、でも残りは右腕部だけだ、残りは天剣により装甲展開が阻害されて開か

ない。でもこれでいい変形した腕部からビームトンファアを起動して叩きつける。

「ぐっ!？」

リヴァーレは両手のブレードで防ぐ。

「いつけえー!ーっ!」

「くっ!？」

ビームトンファアの出力を最大にしビーム刃はさらに大きくなる。するとリヴァーレのブレードは溶解し始める。そしてそのまま僕は力任せに腕を振り切った。

(クソッ、掠っただけか・・・!)

本気でいった、今の僕ができる最大の攻撃を出したのにリヴァーレのISの損傷は軽微だった。だけど掠ったとはいえあれだけの攻撃だ、ダメージはデカイはずだ。

ピシッ!

リヴァーレの顔を隠していたバイザーにはヒビが入り、胸部装甲は一部が剥がれ落ちた。

「・・・・・・・・くくく、ハハハハハハハッ! そうだ、これが見たかったんだよ。君の本気が、そのISの真価が!!! いいぞ。もっと私を楽しませてくれ! 私と殺し合おう!!!」

急に壊れたように笑い出したリヴァーレ、コイツはやバイ・・・  
・・コレが本性、戦闘狂って奴か。



・・。

「な、何でサイコ・フレームが！」

リヴァーレのISの胸部装甲の内部にはサイコフレームが使われていた。でも何故彼女が持っている、あれは僕と束姉しか製造方法を知らないはずだ、なのに・・・！

「ん？ああ、コレか？コレはなお前と殺し合う為に着けたんだよ」

「僕と・・・」

「ああ、少ししか使っていないのにコレだけの性能になる。素晴らしいものだ！」

「どこで手に入れた!!」

「どこって・・・」

リヴァーレはとある方向を指差した。

（あっちは・・・海？・・・あ、まさか）

「そうだ、お前が海で撃墜されたときの部品を私たちが回収したんだよ」

そいうことが・・・だったら納得がいく、アレだけの反応速度に第二世代型としては異常な性能、全部サイコフレームの恩恵か。

「さて、もう質問タイムは終了だ。楽しい殺し合いを続けよう!!」

「くっ！」

どうする、アレだけのスピード捉えるのは難しいし、もうエネルギーが二割を切っている・・・このままじゃ。

「アハハハハハハ・・・っ!？」

え？今空気が歪んだ、あれは！

「優希から離れなさい!!」

「鈴!」

援軍か、助かる!!

「このお!!」

「チツ・・・!!」

鈴は高速で接近し衝撃砲を叩き込んだ。リヴァールは見えない砲弾に苦戦し後退する。

「無事のような優希」

「助かったよ、鈴」

あのままやり合ってたら確実に負けていた。でも鈴が来たところで勝てるのか、コイツに・・・。

「この虫けらが・・・！二人纏めて殺して・・・あ？」

ん？何か様子が変わだな。何かあったのか？

「何だと・・・どうということだ！！」

通信・・・か？揉めているようだけど。

「ぐ・・・わかったよ。チッ、お前たち運がよかったな今日はここまでだ」

どうということだ？

「今日はここまでにしておいてやる。だけどな・・・次に会ったときは」

殺してやるよ

「・・・っ!？」

奴の見せた狂気を含んだ笑顔に背筋が凍り、僕は死を感じた。

「じゃあな」

リヴァーレはそう言つと、飛んでいつてしまった。本来なら追うべきなのだろうけど恐怖により身体を動かすことができなかった。それは鈴もだ。

「・・・・・・・・・・」

数分間、その場に留まった。ようやく心を落ち着かせることができた。き動けるようになった。

「な、なんなのよ・・・・あいつは」

「わからない・・・・でも、助かったみたい・・・・・・・・」

まだ身体が震えてる・・・・・・・・殺気には慣れていたつもりだったんだけどな。

「と、とりあえず戻りましょう。みんな心配してるわ」

「うん・・・・セシリアさんは？」

Mと戦っていたはずんだけど・・・・・・・・。

「わからないわ・・・・でも早く戻りましょう。またやつ見たいのが来る可能性が無いとは言い切れないわ」

「そうだね・・・・戻ろう」

可能性は低いけど、ありえるかもしれない。エネルギーも底をつきかけている、こんな状態で戦闘は到底無理だ。

(リヴァーレは強い、万全の状態のユニコーンでも勝てない。だから僕はもっと……)

強くないと。と、僕はそう胸の中で決心するのだった。

## 第五十七話（後書き）

リヴァーレのキャラ崩壊はやりすぎたかな？と今更ながら思い始めた作者です。

原作六巻分は後一話分で終了します。その後は短編でも書こうかな？そのときはまた皆様にアンケートに協力してもらったかもしれません。まだ決定していませんが。

感想板の方なのですが今まではユーザーのみの設定でしたが一般にも開放しましたので、感想や意見などがありましたら是非ご利用ください。

それと活動報告を書き始めましたので、よろしければそちらもご覧になってください。

では、今回はここまでです。次回の更新で。

## 第五十八話（前書き）

なんとか書きあげましたが後半がggggdになってしまいました。  
とりあえず五十八話です、どうぞ。

## 第五十八話

「せーのっ」

「一夏、お誕生日おめでとうー!!」

パンツ！パンツ！ズドン！！

シャルの掛け声と共にみんなが持っていたクラッカーを鳴らした。一人バズーカタイプのクラッカーを持っていたけど。

ところ変わって織斑家、僕たちは一夏の誕生日を祝うべく集まったんだけど……。

「どんだけ集まったてんだよ」

「あはは、凄い人数だね……」

集まったのは僕を含めた一年専用機持ちグループに生徒会御一行、プラス新聞部エースの黛先輩。さらに蘭ちゃんと蘭ちゃんのお兄さんの弾君と一夏の友達の御手洗さん。そして舞華ちゃんだ。

計十四人、一般家庭のリビングには少し多すぎる。

「でも、よくまあ、あの事件の後でこんな騒ごうと思えるな」

「あんな事件の後だからだよ。あんなことがあったからこそ騒ぎたいんだよ」

ISの市街地戦闘、これがとんでも無い事件なのは誰にでも判る。実際千冬さんや山田先生、学園関係者たちが慌しく動いていた。僕たちも事情聴取があって開放されたのは四時くらいだったからね。

「そうか……」

「そうなんだよ」

今回の襲撃者、亡国機業の目的はよくわかっていない。一応、目的不明ということで決着はついたけど。気になることがあった、まだ冷静だったときのリヴァーレが言っていた言葉。

『今回は勝手に出てきたのだからな』

この言葉、恐らくMもこれと同じだろうな。リヴァーレが撤退するときの時間とほぼ同時だ。上の人間に戻ってくるように命じられた……と考えるのが妥当か。

でも奴らの目的は何なんだ、今の所は各国からISを奪取しようとしているけど。……駄目だ情報が少なすぎる。

「あ、一夏さんケーキ如何ですか？私と舞華の二人で作ったんです」

「ん？ああ、じゃあ貰おうかな」

「し、篠ノ乃さんもどうですか？」

「え、あ、うん。貰おうかな、丁度甘いものが食べたかった所だしね」

「あ、は、はい！すぐに取ってきます！」

「蘭ちゃん、落ち着いてやらないとケーキ落としちゃいますよ」

とりあえず今は楽しもう、考えるのは後にしよう。

「も、持ってきました。どうぞ」

「織斑さんもうぞぞ」

「お、サンキュー」

「ありがとうございます。それじゃあ頂きます」

「は、はい……………」

紙皿に載せられていたのはシンプルなショートケーキだ。それをフォークで一口大に切り分け食べる。

「……………」

「お兄様、お味はどうですか？」

「うん、美味しいよ」

「ああ、美味しいな！」

「本当ですか！」

「よかったですね蘭ちゃん」

うん、スポンジも柔らかしクリームの甘さも丁度いい。イチゴは多分舞華ちゃんが用意したんだろうな、絶対これ高いのだよ。でも、美味しい。

「でも、本当に美味しいよ。甘さも丁度いいし僕好み♪」

最近甘いもの食べに行けなかったからさらにそう感じるよ。

「「むう………」」

ん？どうしたんだろシャルとラウラ、こっちを見ちゃって。もしかしてケーキが食べたいのかな？

「シャル、ラウラも食べれば、ケーキ凄く美味しいよ」

「い、今はいいかな、後で食べさせてもらつよ」

「私も後にしておこつ」

そうなんだ。じゃあもう一口つてあれ？

カチャンツ

「あはは、落としちゃった」

痛み止めてたから忘れてたけど右手の傷が開いちゃったんだよね。だから僕の右手は包帯グルグル巻きなのだ。今は左手でやるんだけどやっぱり上手くいかないな。

「大丈夫ですか優希さん？やっぱり怪我が………」

「あ、大丈夫だよ」

うーん、でも左手だとやっぱり食べにくいな……どうしよう？

「あ、あの、よ、よければ私が食べさせて……」

「優希、はいアーン」

「優希、食べ」

蘭ちゃんが何か言おうとしてたんだけど。シャルとラウラが割り込んできたしかもその手にはケーキを刺したフォークが握られている。

「え、ちょ、二人とも？」

「アーン……」

「う、あ、アーン……」

ハグッ、上手いけど恥ずかしい……………／／／／

「うう……」

「蘭ちゃん、ファイト！」

「う、うん！」

え？どうかしたの蘭ちゃん。

「し、篠ノ乃さん！」

「え？何」

「あ、アーン！」

はい？

「「な！？」「」

「え、えと……………」

な、何で僕にするの蘭ちゃん、するなら一夏のほうでしょ！

「アーン……………！」

あ、圧力が……………しょ、しょうがない。とりあえず食べるしかない。

「あ、アーン」

差し出されたケーキを食べる。

「お、美味しいですか？」

「う、うん」

は、恥ずかしい……………！そして黛先輩は勝手に写真を撮らないでください！

「「……………」」「」

え、何で三人とも睨み合ってるの？どうしたの一体。

「私、負けませんから！」

え？ちょ、どういうことなの！？蘭ちゃんの好きなのは一夏じゃないの、もうどうなってるの！？

「青春ねえ」

「青春だねえ」

会長にのほほんさんもお茶飲んでないでどういうことなのか教えてよ！てか、何その青春って書いてある湯呑み！どっから出したの！？・・・・・・後でどこで買ったのか教えてもらおう。

「そしてあつちも青春ねえ」

あつちも？あれは・・・・・・。

「・・・・・・」

弾君に布仏先輩？何をしてるんだろ。・・・・・・ああ、そういうことか、邪魔にならないように離れていよう。

目立たない位置で御手洗さんが血の涙を流しながら缶を握りつぶしていたけど、僕は見ていない。

「あ、そうだ。一夏」

「ん？なんだ優希」

「はい、コレ」

僕は持ってきたカバンから小さな箱状のパーツを取り出す。

「ん？何だコレ」

「それはねISの拡張容量バス・スロットを拡大するためのパーツのプロトタイプ」

「………どういうことだ？」

今の説明で、わからないのか………まあいいか。

「簡単に言えばそれを白式に使える、小火器くらいしか無理だけど銃が使えるよ」

「本当か！！」

「うん、今はそれくらいだけでもっと研究が進めばライフルくらい着けられるようになると思うよ」

迅雷の開発過程にできたものを再利用したものだからそこまで高くないしね。でも完成すればかなり使えるものになるよコレは。

「すげえぜ優希！ありがとうな」

「どついたしまして」

その後は各自一夏にプレゼントを渡していった。その後はみんなのできるボードゲームやカードゲームなどやっていくことになった。

・成り上がりゲーム

弾「よっしゃー！株で大儲け、一億ゲットー！！」

一夏「げ、マジかよ、弾」

鈴「弾に負けるのは嫌よ！」

弾「（へへへ、あの人の前なんだ。カッコ悪いところを見せられるか！！）さあ、次だ！！」

僕「じゃあ、いくよつと・・・５か。えーと何々？現在一番所持金の多いプレイヤーと所持金を交換できる・・・・・・・・・・ゴメンね弾君」

弾「なんだとーーーーー！？」

一夏・鈴「ふ、ザマア」

弾「お前ら表出ろや！！」

・ツイス。ーゲーム（男だけ）

弾「一夏・・・・・・・・足どけろよ！！」

一夏「弾こそもっと体を上げろ・・・・・・・・のしかかるな！」

御手洗「な、何故こんなことに・・・・・・・・・・本当なら女子も交え

て！」

鈴「うわぁ・・・暑苦しいし、見苦しいね」

僕「あの、何で僕は駄目なの？男だけでやるなら僕も・・・」

セシリア「ダメですわよ」

箒「優希は不参加だ」

舞華「やるなら私たちですよ、お兄様」

僕「何故に？」

と、こんな感じで遊んでいき楽しい時間は過ぎていき最後のゲームが始まった、それは。

「王様ゲームーーーーーム！！」

弾君と御手洗君のテンションがオカシイ・・・お酒でも入ってるのかな？

「どうしたのだあの二人は？」

「さあ？」

シャルにラウラ、気にしないで、場に酔ってるだけだと思うから。

「で、王様ゲームとはどんなゲームなのだ？私は知らないのだが」

「僕もわからないな。どんなゲームなの優希」

「えーと簡単に説明すると、まず最初に番号の書かれたクジを引くの」

「クジ？」

「うん、そう。そのクジの中に一本だけ王様って書かれたクジがあるの」

「ほう。で、その王様と書かれたクジを引くとどうなるのだ？」

「王様のクジを引いた人は番号を指定した人に、どんな命令でも出ます。しかもその命令は絶対です」

ピシッと空気が固まったような気がした……………どうしたんだ？

「どんなってどんな？」

「ん？例えば何番が何番に膝枕とか」

「何番と何番がキスとか」

「そうそう……………って、会長。いきなり話に混ざらないで下さいよー！」

また気配消して近づいてたよこの人、心臓に悪いから止めてって何時も言ってるのに……………まあ止めないだろうね、うん。

「てか、そんな命令出しませんよ．．．二人共、会長のは冗談だから．．．ってあれ？」

「優希とキス、優希とキス、優希とキス、優希とキス、優希とキス．．．．．」

．．．．．参加するの止めようかな、王様ゲーム。

「全員絶対参加よー」

退路を塞がれた．．．．．。

「さあ、始めるわよ！クジはもう用意してあるから引いてね」

会長が握っているのは十四本の割り箸、いつ用意したんだ？まあいいか、とりあえず引こう。

会長が握っている各自割り箸の中から適当に一本引く。

「それじゃあ、いくわよ．．．．．」

「王様だーれだ！」「」「」「」「」

えーと、三番か。

「あ、私だっ」

あ、王様はのほさんかどんな命令をするんだ？のほさんなら滅茶苦茶なことはいないだろうけど．．．．．。

「うーんとーね．．．．あっ！決めたよー」

ゴクリッと、全員が固唾を飲む音が聞こえる。一体どんな命令が．．．．．！

「三番がー」

三番って．．．．．僕じゃん！？

「このジュースを一気飲みー」

な、何だそんなのか、変なのじゃなくてよかったよ。

「じゃあ、行きます！」

缶のプルタブを開けて一気に煽る。

「「「「「一気！一気！一気！」「」「」「」

ゴクツゴクツ！

あれ？中々美味しいなこのジュース、炭酸が効いて．．．．て．．．．．。

ボタンッ！！

「「「「「ゆ、優希！？」「」「」「」

バタンッ

「「「「「ゆ、優希!?」「」「」「」

ジュースを一気飲みしていた優希がいきなり倒れた。

「優希、どうしたの!」

「し、しっかりしろ!」

慌てて優希に寄り容態を確認する、すると……………。

「スー…………スー…………」

「ね、寝てる?」

「「「「「え?」「」「」「」

な、なんで寝てるの?つ、疲れてたとか、でもいきなり寝るなんて変だし……………。

「あれ?」

「鈴?どうかしたの」

「……………優希が飲んだのって、お酒じゃないの!」

お、お酒って、まさか！

「何故酒があるのだ」

「私たち買ってきてないわよ」

そうだよ、飲み物を買ってきたのは僕たちだったし……..  
お酒が混じるなんて変だよ。

「あ」

「どうしたんですの、一夏さん？」

「それって、千冬姉のだ……..」

え？

「千冬姉の買い置きしていたサワーなんだよ、見た目ジューズっぽいから間違えちゃったのか」

な、なんて紛らわしい物が……あれ？こんなこと前にもあったよな……..。

「にゃ〜」

「あ、あらあら？」

そうそう、猫の鳴き声もって……..まさかっ！

「うにゃ〜」

「ゆ、優希お兄様？ど、どうなさいましたの？」

振り返ると舞華ちゃんの膝に頭を乗せて甘えている優希の姿があった。

「しまった、出遅れた！」

「え、ええ？どどういうことなんですか！？」

僕たちは臨海学校でこのことを知っていたから驚かないけど、他のみんなは啞然としていた。

「えーとだな、優希はアルコールを摂取すると……………」

「猫になるのよ」

「はい？」

混乱している蘭ちゃんに一夏と鈴が説明するけど……………まあ、普通はそんな反応だね……………。

でも、今はそんなことよりも！

「うなあ……………」

「はう……………可愛いです……………？」

しゃ、写真を撮らないと！こんな可愛い優希を撮らないわけにいかないよ！

「こ、これはいい絵だわ！ぜひ保存を！！」

は、行動が早い！さ、さすが先輩、新聞部は伊達じゃない！

「優希君、こっち向いて〜」

「にやう？」

ああ、今がとてもしいアングルなのに！か、カメラを早く！！

「はい、いきますヨ……………」

「シャッ！！」

バキッ！

「え、ばきっ？」

な、何か今カメラの前を何か通り過ぎたような……………  
て、ああっ！

「せ、先輩カメラが！」

「え？カメラが何……………って、うわぁ！？」

先輩が構えたデジカメが……………縦に割れた。それも刃物で  
切られたかのように。

「フカー……………ッ！！」

「え？ちょ、どういうこと！？優希君がやったの！？てか、データがーーーー！」

先輩に向かって威嚇？をしている優希。まさか、カメラが嫌いな  
の？

「な、何のカメラは常に予備を携帯するものなのだよ！」

持ってきたバックから新しいデジカメを取り出した先輩でもそんな風に出したら。

「ニヤッ！！」

スパッ！

「つて、またーーーー！？」

またカメラが真つ二つに……。！てか、優希って素手だよね、  
どうやって切ってるの！？

「にゃ……。うにゃ~~~~、コロコロ」

「あらあら、優希お兄様は甘えん坊ですわね？」

「にう~~~~」

もうカメラが無いことを確認した優希はまた舞華ちゃんの膝に頭  
を乗せて甘え始めた。

か、変わってほしいよ。でも、そんなことしたら優希が不機嫌  
になるし。。。。。

「にう・・・・・・・・。スー・・・・・・・・スー・・・・・・・・」

「あれ？寝ちゃいました・・・・・・・・」

「時間が経つと眠るらしい。今日はもう寝かせておいてやろうぜ」

「そうだな」

「優希、大変だったからね」

「そうだな、休ませてやろう」

優希、今日は一人で敵と戦ってたしね。しかも強敵だったみたい。助けにいけなかった自分が不甲斐ないよ・・・・・・・・。。。

「お休み優希」

優希の頭をひと撫でする。

（次は絶対に僕が守るから！）

心の中で決心する。絶対に守ると。

「弾、俺もう男でもいいかもしれない」

「しょ、正気に戻れ、数馬！！そして現実を見ろーーーー！！」

・・・・・・・・まず、身近にいる脅威を取り除いたほうがいいよね絶対。

## 第五十八話（後書き）

久々に猫優希を出してみました。

今回で原作六巻は終了です。どうでしたか？結構滅茶苦茶だったですし、クオリティも低かったですし……上手くなれるようがんばります。

次回は番外編の話を書こうと思っています。

では次回の更新で。

## 番外編 みにみにたいむ？（前書き）

番外編です。今回からしばらくバトル分が一切なくなると思います。

それではどうぞ。

番外編　みにみにたいむ？

「「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」」」

「？」

どうなってるんだコレ・・・・・・・・。

「・・・・・・・・束、説明しろ」

「あ、アハハ。これは束さんにも想定外だったな〜」

いや、元凶は束さんなのはわかってんだけどさすがにコレは信じられないぞ。

「もう一度聞く、何故優希が・・・・・・・・」

だって、優希が・・・・・・・・。

「幼児化してるのだ!!」

小さくなっちゃってしまっているのだから。三歳児くらいの大きさに。

「うみゅっ!!」

あ、優希がこけた。

ことの発端は今日の午後の授業のときだ、アリーナでのISの訓練も終わり片付けに入っているときに。

「やつほーーーーーゆゝ君!」

「うにゃあっ!?!た、束姉!何でここにっ……………」

「ゆゝ君に会いに来たんだよ。ああゝ、この抱き心地が堪らないよゝゝ」

「は、放してよ束姉ゝゝ」

い、いつもながら騒がしい人だな。まあ、静かな束さんなんて想像できないけど。

「はあ…………おい束。何をしに来た。邪魔だから帰れ」

「ヒドイよちーちゃん!もつと束さんとの愛を確かめようよ…………イタタタタタッ!?!や、止めてちーちゃん人の頭から聞こえてはいけない音がアアーーーー!?!」

「用が無いなら帰れといっているのだ!」

束さんの頭からミシミシと骨が軋む音が聞こえる、ホント容赦ないな千冬姉。

「よ、用ならあるよ!今日はゆー君にあるんだよゝ」

「・・・・・・・・・・さつさと終わらせて帰れ」

「もう、ちーちゃんの照れ屋さん？」

「・・・・・・・・・・(ゴキッ)」

「さて、ゆー君ちょっとおいで」

逃げたか束さん、まあ千冬姉はからかいすぎると怖いからな。

「ん？何、束姉」

「ちょっと後ろ向いてね」

「ん？」

束さんに背中を向ける優希、何をするつもりなんだ？

「えーとね・・・・・・・・あつた！」

この前と同じエプロンドレスのポケットの中から何か取り出した束さん、なんだあれ？なんかの液体が入った銃みたいなものだけど、漫画とかで見たことがあるような・・・・・・・・。

「えい」

「にやつ！？」

取り出したそれを優希の首に押し当てた後トリガーを引いた。つて、思い出した、アレって無針注射ってやつなんじゃないのか！？

容器の中に入った液体は減っていき優希の体内に入ってしまった。

「はい、終了っ」

「ちょっ！？何やってんですか東さん」

「あ、あう……」

ボタンッ

「ゆ、優希！？」

「しっかりしろ！」

謎の液体を注射され優希は倒れてしまった。そしてすぐにシャルロットとラウラが駆けつけた。

「何を注射したのですか、姉さん！」

「何って、ナノマシンだよ」

「な、ナノマシン？」

それって確か、凄くちっさい機械のことだよな。漫画とかじゃよく出てくるもんだけど、まさか存在するなんてな……。

「東、そのナノマシンはどんな効果があるのだ？」

「ん？今回のナノマシンはね、この前と同じで性別を転換するものなんだ」

え？性別を転換って……まさかあの時のか！（番外編TS  
パニックを参照）

「だって、私、女の子のゆー君見てなかったんだもん」

「あ、あなたって人は……！」

「大丈夫だよー人体に影響はないし一週間もすればナノマシンは消滅するから、問題ないよー」

いや、性別が転換する時点で人体に影響があると思うんですけど・  
……。

「それにそろそろ、効果が出てくるはずだよ」

「あ、あれ？優希が……」

「小さくなっていくぞ？」

シャルロット達の声を聞きそっちのほうを見ると優希の身体に変化が現れ始めた。体格が徐々に小さくなり始めている。

「あれ？」

「どうした束」

「おかしいな？小さくなりすぎているような……」

え？どういうことだ。優希の身体は小さくなっていくのだが少し



「・・・・・・・・・・・・・・・・」

返事がない・・・・・・・・やっぱどこが悪いのか。

「優希？」

「・・・・・・・・・・だあれ？」

「「「え？」「」「」

「おねえちゃんたち、だあれ？」

・・・・・・・・・・とんでもないことなっただぞ。

ということだ。

「ま、まさか記憶まで四歳児に戻ってしまうなんてな」

「でも何で・・・・・・・・」

現在、アイアンクローされている束さんのほうを見る。

「た、多分・・・・・・・・この前のナノマシンが・・・・・・・・変異したせいなのかもしれない・・・・・・・・」

「この前ですか？」

「うん・・・ちーちゃんそろそろ放してくれると嬉しい・・・..  
な」

「チツ・・・・・・・・！」

千冬姉は舌打ちをしながら束さんを解放した。

「ふう、もうちーちゃんったら照れ屋さんなんだから」

「（ゴキッ）早くしろ・・・・・・・・」

「はい・・・・・・・・」

「え、えっとそれでナノマシンの変異ってどういうことですか？」

「うーん、多分なんだけどこの前の性転換のときに使ったナノマシンがまだ残ってたんだろぅな。ゆー君って女性ホルモンが多いから完全に稼働しなかったんだろぅね・・・まあ、とりあえず調べてみようか。ゆー君、ちょっとおとなしくしててね。」

要約すると優希が女っぽすぎたからナノマシンが上手く動かなかったのが原因ってことだよな。まあ俺たちにどうすることはできないしな束さんに任せるしかないか。

束さんは優希のそばに近づき、何かの機器を取り付けようとする。優希自身はそれが何か分らず首をコテンと傾けている。

「ねえね？」

「ん？」

ん？今優希が何か言ったような？ねえね．．．って、まさか。

「ねえね♪ねえ♪ね」

小さな手を広げて束さんの方に伸ばす。やっぱり優希束さんのことを姉だつて分かつてるのか！？

「う、うう．．．」

「ねえね？」

「うにや～～～可愛いよ～～～」？

ガバツと優希を抱きしめ始めた束さん、そしてスリスリと頬擦りまで始める始末だった。

「あう～～、ねえねだなんて何年ぶりなんだろ、小学生になつてからずっと束姉で固定されちゃったから懐かしすぎるよ、そして可愛すぎるよ～～？」

「うにや～？」

ずっと頬擦りを続ける束さん、優希も喜んでいるみたいで笑顔なんだけど．．．．．。

「．．．．．（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ）」

俺の隣にいる幼馴染と後ろにいる姉からとんでもない不機嫌オーラが出ているのでそろそろ止めていたきたい。一刻も早く！

「東一（姉さん）・・・・・・・・」

ビクッ！

「早くしろ（してください）・・・・・・・・」

「は、はいっ・・・・・・・・！？」

「？」

二人の不機嫌オーラと怒気をともに喰らって東さんは見事な敬礼をした、そんなことする人じゃないんだけどな。

それを見て首を傾げるだけの優希って天然なのか大物なのか………。

「えーと結果的に言えば、命に別状もないし一生このままってことも無いよ」

東さんの検査結果を聞き、はぁ……とみんなから安堵の息が漏れた。

「〜」

今いるのは学食である、あのままアリーナで検査するわけにも行かないので一旦保健室に移って、検査をした後ここに来たのだ。で、優希はお菓子を貰ってご機嫌そうに食べている。

ちなみに服は何故か保険医の川井先生が用意していたゴスロリ風の服を着せている。てか、何で持つてるんだあの先生、それ以前になんで幼児サイズの服を持っているんだ………謎だ。

「よかった………」

「一時はどうなるかと思ったよ………」

「どのくらいで元に戻るんだ姉さん」

て、そつだよどのくらいで戻るんだ。二日三日くらいならいいんだけど。この前は一日だったしな。大丈夫だろ……。

「ん、半年かな？」

………え？

「……束、今なんて言った」

「半年だよ、ゆー君が元に戻るのは」

な………！

「………なんだって………っ!?」「………」

「………どういことだ束………!」「」

「ん、ホントは一週間ほどで死滅するはずだったんだけど変異したナノマシンが長生きになちゃってねえ、死滅するまで半年になっちゃったんだよ」

は、半年って………ということは半年間優希はずっと幼児のままなのか！？

「………どうにかできないのか」

「できるよ」

「本当ですか姉さん！」

で、できるのか。だったらよかった。

「うん、でも戻さなくていいじゃん」

え？

「だって、ゆー君可愛いし」

「？」

「な、何を言ってるんですか姉さん！」

「そうですよ！」

「え」

えーってこの人は！

「おい、束」

「ん？何かなちーちゃん？」

「ん？どうしたんだ千冬姉・・・東さんをガツンと叱るのか？」

「いいのかそんなことを言っていて」

「ん？どういうことかな？」

「何が言いたんだ千冬姉は・・・？」

「半年後、優希が元に戻ったときにこのことを話したらどうなると思う？」

「ま、まさか！？」

「そうだ、あいつは度が過ぎた悪戯に対してはかなり怒るからな。半年後元に戻ったお前にきつとこつ言っただろうな」

『束姉なんて大嫌い！』

「ひ、ヒィィィィィィィ！？！？ど、どうすればいいのちーち

「やん！」

「早く戻るのが一番だろう、そうすれば優希も許してくれるだろう」

「も、戻さない！早くゆー君を戻さない！！」

凄く動揺しているな束さん、まあ昔もあったよなこんなこと。

束さんが優希を驚かせようとちよつとした悪戯を仕掛けたんだ。

まあ、何があったのかは知らないけど、その日から一週間、優希は束さんと一切口を利かなかったらしい。

優希を溺愛している束さんからすれば途轍もなくやばいことなんだろうな。

「じゃ、じゃあ。なるべく早くアンチプログラムを作ってくるから！ゆー君またね！！」

優希に手を振った後凄まじい勢いで学食から出て行った束さんだった。

「・・・・・・・・・・はあ」

「お疲れ様です。それと姉がすみません・・・・・・・・・・」

「別に構わん、もう慣れた」

千冬姉、束さんとの付き合い長いもんな今の年齢が二十ガスッ・・・・・・・・・・ウゴオ！？

「何か今失礼なことを考えなかったか織斑？」

「な、何も考えていません！」

「やっぱ女って絶対に読心術をマスターしてるだろう、デフォルトで！」

「さて、とりあえず私は戻り篠ノ乃弟のことを報告してくる。後はお前たちで決めておけ」

「え？決める」

「あの教官、決めるとは何のことですか？」

「何をだと、篠ノ之弟のことに決まっているだろう誰が世話するか決めておけ。後、誰の部屋にするのかもな。では私は行くぞ」

「『『『『お疲れ様でした』』』』」

千冬姉が学食を去った、すると……………。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

「『『……………』』」

「箒とシャルロット、ラウラの雰囲気ガラッと変わった、な、何だ景色が歪んで見えるぞ！？」

「優希の世話は『姉』の私が見よう」

「うっん、僕たちが見るよ。箒にはルームメイトの人がいて迷惑になっちゃうじゃない」

「その分私たちは同じ部屋だからな、何の問題は無い」

こ、コエー！三人とも笑ってるんだけど目が笑ってねえ！てか、三人とも手には武器を持って既に戦闘準備バッチリじゃねえかよ！！学食を戦場にするつもりか！

「邪魔をするなら切り伏せるぞ」

「やれるものならやってみれば」

「簡単にはいかんぞ」

だから止める！………ってあれ？

「………いざっ！」「」

クイクイ

「ん？」

「ゆ、優希？」

さっきまでお菓子を食べていた優希がいつの間にかラウラのズボンを引いていた。

「ど、どうしたのだ」

「けんか？」

「「「え？」」「」

「けんか、めー」

「い、いや、喧嘩じゃなくてだな……」

「めー!」

おお、ラウラがうつろたえてるぞ!。やはりラウラも子供には弱いみたいだな。

「「「……」」」

「めー!」

「「「はい……」」」

お、収まった、さすが子供のピュアパワー。殺気立った三人を一気に沈めたぞ!

「あー、とりあえず飯食いに行かねえか? 腹減ったし」

「そ、そうですね。時間もちょうどいいころですし」

セシリアも慌てて合いの手を入れる。とりあえず場を落ち着かせないと……。

「そうだな」

「そうしようか」

「早くしないと混むしな」

ふう．．．．．何とかなったか。

「じゃあ、優希は私の膝に．．．」

「それは僕の役目だよ」

「嫁の面倒は私が見る、お前たちは引っ込んでいろ」

ってまた始まった！？なんでそんなことばっかりなんだよ！

「けんか、めー！」

「『はい．．．．．』」

はあ．．．．．もう疲れたよ。

この日から優希の幼児生活が始まったのであった。俺の胃が持てばいいのだが．．．．．。

**番外編　みにみにたいむ？（後書き）**

幼児化させましたwww

番外編を書くにあたって協力してくださったエドワード・ニューゲート様まことにありがとうございます。

予定としては三部作の予定ですがもしかしたら多くなるかもしれません。

それと五十八話のあとがきで原作七巻と書きましたが原作六巻でしたので訂正させてもらいます。

それでは最近テイルズの最新作が面白すぎて寝不足な作者でした。また次回の更新で。

番外編　みにみにたいむ？　二話目（前書き）

ぐ　gg da da だ　．．．．．。

とりあえずどつぞ　．．．．．。

番外編　みにみにたいむ？　二話目

「なるほど、そういうことがあったのね」

「ああ、そうなんだよ」

何とか席について食事をとれるようになった。あの後何度も優希を巡っては戦闘が勃発しそうになっでは優希が叱りの繰り返しで大変だった。でも何度も繰り返し返すせいか遂には優希が泣き出しそうになりあやすのが大変だったぜ。・・・・まあお菓子をやらすぐには機嫌を直したかな。

で、俺は先ほど合流した鈴に説明している。

「でも優希も大変よね、篠ノ之博士に振り回されて」

「？」

「って、今の優希に言っても意味ないか」

と言いながら鈴はラーメンをまた啜る。

「でも、大変なのは一夏も同じよね」

「へ？何でだ」

意味がわからんぞ。てか、既に大変なんだが。

「何って、あんた優希と同じ部屋でしょ。世話も大変じゃん」

「や、ヤメ口鈴！その話をするな！！」

「へ？」

いま、そんな話をしたらあいつらがまた……………！

「「「一夏……………」」」

「は、はい……………」

肩と頭に食い込む手が痛い……………ほ、骨が折れる！

「「「優希のことは……………」」」

「は、はいっ！みなさまに任せます！！」

俺だって命が惜しいのさ、だからこんな所では死ねない。てか死にたくねえ！

「さすが一夏だ、話がわかる」

「命拾いしたね」

「懸命な奴ほど生きていられるぞ」

……………断ってたら俺一体どうなったんだ。

「ということで優希は私の部屋で面倒を見るぞ」

「何がというわけなのかな筈。優希は僕たちの部屋で面倒見るよ」

「そうだ」

また始まったよ……でもまあ優希がいるから問題は無いだろ・  
……。

「すー……すー……」

ね、寝てやがるー！？あれか、腹いっぱいになったから眠  
くなっちゃったのか！？

「寝言は寝てから言え、二人とも……（チャキッ）」

「箒こそ……（ガシヨッ）」

「邪魔だ……（シュラッ）」

や、やや、ヤバイ既に臨戦態勢に入ってやがる、どうすればいい  
んだ。頼みの優希はすっかりと眠っているし。力づくで止めるのは  
無理に決まっている！

「せ、セシリア、鈴何とかしてくれ！」

「む、無理言わないで下さいまし！あの三人を止めようだななんて」

「命がいくつあっても足りないわよ！」

だよな……どうすればいいんだ。

「あら？どうしたの」

「え？た、楯無さん！」

何でここにいるんだ、ここは一年の学食なのに……って、そんなことよりも助かった！学園最強の生徒会長だこの状況を何とかしてくれるかもしれない！

「た、楯無さんお願いが……」

「え？何なに、一夏君のお願い？いいわよ」なんでも……  
・無理」

「無理なのかよ！？てか何も言つてませんよ！」

「あの状態の三人を抑えるなんていくら私でも無理よ！特に箒ちゃんか……！」

く、くそ、楯無さんでも無理か！このままじゃ学食が崩壊の運命を辿ることに！

「あれ？ねえ一夏君」

「何ですか、それよりもこの状況をどうにかしないと……  
！」

「優希君どこに行ったの？」

「え？」

優希が寝ていたソファーを見るが優希の姿はなかった。

「ゆ、優希がない!？」

さっきまでそこにいたのに!

「さ、さっきまでそこで寝てたはずよね」

「ええ、そこにソファで」

優希がいなければあいつらを止めることは不可能なのに!

「おい!お前ら」

「「「なんだ(何)?」「」」

ギロツとこつちを見る三人、蛇に睨まれた蛙ってこういう気分な  
んだろうな。でもそんなことより。

「優希がいなくなった!」

「「な、何だって!？」」

「う、うそ!？」

「ここにいたはずなのにいないんだよ!」

優希がいたはずのソファを指差す俺。

「い、いつの間に・・・」

「気配を感じなかったぞ……さすが優希だ」

「そんなことよりも探さないといっ」

「「ああ！」」

三人は武器を投げ捨て学食から出て行った。さっきまで争う寸前だったのに凄い団結力だな、オイ。

「一夏さん、私たちも探さないといっ！」

「あ、ああ」

子供の優希を一人にするのは危険だ、早く見つけ出さないといっ！

「……………ハア」

上手くいかない。私の専用機『打鉄式』の調整が。この作業だけでも数週間過ぎているのでできない。やっぱり一人で完成させるなんて……………。

「……………ダメ、絶対に完成させる」

諦めない、あの人は一人で完成させたんだ。私だって……………

。

「子供……?」

整備室の開いている入り口から小さな子供が歩いているのが見えた。何で子供がここに……。スパイ? なわけないか。でも何で……。? とりあえず様子を見てみよう。

「……………」

「う? う?」

何か辺りを見渡しているけど、探し物? それとも迷子?

「う、う~~~~」

辺りを見渡した後泣き出しそうになった。迷子みたい…………。

「だい、じょうぶ?」

「う、う~~~~!」

「あ、ちよつと……………」

泣きそうになった子に声をかけるとこちらに振り向き抱きついてきた。

「ヒック…………グスッ」

「あ、う……………」

小さい子供なんてどうあやせばいいのかわからなく、私もうつたえるしかなかった。

「よ、よし、よし………」

とりあえず頭を撫でてみた。子供をあやすときはこれがいいはずだと思う。

「う、うう」

「よし、よし」

「うにゅ」

頭を撫でられていくと目を細めていく、どうやら泣き出さないですんだみたい。

「どこから、来たの？」

「………」

「わからないの？」

「………（コクコク）」

どうやら迷子なのは確定みたい、でも本当にどこから来たんだろう。IS学園に子供が入れるわけがないし……。

「？」

来客の子供なのかな。とりあえず職員室に連れて行こう。

「あれ？かんちゃんだあ」

「本音」

私をかんちゃんなんて呼ぶのは幼馴染の本音だけだ。でも丁度よかつたこの子のことを頼もう。

「本音この子、お願い……………」

「ほえ、迷子？」

「うん、職員室までお願い」

逃げるみたいで悪いけど、整備室に戻らなければいけない。打鉄  
式式を置いたままだ。

「いいよ」

「お願い……………」

握っていた手を離して本音に渡す。

「？」

「……………バイバイ」

私は小さく手を振って、整備室に戻った。後ろを振り返るとあの

子も手を小さく振っていたのだった。

「んゝ、じゃあ職員室に行こうか」

「ん」

かんちゃんから小さな子を受け取ってから職員室に向かうことになったんだけどこの子の顔どこかで見たような……。

「あ、ゆーゆーだあゝ！」

「ゆーゆー？」

カワイイ格好してたからぜんぜん気づかなかったよ。ということは今おりむー達が探してんじゃないのかな？ だったら届けないとね。でもどこにいるんだろう？

「？」

「んゝ……お菓子食べるゝ？」

「ん！」

袖の中からポツ。ーを取り出してゆーゆーの口に持っていく。す

るとゆーゆーはリスみたいにカリカリと食べていく、カワイイな。」

「じゃー行こうか。」

「ん。」

ゆーゆーを抱っこして歩き出す。とりあえずかんちゃんが言ったとおり職員室に行ったほうがいいよね。」

「し、失礼します」

「あれ？織斑君じゃないですかどうしたんですかこんな時間に？」

「あ、あの織斑先生は……」

「織斑先生ですか？先ほど寮に向かいましたけど」

いないのか、優希がいなくなったことを千冬姉に伝えに来たんだけどすれ違ったのか。

「何か急な用件ですか？よければ私が伝えますけど」

「い、いえ大丈夫で……」

いや、待てよ山田先生も教師なんだ、ちゃんと対応してくれるはずだ。

「や、山田先生実は……………」

「え？篠ノ之君が行方不明！？」

「はい、少し目を離れた隙に……………今、手分けして探しているんですけど」

要所要所を掻い摘んで説明していく。

「わかりました、とりあえず子供を見つけたら職員室に連れてくるようにと放送を入れますね」

「ありがとうございます」

放送を入れてもらえるならすぐに見つかるだろう。山田先生もやっぱ先生なんだよな頼りになるぜ。

「じゃあ、放送を入れますので少し待ってくださいn……………」

「失礼しまゝす」

ん？この間の伸びた話し方は……………。

「あれ？のほほんさん……………って優希！？」

「あ、おりむーだ。ちょうどよかったよ」

職員室に入ってきたのは優希を抱っこしたのはほほんさんだった。

「はい、お届けもの」

抱っこした優希を差し出した。

「スー……スー……」

「寝ちゃってますね」

「ええ」

たくっ、心配かけやがって。

「とりあえず箒たちにメールするか」

「そうしたほうがいいですね」

えっととりあえず『優希は見つかったぞ、今職員室にいる』っと簡単でいいか。送信っと。

「これで大丈夫だ」

ガラッ！バンッ！！

「」「優希！！」「」

はやっ！？てか今メール送ったばかりだぞ、なんでもう来てんだよ！

「う、にゅー……」

優希も起きたか。

「優希、大丈夫か？」

「怪我とか無い？」

「何もされなかったか？」

「??」

みんな心配してるのにこいつは何もわかってないみたいだな・・・  
・・・暢気なもんだ。

「大丈夫みたいだな・・・」

「ふぁく・・・んにゅくくく」

「眠そうだな」

「子供だからね、たくさん眠るんだよ」

ホントよく寝るよな優希。まあ、何度も途中で起こされてるしな、  
寝たりないんだろ。

「では戻るぞ優希」

「ちょっと待って箒、優希をどこに連れて行くつもり？」

あれ？このやり取りまさか・・・。

「どこって、私の部屋に決まっている」

「何をふざけたことを……優希は私たちの部屋に行くのだ」

「そっだよ」

「何度も言わせるな、優希は私の部屋で面倒を見る」

「…………やるのか」

「相手になるよ…………」

ま、またかよ！てかここでやるなよ！ここ職員室なんだぞ。

「あ、あわわ！？」

山田先生は役に立ちそうにないし…………積んだか。  
バシンッ！<sup>x3</sup>

「「「アグウッ！？」」」

「何をやっているかこの馬鹿者ども」

ち、千冬姉、助かった…………。

「まったく戻ってみれば職員室で騒ぎおって、指導が必要か？」

「「「け、結構です！」」」

千冬姉の指導…………地獄しか見えないな。

「はぁ．．．．先ほど東から連絡が来てな優希を治せるナノマシンは三日後には完成するそうだ。それまではお前たちが世話をしろよ」

「わかりました」

「よかったね、優希」

「スー．．．．スー．．．．」

「寝たか．．．．」

また寝たのか、よく寝るなこいつ。

「では私の部屋に．．．．」

「「纂．．．．．」」

「やるか」

バシンッ  
× 3

「学習能力が無いのかお前たちは」

「「「っゝゝゝゝ．．．．す、すみません」」」

はぁ．．．．これが後三日は続くのか？勘弁してくれよ。

「今日は篠ノ之の部屋に泊める。そして明日はデュノアとボーデヴ

イツヒ達の部屋に交代で泊める。いいな？文句があるなら聞こつ」

「「「ありません」「」」

いや、出席簿を構えながら言われたら文句なんて言えねえよ千冬姉、それは脅迫とも言つぞ。まあ、そのことを言ったら俺が叩かれそうだから止めておくけど。

「ならさつさと寮に戻れ」

「「「「はい」「」」」

寝ている優希を抱えて俺達は職員室を出た。はぁ・・・ようやく落ち着いたな。

「それでは私は部屋に戻るぞ、優希を寝かせないといけないのでな」

「おう」

「うゝ第部屋まで抱っこさせてくれない？」

「わ、私にも」

「ダメだ、明日しろ」

「「「ええゝ」「」」

はぁ・・・今日は疲れた、俺も早く寝よう。

「でも、明日も・・・俺大丈夫かな」

「骨は拾ってあげるよ、おりむー」

そこは助けてくれよ、のほほんさん。

こうして優希幼児化生活一日目が終わったのであった。

~~~~~おまけ~~~~~

黒ウサギ部隊

「グハッ！」

「え？た、大尉！？ど、どうしたのですか！しっかりしてください。
え、衛生兵！」

「だ、ダメだ……人を呼ぶな、あれは見では……ガクッ」

「大尉！？あれって……グハッ！」

「ちょ、どうしたのよ……グハッ！」

「何が（ry……グハッ！」

~~~~~二十分後~~~~~

「た、大変です指令！シュバルツェア・ハーゼ部隊が全滅です！」

「な、何があつた!？」

「わかりません、ですが部隊員全員が鼻から血を流して倒れている  
とのことです」

「新手の生物兵器か!とりあえず基地内に第一種戦闘配置、襲撃に  
備えろ!」

「了解!」

「まったく何が起こっているのだ……む、何だこの映像デー  
タは……グハッ!」

「失礼しま……し、指令!？」

この日、ドイツ軍某基地スタッフの八割が鼻から出血しながら気  
絶するという謎の事件が起きた。原因は不明なのだが、気絶した隊  
員及びスタッフは全員口を揃えて

「幼児……萌え」

と言ったそうだ。む、何だこの映像ファイルは……?グ  
ハッ!

番外編　みにみにたいむ？　二話目（後書き）

ggd ggdでした、すみません。

今回はなんとなく簪を出してみました。でもものほほんの簪の呼びかたってこれでよかったけ？まあ、後で確認しておこう。

実は作者とんでもない間違い、誤字をしていました、それは・・・

篠ノ之を篠ノ乃と書いていました。

恥ずかしい、穴があつたら入って埋めてもらいたい・・・・・・。  
現在、全話、修正中ですが量が多いため時間がかかりそうです。それにしても恥ずかしい・・・・・・。

と、とりあえず今回はここまでです。では、次回で



## 番外編　みにみにたいむ？　三話目

優希が幼児化して四日目、ホント色々あったよ。

### 二日目

「キヤー！可愛い〜〜？」

「これ、本当に篠ノ之君？」

「ハアハアハアハアハア」

朝、授業があるので俺達は教室に行くが優希はどうすればいいという話しになった。本当だったら職員室や保健室に預けるのがいいんだけど、優希が…………。

「やー！」

「うう、優希、いうことを聞いてくれ」

「やあー！」

保健室に預けようとしたのだけど優希が駄々を捏ねるのだ。これには第達も困り果てている、でもどうしたんだ優希は小さい頃もこんな我侬を言う奴じゃなかったのに…………。

「優希君…………ハアハア、ハアハア」

「うう〜〜」

……………そういうことか。これが原因か。

「行こうぜ等」

「ああ、さあ行くぞ優希」

「ん」

「え、ちょ、優希くーん！」

と、言うわけだ。あのまま優希を保健室においておいたら大変なことになる気がした。IS学園って危ない奴が多いような……き、気のせいだよな。

「優希君お菓子食べる？」

「ん」

「カワイイ？リスみたい」

「写真、写真！」

「ハアハア、ハアハア、ハアハア！」

それにしても優希、人気だな。やっぱり子供って可愛がられるんだよな。

授業中は大人しくしているし千冬姉は文句言わないし。問題はない、でも……。

「じゃあ、この問題を……織斑君、答えてください」

「え、えっと……」

「ん、わかりませんか。じゃあ、他には」

「ん！」

「え、えつと……」

「ん！」

「じゃ、じゃあ篠ノ之君」

「ぴーあいしーのしこうせいへのんこうのもんだいです」

「え？……せ、正解、です」

「ん！」

小さくなくても頭は良いんだよなコイツ。でも、答えられなかった俺たちの立場を考えてくれ。

### 三日目

「お兄様……？」

「にゃ……？」

今日は土曜日だから授業も早く終わり、ゆっくりできると思ってたんだけど。優希の従姉の舞華ちゃんがやってきた。

「あらあら、カワイイわね……」

「にゃう」

さらには優希の叔母さんまで来た。どうやらシャルロットが優希のことを連絡したので様子を見に来たらしい。

「お持ち帰りしたいです」

「だ、駄目だ！そんなこと私が許さん！」

「ええ」

持ち帰りって……優希、すごい人気だな。昨日は優希を見にいろんなクラスから生徒が来て教室前は大変だったし。

「ならこうしよう、持ち帰らないけど私たちの家に行きましょう。そしてそこで撮影会をするの。衣装は沢山あるわよ」

おいおい、撮影会って……第たちがそんなことを許すとても。

「行きましょう」

って、おい！？

「交渉成立」じゃあ、行きましょう」

「こつちですよ兄様。家には沢山美味しいお菓子がありますからね」

「ん」

優希もお菓子で釣られてしまっし・・・まあ子供だから仕方ないか？今でもお菓子に目がないしなコイツ。

「じゃあ、俺は部屋でゆっくりしておくよ」

ここ二日でかなり疲れたから休ませてくれ。

「さあ、行くぞー夏」

「え？」

「付き合え」

「ちょ・・・」

「もちろん手伝ってくれるよね」

「おま・・・」

「」「行くぞ（よ）」「」

「俺の休日ー！ー！」

こんなことがあったんだよ。あの後には優希の写真撮影のためにレフ板持たされたり、雑用させられたり・・・疲れがまったく取れねえよ。むしろ増えたよ畜生！

でもそれも今日で終わりだ。束さんの言っていたアンチプログラ

ムが入ったナノマシンが無事完成したみたいで今向かっているとのことだ。

「これで優希は元に戻るな」

「そうだな」

「でも、少し惜しい気がする・・・」

「だがこのままなのも問題がある」

「そうだよな」

みんな迷惑はしていないがIS学園は高校なのだいつまで幼児を置いておくわけにいかないしな。

「・・・来たみたいだな」

空を見上げると凄い勢いでエンジンが落ちてきた、異様な光景なのに何も思わない。俺も慣れたもんだな。

ズドーーーーンッ！

「ゆーーーーーくーーーーーん!!」

ニンジン型ロケットから飛び出してきた束さんはすぐさま優希に抱きついたのだった。

「ねえね!!」

「あーーーー二日ぶりのゆー君だよ、会いたかったよぉ」

「ん〜」

「で、束。できたのか」

「うん、モチのロンだよーちゃん！じゃじゃーんコレだよ〜」

束さんはその豊満な胸の谷間に手を突っ込み何かを取り出し・・・  
ドシュッ

「目があー！ー！ー！？」

「何を見ているのだ一夏」

「不潔ですわよ一夏さん」

「殺す」

な、何故だ・・・てか鈴、お前物騒すぎるだろ！

「何をやっている馬鹿が・・・」

「ん〜？いつくんどうかしたの？」

「な、なんでもありませんので続けてください・・・」

く、くそ・・・何も見えない・・・。

「そっか。で、コレがゆー君を戻すためのナノマシンだよ〜」

「そうか」

「これで優希は元に戻るんですね、姉さん」

「うん、半日ほど時間がかかるけどバッチリ戻るよ」

ほっ、よかったぜ。さすが束さん、やることはしっかりとやるよ。

「でも・・・本当に戻しちゃうの？」

「当たり前だ」

「ブーブー！せめて写真くらい撮らせてよ」

「そんなことする暇があったら早く戻せ」

「えー」

と、駄々を捏ねる束さん、子供みtain人だなホント・・・・・・・・。

「あの篠ノ之博士」

「ん？何金髪、束さんは君みtainな外人には用はないんだけど」

あ、相変わらず興味のない人間には毒舌だな束さん・・・・でも何でシャルロットは束さんに話しかけたんだ？

「えっと、優希の写真が欲しいんですたらこんなのがあるんですけど・・・・・・・・」

「こ、これは！」

ん？何を見せたんだシャルロットのやつ、束さんがあそこまで喰いつくなんて珍しいな。

「どうです？」

「す、素晴らしいよ。ここまで愛らしいのは久々に見たよ」

「それが気に入ったならこんなのもあるぞ」

今度はラウラも混じった！な、何を見せてんだ？こっからじゃまたく見えない、気になるぞ！

「おお、こ、コレも素晴らしいよ。中々やるね銀髪」

「篠ノ之博士、こんなのも……」

「お……！」

・  
・  
・

「ふゝ満足、満足♪いい物を見せてもらったよ♪君たちの名前なんだっけ？」

「シャルロット・デュノアです」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「うん。シャルちゃんにラウちゃんだね。覚えておくよ」

な、何があつたんだ・・・束さんが人の名前を覚えるなんて！  
どんな魔法を使ったんだあの二人。

「話は終わったか」

「うん、終わったよー！」

「じゃあ、やれ」

「アイアイサー」

なんか千冬姉がやれっていうと殺れとしか聞こえるのは気のせい  
じゃない気があつ！？

「何か言いたそうだな、織斑」

「何でもありません、ママ」

知ってたか、女性の上官に対してはママなんだぜ。

「じゃあ、ゆー君。少し大人しくしててね」

「ん」

「いいじ、いいじっ」とりゃー」

「にゅ！？みゅ・・・・・・・・」

ポテン

前と同じ無針注射をされた優希は束さんの方に倒れ、寝息をたてはじめた。

「後は待つだけか」

「そうだよ、効果が出るのは半日くらいだから明日の朝には元に戻ってるはずだよ」

「はぁ・・・・・・・・よかった」

「うん、でも・・・・・・・・」

「もう一日だけあのままでもよかったような・・・・・・・・」

「おいおい何言ってるんだよ三人とも」

たった三日間だけでもあれだけ疲れたんだこれ以上は勘弁してくれ。

「それでは織斑、篠ノ之を部屋まで運んでいけ」

「はい。よっと・・・・・・・・」

眠った優希をおんぶする。

「送ろう」

「僕も行くよ」

「もちろん私もな」

「私も行きますわ」

「私も」

全員付いてくんのかよ。

「別にいいんだがな．．．まあいいか。行こうぜ」

計七名の大所帯．．．やっぱりらないんじゃないのか。

「スー．．．スー．．．」

騒動の中心人物は気持ちよさそうに眠っちまってるし。  
明日は優希に飯を奢らせよう、そうしよう。

「．．．．．」

やっぱり俺、疲れてんのかな．．．．．。目の前に全裸の金髪  
美少女がいるのだが．．．．．しかも、前に見たことのある娘だし。

「優希．．．．．」

「何、一夏．．．．．」

優希って呼んだら、普通に受け答えたし。

「とりあえず前を隠せ」

「うん」

シーツを体に巻く優希、とりあえずはこれでいいだろう。

「一夏、僕昨日までの記憶が無いんだけど、何があったの？」

「ああ、教えてやるよ。でも………」

ドォーーーーーン！！

ドアを破壊して入ってきたのは三人の修羅。しかもIS装備というオプシオン付き。

「「「……………一夏」」」

「生きていたらな……………」

「……………さようなら一夏」

「別れの言葉を言うくらいなら助け……ギャーーーー！！」

果たして俺は生きていられるのだろうか。

「~~~~~」

チャララ~~~~チャララ~~~~!

「お、この着信音は!とっつ」

ドガラガシャーッ!ピッ

「ハロハロゆー君!元に戻ったのかな?。だったらお姉ちゃんとよ  
んd.....」

『束姉.....』

「ん?どうしたのかなゆー君。さあ、お姉ちゃんに愛のメッセージ  
をカモンカモン」

『.....大っ嫌い!』

「え?」

『一週間は電話しないで!~!』

ガチャッ.....プー、プー。

「な、なんで~~~~~~~~~?~!」

~~~~オマケ~~~~

蘭堂本社ビル

「「「「「ギヤーーーーー!?!?」」」」」

「まったくお父様つたら……」

「あ、アハハハ……」

今日も蘭堂社は平和?であつた。

番外編　みにみにたいむ？　三話目（後書き）

お、終わりました。番外編　みにみにたいむはこれで終わりです。

次はどうしようか一応番外的な話を書こうと思っているのですが・
・・・そうだ

アンケートをとろう

というわけでアンケートをとります。これから書く案の中から選び
投票してください。では・・・・

A　・i fの話、優希の両親が生きていたら。

B　・またしてもi f、優希に双子の妹がいたら。

C　・未来の話？優希とシャルロットのラブラブ生活。

D　・未来の話？ラウラとの結婚式、なのにアクション！？

E・IS学園伝統？行事、生き残れ！サバイバルバトル。

の五本からとりたいと思います。票は一人三票まで同じところに票を全て入れてもいいです。

締め切りは24日までとします。投票お願いいたします。

ちなみに作者にイチャラブ話を書けといわれましても期待しないでくださいよ。ぜ、絶対しないでくださいよ！

それでは今回はここまでです。誤字などがありましたらお気軽にコメントしてください。では次回の更新で。

結果発表！！（前書き）

すみません、今回はストーリーの更新ではありません。

結果発表！！

「結果発表————！！」

「うわっ！？誰ですか貴方は！」

「フフフ……私を誰か忘れたのかい優希よ」

「あ、貴方は作者！」

「そうだ、ISインフィニット・ストラトス——一角獣の輝きの作者……D-5だ！」

「最近新しい小説を書いて読者様の反応に怯えているという作者！」

「シャラップ！！事実だけと言っちゃらめえ————！！？」

——しばらくお待ちください——

「……で、今日は何をしに来たの？」

「ああ、それはだな冒頭でも言ったとおり番外編最後にとったアンケートの結果発表だ！」

「もう出たんですか」

「ああ、常に集計していたからな。結果はこれだ」

結果の書かれた紙を優希に見せる。

「こ、これは……………」

「どうだ凄いだろ、見ていた俺ですら。予想付かなかったよ」

「確かに凄いですね……………」

「では、結果発表といこうか」

「はい！でも、その前に…………アンケートにご協力してくださった皆様、誠にありがとうございました。このアンケートのおかげで悩んでいた作者は次の話を書けるようになりました。ですので……………」

「「アンケートにご協力くださった読者様。誠にありがとうございました！」」

「お礼といっでは何ですが優希はこれからバニーガールの格好になります」

「え？って、うわぁ！？いつの間にか衣装が変わってる！」

バニースーツに黒ストッキング、ウサミミを完備した優希が現れた。

「さあ、結果発表といこう！」

「も、元に戻してえ……………」

~~~~結果発表~~~~

A・ifの話、優希の両親が生きていたら。

3票

B・またしてもif、優希に双子の妹がいたら。

15票

C・未来の話？優希とシャルロットのラブラブ生活。

15票

D・未来の話？ラウラとの結婚式、なのにアクション！？

10票

E・IS学園伝統？行事、生き残れ！サバイバルバトル。

19票

「ということで、アンケートの結果19票獲得したE・IS学園伝統？行事、生き残れ！サバイバルバトルに決定いたしました！」

ドンドンパフパフ！

「接戦でしたね・・・特にB・C・Eが」

「ああ、見てて最後までどれになるか正直わからなかったよ。だが予想外だったのがBだったな。まさかここまで這い上がってくるとは・・・」

「僕に妹がいたらか・・・どんな子なんだろう？」

「簡単に言えば女体が優希の細部が違う版だな。しいていうなら胸が小さいくらいだ、あと金髪」

「へえ、それはそれで見てみたかったな」

「機会があつたら書くかもしれなので待っていてくれ、後Aなんだが予想以上に・・・」

「少ないね・・・パパとママが生きていたらの話だった？」

「ああ、もうちょっとかと思っただが・・・読者様方の趣向には合わなかったか」

「だね。後意外だったのは・・・」

「Dだな・・・Cは予想通りだった」

「解せぬ！」（ラウラ）

「何か聞こえたが気のせいだろう」

「で、決まったのがEか……どんな設定なの？」

「時期的には優希たちが二年の時の話だ。蘭や舞華も登場するぞ」

「へえ、もう書いてるの？」

「ああ、書き始めた。まだ千文字程度しか書けていないがな……  
予定では最低三部の予定だ」

「最低ってことはもっと長くなるかもしれないの？」

「ああ」

「がんばってね作者」

「任せろ！」

「うん、自信満々に話してくれるのはいいけど足、震えてるよ」

「……最近、読者様の反応が怖くてね……新作も書き始めちゃったし」

「途中で失踪するのだけは止めてね」

「それだけはしたくない、それは俺が一番嫌っていることだからな」

「ならがんばろうね」

「うん」

「それでは、結果発表はここまできとなります。ご協力いただいた読者の皆様、ありがとうございました」

「で、いつ位に書きあがりそうなの？」

「で、できれば日曜までは投稿できるようにがんばってみます・・・」

「そう、頑張つてね！」

「では、みなさん。書きあがるまで少々お待ちください。それとこれからも一角獣の輝きをよろしく願いいたします」

「お願いいたします」

「最後に優希君からのサービスが・・・そあい！」

ビリビリ

「ひゃ、ひゃあ！？ストッキングに穴が！？」

「ぐはあっ!?!」

「やった自分が自滅したあーーーー!?!」

## 結果発表！！（後書き）

発表でした。ご協力していただいた皆様、ありがとうございました。  
それと、厚かましいですが私が新しく始めたリリカルなのは小説、魔法少女リリカルなのはStrikers　↳転生したら魔法？がある世界だった

もお暇がありましたら読んでやってください。

番外編は現在執筆中なので少々お待ちください。それではD・5でした。

頼れるのは身体だけ！？ ドキッ IS無しのガチ？バトル ポロリはないよ

書きあげました！タイトルについてのツッコミは受け付けません。

では本編をどうぞ！



「大変ですよ毎日。挑戦者が……」

「あゝ毎日襲撃してくるもん」

「殺されないように箒姉を止めるのが」

「そっちなのか？てか、箒ちゃん何やってるの！」

生徒会長になったら毎日襲撃してくる人がいるんだけど、箒姉がそれを撃退するのだ。それがいつもやり過ぎなので抑えるのが大変なのだ。まあ、たまにだけでも撃退はするよ。

「あ、あはは、大変ね」

「まあ慣れましたけど」

まあ、最近は箒姉も抑えてくれるから楽になってきたんだけどね。

「そっなの」

「はい。で、先輩は何しに来たんですか？」

「だから、様子を見るに……」

「そう言って来たのは今月に入ってもう三回目ですよ」

「そうだったかしら？」

はあ……まあ、この人が来るのは大抵一夏をからかう

のが目的だからな、後は僕を心配してなんだろう。そこはありがたいんだけど騒ぐのは止めてくださいね。

「と、本題に入りましょう」

「ようやくですか・・・とりあえずお茶入れますね。布仏先輩のように美味しくはありませんけどいります?」

「うん、ちよūdあい」

ケトルに入ったお湯を急須に入れてちよつと蒸らす。湯飲みと急須をテーブルに置いて僕も座る。

「で、用件は?」

「うん、これを見て」

ん?これは・・・七年前の書類?内容は・・・。

「特殊空間における生徒の戦闘訓練?」

「簡単に言うとサバイバル訓練ね」

サバイバル訓練だつて何故これを僕に見せるんだ?

「これをやることになりました」

「はい?」

どういうことだ?そんな話先生たちから聞いてないけど・・・。

・・・。

「ああ、この件については生徒会長を交代する前から企画してた物でね。それがようやく承認されたのよ」

新しい書類を出して僕に渡す。中を確認すると内容はサバイバル訓練に関しての企画書だった。

「はあ・・・そういうことは引継ぎの時に話してくださいよ」

「ごめん、忘れてた」

舌をチョロツと出して自分で頭をコツンと叩く。見ててムカつくんで止めてください。

「でも、いきなりこんなこと言われても困りますよ、事前準備だつて何もやってませんし。ていうか、何でそんなことをするんですか？」

企画書には日本政府が所有する自衛隊の訓練島を使うことになっているが。さすがにやりすぎだろうこれは。しかも使用武器はペイント弾を使った実銃・・・いくらなんでもやりすぎだと思う。

「理由は簡単、このIS学園は外部からの襲撃に弱いから」

確かに・・・。

「それとISを操縦するにはここ生徒たちは覚悟が足りない、というよりも兵器を使っているという自覚が足りない。だからよこれは織斑先生を代表とした多くの先生も同意見よ」

「……………去年の一年間でIS学園は何度も襲撃にあった、だけど一部の生徒を除いてはその襲撃の際にはどうすればいいのかも分からずに混乱するだけだった。ラウラが来たときも言っていたがISをファクションか何かと勘違いしている生徒は、恥ずかしなから多い。」

「今回の訓練は実際に武器を持たせて、戦闘の恐ろしさと武器を使うという責任を認識させるためのものなのよ」

「……………」

「実際に昔にやっていたのもそれが目的みたいだったからね、この際に復活させようと思ったのよ」

なるほど……………メリットは多いのかな、自覚を持たせるのと同時に訓練にもなる。

「わかりました、承認しましょう」

「ホント！じゃあ、ここにサインして、後は生徒会長のサインだけなのよ」

「ええ、けどサインするのは他の生徒会メンバーと話し合ってからですよ」

「それでいいわ！じゃあ、ここに書類置いておくからサインして織斑先生に渡しておいて、それじゃあね」

……………行っちゃった。まあ、たまにはこういう全学年参加

型の行事があってもいいかな。さて、もう一回企画書を読み直しておこうか。穴が無いかな綿密にね……。

と、こんなはずだったのだが。どうしてこうなった？ていうか、なんでみんなそんなやる気満々なんだ、驚きもしてないってどういうことだ。

「日時は来週の月曜から木曜の四日間、詳細はこの後教室で配りますので皆さん読んでおいてください」

「今日の朝会はこれで終了とする。それでは一年生から解散」

淡々と説明した先輩はそのまま壇上から降りていった。そして千冬さんがマイクを取り。解散を宣言したのだった。

……どうなっているんだ。これは？

「篠ノ之君！私とチーム組もっ！」

「織斑君、私と！」

「サバゲーの鬼と言われた私と組めば勝利は間違いないわよ！」

生徒会役員は朝会が終わったら職員室に集まり軽くだがサバイ

バル訓練について先生方と軽く打ち合わせして帰ってきたのだが教室に戻るなり僕と一夏は女子の波に飲まれた……な、何なんだこれは!?

「ゆ、優希、これは一体?!」

「わ、わからないけど……前にも同じこと無かったっけ?」

確かタッグトーナメントの時と同じような……。

「静かにせんか!この馬鹿者ども!」

スパパパパパーンッ!!

「……げふう!?」

い、今姿が見えなかった……!さ、さすが千冬さんだ。

「まったく、チーム決めは後にしろ!これからHRを始めるぞ」

はぁ……助かった。後でちゃんとルールブックを読んでおかないと、またさつきみたいなことになりかねないな。

「では、連絡事項だが……」

とりあえず昼休みは生徒会メンバーに集合かけよう。

まあ、今は千冬さんの方に集中しないと、出席簿で叩かれてしまうからね。

時間は過ぎて昼休み、迫り来る女子たちの波を掻い潜つてようやく生徒会室にたどり着けた。でも、誰もいない新メンバーの二人も一夏も、僕が一番乗りかな？

とりあえずお茶の用意して待つておこう。

「すみません、遅れました！」

お茶の準備をしていると、バンツ！とドアを開けて二人にの女子が入ってきた。

「いいよ、僕たちも今来たところだから蘭ちゃん、舞華ちゃん」

そう、僕と一夏以外の新生徒会メンバーの二人は今年の新入生の蘭ちゃんと舞華ちゃんだ。僕が生徒会長になった時、先輩はそのまま辞めてしまい、さらにはのほんさんも辞めてしまったのだ。

彼女は元々更識家の使用人だったから生徒会に入ってたものだから、先輩が辞めたら彼女は

「いる理由がなくなったから辞めるね」

と言って出て行ってしまった。布仏先輩も卒業してしまいいないので残ったのは僕と一夏の二人だけ、完全に人員不足になったのだ。どうにかしてメンバーを補充しなければいけなかったのだ、そこで僕がスカウトしたのがこの二人だ。

蘭ちゃんは前の学校で生徒会長をいていたので大抵の仕事はできるし、舞華ちゃんは学年主席の優等生、二人とも能力的にはまったく問題は無い。……正直言つと一夏よりも仕事ができるのだ。

で、この二人を加えた新生生徒会で、今頑張っているのだ。

「遅れて申し訳ありませんお兄……会長」

「はは、お兄様でいいよ舞華ちゃん」

「わ、分かりましたお兄様……ところで織斑先輩は？」

「ああ、一夏ね。そろそろ来ると思うんだけど……時間もないし始めようか」

大方、箒姉たちに追われてるんだろう。

「「はい」」

三人分のお茶を用意して僕たちは席に着く。

「じゃあ、話を始めようか。議題は今回のサバイバル訓練のことだよ。」

「はい」

「はい、蘭ちゃん何かな？」

「その課題については前に話し合ったと思うんですが何で今……」

「それは、これだよ」

全校生徒に配られたルールブックのページを開く。そこには……

・・・。

「チーム決めについて・・・ですか？」

「そう、その最後の項目を見て」

「何々？なお生徒会に所属するものは生徒会チームとして参加すること！？」

「更識前生徒会長の仕業ですか・・・。」

「そう、やられたよ・・・。」

これに気づいたのは少し前だ、何か細かい字があるなと思って見てみたらこれだよ、先輩にしてやられた。

「ということは、サバイバル訓練のメンバーはもう固定されたんですね？」

「そういうこと。だから今のうちに作戦会議といこうと思ってね・・・後はルールの熟知と仕度」

「仕度？」

「仕度ってどういうことですか、お兄様？使用する道具は全て学園が用意するのではなかったのですか？」

「僕もそう思ってたよ。でもこれ・・・。」

新しいページを開き、指差す。そこには『コスト制の導入』と書

かれていた。

「コスト制？」

「そう、たとえばここを見てここにはメンバー一人のコストが書かれているの」

「本当ですね・・・一般生徒は十ポイント、代表候補生は二十ポイント、という書かれていますね・・・」

「そう、つまりこの二百ポイントをどう使うかがこのサバイバル訓練の肝なんだよ・・・」

「でも、こんな企画書に書かれていませんでしたよ」

「・・・あの人の仕業だろうね。僕たちをからかう為に」

まったく、ややこしいことしないで欲しいよ・・・。

「だからルールの熟知なんですな」

「うん、あの人のことだからね、僕たちの知らないルールがまだ他にも絶対あるはずなんだよ。まずはそれを探し出すことから始めよう。いいね？」

「はい！」

うん、真面目な二人が生徒会に入ってくれてよかったよ。前は僕と布仏先輩で頑張ってたから・・・働かないのが何人かいたし・・・。

「でも、その前にご飯にしましょう。私達お弁当作ってきたんです」

「え？そうなの、でも二人分しかないんじゃない？・・・」

「だ、大丈夫です！少し多めに作ったのでせ、ゆ、優希さんの分もあります・・・」

持ってきた弁当箱・・・というよりも重箱を開ける二人。なんで重箱なんだ？

「じゃあ、ご馳走になろうかな？」

「は、はい！」

「お兄様。お箸と小皿です」

舞華ちゃんから箸と小皿を受け取る。用意がいいな。

「それじゃあ、いただきます」

「いただきます」

さて、しっかりと食べないと、これから忙しくなるぞ・・・。

あ、この玉子焼き美味しい。

それに、勝たなきゃいけない気がして仕方ないんだ。勝たないと身の危険が迫っているような気がして・・・気のせいだといひんだけど。

「お、お味はどうですか？優希さん・・・」

「うん、美味しいよ蘭ちゃん」

「よかったね蘭ちゃん、その玉子焼き何回も焦がして……」

「まゝいかゝゝゝ!」

「あ、ら、蘭ちゃんそ、そこはイタタタッ……!」

「いわないって約束でしょ……!」

「ご、ごめん蘭ちゃん!」

仲いいな、ホント。でも食べてる時は騒がないようにね。  
こうして昼休みは過ぎていくのだった……。

「た、助けてくれ……!」

「……待って……! 織斑くう……ん!」

「イヤア……!」

一夏が戻ってきたのは昼休みが終わるギリギリのことだったみたいだ、しかも昼抜きで。ご愁傷様。

頼れるのは身体だけ！？ ドキッ IS無しのガチ？バトル ポロリはないよ

設定については二年生の優希です。生徒会長のくだりはある意味I  
F的なことなので確定ではありません。

今回は導入部だけなので内容は薄いです。この調子でいったら四話  
ほどになるのかな？まあ、それは更新状況によりますね。

それでは今回はここまで、次回の更新で！

頼れるのは身体だけ！？ ドキッ IS無しのガチ？バトル ポロリはないよ

書きあげました！書いていて自分でも驚くくらいペースが早いです。いつもこのくらいだといいいんですけどね…………。

では、本編どうぞ！

頼れるのは身体だけ！？ ドキッ IS無しのガチ？バトル ポロリはないよ

「じゃあ、確認できたルールを纏めてみよう」

「はい」

・訓練時間は朝の七時から午後の七時までの十二時間

・期間は月曜日から木曜日までの四日間とする

・訓練時間以外の敵チームへの攻撃を一切禁じる。なおこれを破つたものは即失格とみなす。

・訓練時間以外は島に用意されたキャンプ地点から離れることを禁止する。

・チームからリーダーを選出しておくこと。なお、リーダーが戦死した瞬間そのチームは失格となる。

・メンバー選出はポイント内で編成できるまで。

・武装・食料は学園側が用意する物の中から決めてよい。なお武装、食料はポイントで購入するという形となっている。

「私達が知らないルールは最後の二つくらいですね」

「うん、そうだね。他は全部企画書に書かれていること一緒だ」

「で、次は禁則事項ですね」

・ISの使用は厳禁、使用した場合は即失格となる。

・コストをオーバーしたなどの反則行為をしたチームは武装を没収し参加する。

「ISについては大丈夫だね」

「はい、ページの隅々まで確認しましたがけど小さな文字もありません」

「最後の記述は付け加えられたものですね」

「うん、チーム人数を誤魔化すのは簡単だからね、そのために付け加えたんだろう」

そういうところはちゃんとやるんだよなあ人は、普段仕事しないくせに。」

「でもどうしますかお兄様？コスト制については生徒会に対してのハンデが多すぎます」

「そうなのよね・・・私達のコストが・・・」

そう、このコスト制というのが曲者なのだ。とあるページに生徒会特別ルールというものがありそこにはこのような記述があったのだ。

『生徒会メンバーのコストは以下のものとなる

・生徒会長 五十ポイント

・生徒会副会長 二十ポイント

・その他生徒会役員 十五ポイント

」

と、このようにポイントの大半をメンバー編成に使われているのだ。

「この状態で人数分の武装の確保をしようとするると小型のハンドガン程度しか確保できません。先生方はどうおしゃってましたか？」

「織斑先生に講義したら、『学園最強の称号があるからな、ハンデだ』と言われたよ」

「そうですか……」

「それに舞華。弾薬の量も考えないと、弾薬が無きゃ銃は意味無いわよ。それに食料のことも……」

「そうですね……」

「「「はあ……」」」

くそ……いくらなんでもポイントが少なすぎるよ。ていうか一チームに与えられるポイントが少なすぎ……ん？

「これは……」

「どうかいたしましたか？お兄様」

「この記述……」

「え？『なお、ポイントの上限は設定しない』……どういことですかね？」

これはもしかして……！

「勝機が見えた……」

「「え？」」

「蘭ちゃん、明日の放課後、学園側の食堂の使用許可を貰ってきて」

「え？わ、わかりました」

「舞華ちゃんは放送委員に明日の放課後学食で生徒会から発表があるって伝えてきて」

「わかりました」

「交渉が難しそうだったら僕がするから、頼むよ」

「「は、はい」」

さて、後は千冬さんの説得だな……まあ、このルールブックを読んだ時点で気づいてるだろうからすぐに許可は出るだろう。

「で、でも何をするつもりなんですか。優希さん」



隣で簀巻きにされて商品とでこに書かれた一夏が何か叫んでいた。  
でも聞こえない。

「なんでこうなったんだよ！」

「分かったよ、説明するから大人しくしててね」

えーといつから話せばいいのかな…………。

「お、オークションですか？」

「そう、オークションだよ」

あの後、千冬さんに許可を貰い戻った僕は蘭ちゃんと舞華ちゃんにそう説明した。

「で、でも何故オークションなんですか？今はサバイバル訓練の話だったのに、関係ないんじゃないや…………」

「これがあるんだよね…………ここ見て」

「ここって…………」

「さっき見たポイントの上限は設定しないってやつですよ…………それがどうかしたんですか？」

「このルールブックなんか変じゃない？」

「変……ですか？」

「特に変わったことは無いと思いますが……」

「あるよ、禁止事項が異様に少ないってところがね」

「あ、そ、そういえば……！」

「これだけルールがあるのに禁止事項が異様に少ないです！」

そうなんだよ、これと呼んでいる時に感じた違和感、それは禁止事項のところが異様に少ないんだ。特にポイント制の部分が。

「でも、なんでオークションなんですか？」

「まだ分からない？ここの禁止事項に『ポイントの譲渡は禁止』と書いてないよ」

「「あ！」」

これで気づいたみたいだね。

「な、なるほどそれでオークションなんですネ！」

「そう、実際織斑先生に話したら許可を出した。つまり正解なんだよ」

先輩め、ルールにこんなことを入れたのはこれが目的だったんだ。先輩あんた楽しみたかっただけなんじゃないですかね……。

「でも、何売るんですか？ 売るようなものは……まさかっ！？」

お、もう分かったのか。さすがだ……。

「「お、お兄様の身体を！？」」

ゴンッ！！

い、痛い……頭を打ってしまった……って！

「違っよ！一夏を売るんだよ！！」

「え？ 織斑先輩をですか？」

「そうだよ！ てか生徒会長の僕を売ったらチームが成り立たないでしょ！ てか、身体なんて売らないよ！」

何を言ってるんだこの子たちは！

「そ、そうですよね」

「優希さんがそんなことするわけありませんよね……」

こらそこっ！ 何故財布を取り出している。

「はぁ……一夏を売り出すのは需要があるからだよ、実際一夏と同じチームになろうとクラスにまで押しかけてくるチームがいつ

ばいいんだから」

「そうですね。学園に二人しかいない男子の一人とならチームになりたいと思いますよね」

「一夏さん結構イケメンですし、織斑先生の弟さんですからね。需要は……」

「かなりある」

この方法はやったら模倣する人たちは沢山いるだろうけど。これは一夏という商品があるからできる作戦だ。それに……。

「絶対高額になるからね……」

あの三人が同じチームにいない限り。

「でも、一夏さんを減らしていいんですか？ただでさえ頭数が少ないのに……」

「戦力が低下しますよ」

まあ、それも考えたんだけど……。

「じゃあ、聞くけど。一夏が戦力になると思う？」

「「無いです」」

でしょ。

「というわけ」

「俺の存在意義!？」

だってしょうがないじゃん慢上一致だったんだしさ。それに一夏  
ISの補助が無ければ射撃下手だし。

「大丈夫だよ一夏、ちゃんと生徒会の役に立つんだから。……  
・生贄として」

「チクシヨーーーーー!」

はいはい、商品は黙っててね。蘭ちゃん口にガムテープでも張っ  
ておいて。

「了解です」

「や、止め……」

よし、これで静かになった。

「それでは説明とさせていただきます。まずはサバイバルチームの  
リーダの方、前に出てください」

リーダとなった生徒が間に出てきた。箒姉達は……いるな。



「三十ポイント!!」

鈴が声を上げた。かかった!

「三十三ですわ!」

今度はセシリアさんだ。よしよし、一夏が餌だからかかると思ってたよ。もっと上がるはずだ・・・四十いけばいいんだけど。

「さ、三十五だ!!」

「三十六!」

「三十八ですわ!」

篤姉も参戦して、入点がさらに激しくなる。

「三十九!」

「四十!」

「.....」

よし、目標の四十ポイントだ!最後に入点したのはセシリアさんだ。

「もうありませんか?なかったら四十ポイントで入点したチームとなります」

「……………ない、な。  
パンパンッ！」

「それでは織斑一夏はセシリア・オルコットさんのチームになりました！」

「やりましたわー！ー！」

「くそ！」

「くっ！」

ふう、儲かった儲かった。一夏の分の二十ポイントと四十ポイントを合わせて六十ポイントの余裕ができた。

「オークションはこれで終了です。お疲れ様でしたー」

「ゆ、優希さん。い、一夏さんは……………」

「あ、どうぞ持っていくてください」

簀巻きの一夏をセシリアさんに渡す。

「そ、それでは……………」

「お、おいセシリア、俺をどこに連れて行くつもりだ！どこって……………もう一夏さんったら／＼／＼」

「た、助けてくれ優希！何かピンチだ！ー！」

助けないよーだ。それに僕がやらなくても・・・。

「させるかぁーーーー！！」

「くっ！」

箒姉と鈴がいるし大丈夫でしょう。

「じゃあ、戻ろうか二人とも」

「は、はい」

「え、ちょ、た、助けてくれ！！」

「一夏」

「え？」

己の鈍感さを呪うがいい。

「ガンバ！」

「何だよそれ！つて、止める箒！今真剣が掠つて・・・ギャー  
ーーーー！！？」

おお、一夏がIS無しで飛んでいる！凄い！

「お兄様、行きますよ」

「あ、うん。待ってー」

あー、お腹空いたな。今日の日替わりは何だろう？

「お、覚えてろよーーーー優希ーーーー!!」

聞こえない。

「ラウラ、これって!」

「ああ」

「……………これは絶対に勝たないとね」

「無論だ」

「……………」

ガシッ!

「「ここは手を組もう!」」

「そして……………」

「優希は……………」

「「私たちが守る!!」」

少女たちは目的のために手を組んだのだった。

「そして……え、えへへ」

「そして……ふ、ふふふ」

「I S 学園寮、とある一室からの光景」

ゾクッ!?

「!?!」

「どうかしましたか、お兄様?」

「い、いやなんか悪寒が……」

「風邪ですか?」

熱はないはずなのに……何だったんだ?

「ご自愛くださいね」

「うん、ありがとね舞華ちゃん。．．．あっそつだ舞華ちゃん、ちよつと．．．．．」

「はい、何でしょうか？」

「ちよつと頼みがね．．．．．」

蘭ちゃんに聞こえないように耳元で小声で話す。

「．．．．．を．．．．．して欲しいんだよ」

「え！いいんですか？」

「うん。ちゃんと確認済み」

「わかりました、ママに相談してみます」

「よろしくね」

「え？な、何の話をしているんですか」

「ん？ええとね．．．．．必勝法、かな？」

「必勝法．．．．．ですか？」

「そつ、必勝法。まあ僕に任せて」

頭に？を浮かべている蘭ちゃん、説明は後にしておこつ。

（さあ、会長。勝たせてもらいますよ……！）

そして日は過ぎ、サバイバル訓練の日がやって来た。

頼れるのは身体だけ！？ ドキッ IS無しのガチ？バトル ポロリはないよ

今回の話は出しているのか少し迷いました。一夏のくだりが酷いと思いましたが……もしかしたら書き直すかもしれません。

次回の更新は少し遅れるかもしれませんが。もしかしたら早いかもしれませんけどね。

今回はここまでです。では次回の更新で。

頼れるのは身体だけ！？ ドキッ IS無しのガチ？バトル ポロリはないよ

か、書きあがりました・・・・・・ガクッ

頼れるのは身体だけ！？ ドキッ IS無しのガチ？バトル ポロリはないよ

ここは日本の領海内にできた人工島、主に自衛隊の訓練に使われる訓練施設だ。島には市街地、森林があり戦闘訓練にはぴったりの場所。で今回のサバイバル訓練の実施場所だ。

昨日の昼に船に乗り込み、明け方の今ようやく上陸した。

「す、凄い島だね……」

「南北三キロ、東西二キロの超大型人工島。日本の有名な島だよ」

ニユースにもなったしね、国際的に色々問題があるって言われただけで領海、領空、排他的経済水域が無い島なので問題は無くなっ

た。  
「ああ、いい訓練場になりそうだな……」

「そうだね」

この島で三日間過ごすんだ、船から下りてきた生徒達はみんな浮き足立っている。

『全員、集合！！』

メガホンを持った千冬さんが整列するように命令すると、全員素早く動き始める。

『並んだな……これより手順を説明する！まずは……』

ここで、流れを簡単に言うと。まずは全員が泊まるキャンプ地は三つに分かれていてまで移動しテントを建てる、なお僕が泊まるのは一夏と一緒のテントだ。その後はポイントを武装と弾薬と交換したり作戦を立てることになる時間になる、そして準備が終わったら開始となる。

『以上だ！では移動を開始するぞ。まずは五十番までのチームからだ、移動しろ』

「じゃあ、僕は行くね」

「うん」

「負けないぞ、優希」

「こっちもね」

これは二人からの宣戦布告なんだろうな、でもこっちも負けるつもりは無いよ。絶対に勝つ！

「行って来るね」

「うん」

「ああ」

キャンプ場に向かう集団に着いていく。さて、まずはテントを建てないとな……。

それにアレが届いているといいんだけど……。

「おーい優希、行くぞー」

「あ、うん！」

「優希さん！」

「お兄様」

「あ、蘭ちゃんに舞華ちゃん。もうテントはできた？」

「はい」

「問題ありませんでした」

「そう、よかった」

時刻は十時半、テントを建て終えたチームはこれから状況開始まで武装や弾薬の購入、作戦を立てたりする時間に入る。武装は港でポイントと交換する場所がある。

既にもう動き出したチームもいるようで、港へ向かっている。

「私たちも早く行きましょう。いいのが無くなってしまいますよ！」

「そんなに焦らなくても大丈夫だよ、蘭ちゃん。それにもう装備なら用意してるから」

「へ？」

「舞華ちゃん、もう届いてる？」

「はい、先ほど港に届いたようです」

よし、これで準備は整ったな。

「え？どついつことですか？」

「それは見てからの楽しみ、じゃあ行こうか」

「はい」

「え？ちょ、ちょっと待ってくださいよー！」

そろそろ教えてあげようかな？じゃあゴニョゴニョ……………。

「え、ええ！いいんですかそんなこと！？」

「言ったでしょ、禁止事項が少ないって……………これもありなんだよ」

それに、同じことをしているチームは何組もいるだろうしね……………。

「ま、まさか……………用意させた装備以外を持つてくるなんて」

これが、勝利のための条件だよ。

「ハアハアハア・・・！」

ガサガサ！

私は走る、あの襲撃者から逃げるために。

「ハア・・・ハアハア！！」

撒いたの？後ろから音はしない・・・逃げ切れた・・・の？

「残念、まだ終わってないよ」

「ヒイツ！？」

そ、そんな・・・！？ど、どこにいるの！

「こ、来ないで・・・来ないで！！」

タタタタタタッ！！

私は見えない相手に無我夢中でトリガーを引いた、銃口から吐き出させるペイント弾が周りの木々に当たる。

タタタタッ・・・カタカタカタッ！

「ハアハア・・・」

「そんなのじゃ生き残れないよ・・・」

「!？」

首筋に何かを当てられた、いつの間に!？」

「今自分が持っている物が何なのか自覚するんだ。これは兵器、I Sと同じだ……これを持つ時貴方は覚悟しましたか？」

していなかった、軽い気持ちだった。遊び感覚だった。

「理解したようですね……本当なら次はありません。でもこれは訓練ですその気持ち、恐怖、忘れてはいけませんよ」

そう言った瞬間私の首にぬるりと液体が付着した、これで私は……。

『二年元村、戦死！よって元村チームのものは全員失格!!』

終わったのだった。

「ふう……。」

足速かったな、あの人。確か陸上部の副部長だったけ、そりや速いか……。でも、これで三人目、リーダーばかり狙ってたから三チーム目か。

『ザザッ……お兄様、聞こえますか?』

お、舞華ちゃんか。僕は耳の裏にある小型通信機のスイッチを入れる。

「うん、聞こえるよ。通信機の状態は良好だよ」

「そうですか・・・よかったです。スーツの方はどうですか？」

「ううん、何も問題は無いよ。むしろ凄いね、かなり走ったのに全然疲れてないよ」

「気に入っていただいて良かったです。うちの開発部も喜びます」

「さすが蘭堂だね、マッスルスーツまで高性能だよ」

そう、これが舞華ちゃんに頼んだ物だ。さすがに重火器は頼めないから別の物、つまり身体能力を向上するものを頼んだのだ。蘭ちゃんも舞華ちゃんは身体能力は低くは無いけど他の代表候補生や訓練を受けている者に比べるとやはり戦闘力不足だ、そこで考えたのがコレだ。

蘭堂社製のマッスルスーツだ。実際に自衛隊やレスキューの現場に使われている代物だ、着るだけで身体能力が驚くほど向上するのだ、しかもコレはまだ市場に出ていない最新型だ。

「そっちはどう？」

『問題はありません。今蘭ちゃんと一緒に狙撃ポイントを目指しています』

「そう、気をつけてね。セシリアさんとかと鉢合わせる可能性がある

るから、その時は真っ先に逃げて」

狙撃主として優秀な人だ、狙撃ポイントで遭遇するなんてことは十分にありえることだ。

『わかりました』

「あ、それと蘭ちゃん」

『あ、は、はい!』

通信を蘭ちゃんへと切り替える。緊張してるな……。

「リラックスしてね。大丈夫、いつもどおりにやればいいよ。蘭ちゃんならできるよ」

『優希さん……はいっ!私頑張ります!』

緊張はほぐれたみたいだ、もう大丈夫かな。

「とりあえず二時間後に指定のポイントで合流しよう。わかったね?」

『はい!』

いい返事だ。

「じゃあ、そろそろ通信を切るよ」

『はい、がんばってください!』

ブツッ！と音がし通信は切れた。  
さて……………困まってるな。

「……………」

カサツ、カサカサツと小さいながらも草と服が擦れる音が聞こえる。数は……………。

（一・二の三……………六人か）

数で当てると思ったんだろうな、でも……………。  
ジャコッ！

「学園最強の名は伊達じゃないんだよ……………」  
ドンッ！！

「……………どう？」

「いますね……………」

お兄様との通信から少し経ち、私たちは狙撃ポイントに到着した。  
この島の高台に位置した絶好の狙撃場所です。だから……………。

「いたわ……………」

「いける？」

「ダメ．．．ちょっと遠すぎる」

先客ですね．．．．．オルコット先輩ではありませんので既に狙撃体制になっている方がいた。

「蘭ちゃん、狙えますか？」

「うん、いける」

蘭ちゃんは肩にかけたサイレンサー付きの狙撃銃を構える。この時も音を出さないように注意する。

「．．．．．」

パシユッ！！ビチャッ！

「うぱっ！？」

「え．．．．？て、敵！？」

突然の襲撃でうろたえるもう一人、すぐに逃げないと．．．．。

パシユッ！！ビチャッ！

「あっ！？」

撃たれますよ。

「ふう……」

「お疲れ様、蘭ちゃん」

「このくらいの距離はなんとも無いわよ。でも、この調子だったらここは……」

「使えませんか……」

地図を見る限りじゃ、狙撃場ここくらい無い。後は……。

「蘭ちゃん」

「ん？何、舞華」

倒した、生徒から狙撃銃の弾を貰う蘭ちゃん。ちゃっかりしてますね。

「あそこ、行きませんか？」

「あそこって……そうね、あそこならいいわね」

私が指差した場所、そこはこの島で一番高く険しい山だった。

パンパンッ！

「はい、終わり」

手をはたきながらそう告げる、そして周りにはペイントで汚れた六人の女子たちがいた。

「数で攻めるのはいいけど、もうちょっと連携を強化したほうが良かったね」

「く~~~~~!」

「また負けた……………」

「なんで男なんかに!!」

ん？最後の人どつかで見たことがあるような……………まあいいか。

「じゃあ失格者はキャンプに戻ってくださいね」

とぼとぼとキャンプ場に戻っていく六人を見届け、僕も移動を開始する。

「弾薬は……………まだ余裕だね。時間もまだあるでしょうかな？」

ちよつと予定を早めて、蘭ちゃんたちと合流しようかな？でもな~~~~……………!

ドンッ！先ほどまで立っていた場所に大量のペイント弾が付着した。足は止めずにそのまま走る、こういうのは止まったら負けなんだよ。

「千客万来だね……………」

ジャコン！

ショットガンのポンプを動かし、リロードしながらジャンプし木に昇る。マッスルスーツのおかげでこんな芸当もできるのだ。気配を消して木の上から様子を伺う。

「チツ、外した！」

周囲を警戒しながら出てきたのは鈴だった。しかも持っているのは交換できる装備の中には無いグレネードランチャーだ。まあ弾は着弾したら破裂するペイント弾なんだろうな。

「しかも逃がした……………何なのよあの動き！速すぎよ」

追撃はしないみたいだね……………しかも鈴は僕だって気づいてないみたい。これはチャンスか……………？

「……………」

引くつもりは無いみたいだね……………いくか！  
スー……………ハアー……………っ！！

「っ！？」

ドンツ！ジャコツ、ドンツ！ジャコツ……………  
木から飛び降り鈴を狙いショットガンを二発撃った。

「くっ！？」

鈴は素早く回避運動に入っただので二発とも外れてしまった。でもグレネードランチャーに当たったのでもう使えないはずだ。

「外した！」

「ゆ、優希、あんただったのね！てか、何よその装備は！」

「蘭堂社製のマッスルスーツだよ」

「ま、マッスルスーツって・・・卑怯じゃないのよ！」

「いや、禁止されていないし問題ないよ、それに鈴だってグレネードランチャー使ってるじゃん」

「うぐっ！そ、そんなことはいいのよ、ここで会ったからには勝たせてもらわよ！」

ダンッ！

鈴はそう言いながら脇のホルスターからハンドガンを抜き撃ち放った。

「おっと！それじゃあ勝たせてもらうよ鈴！」

「勝つのは私よー！」

お互いの銃口を相手に向けて動かない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ダンッ！

「くっ!!」

別の場所から銃声が響いた、それを合図に僕たちは動き出したのであった！

「ハアハア・・・!!」

一旦木の陰に隠れ、弾倉を交換し三発発砲すると一発返ってくる。これの繰り返しだ。

「さすがに強いわね・・・優希は」

木を盾にしながらさらに移動する。  
ドンッ！ビチャッ!!

「くっ!!」

ショットガンであの距離から当てるなんてどんな腕してるのよ！それに動きが早すぎるし無駄が無い・・・。このままじゃジリ貧よ、だけど勝機はある！  
タンタンタンッ！

「このまま、持久戦に持ち込めば・・・」

ショットガンの弾は大きいし、携帯できる数は少ない。弾切れに

なるのを待てば！

ドンッ！！

「くっ！？」

む、無茶苦茶よまったく！二人の姉もそうだけどあいつも十分滅茶苦茶よ！

「くそっ！」

「鈴！」

この声は！

「伏せて！！」

ダダダダダダダダダダダッ！！

「つて、うわっ！？」

声の指示通り伏せると私の頭の上を何十発の弾丸が通り過ぎた。これには優希も驚いたみたいで急ぎ木の後ろに隠れた。

「鈴、大丈夫！」

「助かったわティナ！」

声の主は私のチームメイトでありルームメイトのティナだった。その隣では他のチームメイトたちが立て続けに撃ち続けている。

「随分と苦戦してたようだけど……」

「気を付けなさい！相手は優希、生徒会長よ！」

「せ、生徒会長って……！」

ドンッ！ービチャッ！

「きゃっ！？」

しまった、一人やられた！

「木を盾にしながら撃ちなさい！やられるわよ！」

この状態でも当ててくるなんて……やっぱり生徒会長だけあるわ、でもこのままだったらいける！

「それと包囲射撃！ありったけの弾薬を使いなさい、ここで生徒会長を落とすわよ！」

「」「」「了解！」「」「」

優希という強敵がここでないくなればこれからが楽になる、ここでしとめる！

「ヤバイな……これは」

だんだんとだけど包囲が完成してきている。完全に囲まれるのは時間の問題かな……。どうしようかな？

「……………少し、本気でいこうかな」

弾は残り七発にインクの出るラバーナイフ。相手は鈴を含めて五人か……。充分いけるな。  
ジャコン！

「それじゃあ……。行こうか！」

僕は勢いよく木の影から飛び出した。まずは右からだ！  
マッスルスーツの補助もあり一回の跳躍で一番右にいた女生徒の近くの木に飛び乗った。

「え？きやあつ！？」

驚いているうちに一発撃ち無力化する。次！

「そっちに行ったわ！」

こっから確認できるだけで二人、まだ固まっているな。  
木から飛び降り木の合間を縫うように走り接近する、二人は迎撃のために手持ちの銃器で僕を狙うけどジグザグに走っているため当たらない。

「あ、あわわわ…。！」

「は、速い！？」

遅い！ポンプをスライドさせリロードした後、右側にいるほうを狙って無力化する。

「きゃっ！？」

「さ、沙紀！？この！」

だから遅いよ。

腰に付けたナイフホルスターからラバーナイフを引き抜き、心臓の辺りを切りつける。

「あっ！？」

「三人目……」

ナイフをしまつてリロード、おっと！？

「外した！」

「ティナ、距離をとって！！」

鈴と、確かハミルトンさんだったけな、あの二人中々いい連携だな。ちょっとばかり、てこずりそうだな。

ハミルトンさんのアサルトライフルの連射が僕の行動を制限してそのうちに鈴が移動して僕を狙う。僕も応戦するために撃つけどすぐに隠れてしまうので、大して効果はないし残弾も少ない……だったら。

ショットガンを投げ捨てナイフを引き抜く。

「弾切れ、しめたっ！」

「っ！ダメよティナ、それは・・・！」

かかった！

「なっ！？」

「迂闊すぎるよ」

一気に接近してハミルトンさんのライフルを蹴り上げ、そのままナイフでラインを付け彼女を失格にする。

「ティナ！」

失格したハミルトンさんが射線上にいたので鈴は僕を狙えないでいる。そこに僕は。

「ふっ！」

「なっ！？」

持っていたラバーナイフを投げる。まさかの行動にさすがの鈴も思わず仰け反り回避した。でもその隙が・・・。

ジャキッ。

「敗北を招いたんだよ」

ハミルトンさんから奪ったアサルトライフルを鈴に突きつける。

「・・・・・・・・くっ」

「じゃあね鈴」

タンッ！

発砲の乾いた音とともに鈴の顔はペイントまみれになったのだった。

『二年、凰戦死！よって凰チームは失格！！』

「お、覚えてなさいよ・・・優希・・・ガクッ」

悲しいけれどこれって戦争なのね・・・って、スレッ。ーさんが言ってたよ、鈴。

「それじゃあ気をつけてね」

「・・・・・・はい」

鈴を背負い撤退するハミルトンさんたちを見送る。

さて、まずは装備の回収してと・・・ショットガンの残弾は二発か、これ以上の戦闘は止めたほうがいいな、ナイフのインクもほとんど残ってないし。

「そろそろ時間だし、蘭ちゃんたちと合流するか」

合流ポイントに急ぐ。

頼れるのは身体だけ！？ ドキッ IS無しのガチ？バトル ポロリはないよ

今回からガチ戦闘となりました。どうもD-5です。

えーコメントの中で、ルールが知りたいという方が多くいましたので補足を。

・ペイント弾は直撃したら失格、飛び散ったペイントがあったとしても失格にならない。

・人員編成のコストは一般生徒が五ポイント、専用機持ちは一十ポイントとなっています。

・武装、弾薬、食料のコストはこのとおり

ナイフ 十ポイント

ハンドガン 十ポイント

マシンガン 十五ポイント

アサルトライフル 二十ポイント

ショットガン 二十ポイント

e t c . . . .

・弾薬はどの口径も同じで百発で十ポイント

・食料は指定された料理の材料となっていて各自自炊となっている。  
と、このくらいです。また質問や疑問がありましたらコメントに書いてください。

では今回はここまでです。では次回の更新で。

頼れるのは身体だけ！？ ドキッ IS無しのガチ？バトル ポロリはないよ

で、できた……。死にそう、ガクッ……。・

そ、それでは本編……。どうぞ。(チーン)

頼れるのは身体だけ！？ ドキッ IS無しのガチ？バトル ポロリはないよ

周囲を警戒しながら合流ポイントに近づく。お、あれは……。

「おーい二人とも」

「あ、お兄様！」

「優希さん！」

ふう……何とか合流できたね。二人とも被弾も無さそうだし大丈夫だったみたいだね……よかった。

「無事でしたか……」

「大丈夫でしたか？」

「うん、大丈夫だよ。苦戦はしたけど鈴も倒したよ」

おかげで弾薬切れだけだと繋げて言う。

「り、鈴さんをですか！凄いです！」

「強敵を一人減らせましたね」

「うん、でもまだいっぱいいるからね……シャルやラウラにセシリアさん、箒姉、そして更識先輩……油断できないよ」

特に注意しなきゃいけないのはシャルとラウラだあの二人が組ん

でいるんだ、下手したら負けるよ。

「ところでどうしますか？時間も後三十分ですけど……」

「そうだね……戦闘は避けて時間が来るのを待とう、僕の弾薬はもう無いのに近いし」

この状態で戦闘になったらちよつときついかな……まあ、いざというときは二人のどちらかの武器を貸してもらおう。

「じゃあ、行こうか。警戒しながら行こうね」

「はい」

会わないといいんだけどな、ほんと。

残り時間十分の時点で会いましたよ敵に。しかもいっぱい、だけど……

「楽勝、です！」

ざっと十五人、舞華ちゃんが一人で撃退した……

「あ、あはは、まさか舞華ちゃんがここまで強いなんて……」

「だ、代表候補生ですから当然……って、わけありませんよね」

いや、訓練はしたって聞いてたけど、強すぎでしょ舞華ちゃん。しかも全員ナイフだけで倒してるし。まあ弾薬を浪費しないで倒せたのは良かったな、弾もタダじゃなんだし。

『本日のプログラムは終了、各自戦闘を停止しキャンプ地に帰還せよ』

「あ、終わったようですね」

「そうだね、戻ろうか」

これは作戦を練り直さないとな……舞華ちゃんの立ち回りを考えた作戦に。

「ふう……食べたね」

「はい……」

「美味しかったです……」

キャンプ地に戻ったらすぐに食事の準備に入った。このサバイバル訓練は自炊だ。食料をポイントで購入して自分たちで作る。うん、素晴らしいサバイバル生活だね。それにちょっとしたキャンプみたいで楽しいし。

僕たちはオーソドックスにカレーを作った。ルーは僕と蘭ちゃん

が担当してお米は舞華ちゃんが、出来は完璧でとても美味しかった。そして食事も終わったので作戦会議の時間だ。

「さて、明日のことなんだけど。移動の際には細心の注意を払ってね」

「はい！どうしてですか？」

蘭ちゃんは律儀に手を上げて質問してきた。

「今日、戦闘しなかったチームは多分だろうけどトラップを仕掛けてたんだと思う」

「トラップ、ですか」

「そう、ブービートラップをね．．．．交換リストの中に縄やワイヤーってあったでしょ？これはトラップを作るための道具なんだ。これを取ったチームは確実にトラップを仕掛けているはず」

「な、なるほど．．．．」

仕掛けるとしたら十中八九ラウラだろうな．．．．プロの軍人だ、このくらいの物はお手の物だろう。

「わかりました、トラップには注意します。で、明日も別行動にしますか？」

「いや、明日は一緒に行動しよう。今日の戦闘で実力が無いチームは結構落とされたんだ残っているチームは．．．．」

「強いが多いと……」

「おそらく、だろうけどね……。装備も交換したほうがいいね、特に蘭ちゃんのスナイパーライフルだと中距離戦には向かないし。まだポイントに余裕があるから問題は無いよ」

「分かりました、明日交換してきます」

さて、大体の方針は決まったな……。次はつと。

「次はどここの辺りに行くのか話し合おう」

この島の地図を取り出して広げる。そこまで詳しいものではないけど十分使えるものだ。

「今日は森の東側で戦闘した、で明日はこの市街地の方に行こうと思う」

この人口島は中央に市街地のセットが配置されてその周りが森林や山という地形になっている。

「市街地ですか？」

「うん、ここは森に比べて障害物も少なくて、やられやすいところではあるけど。マッスルスーツの性能があれば屋上を飛び移れるし、いけると思うんだよね。それにあえてここに来る人はまず少ない、明日は極力戦闘を避けたほうがいい。弾薬にも限りはあるしね」

いくらポイントに限りがあってもばかすか撃ってたらすぐに無くなってしまふからね……。節約しないと。

「そうですね．．．．私は異論ありません」

「わ、私もです」

「うん、じゃあそうしよう。それじゃあ僕はテントに戻るね」

明日も早いんだししっかり寝ないと。

「はい、お休みなさいませお兄様」

「お休みなさい優希さん」

「うん、お休み二人とも」

さて、しっかり寝とかないとね．．．．明日は十二時間ぶっ通しだから体力を回復しとかないと。

「ただいまゝってあれ？」

一夏がいないな．．．．まだ作戦会議中かな？

「まあいいか、それより寝よう、明日も早いし．．．．」

寝袋に入って、ランプを消して。

「お休みなさい．．．．．」

明日もがんばるぞゝ．．．．．。

「フフフ・・・やっぱり優希くんは優秀ね・・・計画を早めたのは正解だったよね」

「たっちゃん、例の情報広めといたわよ。後、明日優希君たちは市街地方面へ向かうらしいわよ」

「情報収集ありがとう、さーて楽しくなりそうね・・・」

「ふ、フフフフ・・・」

優希に楯無の陰謀が迫っていたのだった。

く翌日く

「ねえ、舞華ちゃん、蘭ちゃん・・・」

人口島の市街地のビルの一 corner、僕たちは隠れていた。

「何でしょうか？」

「何ですか？」

「どうして僕たちに……………」

タタタタタタタタタッ！

「戦力が集中してるのかな？」

ざっと見て四十人ほどいるんだけど……………。

「生徒会長覚悟————っ！」

「うるさい—」

ドンッ！

「ゲハッ！？」

まったくなんでこんなことになったんだ！？アレは一つのチームじゃなくて二、三チームいるな……………どうなってるんだ。よしここは……………。

「ねえ、これはどういうことなのかな、教えてくれない？」

先ほど倒した生徒に聞いてみることにした。

「お、教えないわよ……………」

む、強情だね。って、あれ？どうしたの二人とも、銃なんか構えちゃって……………。

ジャキッ！

「教えて」

「ください」

銃口を女生徒の両米神に当てた。

「こ、答えます!」

「よし」

こ、怖い…………。

「で、なにがあつたの? 教えて」

「そ、その…………生徒会長を倒したら、織斑君と会長のどちらかと交際できるって話が…………」

何それ?

「ど、どういふことですか!」

「誰ですか! そんな戯言を言つたのは!」

「わ、私は友達から聞いただけだから…………」

…………でも、そんな話どこから出たんだ、まずそんなこと先生方から聞いてもないし、承認もされていない。生徒たちのなかで出来た暗黙のルールか…………。

「ありがとう、もう行っていいよ」

「は、はい……」

「……でも、そのせいかな。この生徒の集まりようは……だったら誰かが。」

「誰かが強敵であるお兄様を」

「倒すために情報を流したってことよね……」

そのとおり。でもこんなことするのはあの人くらいだろうね。更識先輩くらいしか……。後、情報を流したのはおそらく識先輩だろう、新聞部のあの人なら可能だろう。

「でもどうします？これだと動こうにも動けませんよ」

「突破するのは難しそうですね……。裏から行けませんか？」

「多分無理だろうね……。さっきいた人数よりも少なくなってるから今移動したんだろね……」

このままじゃ包囲されるだろうな……。アレだけの数を相手にするのはきつそうだな……。だったら……。

タンッ！

「キャアッ!？」

どうしたんだ？悲鳴、今悲鳴が聞こえたような……。

「ど、どこから撃たれたの!？」

「キャッ!？わ、私も……」

「狙撃よ!みんな逃げて!」

狙撃!……まさか会長、僕たちを……。

「ど、どういうことなのでしょう?」

「どうやら、この情報を流した連中は僕たちを餌に使って敵を一網打尽にするつもりだったみたいだね……やってくれるよ」

先輩は……。

「でも、どうしますか?今、私たちも動けば狙撃される危険性があります……」

「……」

どう動こうか……狙撃主の位置が分からないと下手に動けない、でも動かなかつたら何れはやられる……。

「……蘭ちゃん、ここあたりでいい狙撃スポットって分かる?」

「え?狙撃スポットですか?はい、いくつかありますけど……地図で確認しましたし」

「どっ!教えて」

市街地を拡大した地図を取りして蘭ちゃんに渡す。

「ええと、現在地がここですから……」

二箇所、そのどちらかに敵はいるはずだ。

「……狙撃主を狙おう」

「そ、狙撃主をですか？」

「でも、どうやって……」

「普通に行ったらダメだね、でも僕たちの装備の条件ならいけるはずだよ」

「装備？」

「そう、このマッスルスーツならね……」

さあて、覚悟してもらおうか。スナイパーさん……。

「……」

タンッ！

「よしっ！これでリーダー三人目だよたんちゃん！」

「ふう．．．作戦成功ね。薫子ちゃん」

スコープから視線を隣で観測士をしていた薫子ちゃんを見る。今回の作戦は彼女がいなければ成り立たなかったでしょうね。

優希君を餌にして、集まってきた生徒たちを狙い撃つ。成功してよかったわ。

「優希君たちは？まだ動いてないの？」

「ん？ちよつと待ってね．．．．あ、私よ、優希君たちの状況を教えて．．．そう、屋上に向かってる？分かったわ、引き続き監視してて頂戴．．．．たっちゃん」

「ええ、聞いてたわ」

何を考えてるの．．．まさかこつちを狙って？ありえないわ。今日の優希君たちはスナイパーライフルは持ってきてないから反撃できるわけは無い．．．．何を考えているの？

「．．．．とりあえず、あちらに向かいましょう。いやな予感があるわ」

「え、ええ、分かったわ」

．．．．何もなければいいんだけど。

「さて……………始めますか」

「あ、あの本当にやるんですか、優希さん……………」

「さすがに危険では……………」

屋上に着くと僕は準備を始める。蘭ちゃんと舞華ちゃんは止めるように言っ て来るけど。

「大丈夫だよ」

「で、でも……………」

「危険すぎますよ、ビルを飛び越えていくなんて」

僕が考えたのはビルの屋上から屋上を飛び越えていく作戦だ。普通はできないことだけどこのマッスルスーツなら可能だ。それにビル間は三メートル均一にできているので不可能じゃない。

「でも、これくらいやらないとあの人たちを倒すことはできないしね……………それに相手の意表を突くのにこれはこれが一番なんだよ」

「ですけど……………」

「大丈夫だって。僕を信じて」

「……………わかりました」

「絶対に戻ってきてくださいね……………」

「うん」

二人の了承も得たところで行きますか。

「スー……ハァー……っ!!」

ダッ!

全力疾走から僕は思いっきりジャンプした。

「優希君たちの様子はどう?」

狙撃ポイントから仲間のいる場所に着いたら私は近くにいた子に優希君達の様子を聞いてみた。

「あ、楯無に薰子。それがすこし変なのよ……」

「変? どういうこと」

「その、優希君が何か準備体操みたいなこと初めて……何を  
するつもりなのかしら?」

準備体操? まさか優希君、ビルを飛び移るつもりじゃ……  
まさかね。いくら身体能力が優れているからってそんなこと……  
。。

「ちょっと、たっちゃん！優希君なんかクラッキングスタートポーズしてるんだけど!？」

「へ？」

ま、まさか本当に？そんなことできるわけ……………あつ。

「しまった！」

ライフルを急ぎ設置し構える……………こんなこと初歩的なことを忘れるなんて私も落ちたものだわ！

「た、たっちゃん、どうしたの？いきなり構えちゃて」

「来るわ……………」

「へ？」

「優希君はここに来るわ、全員迎撃用意して！」

「い、いや……………それはないでしょ、だってビルの間は三メートルはあるのよそれを超えられるわけが……………」

くっ、いちいち説明する時間も惜しいのにつてに……………。

「いい！優希君が今つけている装備はね……………」

「た、楯無！」

「何!！」

「き、来た・・・・・・・・」

っ、やっぱりか・・・・。

「ビルを飛び越えながら来たよ!？」

「迎撃体制、早く!」

もう逃げれないわね・・・・・・・・ここで迎え撃つ! かかってきなさい、優希君!

頼れるのは身体だけ！？ ドキッ IS無しのガチ？バトル ポロリはないよ

続きます。優希VS楯無、新旧生徒会長対決は。

これ以上やると尺が長くなり過ぎそうなので今回はここで打ち切り  
ました。

それと作者の体力が限界でした……。眠い。

今回はここまでとさせていただきます。それでは次回の更新で……。  
・ガクッ。

頼れるのは身体だけ！？ ドキッ IS無しのガチ？バトル ポロリはないよ

書きあげました！それでは優希対楯無の決着をどうぞ。

頼れるのは身体だけ！？ ドキッ IS無しのガチ？バトル ポロリはないよ

ダンッ！タッタッタッ・・・・・・・・！！

「ふっ！！」

着地と同時に助走をつけてまた跳ぶ。これを繰り返して・・・・・・・・。

「見えた！」

先輩たちのチームが見えてきた、なにやら慌てているようなので意表を突くことには成功したようだ。

「このまま行くっ！」

ダンッ！！全力の跳躍、先輩のいるビルまで後二つ・・・・・・・・！

「っ！？」

脇をペイント弾が通り過ぎた・・・・・・・・撃ってきたか！

チュンッ！チュンッ！！

「チッ！」

まだ距離があるから当たらないけど次のビルに飛び移ったら射程範囲に入るな・・・・・・・・でも止まるわけにはいかない！

「はぁっ！！」

跳躍・・・・・・・・着地！

チュンッ！

着地してからすぐに横にローリングして回避、それから走る！

「次っ！！」

足を止めずに走るが隣のビルから迎撃で凄い弾幕が襲い掛かり僕は一旦遮蔽物になりそうな給水タンクの後ろに隠れた。

（予想以上に弾幕が濃い・・・・・・・・このまま飛び移ろうとしても、ペイント弾が直撃するのが目に見える・・・・・・・・どうする・・・・・・・・・・）

あと少しで白兵戦に持ち込めるんだけどな・・・・・・・・そうだが、これなら・・・・・・・・。

1249

「撃ちかた止め！」

ガチャッ！

・・・・・・・・出てこないわね。諦めたの・・・・・・・・？

「たっちゃん、狙える？」

「無理ね．．．．このビルからじゃ狙えないわ」

これが出てくるまで、我慢比べかしらね．．．．。

「っ！出てきた！」

「射撃開始！」

飛び出してきた優希君はそのまま私達のいるビルに向かってくる、判断ミス？それともやけになったの？．．．．分らないけど、今は撃ち落すことだけを考える！

でも、五人からなる射撃はまったく当たらず、優希君は跳躍体制に入る。

「と、跳ぶわ．．．．！」

「落ち着きなさい！彼はこのまま飛び移ってくる、着地したと同時に一斉射！」

何を考えているのかはわからないけど私達の勝ちよ、優希君．．．．。

ダンッ！！

「なっ！？」

予想通り跳んだ、彼は。でも行き場は．．．．。

ガシャーーンッ！

「しまった、下か！」

屋上の下の階だった、彼はガラス窓を突き破って下の階に飛び込んだのだった。

「や、やってくれるわね優希君……………」

まさか、こんなことになるとはね……………予想外だったわ。でも……………。

「全員、白兵戦用意、来るわよ！」

そう易々と勝たせないわよ……………。

「い、いて……………デコぶつけた……………」

せ、潜入成功、だけど勢いつけすぎたかな……………。でもこれで狙撃の心配は無い。

「さて、行きましようかね」

先輩達は上の屋上にいる、あそこは入り口が一つしか無いはずだから、待ち受けてるだろうな……………どうするか……………。

「ん？これは……………使えそうだね」

ベストのポケットに入った物を取り出して、手短に作戦を立てる僕であった。

「・・・・・・・・・・」

来ないわね・・・・・・・・もしかしてこちらを焦らしているの？それともおびき寄せるため・・・・・・・・どちらにしろ慎重に行かないと・・・・・・・・。

「ま、まだなの・・・・・・・・」

「本当にここから来るの楯無・・・・・・・・」

私はともかく他のみんなの緊張が限界に近い、やはり攻めるしか・・・・・・・・。

「たっちゃん・・・・・・・・」

「ちょっと待つて。今考えて・・・・・・・・」

ガチャ・・・・・・・・。

「「「「「っ！？」」「」「」

ジャキッ！

「「「「「・・・・・・・・」「」「」

ドアが少し開いた、その音に反応して全員照準をドアに合わせるのだけと入ってこない……何を……。

コンツ、コロコロ……。

缶？って、まさかスタングレネード……。ヤバイツ！

「全員、目を閉じ……。」

プシューーーーーー！

け、煙……。スタンじゃなくてスモークグレネード！？ということは……。

「全員撃つて！ドアの方を撃つ……。」

タタタツ！タタタツ！タタタツ！

「キャツ！？」

「し、しまつ……。！？」

「ひゃあっ！？」

さ、三人やられた……。！？

タンツ！

「わひゃあ！？」

薫子ちゃんまで！？……。一体どこに……。っ！

「そこかっ！」

ガンッ！

ラバーナイフを引き抜き、振り返り際に切りつけるとナイフ同士がぶつかり合った。ぶつかった衝撃でナイフに仕込まれたインクが飛び散り、私の顔を汚す。

「・・・・・・・・・・」

風が吹き、スモークは晴れていく。するとだんだんとあの子の姿が見えてきた・・・・・・・・。

「どうも、先輩。勝ちにきましたよ」

知ってたけどかわいい顔して、結構恐ろしいのよねこの子・・・・・・・・。  
私、勝てるかしら？

「ず、随分と無茶するわね・・・・・・・・優希君」

「ええ、しますよ。今倒せなかったら、倒すチャンスはゼロに近いですからね・・・・・・・・それに餌にされたのは結構怒ってるんですよ」

後はいろいろと溜まった鬱憤とかもあるしね・・・・・・・・。

「やってくれたわね・・・・・・・・でも、どこでスモークなんて手に入れたのかしら？」

「森を移動中に落ちているのを見つけましてね。使えそうだから拾

つといたんですよ」

これは本当だ、多分だけどラウラが仕掛けた奴だろう。ワイヤー  
トラップ、しかも二重の奴がだったからね、こんなことができるの  
ってラウラくらいだろうし・

「へえーそうなの、後で教えてくれない？ 拾いに行くから」

「教えてもいいですけど、必要ないんじゃないですか？」

「フフフ・・・そうかもしれないわね。でも・・・勝つのは私よ！」

ジャキッ！タンッ！！

先輩は即座に銃を構え、撃ってきた。

「っ！？ふっ！」

タタタッ！タタタッ！

僕は横に跳び、回避し三点バーストで反撃する！今回はショット  
ガンじゃなくて蘭ちゃんから借りたサブマシンガンだ、持ち運びし  
やすかったからね。持ってきて正解だったよ！

「っ！」

「くっ！」

お互い撃っては回避、反撃を繰り返していく。先輩の持っている  
のはスナイパーライフルだ、そのうち・・・。

ガキンツ！弾切れになる！

「っ！？」

「もらったっ！」

「させないわよ！」

トリガーを引こうとすると懷に忍ばせておいたハンドガンを取り出した先輩、同時にトリガーを引き放たれた弾丸は……。

ベチャツ！

互いの銃に当たった。

「もう使えないわね……。」

「そうですね」

ルールの中には『銃器にペイントが当たった場合は使用不可となる』という項目もあった。倒した人たちの装備も使用できない……だったら。

「これしか……！」

「無いみたいですね！」

ガンツ！

ラバーナイフ同士がぶつかり鏝迫り合いになった。

「はぁーーーー！」

「くっ……でりゃっ！」

力ならマッスルスーツをつけている僕のほうが上なんだけど、そう簡単にはいかない。一瞬力を抜いた先輩は身体を後ろに倒し、後転の要領で僕のナイフを蹴り飛ばそうとする。そこは後ろに下がって回避してこっちは前に突っ込み、刺突を繰り出すがナイフでさらされ、切りかかられるけど手首を押さえて止め、こちらの手首も押さえられた。

「や、やるわね……！」

「先輩こそ……！」

やっぱり強い！あの時は良く勝てたと思うよ実際に。

互いの手を離し、後ろに下がり距離をとった。実力は互角か……マッスルスーツをつけていてもこれか……なんで勝てたのか自信がなくなってきたよ。でも……。

「はぁっ……！」

「せいっ……！」

攻めるしかない！

「ハアハア……」

アレから何度も切り結んだがお互い一向に有効打が当てられなく疲労も溜まっていき、息切れし始めた。

「ふっ！」

「っ！」

ガンッ！

ナイフがぶつかったのはもう何度目かわからない、飛び散るインクが鬱陶しい。僕は屈み足払いをすると先輩は跳び、攻撃、それを防ぐ、で僕の反撃、そしてまた防がれるの繰り返しだ。でもその繰り返し返してきた均衡が崩れた。

「っ！？」

体勢を崩した、僕が。マッスルスーツを過信しすぎたせいか身体への疲労がかなり溜まっていたみたいだ。

「もらった！」

すぐに体勢を直そうとしたけど、先輩はその隙を逃がさなかった。

「あぐっ！」

腕を捻りながらそのまま投げられた。受身も取れず背中から地に落ち肺の空気が吐き出される。そして……。

「チエックメイトよ、優希君」

「う・・・・・・・・」

先輩は僕の上に乗し、ナイフを首筋に当てた。ナイフを持った僕の右腕は膝で押さえられて動かせない。詰んだか・・・・・・・・。

「楽しかったわよ、でもこれで・・・・・・・・」

首に当てたナイフに力を入れて・・・・・・・・。

「終わりよ！」

引こうとする。これで終わりか・・・・・・・・と、思った瞬間。

タンツ！ベチャツ！！

「うわぶっ！？・・・・・・・・へ？」

先輩の顔がペイントで汚れた。満遍なく、目はゴーグルがあるので無事だけど他は全て真っ赤になっていた。

「ハアハア・・・・・・・・間に合った」

「ハアハア・・・・・・・・で、ですね」

顔を動かし、声のほうを向くとそこには、息を荒くした蘭ちゃんと舞華ちゃんがドアの入り口で立っていた。

「な、なんで・・・・・・・・」

「す、すみません．．．．他のチームと遭遇して、遅れました．．．．」

「でも、ちゃんと倒して．．．きました．．．．」

「い、いや、何でここにいるの？僕は待機してって言ったはずだったけど」

先輩と戦うには二人とも実力不足だから、それにビル声は難しいと思ったし．．．．。

「いえ、優希さんが心配で．．．．」

「来ちゃいました」

．．．．いや、連絡無で家に来た、見たいに言われても、でも、これで．．．．。

「生徒会チームの勝ちですね、先輩」

「ふ、不覚だわ．．．．これがチーム戦なのをすっかり忘れていたわ．．．．」

それは僕ですよ。てか、後から来てもらったほうが良かったんだよね．．．．なんで思いつかなかったんだろう。

「というわけで早く降りてください先輩、結構苦しいんですけど。特に手首が．．．．感覚が無くなってきたし」

ナイフは既に手放してますよ。

「あら、ごめんなさい」

ふう……ようやく開放された……重いつてわけじゃないけど血が通って無かったよ今のは、ちゃんと動くよな手は……  
・うん、動く。

「でも、参りました。まさか伏兵がいたなんてね……さすが学園最強」

「何言ってるんですか、あのままいつてたら先輩の勝ちだったじゃないですか」

蘭ちゃんたちが助けられなかったら確実に負けてたよ。

「そうかもしれないけど、運も実力の内って言うでしょ、だから優希君の勝ちよ」

そついうものかね……。

「さて、負けちゃった私達は戻りますか。ほら行くわよ、みんな」

「……はい……」

ムクツと起き上がる先輩方、気絶した振りだったんですか。

「じゃ、頑張つてね」

先輩達は、手を振りながら降りていったのだった。

「……………あ、そうだ、ありがとうね二人とも。助かったよ」

お礼を言うのをすっかり忘れていたよ。

「い、いえ、その、優希さんのためですし……………」

「お兄様を助けるのは当然です」

「でも、ありがとう」

「はい……………」

「はい！」

ん？蘭ちゃんの顔赤いけど大丈夫かな？無理して走ったからかな？取り合えず無理させないようにしないと……………」

「され、これからどうしようか……………さっきので銃を一個ダメにしちゃったし……………ってあれ？蘭ちゃんそれって？」

蘭ちゃんの腕には僕が預けたショットガンではなくてスナイパーライフルが握られていた……………どうしてだ？それに舞華ちゃんもサブマシンガンやらアサルトライフルを背負ってるし。

「あ、これですか？これは」

「先ほどお相手した方々からいただきました」

頂いたって……………まあ、ポイントを使わなくて補給できたからいいか。

「でもよく二人で勝てたね、しかも慣れない装備で」

特に蘭ちゃんなんかショットガンで。

「はい、がんばりました!」

「私も少し本気を出してしまいました・・・」

舞華ちゃんが本気が・・・相当、凄かったんじゃないのか？

「そうなんだ、よくやったね二人とも。じゃあ行こうか・・・  
なるべく見つからないようにね」

「はい」

それから戦闘を避けて進み、何とか数回の戦闘をただけで今日の訓練は終了したのだった。でも、テントに戻ったら・・・。

「・・・・・・・・」

「い、一夏？どうしたの、そのポイント・・・」

頭から足の先まで真っ赤になった一夏が倒れこんでいた。何があったの？

「優希・・・」

「何？」

「お、俺って生徒会のなんなのかな・・・・・・・・」

何を言ってるんだ一夏は？

「俺って・・・・・・・・生徒会じゃ最弱なんじゃ・・・・・・・・ガクッ」

「一夏・・・・・・・・」

もしかしてこれやったのって蘭ちゃんと舞華ちゃんだったのかな・  
・・だからこんなことに。でもここは・・・・・・・・。

「一夏・・・・・・・・テント汚れるからちゃんと着替えてね」

「労いの言葉ですらねえのかよ!!」

だって事実なんだし。

「あ、それと生身だと一夏は一番弱いんじゃないかな？」

「最後に聞きたくなかったよ、その言葉！」

もうお、我侂だな一夏は・・・・・・・・どうしろっての。

「チクシヨー！グレてやるーーーー!!」

「あ、一夏・・・・・・・・いちゃった」

勝手にキャンプ地から出て行ったら・・・・・・・・。

スパーーーーンッ!!うぐおっ!?

千冬さんから鉄槌が下るのに……………。

「まあ、そんなことよりも蘭ちゃんたちのところに行かないと……」

「ご飯の準備しないと。」

「あ、そういえばシャルたちはどうなったんだろう？まだ生きてるのかな？まあ、あの二人だったら大丈夫か」

それよりご飯ご飯♪

ジャキンッ！

「……………明日だな」

ジャコッ！

「そうだね……………」

「「決戦は……………」」

カチャカチャカチャカチャ！

「ふ、フフフフ………」

「何やってるのよあの二人は………コワッ」

頼れるのは身体だけ！？ ドキッ IS無しのガチ？バトル ポロリはないよ

このような決着になりました。やはり実力が互角同士の者は運も絡んでくるのでしょう。

というわけで番外編は終了（え？ な訳もなく続きます。まだシャルロットにラウラ、筈が残っています。

一応次で番外編は終了しようと思います。長くなるかもしれませんが。

その後は原作七巻に突入しようか・・・でも原作八巻がまだでないし・・・とりあえず今日はここまでにします。

では次回の更新で。

頼れるのは身体だけ！？ ドキッ IS無しのガチ？バトル ポロリはないよ

番外編終了です！そしてggggかつ低クオリティ・・・・・・・・こめんなさい作者の限界です。

と、とりあえずどうぞ・・・・・・・・。

頼れるのは身体だけ！？ ドキッ IS無しのガチ？バトル ポロリはないよ

んゝいい天気だ、絶好のサバイバル？日和だねゝ。

「あ、おはようございます優希さん」

「おはようございます、お兄様」

「うん、おはよう二人とも」

二人のテントへ向かうと既に朝食の準備を始めていた。

「あ、ごめんね手伝わなくて、もっと早く起きればよかったよ」

「い、いいですよ、優希さんは昨日すっごくがんばりましたし・・・」

1269

「そうですよ、お兄様はお疲れだったんですから」

「んゝそれでいいのかなゝ？」

「「いいんです」」

そうなのか？でも、だいぶ疲れもとれたし。今日もがんばっていきけるな。

「それじゃあ、これをどうぞ」

「ありがとう」

蘭ちゃんから飯盒で炊いた白米を貰う、しかしよく飯盒で炊けたな、普通女の子ってこういうアウトドアなことは苦手だと思うんだけど……。

「私達、夏休みによくキャンプに行っただけですよ。その時に蘭ちゃんも誘って」

「ああ、なるほど。それでか……」

だから妙に手馴れてるんだ。

「はい、お味噌汁です」

「お、凄いね。味噌汁まであるなんて、豪華だな」

他のところを覗くと……。

「……」(モソモソモソ)

ブロックタイプの携帯食料を食べながら僕達の食事を見ていた。もしかして全員料理ができないのか？

「それじゃあ、いただきます」

「いただきます」

うん、美味しい」

「ところで、大分生存しているチームが少なくなりましたね……  
・銃声が聞こえません」

「そうですね……三日目ともなると数も減りますし」

「その分、敵は強いばかりだよ、ここまで生き残ってるんだから  
そのことを踏まえて、今日は結構重装備だ。昨日舞華ちゃんたちが  
取ってきた銃をいくつか装備して弾薬も多めに持ってきている。」

「でも、終わったチームは何をしているんですか？一日目で終わった  
チームの子を見かけたら妙にやつれてましたけど……」

「あ、それ私も思いました、皆さん酷く疲れきってましたし……  
」

「あれ？蘭ちゃんと舞華ちゃんは知らなかったの？戦死したチーム  
はね……」

「キビキビ動け！戦死した貴様らに急速などあるか！動き続けろ！  
」

「「「「「「「ひ、ヒーーーーー！？」」「」「」「」「」

「これが終わったら私が直々に白兵戦の指導をしてやる。何、安心しろ生まれてきたのを後悔するくらいのことだ」

「「「「「「「「た、助けてえー「「「「「「「「「「」

「らしいよ」

「「ぜ、絶対に生き残りましょう！」「」

うん、それは僕も同じ気持ちだよ。千冬さんのガチ訓練なんて・  
・・・・。

「・・・・・（ガタガタガタガタ）」

「お、落ち着いてください、優希さん！」

「い、生き残ればいいんですよお兄様！最終日まで生き残れば」

「そ、そうだね・・・・い、生き残ればいいんだよね」

と、トラウマが・・・・あの日のトラウマが・・・・・！  
お、思い出すな！！今はサバイバルに集中だ！！

「そ、それじゃあ、行こうか・・・・」

「「は、はい」」

あれだけは受けたくないよ……本気で。

「ゆ、優希さん……」

「あの、お兄様。この状況は一体……」

「蘭ちゃん、舞華ちゃん、聞かないで……」

昨日と同じく市街地に着たんだけどそこには……。

「シャルロット！」

「うん！」

ダララララララララララ！

「効かんわぁーーーー！！！」

バコンッ！

「だったらこれでどうだ！！」

ドオンッ！！

「チェストオーーーーーー!!」

ギンツ!

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

そこでは箒姉、シャル、ラウラの三人が人外の戦いをしていた。  
いや、冗談などではなく本当だ。

シャルが持っているのはガトリング砲しかも片手で一機持っている  
ので計二機をぶっ放し、箒姉はその弾幕を地面のコンクリートを  
畳返しのように剥がし盾にして、そこにラウラが滑空砲を打ち込み  
箒姉は砲弾をラバー製の日本刀で切り裂く・・・・・・・・。。。

これが人外の戦い以外の何になる・・・・・・・・。。。

「よく持てますね」

「そうよね、特に滑空砲が・・・・・・・・」

うん、シャルとラウラチームは特にね、それ人が持つものじゃな  
いから、ガトリング砲は固定して使うし、滑空砲なんかそもそも人  
が持つように作られてないから。

「そして篠ノ之先輩も凄いですね・・・・・・・・なんでラバーで砲弾が  
切れるのでしょうか・・・・・・・・」

「どうなんですか優希さん」

「言いたくないし、知りたくもないよ・・・・・・・・」

あ、頭が痛い。なんでこうなってるんだ……。まだ始  
まってから一時間しか経ってないのに。

市街地の被害は凄いものだった、元々廃墟のようにできていたの  
だが、それがさらに凄くなり戦場跡としか言いようのない姿へと成  
り果ててた。ペイント弾でどうやればここまでできるんだ……。

「ゼエゼエゼエ……………」

三人ともかなり疲れてるみたいだね、倒すのなら絶好の機会なん  
だけど……………。

「二人ともあの中に突っ込む勇氣ある？」

「……………（ブンブンブン）！！」

だよね、じゃあ、ここは正攻法で狙撃でい……。

ドオン！！

ど、どうしたんだ。ラウラがいきなり何もない場所に滑空砲を撃ち  
込んだけど……………。

「どうしたの？」

「何」

「……………げふう……………」

ドサツ……………。

「虫を退治しただけだ」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」

い、今振り返らずに撃ったよね、あれ・・・・・・・・。

「ここは傍観で」

「賛成」

満場一致で決定、触らぬ神に祟りなし、だ・・・・・・・・。

「ハアハア・・・・・・・・しぶとい！」

「こつちだって・・・・・・・・必死だからね！」

「だから大人しく・・・・・・・・倒される！」

「そうだよ！箒を倒さなきゃ、僕達は前に進めないんだ！」

「そんなことはさせるかあ！！」

何を話しているんだあの三人は？それに前に進めないってどうい  
うこと？

「箒を倒して」

箒姉を倒して？

「優希を僕の物にする！！」

「優希を手に入れる！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・はい？

「ちょ、ど、どういうこと!？」

僕を物にするって何を言ってるのあの二人は!？

「毎度毎度、邪魔をしおって!」

「おかげで全然優希にアタックできないんだから!」

「フンッ! 私より弱いものに優希はやれん!」

箒姉・・・大事にしてくれるのはいいけどさすがにそれはどうかと思うよ・・・。

「だからここで・・・・・・・・!!」

「勝たせてもらう!!」

「やれるものならやってみろ!!」

ドコーーーーーンッ!!

いや、もうなんか。疲れたよ・・・・これ以上ここで見ていたらさらに疲れるよ絶対に。

「蘭ちゃん、舞華ちゃん、早くここを離れよ・・・・ってあれ、蘭ちゃん？舞華ちゃん？」

いない？どこに行った……………

「あなた方を倒して優希さんを手に入れます!!」

「蘭ちゃんに加勢します!!」

「「かかって来い、小娘ども!!」」

「受けてたつよ!!」

……………何やってるのあの二人は、しかも蘭ちゃんが持つてるのって僕のショットガンだし、いつの間にか取ったの？

でも、どうしようこの状況……………被害は増えるばかりだし……………。

「お前が行って止めてこい」

「無茶言わないでくださいよ、あれを止められるなんて人間じゃな……………って千冬さん!？」

何でいるの!? 気配全く感じなかったんですけど!

「今は一応授業の一環に入っているので、織斑先生だ。分かったな」

「はい……………って、そうじゃなくて何でここにいるんですか」

あなた確か戦死者たちの訓練をしてたんじゃ?

「うむ、少ししごきすぎてな……………全員動かなくなった。だから

こうして様子を見に来たのだ」

全員って……何人いると思っているのですか。

「しかし派手にやっているな……」

「はい、この光景を見た一般人は絶対CGか何かと勘違いするでしょうね……」

つまり現実離れしてるってこと。

「む、五反田が落ちたな……経験の差か」

「いや、装備の差じゃないでしょうかね。あの重武装の中ショットガンですから」

「そうか、しかし健闘したな。賞賛に値するな」

「はい」

マッスルスーツで向上した身体能力をフルに使った機動でがんばったからね、後で褒めてあげよう。

「む、蘭堂はリタイアか……」

「そ、そうですね……」

舞華ちゃん蘭ちゃんに加勢する形だったからな……蘭ちゃんが落ちればやる必要はないもんね。

「で、お前はとうするつもりだ？」

「僕ですか？ここは傍観を……」

「教師権限でそれは許さん、参戦しろ」

職権乱用！？

「残っているチームはここにいる者だけだ……私も早く終わらせたいのだ」

「え？僕たちだけ、いやまだ結構残っていたはずじゃ……」  
いくらなんでもおかしいでしょ、それは……。

「ボーデヴィツヒたち流れ弾に当たってな……」

「あ……」

滑空砲ですもんね……運悪く当たったんですか。当たった人ご愁傷様です。

「だから早く終わらせろ、お前らの中で一人残った時点でこの訓練は終了になるのだ。私も早く帰りたいのだよ……ビールが恋しい」

帰りたい理由はそれですか……。でもあの三人をどうしろっていつんですか。

「これを使えばいい」

「いや、これって……」

蘭ちゃんが置いていったスナイパーライフルじゃないですか。元はセシリアさんが使ってたやつだから、ポイントで交換したもののよりもいいやつだけど、狙撃なんかしたらラウラの滑空砲が……。

「大丈夫だ、お前ならできる」

何ですか、その根拠の無い自信は……。はあ、でもやるしかないか。僕も早く終わらせたいし。

「どうなっても知りませんよ……」

「ああ、さつさと終わらせてくれ」

腹這いになってライフルを構えスコープを覗く……。狙撃は得意じゃないんだけどな。

（まずは反撃の危険が一番高いラウラから……）

照準をラウラに合わせる。お願いだから反撃はしないでよ。

タイミング測り……。撃つ！

タンッ！

ラウラに真っ直ぐに向かった弾は……。避けられた。

「むっ！？まだ虫がいたか……」

ジャキンッ！

や、ヤバッ！？見つかった！

「落ちろー！！」

ドオンッ！！

「に、逃げ切れない！」

「優希、よく聞け。古人曰く……『避けれないなら打ち返せばいいじゃない』だ」

「何変なこと言ってるんですか千冬さん！？てか、それってマリー・アントワネットが言ったと思われるけど実は別の貴族が言っているって名言じゃないですか！？しかも自分だけ安全域にいるし！」

ひ、卑怯だ！大人はいつも卑怯だ！！

「さあ打ち返せ、優希」

迫りくる砲弾。ああもうっ！やってやる！！

スナイパーライフルの銃身を掴みバツトのように構えて僕は思いっきり振り切って………。

カキンッ！！

打ち返したのだった。砲弾は爆発せずに元の場所に帰っていき………。

「あ、あれ？」

「む？」

「なんだ？」

ヒュルルルル~~~~~ゴーンッ、ゴロゴロ……………。

「……………」

ドンッ！

箒姉たちの前で爆発したのだった。そしてペイント塗れになった三人は倒れこんだ。終わった……………？

「……………まさか本当にやるとはな」

「あなたがやれって言ったんでしょ！？」

いや、やった僕も僕だけどさ！

「だ、だがこれで終了だ。よかったな学園最強の座は守れたぞ」

「よくな……………い!!！」

もう嫌……………！

こうしてサバイバル訓練は一日早いが終了した。結果は僕の一人勝ち、やはり生徒会長は最強という面子は保たれたんだけど帰りの船の中で……………。

「ねえ、優希。僕たちいつの間にか負けてたんだけどさ……………」

「どうしてか知っているか？覚えていないのだ……………」

「決着の行方が分からないのだ……………起きたらペイント塗れだな」

と、質問攻めにあっていた。

「ぼ、僕は何も知らないよ……………」

こ、答えたくない……………まさか砲弾を野球のように打ち返しましたなんて。

「そうなんだ……………」

「むう……………」

「誰が勝ったかは分からないのか……………」

結果がうやむやになったので不満そうな三人ともだった。

「あ、いたいた！優希君、次のサバイバル訓練なんだけど、今度は卒業生も……………」

ま、またやるのかこの人は！こうなったら……………！

「サバイバル訓練は生徒会長権限で永久凍結します!!」

[illegible]

全員から不満の声が上がるけど気にしてられるか！！！！

「決定たら決定なの〜〜！！」

ジタバタジタバタ

( ) ( ) ( ) ( ) (ハアハア) . . . な、何この生き物、可愛い . . .  
 . . . ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( )

こんな疲れるのはもう嫌だよ……帰って軟らかいベッドで寝たいよ（泣き

「決定なの〜〜〜〜！！」

こうしてES学園サバイバル訓練は永久凍結という形で幕を閉じたのであった。

だが数年後、優希たちがなくなった未来に……。

「あれ？何だろうこの資料、何々」『IS学園サバイバル訓練』？  
ふう〜ん面白そう！会長に見せてみよう♪」

封印が解かれたのはまた別の話だ。

頼れるのは身体だけ！？ ドキッ IS無しのガチ？バトル ポロリはないよ

・・・・・・・・・・・・・・・・（土下座待機中）

ねえ、優希君、これをみてどう思う？

「凄く・・・・・・・・低クオリティです」

ですよ〜。

楽しみにしてくれた読者の皆様、まことに申し訳ありませんでした。  
これが作者の限界です・・・・・・・・。

お詫びに、酔っ払って着物が肌蹴て、尚且つ猫状態（ネコミミ装備）  
の際どい優希の写真をお納めください。（ススッ・・・・・・・・）

こんな感じで番外編が終了いたしました。アンケートにご協力いただいた皆様、まことにありがとうございました。皆様のおかげでこの話が書けました。

次の話から原作七巻にいきこうかな〜と思っではいますが、アンケートで二位三位だった話はどうしようかと現在悩み中です。そこは作者のやる気と体力があつたら書いてみようかなと思います。

では長くなりましたが今日はここまで。では次回の更新で・・・・・・・・..  
って、筈さんじゃないか・・・・って何をす、くぁwせrtyふじこ  
l k l p

番外？ ているず おぶ ケモミミ（前書き）

また懲りず番外編……すみません。本編が息詰まっ  
ていて、  
つい……。

今回の話はエドワード・ニューゲート様が考えてくださったネ  
タで構成されております。エドワード様、誠にありがとうございます  
た。

それでは本編どうぞ。

番外？ ているず おぶ ケモミミ

「さて…………どうしてこうなったか説明しろ、更識」

「はい……………」

生徒会長こと私更識楯無は今、絶賛土下座中である。その原因は…………。

「にゃ？」

「や、止める優希！尻尾を掴むな！！」

「にゃくん♪」

「う、うわわわっ！？」

「あはは！ガンバレおりむ」

テーブルの上を愉快に走り回っているヌイグルミ……………みたいな生物が関係している。

「楯無会長、正直に全て話してくださいね……………」

「話さなければ貴様の命はないと思え……………」

ちよ、シャルロットちゃんにラウラちゃん、人にISの装備を突きつけないで！？

「は、話すから、落ち着いて！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

スッ・・・・・・・・。た、助かった。

「では話せ。まずあの生き物は何だ？」

「はい・・・・えーと説明させていただきますと、あのヌイグルミっぽい生き物は・・・・一夏君と優希君、それに仏ちゃんです」

ことの始まりは一時間前のことだったわ。

~~~~~  
一時間前~~~~~

「うわぁ・・・・・・・・」

「どうしますかお嬢様？」

「お嬢様は止めて・・・・・・・・でもホントどうしようコレ」

私と虚ちゃんの前にある角砂糖が入ったビン、これが大変なものなのだ。

「どっからどう見ても角砂糖ですよ・・・・・・・・」

「そうよね．．．でもそんな優しいものじゃないのよねコレは．．．」

「はい．．．まさかコレが超危険薬物だなんてね」

そうこれは危険薬物なのだ危険すぎて兵器と言ってもいいくらいだ、見た目は角砂糖だけど恐ろしい物である．．．．．。

「本家も困ったことしてくれるわね．．．．．いくら学園内のほうが安全だからって送り付けてくる、普通」

これは更識家が裏の密輸ルートを調査しているとき、偶然見つけたもので最初は何も変哲も無い角砂糖だと思っていたのだが、調べてみるとんでもない物だということが分かった。

物が物だけに安全な場所で保管するべきだということになり警備が厳重なIS学園に送られてきたのだ。

「ですが、危険なものですから厳重に保管しないと．．．．．」

「そうよね．．．学園長に地下に保管できるよう交渉してくるわ、虚ちゃんも着いてきて」

「わかりました。ですがコレどうしますか？」

「とりあえず、戸棚の中に隠しておけば」

「それだと間違っ使用されるんじゃない．．．．．」

「大丈夫でしょ。そもそもこの部屋で角砂糖なんて使うこと無いじゃない。お茶は日本茶だけなんだし」

虚ちゃんが入れてくれるお茶が美味しいからここでは紅茶などめったに飲まない、だから大丈夫。

「そうですね。じゃあ戸棚の奥に入れておきます」

特殊薬物のビンを戸棚の奥に入れる。うん、これで大丈夫！

「じゃあ、行きましようか」

「はい」

この選択がとんでもない結果を起こすとはまだ私は知らなかったのだった。

「失礼しまーす、ってあれ？誰もいない」

「お、ほんとだな」

「ホントだー、一番乗りー」

教室の掃除で遅れてきた生徒会室には誰も見当たらない。お出かけ中かな？

「会長はともかく布仏先輩もないや、職員室かな？」

「そうかもな」

「じゃあお姉ちゃんたちが来るまでお茶にしよう」

「いや、のほほんさん。仕事しようよ……書類とかいっぱいあるんだから。」

「まあいいじゃないかお茶くらい」

「うーん……まあいいか」

僕もゆつくりしたかったし。

「じゃあ、今日はこれだあゝ！」

のほほんさんが取り出したのはケーキ屋の箱と高級そうな紅茶の缶だった。

「お、紅茶？珍しいな」

「えへへ、この前セシリーに教えてもらったんだゝ、ここのケーキと紅茶は絶品だつてゝ」

セシリアさんのオススメか、それは期待できそうだ。

「じゃあ、紅茶入れようか」

「うん、ゆーゆーお願いゝ」

ケトルの中にはもうお湯が入っていたので直ぐに淹れられる。とりあえず適当に用意してっと……よし、できた。ティーカップに紅茶を注ぎ、砂糖を……って、無いな。戸棚の置くとかにないかな？

「ん〜と……あ、あつた」

よかつた、あつて。

「みんな砂糖は？」

「俺、一つ」

「私も」

僕は二つと……よかつた調度だ。

「はい、できました」

「お、サンキュ」

「ありがとう」

うん、いい香りさすがセシリアさんの見立てた紅茶だ。

「じゃあ、いただきます」

ケーキを一口。

「「ん」」

「お、美味しいなコレ！」

このケーキ美味しい♪今度僕もこのケーキ買ってみよう♪
次は紅茶を……つと。
ゴクリ……あれ？

「おい優希、これ砂糖入れたのか？」

「うん、入れたはずなんだけど……」

「甘くなつてない」

おかしいな、濃くは無いはずなのに……それに僕は二個入れたのに甘みは一切感じない、どうなってるんだ？

「味は……問題ないよな？」

「うん、紅茶の味」

？、なにがどうなってるんだろう？

「変だね……って、はれ？」

「ん？どうしたんだのほんさ……あれ？」

ガタガタと一夏とのほんさんが椅子から崩れ落ちた、どうしたんだ？

「どうしたの二人とも？」

「い、いや・・・力が入らない・・・」

「おろろろ動けないよ～～～」

「だ、だいじょうぶ・・・って、あら？」

立ち上がろうとしたら足に力が入らず、崩れ落ちてしまった。

「ど、どうして・・・」

あ、れ・・・意識・・・が・・・。。。

「よかったですね、無事許可がもらえて」

「ええ、これで保管場所に困らないわね」

しかも最下層の重要物保管庫、これで心配ないわね。

「さて、それじゃあアレを保管庫に移してお茶にしましょう」

「はい」

早く虚ちゃんの淹れたお茶が飲みたいわ。と、思いながらドアを開けるとそこには……。

「え？ええっ！？ちょ、どうしたのみんな！？」

床に倒れている後輩たちの姿があった。

「一夏君！どうしたの、一夏君！」

ダメだ、反応は無い。呼吸は……あるわね、でもどうして……。

「こ、これは！？」

「どうしたの虚ちゃん」

「お嬢様、コレを！」

「こ、コレは！？」

テーブルの上を見るとそこにはティーセットが並べられていた、でも注目するのはそこではないテーブルの中央に置かれたビン、私はコレに見覚えがあった、そう戸棚の奥に隠したアレにそっくりだったのだ。

「……………」

まさかこの三人、アレを飲んじやったの……た、大変なことになったわ！

「う、虚ちゃん、とりあえず準備！効力が効き始める前に！！」

「は、はい！た、タオル用意します！！」

この兵器の効力それは………！

「お、お嬢様！三人が！」

始まったかつ！

ドンドンと小さくなる三人、信じられない光景だが現実だ………
そして三人の姿は見えなくなり服だけが散乱している………不
自然な膨らみがある以外。

「な、なんてこと………」

モゾモゾと膨らみの部分が蠢いた、そして………。

「ど、どうなってるんだこれ？」

「うあゝ動けないよゝ」

「にう？」

服の下から一夏君、優希君、本音ちゃんそっくりのヌイグルミ
たいのが出てきた………。

「うわっ！た、楯無さんが巨大化した！？」

「で、でかい………」

喋るヌイグルミ……いやこれはヌイグルミではない、本人だ。
あの薬物でこうなってしまったのである。

「な、なんでこうなってるんだ！？ゆ、夢なのかこれは！」

「あゝとりあえず。はい、鏡」

一夏君の前に手鏡を置く、これでまずは現実を見なさい。

「な、ななな！？」

自分の姿を見て、驚愕する一夏君。そりゃそうよね、小さくなってるっえ……。

「な、なんじゃこりゃーーーーー！！」

頭をピコピコと動く耳、お尻の辺りから左右に動く尻尾が生えている。そう、一夏君達はケモノっ子になってしまったのだった。

ということだ。あの後はとりあえず三人にタオルを巻いて見えなようにしてから事情を説明した、その途中に織斑先生とシャルロットちゃんとラウラちゃんに見つかって現在の状況になったというわけである。

「なるほど……事情は分かった……が！」

ガシッ、ギリギリギリ！！

「イダダダダダッ!？」

「そんな危険なものはしっかりと管理せんかあ!!」

い、イタタッ!？食い込んでる、指が食い込んでるう!？

「そうですよ、なんで戸棚の奥になんか保管してたんですか、バカですか？バカなんですわね」

ひ、酷いよシャルロットちゃん……てか、目からハイライトが無くなってるんだけど!こ、怖い、怖いわよ!？

「さあ選べ。どの処刑方法がいいオススメはこのアイアンメイデんだ」

ラウラちゃんも怖いわよ!？そしてどこから出したのその処刑道具!それにアイアンメイデンって有罪でも無罪でも死ぬってやつじゃないの!

「はあ……とりあえず落ち着けデユノア、ボーデヴィツヒ。今コイツを殺しても何もならん」

今ってことはいつか殺されるの私!？ていうか織斑先生も怒ってるわね……やっぱり一夏君が大切なね……この人やつぱらコン……。

「って、イタタタタタタッ」

「何か変なことを考えたか？楯無」

「な、何でもありません！！」

い、痛かった……さすがブリュンヒルデ……握力も最強
ね。

「で、楯無、原因は分かったが、結局アレは何なのだ」

「ええと、私も伝えられた程度の情報しか知らないんですけど……」

あの薬物とはある組織が作った物なのだが、その組織というのは
ちよつと頭がおかしい組織であつて、その何というか……

「組織の全員にとある性癖？」

「はい……その組織とはある天才の下に集まった人間の組織な
のですけど、そいつらは全員……ケモノっ子属性なんですよ」

「……は？」

やっぱりそういう反応になるわけね、私もそうだったし……

「あの薬物はその組織が願望を叶える為に作った物でして、今回と
あるルートで流されていたものを私の家が見つけて、嚴重に保管す

るために……………」

「IS学園に送ってきたというわけか……………厄介なことをしてくれたな」

「すみません……………」

私の不注意だったわ……………不甲斐ないわね。

「まあいい、戻る方法はわかっているのか？」

「はい、効果は数日間だけなので、時間が経てば自然に戻るみたいです」

永久的になるわけじゃないのが唯一の助かりだったわね。

「そうか……………」

「よ、よかった」

「そうだな……………だが」

ん？どうしたのかしらラウラちゃん。

「何故優希だけあなっているのだ……………」

優希君だけって……………ああ、そういうことか。

「にやにやにや」

「ど、どけ優希！お、重い……」

一夏君と本音ちゃんは小さくなったただけなのに優希君だけ何故か猫のようになっていたのだった。……可愛いわね。

「んゝなんでかしら……。本音ちゃん、知らない？」

「んゝ……ゆーゆー、角砂糖を二つ入れてたからゝ多分それだと思っよゝ」

狐ミミと尻尾を揺らしながら離してくれた本音ちゃん、こっちも可愛いわね……。あとで写真撮らせてもらいましょう。

「ということらしいわ」

「なるほど、だから優希はこんなに愛くるしい……。ゴホンッ、可愛そうな姿になってしまったのだな……。…」

ラウラちゃん、本音漏れてたわよ。

「でも、「可愛いよぉ」

「にう？」

一夏君に押し掛かっていた優希君を持ち上げて、抱きしめるシャルロットちゃん。

身長は三十センチまで小さくなった優希君は元々の愛くるしい姿にネコミミとネコ尻尾を追加されていてさらに可愛らしくなっているのだ。いいなゝシャルロットちゃん、後で私も抱かせてほしいな。

「た、助かった。でもどうするんだよ、これ……このままじや何もできないぞ」

「そうだな……その姿じゃ何もできないだろうな」

小さくなってるからねえ……これじゃあ私生活も満足にできないわね、ホント。

「仕方ない……一夏、しばらくお前の面倒は私が見よう」

「え？どういうこと千冬姉」

お、まさかの展開？

「わからんか、お前が戻るまでの間、私がお前の面倒を見るといったのだ」

おお、そうきたか……やっぱ織斑先生はブラク……なんでもありませんよ、だから出席簿は止めてください。

「それは助かるけど……千冬姉の部屋って大丈夫なのか？この前見に行った時は足の踏み場すらない魔窟だった……きゅべっ！？」

「む、なんだもう寝てしまったのか、しょうがない弟だな」

い、今一瞬一夏君の首筋に何か当たったような……き、気のせいよね……きつと。

「では私は行くぞ、とりあえず職員室にもろもろの事情を説明して

おくがお前の方からもちゃんと説明しておけよ……特にオルコットと凰にな」

「わかりました」

「うむ、ではな」

と、生徒会室から出て行く織斑先生の背中がカッコよかった、ただし脇に抱えるヌイグルミで雰囲気は台無しだけど。

「それでは私は本音を預かりますね。それでも妹なので」

「ええ、お願いね」

本音ちゃんは姉の虚ちゃんに任せるのが一番だろう。問題は……

「……（キラキラキラ）」

すっごく瞳を輝かせている二人がいた。いや、この二人だったら任せてもいいけどそんなことをするとあの子が、箒ちゃんがっであれ？

「そつえば箒ちゃんは？」

こういうことがあるといつも直ぐに駆けつけてくるのに、どうしちゃったんだろう？

「あ、箒でしたら」

「来るのに時間がかかるだろうな」

「なんで？」

弟大好きっ子の篝ちゃんが来ないなんて逆に怖いわね…………。

「先程篠ノ之博士が来まして…………」

「その相手をしている」

なるほど…………あの博士が来たのか。さすがの篝ちゃんもあの博士の相手にはてこずるか。

「まあいいわ、優希君のお世話はあなた達に任せるわね。篝ちゃんの説得は二人がしてね」

「「はい（ああ）」」

さて、じゃあ…………。

「私にも抱かせてくれない？」

「「ダメです（だ）！！」」

「にゃんっ！」

あう、ケチ…………。

こうしてネコミミ優希君の生活が始まったのであった。

~~~~おまけ~~~~

「ねえねえ箒ちゃん、ほんとにゆー君はここにいるの?」

「はい、そうですよ姉さん。でも何か騒がしいな……………」

「ん?ちーちゃんの声も聞こえるな、覗いてみよう!」

「なんでそうなるんですか、普通に入ればいいじゃないですか」

「もう、箒ちゃんったら分かってないな、覗きはロマンなんだよ!じゃあ早速」

「はあ……………全く何をやって……………」

「ブハアッ!」

「え?ちよ、姉さん!?どうしたんですかいきなり!」

「ら……………」

「ら?」

「楽園は……………ここにあったのか……………ガクッ」

「ちよ、姉さん!?……………い、一体何があるというのだ」

「……………ブハア!?!ドサッ」

数分後、生徒会室を出た織斑教諭が篠ノ之姉妹の死骸？を発見し  
回収したとの報告があつたとか無かつたとか……。

番外？ ているず おぶ ケモミミ（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・・・（返事が無いただの変態の作者のようだ）

どうも、死因は萌え死にが夢な作者です。とりあえず（ジャンピング土下座）！

更新が遅れた挙句本編にも行かずまた番外編を書いてしまつて申し訳ありませんでした！

いや、書いてはいるのですがなんか詰まってしまひまして、そこで息抜きに書いたらいつの間にか書きあがつてしまひまして・・・・・・。とりあえずすみません。

今回の元ネタは御贔屓にさせてもらっているエドワード・ニューゲート様が考えてくださったものでありまして、大変お世話になりました。まことにありがとうございます。

これからはなるべく交互に更新していききたいのですが、作者は調子に乗っているうちに書いておきたいので更新がまばらになってしまひそうなのを誠に申し訳ありませんが読者の皆様に報告しておきます。

では、今回はここまでとなります、次はなるべく早く更新できるよう頑張りますのでよろしくお願いいたします。  
では次回の更新で。

ているず おぶ ケモミミ 2 (前書き)

遅くなって申し訳ありません、少し息詰まってしまうので・・・  
それでは本編をどうぞ。

ているず おぶ ケモミミ 2

「にゃうん、ゴロゴロ」

「はふう~~~~」

あれから早速優希を部屋に連れ帰った僕達は、ゴロゴロとして  
いる優希を眺め和んでいた。もう何このカワイイ生き物は……………。

「にうにう」

「カワイイなシャルロット……………（ダラダラ）」

「うん……………（ダラダラ）」

おっと、鼻から愛が零れ落ちてきちゃったよ。まったく優希が力  
ワイイから僕達は貧血だよ。

「な〜」

あ、優希がラウラの手に頬擦りしてる！いいなあ羨ましいな〜。

「シャルロット……………」

「ん？何ラウラ」

「我が人生に……………悔い無し……………ガハッ！」

「え？ちょ、ラウラ！？」

と、吐血！？もしかしてラウラの許容量を超えちゃったの！でもなんで拳王なの！？世紀末くらいにヤバイの！

「し、しっかりしてラウラ！こんなところで倒れたらこの先、生きていけないよ！」

優希が元に戻るのにまだ数日あるんだよ！確かに死にそうなくらい可愛いけどさ！

「そ、そうだな・・・こんなところで倒れるわけには・・・！」

「うん、そうだよ！」

よしよし、ラウラも復活した・・・ってあれ？優希は？

「にゃ」（カプ）

ま、まさかアレは！甘噛み！？そ、そんなことをしたらラウラは・・・！！

「ゲハアーーーーッ！！」

「ら、ラウラーーーー！！」

「アムアム・・・・・・」

や、やめて優希！ラウラのライフはもうゼロだよ！！

「にう？」

「しゃ、シャルロット・・・・・・・・・・」

「しっかりしてラウラ！傷は浅いよ！」

ダメだ出血が止まらない！（鼻血）

「聞け、シャルロット・・・・・・・・ゆ、優希の唇は・・・・・・・・甘噛みは・・・・・・・・」

「喋っちゃダメだよラウラ、今止血してるから！（鼻にティッシュを詰める作業）」

「柔らかく・・・・・・・・気持ちよかったぞ・・・・・・・・ガクッ」

「ラウラーーーーーー！！！」

。な、何ていうことだ・・・・・・・・僕は友を失ってしまったのか・・・・・・・・

「にゃん」

手に何か当たって・・・・・・・・ま、まさか！

「あゝむゝ（カプツ）」

「ゲハアツ！？」

僕も甘噛みされた・・・・・・・・力を入れていないので痛くないけど、

これは精神的に来る。それに楽しそうに噛む優希の姿は可愛すぎて、僕の鼻からは愛が駄々漏れているのである。

「にゃう……にゃん、（ぺろぺろ）」

「……もう、ゴールしていいよね」

僕の指から口を離したら今度は噛んだところを舐め始めた優希……僕もう死んでいいや。

「お休み……かふっ」

ドサ

「にう？」

「「あー……」」

「ちょ、大丈夫なの二人とも？」

「顔色が良くありませんわよ……」

翌日の朝、僕達は貧血でフラフラしながら歩いている。優希が可愛すぎるのがいけないんだよ、おかげで昨日からずっと鼻にティッ

シユを詰めたままだよ．．．．．花の十五歳の姿じゃないよこれ。

「なゝん」

そんなことは露知らずに楽しそうに鳴いている優希、しかも乗っている場所が．．．．．。

「ゆ、優希、そこをどいてくれ．．．．．頭を動かせないぞ」

「にやうん」

ラウラの頭の上なのだ、優希は何故かラウラの頭の上を気に入ちやって降りようとしない、いいなあ．．．．．ラウラ。

今の優希はぬいぐるみサイズだから乗ることは容易いし、重くも無いので大丈夫だ。でもラウラは優希を落とさないようにしているから首を曲げることもできない。

「うつ、た、確かにこれはくるわね．．．．．」

「え、ええ、可愛いですわね．．．．．」

セシリアと鈴も優希の可愛さにやられて鼻を押さえる、やっぱり耐えられないよねえこれには。周りにも鼻を押さえてる人がいっぱいいるし。

「なゝん」

「むう．．．．．」

「まあラウラ、とりあえず」飯食べようよ」

「そうだな。ほら優希降ろすぞ」

「にゃ」

ラウラの頭から優希を降ろしてテーブルに座らせる。ちょこんと座る姿はホントぬいぐるみだ、今度作ってみようかな……。

「それじゃあ取ってきましょ、早くしないと遅刻するわ」

「そうだね、じゃあ優希は……」

このまま置いていくのは心配だな……どうしよう。

「わたくしが見ておきますわ。ですからお取りになってきてくださいますし」

「む、そうか？ではすまん」

「ありがとうねセシリア。それじゃあ優希、大人しくしてるんだよ」

「にゃ」

手早くご飯取ってきて戻ってこよう、優希にはとりあえず焼き魚でいいかな？ネコだし。

「行くぞ、シャルロット」

「あ、うん」

「それじゃ、セシリア、あんたの分も取ってくるから」

「はい」

優希も心配だし早くご飯取ってこなきゃね、でも人多いな……  
ちよつと時間がかかるかも。

「あう~~~~ゆー君、かわいいよ~~~~」

「なあ~~~~」

「ご飯を取ってきて席に戻ってきたら何故か篠ノ之博士が席に座って優希を撫でまわしていた、……鼻から愛を流しながら。」

「あ、あの……」

「ん？おおっシャルちゃんじゃないか、ハロハロ」

「あ、は、はい、おはようございます……と、ところで篠ノ之博士、どうしてここに……」

昨日学園に来たのは知ってるけど滞在してたなんてのは聞いて無いよ。

「ん〜、昨日はゆー君の愛らしい姿を見て倒れちゃったからねえ〜だからこうして愛でに来たのだよ！ほらほらゆー君、おいでえ〜」

「にう」

小さな足を動かして篠ノ之博士に近づき抱きつく優希……  
いいなあ。

「ん」かわいすぎるよ、このまま連れて帰っちゃおうかな？」

「なう？」

や、ヤバイかも、篠ノ之博士だったらやりかねないよ、このまま  
じゃ優希と別れるはめに！何とかして止めないと！！  
て、あれ？博士の後ろにいるのは…………。

「それじゃあ、行こうか」ゆーくうっ！？」

「姉さん、冗談はほどにしてくださいね…………次は斬ります  
から」

「ほ、箒ちゃん…………それ洒落にならないから…………ガク」

木刀を装備した箒が篠ノ之博士を叩いた、しかも後頭部を…………  
…い、生きてるよね？

「まったく、姉さんは…………おいで優希」

「にやう」

今度は箒に抱えられる優希。本当に人懐っこいな。  
でもね箒、クルーな表情でカッコいいんだけど鼻血凄じ事になっ  
てるよ、優希にかからないようにしてるのは褒めてあげるけど。ほ

らティツシュ詰めて。

「すまん」

「にう？にやにやつ！」

「ん？どうした優希？」

「どうしたんだろうね・・・ってあれ？」

優希が手を伸ばしている先には僕が頼んだ焼き鮭定食、もしかしてお腹すいてるのかな？

「とりあえず箸座ろうよ、優希もお腹すいてるみたいだし」

「そうだな、では私もとって来る」

「うん、いつてらっしゃい」

・・・箸は行ったね、それじゃあ。焼き鮭の身を解し小さく箸で摘む。そして・・・。

「はい優希、あ〜ん」

「にゃ〜むっ・・・な〜」

・・・はっ！あ、あまりのかわいさに一瞬気を失っていたよ！ていうかなにこれ凄く癖になりそうんだけど。なんていうか雛鳥に餌を与えてるような感じが癖になるよ〜。

「にゃ」

「あ、はいはい、もつとだね」

次を待つてるのか口を開けたままこっち見てるのも可愛いよ」。

「優希、こっちもどうだ？」

「え？ラウラ・・・」

こっちに対抗したのかラウラは定食に付いていた冷奴の上に乗ったかつお節を手に乗せ優希に差し出してきた。

「にゃう？にゃ」

猫になってしまったので好物はやはり魚なんだろうが優希はすぐさまラウラの手に飛び掛った、そして顔を手のひらに近づけ・・・  
・ま、まさか！？

「あぐあぐ」

ら、ラウラの掌をお皿にして直接食べる！あ、あんなことをしたら掌には舌の感触がダイレクトに・・・はっ！ま、まさかこれ計算に入れて・・・！って、あれ？ちょっと様子がおかしいような・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・（ダラダラダラ）」

「ちょ、この子、鼻血出しながら気絶してるわよ！？」

「お、起きてくださいまし、ラウラさん!!」

あ、あはは、よ、予想外だったんだねラウラ。でも顔は幸せそう  
だ……僕もやろうかな。

「すまん、待たせたな……って、何をやっているラウラ!そ  
んな羨ましい事を!!」

正直だね箒、でもちよつと落ち着こうよ、ラウラ気絶してるんだ  
から。

「にうゝ」

あ、かつお節を食べ終えたみたいだ。ラウラの掌も綺麗になつて  
るし……嘗め回される……やっぱ僕も。

「ほら優希。こっちもおいしい魚があるぞ」

「にゃゝ」

箒も焼き魚を箸で摘み、優希に差し出す。それにつられ優希はそ  
っちに向かう。

「ゆ、優希、ほら鮭だよ美味しいよ」

「にゃゝ」

僕も負けずに鮭を摘み差し出すと優希はこっちに向かう。

「優希、こっちだぞ」

「にゃっ  
」

「優希、こっちだよ」

「にゃう  
」

僕と筭が呼ぶたび優希はどちらかに向かおうとしその場をぐるぐると回りだす。

「優希  
」

「優希  
」

「ん、にゃう………（ポテ）  
」

「「あ  
」

ずっとその状態が続きついに優希は目を回して倒れてしまった。

「きゅ……」

「何やってるのよあんたら………」

だ、だって。

「何やってるか貴様ら  
」

この声は……織斑せんせ………え？

「早くしろ、遅刻するぞ」

話す姿いつもどおりなんだけど、いつもと違う。だって先生の頭の上には……………。

「……………一夏<sup>さん</sup>?」「」「」

優希と同じく小さくなった一夏が載っていた。いつもクールな織斑先生がそんな格好をしているのはとてつもなくシユールであった。

「ああ、こいつのことが。一向に起きなくてな、仕方なく頭に載せているのだ。変なものでな呼吸すらしていないのだ」

それって死んでるんじゃない……………。

「「確保お—————!!」「」」

「む?」

急ぎ一夏を救助する三人、早いなあ動きが全然見えなかったよ。

「起きろ一夏!」

「し、心臓マッサージよ!」

「は、はい!」

小さな一夏に心臓マッサージを施す三人、力入れすぎちゃダメだよ、潰れちゃうから。

「お、起きろー！ー！」

あれ？これって結構ヤバイ？もしかしてそのままお亡くなりになん？……ってあれ？優希はどこに。

「にゃー」

あ、優希が一夏の尻尾に……………。

「にゃむっ！！（ガブツ）」

噛み付いた、すると……………。

「イデエエエエ！？！？」

あ、起きた。やっぱり尻尾で痛いんだ、優希のを踏んだりしないように気をつけなきゃ。

「……い、一夏<sup>さん</sup>」「」

「イデデデ！？し、尻尾が尻尾があ」

「ペッペッ」

「ほら優希、そんなもの食べちゃいけないよ」

「お前も結構酷いな、デユノア」

だって優希がお腹壊しちゃ大変じゃないですか！

「一夏、よかった．．．．．」

「心配かけるんじゃないわよ．．．．．」

「よかったですわ．．．．．」

「ゲホツゲホツ！な、何があったんだ．．．．．」

復活した一夏を抱き上げる三人、よかったね。

「でも何であんなことに？」

「うむ．．．．．朝起きたら奴が私の胸に顔を突っ込んでいてな、おそらくそのせいだろう。まったく子供じゃあるまいし」

いや、窒息した原因ってそれじゃないんですか。

「そうだね、そのちーちゃんの豊満なDカップのバストに挟まれれば．．．．．ってイタタタタ！？」

頭を掴まれてミシミシと音を立てながら持ち上げられる篠ノ之博士、懲りないなあ。

「にゃ」

「ん？どうしたの優希」

お腹すいてるのかな？そういえばさっきも途中だったけ、それじゃあお腹すいてるか。

「じゃあ、食べようね」

「にゃ〜」

「ふむ、それでは食べようではないか。このままでは遅刻してしま  
うぞ」

「ラウラ、復活したんだね！」

「ああ、多くの戦友が川の向こうで手を振っていたが何とか戻って  
これた・・・しかしネコミミはいいものだな」

「・・・・・・・・・・」

それって日本でいう三途の川じゃ・・・まあ、戻ってきてく  
れたからいいか。

「じゃあ、食べちゃおうね」

「なあ〜」

はあ〜、やっぱり優希は可愛いなあ〜。

「「「一夏あー!!」「」」」

「ちょ、ちょっと待てお前ら、く、苦しい・・・そ、そして・・・  
鈴、お前は痛い、肋骨が当たって痛i・・・・・・」

「フンッ!~!」

「きゅっ！？…………ガク」

うわぁ……一夏の顔の色が青から白に……また繰り返させるのか。まあ生き返るでしょうせ、おっと遅刻しちゃう。

「はい、あ〜ん」

「にゃ〜ん」

「「はあ〜、かわいいなあ〜」」

そつえば授業中はどうするんだろつ優希？

## ているず おぶ ケモミミ 2（後書き）

のほほんさんの出番なし・・・すみません。

この話は次回で終了予定です。ちゃんとできるか・・・。

ネコミミ優希のイメージなのですが二頭身で全長三十センチ、某電気ネズミと同じ大きさを想像して下さい。それがネコミミ優希です。

では、今回はここまでです。次回の更新で。

ているず おぶ ケモミミ 3 (前書き)

ようやく出来上がりましたが、すつごく出来クオリティです、すみません。

とりあえず本編どうぞ。

ているず おぶ ケモミミ 3

「な〜」

「……………先生」

「何だ」

「……………鼻血が止まりません」「……………」

「ティッシュでも詰めおけ」

「……………はい」「……………」

何だこのカオスな状況は……………。朝の出来事から時間が  
経ち今日も授業の時間になった、んだが……………。

「何でこうなった……………」

「あは〜、ゆーゆーのミミ柔らかい〜」

「にやう〜」

俺は現在、箱の中に…………。いや本当に箱の中に詰められている、  
しかも優希とのほほんさんの三人でだ。

「おい、その三…………匹、静かにしている」

「は〜い」

「にゃ」

「はい……………」

千冬姉、今三匹つて数えたよな……やっぱ動物扱いなのか俺たちつて。授業に参加できないなら邪魔になるからつて、三人纏めてダンボールに詰められた俺たち。まあ、ペンも持てないからまともに授業も受けられないのは事実なんだがな。

「おりむ、ゆうーのミミ柔らかくて気持ちいいよ」

「うに」

のほほんさんは相変われずマイペースだな……。まあ嘆いていても仕方ないか、こればかりは時間の問題だからな……。

「二人とも静かにしておけよ、千冬姉に怒られるのは大体俺なんだから」

「ガブッ」

「なつて……イテエエエエエエ！？」

ゆ、優希、また俺の尻尾を！こうなったら俺も優希の尻尾を……！！

「一夏……………」

「ヒッ！？」

な、なんだこの悪寒と威圧は！俺はゆっくりと後ろを向くとそこには修羅の顔をした。

「ほ、箒・・・！」

こ、コエエ！俺の体が小さくなっているから箒がとても大きく見えるので迫力がさらに倍増している。

箒は手を俺に伸ばし、首の後ろを掴み持ち上げた。

「一夏、優希に何かしたら・・・・・・・・・フフフフ」

「な、何もいたしません、マムツ！」

「そうか、ならいい」

こ、殺される・・・・・・！あれは殺る目だ、ハツタリなんかじゃない。

箒は俺を段ボール箱の中に戻し、自分の席に戻っていった。千冬姉も何も言わないところもう諦めたなきつと。

「にゃうにゃう」

「あはは、ゆーゆーくすぐりたいよ」

「な」

俺が恐ろしい思いをしていたのに優希はのほほんさんの尻尾に顔を埋めてもふもふしていた。のほほんさんは狐だからな・・・尻尾の毛はフサフサでさぞ気持ちいいんだろうな。

「にう・・・・・・・・」

「あれ？ゆーゆー？」

「にゅ・・・・・・・・スー」

「寝ちゃった」

本当に自由だな、おい。まあ猫だからな、自由なのは当然か。

「私も寝るゝ、おやすみ・・・・・・・・zzz」

つて、のほほんさんもかよ！この人もほんとフリーダムだな、しかも寝るの早すぎる。

「にゃ・・・・・・・・」

「スピー・・・・・・・・」

・・・・・・・・俺も寝ようかな。じゃ、お休み・・・・・・・・zzz。

ちなみにこのときの箱の中はしっかりと写真に収められていたのを知ったのはしばらくしてのことだった。肖像権の侵害は・・・適応されないだつて？動物だからって・・・・・・・・..はあ。

「これからダイジエストでお送りします」

●

「なあ」

「ふははっ、ゆう君は頂いていくぅー！！！」

「にゃ」

「姉さん……」

「はっ！ほ、篝ちゃん」

「少し、頭を冷やそうか」

「ちょ、ちよっと、まっ……ニャアアアアアア！？」

●

「ガブッ」

「イデエエエエ！？こ、このいい加減にしる優希！」

ベシッ！

「にう！？みいゝゝゝ」

「痛かったらもう止め」・・・

「「「一夏・・・」」」

「ひ、ヒッ!?」

「「「ちよつとこつちに来い」」」

「た、助けっ・・・!」(ピチューン)

●

「にゃあ!にゃあー!」

「こら、暴れるな優希!」

「やっぱり猫って水が苦手なのね」

「そうですわね、でも体が汚れてますし」

「なゝ ああー!」

「あ、待て優希!」

「どこ行くの!」

「にゃあー!」(ガブッ)「

「ぎゃああああー！！！！！？何で俺がー！！！！」

「「あ、一夏<sup>さん</sup>が……………」

●

「こっちだぞ優希」

「優希、こっちにおいで」

「ほら優希、こっちだ」

「にゃ、にゃう」

「ほら、ちーちゃんこっちだよ」

「フンッ！」

「ひでぶっ！？」

●

「優希は私の部屋で面倒を見る」

「僕たちが見るよ」

「そっだ、お前は一夏の面倒を見ておけ」

「にゃん」

「ほら、ゆー君こつちおいで、美味しい煮干だよ」

「な」

「姉さん（博士）？」

「ごめんなさい、だからその物騒なものをしまつてね……」

「

「だが断る」

「あああああああ!？」

「うわぁ……」

●

「な」

「にゃ」

「ぐふう！」

「ほ、本音に加わるとなんて危険なの！」

「猫と狐……これもありね！」

「ほら一夏、わんって鳴きなさいよ」

「犬のように鳴いてくださいまし」

「一夏、首輪だ、着けろ」

「や、やめろおーーーー！！う、うわあああ！！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・わん」

●

「ハアハア、お兄様。ハアハア・・・・・・・・」

「ん〜！可愛いわね〜」

「にゃんっ！」

「（じゅずじゅず）・・・・・・・・」

「蘭」

「り、鈴さん・・・・・・・・」

「欲望に身を任せなさい」

「は、はいっ！舞華、私のも抱っこさせて！」

「はい、蘭ちゃん」

「にゃ〜」

「はっうゝ可愛いゝゝ」

「にゃあゝ（へる）ゝ」

「ぶはあ!？」

「ら、蘭ちゃん!？」

（……………これってもしかして……………私のせい？）

●

「一夏、お手」

「……………おい箒、何のつもりだ」

「犬だったら芸の一つくらい覚えておけ」

「出来るか!つかー人間に何やらせようとしてるんだよ!」

「今のお前は犬だろ?それにこんなこと優希にだって出来るぞ」

「出来るか!てか優希は猫だろ、お手なんてできるわけg」

「優希、お手」

「にゃんっ!」

「……………」

「一夏、お手」

「・・・・・・・・・・ワン」

●

「にゃにゃにゃっ!」

「猫じゃらしに遊ぶ優希もかわいいにゃ」

「ああ、和むな」

「今度は毛糸玉なんてどうだ?」

「・・・・・・・・・・あ、そうだ」

「なんだ、鈴?」

「一夏・・・・・・・・・・とってきなさい!」

ビュッ

「おいおい鈴、何フライドチキンの骨を投げてんだよ、そんなものに飛び掛るのは犬だけだぞ。ハハハッ・・・・・・・・・・ワンッ!」

ガシッ!

「はっ!?!」

「ニヤニヤ・・・・・・・・・・」

「し、しまった．．．．」

●

「ルールル、ルールル」

「．．．．．（ウズウズ）」

「ルールル」

「何やってるの虚ちゃん．．．．」

「い、いや、そのこれは．．．．．」

くく以上ダイジェストでしたくく

「．．．．．楯無さん、一体いつになったら元に戻るんですか」

「んく多分もうそろそろだと思っわ」

早く戻りたい、そろそろ限界だ肉体と精神的に．．．この数日間生傷が絶えない、俺だけな。

「はあゝ．．．早く元の生活に戻りたい」

「にゃゝ」

「そうだねゝ、面白かったけどそろそろ戻りたいねゝ」

何でもかんでも面倒を見られるってのも嫌だしな、つーかこれ以上迷惑かけたくない。

「そう、ならもうちょっと我慢して．．．あれ？」

ん？どうしたんだ？

「．．．．．虚ちゃん！」

「はいっ！」

だからどうしたんだ？布仏先輩も慌しく動くし。

「うにゃゝ．．．．」

「うにゝ眠いゝ．．．．」

あれ、俺も瞼が．．．．駄目だ眠．．．い。

「ふう……突然だったわね」

「はい、念のために全員分の着替えを用意しておいてよかったですよ」

突然寝てしまった三人、これは元に戻るときの予兆だ。でも虚ちゃんに着替えを用意させておいてよかったわ、無かったら三人とも全裸のままだもんね。特に本音ちゃんの裸を二人に見せるわけにはいかないし。

「始まりました」

「ええ」

寝ていた三人の身体に変化が見えてきた、身体がみるみるうちに大きくなっていき……。

「戻ったわね、じゃあ虚ちゃん」

「はい」

虚ちゃんは事前に用意していたシーツを三人の上に掛ける。これでよし、後は目覚めるのを待つだけね。

「ん、んー……」

「ん……」

「ふにい……」

って、もう起きたの、お早い目覚めね。それじゃあ……。

「一体何が……」

「はい、二人ともこっち見ちゃ駄目よ」

「うごっ!？」

「ふえっ？」

一夏君と優希君の前に立ち本音ちゃんのほうを見えないようにする、乙女の裸体を見せるわけにはいかないわよ。その際に本音ちゃんの方向を向こうとした一夏君の首を捻ったのはご愛嬌ね。

「ほら、早く着替えなさい」

「は、はい……」

「ん?……ってうわっ!？な、何で僕裸なの!？」

「あーはいはい、それは後で説明するからね」

「あ、あはは。さ、さすがに恥ずかしいよ」

「ほら本音、早く着替えなさい」

「はい」

ふう……後始末が大変そうね。てか説明した後の優希君の反応が怖いな。まあ今回は私に責任があるのだからしょうがないか。

ガララ

「失礼しまゝす、優希を迎えに……………」

「む、どうしたシャルロット……………」

あ、ヤバ、鍵掛けるの忘れてた。

「に、に……………」

「うおっ!？」

「……………」

「あ、あはは」

偶然来たシャルロットちゃんとラウラちゃんは優希君達の裸を見て硬直する…………ど、どうしようかしらこの状況。

「にゃ、ニヤアアアアア————?!？」

「うおおおおお!？」

優希君と一夏君の叫びが生徒会室に響いた。そしてシャルロットちゃんとラウラちゃんの二人は。

「うわああああ!？」

「き、貴様あああ!！」

シャルロットちゃんは叫びながら手で目を塞ぐ、でも指の間からしつかりと見てるわね……。このムツッリさん。で、ラウラちゃんは腰から拳銃を取り出す。それはヤバ過ぎないかしらね……。

「や、止めるラウラ、それは洒落にならねぞ！？って、ぬおおお  
おおお！？」

「死ねえーーーーー！！」

ダンダンダンダンッ！！

「はぁ……。部屋の修理費はどこに請求すればいいのかしら。  
ドイツにかしら……。」

まあ、これで一件落着よね……。

「優希、お前に郵便物だぞ」

「え？誰からだろ……。ん？舞華ちゃんからだ」

「何が入ってたんだ？」

とりあえず開けてみよう、もしかして仕事の関係なのか……。  
な。

「何これ……。」

中にあつたのはフィギュアだった、しかも恐ろしいくらい僕に似た、これってもしかして……。

「お前だな……猫になったときの」

や、やっぱりか……、でもなんでこんな物を……。

「ん？おい、何かメモが付いてるぞ」

え？

「何々『今度、優希お兄様のフィギュアを販売することになりましたのでその試作品をお送りいたします』だよ」

「ま、舞華ちゃーん！ーん！ー」

止めてえー！ー！ー！ー！

その後、舞華ちゃんを何とか説得して販売だけは止めてもらった。でも、その数個を巡って蘭堂社の中で戦争が起きていたのは僕は知らなかったのだった。

くおまけく

「一夏、お手」



### ているず おぶ ケモミミ 3（後書き）

今回はリアルの忙しさに少しスランプ気味だったのもあり更新が遅れてしまい申し訳ありませんでした。

ケモミミは今回で終了です。次回は原作七巻に入る予定です。でも本当にどうしたんでしょうね原作者の弓弦イズル先生は、八巻も出ませんし少し心配ですよ。

では、今回はここまでこの話の原案のエドワード様、本当にありがとうございました。  
では次回の更新で。

## 第五十九話（前書き）

大変お待たせしました五十九話です。

## 第五十九話

「ハアッ!」

「くっ……!」

放課後の第二アリーナ、そこで三機のISが飛び交っていた。白、黒、オレンジの機体が縦横無尽に飛び回る。そう、僕とシャルにラウラだ。

今日は僕が二人にお願いして一対二の状況での訓練にってもらっているのだ。

「このっ!」

ビームマグナムの低出力モードとレーザーバルカンで二人を牽制する。だがあの二人はそれを最低限の動きだけで回避されてしまった。

弾幕を掻い潜り接近する二人、メンバー内じゃ一・二を争う実力者の二人を相手に僕は苦戦を虐げられる。

「甘いよ優希、ラウラ!」

「ああ、そこだっ!」

ラウラのシュバルツェア・ニーベルレーゲンの肩部からブレードミサイルが射出され僕へと迫る。

「っ!」

僕は回避運動は取らずにビームマグナムで全弾撃ち落す。すると丁度Eパックのエネルギーが尽きてしまった。急ぎカートリッジの交換作業に入ろうとすると……………。

「はああああ!!」

「ぐっ!？」

左からラウラ、右からシャルと二人が近接装備で斬りかかってきた。ラウラのプラズマ手刀をビームトンファアで受け止め、シャルのブレットスライサーは右手に持っていたビームマグナムで受け止めた。

二機のISに押され後ろに下がってしまう、だったら。

「このおっ!!」

《IS-D system発動します》

IS-Dによって開放されたユニコーン本来の力で一気に二人を弾き飛ばす。ビームマグナムは銃身が曲がってしまった可能性もあるの間違い、両腕のビームトンファアを起動させる。

「くっ…………でえい!!」

体勢を直したシャルは全武装を展開し、弾幕を張った。圧倒的面的制圧、これを避けるのは至難だ、でも僕はそれを真正面から突っ込んでいく。

ユニコーンの搭載された高性能ハイパーセンサーが瞬時に計算し弾幕の隙間を幾つか見つけ出し僕はその中から自分が通れそうなところだけをセレクトし通っていく。弾丸は装甲を掠るだけで決定打

は与えられず僕はシャルとの距離を詰めていく。

「なっ!?!」

この行為にシャルは驚きを隠せずにいた、いくらISの補助があるからといってもこんなことは不可能だと。

そして僕の心中は……………。

(…………ダメだ、ユニコーンなら掠り傷すら付かないはずだ)

自分の操縦技術の拙さに嘆いていた。

(あの時のユニコーンの性能が出せないのは僕が原因なんだ)

僕はユニコーンの全てを出し切れていない。セカンドシフトの時に見せたような圧倒的性能が出せてないでいた。

(だから、もっと強くないと…………!)

いずれ来るリヴァールという化け物との戦いに向けて、守りたいものを守るために!

「ハアッ!」

「喰らえっ!」

接近されそうになったシャルは展開していた全武装をショットガン《レイン・オブ・サタデイ》に変更して散弾の壁を作る、そしてラウラも援護のためにレールカノンの砲弾を散弾にし放った。

前後からの散弾の壁、これは誰もが避けられないと思われたが。

「やった……？」

「残念」

「っ！？キヤアー！」

後ろに廻りこみ両腕にビームトンファーで交差するように斬りつけた。これによってトルナードのシールドバリアはゼロになり御退場となった。あと一人だ。

「クッ！」

「GO！」

武装を展開するよりも早くフェアリーを展開しラウラを全方向から攻撃する。これには堪らず急ぎ回避行動に移ったラウラ、でも逃がさない。

「終わりだよ」

「し、しまった！？」

両腕にビームガトリングを展開しトリガーを引く、先ほどの回避で体勢を崩してしまったラウラは避けれずに。

「あああああああ！？」

計四機のビームガトリングによる毎秒12000発のビーム弾の直撃を受け蜂の巣にされたのだった。これによってラウラもシール

ドエネルギーはゼロとなり、僕の勝利となった。

（…………強くなっているのはわかる、でもあの時みたいには  
いけない…………何がダメなんだ教えて、ユニコーン）

何も答えはしない相棒に向かって問いかける僕だった。

「「襲われた!?!」」

「ああ、昨日の夜にな」

今日の訓練も終了し、みんなで食堂へ来ていた。この時知ったの  
だが昨日の打ち上げの後、どうやら一夏が襲撃にあつたらしい、僕  
は王様ゲームの辺りから眠ってしまったので、分からなかった。で  
もなんで寝ちゃったんだろう…………謎だ。

「一夏、襲撃者つてもしかしてサイレント・ゼフィルスのパイロッ  
トじゃないの」

「なっ!?!なんで分かったんだよ」

やっぱりか…………一夏を集中して狙ってたみたいだしね、まる  
で恨んでいるかのように。

「もしかしてっと思ってね」

「それは本当ですよ！一夏さん！！」

セシリアさんが急に喰いついてきた、彼女はMにやられたから目の敵にしているのだろう。

「あ、ああ」

「どのような容姿でしたの！教えてくださいまし！！」

「セシリアさん落ち着いて、怪我に触れるよ」

「落ち着いていられますか・・・くうっ！？」

ほら、腕怪我してるんだから。

「でもよく助かったね」

「ああ、楯無さんが助けてくれたんだよ」

会長がか、偶然だったのか予想してたのか・・・よく分からない人だな、やっぱ。

「そっなんだ、よかったよ無事で」

「一夏さん、容姿はどうだったのですか！」

「・・・暗くてよく見えなかったんだ」

「そうですか……………」

一夏の表情が一瞬歪んだ、何かあるのか…………。

「そうですか……………」

「すまないな」

「いいえ、大丈夫ですわ。ところで一夏さん次は玉子焼きを……………」

「ん？おお、玉子焼きだな。ほら」

「あ、あーん……………」

ちなみにセシリアさんは昨日の戦闘で右腕を負傷したため、なぜか一夏が食べさせている…………そしてその光景を箒姉と鈴が齒軋りをしながら見ている。この鈍感が…………。

「……………なによ、セシリアってば。わざとらしく箸を使う料理を頼んでさあ……………」

「…………パスタを片手で食べればいいだろに……………」

じろゝとセシリアさんを睨む二人。そしてその視線にも気づかない一夏であった。

「ほら、セシリア和食がいいなら私の熱々のおでんを分けてやろっ、なに遠慮するな」

「いいわね箒、ほらセシリア口開けなさい」

「な、何をするのですか篤さん、鈴さん！？わたくしはおでんなどいりませんわ！し、しかもそのおでん湯気が凄いですわってアツツッ！？」

篤姉は自分の熱々おでんをセシリアさんに食べさせようとする、鈴はセシリアさんを押さえる、しかもコンニャクだ。あれは熱いだろうな……。

「でも一夏、気をつけなよ学園にいる間は大丈夫だろうけど」

「あ、ああ」

でも今日二度目の襲撃、手口が強引過ぎる気がするな……まさか個人の暴走とか？ってそんなわけないか。

「あらあら、楽しそうですね」

「あまり騒ぐなよ馬鹿者が」

あ、山田先生に千冬さんだ、二人も食事か。

「わ、わたくしは怪我人ですのに……」

「オルコット。本来なら昨日の市街地戦について謹慎処分があるところを特別に免除してやったんだぞ、勘違いするなよ」

「は、はい……」

ISでの市街地戦はご法度だ、僕も不可抗力とはいえ学園外で戦

闘してしまったので二時間たつぷりと説教を受けた。

「あまり騒ぐなよ……篠ノ之」

「え？はい？」

「弟のほうだ」

何だ僕の方か。

「何でしょうか？」

「お前宛にだ」

「え？はい……ってなんだこれ？」

便箋だ、僕宛に？

「えっと、これは……？」

「日本政府からだちゃんと読んでおけよ」

「は、はあ……」

せ、政府から？何がどうなってるんだ？

「まあ面倒だったら無視しても構わんからな」

「えっと……頑張ってくださいね篠ノ之君！」

二人はそう言い奥のテーブル席へと向かっていったのだった。な、何があるんだ？

「優希何を書いてあるのだ」

「見てみようよ」

うわっ、全員興味深々だね。でもいいのかな？日本政府からの手紙を海外の代表候補生に見せても。重要機密とか書いてあったら外交問題になるんじゃないや……。

「後で部屋で見るよ、何か重要なことが書いてあるかもしれないしね」

そう言うみんなは残念そうな顔をした、だって周りのテーブルでも聞き耳立ててる人がいっぱいいるんだもん、開けることもできないよ。

まあ、今は食事を優先だ。うん、美味しい。

「ダハア……ようやく全員帰ったか」

「あはは、お疲れ一夏。はい、お茶」

「おう、サンキュー」

淹れたてのお茶を手渡し、僕もベットに座り啜る。はぁ……

和む。

先ほどまでこの部屋にはいつものメンバーが全員集まっっていて色々話していたりした、まあ一夏はいつもどおりな感じだったけど。

「ところでまだ見ないのか手紙」

「ん？ああ、そうだったね」

便箋を開こうとした時。

バタンッ！

「じゃじゃーん楯無おねえさん登」……………」

「お帰りください」

パタン。

突如現れた会長を瞬時に締め出した一夏。グッジョブといたいところだけどそんな事しても会長のことから……………。

ズパンッ！

「うおっ?!」

閉めたドアは水の刃によって両断された。はぁ……………一気に風通しが良くなったな。

「もう、おねえさんをないがしろにしちゃダメだぞ」

まったく、この人は何がしたんだろう。

「で、何のようですか？」

「ん、ちよつとお願い事？」

お願い事？なにやらメンドそうな予感がするよ。とりあえず・・・。

「お茶でいいですか？」

「ジャスミン茶でね」

「・・・センブリ茶ですね」

「普通のでいいです！」

チツ・・・せつかく鈴から貰ったのに。

「で、お願いってなんなんですか楯無さん？」

「えつとね・・・その」

？ 会長にしては齒切れが悪いな・・・なにか大変なことかな？  
するとパンツと手を合わせ会長は。

「妹をお願いします！」

「「はい？」」

何が何やらわからない状況になってきたぞ。

会長の話 요약するとこの前のキャンボールファストの襲撃を踏まえ、各専用機持ちのレベルアップ図った全学年合同のタッグマッチで会長の妹さん『更識簪さん』と僕と一夏のどちらかに組んでほしいというものであった。

「でもなんか会長の妹にしては・・・ネガティブっぽいですね」

一夏、デリカシーなさ過ぎるでしょそれ。まあ、僕も始めてあったときはそう思ったけどさ。

「そうなのよね、暗いのよこの子」

うわ、姉自身も認めちゃったよ。

「でも実力はあるのよ、ただ・・・専用機が無いのよね」

「へ？専用機が無い？なんで・・・」

何でって・・・諸悪の根源が何を言う。

「一夏。自分せいだというのを理解しようね」

「は？何で俺が・・・」

ダメだ、ぜんぜん理解していない。しょうがない教えてあげるか。

「更識さんの専用機『打鉄式』はまだ完成していないの、だから

正確言えば彼女はまだ専用機が受領していないの」

「へえ、そうなのか」

「へえ、って一夏君。さっき優希君が言ったように君のせいなんだよ」

「え？」

「打鉄式式の開発機関は倉持技研、つまり白式と同じなの。ISを使える男性、一夏の登場によって白式の重要度が上がり人員は全て白式のほうに回されたの。だから」

「打鉄式式は完成しなくてね……だから一夏君のせいなの!!」

「す、すみません……」

ようやく理解したようだね、まあこの事があつたから今までの行事は全部不参加だったわけだ。代表候補生としては屈辱以外の何も無いんだろうな……。

「じゃ、じゃあ俺が優希のどっちかがそのタッグマッチでペアを組めばいいことですか？」

「そのとおり、お願い！ 簪ちゃんと組んであげて！」

ガバツと頭を下げる会長。うーんいつもマイペースの会長と違って弱弱しくて何かやりにくい……。

「あー、俺は分かりました。優希は？」

「……僕もいいですよ。メカ方面だったら力になれますし」

なんだかんだいって会長には色々とお世話になってるしね……断れないよ。でも楯無さんって難しそうな性格ぽかったよな……はあ、骨が折れそうだ。

「ありがとう。じゃあ、これで一安心ね」

まだ何もしてないのに安心しないでくださいよ。でも妹さんのこと相当心配してたってことなのかな、いいお姉さんだ。

「じゃあ、お礼としてお姉さんが背中を流して……ってあら？何かしらこれ？」

あ、便箋が。

「ああ、それ優希ですよ。なにやら日本政府からだそうです」

「政府から？ふーん………えいつ」

ビリビリ

「ちよつ、何勝手にあけてるんですか！？」

「生徒会役員のは会長の物なのよ！だから私にも見る権利があるわっ！！」

何ですかそのジャイアニズムは！？

「えーとつ、何々？……あらあら」これは面白いことになったわね」

勝手にあけられた便箋の中身をじっくりと見た会長は、なんかいい笑顔になった、僕はそれに身の危険を感じながら受け取る。

「い、一体なんて書いて……はい？」

何これ？

そこには予想を斜め上いくことが書いてあった、え？ちよつとこれ本当なの？

「なんて書いてるんだ優希？」

一夏が何か聞いてきているけど僕の耳には入らない、現在かなりパニックてる。

こ、これってどうすれば……。

「フッフ、良かったわね優希君。これで社交界の仲間入りよ」

送られてきた便箋の中身それは……日本政府主催のパーティーの招待状であった。

「ど、どうすればいいんだ……!？」

だ、誰か教えて……!!

## 第五十九話（後書き）

はい、原作七巻に入りました。内容はちょっとオリジナルを入れてみることにしました。早く終わってしまつと原作のストックが無くなってしまうので・・・・弓弦先生、早く新刊を・・・・。

最近学校のほうが忙しすぎて全然手をつけることができませんでした、すみません。

これからの更新状況なのですがしばらく忙しい日々が続くそうなのでちよつと更新速度が落ちるかもしれません。それでもなるべく早く更新できるよう努力していきますのでよろしくお願いいたします。では次回の更新で。

## 突然アンケート（前書き）

本編じゃなくてすみません（土下座）

## 突然アンケート

本編も更新せず突然すみません。ちょっと次回の話の構成に非常にくだらない事で悩んでおりまして詰まっています。

そこで情けないことなのですが読者の皆様の投票という形で話の構成を決めてみようかなと思いますした。

内容は非常にくだらないです、それは……。

【次回のパーティー話で優希に何を着せようかな？】です。

ああ、止めて石を投げないで！？ですが本当に悩んでいるのです。最初は男物でいこうかと思っていたのですが、この小説をみていた友人から。

「次回の優希はドレスなんだろう？楽しみにしてるぜ！！」

と言われてしまったのですよ。それからドつぽに嵌っています。ですので読者の皆様、お願いです、私に力を！！

もう簡単に感想へ男物か女物と書きちゃって下さい。それで多かつた方を採出し優希の格好を決めます。締め切りは今週の日曜までにします。

最後に読者の皆様、非力な作者にお力をお貸しくださいませ！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0551r/>

---

IS ～インフィニット・ストラトス～ 一角獣の輝き

2011年11月8日22時28分発行